市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第69集

上総国分寺台遺跡調査報告XXX

市原市稲荷台1号墳

２０２６

市 原 市 教 育 委 員 会

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第69集

上総国分寺台遺跡調査報告XXX

市原市稲荷台（いなりだい）1号墳



2026

市 原 市 教 育 委 員 会

序　文

市原市国分寺台地区は、奈良時代に上総国分僧寺・国分尼寺が建立されるなど、上総国の政治、文化の中心地でした。また、本地区の土地区画整理事業に伴って発掘調査された諸遺跡では、旧石器時代にまでさかのぼる先人たちの足跡が辿られており、この台地が居住好適地として有史以前より連綿と利用されてきた歴史が明らかにされています。

今回報告する稲荷台1号墳も、この土地区画整理事業に伴い調査された遺跡の一つです。山田橋地区に分布する稲荷台古墳群を構成する円墳の1基で、昭和51（1976）年から翌年にかけて発掘調査が行われました。規模は直径30mに及ばず、大型の前方後円墳でもなかったため、発掘時には予想していませんでしたが、昭和62（1987）年に驚くべき発見がありました。出土品の整理作業を進める中で国立歴史民俗博物館に依頼したX線撮影により、副葬品の鉄剣から文字が見出されたのです。

古墳時代の刀剣に文字が象嵌されていることはきわめて稀なことです。刻まれた「王賜」に始まる銘文は、5世紀に実在した「王」と市原の地を結びつけるだけではなく、中国史書に登場する「倭の五王」の時代に光を当てる日本列島史の貴重な資料と言えます。この発見は当時、大々的に報道され、多くの関心を呼び起こし、その後、「王賜」銘鉄剣の存在は教科書や一般書籍、博物館展示を通じて、広く社会に周知されるに至っています。

今回の報告に際し、発掘直後には叶わなかった最新の自然科学的分析を各機関に依頼したところ、新たな情報が得られました。また、「王賜」銘鉄剣を中心とする出土遺物についても、各分野で活躍されている研究者にさまざまな視点から検討をお願いした結果、興味深い知見を織り込むことができました。保存処理・分析から報告書刊行に至るまで、御助言と御助力をいただいた皆様にお礼申し上げます。

「王賜」銘鉄剣は市原市を代表する文化財として、分析と保存処理に御尽力いただいた国立歴史民俗博物館において公開されてきましたが、現在は、令和4（2022）年度に開館した市原歴史博物館の常設展示の中核として発掘の地に戻っています。本書で示される研究成果と合わせて、実際に資料を御覧いただければ幸いです。

これまでの調査成果が研究者のみならず、歴史博物館をはじめとする社会教育の場において、さらには学校教育を通して、市民の方々に届けられ、多方面に活用されることを願ってやみません。

発掘調査から本書の刊行に至るまでには、文化庁、国立歴史民俗博物館、千葉県教育庁文化財課、旧市原市国分寺台土地区画整理組合、旧上総国分寺台遺跡調査団及び財団法人市原市文化財センター、並びに地元関係者の方々に多大な御尽力をいただきました。各位に厚く御礼申し上げます。

令和8年3月

市原市教育委員会

教育長　藤谷　誠

例 言

1　本書は、千葉県市原市山田橋字稲荷台49・48－1・48－2・26・27－3・27－4・28－2・28－3（現山田橋3丁目1）に所在した稲荷台1号墳の発掘調査報告書である。

2　整理・報告事業は、令和5年度から令和7年度に市原市埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　整理作業と本書の編集は小橋健司が担当した。第2章第4節（金属製品CT画像・トレース図）・第5章は上野祥史氏（国立歴史民俗博物館）が作成・執筆した。第3章・第4章の分析成果および論考の執筆者は各節表題部に示すとおりである。その他は小橋が執筆した。

4　「王賜」銘鉄剣の象嵌表出および保存処理作業は、市原市教育委員会が平成元年度・平成2年度に国立歴史民俗博物館の受託研究として依頼し、永嶋正春氏が担当した（第2章第6節参照）。図版5中央列・28は保存処理作業に際し、永嶋氏が撮影したものである。また、本書掲載の遺構図・図版は、発掘調査担当者田中新史氏が作成・撮影した現場図面・写真をもとに作成した。

令和5年度に「王賜」銘鉄剣のCT撮影・蛍光X線分析、令和6年度に鉄剣（5）・鉄刀（52）・胡籙金具（58・61）の保存処理、令和7年度に胡籙金具の安定台製作および分析調査を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託して行った。第3章第1節・第2節・第4節掲載図および図版20 ～ 27・29・30は公益財団法人元興寺文化財研究所が撮影した。

図版1 ～ 3は上野祥史氏の支援を受け、当センターにおいて撮影した。図版6 ～ 19はデジタルマイクロスコープHF－1200DXを用いて当センターが撮影した。ソフトウェアJCAM Proによる深度合成画像で、写し込みスケールの最小目盛りは1mmである。第68 ～ 72図および図版31 ～ 44は、東北大学総合学術博物館において鹿納晴尚氏（東北大学総合学術博物館）と上野祥史氏によって行われたX線CT調査の成果である（第3章第3節）。その他の写真は当センターが撮影した。

5　第1・2図はアジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許3670274、特許4272146）を使用し、市原市埋蔵文化財調査センターが作成した。第3図には迅速測図原図、第5図には1/500国分寺台土地区画整理事業現況図・1/2500市原市地形図を用いた。また、図版45には国土地理院による昭和36年撮影の航空写真、図版49下には朝日航洋株式会社撮影の航空写真を用いた。

6　整理作業方針については令和5年度に萩原恭一氏（市原市文化財審議会会長）、田中　裕氏（茨城大学）、上野祥史氏から御指導いただいた。須恵器については佐藤晃雅氏（八街市教育委員会）、鉄鏃口巻の赤彩については山田俊輔氏（千葉大学）に御教示いただいた。各位に感謝申し上げる。

有孔砥石の石材鑑定（肉眼）については、パリノ・サーヴェイ株式会社（赤堀岳人氏・坂元秀平氏）に依頼し、鑑定結果を本文・遺物観察表中に記載した。

7　出土遺物と記録類は、市原市埋蔵文化財調査センター・市原歴史博物館（〒290－0011 千葉県市原市能満1489）に保管されている。

整理作業に際しては、多くの方々と機関・団体から御助言、御助力を賜りました。

御芳名を記して感謝申し上げます。（敬称略・五十音順）

池森　慧・岩下智洋（White Rabbit社）　鹿納晴尚　栗田則久　白石太一郎　永嶋正春
蜂屋孝之　平川　南　藤澤　敦　三上喜孝　／　石上神宮　国立中央博物館（韓国）
国立歴史民俗博物館　埼玉県立さきたま史跡の博物館　東京国立博物館　文化庁

凡 例

1　遺物実測図の縮尺は、土器1/3、石製品2/3を基本とする。金属製品は1/2を基本とし、大型品1/3とした。

2　遺物写真の縮尺については、平面写真が実測図掲載土器1/3、金属製品・石製品2/3を基本とするが厳密ではない。立面撮影遺物は任意縮尺である。例外は図版中に注記している。

3　遺物実測図における赤彩部は網掛けで表現している。

4　石製品・金属製品等の横断面図は、図中上方向が遺物正面（正置した場合の天側）である。

5　遺物観察表等の数値については、推定復元の場合「？」を付け、欠損のある現存部位を表す場合「（○○）」のように括弧でくくって示した。属性「部位」の「半完形」は実測図上で口縁から底部まで遺存する場合を指す。「遺存」は実測図では表現されない円周方向の遺存程度を大まかに表現したものである。上半部だけでも一周していれば100とした。

6　遺物観察表における色調は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』に基づき記載した。また、同じく胎土は、肉眼で確認できる混入粒子の種別と相対的な量で表現した。

7　「○○形土器」は基本的に「○○」と略記している。

8　遺物実測図のうち、欠落を補っている場合は、外形・断面とも描線を切って間隔を空け、示している。また、反転復元を行った場合は、口縁あるいは底面の線と稜線を切断している。この時、小片の場合は、口縁遺存幅（正射投影）を示し、1/4以上遺存する場合は、中心軸近くを切って示している。

9　遺構平面図は磁北を基準に方位を示している。

10　遺構実測図中の「K」は近現代撹乱坑を表す。

11　遺構実測図中のエレベーション図は、すべて平面図の標高記録から作成したものである。

12　第3章第4節の第73図～第117図・第119図・第121図は、図版20～図版27としてカラー版を掲載している。

13　第4章第1節Ⅰについては、添付DVDに収録している。

本 文 目 次

序文
例言・凡例

第1章　遺跡の調査と周辺環境

第 1 節　調査に至る経緯 …… 1
第 2 節　遺跡周辺の環境 …… 1
第 3 節　発掘調査と記録の概要 …… 10

第2章　検出遺構と出土遺物

第 1 節　墳丘と周溝 …… 11
第 2 節　埋葬施設と副葬品出土状況 …… 19
第 3 節　土器 …… 24
第 4 節　金属製品 …… 36
第 5 節　石製品 …… 50
第 6 節　王賜銘鉄剣の保存処理と復元について …… 58
第 7 節　稲荷台1号墳の築造と周辺遺跡の展開 …… 62

第3章　自然科学分析

第 1 節　王賜銘鉄剣のX線CT調査 …… 71
第 2 節　王賜銘鉄剣の蛍光X線分析調査 …… 75
第 3 節　王賜銘鉄剣象嵌銘のX線CT調査 …… 85
第 4 節　稲荷台1号墳出土胡籙金具の調査 …… 95

第4章　稲荷台1号墳出土遺物について

第 1 節　王賜銘鉄剣の技術と釈文・釈読・製作地 …… 111
第 2 節　「王賜」銘鉄剣の銘文について …… 139
第 3 節　稲荷台1号墳出土武器・武具の位置づけ …… 151
第 4 節　稲荷台1号墳北施設出土胡籙・鉄鏃・提砥の位置づけ …… 161
第 5 節　稲荷台1号墳出土須恵器の基礎的考察 …… 177
第 6 節　稲荷台1号墳出土土師器について …… 187

第5章　総括 …… 205

挿 図 目 次

第 1 図　房総周辺の主要な中期古墳 …… 2
第 2 図　養老川・村田川流域の主な関連遺跡 …… 4
第 3 図　国分寺台地区周辺の古墳・遺跡 …… 6
第 4 図　国分寺台地区周辺の調査遺跡 …… 7
第 5 図　稲荷台古墳群周辺地形 …… 9
第 6 図　墳丘等高線 …… 12
第 7 図　調査区全体 …… 13
第 8 図　墳丘全体平面・断面 …… 14
第 9 図　周溝土層断面（北側・南側） …… 15
第 10 図　周溝土層断面（東側・西側） …… 16
第 11 図　墳丘土層南北断面 …… 17
第 12 図　墳丘土層東西断面 …… 18
第 13 図　周溝内遺物出土レベル …… 18
第 14 図　墳頂部埋葬施設配置状況 …… 20
第 15 図　中央埋葬施設検出状況 …… 21
第 16 図　北埋葬施設検出状況 …… 23
第 17 図　出土土器　須恵器（1） …… 25
第 18 図　出土土器　須恵器（2） …… 26
第 19 図　出土土器　土師器（1） …… 27
第 20 図　出土土器　土師器（2） …… 28
第 21 図　金属製品（1） …… 37
第 22 図　金属製品（2） …… 38
第 23 図　矢の部位名称 …… 39
第 24 図　金属製品（3） …… 40
第 25 図　短甲（板甲）の部位名称 …… 41
第 26 図　金属製品（4） …… 42
第 27 図　金属製品（5） …… 43
第 28 図　金属製品（6） …… 44
第 29 図　胡簶部位名称 …… 45
第 30 図　金属製品（7） …… 46
第 31 図　金属製品（8） …… 48
第 32 図　金属製品（9）・石製品 …… 50
第 33 図　王賜銘鉄剣　X線CT画像展開図および象嵌部分 …… 72
第 34 図　王賜銘鉄剣　X線CT画像（S=3/1） …… 73
第 35 図　王賜銘鉄剣　象嵌文字とその断面（S=3/1） …… 74
第 36 図　B面象嵌にみえる金線の捩り …… 75
第 37 図　王賜銘鉄剣 …… 75
第 38 図　蛍光X線分析箇所 …… 76
第 39 図　分析の様子 …… 77
第 40 図　蛍光X線スペクトル（第38図a1、鉄地） …… 78
第 41 図　蛍光X線スペクトル（第38図a2、鉄地） …… 78
第 42 図　蛍光X線スペクトル（第38図a3、鉄地） …… 78
第 43 図　蛍光X線スペクトル（第38図a4、鉄地） …… 78
第 44 図　蛍光X線スペクトル（第38図a5、鉄地） …… 79
第 45 図　蛍光X線スペクトル（第38図a6、鉄地） …… 79
第 46 図　蛍光X線スペクトル（第38図b1、「王」） …… 79
第 47 図　蛍光X線スペクトル（第38図b2、「王」） …… 79
第 48 図　蛍光X線スペクトル（第38図b3、「王」） …… 80
第 49 図　蛍光X線スペクトル（第38図b4、「王」） …… 80
第 50 図　蛍光X線スペクトル（第38図c1、「賜」） …… 80
第 51 図　蛍光X線スペクトル（第38図c2、「賜」） …… 80
第 52 図　蛍光X線スペクトル（第38図c3、「賜」） …… 81
第 53 図　蛍光X線スペクトル（第38図c4、「賜」） …… 81
第 54 図　蛍光X線スペクトル（第38図d1、不明文字） …… 81
第 55 図　蛍光X線スペクトル（第38図e1、「敬」） …… 81

第 56 図　蛍光X線スペクトル（第38図e2、「敬」）……82
第 57 図　蛍光X線スペクトル（第38図e3、「敬」）……82
第 58 図　蛍光X線スペクトル（第38図e4、「敬」）……82
第 59 図　蛍光X線スペクトル（第38図f1、不明文字）……82
第 60 図　蛍光X線スペクトル（第38図f2、不明文字）……83
第 61 図　蛍光X線スペクトル（第38図g1、「此」）……83
第 62 図　蛍光X線スペクトル（第38図g2、「此」）……83
第 63 図　蛍光X線スペクトル（第38図g3、「此」）……83
第 64 図　蛍光X線スペクトル（第38図h1、「廷」）……84
第 65 図　蛍光X線スペクトル（第38図h2、「廷」）……84
第 66 図　蛍光X線スペクトル（第38図h3、「廷」）……84
第 67 図　蛍光X線スペクトル（第38図h4、「廷」）……84
第 68 図　象嵌銘のX線CT画像（1）……88
第 69 図　象嵌銘のX線CT画像（2）……89
第 70 図　象嵌銘のX線CT画像（3）……90
第 71 図　象嵌銘のX線CT画像（4）……91
第 72 図　象嵌銘のX線CT画像（5）及び関連X線CT画像……93
第 73 図　鋏具……96
第 74 図　織物a……96
第 75 図　織物b……97
第 76 図　織物bの繊維断面（b-1）……97
第 77 図　織物の重なり（c-1）……97
第 78 図　織物c1……97
第 79 図　織物c2……97
第 80 図　織物c2繊維断面（ア）……97
第 81 図　d付着物の断層観察像……97
第 82 図　吊手金具1……98
第 83 図　付着繊維（a）……98
第 84 図　付着繊維断面（a）……98
第 85 図　裏面の繊維（b）……98
第 86 図　勾玉形金具……99
第 87 図　繊維群観察像（b）……99
第 88 図　繊維断面……100
第 89 図　鋲の断層観察像……100
第 90 図　吊手金具2……100
第 91 図　鋲の断層観察像……101
第 92 図　網状層（a-1）……101
第 93 図　飴状の錆が付着した毛様の繊維……101
第 94 図　帯状金具1……102
第 95 図　網状層（a）……102
第 96 図　網状層（b）……102
第 97 図　網状層と毛の重なり（c-1）……103
第 98 図　毛穴（c-2）……103
第 99 図　金具の重なりと革の断層観察像（d）……103
第 100図　糸と直線状物質の断層観察像（e）……103
第 101図　帯状金具2……104
第 102図　金具の重なりと革の断層観察像（a）……104
第 103図　毛穴（b）……104
第 104図　直線状物質の断層観察像（a）……104
第 105図　帯状金具3……105
第 106図　網状層と毛の重なり（a）……105
第 107図　毛穴（b）……105
第 108図　線状物質……105
第 109図　鋲の断層観察像（d）……106
第 110図　鋲の断層観察像（e）……106
第 111図　帯状金具4……106
第 112図　網状層と毛の重なり（a）……106

第 113図　直線状物質の断層観察像（b）……106
第 114図　吊手金具３……107
第 115図　金色箇所の顕微鏡観察像（a）……108
第 116図　元素マップ……108
第 117図　鋲の断層観察像（a）……108
第 118図　蛍光X線スペクトル……109
第 119図　赤色顔料の顕微鏡観察像（b）……109
第 120図　赤色顔料の蛍光X線スペクトル……110
第 121図　直線状物質の断層観察像（c）……110
第 122図　山東省蒼山県出土永初六年銘卅湅鉄刀のアマルガム金錯銘……DVD-ROM収録（D1）
第 123図　徐州市建初二年金錯五十湅鉄剣の蹴り彫り金錯銘……DVD-ROM収録（D3）
第 124図　光和七年銘十湅書刀の蹴り彫り金錯銘……DVD-ROM収録（D3）
第 125図　線象嵌のホールド法（左）とアンカー法……DVD-ROM収録（D4）
第 126図　卅湅鉄刀の蹴り彫り線の配置……DVD-ROM収録（D4）
第 127図　七支刀の「なめくり象嵌」の金線が脱落した溝……DVD-ROM収録（D4）
第 128図　なめくり打ち……DVD-ROM収録（D4）
第 129図　馮素弗墓出土金象嵌鉄鏡の「なめくり象嵌」……DVD-ROM収録（D4）
第 130図　天安龍院里12号墳龍鳳文環頭大刀の「なめくり象嵌」……DVD-ROM収録（D5）
第 131図　天安花城里A地区１号墳象嵌大刀の「蹴り彫り象嵌」……DVD-ROM収録（D5）
第 132図　公州水村里II-１号木槨墓象嵌大刀の「蹴り彫り象嵌」……DVD-ROM収録（D6）
第 133図　公州水村里II-７号石槨墓象嵌大刀の「蹴り彫り象嵌」……DVD-ROM収録（D6）
第 134図　毛彫りたがね……DVD-ROM収録（D7）
第 135図　毛彫りたがね模式図……DVD-ROM収録（D7）
第 136図　丸毛彫りたがね……DVD-ROM収録（D7）
第 137図　古代の線彫り技術７種……DVD-ROM収録（D7）
第 138図　稲荷山鉄剣　なめくり打ちの痕跡……DVD-ROM収録（D8）
第 139図　稲荷山鉄剣直線部分……DVD-ROM収録（D8）
第 140図　六朝体といわれた稲荷山鉄剣の文字２種……DVD-ROM収録（D8）
第 141図　なめくりたがね（復元）……DVD-ROM収録（D8）
第 142図　東博蔵有銘環頭大刀の第４字の原図……DVD-ROM収録（D9）
第 143図　同加筆図……DVD-ROM収録（D9）
第 144図　稲荷山鉄剣　第35字の「在」……DVD-ROM収録（D9）
第 145図　東博蔵有銘環頭大刀の第５字の原図……DVD-ROM収録（D9）
第 146図　東博蔵有銘環頭大刀の第５字の接合図……DVD-ROM収録（D9）
第 147図　「領」……DVD-ROM収録（D9）
第 148図　東博蔵有銘環頭大刀（部分）……DVD-ROM収録（D9）
第 149図　東博蔵有銘環頭大刀……DVD-ROM収録（D9）
第 150図　秦・石鼓文の「入れ替え転折法」……DVD-ROM収録（D10）
第 151図　後漢代隷書の「入れ替え転折法」……DVD-ROM収録（D11）
第 152図　北魏と唐代の楷書の「連続転折法」……DVD-ROM収録（D11）
第 153図　後漢代象嵌文字の「入れ替え転折法」……DVD-ROM収録（D12）
第 154図　４世紀韓半島と日本列島の「入れ替え転折法」……DVD-ROM収録（D12）
第 155図　円弧状なめくりたがね（復元）……DVD-ROM収録（D12）
第 156図　円弧状なめくりたがねの痕跡……DVD-ROM収録（D12）
第 157図　文様彫刻に見られる「はみだしたがね痕」……DVD-ROM収録（D12）
第 158図　「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」……DVD-ROM収録（D13）
第 159図　江田船山銀象嵌鉄刀銘の「入れ替え転折法」と「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」
……DVD-ROM収録（D13）
第 160図　転折部の表現技法の変化　毛彫りたがねによる「連続転折法」……DVD-ROM収録（D13）
第 161図　東博蔵有銘環頭大刀の筆文字に似せた象嵌文字の収筆……DVD-ROM収録（D14）
第 162図　稲荷山鉄剣の筆文字に似せた象嵌文字の収筆……DVD-ROM収録（D14）
第 163図　元岡G-６号墳　庚寅銘大刀……DVD-ROM収録（D14）
第 164図　東大寺金堂鎮壇具　陽剣と陰剣……DVD-ROM収録（D14）
第 165図　王賜銘鉄剣のX線ネガフィルムから撮影された蹴り彫りたがね痕……112
第 166図　象嵌における鉄地と「金銀線が脱落した象嵌溝」との物質の違い……112
第 167図　王賜銘鉄剣のたがね痕の復元①……113
第 168図　王賜銘鉄剣のたがね痕の復元②……114

第169図　王賜銘鉄剣のたがね痕の復元③ ……114
第170図　復元した蹴り彫りたがね　A型とB型 ……115
第171図　復元したなめくりたがね……115
第172図　X線画像から溝跡を探す「王」字 ……116
第173図　同左　第3画に溝跡の可能性 ……116
第174図　ML画像から溝跡を探す「王」字　平面 ……116
第175図　同左　部分拡大 ……116
第176図　ML画像から溝跡を探す「王」字　右から ……116
第177図　同左　「王」字　上から……116
第178図　MS画像から溝跡を探す「王」字……117
第179図　X線画像から溝跡を探す「賜」字 ……117
第180図　同左　3カ所に溝跡の可能性……117
第181図　ML画像から溝跡を探す「賜」字　平面 ……118
第182図　同左　「賜」字　加筆……118
第183図　ML画像から溝跡を探す「賜」字　左斜め上から　3画面合成 ……118
第184図　ML画像から溝跡を探す「賜」字　右斜め上から……118
第185図　ML画像から溝跡を探す「賜」字　下方から ……118
第186図　同左　「賜」字　上方から……118
第187図　MS画像から溝跡を探す「賜」字　加筆図 ……119
第188図　X線画像から溝跡を探す「人？」字 ……119
第189図　同左　第2画に「金線が脱落した象嵌溝」の可能性……119
第190図　ML画像から溝跡を探す「人？」字……120
第191図　ML画像から溝跡を探す「人？」字　加筆 ……120
第192図　ML画像から溝跡を探す「人？」字　下方から……120
第193図　ML画像「人？」字　上方から ……120
第194図　MS画像から溝跡を探す「人？」字　加筆図 ……120
第195図　X線画像から溝跡を探す「郡？」字 ……121
第196図　同左　加筆　左下に2つの円文あり……121
第197図　「郡？」字　左下に白い円文が二つ ……121
第198図　「□」字を蹴り彫りで円形に彫る ……121
第199図　ML画像から溝跡を探す「郡？」字……121
第200図　同左　「郡？」字　加筆……121
第201図　ML画像から溝跡を探す「郡？」字　下方から……122
第202図　ML画像から溝跡を探す「郡？」字　左方から　3枚合成……122
第203図　同左　加筆　「郡？」字　左方から　3枚合成……122
第204図　ML画像から溝跡を探す「郡？」字　上方から　2枚合成……122
第205図　同左　加筆　「郡？」字　上方から　2枚合成……122
第206図　MS画像から溝跡を探す「君」＋「こざと」加筆図 ……122
第207図　X線画像から溝跡を探す「宮、官」字 ……123
第208図　同左　2カ所に溝の可能性 ……123
第209図　ML画像から溝跡を探す「宮」字……123
第210図　同左　「宮」字　加筆……123
第211図　ML画像から溝跡を探す「宮」字　「宮？」字　左方から　3枚合成 ……123
第212図　同左　加筆　「宮？」字　左方から　3枚合成……123
第213図　MS画像から溝跡を探す　加筆図 ……124
第214図　X線画像から溝跡を探す「此」字 ……124
第215図　ML画像から溝跡を探す「此」字……124
第216図　ML画像から溝跡を探す　右から3枚合成 ……124
第217図　同左　左から ……124
第218図　ML画像から溝跡を探す　上方から ……125
第219図　同左　下方から ……125
第220図　MS画像から溝跡を探す「此」字　加筆図 ……125
第221図　X線画像から溝跡を探す「廷」字 ……125
第222図　同左　5カ所に溝の可能性 ……125
第223図　ML画像から溝跡を探す「廷」字……126
第224図　同左　3カ所に溝の可能性 ……126
第225図　ML画像から溝跡を探す「廷」字　2枚合成……126

第 226図　同左　加筆　2枚合成 ……126
第 227図　ML画像から溝跡を探す　左から ……126
第 228図　同左　加筆 ……126
第 229図　ML画像から溝跡を探す　下方から ……126
第 230図　同左　下方から ……126
第 231図　MS画像から溝跡を探す「廷」字　加筆図 ……127
第 232図　校洞11号墳象嵌銘の蹴り彫りたがね痕の復元図 ……130
第 233図　校洞11号墳象嵌銘　横線の蹴り彫りたがね痕 ……131
第 234図　校洞11号墳象嵌銘　「部」字の蹴り彫りたがね痕 ……131
第 235図　校洞11号墳象嵌銘　「先」字の蹴り彫りたがね痕 ……131
第 236図　校洞11号墳象嵌銘　「人」字の蹴り彫りたがね痕 ……131
第 237図　校洞11号墳象嵌銘　「貴？」字の蹴り彫りたがね痕 ……131
第 238図　校洞11号墳象嵌銘　「賞？」字の蹴り彫りたがね痕 ……131
第 239図　校洞11号墳象嵌銘　「刀」字の蹴り彫りたがね痕 ……131
第 240図　王賜銘鉄剣の方向を変えたたがね痕 ……132
第 241図　校洞11号墳象嵌銘鉄刀の方向を変えたたがね痕 ……132
第 242図　王賜銘鉄剣　起筆部と収筆部の「墨だまり」を蹴り彫り三角文の底辺で表現している ……133
第 243図　校洞11号墳象嵌銘　起筆部と収筆部の「墨だまり」を三角文の底辺で表現している ……133
第 244図　第一期（導入期） ……134
第 245図　第二期（進化期） ……134
第 246図　第三期（完成期） ……134
第 247図　七支刀銘 ……134
第 248図　昌寧校洞11号墳金象嵌大刀 ……134
第 249図　東博蔵有銘環頭大刀 ……134
第 250図　武寧王陵銀製釧（部分、523年ころ） ……135
第 251図　毛彫りの初例：百済金銅大香炉（567年以降） ……135
第 252図　王興寺址　青銅製舎利函の毛彫り銘（577年） ……135
第 253図　弥勒寺址金製舎利奉安記の毛彫り銘（639年） ……135
第 254図　日本列島周辺の古代有銘刀剣 ……141
第 255図　刀剣・鉄鏃・短甲の諸例 ……156
第 256図　鉄剣の剣身長・幅と茎長 ……158
第 257図　「王賜」銘鉄剣と類例 ……159
第 258図　稲荷台1号墳北施設出土胡籙金具と出土状況図 ……161
第 259図　稲荷台1号墳出土胡籙に伴う鉄鏃 ……162
第 260図　福井県天神山7号墳第1主体部例 ……163
第 261図　稲荷台1号墳北施設出土胡籙の復元形態案 ……164
第 262図　稲荷台1号墳出土胡籙金具の類例と関連資料（日本列島） ……166
第 263図　稲荷台1号墳出土胡籙金具の類例と関連資料（朝鮮半島南部） ……167
第 264図　中国における胡籙金具　短冊形B1類吊手金具の祖形の可能性がある事例 ……168
第 265図　胡籙に収納された鉄鏃の諸例 ……170
第 266図　稲荷台1号墳北施設出土砥石とその類例 ……172
第 267図　稲荷台1号墳土器の出土位置 ……178
第 268図　杯蓋・杯身口唇部形状 ……181
第 269図　杯蓋・杯身口唇部形状の割合 ……182
第 270図　稲荷台1号墳出土須恵器と関連資料 ……183
第 271図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（1） ……189
第 272図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（2） ……191
第 273図　古墳時代中期土師器高杯形土器の形態変化 ……193
第 274図　古墳時代中期椀形高杯形土器の形態変化 ……194
第 275図　古墳時代中期杯形土器の形態変化 ……194
第 276図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（3） ……196
第 277図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（4） ……197
第 278図　稲荷台1号墳周辺の中期円墳出土土師器 ……200

写 真 図 版 目 次

図版 1　遺物　中央埋葬施設副葬品
図版 2　遺物　北埋葬施設副葬品
図版 3　遺物　王賜銘鉄剣（A・B面）／ 1号墳出土須恵器・土師器
図版 4　遺物　象嵌銘
図版 5　遺物　王賜銘鉄剣　象嵌文字／表出前状況／保存処理後全形
図版 6　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（王）
図版 7　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（賜）
図版 8　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（賜・3字目）
図版 9　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（3字目・敬）
図版 10　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（敬）
図版 11　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（安?）
図版 12　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（安?・此）
図版 13　遺物　象嵌銘顕微鏡画像（此・廷）
図版 14　遺物　金属製品顕微鏡画像1
図版 15　遺物　金属製品顕微鏡画像2
図版 16　遺物　金属製品顕微鏡画像3
図版 17　遺物　金属製品顕微鏡画像4
図版 18　遺物　金属製品顕微鏡画像5
図版 19　遺物　金属製品顕微鏡画像6
図版 20　遺物　金属製品顕微鏡画像7
図版 21　遺物　金属製品顕微鏡画像8・X線写真1
図版 22　遺物　金属製品顕微鏡画像9・X線写真2
図版 23　遺物　金属製品顕微鏡画像10
図版 24　遺物　金属製品顕微鏡画像11・X線写真3
図版 25　遺物　金属製品顕微鏡画像12・X線写真4
図版 26　遺物　金属製品顕微鏡画像13・X線写真5
図版 27　遺物　金属製品顕微鏡画像14・元素マップ・X線写真6
図版 28　遺物　王賜銘鉄剣X線写真
図版 29　遺物　金属製品X線写真1
図版 30　遺物　金属製品X線写真2
図版 31　遺物　金属製品X線CT画像1
図版 32　遺物　金属製品X線CT画像2
図版 33　遺物　金属製品X線CT画像3
図版 34　遺物　金属製品X線CT画像4
図版 35　遺物　金属製品X線CT画像5
図版 36　遺物　金属製品X線CT画像6
図版 37　遺物　金属製品X線CT画像7
図版 38　遺物　金属製品X線CT画像8
図版 39　遺物　金属製品X線CT画像9
図版 40　遺物　金属製品X線CT画像10
図版 41　遺物　金属製品X線CT画像11
図版 42　遺物　金属製品X線CT画像12
図版 43　遺物　金属製品X線CT画像13
図版 44　遺物　金属製品X線CT画像14
図版 45　遺構　稲荷台1号墳周辺航空写真
図版 46　遺構　航空写真　稲荷台古墳群／稲荷台古墳群北部
図版 47　遺構　航空写真　稲荷台古墳群／稲荷台古墳群周辺
図版 48　遺構　航空写真　稲荷台1号墳周辺／稲荷台古墳群周辺
図版 49　遺構　航空写真　稲荷台古墳群北部／国分寺台地区
図版 50　遺構　1号墳（調査前）／ 2 ～ 9号墳調査状況（航空写真）／墳丘・ベルト
図版 51　遺構　1号墳遠景／竪穴002号／墳丘・周溝
図版 52　遺構　墳丘・周溝／周溝遺物出土状況
図版 53　遺構　周溝北部（遺物出土状況）／中央埋葬施設（副葬品出土状況）
図版 54　遺構　中央埋葬施設（副葬品出土状況）／北埋葬施設（副葬品出土状況）
図版 55　遺構　北埋葬施設（副葬品出土状況）／墳丘・周溝東部／墳丘南西部（土層断面）

図版 56　遺構　墳丘南西部（土層断面）／墳丘北東部（土層断面）／完掘状況
図版 57　遺物　須恵器1 ～ 4 ／土師器19・20・24
図版 58　遺物　土師器25 ～ 29・34・38・54
図版 59　遺物　須恵器3 ～ 18
図版 60　遺物　土師器19・21 ～ 23・25・26・29 ～ 34
図版 61　遺物　土師器35 ～ 58
図版 62　遺物　金属製品（中央施設）2 ～ 9
図版 63　遺物　金属製品（中央施設）10 ～ 25
図版 64　遺物　金属製品（中央施設）26 ～ 45・47
図版 65　遺物　金属製品（中央施設）46・48・49 ／（北施設）50 ～ 52
図版 66　遺物　金属製品（北施設）53 ～ 61
図版 67　遺物　金属製品（北施設）62 ～ 67
図版 68　遺物　金属製品（北施設）68 ～ 75 ／石製品76

表 目 次

第 1 表　土器観察表 …… 29
第 2 表　中央埋葬施設出土鉄鏃属性表 …… 39
第 3 表　北埋葬施設出土鉄鏃属性表 …… 49
第 4 表　金属製品・石製品観察表 …… 51
第 5 表　FP定量値（%） …… 77
第 6 表　金銀比（%） …… 77
第 7 表　中国の鉄製品のアマルガム金錯銘 …… DVD-ROM収録（D3）
第 8 表　鉄刀剣のアマルガム金錯銘と線象嵌の線幅と線ピッチの比較 …… DVD-ROM収録（D3）
第 9 表　日本所在の古代有銘刀剣 …… 148
第10 表　方形4鋲蝶番金具をもつ短甲の様相 …… 152
第11 表　古墳時代中期後半の武器・武具の内容と組み合わせ …… 154
第12 表　鉄剣の計測値 …… 157
第13 表　短冊形B類吊手金具の諸属性・共伴金具と変化の方向性 …… 165
第14 表　胡簶に収納される鉄鏃の本数・形式・出土位置 …… 169
第15 表　須恵器杯蓋・杯身口唇部形状の特徴 …… 180

第 1 章　遺跡の調査と周辺環境

第 1 節　調査に至る経緯

稲荷台古墳群の発掘調査は、国分寺台地区の宅地造成事業に伴って実施された。市原市内では昭和30年代に始まる海浜部の工業地化をきっかけに、臨海部台地上の宅地造成が活発化し、国分寺台地区の事業も同様の背景の下に計画されている。1971（昭和46）年に市原市国分寺台土地区画整理組合が設立されたが、事業予定地は当時より上総国分僧寺に代表される史跡・古墳群があることから、埋蔵文化財の存在が想定される地区であった。このため、発掘調査に対応するべく、上総国分寺台遺跡調査会を結成し、内部に上総国分寺台遺跡調査団を組織した。事業地内の調査対象面積は、発掘調査の進捗によって、遺跡の質量・分布範囲の把握が進み、当初の見込みから大幅に拡大することとなり、最終的には57ヘクタールを超え、調査期間は1972（昭和47）年度から1988（昭和63）年度に及んでいる。稲荷台1号墳の発掘調査は、上総国分寺台遺跡調査団によって、1976（昭和51）年12月から1977（昭和52）年3月にかけて行われた。拡大する発掘調査事業への対応が要求される中、1982（昭和57）年度設立の財団法人市原市文化財センターが発掘調査組織に加わり、その後、当初から発掘調査を行っていた調査団は1985（昭和60）年に解散している。

整理作業は、発掘調査と並行して一部行われ、概報が随時刊行されたほか、東間部多古墳群（須田・宮本1974）（上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ）・南向原古墳群（田中他1976）（Ⅱ）・西広貝塚（米田他1977）（Ⅲ）・蛇谷遺跡（須田他1977（1989））（Ⅳ）について、報告書が刊行された。

以後の整理・報告作業は、発掘調査事業の増加と費用負担の問題から停滞を余儀なくされたが、文化庁文化財部記念物課（当時）・千葉県教育庁教育振興部文化財課の配慮を得て、補助事業として発掘調査を実施した遺跡を対象に、1994（平成6）年度より国庫補助事業として整理報告作業が行われることとなった。また、1995（平成7）年には市原市と土地区画整理組合との協議により費用負担の問題等が解決され、1997（平成9）年度から本格的に全体の整理作業が開始された。以後、祇園原貝塚報告書（忍澤他1999）（Ⅴ）から順次、刊行が進められ、2005（平成17）年度に財団法人市原市文化財センターが解散した後は、公立の市原市埋蔵文化財調査センターが業務を引き継いでいる。

第 2 節　遺跡周辺の環境

千葉県市原市は東京湾東岸に位置し、南北に長い市域を持つ（第1図）。房総半島南部の丘陵地帯から東京湾へ北向きに養老川が貫流し、東岸最奥部に向かって村田川が北西へ流入する。市域は、南端の標高200m以上の丘陵から、下流域の沖積地まで全体としてなだらかな地勢を示す。北東部は房総半島の下総台地が最もくびれる位置に当たり、村田川流域は、印旛沼に流れ込む鹿島川と太平洋に向かう一宮川流域と接続する。江戸時代に利根川が現在の流路に変えられる以前は、印旛沼・手賀沼・牛久沼・霞ヶ浦・北浦は一つの広大な内海をなしており、東京湾岸から常総の内海と太平洋へ向かう経路が集束する地域と言える。養老川流域も左岸中下流域で小櫃川流域、右岸中流域で太平洋側の埴生川流域、夷隅川流域と連絡する。古代に上総国府が市原郡に置かれる背景には、このような地理的特質があったものと思われる。

稲荷台1号墳は、東京湾へ流れる村田川と養老川の間に位置する、樹枝状開析を受けた台地上に立



（白井他2012を参考に作成）

第１図　房総周辺の主要な中期古墳

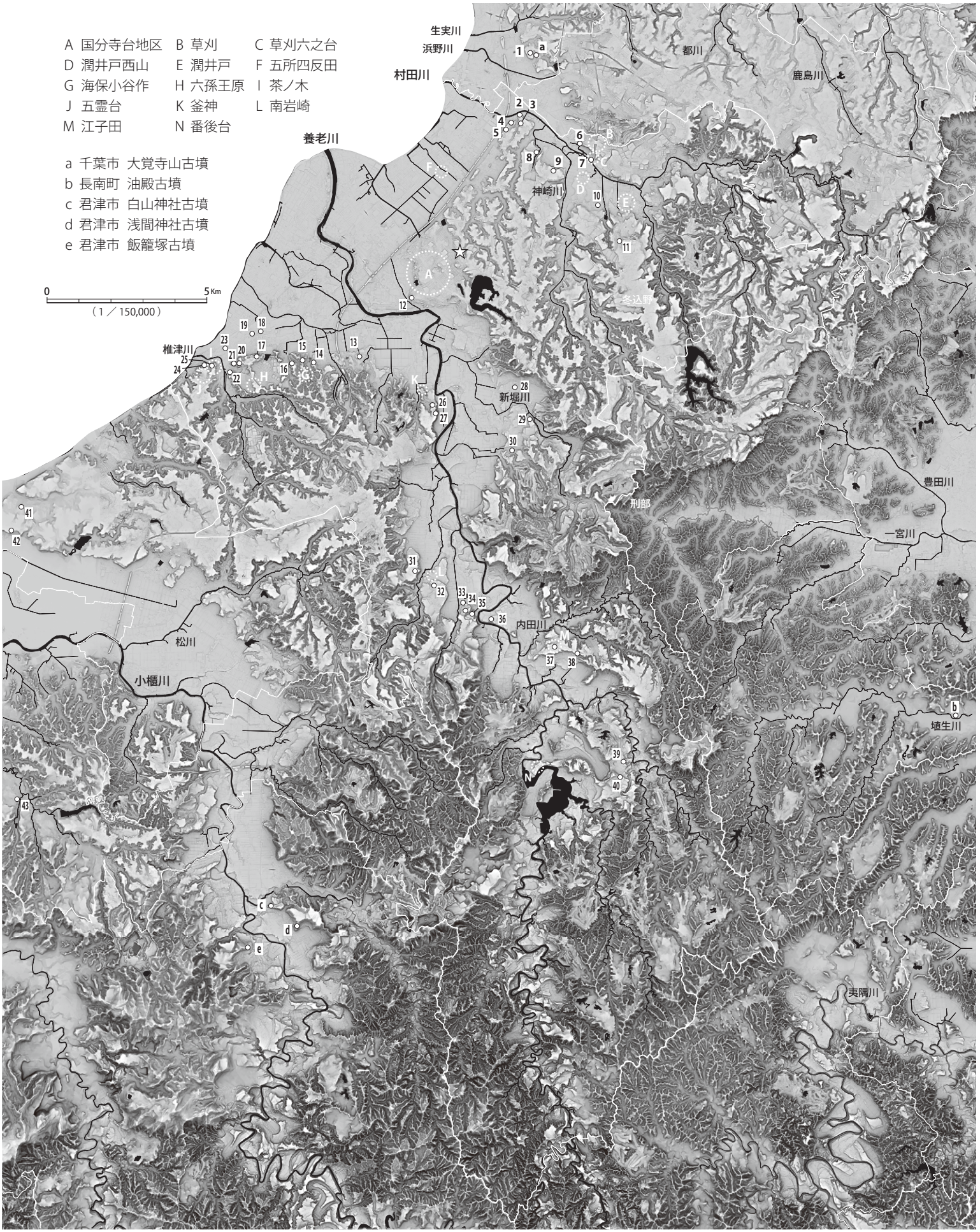
地する（第1・2図）。最終氷期の海面低下に伴う下刻作用面降下によって深く刻まれた谷は、縄文海進を経て埋積が進み、幅広い谷底平野が形成される。広域では、北東の菊間から南西の根田にかけての台地北西辺が海進期の浸食により直線的な海蝕崖となっており、海退後には台地下縁辺から海岸線まで沖積地が形成されている。蛇行する両河川によって自然堤防や埋没旧河道が形成され、それぞれに段丘面が残されている（第2・3図）。

周辺遺跡の概要　縄文海進期の台地上、海退後の沖積地には縄文時代の貝塚が多く残され、国分寺台地周辺でも早期から前期の天神台遺跡（忍澤他 2013）、中期から後期の山倉貝塚（金子他 1969）、後期から晩期の祇園原貝塚（忍澤他 1999）・西広貝塚（鶴岡他 2007）などが分布する（第 4 図）。各期貝層より得られた大量の遺物と自然科学的データからは、環境変化とそれに応じた遺構分布・遺物組成の変遷が確認されている。縄文時代晩期末から弥生時代前期は、少量の土器が出土する程度で集落形成状況が不明瞭である。弥生時代中期中葉まで武士遺跡（加納他 1996）など再葬墓が主体であり、居住域は依然希薄だが、後葉の宮ノ台式期に至って急激に遺跡数・遺構数ともに増加を見せる。水田跡は台地下の市原条里制遺跡（小久貫他 1999）で検出されており、台地上を中心に環濠集落が確認されている。国分寺台地区内に限っても、少なくとも台遺跡 C 地点・祇園原貝塚上層・根田代遺跡において宮ノ台式期の環濠集落が認められ、列状配置の方形周溝墓群が天神台遺跡（小橋他 2023）で検出されている（第 4 図）。明確な証拠は得られていないが、B 谷沿いに加茂遺跡 D 地点、祇園原貝塚上層など居住域が広がることから、台地間の幅 100m を超える谷底平野も、平坦かつ湿潤な地形であり水稲農耕の適地として利用されたと見られる。生産域となる沖積地と谷底平野の両方を望める立地が、弥生時代中期以降の拠点的な集落の基盤になったと考えられる。

弥生時代中期末から後期初頭にかけて竪穴建物数が大幅に減少した後、中葉以降に急増する動向が明らかになっているが、国分寺台地区の一部では継続的に弥生時代終末期も遺構数が増加し、外来系土器が多数出土するようになる（小橋他2023）。並行して、定型的な前方後円墳に先行する神門古墳群などの墳墓が少なからず築造され、長平台遺跡288号墓は東海西部系、神門5号墳は東海西部系と北陸南西部系の折衷的な特徴の土器が伴う。前方後円形の神門3号墳は4号墳に次いで築造された可能性が高く、墳頂部にやはり東海系由来の土器が出土している（浅利1989）。

大型前方後円墳としては、養老川下流左岸に墳丘長110mに復元される今富塚山古墳が古墳時代前期に築造される（永沼1992）。確認調査において焼成前底部穿孔壺の破片が出土しており、形態から前期前半に位置付けられる。今富塚山古墳は姉崎古墳群展開の端緒となった最大規模古墳と見られ、前期の間に台地上の釈迦山古墳・天神山古墳が連続的に築造された可能性が高い。次いで前期末から

★ 稲荷台1号
1 柏市 花野井大塚
2 柏市 弁財天
3 我孫子市 金塚
4 印西市 鶴塚
5 印西市 吉高浅間・立田台SM-02
6 成田市 下方丸塚・船形手黒1号
台方宮代1号・台方宮代(2)1・(2)2・3号
7 成田市 瓢塚32号
8 酒々井町 大鷲神社
9 神崎町 小松王塚
10 神崎町 北の内
11 成田市 小野小仲内2号
12 成田市 猫作・栗山16号
13 佐倉市 大作31号
14 富里市 烏山2号
15 千葉市 七廻塚
16 千葉市 上赤塚1号
17 千葉市 東寺山石神2号
18 多古町 多古台1-1・2-1
3-1・3-6・3-8・4-1・8-6号
19 香取市 綱原002・005号
20 香取市 鴇崎天神台1号
21 香取市 大戸宮作1号・禅昌寺山
22 香取市 堀之内1・3号
23 香取市 山之辺手ひろがり3号
24 匝瑳市 広之台3号・真々塚
25 横芝光町 小川台1号
26 香取市 富田2号
27 香取市 豊浦大塚山（三之分目大塚）
28 香取市 布野台A区埋葬施設
29 睦沢町 浅間山1号
30 一宮町 待山1号
31 大多喜町 台2号
32 市原市 草刈1・3・24号
33 市原市 大厩浅間様
34 市原市 持塚3・4・6号・東間部多1号
35 市原市 海保大塚・海保小谷作SM005
海保吉谷前5号（海保3号）
36 市原市 姉崎二子塚
37 市原市 富士見塚
38 市原市 山小川1号・柏野SM001
39 袖ケ浦市 鼻欠3・4・5号
40 木更津市 祇園大塚山
41 木更津市 鹿島塚6号・野焼2号
42 木更津市 高柳銚子塚（長州塚）
43 木更津市 茅野1号
44 君津市 八重原1号
45 君津市 鹿島台3号
46 木更津市 畑沢遺跡
47 富津市 内裏塚
48 富津市 弁天山
49 南房総市 恩田原1号
50 南房総市 永野台
51 館山市 大寺山1号洞穴



第 2 図　養老川・村田川流域の主な関連遺跡

中期初頭に墳丘直径60mの円墳、海保大塚古墳（小橋・近藤2018）、中期前半に有黒斑櫛描文埴輪の伴う外郭古墳（椎津城主郭に改変。80m前後の前方後円墳か）、中期中葉に窖窯焼成B種横ハケ埴輪と有文埴輪（波状文・斜格子文）の伴う姉崎二子塚古墳が築造される。姉崎二子塚古墳は沖積地の砂堆上に立地し、周辺には小円墳多数が伴う。なお、南西側には棗塚古墳（神明塚）が存在したとされ、周辺住民寄贈の斜縁二神二獣鏡模倣の前期倭鏡が神明塚（跡地）近傍採集と伝わっている（北見・坂元2018）。過去に「姉崎神社北方古墳」（小出他1980）として言及された古墳に相当する可能性が高い。棗塚（神明塚）のほかに、周辺微高地上に居合塚・行伝塚・道本塚の地名があり、姉崎二子塚古墳と前後する時期に築造された古墳の可能性がある。姉崎地区では鉄道敷設の際に多数の古墳が土砂採取のために破壊されたと伝わり、砂堆上には未知の古墳周溝が多く遺存すると見られる（千葉縣1929、大場・亀井1951）。居合塚は、迅速測図で姉崎二子塚古墳の約300m西に表現された道路に接する微高地に当たると見られる。行伝塚については、姉崎二子塚古墳南西の小字、京田に関係する可能性がある。戦前には姉崎二子塚古墳の「北方約一町、桃畑中ニ小ナル圓塚」（千葉縣1929）が存在するとされ、上野合支群（木對1990）・山新支群（北見・坂元2018）、妙経寺古墳群（小出2001、櫻井2003、小橋2004）に類する円墳群がさらに海寄りの砂堆上にも広がっていた可能性が高い。後期には最大規模古墳の立地が再び台地上に移るが、姉崎二子塚古墳に後続し、後期中葉の山王山古墳（小出他1980）に先行する大規模古墳の築造を想定するなら、近現代まで墳丘が遺存し認識されていた居合塚・棗塚（神明塚）・行伝（京田）塚がその候補になると思われる。

村田川流域における古墳時代前期・中期の前方後円墳は、墳丘長70mの大厩二子塚古墳、90mの可能性がある北野天神山古墳、情報の乏しい潤井戸高野前古墳を除いて、姉崎古墳群に匹敵する規模の前方後円墳は認められない。同様に国分寺台地区でも諏訪台古墳群に直径約42mの大型円墳10号墳が見られる程度であり、村田川・養老川流域における姉崎古墳群の規模と継続性は突出している。

古墳群の立地環境　稲荷台1号墳が築造された台地上地表面の標高は約28mで、造成以前における西側谷底面との比高差は15m程度である。遺構検出面は立川ローム層のいわゆるソフトローム層である。稲荷台古墳群が展開する台地はC谷と新田川水系のD谷に挟まれており、北から、市原、門前、郡本、藤井、山田橋の各地区が並ぶ。稲荷台1号墳の所在する山田橋以南は、能満、山倉、福増、武士と続く。能満遺跡群・唐崎台遺跡等の分布する能満西支台の付け根において西側のC谷と村田川支流神崎川の支谷が接する。この市原支台の古墳分布状況は、国分寺台地区の調査例の多さを考慮に入れたとしてもC谷側に重心があり、北の郡本遺跡群、南東の山田橋遺跡群に向かって、分布密度が下がるように見受けられる（第3図）。

稲荷台古墳群と稲荷台遺跡　稲荷台古墳群は土地区画整理事業対象区域の東辺部に当たる。国分寺台地区の調査は、古墳と集落遺跡を分けて行っており、埋蔵文化財包蔵地としても稲荷台古墳群（733）

☆ 稲荷台1号墳（円26m）
1 千葉市七廻塚（円54m+）
2 菊間新皇塚（前方後方?60m?）
3 東関山（前方後円80m）
4 菊間天神山（円44m）
5 菊間手永台1号（円20m）
6 草刈1号（草刈大塚）（円35m）
7 草刈3号（六之台塚）（円35m）
8 大厩二子塚（前方後円70m?）
9 大厩浅間様（円50m）
10 潤井戸杉山（前方後円60m）
11 長者塚1号（円38m）
12 諏訪台10号（円42m）
13 今富塚山（前方後円110m）
14 海保吉谷前5号（海保3号）（円30m）
15 海保大塚（円60m）
16 畑木向（円 群）
17 姉崎天神山（前方後円130m）
18 山新（円 群）
19 姉崎二子塚（前方後円110m）
20 釈迦山（前方後円93m）
21 山王山（前方後円69m）
22 富士見塚（円25m）
23 妙経寺（円 群）
24 外郭（前方後円? 80m+?）
25 椎津稲荷山（円?40m）
26 安須4号（円38m）
27 安須13号（遠目塚）（円36m）
28 武士2号（鍋塚）（円40m+）
29 北旭台1号（方20m）
30 丸山塚（円37m+）
31 報恩寺3号（前方後円65m）
32 吉野1号（前方後円45m）
33 佐是1号墳（前方後円65m）
34 佐是9号墳（前方後円65m）
35 佐是25号墳（前方後円55m）
36 石奈坂1号墳（円30m）
37 江子田35号（金環塚）（前方後円47m）
38 江子田31号（富士台）（前方後円55m）
39 山小川1号（円17m）
40 柏野SM001（円24m）
41 袖ケ浦市 鼻欠4号（円13m）
42 袖ケ浦市 率土神社南（円36m）
43 木更津市 矢那大原（円10m）



第３図　国分寺台地区周辺の古墳・遺跡



第４図　国分寺台地区周辺の調査遺跡

0　600m
（1／12,000）

は稲荷台遺跡（734）と範囲が重なる（市原市教育委員会 1988）（第 3・4 図）。

稲荷台遺跡の調査はＡ～Ｉ地点が上総国分寺台遺跡調査団（浅利他2003）、Ｊ・Ｋ地点が財団法人市原市文化財センター、Ｌ地点からＲ地点（川上2023）が市原市埋蔵文化財調査センターによって実施されている（第5図）。現在の地点名は、稲荷台遺跡報告（浅利他2003）の各地区・トレンチ名を整理し、近年の調査区を追加したものである（小川2020）。E2地点以北は、山田橋稲荷台遺跡（792）の範囲にあたり分布地図上は別遺跡となるが一括している。

貞観十七年銘墨書土器の出土で知られる稲荷台遺跡は、灰釉陶器・緑釉陶器が大量に出土し、東辺を古代道に画される遺構群が平安時代前期を主体とする官衙的施設と想定されている。面的に広く調査されているが、稲荷台古墳群と地下式横穴墓以外の古墳時代遺構は基本的に検出されていない。北方の稲荷神社外周にあたるＬ地点L8地区には古墳時代前期前半および後半の竪穴建物跡（木對2017）、そのやや南方のＱ地点において古墳時代前期の竪穴建物跡が確認されており（小川・中野2021）、近辺では以後の古墳時代中期前半から墓域化した可能性が高い。国分寺台地区周辺では、中台遺跡（神門古墳群）（鶴岡・櫻井2013）・蛇谷遺跡（東間部多古墳群）（須田他1989）・天神台遺跡（諏訪台古墳群）（小橋他2023）など、弥生時代終末期から古墳時代前期には竪穴建物群に近い位置、ときに入り混じって墳墓が築造される様相を認められるが、古墳時代中期以降には墳墓と居住域の分離が明確化していく。古墳の分布する台地平坦面上に同時期の居住域が近在しないのは、古墳時代中期の空間利用として一般的な傾向と言える。なお、郡本大宮遺跡（山田橋稲荷台遺跡）調査区からは古墳時代後期中葉以降の竪穴建物跡が検出されているが、Ｄ谷側を志向するように見受けられる（浅利1991）。

稲荷台古墳群は、今回報告する1号墳から13号墳が分布地図に記載されているほか、平成11年度の調査で円墳周溝（14号墳）が検出されている（田中他1988、田中2023、鶴岡2000）（第5図）。このうち11・12号墳は、山田橋宮ノ前遺跡（宮前遺跡）で調査された円墳である（対馬他1977）。墳丘直径26mの1号墳は群中で最大である。2・3号墳が中期前葉、5～8号墳が中期、4号墳が後期前半、10～12号墳が後期後半に位置付けられている（田中2023）。E2地区検出の円墳周溝14号墳（墳丘直径11m）は時期不明で、周溝内からウマ歯が検出されている（鶴岡2000）。

古代道が示す交通経路　稲荷台遺跡調査区で捉えられている古代道は路面幅約 6m で整備された官道と見られ、調査区北方では、郡本八幡神社北東の谷とＤ谷の間を抜けた台地上に延長部が検出されている（第 4 図、川上 2026）。南方では、亥の海道貝塚・東千草山遺跡・山田橋表通遺跡・山田橋大山台遺跡において捉えられ、Ｃ谷・Ｄ谷間の台地上を通ることが確認されている。北方推定経路は大字市原地区の光善寺廃寺と国府・郡衙推定地を含む郡本遺跡群を貫き、南方はほぼ台地から降りることなく、大字福増・武士に到達できる。養老川右岸に当たる台地縁辺部には、奈良時代に遡る武士廃寺があり、下総型埴輪の伴う 40m 超の前方後円墳、人見塚古墳も知られる。台地と養老川の間の段丘面には墳丘直径 40m 以上の円墳、武士 2 号墳（鍋塚古墳）も存在する（第 2 図 28）（永沼 1996）。鍋塚古墳を含む武士古墳群は近代以前に新堀の「百塚」（千葉縣市原郡教育會 1916）と呼ばれた可能性が高く、新堀・武士には多数の古墳が継続的に築かれたと見られる。遺跡分布と古代道の検出状況から、光善寺廃寺と武士廃寺を結ぶ経路の存在と、その原型が古墳時代後期以前に遡る可能性が示唆される。また、武士廃寺付近から台地を降りずに南東、大桶方面へ進む経路も併存したと見られる。



昭和 51 年国分寺台土地区画整理事業現況図 500 分の 1・2500 分の 1 地形図をもとに作成

第 5 図　稲荷台古墳群周辺地形

本ルートで注目すべきは、村田川支流神崎川と養老川支流新堀（にいほり）川の中間地点をC谷東側沿いに通ることである。また、武士周辺が、村田川下流を望む台地北端の菊間から、台地を下りずに新堀・武士に至る経路（田中1988）、および神崎川流域に沿う経路の分岐点に当たることも無視できない。新堀川の上流は長柄町刑部であり、允恭天皇の后、忍坂大中姫の名代に由来する刑部郷の遺称地との指摘がある（前之園2013）（第2図）。現在の刑部は、東京湾に注ぐ養老川水系と太平洋に向かう一宮川水系が接続する交通上の要地にあたり、伊甚屯倉・春日部設定の背景にもなる、古代上総国成立以前からの交通路として重視された可能性が高い（田中他1988）。村田川支流神崎川流域には、小田部（おだっぺ）・荻作（おぎさく）・大作（おおさく）という刑部・忍坂に近い発音の大字名があり、犬成の冬込野遺跡周辺において平安時代の銅印「刑房私印」（刑部房□か）が採集されている点からも、関連が注目される。養老川流域にも新堀川合流地点の大坪に橋壁（はしかべ）という小字が記録される（市原市教育委員会1978）。服部（はたおりべ、はとりべ、はっとり）と成田市の羽鳥（はどり）の関係に近い、集団名に由来する経緯が示唆される。

また、大きくさかのぼる弥生時代終末期には、村田川流域、養老川流域に外来系土器が多く流入し、前方後円墳確立以前の墳墓の築造を見るが、北陸系土器が大量に出土した茂原市国府関遺跡（菅谷他1993）など一宮川流域も連動するように似た様相が認められる。一宮川流域に南接する埴生川流域に、能満寺古墳・油殿古墳（第2図b）という房総では少ない古墳時代前期前半の前方後円墳が築造されるのも弥生時代終末期からの地域動向の帰結と考えられる。

さらに、現在、新堀川が養老川と合流する付近に位置する大字海士有木（近世以前、海士と有木は別村落）は古代海部郷に由来する地名であり、太平洋側の「駿河以東で唯一の海部郷」（前之園2013）とされる。養老川下流域には関連する可能性のある地名として、姉崎（姉ヶ崎）・安須（あず。新堀の対岸）を挙げられ、古代以前に水上交通に長けた集団の拠地があったと見られる。

房総半島東京湾側中央に位置する交通経路の重要地点だったことが、稲荷台古墳群、国分寺台地区周辺地域における遠方との結びつきと外来文化流入の前提になったと考えられる。水上と陸上の経路が交差・接続し、房総半島両岸の水系をつなぐ地域という村田川・養老川流域の地形的特質は、中世以前の遺跡分布に大きく影響を及ぼしたと考えられる。

第3節　発掘調査と記録の概要

平面図は基本的に平板測量による。基準点測量は行われておらず、記録方位は磁北に基づく。遺構配置図は1/100、墳頂部平面図は1/20で作成されている。等高線図は20cm単位で、墳丘表土掘下げ前の図と、墳丘盛土露出・周溝掘下げ後の図がいずれも1/100で作成されている（第6図）。埋葬施設については平面・断面とも1/10で、北埋葬施設副葬品出土状況図は1/2で作成されている。土層断面は1/20で作成され、黒色土とロームの多寡粗密を基本とした土層注記が残されている。

遺物注記は国分寺台地区各調査と同様、ドット取り上げは、土器100X、石製品200X、金属製品300X、土製品400X、瓦900X、一括取り上げ遺物全般には600Xが付与されている。

遺構写真は4×5版（航空写真）、ブローニー版（6×9）、35mm版のフィルムで撮影されている。モノクロネガ・カラーポジがあり、モノクロが主体である。位置・撮影日時等を写し込んだコマが含まれないため、撮影台帳となる何らかの記録があったと見られるが所在不明である。

第２章　検出遺構と出土遺物

第１節　墳丘と周溝

調査前の墳丘　稲荷台１号墳は、周溝埋没後に墳丘部まで竪穴建物跡を主体とする古代遺構群の進入を受けるが、墳丘自体は削平されずに建物群内に取り込まれる形で遺存している（浅利他 2003）（第５図）。その後、墳丘は風化流失と中近世以降の耕作により削り込まれていくが、頂部に祠が置かれて、塚として維持されたため、かろうじて埋葬施設を包蔵する墳頂部が残存する。ただ、結果として墳頂面東側には登拝通行に伴う凹部が形成されており、遺存状態が良いとは言えない（第６図・図版 50）。

１号墳以外の遺構・撹乱　全体図には竪穴建物跡と見られる 001 号から 013 号が記録されるが、詳細は不明である（第７図）。少なくとも 001 号・012 号・013 号にはカマドが伴っている。いずれも平面形と周辺遺構の分布傾向から平安時代に属すると見られる。竪穴 012 号の床面は周溝覆土の黒色土層中に設けられている。墳丘北側の 004 号の位置は平安時代にすでに墳丘がこの位置まで失われていたか、元々、２段築成の下段テラス面が存在した可能性を示唆する。

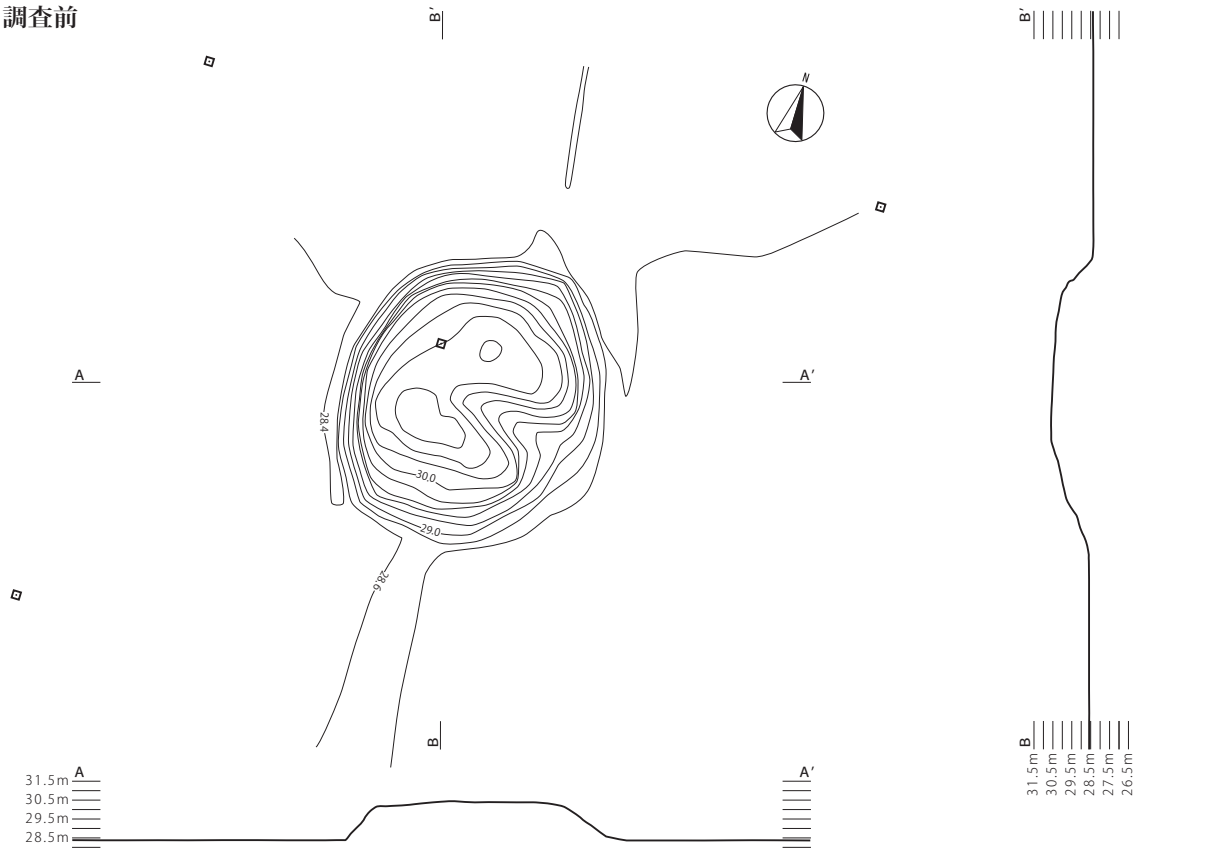
周溝北部と接するように掘られた溝001号についても詳細は不明だが、竪穴004号と軸向きが揃うため、平安時代以降の所産と思われる。長方形を呈する多数の穴はいわゆるイモ穴で近現代の耕作に伴う撹乱坑（Ｋと表示）である。散在する直径1mを超える円形土坑は近世土坑墓の可能性があるが、これについても詳細不明である。

周溝　周溝・墳丘を掘下げるにあたっては、外周から墳丘中心に向かって設定したトレンチを掘り下げ周溝範囲と深度を確認し、土層断面を記録している（図版 51）。東西方向、南北方向のセクションベルトは十字形に設定され、ベルト壁面は、周溝と墳丘、東と西、北と南で向きが異なる（第７・９～ 12 図）。第８図に示す断面図（Ａ－Ａ’・Ｂ－Ｂ’）はそれらを反転合成したものである。現地表から遺構検出面のソフトローム層までの深さは 40 ～ 60cm 程度である。

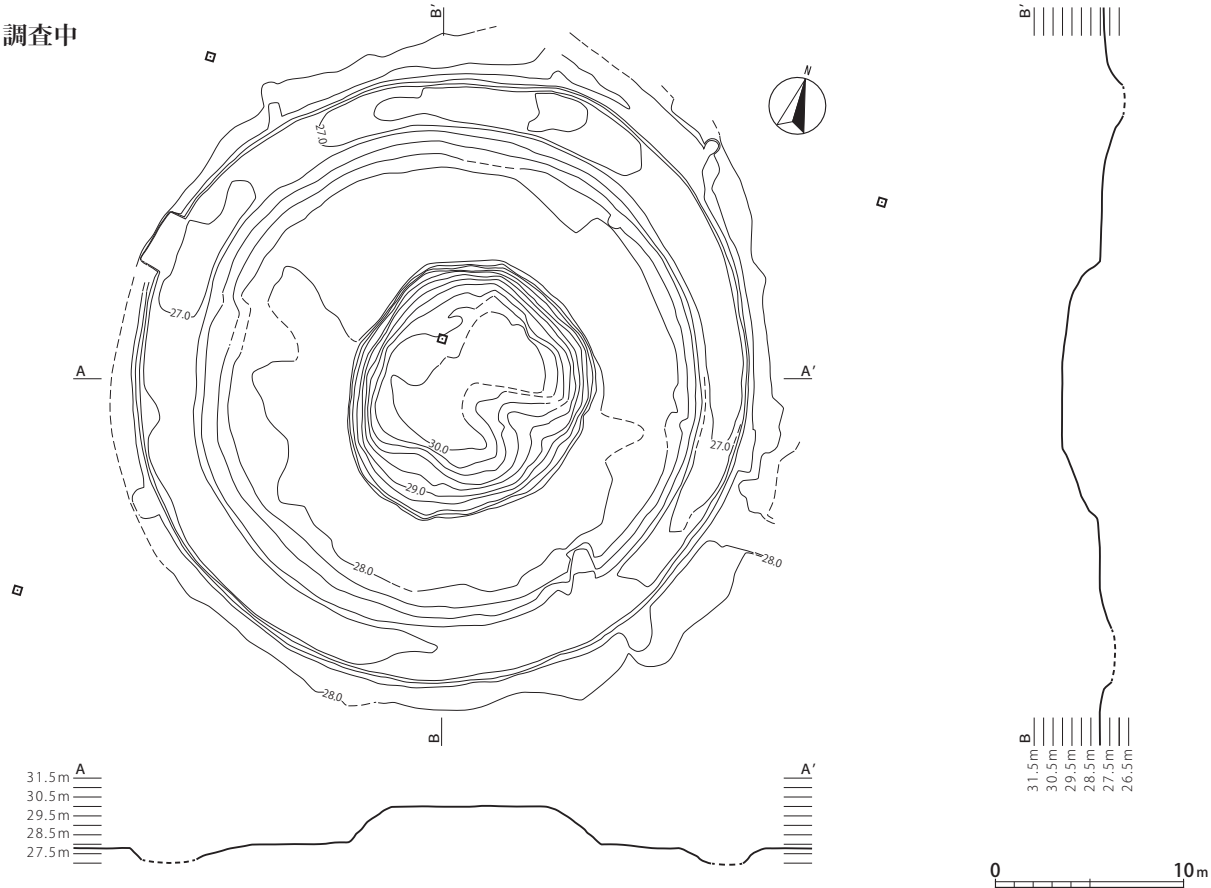
周溝北側（第９図）　確認トレンチ内で覆土下層から須恵器杯身（第17図1、図版53）が出土している。周溝底面から6cmの高さの検出で密着しているわけではないが、中央付近の初期堆積土中から正位で検出されている。覆土は、墳丘側最下層に地山風化土（16層）がある他は、黒色土主体にロームの混じる土層が自然堆積している。掘方は台形で底面幅2.2m、外周地山からの深度は1.2mである。墳丘側の上端は0.4mの位置まで外周側と同様の角度で立ち上がった後、内側下端から2.8mの位置までなだらかに続く。周溝全体で同様の断面形態を示すことから、墳丘最下段は地山削り出しと連続的に形成されたと見られる。平面図（第８図）の周溝内側上端の内側のケバ付き線が削り出しによる傾斜変換位置を示す。全体の周溝幅は3.2 ～ 3.8m、周溝上端内径25.8 ～ 26.5m、同外径32.6 ～ 33.3mである。北東－南西方向の方が北西－南東方向より若干広くなっている。

周溝南側（第９図）　断面形は台形を呈し、底面幅2.3m、外周地山からの深度は0.9mである。最下層に初期堆積のローム主体土が見られるほかは、黒色土（８～ 9.3層）が自然堆積する。ベルト東側1mの位置から、東西2.6mの範囲に土師器高杯３点が出土している（第８図、第19図24・25・26、図版52）。出土レベルをエレベーションに投影したのが第13図である。覆土下位において、24・25が正位、26が倒位で検出されている。付近の周溝底面レベルを27.2mと想定すると、24が19cm、

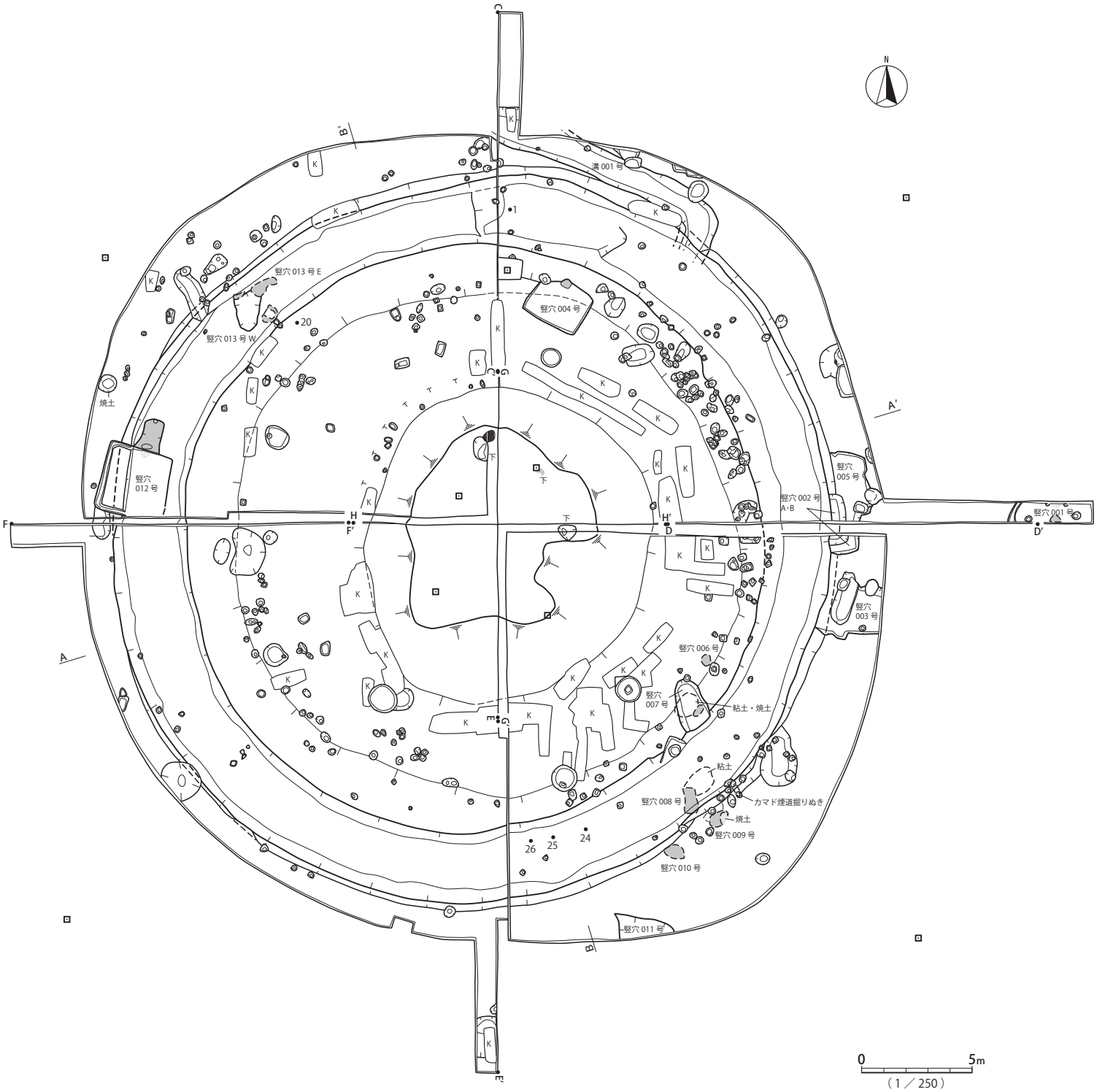
調査前



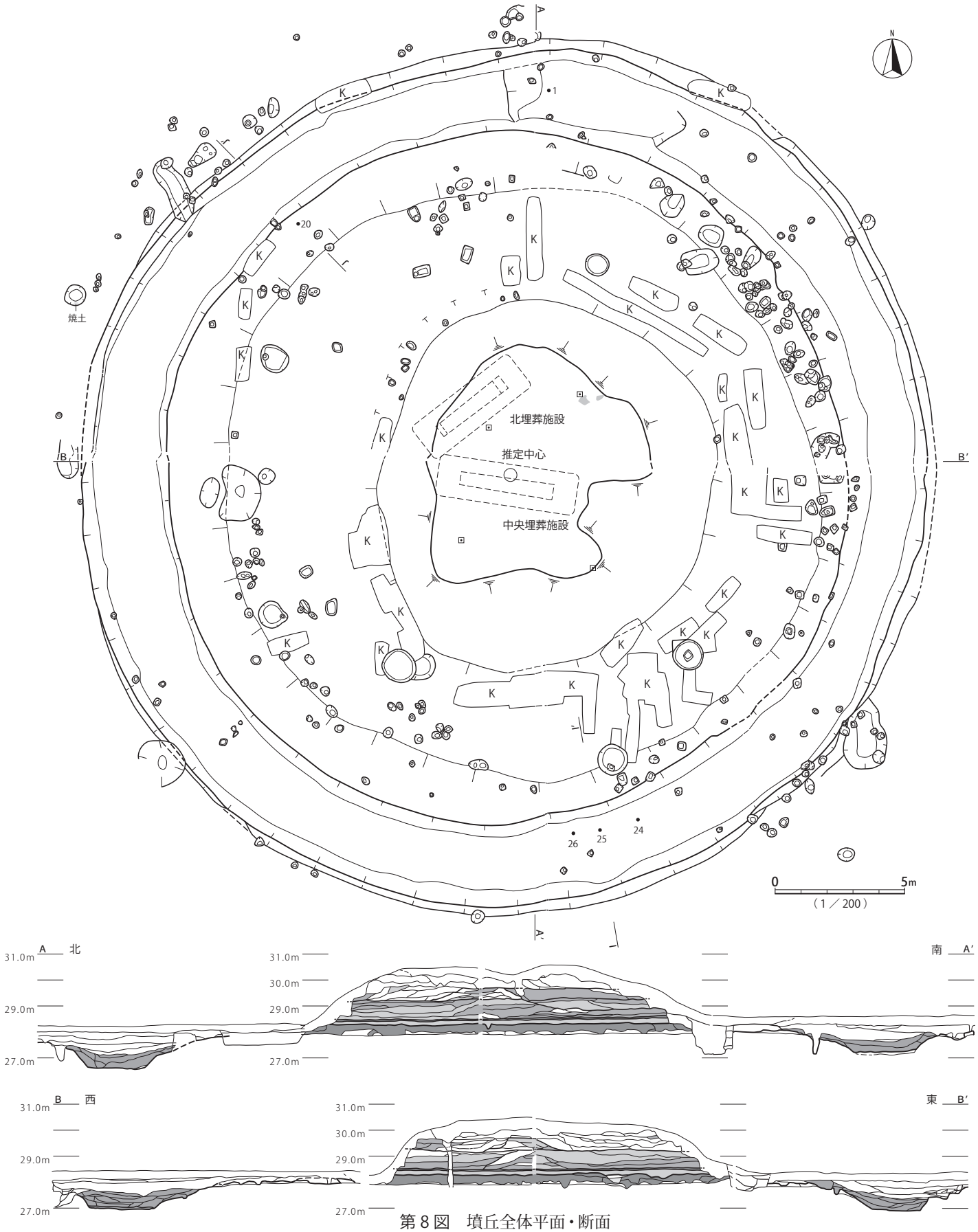
調査中



第6図　墳丘等高線

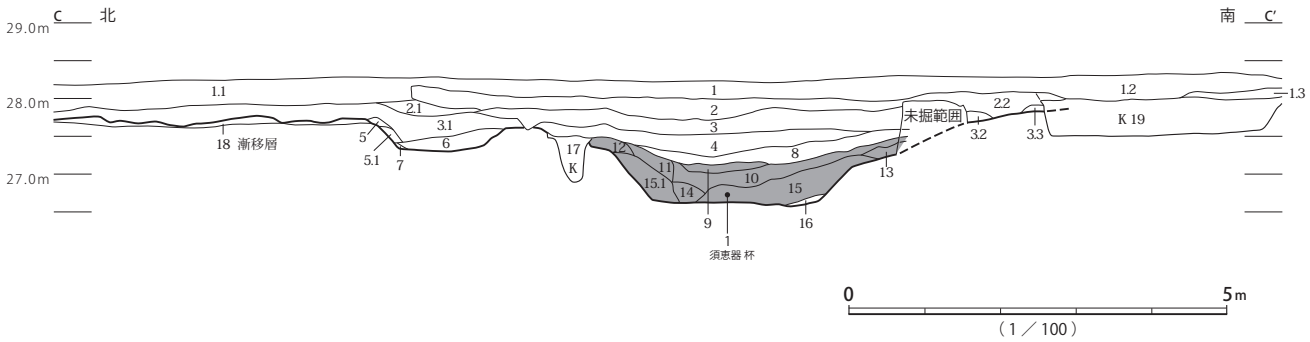

N
溝 001 号
竪穴 013 号 E
竪穴 013 号 W
竪穴 004 号
焼土
竪穴 012 号
竪穴 005 号
竪穴 002 号 A・B
竪穴 001 号
竪穴 003 号
竪穴 006 号
竪穴 007 号
粘土・焼土
粘土
竪穴 008 号
カマド煙道掘りぬき
焼土
竪穴 009 号
竪穴 010 号
竪穴 011 号
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
H
H'
0
5m
（1／250）

第 7 図　調査区全体



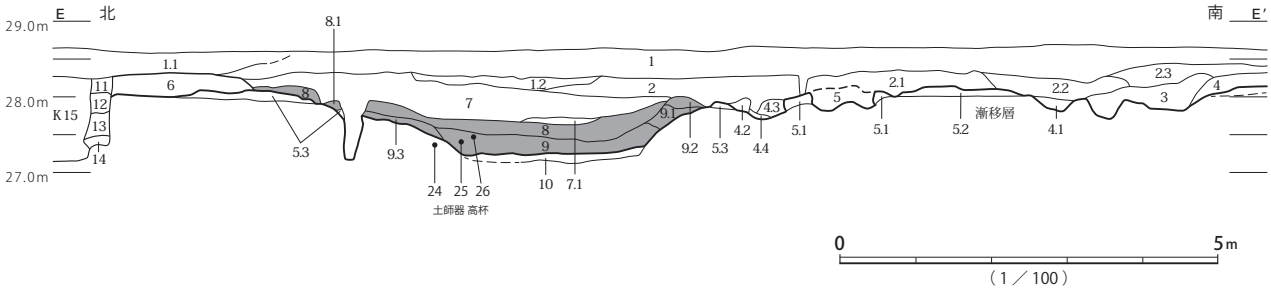
第 8 図　墳丘全体平面・断面

周溝北側



1　耕作土　暗黄褐　ソフトローム混じりの黒色土
1.1　耕作土　黒褐　ソフトローム混じりの黒色土　軟質
1.2　耕作土　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)　ローム細粒多
1.3　耕作土　ソフトローム混じりの黒色土
2　農道跡　ソフト・ハードローム混じりの黒色土(1 ～ 2mm 粒多)　堅緻
2.1　黒褐～暗黄褐　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)　やや締まる
2.2　1 層より黒味が弱い　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
細粒は目立たない　やや締まる
3　暗黄褐　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
3.1　下層より褐色味ある　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)　やや締まる
3.2　黒色土主体(ソフト・ハードローム粒少)
3.3　黒色土主体(ハードローム粒少)
4　3 層よりやや黒味が強い　ソフトローム混じりの黒色土　ローム細粒は目立たない
5　溝覆土？　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
5.1　溝覆土？　黒色土混じりのソフトローム　ローム細粒混じる
6　溝覆土　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　2 ～ 3mm のローム細粒多
7　溝覆土？　黒色土・ハードローム混じりのソフトローム
8　周溝覆土(墳丘崩落土？)　下層より褐色味ある　ソフト・
ハードローム混じりの黒色土　ローム細粒混じる
9　周溝覆土(墳丘崩落土？)　やや褐色味　ハードローム混じりの黒色土
(ソフトローム少)　ローム細粒多
10　周溝覆土　黒味強い　黒色土(ハードローム少)　上層との境界が明瞭
11　周溝覆土　黒味強い　ハードローム混じりの黒色土　ローム粒多　上層との境界が明瞭
12　周溝覆土　ハードローム混じりの黒色土(ソフトローム少)　ローム中・細粒混じる
13　周溝覆土　15 層よりやや黒い　黒色土・ハードローム混じりのソフトローム主体土
14　周溝覆土　ハードローム混じりの黒色土ローム中・大粒多
15　周溝覆土　暗黄褐　黒色土混じりのソフト・ハードローム混合層
15.1　周溝覆土　暗黄褐～黄褐　ハードローム・黒色土混じりのソフトローム主体土　ボソボソ
16　周溝覆土(地山風化土)　ソフトローム・黒色土混じりのハードローム主体土　軟質
17　撹乱　黒色土・ハードローム混合層　ローム大粒多　軟質
18　地山漸移層　黒色土混じりのソフトローム主体土
19　撹乱(イモ穴)　黒色土混じりのハードローム主体層　ローム中・大粒

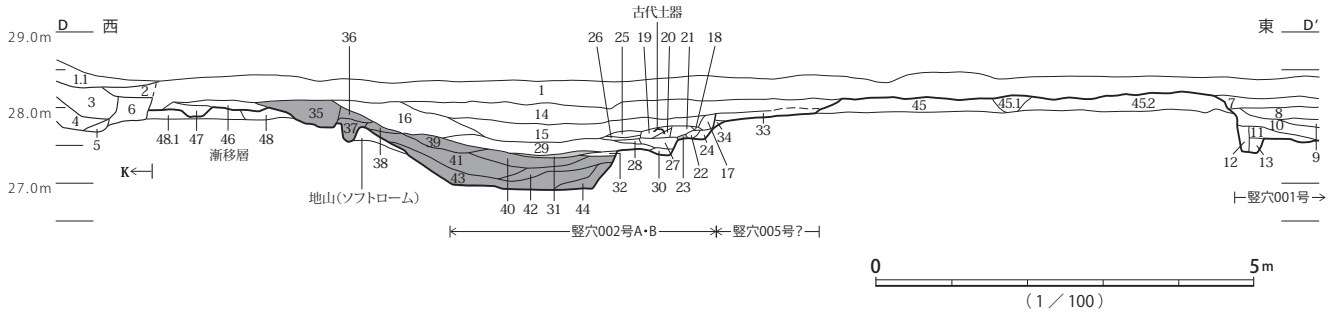
周溝南側



1　耕作土　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)　ローム細粒　締まる
1.1　耕作土(農道)
1.2　耕作土　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)　ローム細粒少量
2　漸移層　褐色味強い　ソフトローム混じりの黒色土
2.1　漸移層　2.2 層より黒味強い　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
ローム細粒少量
2.2　漸移層　1 層より黒味強い　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
2.3　漸移層　黄色味強い　ソフトローム混じりの黒色土
3　漸移層(イモ穴掘削土)　ソフトローム・黒色土混合層(縞状)
4　漸移層　2.3 層より黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
4.1　漸移層　2.3 層より黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
4.2　漸移層　褐色味がある　ソフトローム混じりの黒色土
4.3　漸移層(撹乱)　ハードローム混じりの黒色土
4.4　漸移層　黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
5　漸移層　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層　ローム中粒
5.1　漸移層　ソフトローム(黒色土少)
5.2　漸移層(地山風化層)　黒色土混じりのソフトローム
5.3　漸移層(地山風化層)　黒色土混じりのソフトローム
6　旧表土残存部？　黒褐　ハードローム混じりの黒色土
7　漸移層～周溝覆土？　褐色味強い　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
7.1　周溝覆土？　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
8　周溝覆土　黒味強い　黒色土(ハード・ソフトローム少)　上層との境界が明瞭
8.1　周溝覆土　ソフトローム混じりの黒色土
9　周溝覆土　上層より褐色味を帯びる　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　ローム細粒多
9.1　周溝覆土　黄色味強い　黒色土混じりのソフトローム(ハードローム少)　ローム細粒多
9.2　周溝覆土？　黒味強い　ソフトローム混じりの黒色土　ハードローム細粒
9.3　周溝覆土　8 層より黒味強い　黒色土(ハード・ソフトローム少)
10　周溝覆土(初期掘削土堆積？)～地山風化土　ソフトローム混じりのハードローム(黒色土少)
11　イモ穴　ハードローム混じりの黒色土(大～中粒)　軟質
12　イモ穴　黄色味強い　ソフトローム・黒色土混じりのハードローム
ローム中・細粒　ボソボソ
13　イモ穴　ハードローム混じりの黒色土　大～小粒
14　イモ穴　黒色土混じりのハードローム　ロームブロック(大～中粒主体)　締まる
15　撹乱　イモ穴　ハード・ソフトローム混じりの黒色土　ローム細粒　ローム大粒少

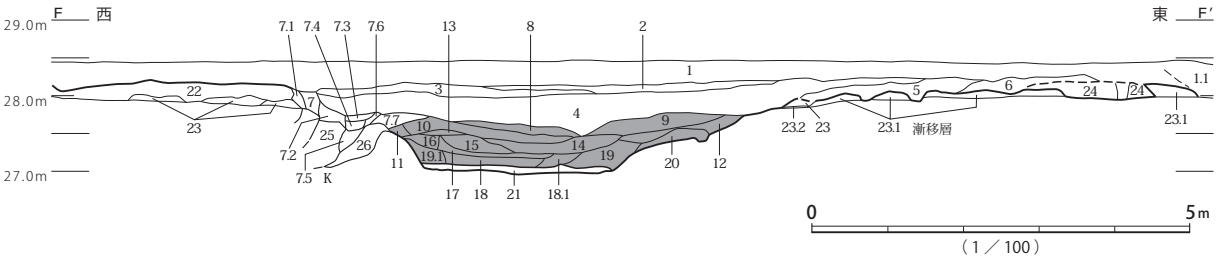
第 9 図　周溝土層断面（北側・南側）

周溝東側



1 耕作土　灰色がかった黒色土(ソフトローム少)
ローム細粒はほとんど含まない
1.1 表土　黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
2 撹乱　イモ穴　黒色土・ハードローム混合層
3 撹乱　イモ穴?　ハードローム混じりの黒色土　ローム細粒目立つ
4 撹乱土　黒味強い　黒色土(ソフトローム少)　軟質
5 撹乱土　ハードローム混じりの黒色土　ローム微粒混じる
6 撹乱　イモ穴　ハードローム混じりの黒色土
ローム中～細粒(一部大)混じる
7 漸移層　1層より黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
焼土粒少量混じる　堅緻
8 竪穴 001 覆土　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
ローム細粒混じる　焼土粒少量
9 竪穴 001 覆土　ソフトローム混じりの黒色土(粘土少)
粘土粒少量
10 竪穴 001 覆土　黄色味帯びる　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
ローム中粒・焼土・粘土混じる
11 竪穴 001 覆土　黒味強い　黒色土(ハードローム少)
ローム細粒・焼土粒ごく少量混じる
12 竪穴 001 床面周溝覆土　黒色土(ソフトローム少)　軟質
13 竪穴 001 床面周溝覆土　黒色土・ハードローム混合層　充填層
14 遺構覆土～漸移層　1層より明瞭に黒い
ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)　やや軟質
15 竪穴 002 覆土　やや黄色味帯びる　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
ローム微粒(1mm 弱)やや目立つ
16 竪穴 002 覆土～周溝覆土?　やや黒味強い　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
ローム細粒(2 ～ 3mm)多い
17 竪穴 002 覆土　黒色土(ソフトローム少)
18 注記なし
19 竪穴 002 カマド覆土　黒色土混じりの焼土・粘土混合層
20 竪穴 002 カマド覆土　粘土・焼土混合層
21 竪穴 002 カマド覆土　黒色土・粘土混合層(焼土少)
22 竪穴 002 カマド覆土　粘土・黒色土混合層(焼土少)
23 竪穴 002 カマド覆土　粘土層
24 竪穴 002 カマド覆土　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
25 竪穴 002 カマド覆土　焼土・黒色土混じりの粘土
26 竪穴 002 カマド覆土　黒色土(粘土少)
27 竪穴 002A 床面構築土　ハードローム・黒色土混合層(粘土少)
28 竪穴 002A 床面構築土　ハードローム
29 竪穴 002A 床面構築土～周溝覆土　黄色味強い　黒色土・
ソフトローム混合層(ハードローム少)　ローム粒(中～細粒)多い
30 竪穴 002B 床面構築土　ハードローム・黒色土混合層　埋土
31 竪穴 002B 床面構築土　粘土・ハードローム混じりの黒色土
32 竪穴 002B 床面構築土　ハードローム
33 竪穴 005 覆土?　14 層より黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
34 竪穴 005 覆土～漸移層　ソフトローム・黒色土混合層
35 周溝覆土　やや黄色味帯びる　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
ローム細粒(2 ～ 3mm)多い
36 周溝覆土　黒色土・ソフトローム混合層(ハードローム少)
37 周溝覆土?　ハードローム混じりの黒色土
38 周溝覆土　ハードローム・黒色土混合層
39 周溝覆土　ソフトローム混じりの黒色土　ローム粒多い
40 周溝覆土　黒味強い　黒色土(ソフト・ハードローム少)
41 周溝覆土　黒味強い　ハードローム混じりの黒色土　ローム細粒多い
42 周溝覆土　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　ローム(中～細粒)混じる
43 周溝覆土　黒色土混じりのソフトローム主体土　ハードローム混じる
粗粒状組成目立つ
44 周溝覆土　黄色味強い　黒色土混じりのソフトローム主体土
ハードローム混じる　粗粒状組成目立つ
45 地山漸移層　黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
ローム細粒少し混じる　締まる
45.1 地山漸移層　やや黄色味帯びる　ソフトローム混じりの黒色土
45.2 地山漸移層　少し黄色味帯びる　耕作土の影響を受ける
46 地山漸移層　ソフトローム混じりの黒色土　ハードロームは伴わない
47 地山漸移層　やや黒味を帯びる　ソフトローム混じりの黒色土
48 地山漸移層　黒色土混じりのソフトローム
48.1 地山漸移層　ソフトローム(黒色土少)

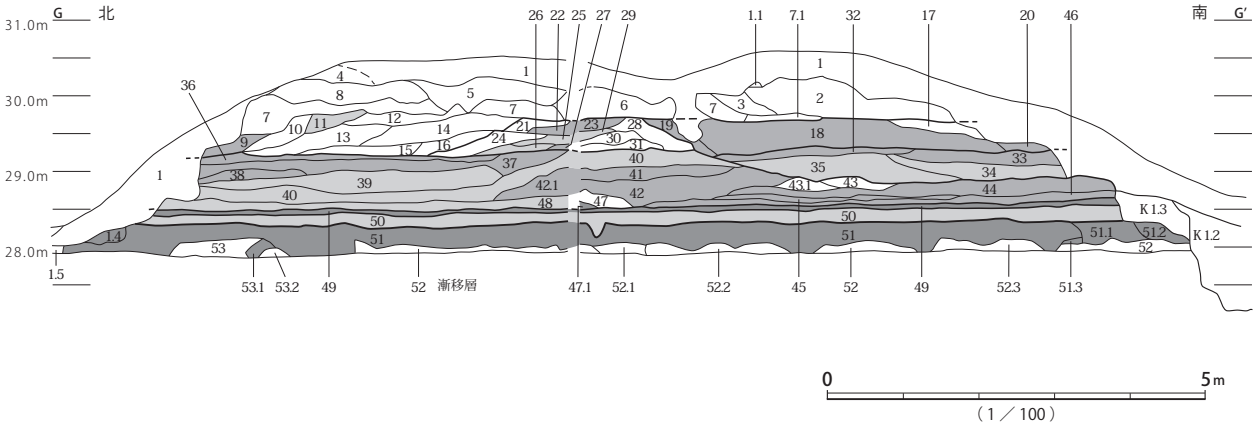
周溝西側



1 耕作土　ソフトローム混じりの黒色土　軟質
1.1 耕作土　黒味強い　黒色土(ソフトローム少)　軟質
2 漸移層　黒色土(ハードローム少)　ローム細粒混じる
3 漸移層　やや黄色味強い　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
4 周溝覆土　暗黄褐色　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
ハードローム細粒少し混じる
5 周溝覆土～漸移層　やや黄色味帯びる　ソフトローム混じりの黒色土　堅緻
6 周溝覆土～漸移層　黒味強い　ソフトローム混じりの黒色土主体層
ソフトローム粒少し混じる
7 撹乱　黄褐色　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
7.1 撹乱?　やや黒味帯びる　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
7.2 撹乱?　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　ローム細粒混じる
7.3 撹乱?　黒色土(ハードローム少)
7.4 撹乱?　ハード・ソフト・ハードローム混じりの黒色土
7.5 撹乱?　ハード・ソフト・ハードローム混じりの黒色土　ローム細粒混じる
7.6 撹乱?　黒色土
7.7 撹乱?　黒味強い　ハード・ソフト・ハードローム混じりの黒色土
8 周溝覆土　黒色土混じりのソフト・ハードローム混合層　ローム粒(中～細粒)混じる
9 周溝覆土　やや黒味を帯びる　暗黄褐色　ソフトローム混じりの黒色土
ローム細粒はほとんど含まれない
10 周溝覆土　14 層より黄色味強い　黒色土(ソフトローム少)
ローム粒(中～細粒)混じる軟質
11 周溝覆土　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層　ローム細粒多量　軟質
12 周溝覆土　9 層より黒味強い　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
ローム細粒混じる
13 周溝覆土　黒色土(ソフトローム少)
14 周溝覆土　黒味強い　ハードローム混じりの黒色土(ソフトローム少)　ローム細粒多量
15 周溝覆土　黒味強い(14 層より黒い)　黒色土(ハードローム少)　焼土細粒少量
16 周溝覆土　15 層より黄色味強い　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層
軟質
17 周溝覆土　黒色土・ソフトローム混合層(ハードローム少)　焼土細粒少し混じる
18 周溝覆土　やや黒味強い　黒色土・ハードローム混じりのソフトローム　軟質
粗粒状組成
18.1 周溝覆土　黒色土・ハードローム混じりのソフトローム　ローム細粒混じる
19 周溝覆土　ハードローム・黒色土混じりのソフトローム　粗粒状組成　軟質
19.1 周溝覆土　黄色味強い　ハードローム・黒色土混じりのソフトローム
粗粒状組成　軟質
20 周溝覆土　黒色土混じりのソフトローム主体土(ハードローム混じる)　ローム粒
(大～細粒)混じる
21 周溝覆土　ハードローム(黒色土少)
22 旧表土?～地山漸移層　黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
23 地山漸移層　黒色土混じりのソフトローム
23.1 地山漸移層　ソフトローム(黒色土少)
23.2 地山漸移層　ソフトローム
24 耕作土?～地山漸移層　黒色土・ソフトローム混合層　ソフトローム粒混じる
堅緻　人為的な層か
25 撹乱?～地山漸移層　黒色土・ハードローム混じりのソフトローム
26 撹乱?～地山漸移層　黒色土混じりのハードロームを含むソフトローム主体土
ローム細粒多量

第 10 図　周溝土層断面(東側・西側)

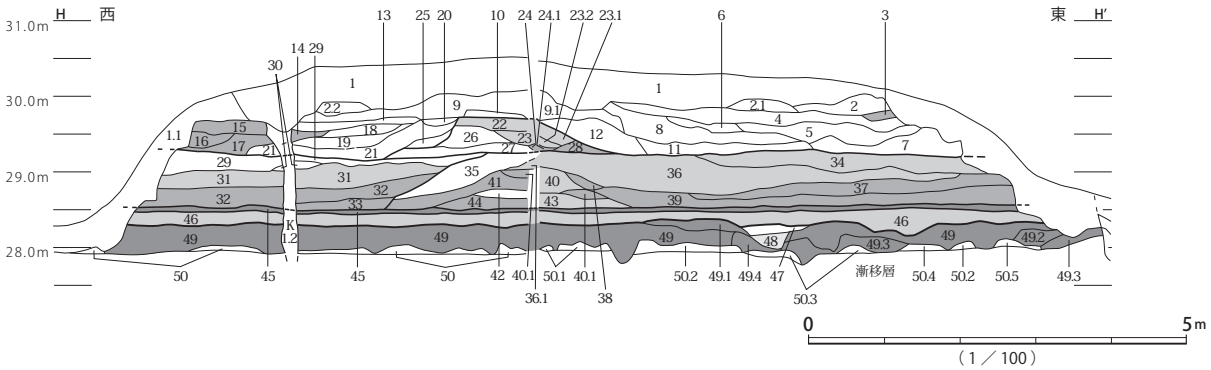
墳丘南北断面



1　盛土風化撹乱層　ソフト・ハードローム混合層(ソフト主体)　ローム大粒多量
1.1　風化層　ハードローム混じりの黒色土　ローム粒(中～大粒)
1.2　撹乱　イモ穴
1.3　撹乱　下層より黄色味帯びる　ソフトローム混じりの黒色土
1.4　風化層　黒色土(ソフトローム少)
1.5　旧表土風化層?　黒色土　軟質
2　2次盛土　風化層　ハード・ソフトローム混合層(黒色土少)
3　2次盛土　やや黒味帯びる　黒色土混じりのソフト・ハードローム混合層
ローム粒(中～細粒)混じる
4　2次盛土　ハードローム(ソフトローム少)
5　2次盛土　撹乱　黒色土混じりのソフトローム　軟質
6　2次盛土　ソフトローム混じりのハードローム　堅緻
7　2次盛土　ハードローム主体層
7.1　2次盛土　ハードローム(ソフトローム少)
8　2次盛土　一部撹乱　ソフトローム混じりのハードローム　ソフトローム粒やや多い
やや軟質
9　2次盛土　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
10　2次盛土　ソフトローム混じりのハードローム(黒色土少)　ローム粒(中～大粒)混じる
11　2次盛土　ハードローム混じりの黒色土・ソフトローム混合層　ローム中粒混じる
12　2次盛土　ソフト・ハードローム混合層(黒色土少)　ソフトローム粒多い
13　2次盛土　黒色土混じりのソフト・ハードローム混合層(ソフト主体)
ソフトロームやや多い
14　2次盛土　ハードローム主体層(ソフトローム少)
15　2次盛土　ハードローム主体層(黒色土微量)
16　2次盛土　ハードローム主体層
17　2次盛土　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層
18　2次盛土　暗黄褐色　黒味強い　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
ローム粒(中～細粒)
19　2次盛土　黒味強い　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
20　2次盛土　盛土～風化層　黒色土(ソフトローム少)
21　2次盛土(核部)　ソフトローム混じりのハードローム・黒色土混合層(ハード主体)
混合層黒色土多量　炭化物混じる
22　2次盛土(核部)　黒色土・ハードローム混合層(ソフトローム少)(黒色土主体)
ローム粒(中～細粒)
23　2次盛土(核部)　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
24　2次盛土(核部)　黒色土・ソフトローム混じりのハードローム　ローム中粒混じる
黒色土粒やや多い
25　2次盛土(核部)　ソフトローム混じりの黒色土・ハードローム混合層
ローム中粒混じる
26　2次盛土(核部)　やや黄色味帯びる　ハードローム混じりの黒色土
・ソフトローム混合層
27　2次盛土(核部)　ハードローム混じりの黒色土
28　2次盛土(核部)　黒味やや強い　ハードローム・黒色土混じりのソフトローム　締まる
29　2次盛土(核部)　ソフトローム混じりの黒色土・ハードローム混合層
30　2次盛土(核部)　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層
31　2次盛土(核部)　黒色土混じりのソフト・ハードローム混合層
32　1次盛土(上層)　ハード・ソフトローム混じりの黒色土　18層よりローム
・黄褐色土やや多い
33　1次盛土(上層)　32層より黒味強い　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
ローム粒(中～大粒)
34　1次盛土(上層)　33・44層より黄色味強い　ソフト・ハードローム混合土を
含む黒色土主体層　ローム中粒混じる
35　1次盛土(上層)　42層より黒味強い　ソフトローム混じりの黒色土・
ハードローム混合層(黒色土主体)
ローム粒(中～大粒)
36　1次盛土(作業面)　37層より黒味強い　黒色土・ハードローム混合層(黒色土主体)
ローム粒(中～細粒)　硬化面
37　1次盛土　39層よりやや黒味帯びる　ソフトローム混じりの黒色土・
ハードローム混合層(黒色土主体)　ハードローム少量混じる
38　1次盛土　37・39層より黒味強い　ハード・ソフトローム混じりの黒色土　ローム粒
(中～細粒)
39　1次盛土　ソフトローム混じりの黒色土・ハードローム混合層(黒色土主体)　ローム粒
(中～大粒)多量
40　1次盛土　暗褐色　黒味強い　ソフトローム混じりの黒色土・ハードローム混合層
(黒色土主体)　ローム中粒多く混じる
41　1次盛土(核部)　ハード・ソフトローム混じりの黒色土　ローム粒(中～細粒)多量
42　1次盛土(核部)　41層よりやや黄色味帯びる　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
ローム細粒多量
42.1　1次盛土(核部)　49層とほぼ同色　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　ローム中粒多量
43　1次盛土　ソフトローム混じりのハードローム・黒色土混合層　ローム粒(中～大粒)混じる
43.1　1次盛土　ソフトローム混じりのハードローム・黒色土混合層　ローム粒(大～中粒)混じる
44　1次盛土　暗黄褐色　ハード・ソフトローム混じりの黒色土　ローム中粒
45　1次盛土　黒味強い　ハードローム混じりの黒色土
46　1次盛土　黒色土(ソフトローム少)
47　1次盛土　黒色土混じりのハード・ソフトローム混合層
47.1　1次盛土　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
48　1次盛土　黒味が強い　黒色土・ソフトローム混合層(ハードローム少)
ローム中粒混じる
49　旧表土～整地層　きわめて黒味が強い　黒色土
50　旧表土～整地層　暗褐色　黒色土混じりのソフトローム　比較的堅緻
51　旧表土　黒色土(ソフトローム少)
51.1　旧表土　51層より黄色味帯びる　ソフトローム混じりの黒色土
51.2　旧表土　ソフトローム混じりの黒色土　やや軟質
51.3　旧表土　黒色土・ソフトローム混合層
52　地山漸移層　黒色土混じりのソフトローム
52.1　地山漸移層　ソフトローム・黒色土混合層
52.2　地山～地山漸移層　ソフトローム
52.3　地山～地山漸移層　黒味強い　黒色土混じりのソフトローム
53　地山漸移層　ソフトローム・黒色土混合層(ソフトローム主体)
53.1　地山漸移層　黒色土(ソフトローム少)
53.2　地山漸移層　黒色土・ソフトローム混合層(黒色土主体)

第11図　墳丘土層南北断面

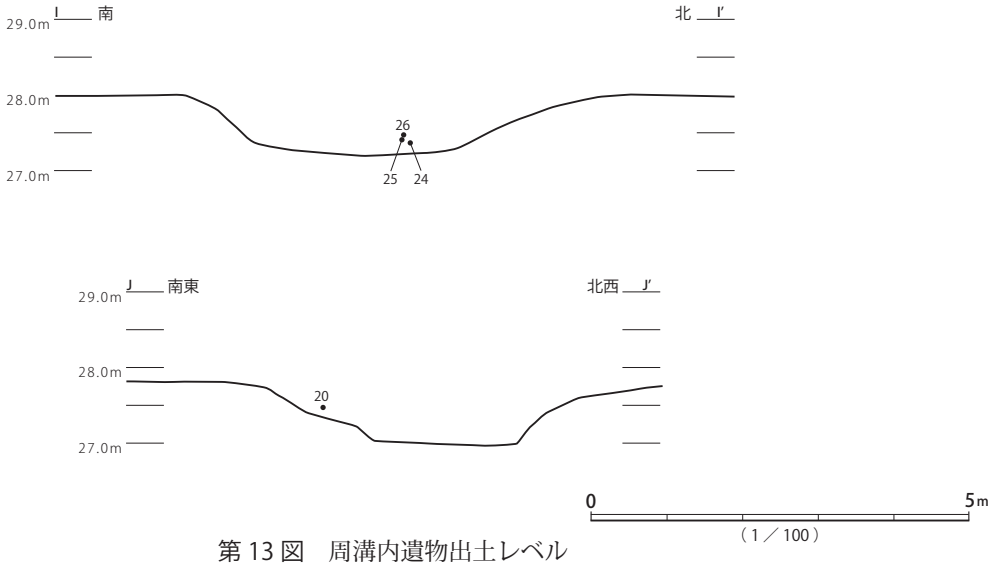
墳丘東西断面



1　盛土風化撹乱層　ソフトローム・黒色土混合層　ハードローム粒(中～大粒)
1.1　盛土風化撹乱層　ソフトローム・黒色土混合層　ハードローム細粒多量
1.2　撹乱
2　2次盛土　ハード・ソフトローム混合層(黒色土少)　ローム大粒多量
2.1　2次盛土　ソフトローム・黒色土混じりのハードローム　ローム大粒混じる
2.2　2次盛土　ソフトローム混じりのハードローム(黒色土少)
3　2次盛土　ハードローム混じりの黒色土
4　2次盛土　暗黄褐色　黒色土・ハード・ソフトローム混合層(ソフトローム主体)　ローム粒(中～大粒)多量
5　2次盛土　暗黄褐色　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層　ローム粒(大～細粒)やや多い
6　2次盛土　ハード・ソフトローム混合層(黒色土少)
7　2次盛土　黄色味帯びる　黒色土混じりのソフト・ハードローム混合層(ソフト主体)　ローム中粒
8　2次盛土　ハードローム主体層(ソフトローム少)
9　2次盛土　ハードロームブロック主体層(ソフトローム少)
9.1　2次盛土　ハード・ソフトローム混合層(黒色土少)　ソフトローム中粒
10　2次盛土　ソフトローム混じりのハードローム(黒色土少)
11　2次盛土　ハードローム(ソフトローム・黒色土少)　ハードローム大粒
12　2次盛土　やや黒味がかる　黒色土混じりのハード・ソフトローム混合層
13　2次盛土　ハードローム・黒色土・ソフトローム混合層(ハードローム主体)
14　2次盛土　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　ローム中粒
15　2次盛土　黒味強い　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
16　2次盛土　黒色土(ソフトローム少)
17　2次盛土　ハードローム混じりの黒色土(ソフトローム少)　ローム粒(中～細粒)
18　2次盛土　ハード・ソフトローム混合層
19　2次盛土　ハードロームブロック主体層(ソフトローム・黒色土少)
20　2次盛土　ソフト・ハードローム混合層(黒色土少)
21　2次盛土　ハードロームブロック主体層
22　2次盛土(核部)　ハードローム混じりの黒色土・ソフトローム混合層
23　2次盛土(核部)　黒味強い　ソフトローム混じりの黒色土・ハードローム混合層　ローム中粒多量
23.1　2次盛土(核部)　ソフトローム混じりの黒色土・ハードロームブロック混合層
23.2　2次盛土(核部)　黒色土・ハード・ソフトローム混合層
24　2次盛土(核部)　ソフトローム・黒色土混合層　ローム細粒混じる
24.1　2次盛土(核部)　ハードローム混じりの黒色土
25　2次盛土　黒色土混じりのハード・ソフトローム混合層
26　2次盛土(核部)　黒味強い黄褐色　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層(ソフトローム主体)　ローム中粒混じる
27　2次盛土(核部)　黒味がやや強い　黒色土混じりのソフト・ハードローム混合層(ソフト主体)
28　2次盛土(核部)　ソフトローム混じりの黒色土(ハードローム少)
29　1次盛土　暗黄褐色　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層　ローム中粒多量　堅緻
30　1次盛土　ソフトローム混じりのハードローム・黒色土混合層　ローム粒(大～細粒)
31　1次盛土　ソフトローム混じりの黒色土・ハードローム混合層　ローム粒(大～中粒)
32　1次盛土　ハード・ソフトローム混じりの黒色土　31層よりロームが少なく黒味が強い
33　1次盛土(核部?)　黒味やや強い　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
34　1次盛土　36層よりやや黒味強い　黒色土・ソフト・ハードローム混合層　ローム中粒もやや少ない
35　1次盛土(核部)　41層よりやや黄色味帯びる　ハードローム混じりのソフトローム・黒色土混合層　ローム中粒
36　1次盛土　暗黄褐色　黒色土・ハード・ソフトローム混合層　ローム中粒目立つ
36.1　1次盛土(核部)　暗黄褐色　黒色土・ソフトローム混合層(ハードローム少)
37　1次盛土　黒味がやや強い　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　ローム粒(中～大粒)(中粒主体)
38　1次盛土(核部?)　ソフト・ハードローム混じりの黒色土
39　1次盛土(核部?)　ソフト・ハードローム混じりの黒色土(ハードローム少)　中心寄りにローム中粒が少し混じる
40　1次盛土(核部)　ソフトローム混じりの黒色土・ハードローム混合層　ローム粒(中～細粒)
40.1　1次盛土(核部)　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
41　1次盛土(核部)　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　33層と近似する
42　1次盛土(核部)　黒色土混じりのハード・ソフトローム混合層
43　1次盛土(核部)　黒色土・ソフトローム混合層(ハードローム少)
44　1次盛土(核部)　非常に黒味が強い　ハード・ソフトローム混じりの黒色土
45　旧表土～整地層　黒色土
46　旧表土～整地層　黒色土混じりのソフトローム
47　下層遺構?　焼土混じりの黒色土・ソフトローム混合層
48　下層遺構?　黒色土・焼土混合層　焼土粒多量
49　旧表土　黒色土(ソフトローム少)
49.1　旧表土　49層より黄色味強い　ソフト・ハードローム混じりの黒色土　軟質
49.2　旧表土～地山漸移層　黒味強い　黒色土(ソフトローム少)
49.3　旧表土～地山漸移層　ソフトローム混じりの黒色土
49.4　地山漸移層～遺構覆土?　黒色土(ハードローム少)　堅緻
50　地山漸移層　ソフトローム
50.1　地山漸移層　ソフトローム(黒色土少)
50.2　地山漸移層　黒色土混じりのソフトローム
50.3　地山漸移層　黒味が強い　黒色土混じりのソフトローム
50.4　地山漸移層　黒色土混じりのソフトローム(ハードローム少)　ローム細粒少量　軟質
50.5　地山漸移層　黒色土混じりのソフトローム(ハードローム少)

第12図　墳丘土層東西断面

遺物出土位置



第13図　周溝内遺物出土レベル

25が23cm、26が25cmの高さになる。

周溝東側（第10図）　断面形は台形を呈し、底面幅1.8m、外周地山からの深度は1.2mである。東側が竪穴002号・005号に切り込まれており、竪穴床面構築土（27 ～ 32層）が確認されている。掘方の傾斜は、外周側と比べ、墳丘側が下端からなだらかに上がっていく。

周溝西側（第10図）　断面形は台形を呈し、底面幅2.5m、外周地山からの深度は1.2mである。掘方の傾斜は、外周側と比べ、墳丘側は緩く下端から2.6mの位置までなだらかに上がっていく。

周溝北西部（第13図）　土師器杯（第19図20）が出土している。遺物注記から平面位置を特定できるが、レベルは記録が不完全なため写真から推定し（図版52）、等高線から作成したエレベーションに投影した。出土位置は周溝掘方墳丘側斜面にあたり、初期堆積に含まれると推定する。

墳丘　周溝ベルトの延長線上に墳丘サブトレンチが設定され、北西・北東・南西・南東の4区が掘り下げられている。墳丘盛土の調査は北東区、南西区が先に掘下げられ、土層断面が記録されている（図版55・56）。

墳丘南北断面（第11図）　墳丘下には旧表土層（51層）が残り、漸移層（50層）を挟み、上面が平坦な整地層（49層）が認められる。盛土には途中に平坦面が認められ、段階的に積み上げられている。1次盛土は整地層から80cm前後の高さまで行われ、截頭円錐状の中核部に外周部が追加される形で進行したように見受けられる。1次盛土上面の36層は硬化しており、2次盛土の作業面として形成されたと見られるが、2段築成の場合のテラス面を兼ねたと想定することも可能である。2次盛土は、18層等黒色土の比率の高い土からローム主体土へと構築土が変化を示し、周溝掘削土との対応を示唆する。2次盛土は少なくとも1.3m以上が積み上げられている。

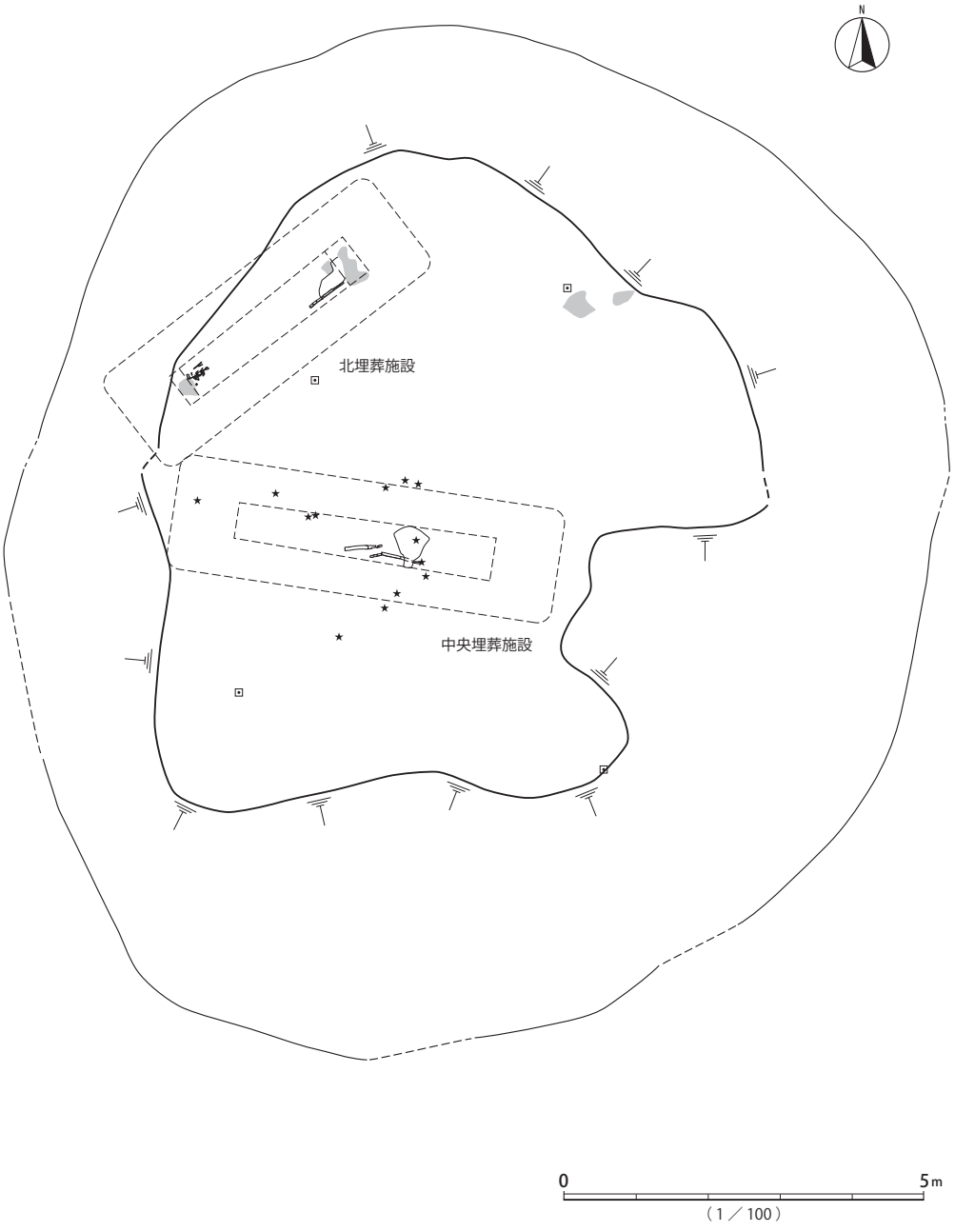
墳丘東西断面（第12図）　南北断面同様の構造で、旧表土層（49層）が残り、漸移層（46層）を挟み、上面が平坦な整地層（45層）が認められる。旧表土層を掘り込んで焼土混じりの層（47・48層）が認められるが、古墳築造との関係は不明である。整地前に草を焼き払った跡とするには局所的で規模が小さい。1次盛土は80cm前後の高さで、平坦面の標高は29.2m前後である。1次盛土の中央付近は截頭円錐状の中核部が設けられ、外周部に追加する形で構築されている。上面の29層は堅緻で、作業面として整地された可能性が高く、テラス面としての利用も想定される。2次盛土は1.2m以上が積み上げられている。

墳丘盛土中に土器類や石製模造品は検出されていない。盛土下に焼土および粘土の散布範囲（第7図、墳丘内「下」表記箇所）が記録されているが、上記焼土と同じく、古墳築造との関連は不明である。

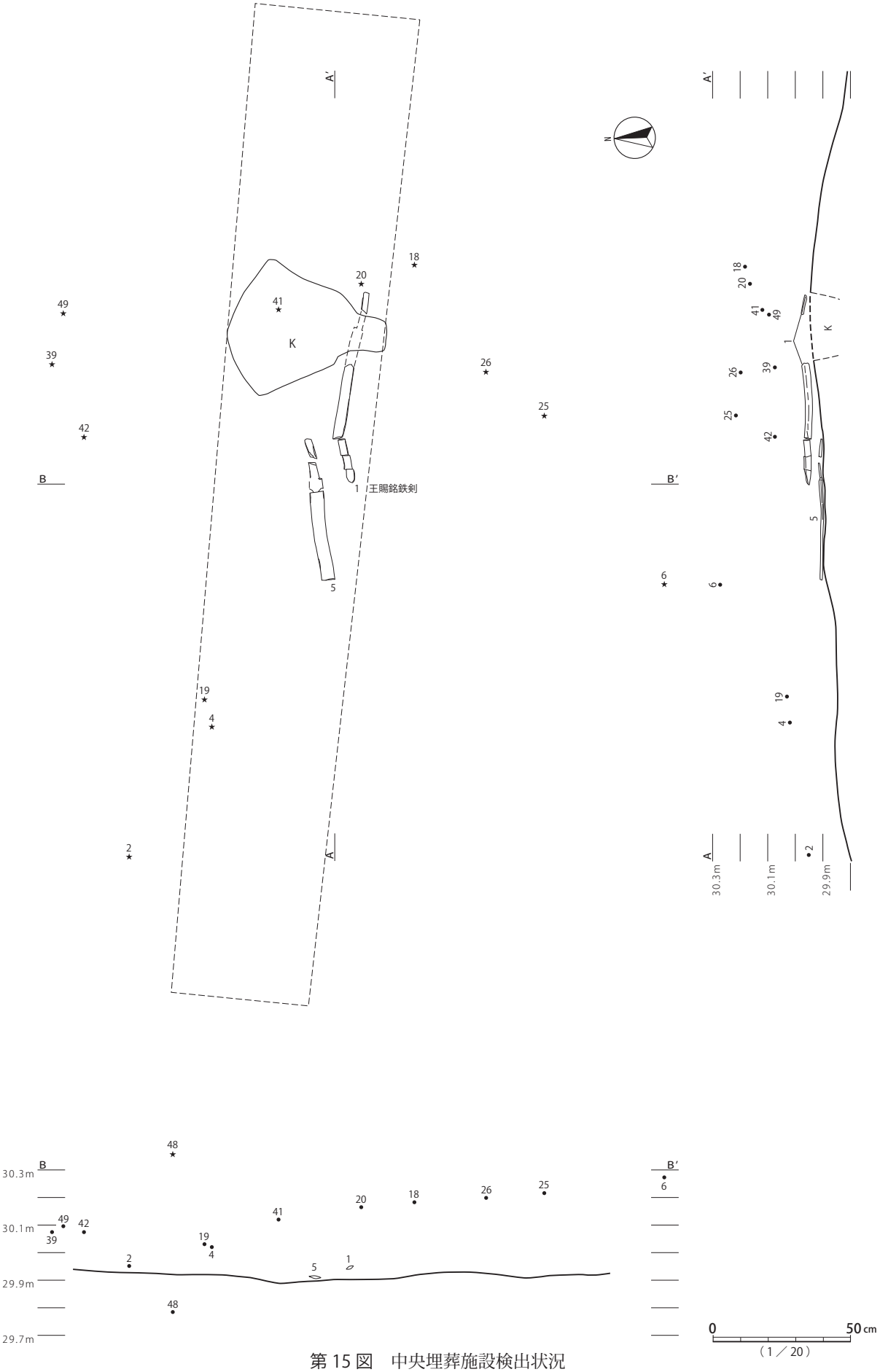
第2節　埋葬施設と副葬品出土状況

墳丘最上部は原形をとどめていないが、2次盛土以上に平坦面が形成され、2基の埋葬施設が設置されている。周溝形状から推定した中心と一致する側を中央埋葬施設、北側を北埋葬施設とする（第8・14図）。登拝による墳頂面の東側凹部と接する位置、表土層に近いレベルから金属製品が出土し始め、まず、南西区に中央埋葬施設が検出された（図版53）。次いで、北西区に北埋葬施設が確認されている（図版54）。

中央埋葬施設（第14・15図）　墳丘セクションベルトの南西区の掘り下げに伴い、鉄鏃類が検出されたことにより認識された（図版53）。墳丘の風化流出と表土層の根による撹乱の影響で土層の識別



第 14 図　墳頂部埋葬施設配置状況



第 15 図　中央埋葬施設検出状況

が困難であったため、覆土識別による平面形検出には至っていない。遺存状態は良くない。

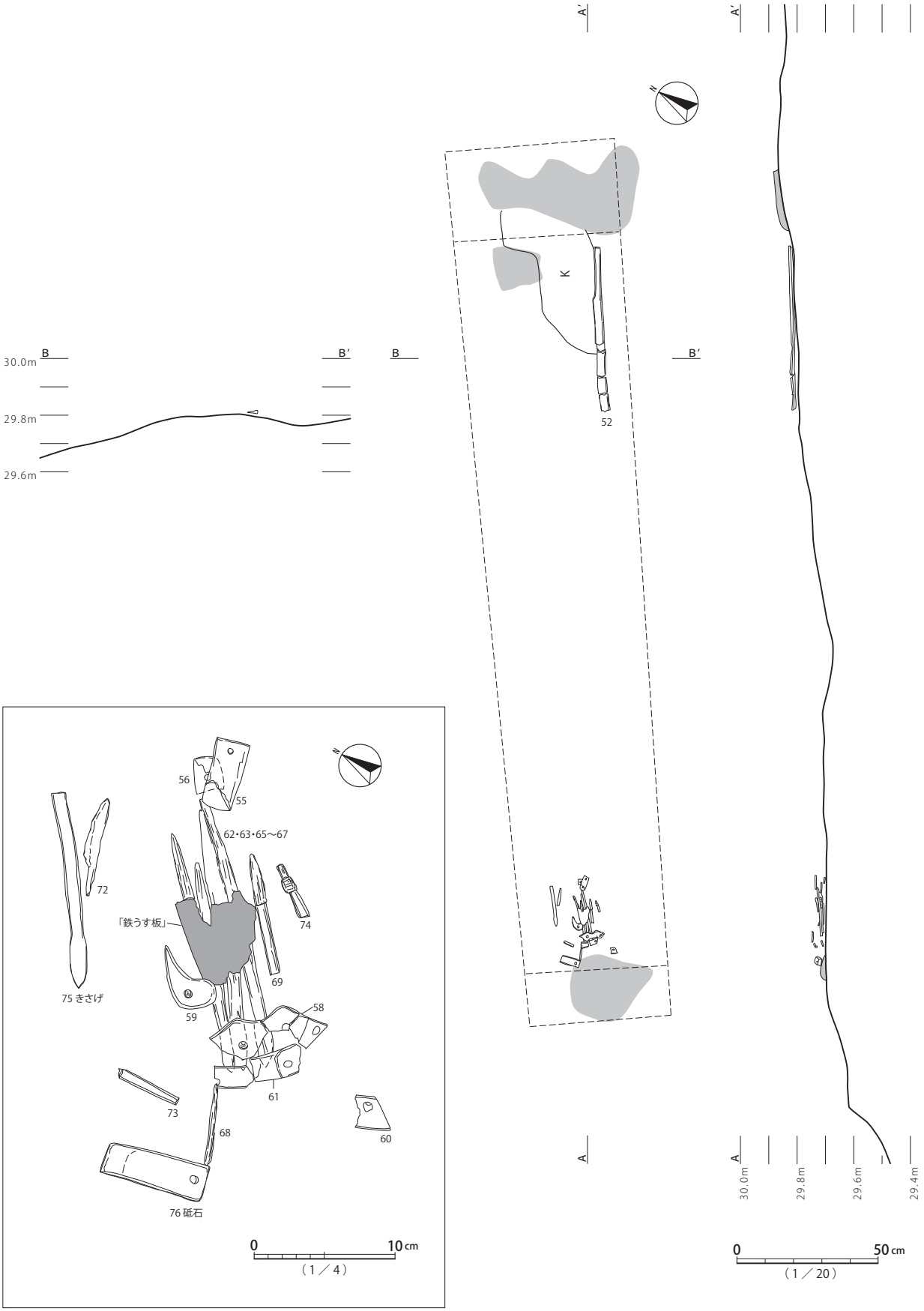
王賜銘鉄剣1・鉄剣5は切先を西に向け、ほぼ原位置と見られる配置で検出された。古墳の推定中心に合わせて埋葬施設が設置されたと仮定し、鉄剣の位置を棺内と考えると第14図のような墓壙・棺形状が推定できる。墓壙と棺の規模は、短甲出土の東間部多1号墳南棺（市毛他1974）の計測値、墓壙5.6m×1.5m、木棺痕跡3.4m×0.6～0.65mを参考にそれぞれ、5.4m×1.6m、3.6m×0.5～0.6mとした。頭位は東、上半身側をやや幅広く想定している。

棺底に近いレベルと見られる鉄剣1・5を除いて、副葬品の金属製品は散乱状態で検出されている（第15図）。このうち短甲片41・42・49は検出位置が比較的高いものの、鉄剣に近い東寄りにあることから、短甲の原位置は頭側だったことが示唆される。刀子2、鉄鏃6・18・19・20・25・26、不明片39は散らばって出土している。なお、王賜銘鉄剣の保存処理に伴い行われた蛍光X線分析でHgの反応が確認されている（永嶋1993）。棺内が全体的に赤彩された可能性や王賜銘鉄剣の装具が水銀朱により赤彩された可能性もあるが、中央埋葬施設出土鉄鏃24・25の口巻に赤色顔料が確認されており、それらに由来するとも考えられる（図版14）。口巻に施された赤色顔料はX線CT調査時の反応が強く、水銀朱の可能性が高いと考えられる（図版35）。

北埋葬施設（第14・16図）　墳頂面北西区を掘り下げる過程で検出された。中央埋葬施設と同様、遺存状態は良くなく、表層の撹乱により墓壙覆土は識別されていない。特に北西側は墳丘盛土自体が大きく流失しており、棺底範囲北西側が失われ傾斜面に続いている。木棺小口板固定用に充填された可能性の高い粘土塊が長軸両端に検出されている。粘土塊は、木棺腐朽後には外周の裏込土方向ではなく、内向きに変形拡散する可能性が高いと思われるので、木棺全長は2.6～3.1mと推定される。木棺長軸両端の外側に80cmの空間を想定すると、墓壙の長軸を4.7m、中央施設と同じく、短軸を1.6mと推定できる。木棺の規模は2.6～3.1m×0.5～0.6mと考えられる。

副葬品は鉄刀52と、胡籙金具55・56・58・59・60・61・鉄鏃62～74・きさげ75・有孔砥石76が推定棺底レベルから出土している。鉄刀52は切先が南西、刃部が北西を向くように配置され、鞘由来と見られる木質付着片50・51が共伴する。胡籙金具・鉄鏃等は南西端部に集中し、ほぼ原位置を保った出土状況を示す。頭位は北東で、鉄刀が頭側、胡籙が足元やや右寄りに置かれた埋葬状況が想定できる。

胡籙金具は収納部等に装着された位置､鉄鏃を下向きに収めた状態で検出されている。鉄鏃は口巻・矢柄等の痕跡（図版18）があることから矢の束として副葬されたと見られる。金属加工具のきさげと有孔砥石が矢の入った胡籙と接して置かれた状況は、これらが一連の装備・道具として認識されていた可能性を示唆する。なお、平面図中「鉄うす板」と記録される箇所（第16図）は、鉄鏃付着物の顕微鏡観察により、毛皮（獣毛付きの革）・羽を使用した板状部品であることが明らかになっている（図版17・18）。



第 16 図　北埋葬施設検出状況

第３節　土器

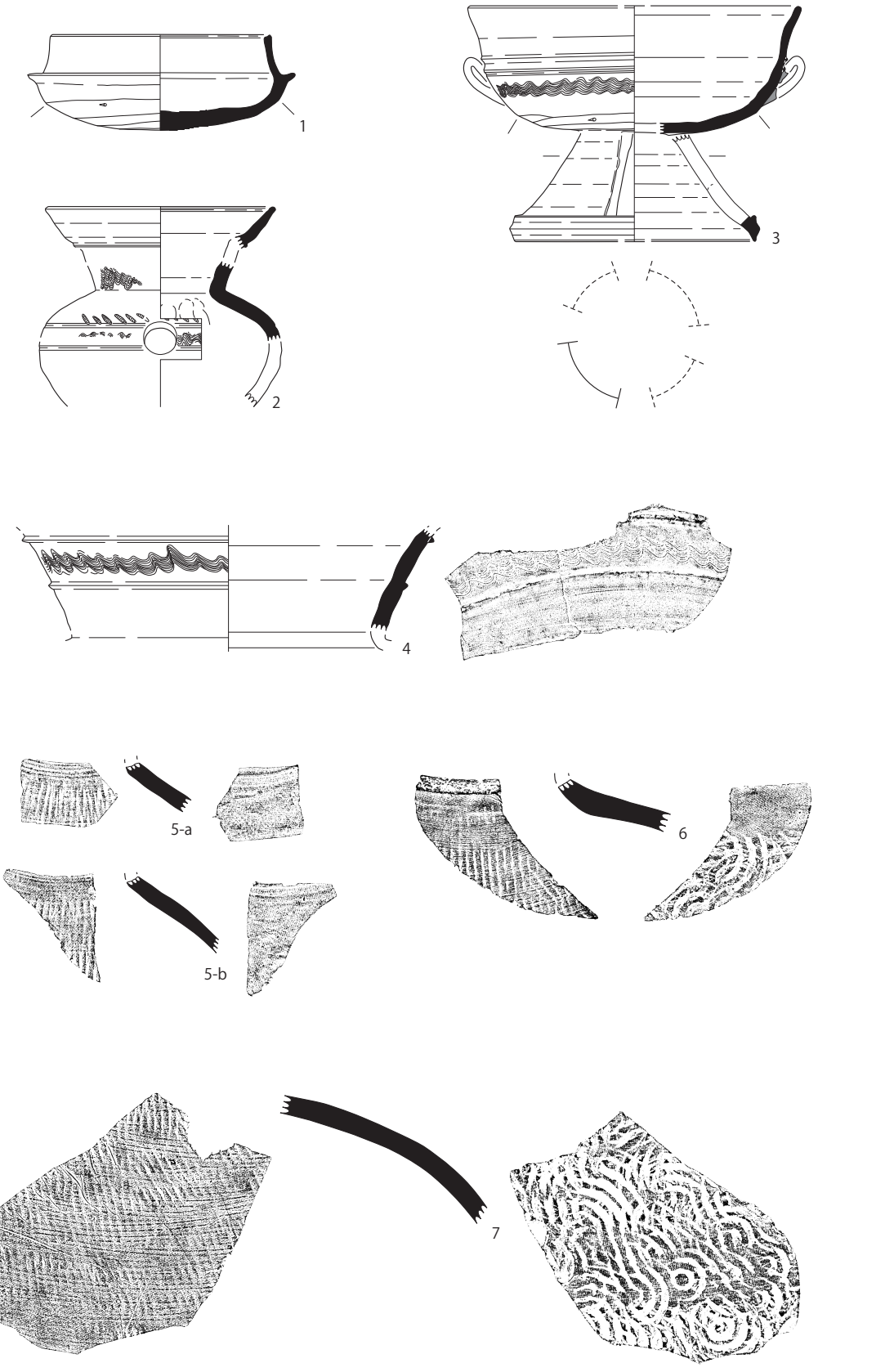
出土位置記録を持つ資料は、須恵器杯身1、土師器杯20・高杯24・25・26の５点のみで、出土状況は第1節で述べたとおりである。その他の土器は一括取り上げ資料で、ほとんどが周溝覆土を4区単位で掘り下げた際に取り上げられている（第17 ～ 20図）。稲荷台1号墳周辺に古墳時代中期の居住域は検出されていないため、出土土器が混入品である可能性は極めて低く、基本的に図化掲載資料はすべて古墳由来と考えられる。

須恵器𤭯2は周溝SE区検出土（上層のことか）、須恵器無蓋高杯3はSW区表土、須恵器甕口縁片4はSW区表土からの出土である（第1表参照）。甕体部片は6 ～ 9がNW区、16・18がNE区、11 ～ 15がSW区、5・10・14・17がSE区の注記を持つ（14は重複）。内面同心円状当具痕が明瞭に残る6 ～ 9はNW区にまとまるため同一個体の可能性がある。内面当具痕がナデ消されている10 ～ 18はNE区・SW区・SE区に散らばって検出されており、同一個体であるとすれば墳丘上にあったものが破片化し散乱したものと見られる。

土師器直口壺19は「SE区表土下層　周溝検出やや下層」、杯22・23はSW区、高杯27～30・32・34 ～ 39・53 ～ 58がSE区、高杯33が南周溝、杯・高杯口縁片51が南周溝、杯・高杯口縁片52がSW区の注記を持つ。ほぼ完形の杯20はNW区の周溝墳丘側上端付近出土であり、注記に基づく限り周辺に他の土師器は伴っていない。ほぼ完形の高杯24と、比較的の残りの良い高杯25・26は周溝南側SE区の中層から下層にかけて出土しており、他の多くの高杯片もSE区への集中傾向が認められる。高杯24 ～ 27は杯部内面がほとんど使用による摩滅が進んでいないように見受けられ、葬送儀礼に際して一括製作された可能性も否定できない。

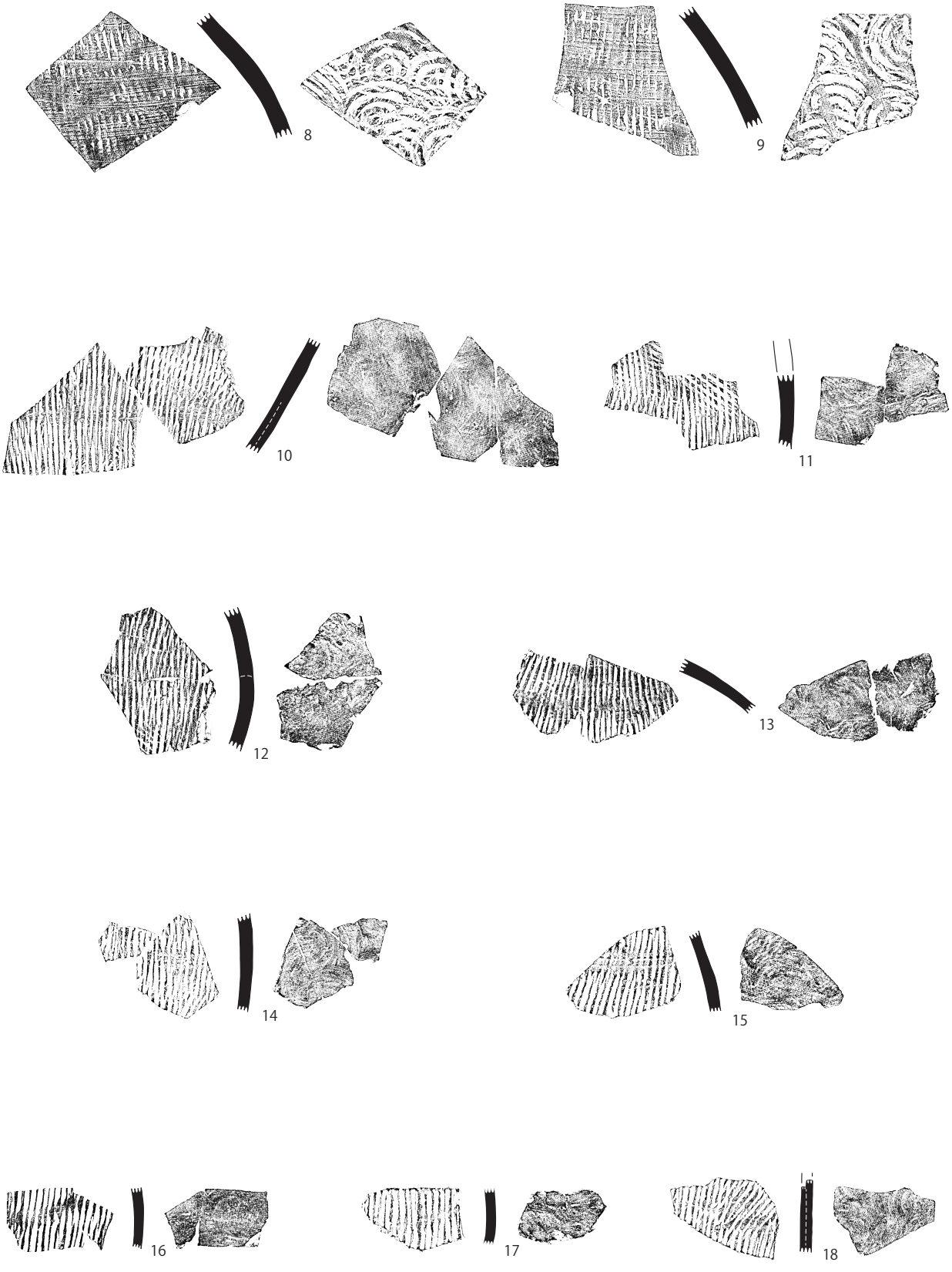
地区別の出土傾向を見ると、NW区には須恵器甕（内面当具痕）・土師器杯、NE区には須恵器甕（内面ナデ消し）、SW区には須恵器無蓋高杯・須恵器甕（内面ナデ消し）・土師器杯・土師器高杯、SE区には、須恵器𤭯・須恵器甕（内面ナデ消し）・土師器直口壺・土師器高杯が帰属する。SE区に土師器高杯が集中を見せ、土師器直口壺と須恵器𤭯が伴う様相を踏まえ、NW区に須恵器甕のうち内面に当具痕を残す破片が集中することを積極的に評価すれば、NW区の須恵器甕は北埋葬施設の葬送儀礼に伴った可能性が推定される。その他のSE区ほかの土器群は、消去法的に中央埋葬施設に伴う可能性が考えられよう。

須恵器



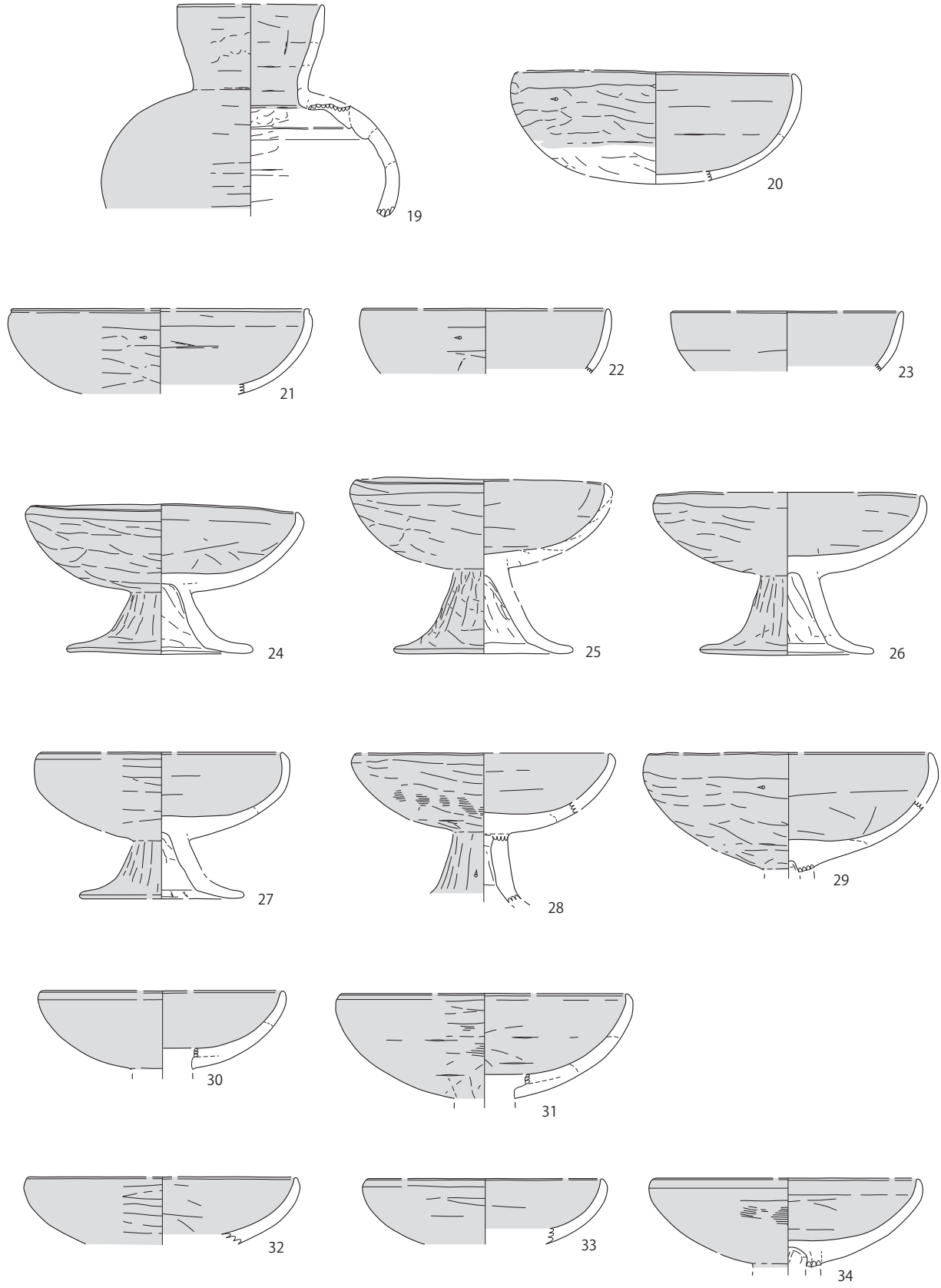
第 17 図　出土土器　須恵器（1）

須恵器



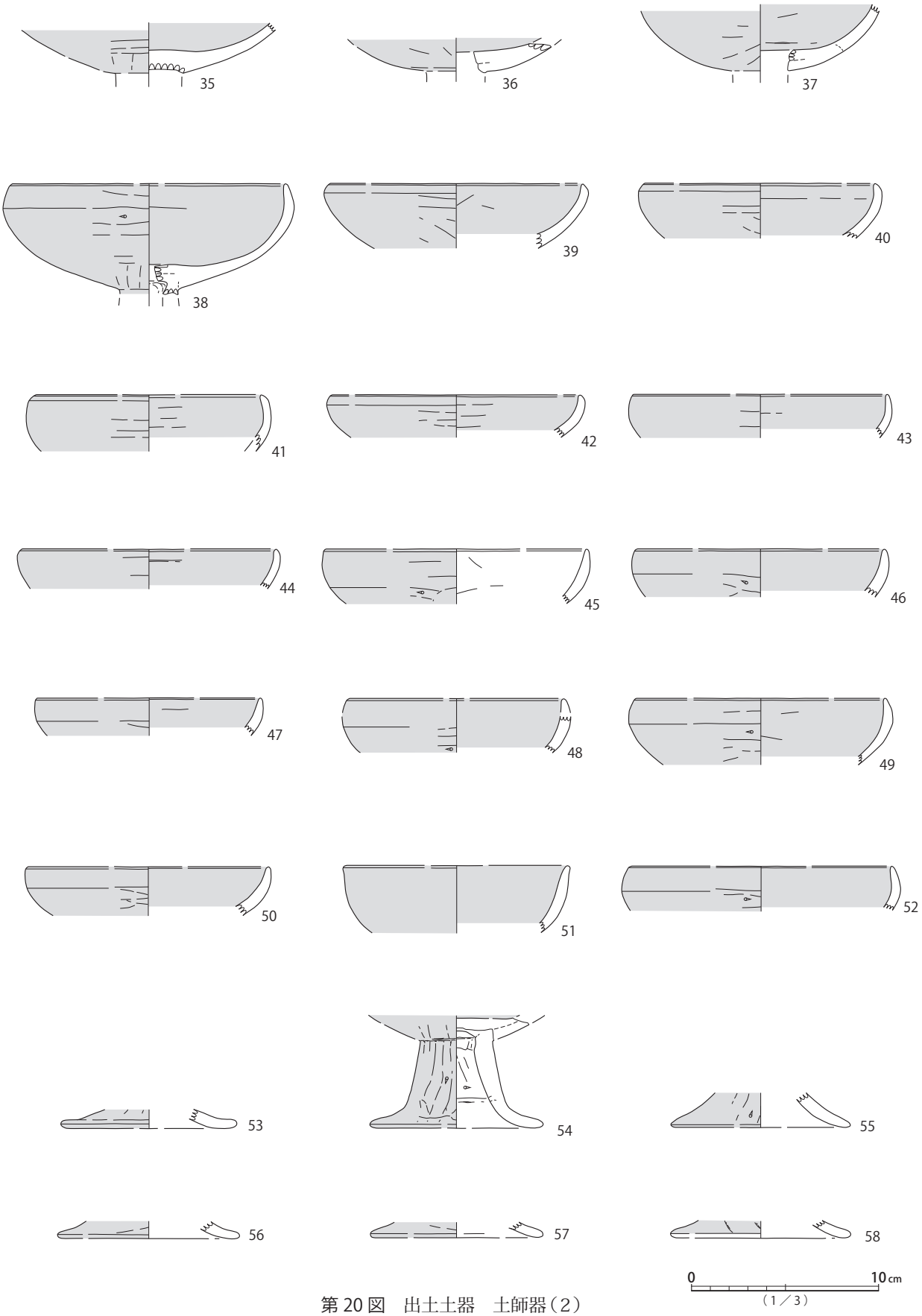
第 18 図　出土土器　須恵器（2）

土師器



第 19 図　出土土器　土師器（1）

土師器



第 20 図　出土土器　土師器（2）

第１表　土器観察表

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 周溝北側	17	57	1	図 8－5	207－1001	須恵器	杯身	ほぼ完形	95	10.6	4.7	－	最大幅 12.9	普通	10Y5/1 灰～ 7.5Y6/1 灰	10Y5/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　3mm 以下の透明・白色・明灰色砂粒が疎らに混じる　陶邑産						体部：時計回りの回転ヘラケズリ（底面から見て）ヨコナデ（蓋受部上面が僅かに凹む）					ヨコナデ（口縁端面が内傾し、浅い沈線状の凹みが巡る）底面中央直径約 2cm がやや高くなり同心円状の凹凸が認められる（底面粘土紐巻成形）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 周溝 SE 周溝	17	57	2	図 8－4	207－SE 区 －周溝検出上【土 ?】	須恵器	甕	口縁～体部片	10	10.9?	（9.7?）	－	胴部最大径 11.8?	普通　口縁内面に降灰痕あり（正位での焼成）	7.5Y4/1 灰～ 5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰～ 5Y6/2 灰オリーブ（降灰）	反転復元・形状 3 片合成・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　5mm 以下の灰白色砂粒が疎らに混じる　陶邑産						口縁屈曲部に凸帯（断面三角形で陵は鋭い）櫛描波状文（頸部：2 帯 ?、胴部：1 帯）（8 本 /9mm）→胴部最大径付近：ヘラ描き沈線 2 条（幅 2mm 前後　断面形は浅い U 字形）→上側沈線近くに櫛状工具押圧による斜列点文					口縁部：ヨコナデ（粘土紐積みの成形の凹凸が目立つ）（端部直下が沈線状に凹む）　肩部：シボリメ→体部：横主体のナデ		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 SW 表土	17	57・59	3	図 8－2	207－SW 表土－N【層 ?】IN－H12+	須恵器	無蓋高杯	杯部・脚部片	40	15.9?	11.4?	11.6?	脚柱最小径 5.7	普通　脚部外側面と口縁内面立ち上がり部に降灰痕あり（正位の重ね焼きか）	10Y4/1 灰～ 7.5Y6/1 灰	10Y6/1 灰～ 7.5Y5/1 灰	反転復元・形状合成・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　3mm 以下の透明・白色・明灰色砂粒が疎らに混じる　陶邑産						杯部下位：回転ヘラケズリ（下から見て時計回り内→外）→ヨコナデ→凸帯貼り付け（2 帯）　脚部貼り付け→ヨコナデ（肥厚部中位に稜がめぐる）→長方形透孔（4 箇所の切り抜き痕が杯部底面に残る）　櫛描波状文（9 本 /8.5mm）→輪状把手貼り付け（上下基部破断部遺存）					杯部：ヨコナデ（粘土紐積み成形による凹凸が目立つ）　脚部：ヨコナデ（裾端部が内弯気味に作られる）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 SW 表土 SE	17	57・59	4	図 8－1	207－SW－5－表土層 207－SE（注記なし）	須恵器	甕	口縁片	30	－	（6.0）	－	推定口径 20 以上	普通　片側側面に降灰痕あり（横倒しで焼成か）	10Y4/1 灰～ 10Y5/1 灰	10Y4/1 灰～ 10Y5/1 灰	反転復元・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　3mm 以下の透明・白色・明灰色砂粒が疎らに混じる　陶邑産						凸帯（断面三角形）2 条貼り付け→ヨコナデ→凸帯間：櫛描波状文（工具：10 本 /8.5mm）（上から見て時計回りに施す）					ヨコナデ（粘土紐積みの成形痕の凹凸が目立つ）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 SE 表土	17	59	5	図 8－1	207－6017（207－6015）	須恵器	甕	体部片	小片	－	（a：2.4、b：3.8）	－		普通	7.5Y6/1 灰～ 10Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰～ 7.5Y5/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　1mm 以下の透明・白色・明灰色砂粒が疎らに混じる　陶邑産						縦の平行タタキメ（4 本 /cm）→頸部付近：ヨコナデ（頸部屈曲から 4 ～ 5cm の範囲でタタキメが消されている）					当具痕（b 片に木目が認められる）→ナデ消し→頸部付近以上：ヨコナデ		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 NW 表土	17	59	6	－	207－6044	須恵器	甕	肩部片	小片	－	（2.8）	－	厚さ 8 ～ 12mm	普通	N4/0 灰～ N5/0 灰	N4/0 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（6 本 /2cm）→横の工具ナデ（頸部屈曲付近はほぼタタキメが消えている）破断面の一部が摩滅する（転用砥石か）					同心円状当具痕（外径 3.6cm 以上、凹部幅約 3mm）（凹部はナデ消されず明瞭に残る）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 NW 表土	17	59	7	－	207－6044	須恵器	甕	体部片	5	－	（6.2）	－	厚さ 9mm 前後	普通　一部に降灰による自然釉	N5/0 灰～ N3/0 暗灰（自然釉）	N5/0 灰～ N4/0 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（6 本 /2cm）→横の工具ナデ（タタキメは消え切っていない）					同心円状当具痕（外径 4.2cm 以上、凹部 4 重以上、中心円部直径 6mm、凹部幅 3 ～ 4mm）→疎らな横のナデ（ほとんど圧痕は消えていない）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 NW 表土	18	59	8	－	207－6044	須恵器	甕	体部片	小片	－	（6.4）	－	厚さ 8mm 前後	普通　一部に降灰による自然釉	N3/0 暗灰（光沢あり）～ N5/0 灰	N5/0 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（6 本 /2cm）→横の工具ナデ（タタキメは消え切っていない）					同心円状当具痕（外径 4.5cm 以上、凹部 4 重以上、中心円部直径 7mm、凹部幅 3 ～ 4mm）→疎らな横のナデ（ほとんど圧痕は消えていない）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	内面	備考
1 号墳 NW 表土	18	59	9	－	207－6044	須恵器	甕	体部片	小片	－	（6.3）	－	厚さ 7mm 前後	普通	N3/0 暗灰～ N2/0 黒（光沢あり）	N5/0 灰～ 2.5Y5/1 オリーブ灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（6 本 /2cm）→横の工具ナデ（タタキメは消え切っていない）					同心円状当具痕（外径 4.4cm 以上、凹部 4 重以上、中心円部直径 7mm、凹部幅 3 ～ 4mm）→粗い縦のナデ（2cm 前後の間隔　ほとんど圧痕は消えていない）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土	18	59	10	–	207－6015 207－6017	須恵器	甕	体部片	小片	–	（5.9）	–	厚さ 7mm 前後	普通	10Y5/1 灰～10Y6/1 灰	10Y5/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　疎らに 4mm 以下の石英・長石粒（風化花崗岩由来か）が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（条線凹部に直交する木目が認められる）→疎らな横のナデ　器壁が 2 層に分かれる					同心円状当具痕（木目がほぼ磨り消されている）（直径 3.5cm 以上）→縦主体のナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SW 表土 SW 周溝中	18	59	11	–	207－6041 207－6046	須恵器	甕	体部片	小片	–	（5.7）	–	厚さ 6～9mm	普通	N5/0 灰～10Y5/1 灰	N5/0 灰～10Y5/1 灰～2.5YR5/2 灰赤（破断面：器壁中位）	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　疎らに 3mm 以下の石英・長石粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（条線凹部に直交する木目が認められる）					同心円状当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 3.5cm 以上）→ナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 南周溝トレ中 SW 周溝中	18	59	12	–	207－6005 207－6046	須恵器	甕	体部片	小片	–	（8.4）	–	厚さ 7mm 前後	普通	10Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰～5YR5/3 にぶい赤褐（破断面：器壁中位）	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（4 本 /cm）					円形当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 3cm 以上か）→ナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 南周構トレ中 SW 周溝中	18	59	13	–	207－6005 207－6046	須恵器	甕	体部片	小片	–	（2.8）	–	厚さ 5～6mm	普通	7.5Y5/1 灰～5Y5/2 灰オリーブ	10Y5/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（条線凹部に直交する木目が認められる）→疎らな横のナデ					同心円状当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 4cm 以上）→横主体のナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 SW 表土	18	59	14	–	207－6015 207－6017 207－6041	須恵器	甕	体部片	小片	–	（5.2）	–	厚さ 6mm 前後	普通	10Y5/1 灰～7.5Y6/1 灰	10Y5/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（条線凹部に直交する木目が認められる）					同心円状当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 3.5cm 以上）→ナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SW 周溝中	18	59	15	–	207－6046	須恵器	甕	体部片	小片	–	（4.2）	–	厚さ 5～6mm	普通	N5/0 灰～2.5GY5/1 オリーブ灰	10Y6/1 灰～7.5Y6/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（条線凹部に直交する木目が認められる　年輪に沿う向きに長軸を採る工具の作用部に、柄に直交する向きに彫られた可能性がある）→横の疎らなナデ（幅約 1cm）					同心円状当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 3.2cm 以上）→ナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 南周溝トレ中 NE 表土	18	59	16	–	207－6005 207－6023	須恵器	甕	体部片	小片	–	（3.2）	–	厚さ 5mm 前後	普通	10Y5/1 灰	7.5Y6/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（条線凹部に直交する木目が認められる）→疎らな横のナデ					同心円状当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 3cm 以上）→ナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土	18	59	17	–	207－6015	須恵器	甕	体部片	小片	–	（3.1）	–	厚さ 5mm 前後	普通	10Y6/1 灰～10Y5/1 灰	10Y6/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（条線凹部に直交する木目が認められる）→疎らな横のナデ					同心円状当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 3cm 以上）→ナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 NE 表土	18	59	18	–	207－6024	須恵器	甕	体部片	小片	–	（3.7）	–	厚さ 6mm 前後	普通	N4/0 灰～N5/0 灰	10Y5/1 灰	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　灰色・白色・透明微砂粒が混じる　疎らに 2mm 大の石英粒が混じる　陶邑産か						縦の平行タタキメ（3 本 /cm）（凹部に直交する木目が認められる）→疎らな横のナデ　器壁が 2 層に分かれる					同心円状当具痕（木目が伴うがほぼ磨り消されている）（直径 3.5cm 以上）→ナデ		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SE 表土下層 周溝検出やや下層（SE 周溝中土層）	19	57・60	19	図 8－8	207－6012（207－6030）	土師器	壺	上部片	30	7.4	（10.9?）	－	胴部最大径 15.4?	普通　体部内面が全体的に黒い	10YR4/6 赤（赤彩）～10YR6/3 にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰～ 10R4/6 赤（赤彩）	反転復元・形状推定復元・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　砂粒は目立たない　疎らに 2mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ（体部下位に単位が見える）→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目（口縁付近に明瞭）　肩部接合痕で剥離している					胴部下位：横主体の工具ナデ（工具幅 2.2cm 以上）→上位：指ナデ（肩部に指頭圧痕・指紋が目立つ）（肩部の接合痕は立体的で段状の粘土紐接合部が残る）→口縁部：ヨコナデ（端部が薄く仕上げられる）→赤彩・横主体の塗り刷毛目	

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 周溝北西部墳丘側	19	57	20	図 8－7	207－1005－77.3.28	土師器	杯	ほぼ完形	70	14.3～15.0	（5.7）	丸	最大径 15.1	普通　側面 1 箇所に焼成時黒斑が認められる	2.5YR5/6 明赤褐（赤彩）～10YR6/4 にぶい黄橙～黒斑	2.5YR5/6 明赤褐（赤彩）～10YR6/4 にぶい黄橙～黒斑	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精良　微砂粒は目立たない　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横主体のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→下位以上：赤彩（塗り刷毛目は不明瞭）					ナデ・ヨコナデ（口縁端部がやや内弯気味に作られる）→赤彩（塗り刷毛目は不明瞭だが横方向の擦痕が認められる）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳	19	60	21	－	注記なし	土師器	杯	口縁片	20	15.2	（4.4）	－	最大径 15.7?	普通　側面に焼成時黒斑あり	10R4/6 赤（赤彩）～ 5YR4/2 灰褐（黒斑）	10R5/6 赤（赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる 2mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒が混じる 在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ（端部直下が沈線状に凹む）→赤彩（剥落気味）・横～斜めの塗り刷毛目					横工具ナデ（側縁擦痕あり）（塗り刷毛目の工具の可能性もある）→ヨコナデ→赤彩（剥落気味）・横～斜めの塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SW 周溝中	19	60	22	－	207－6045	土師器	杯	口縁片	小片	12.6?	（3.3）	－	最大径 13.0?	普通	10R4/6 赤（赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙～ 10R4/6 赤（赤彩）	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　疎らに 5mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ（工具幅 8mm 以上）→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩（遺存不良）・塗り刷毛目（条線 6 本 /5mm）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SW 周溝中	19	60	23	－	207－6045	土師器	杯	口縁片	小片	11.8?	（3.1）	－		普通	10YR7/4 にぶい黄橙～ 10R4/6 赤（赤彩）	10YR7/4 にぶい黄橙～ 10R4/6 赤（赤彩）	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　疎らに 1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→ヨコナデ（粘土紐接合痕の凹凸がロクロメ状に残る）→赤彩（遺存不良）・横主体の塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩（遺存不良）・横の塗り刷毛目？（条線（6 本 /5mm）が伴う）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 周溝南側	19	57	24	図 8－6	207－1002	土師器	高杯	ほぼ完形	90	13.5～13.8	7.8	9.6	杯部最大径 14.4 脚柱最小径 3.1	普通　杯部と脚部で縦に揃う黒斑が認められる（横位での焼成か）	10R4/6 赤～ 10R5/6（赤彩）～黒斑	10R4/6 赤～ 10R5/6（赤彩）～ 10YR6/4 にぶい黄橙～黒斑	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　透明・白色・黒色微砂粒・スコリア状橙色微粒が混じる　在地						杯部底面に円筒状の脚部を形成（中位がやや膨らむ）　杯部：横主体のヘラケズリ状工具ナデ（5 本 /5mm のハケメ状条線が伴う）→口縁部：ヨコナデ　脚部：縦の工具ナデ→裾部：ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目状の擦痕					杯部：ヨコナデ（口縁端部が内弯気味に作られる）→赤彩・塗り刷毛目状の擦痕（幅 1.6cm 前後）　脚柱部：縦～斜めのナデ→裾部：ヨコナデ→ヘラケズリ状工具ナデ（下から見て反時計回り）→裾部周辺：部分的な赤彩		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 周溝南側 SE 中～下層	19	58・60	25	－	207－1003 207－6028	土師器	高杯	半完形	80	12.9	9.1	9.3	杯部最大径 13.5 脚柱最小径 2.9	普通　杯部と脚部で縦に揃う黒斑が認められる（横位での焼成か）	10R4/6 赤～ 10R4/8 赤（赤彩）～ 7.5YR4/1 褐灰（黒斑）	杯部：10R4/6 赤（赤彩） 脚部：7.5YR6/6 橙～ 10YR3/1 黒褐（黒斑）	
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　透明・白色・黒色微砂粒・スコリア状橙色微粒が混じる　在地						脚柱頂部を巻く形で杯部を形成か　工具ナデ（杯部：横、脚部：縦）→赤彩（横～斜めの塗刷毛跡）					杯部：ナデ・ヨコナデ（口縁端部が内弯気味に仕上げられる）→赤彩（横断方向・横位主体の塗刷毛跡）　脚柱部：シボリメ→裾部：ヨコナデ（接地面の一部に工具ナデもしくはヘラケズリ）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 周溝南側 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層	19	58 ・ 60	26	－	207－1004 207－6012	土師器	高杯	半完形	40	13.6?	8.4	9.0	杯部 最大径 14.2? 脚柱 最小径 3.0	普通　裾部の片側に焼成時黒斑が認められる	10R4/6 赤 ～ 10YR5/6 赤（赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙～黒斑	10R5/6 赤 ～ 10YR4/6 赤（赤彩）～ 5YR5/4 に ぶい赤褐～ 10YR7/4 にぶい黄橙	一部反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　透明・白色・黒色微砂粒・スコリア状橙色微粒が混じる　在地						円筒状脚柱部を形成し頂部を杯部底面凹部に、主に巻く形で接合する　杯部：横主体のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ　脚部：縦主体の工具ナデ→裾部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					杯部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目　脚柱部：縦～斜めのナデ→裾部：ヨコナデ→接地部：周方向のヘラケズリ（下から見て反時計回り）		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層	19	58	27	－	207－6012	土師器	高杯	半完形	40	12.4?	7.6	8.5?	最大径 13.2? 脚柱 最小径 2.9	普通　口縁部の片側に接地によると見られる焼成時黒斑あり	10YR4/6 赤 （赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙～黒斑	10R4/6 赤 （赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙～黒斑	一部反転復元・ 調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						杯底部に筒状部を貼り付け、外周と脚柱頂部に粘土を足して接合する　ヘラケズリ状工具ナデ（杯部：横主体、脚柱部：縦）→口縁部・裾部：ヨコナデ（端部が内弯気味に立ち上がる）→赤彩・横主体の塗り刷毛目					杯部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目　脚部：ナデ→裾部：周方向のヘラケズリ（工具幅 1.3cm 以上）		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層	19	58	28	－	207－6012	土師器	高杯	上部片	30	13.0?	（7.7）	－	脚柱 最小径 2.8	普通	10R4/6 赤 （赤彩）～ 10YR6/4 に ぶい黄橙～ 10YR7/6 明黄褐	10R4/6 赤 （赤彩）～ 7.5YR6/4 にぶい橙～ 10YR7/4 にぶい黄橙	一部反転復元・ 調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　透明・白色・黒色微砂粒・スコリア状橙色微粒が混じる　在地						杯底面に円柱状の脚部を形成（縦の破断が目立つため、4 ～ 5 単位の縦長粘土板で成形した可能性がある）　ヘラケズリ状の工具ナデ（杯部：横主体、脚部：縦主体）（杯部にハケメ状条線（12 本/12mm））→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					杯部：ナデ・ヨコナデ（口縁端部が内弯気味に仕上げられる）→赤彩（横断方向・横位主体の塗刷毛跡）　脚柱部：シボリメ？・ナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 中～ 下層	19	58 ・ 60	29	－	207－6028－ SE 中～下層	土師器	高杯	杯部	60	14.5?	（6.2）	－	杯部 最大径 15.2? 脚柱 最小径 2.6	二次焼成の可能性あり　杯部内底面に黒変部あり（径 10 ～ 15mm の水玉状の抜け伴う）	5YR5/4 にぶい赤褐～ 10R5/6 赤（赤彩）	2.5YR5/6 明 赤褐（赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙～黒変	一部反転復元・ 調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　透明・白色・黒色微砂粒・スコリア状黄灰微粒が混じる　在地						横主体（下位は放射状）のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目状の擦痕					器厚 7mm の筒状脚部が貼り付けで形成される→棒状工具による擦痕　口縁部：ヨコナデ（内弯気味に作られる）　赤彩・横主体の塗り刷毛目		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層	19	60	30	－	207－6012	土師器	高杯	杯部片	20	12.4?	（4.1）	－	脚柱 最小径 3.1?	普通	10R5/6 赤 （赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙	10R4/6 赤 （赤彩）～ 7.5YR7/6 橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						脚部を杯底面に接合（脚頂部を巻く形の接合痕）ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					ヨコナデ（口縁端部が内弯）→赤彩・塗り刷毛目		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳	19	60	31	－	注記なし	土師器	高杯	杯部片	30	14.6?	（5.4）	－	最大径 15.3?	普通　口縁部に焼成時黒斑あり	10R4/6 赤 （赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙～黒斑	10R4/6 赤 （赤彩）～ 10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元・ 調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる 1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						ヘラケズリ状工具ナデ（上位：横主体、下位：放射状）（一部にハケメ状条線（7 本 /7mm）が伴う）→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目					ヨコナデ（口縁端部が内側に屈折する）→赤彩・横主体の塗り刷毛目　底部側破断面下位は擬口縁状に脚柱部との接合面が剥離している		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 中～ 下層	19	60	32	－	207－6028	土師器	高杯	杯部片	25	13.8?	（3.4）	－	最大径 14.2?	普通　口縁部に焼成時黒斑あり	7.5R4/6 赤（赤彩）～黒斑	7.5R4/6 赤（赤彩）～ 5YR5/3 にぶい赤褐（黒斑）～ 10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元・ 調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ（上位：横、下位：放射状～斜め）→口縁部：ヨコナデ（端部直下が平坦に仕上げられる）→赤彩・塗り刷毛目（横主体で単位が明瞭）　器面の摩滅が進行していない					ナデ・ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目（単位が明瞭）　器面の摩滅が進行していない		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 南周溝 トレ中	19	60	33	－	207－6004	土師器	高杯	杯部片	20	12.0?	（3.4）	－	最大径 12.6?	普通	10R5/6 赤（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	10R5/6 赤（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精良　微砂粒は目立たない　スコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目（上位：横、下位：放射状主体）					ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層 （SE 中 ～下層）	19	58 ・ 60	34	－	207－6012 （207－6028）	土師器	高杯	杯部片	30	13.6	（4.6）	－	脚柱 最小径 3.6?	普通　口縁近くの反対位置に焼成時黒斑が認められる	10R4/4 赤褐（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙～黒斑	10R4/6 赤（赤彩）～ 10R3/3 暗赤褐	一部反転復元・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				やや砂質　黒色・灰白色・透明微砂粒が多く混じる　在地						ヘラケズリ状工具ナデ（ハケメ状条線（5 本/5mm）伴う）→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目　下位の剥落が進む					脚柱頂部：粘土充填痕（指頭圧痕伴う）　ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層 SE 周溝中 上層 SW 周溝中	20	61	35	－	207－6012 207－6030 207－6045	土師器	高杯	杯部片	50	－	（2.7）	－	脚柱 最小径 3.6?	普通	10R4/6 赤（赤彩）～7.5YR7/6 橙	10R4/4 赤褐（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				やや砂質　黒色・灰白色・透明微砂粒が多く混じる　2mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒が混じる　在地						杯底部に脚柱頂部を結合　ヘラケズリ状の工具ナデ（上位:横、下位:放射状）→ヨコナデ→赤彩（やや遺存不良）					赤彩・塗り刷毛目（部分的にヘラミガキ状を呈する）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層	20	61	36	－	207－6012	土師器	高杯	杯部片	60	－	（1.5）	－	脚柱 最小径 3.2?	普通	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/6 明黄褐	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/6 明黄褐	調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　砂粒は目立たない　シャモット状黄灰色微粒が混じる　在地						杯底部に脚柱頂部を接合（補強用か周囲に粘土を足している）　ナデ・工具ナデ？→赤彩・横主体の塗り刷毛目					赤彩・塗り刷毛目（放射～径方向）		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層	20	61	37	－	207－6012	土師器	高杯	杯部片	20	－	（3.5）	－	脚柱 最小径 3.0?	破片化後の二次焼成の可能性あり	2.5YR5/6 明赤褐（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙～黒変	7.5YR5/4 にぶい褐～10R4/6 赤（赤彩）	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目（一部にハケメ状条線（7 本 /5mm）が伴う）					ナデ・ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層 （SE 中 ～下層）	20	58 ・ 61	38	－	207－6012 （207－6028）	土師器	高杯	杯部片	50	－	（5.9）	－	脚柱 最小径 3.1?	普通	10YR4/6 赤～ 10R5/6 赤（赤彩）～7.5YR7/4 にぶい橙	10R4/6 赤（赤彩）～7.5YR6/4 にぶい橙	反転復元・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				やや砂質　黒色・灰白色・透明微砂粒が多く混じる　4mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒が混じる　在地						ヘラケズリ状工具ナデ（上位：横主体、下位：放射状）→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					ナデ・ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳 SE 表土 下層 周溝検出 やや下層	20	61	39	－	207－6012	土師器	高杯	口縁片	20	13.4?	（3.5）	－	最大径 14.0?	普通　口縁以下に焼成時黒斑あり	10R4/6 赤（赤彩）～ 5YR3/1 黒褐（黒斑）	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　スコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目（上位：横、下位：斜め）					口縁部：ヨコナデ（内弯気味に端部が立つ）→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳	20	61	40	－	注記なし	土師器	高杯	口縁片	10	12.2?	（3.2）	－	最大径 13.0?	普通	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	10R4/6 赤（赤彩）～7.5YR7/6 橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目（口縁付近：横、以下：斜め）					口縁部：ヨコナデ（内弯するように仕上げられる）→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1 号墳	20	61	41	－	注記なし	土師器	杯・ 高杯	口縁片	10	12.0?	（3.0）	－	最大径 13.0?	普通	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/6 明黄褐	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/6 明黄褐	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目					口縁部：ヨコナデ（内弯するように仕上げられる）→赤彩・横主体の塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	42	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	10	13.2?	(2.3)	−	最大径13.8?	普通	10R4/4 赤褐(赤彩)	10R4/6 赤(赤彩)	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横の工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	43	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	13.5?	(2.3)	−	最大径14.0?	普通	10R4/6 赤(赤彩)～7.5YR6/6 橙	10R4/6 赤(赤彩)	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					口縁部：ヨコナデ(端部が薄く作られる)→赤彩・横の塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	44	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	13.6?	(2.1)	−	最大径14.0?	普通	10R4/6 赤(赤彩)～10YR7/4 にぶい黄橙	10R5/6 赤(赤彩)～10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　1mm以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横工具ナデ→ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					横工具ナデ?(横の工具側縁による条線が残る)→ヨコナデ→赤彩		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	45	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	14.0?	(2.9)	−	最大径14.2?	普通	5YR6/6 橙～10R4/6 赤(赤彩)(遺存不良)	7.5YR6/6 橙～7.5YR6/4 にぶい橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　1mm以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩(遺存不良)・塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩(ほぼ遺存せず)・塗り刷毛目(ナデ状の擦痕)		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	46	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	13.2?	(2.5)	−	最大径13.7?	普通	10R5/6 赤(赤彩)～7.5YR7/6 橙	10R5/6 赤(赤彩)～7.5YR7/6 橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　4mm以下のシャモット状暗赤褐色が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	47	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	11.8?	(2.0)	−	最大径12.2?	普通	2.5YR5/6 明赤褐(赤彩)～7.5YR7/6 橙	10R4/6 赤(赤彩)～7.5YR7/6 橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　2mm以下のシャモット状橙色微粒が混じる　在地						横～斜めのヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	48	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	11.4?	(2.9)	−	最大径12.2?	普通	10R4/6 赤(赤彩)～10YR7/4 にぶい黄橙	10R5/6 赤(赤彩)～7.5YR7/6 橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　2mm以下のスコリア状橙色微粒・シャモット状暗赤褐色粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	49	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	13.2?	(3.5)	−	最大径14.0?	普通	10R5/6 赤(赤彩)～10R4/6 赤	10R4/6 赤(赤彩)～10YR7/4 にぶい黄橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　1mm以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ(最大径以下に単位が明瞭に残る)→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳	20	61	50	−	注記なし	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	12.8?	(2.6)	−	最大径13.1?	普通	10R4/6 赤(赤彩)～10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙～10R4/6 赤(赤彩)	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　1mm以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						横～斜めのヘラケズリ状工具ナデ→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目					ヨコナデ→赤彩(遺存不良)・横主体の塗り刷毛目		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm				焼成	色調		備考
										口径	器高	底径	その他		外面	内面	
1号墳 南周溝トレ中	20	61	51	−	207－6004	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	11.8?	(3.6)	−		普通	10R4/6 赤(赤彩)～7.5YR7/6 橙	10R4/4 赤褐(赤彩)～7.5YR7/6 橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる　1mm以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						口縁部：ヨコナデ→赤彩　器面の剥落が進む					ヨコナデ→赤彩(部分的に遺存不良)		

遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SW S 表土	20	61	52	–	207－6039	土師器	杯・高杯	口縁片	小片	13.8?	（2.4）	–	最大径 14.8?	普通	10R4/4 赤褐（赤彩）～10YR6/4 にぶい黄橙	10R4/4 赤褐（赤彩）～7.5YR5/4 にぶい褐	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる 1mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒・スコリア状橙色微粒が混じる　在地						横のヘラケズリ状工具ナデ（上から見て時計回り）→口縁部：ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目？（一部ヘラミガキ状を呈する）					ヨコナデ→赤彩・横主体の塗り刷毛目？（一部ヘラミガキ状を呈する）		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SE 表土下層 周溝検出やや下層 SE 周溝中上層	20	61	53	–	207－6012 207－6030	土師器	高杯	脚裾部片	40	–	（1.0）	9.4?		普通	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙～黒斑～ 10R4/6 赤（赤彩）	反転復元・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる 1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						縦のヘラケズリ状工具ナデ→裾部：ヨコナデ→赤彩・塗り刷毛目？（条線が認められる）					ナデ→裾部：周方向のヘラケズリ状工具ナデ（下から見て時計回り）　接地部に粘土粒が目立つ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SE 表土下層 周溝検出やや下層 SW S 表土	20	58・61	54	–	207－6012 207－6039	土師器	高杯	脚部片	30	–	（6.0）	9.2?	脚柱最小径 3.8?	普通	2.5YR5/6 明赤褐（赤彩）～7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙～5YR6/6 橙（赤彩？）	反転復元・一部合成・調整移植
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が比較的多く混じる　1mm 以下のスコリア状橙色微粒・2mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒が混じる　在地						筒状の脚柱上部に杯底部パーツを接合し、脚柱頂部を巻く形で補強する　縦・放射状のヘラケズリ（屈折部に工具痕（幅 1.1cm 以上）が目立つ）→裾部：ヨコナデ→赤彩（やや遺存不良）					脚部：ナデ（頂部に指頭圧痕）→脚柱部：横ヘラケズリ→裾部：ヨコナデ　杯部：赤彩（遺存不良）		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SE 表土下層 周溝検出やや下層	20	61	55	–	6012	土師器	高杯	脚裾部片	20	–	（1.9）	9.6?		普通	10R4/6 赤（赤彩）～7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる 3mm 以下のシャモット状暗赤褐色粒が混じる　在地						放射状のヘラケズリ状工具ナデ→裾部：ヨコナデ→赤彩					裾部：横のヘラケズリ状工具ナデ（下から見て時計回り）→ナデ・ヨコナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SE 表土下層 周溝検出やや下層	20	61	56	–	6012	土師器	高杯	脚裾部片	10	–	（0.9）	9.6?		普通	10R4/6 赤（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙～10R4/6 赤（赤彩）	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						ヨコナデ→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目					ナデ・ヨコナデ→接地部周辺に赤色顔料が部分的に付着		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SE 表土下層 周溝検出やや下層	20	61	57	–	6012	土師器	高杯	脚裾部片	小片	–	（0.8）	9.2?		普通	10R5/6 赤（赤彩）～10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙～10R4/6 赤（赤彩）	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				精緻　微砂粒は目立たない　在地						ヨコナデ→赤彩・横～斜めの塗り刷毛目					ヨコナデ		
遺構	図	図版	番号	概報	注記	種別	器種	部位	遺存	寸法 cm 口径	器高	底径	その他	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
1 号墳 SE 表土	20	61	58	–	207－6019	土師器	高杯	裾部	小片	–	（0.9）	9.6?		普通　内面は焼成時黒斑	10R4/6 赤（赤彩）～黒斑	10YR3/1 黒褐（焼成時黒斑）	反転復元
				胎土						外面の特徴					内面の特徴		
				比較的精緻　黒色・灰白色・透明微砂粒が混じる 1mm 以下のスコリア状橙色微粒が混じる　在地						ヨコナデ→赤彩・横の塗り刷毛目（工具幅 1.3cm 以上）					ナデ・ヨコナデ　裾部幅 1cm 程度に粘土粒付着（調整後か）		

第４節　金属製品

金属製品については、実測図とＸ線CTを利用したオルソ画像（表面形態画像と断面透過画像）を示した。本整理事業では、Ｘ線CTを利用した計測を、元興寺文化財研究所と東北大総合学術博物館で実施した。本節及び巻末図版で提示するＸ線CT関連のオルソ画像は、東北大学総合学術博物館での計測データに基づくものである。両機関での計測データに基づく個別資料の詳細観察は、第３章で詳述する。

中央施設出土

中央施設では、金錯銘鉄剣（王賜銘鉄剣）1、鉄剣2、鉄製刀子1、鉄鏃10点以上（破片33点）、金銅装横矧板鋲留短甲1、不明金属製品1が出土している。

金錯銘鉄剣（1）　数片に分かれて出土しており、修理・修復を経て現状は１個体として復元している。関部周辺は欠失しており、形状を推定して復元している。関部近くに、佩表・佩裏の両面に金を主体成分とした象嵌の銘をもつ。

茎は関に向けて緩やかに幅を広げ、残存長は9.8cm、幅は茎尻で1.6cm、遺存部の最大幅は2.2cmをはかり、長さ73.3cmに復元されている。茎部は目釘孔を2孔もち、表にも裏にも柄木に由来する木質が遺存する。剣身は関部を欠き、残存長54.4cmで、角関をもつ剣身長59.6cmに復元されている。剣身断面は、やや厚みのある凸レンズ形で、鎬は不明瞭であり、最大幅3.3cm最大厚0.9cmをはかる。佩表・佩裏ともに、鞘木由来の木質が遺存している。表も裏もともに、柄縁に近い金錯銘の近くに木質が付着しており、象嵌銘文をもつものの、鞘に納めた状態で副葬されていた。

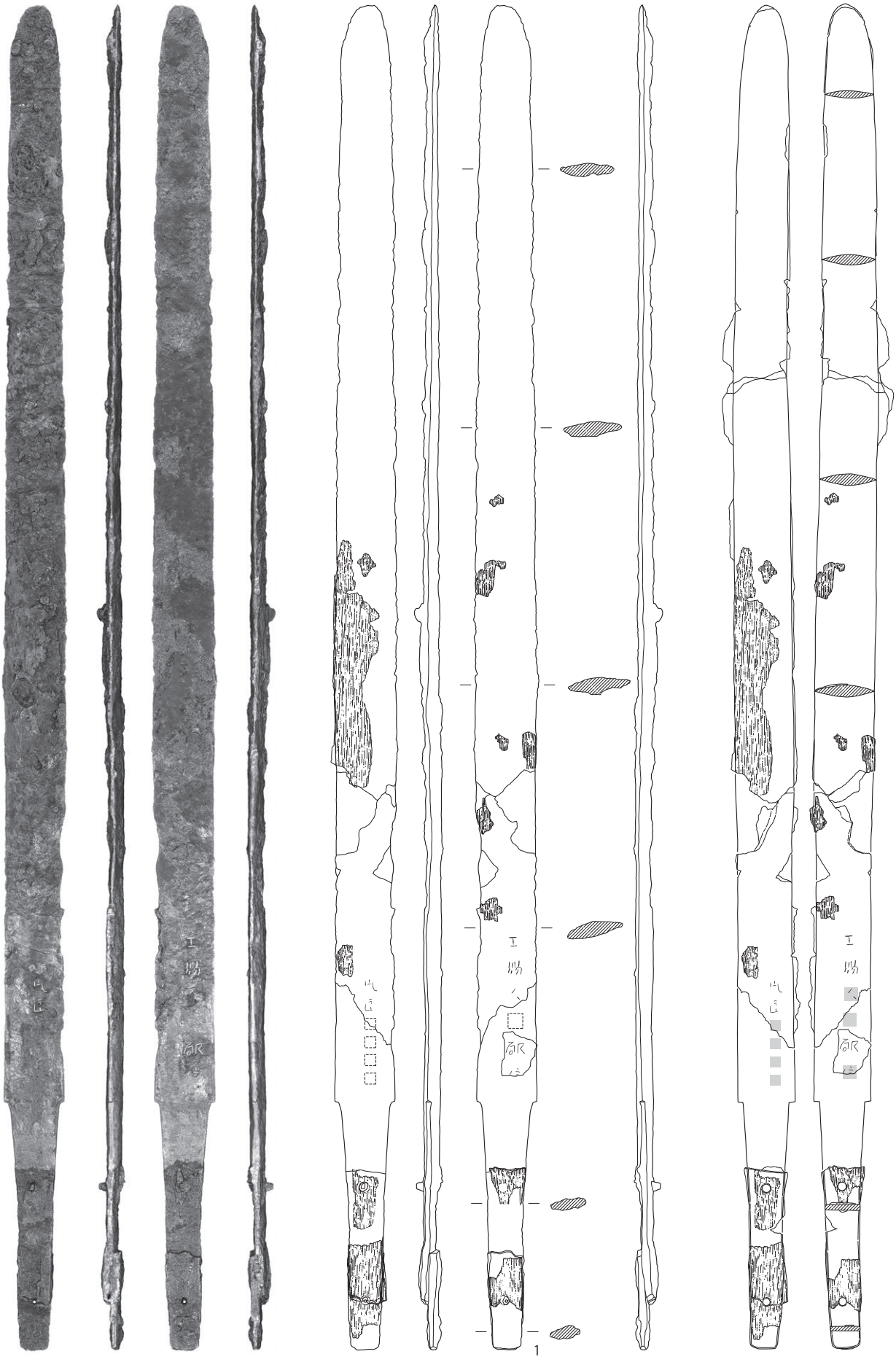
金錯銘は、表に５文字、裏に２文字が遺存する（図版31・32）。それぞれ剣身右側に位置しており、表裏に各６文字を表現すると推定されている。確実なのは、表の「王」「賜」「敬」と裏の「此」「廷」であるが、表の第３字は「久」「人」、第６字は「安」「宮」「官」との推定も可能で、「王賜」以外の釈字は確定していない。

鉄剣（３～５）　剣身部と茎部が遺存する１振と、茎部片１点と剣身部片１点が出土している。茎尻片が２つあるため、金錯銘鉄剣のほかに、鉄剣２振を副葬したことは確実である。

鉄剣（５）は、茎部・関・剣身部の大半が遺存しており、切先が欠損している。茎部は、長さ14.7cm、茎尻幅1.3cm、最大幅2.4cmをはかり、目釘孔を２孔もつ。茎部の断面は中央がやや膨らむ横長方形をなし、茎尻で厚さ3mm、関部付近で厚さ5mmをはかる。茎部では、片面に柄木由来の木質がわずかに遺存している。剣身部は、角関をもち、鎬が不明瞭な凸レンズ形の断面形状である。関部で幅4.3cm、厚さ1cm、剣身遺存部先端で幅3.8cm、厚さ6.5mmをはかる。

茎尻片（４）は、茎尻と目釘孔１孔が遺存する。茎部は中央がやや膨らむ横長方形で、茎尻幅1.6cm、遺存端部で幅1.8cmをはかる。金錯銘鉄剣（１）や鉄剣（５）とは異なる第３の鉄剣が確実に存在した。

剣身部片（３）は、辛うじて刃部両端が遺存しており、鎬は不明瞭だが菱形に近い凸レンズ状の断面をもつ刀身で、幅3.5cm、厚さ6mmをはかる。茎尻片（４）と同一個体であるかは不明だが、別個



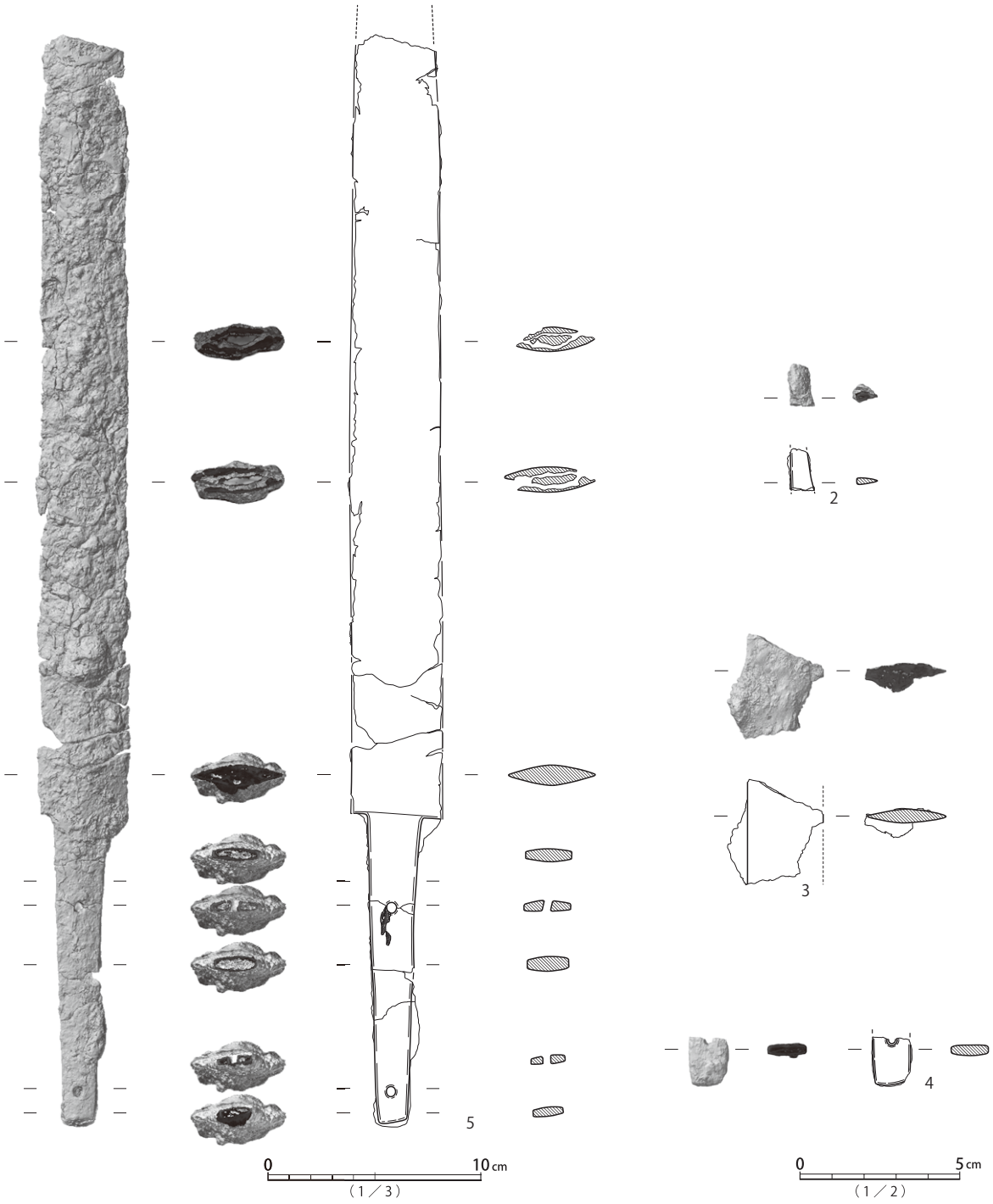
3Dモデル（現状）　3Dモデル図化　保存処理前

第 21 図　金属製品（1）

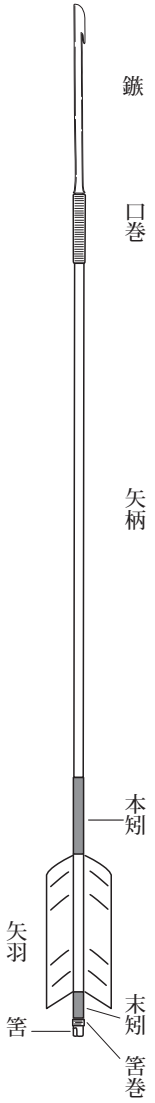
体と認識すれば、金錯銘鉄剣を含めて鉄剣は4振が存在したことになる。

鉄製刀子（2）　刃部が緩やかな内反りをもつ刀子破片である。片刃式鉄鏃の鏃身部である可能性もあるが、刃部の幅と内反り気味の刃部の形状から刀子とみる。茎部と切先を欠損しており、遺存長2cm、最大幅1.2cmで背幅4cmをはかる。

鏃（6～38）　鏃片が33点出土している。一個体が完形で遺存する鏃はなく、鏃身部が遺存する破片が10点、頸部片12点、茎部片11点である。少なくとも10点の鉄鏃（矢）を副葬したことは確



第22図　金属製品（2）



第 23 図　矢の部位名称

第 2 表　中央埋葬施設出土鉄鏃属性表

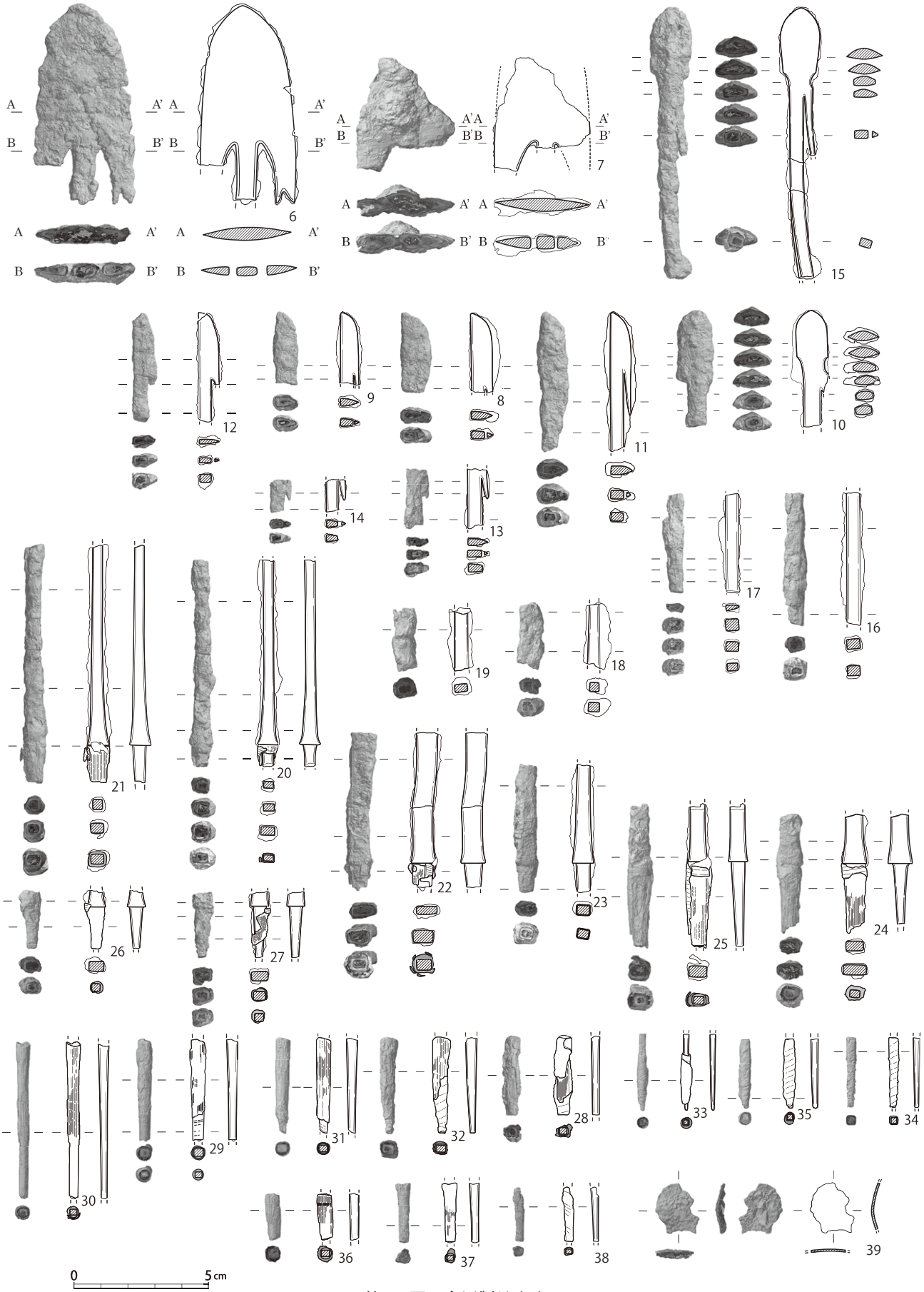
単位（mm）

図番号	鏃身部				頸部	
	形状	長	幅	腸抉長	残長	幅
6	二重腸抉長三角形式	75	34	24	（21）	（8）
7	二重腸抉長三角形式	残 42	35	残 12	（2）	（7）
8	腸抉片刃式	残 27	6	残 4	（4）	（5）
9	腸抉片刃式	残 29	7	残 3	（2）	（5）
11	腸抉片刃式	38	7	16	残 14	5
12	腸抉片刃式	残 28	7	残 3	残 14	5
13	腸抉片刃式	残 11	7	9	残 11	6
14	腸抉片刃式	残 7	7	7	残 5	5
10	別造り片腸抉三角形式	20	12	〈残 8〉	残 23	6
15	別造り片腸抉三角形式	27	14	〈残 28〉	残 73	5

（　）鏃身部に含まれる頸部の長さ　〈　〉別造り腸抉の長さ

単位（mm）

図番号	鏃							矢柄	口巻	
	頸部		関部		茎部				口巻	赤色顔料
	残長	幅	形状	幅	残長	最大幅	茎巻			
16	49	5	—	—	—	—	—	—	—	—
17	36	5	—	—	—	—	—	—	—	—
18	24	5	—	—	—	—	—	—	—	—
19	23	5	—	—	—	—	—	—	—	—
20	68	5	台形	8	8	5		遺存		
21	74	5	台形	8	14	5		遺存	遺存	有
22	48	8	山形 / 斜角	10	9	6		遺存	遺存	有
23	46	5	台形	8	11	5				
24	53	6	台形	7	31	5	確認	遺存	遺存	有
25	41	7	台形	9	23	6		遺存	遺存	有
26	22	5	台形	7	15	4		遺存	遺存	
27	5	6	台形	7	19	4		遺存	遺存	有
28	—	—	—	—	29	3				
29	—	—	—	—	38	5		遺存	遺存	
30	—	—	—	—	57	4	確認	遺存		
31	—	—	—	—	35	4	確認			
32	—	—	—	—	36	4	確認	遺存		
33	—	—	—	—	29	2	確認	遺存		
34	—	—	—	—	26	3	確認			
35	—	—	—	—	26	3	確認			
36	—	—	—	—	17	4	確認	遺存		
37	—	—	—	—	22	4	確認	遺存		有
38	—	—	—	—	20	3	確認	遺存		


6
7
15
12
9
8
11
10
14
13
17
16
19
18
21
20
22
23
26
27
25
24
30
29
31
32
28
33
35
34
36
37
38
39
0
5cm
（1／2）

第 24 図　金属製品（3）

実である。鏃のみが出土しており、矢柄の一部が鏃に付着して遺存するほかは、矢を構成する矢柄や矢羽、本矧、末矧などは遺存していない（第 24 図。）

鏃身部片は、大型扁平で二重腸抉をもつ長三角形式が2点（6・7）、別造り片腸抉をもつ三角形式が2点（10・15）、腸抉片刃式が6点（8・9・11 ～ 14）である（第2表上）。

茎部が遺存する破片では、口巻や矢柄の一部が遺存する個体があり、矢柄への着装前に鉄鏃茎部に繊維を巻き付けた茎巻を確認できる個体もある（第2表下）（図版14・15）。これらの個体では、以下のような鉄鏃の矢柄への着装方法が明瞭にみえている。

蔓・樹皮と推定する撚りのない繊維を鉄鏃茎部に斜行して巻きつける。

縦方向に管状繊維が並ぶ植物質の矢柄に鉄鏃を挿し込む。

紐状の有機物（樹皮などの繊維）を斜行して巻き付ける。

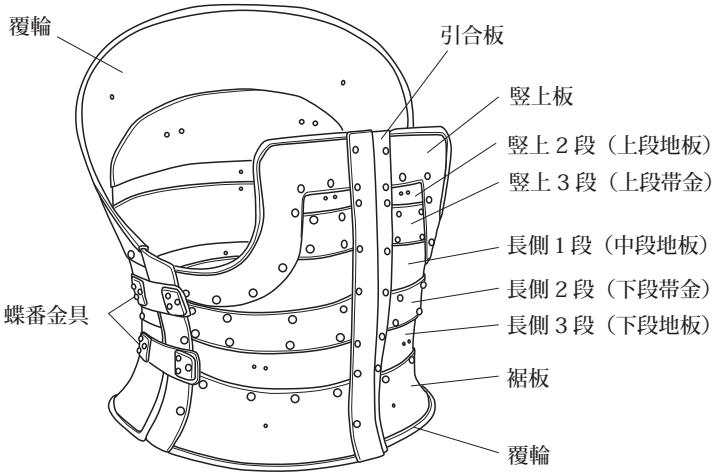
表面に漆等の樹脂を塗布して固定する。

口巻の樹皮状繊維と表面の樹脂層の間には、赤色顔料がみえる個体もある。赤色顔料の塗布は面的に広がるものもあり、口巻全体に及ぶ個体もある（22・24・25）（図版14・15）。赤色顔料は鉱物由来の質量の高さを反映して、明瞭にみえている（図版34・35）。鏃に赤彩もつ装飾性の高い矢が複数存在していた。

不明鉄製品（39）　約 1.8cm 四方で厚さ 1mm、縦断面にく字状の緩やかな湾曲をもつ。詳細は不明である。

金銅装横矧板鋲留短甲（40 ～ 49）　帯金式甲冑の破片が 10 点出土している。鉄板を連接した破片が 7 点あり、帯金もしくは裾板と推定する破片が 1 点、裾板の破片が 2 点である。

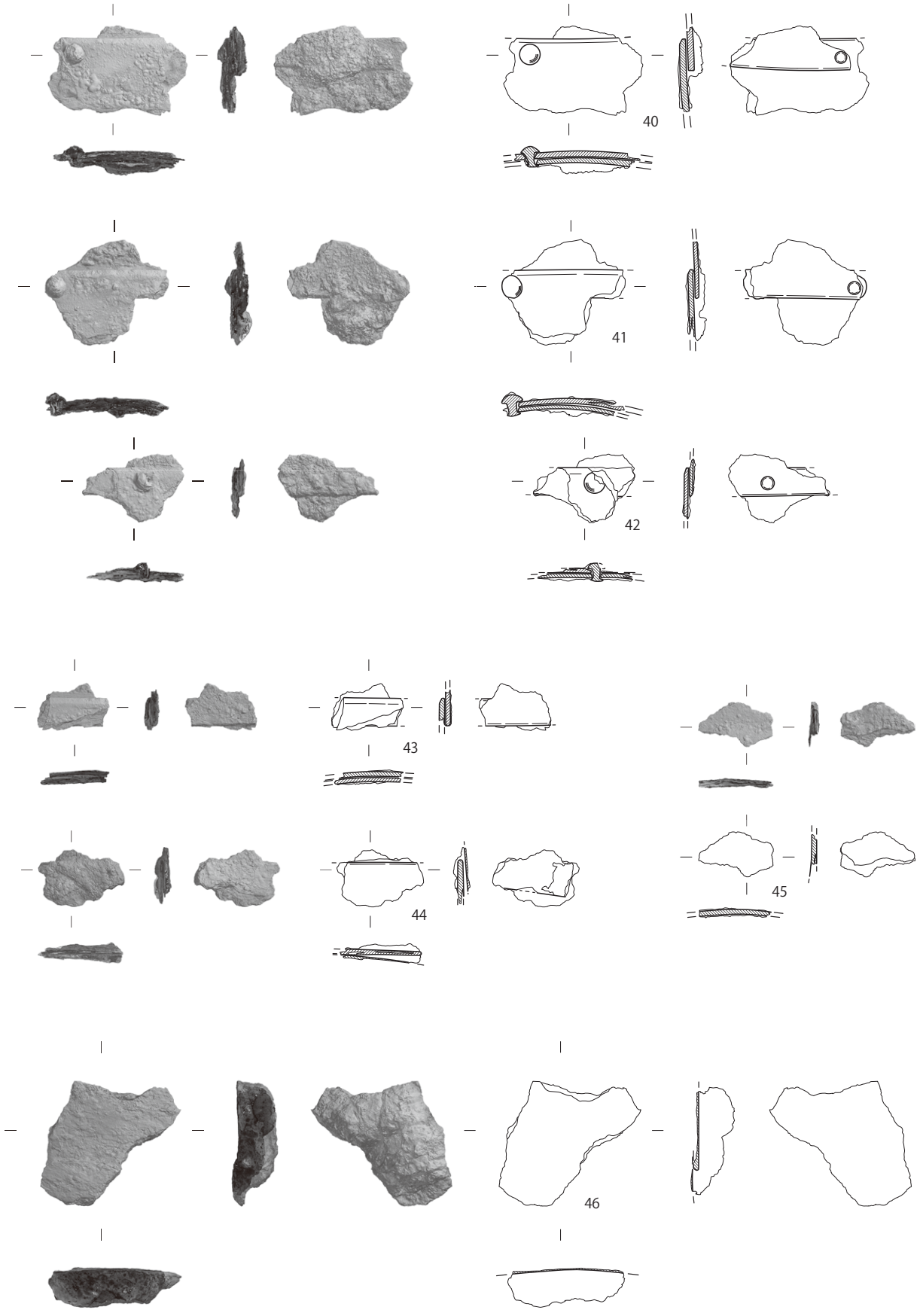
鉄板を連接した破片は、上重ねした鉄板の縦断面が直線状で明瞭な湾曲がみえないため、短甲の帯板と地板を連結した破片である可能性が高い（40 ～ 45）。連接する鋲が遺存する破片（40 ～ 42）では、鋲はいずれも鋲頭径7mmをはかる。上重ねした鉄板には、縁辺に幅3mmの面取りを施している。内面に毛皮の付着がみえる破片もある（41）（図版15）。縦断面が外反りで横断面が内反りの形状をもつ破片（48・49）は、短甲（板甲）の裾板破片である。いずれも、外面が著しく錆化している。帯板、地板、裾板ともに、板幅が判明する破片はない。



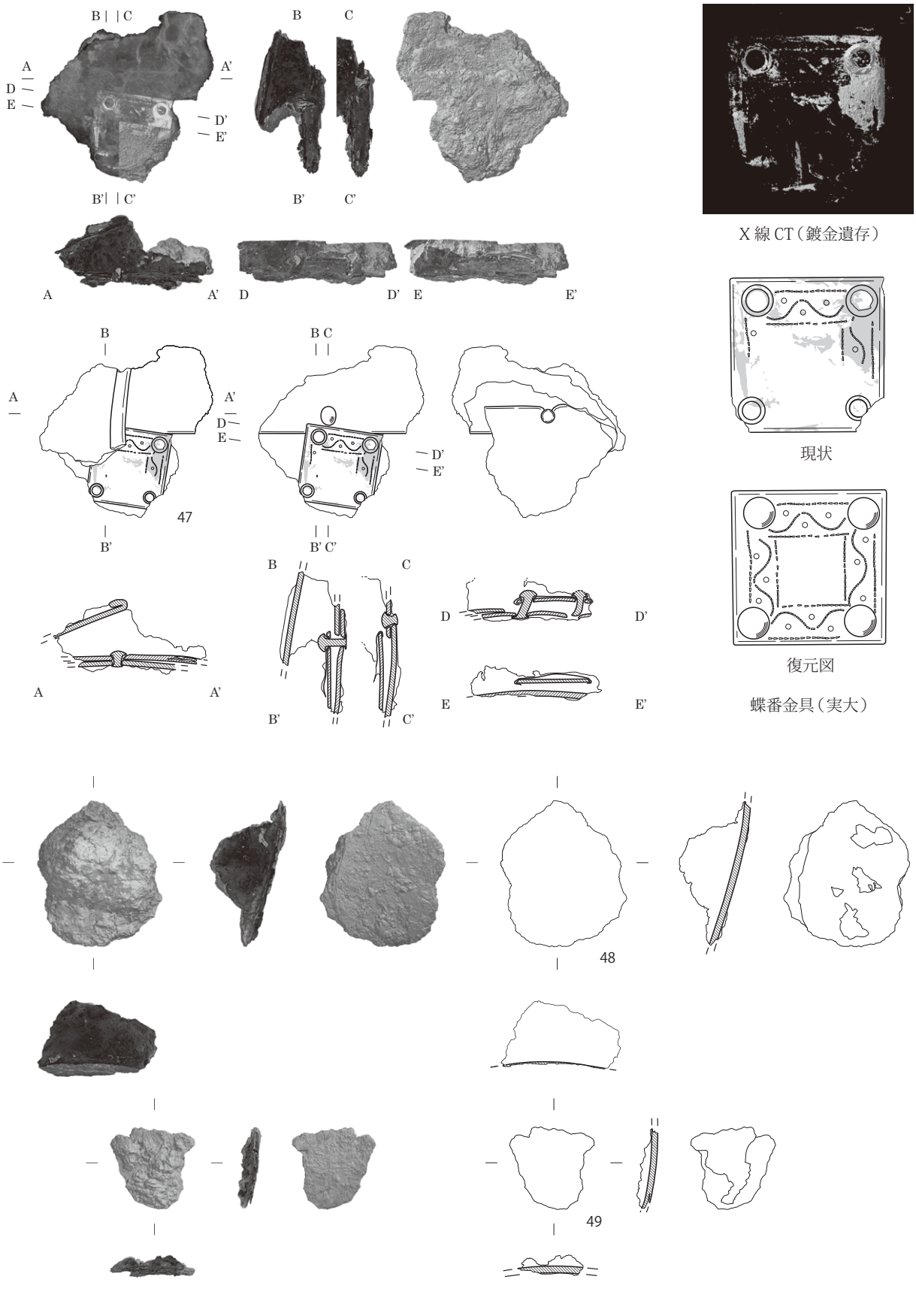
第 25 図　短甲（板甲）の部位名称

金銅装蝶番金具を伴う破片（47）は、連接する2枚の鉄板の上に金銅装蝶番板を装着し、上に端部を折り返した鉄折覆輪の破片が付着している。

短甲脇部の破片であり、通有の右脇開閉とみれば、前胴の裾板と長側3段の地板（下段地板）に前胴の竪上板が付着した破片であるか、後胴の



第 26 図　金属製品（4）



第 27 図　金属製品（5）

長側2段の帯金（下段帯金）と長側3段の地板（下段地板）に後胴の押付板が付着した破片のいずれかである（第25図）。金銅装蝶番金具の装着は、前者の場合は裾板の上になり、後者の場合は長側3段の地板の上になる。ここでは、金銅装蝶番金具の遺存が良好な辺を上として示したが、後者の位置状況を示すことになる。

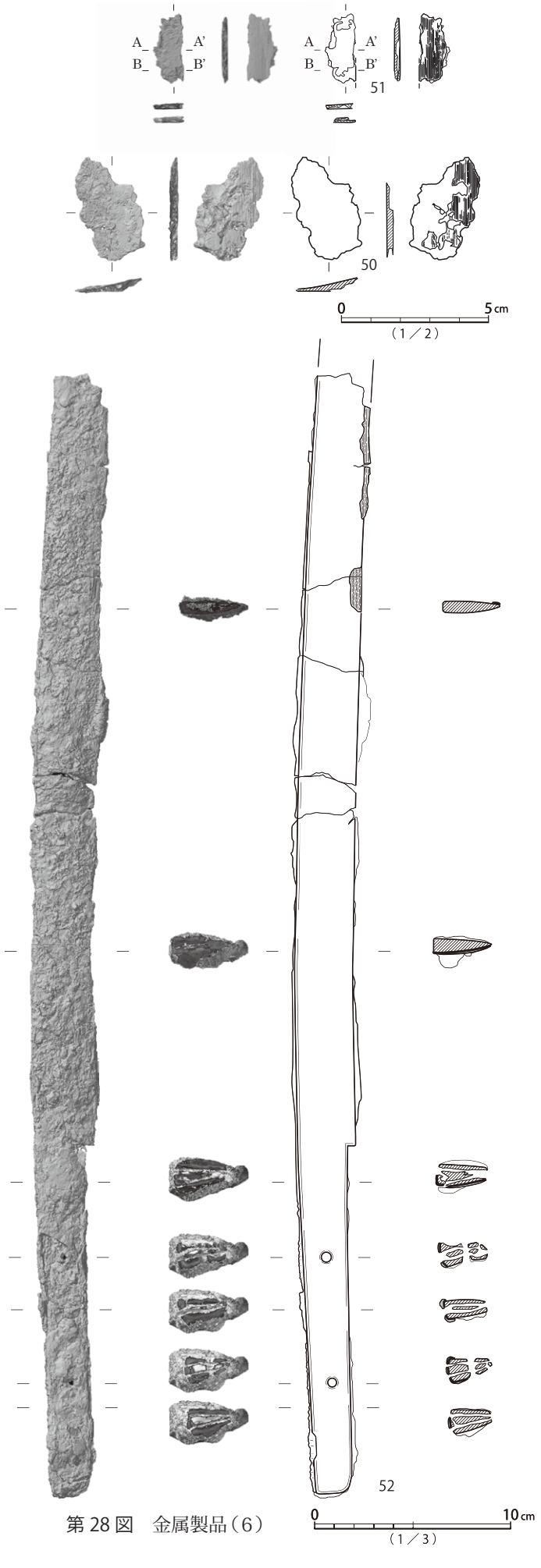
蝶番金具は、方形4鋲で、方形板も鋲も金銅製である。詳細は視認できないが、X線CTでは明確に確認でき、方形板は27mm四方で、厚さ約2mmをはかる。周縁に蹴彫りと円形鏨打ちで表現した波状列点文を巡らせる。鋲は、鋲頭径が5mmであり、5mm程度が遺存している。

地板の形状は判明していないが、三角形の地板を確認できないこと、方形4鋲蝶番金具が横矧板鋲留短甲に多く伴うことから、金銅装の横矧板鋲留短甲1領を副葬していたとみる。

北施設出土

北施設では、鉄刀1、胡簶1、鉄鏃11、きさげ1、砥石1が出土している。

鉄刀（50 ～ 52）　鉄刀（52）は、茎部・関・刀身部の大半が遺存しており、切先を欠損している。茎は、茎尻一文字で、目釘孔を2孔もち、18.9cmをはかる。茎部には、佩裏に柄木由来の木質が遺存している。側面には、柄間に巻かれた巻紐に由来するとみる痕跡（上下に連続する凹凸）が遺存している。刀身部は、関が角関で、刃部がやや内湾する内反りの刀であり、39.6cmが遺存し、刃部幅は2cmをはかる。刀身部も、佩裏には鞘木由来の木質が広範囲に付着しており（図版39・65）、鞘に納めた状態で副葬されていた。



第28図　金属製品（6）

柄縁、鞘縁の形状は不明である。

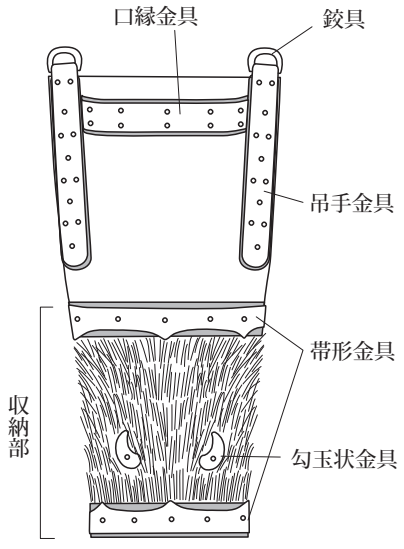
木質が付着した板状の鉄製品破片（50・51）は、木目が鉄刀（52）に付着する木質と類似しており、鞘木の一部が付着した鉄刀の剥落片とみる（図版15）。大きい破片（50）は、木質が付着した面とは反対の面が、横断面で緩やかな弧形をなしており、刀身の横断面と対応するようにみえる。

胡簶（53 ～ 61）　矢の収納具である胡簶は、矢を納める収納部と収納部を垂下する帯部、両者を連結する金具で構成される（第 29 図）。収納部は、木質や獣皮などの有機質を成形素材として、縁金具としての収納部金具（帯形金具）をもち、装飾を意図した勾玉状金具をもつことがある。帯部は、有機質の帯に鋲具・鉈尾・飾板金具を装着し、収納部上辺に取り付けた鋲具と吊手金具により、帯部と収納部とを連結する。北施設では、帯部の飾板金具と推定する破片（54）、胡簶を帯に連結する鋲具と吊手金具（53・55・56）、帯形金具（57・58・60・61）、勾玉形金具（59）が出土している。

飾板金具（54）　縦1.9cm、横2.1cmが遺存する方形飾板金具で、左上隅に1鋲と右辺中央に1鋲が遺存する。方形飾板金具の左上隅には鋲孔の一部が遺存する。破断面で金の付着を確認し、X線CTでも方形飾板金具と鋲頭は質量密度の高い物質で被覆された状況がみえており、金装飾をもつ飾金具と推定する。5鋲をもつ飾金具とみて、鋲孔間の距離をもとに復元すれば、長辺3.0cm、短辺2.2cmの飾板金具となる。なお、鋲脚は、鋲頭や方形飾板金具とは異なる、より高い質量密度をもつ素材で成形されている。表面と裏面ともに赤色顔料が付着している。方形飾板金具は縁辺を折り曲げて革状繊維を挟み込んでいる（図版15）。

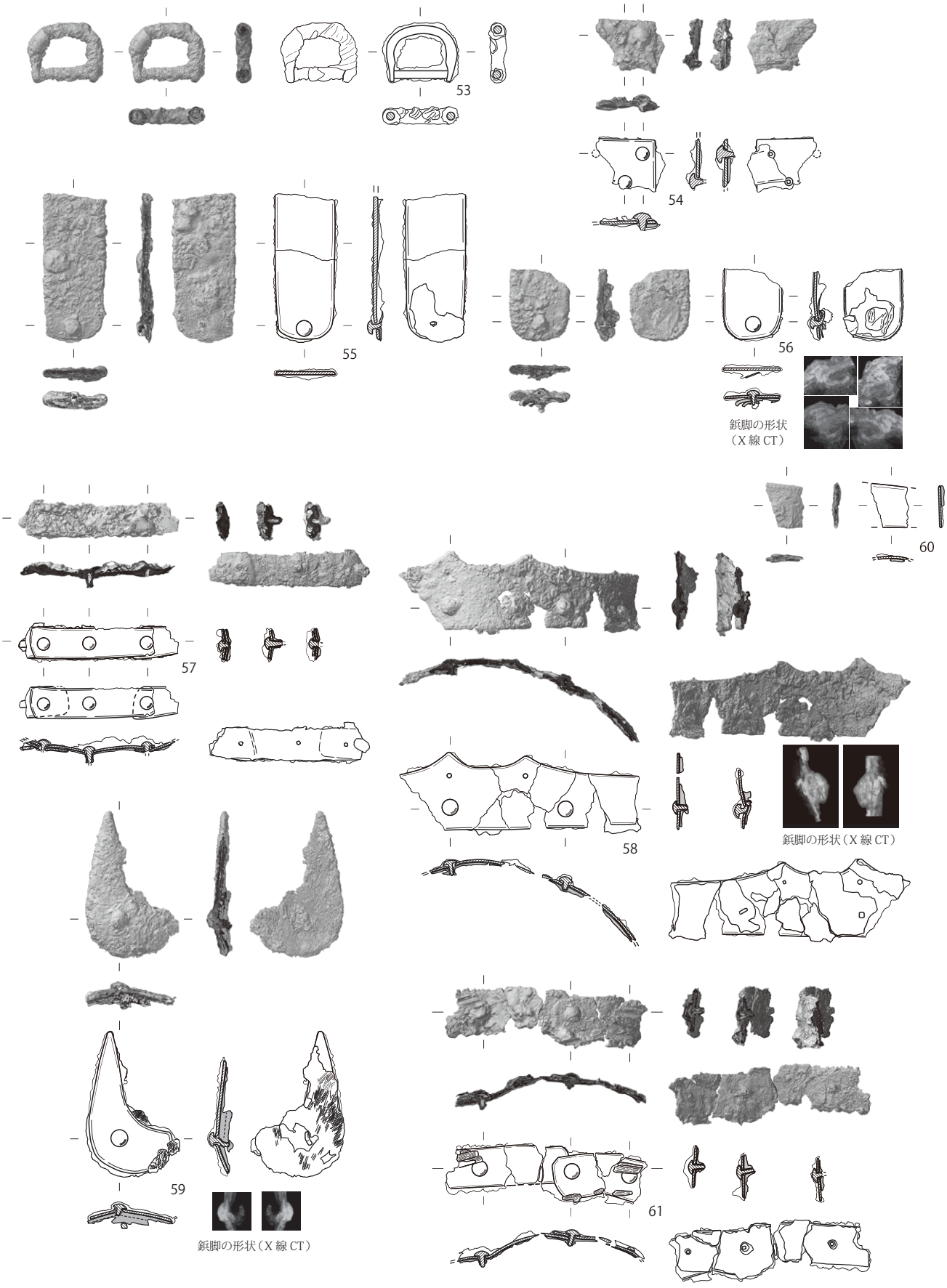
鋲具（53）　環体と軸のみで構成する鋲具であり、刺金をもたない。径3mmの円柱状の鉄棒をU字形に成形し、両端を平たく打ち延ばして、その間に径3mmの円柱状の軸を嵌める。環体は長さ2cm、幅2.7cmであり、軸は長さ1.9cmである。環体と軸では、斜行する多条の繊維がひろく付着しており、織物と革紐を利用して帯部と収納部を連結している（図版15）。胡簶は通常一対の鋲具をもつが、出土したのは1点のみである。

吊手金具（55・56）　短冊形の吊手金具が2点出土している。吊手金具（55）は幅2.2cmで長さ5.4cmが遺存し、吊手金具（56）は幅2.2cmで長さ2.6cmが遺存する。ともに、1鋲をもち、鋲頭径6mmの鋲で、獣皮に固定している。吊手金具（56）では、鋲は上下二層の素材を貫通しており、鋲脚端を二度折り曲げて革状繊維で巻き留めした状況がみえる（図版15・16）。



第 29 図　胡簶部位名称

帯形金具（57・58・60・61）　帯形金具は4点が出土している。帯形金具（57）は収納部の開口部に位置する縁金具で、3枚の鉄板を連接して鋲留している。中央の鉄板を上重ねにしており、その鉄板は幅4.6cm、長さ1.1cmをはかる。3鋲は、鋲頭径が4 ～ 5mmである。出土位置から収納部背面側に位置すると想定する。内面には獣皮が付着し、内外ともに微量の赤色顔料が付着している。赤色顔料は、後述する矢・鏃に関係するとみる（図版16）。


53
54
55
56
鋲脚の形状
（X 線 CT）
60
57
58
鋲脚の形状（X 線 CT）
59
鋲脚の形状（X 線 CT）
61
0
5cm
（1／2）

第 30 図　金属製品（7）

帯形金具（58・60・61）は、収納部の底部に位置する縁金具で、下辺は直線状をなす。帯形金具（58）と帯形金具（60）は、上辺が弧状をなし、山形突起をもつ帯形金具である。帯形金具（58）は正面から右側面、帯形金具（60）は右側面、帯形金具（61）は背面に位置したと推定する。

帯形金具（58）は、山形突起の直下に径2mmの鋲孔があり、下辺に沿い3mmの鋲孔をあけ鋲頭径6mmの鋲を打ち込む。金具内面には獣皮が付着し、金具と獣皮の間に羽枝状の痕跡もみえている（図版16）。横断面が弧状をなすことから収納部は半月形で、金具内面に付着した獣皮の縦断面はL字状をなすことから、収納部下辺に沿い帯形金具を装着したことがわかる。

帯形金具（60）は、上辺下辺ともに緩やかな曲線状をなし、内面に獣毛が付着する（図版17）。帯形金具（61）は、帯形金具の接合部の破片である。下重ねの帯板には1鋲が、上重ねの帯板には2鋲が遺存する。接合部の鉄板の重なりは浅く、下重ねの帯板の端部に鋲脚が接するように、上重ねの帯板に鋲を打ち込む。内面には獣毛が付着し、帯形金具と獣毛の間に羽枝状の物質も確認できる。外面には、複数の矢柄が付着している（図版17）。

勾玉形金具（59）　長さ5.2cm、幅3.0cmの勾玉形の装飾金具で、横断面・縦断面ともに、緩やかな弧状をなす。中央に径3mmの鋲孔をもち、鋲頭径7mmの円頭鋲を打ち込む。鋲は2層以上の有機質を貫通し、鋲脚を折り曲げて紐状繊維で巻き留めている。金具内面には獣皮の獣毛がほぼ全面にわたり付着している。外面にも獣皮が付着している（図版16・17）。

収納部の主要成形素材は獣皮であり、獣皮の獣毛は向きが帯形金具とおおむね直行している。帯形金具と獣皮の間には、錆化による樹脂状の被膜が確認でき、一部には羽枝状の物質の付着もみえている。獣皮には羽の装飾を添え、その表面を漆などの樹脂でコーティングした状況が想定される。

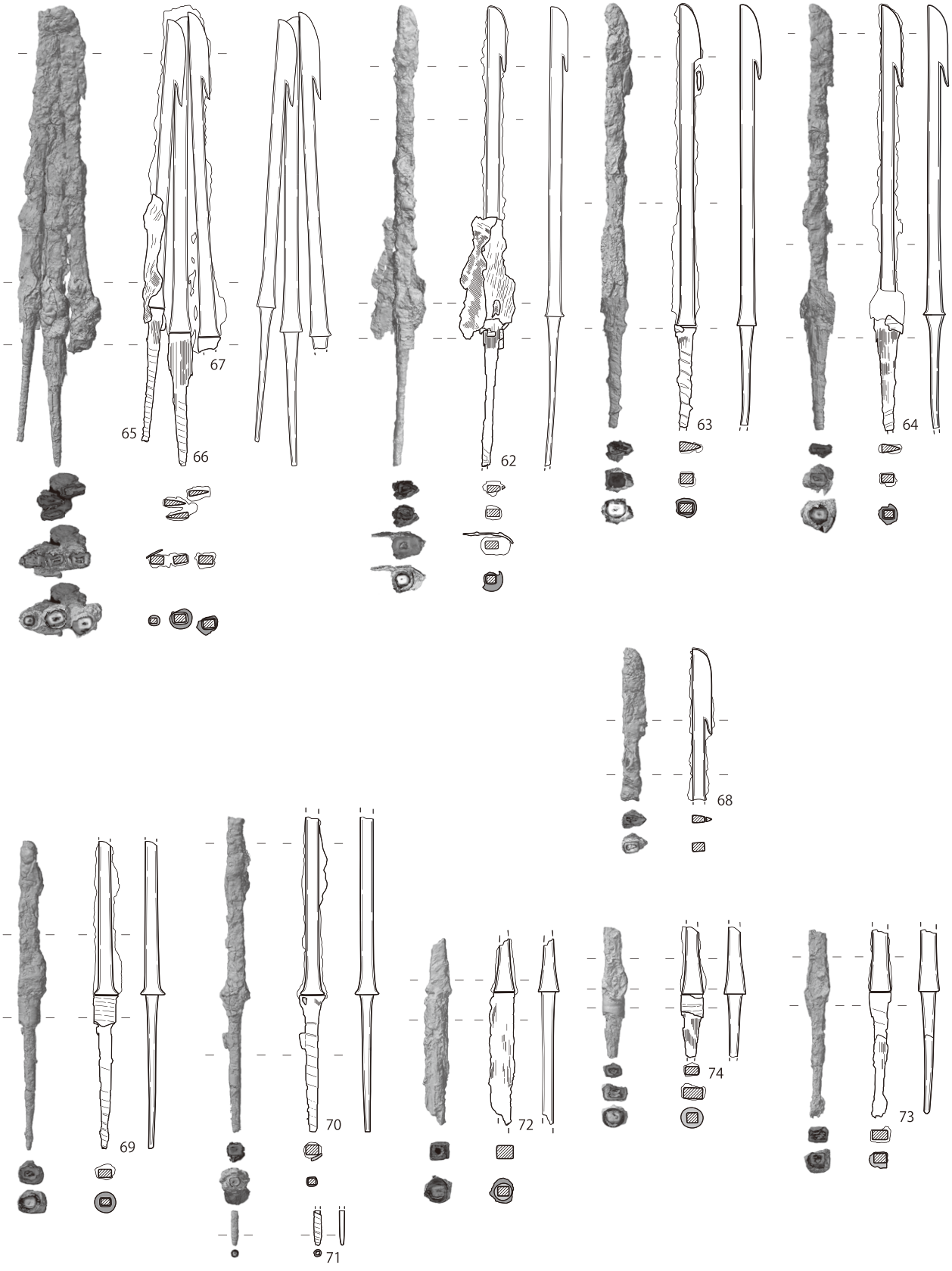
金の装飾板をもつ帯に、横断面が半月形の形状で山形突起の帯形金具と勾玉形金具の装飾をもつ収納部を、円頭方形の吊手金具で連結した胡籙を1具副葬していた。

鏃（62 ～ 74）　鏃片が 13 点出土している。鏃身部から茎部までほぼ完形で遺存する鏃が 6 点あり、鏃身部片が 1 点、頸部と茎部が遺存する破片が 5 点、茎部先端片が 1 点である。頸部の関で数えれば、少なくとも 11 点の鉄鏃（矢）を副葬したことは確実である。鏃のみが出土しており、矢柄の一部が鏃に付着して遺存するほかは、矢を構成する矢柄や矢羽、本矧、末矧などは遺存していない。

鏃身部はいずれも腸抉片刃式で、頸部の遺存が良好な8点はいずれも台形関をもつ長頸鏃であり、腸抉片刃式長頸鏃を11点副葬した可能性が想定できる。切先から茎尻まで遺存する個体（66）では全長約15.8cmをはかる。頸部の遺存も良好で、多くの個体で茎巻、矢柄、口巻の詳細が観察される（図版18・19）。茎巻は幅1.5 ～ 2mmの繊維を茎に斜行して巻き付けており、矢柄は縦方向に管状繊維が並ぶ植物質のもので、口巻は幅2mmほどの樹皮状の繊維を斜行して巻き付けている。

鏃（62）と鏃（65）には、獣皮と羽状の有機物が錆化した付着物がみえる（図版17・18）。胡籙収納部の素材に由来する可能性が高い。羽状の物質には、鳥類の羽枝・小羽根の構造に似た形状がみえており、樹脂で固形化したようにみえる。矢（鏃）の上に獣皮が重なり、獣皮の上に羽が重なる形で、2種の有機物は矢（鏃）に付着している。

鏃（63）では赤色顔料と推定できる痕跡もみえるが、X線CTでは鉱物由来の質量密度の高い物質は確認できず（図版42）、中央施設のような赤彩もつ装飾性の高い矢は存在していない。



第 31 図　金属製品（8）

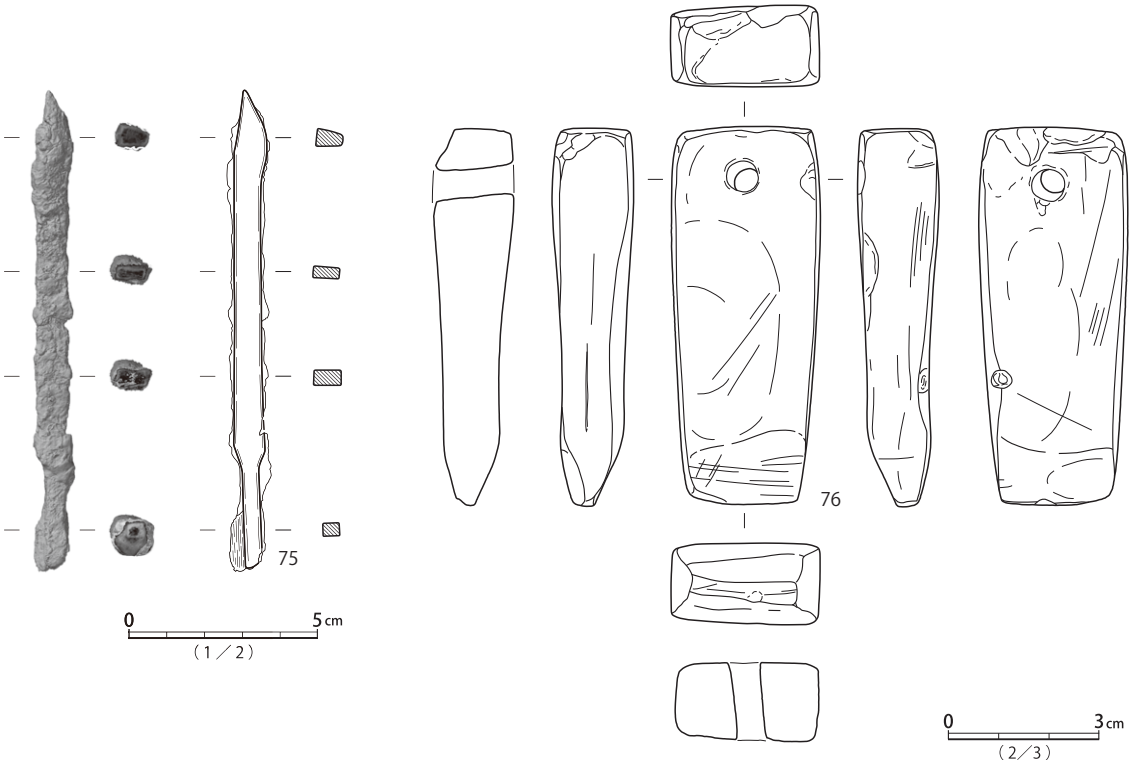
第 3 表　北埋葬施設出土鉄鏃属性表

単位（mm）

図番号	鏃									矢柄	口巻	
	鏃身部		頸部		関部		茎部					
	長	幅	長	幅	形状	幅	残長	幅	茎巻		遺存	幅
62	22	6	85	5	台形	7	52	5	確認	遺存	遺存	7
63	26	7	86	5	台形	7	35	5	確認	遺存	遺存	—
64	29	6.5	80	5	台形	5	40	6	確認	遺存	遺存	—
65	29	6.5	72	5	台形	7	48	5	確認	遺存	遺存	—
66	不明	6.5	（83）	5	台形	7	**47**	5	確認	遺存	遺存	8
67	30	6.5	83	5	台形	7	4	5	確認	遺存	遺存	—
68	30	6.5	残 24	5	—	—	—	—	—	—	—	—
69	—	—	残 53	5	台形	8	**53**	4	確認	遺存	遺存	8
70	—	—	残 62	5	台形	8	48	4	確認	遺存	—	—
71	—	—	—	—	台形	—	12	4	確認	—	—	—
72	—	—	残 18	5	台形	7	46	2	確認	遺存	—	—
73	—	—	残 23	5	台形	7	22	4	確認	遺存	—	8
74	—	—	残 21	5	台形	7	42	5	確認	遺存	遺存	—

（　）推定長　　太字：完存する部位（関・茎部）

きさげ（75）　鋭利な切先を作り出した棒状の工具。金属製品の加工具であるきさげと推定する。全長 13.7cm、幅 8mm をはかる。直線状の本体部分と、鋭利に収束する切先部、本体部に斜めに取りつく茎部で構成している。本体部分は、横断面が長方形もしくは台形をなし、刃をもたない。切先も横断面は台形であり、先端のみ鋭利に仕上げている。茎はナデ関の両関をもち、柄木に由来する木質が付着している。



第 32 図　金属製品（9）・石製品

第 5 節　石製品

北施設副葬品として有孔砥石（提砥）1 点（76）が出土している。砥石は、推定木棺範囲南西側の粘土ブロックに接した位置に胡籙金具等と共に出土している。棺内、胡籙近くにきさげ（75）と共に置かれた可能性が高い（第２章第２節）。

有孔砥石は流紋岩製で楔形を呈する。長軸 7.5cm、幅 3.0cm、厚さ 1.7cm、円孔は直径 5.5 ～ 6mm である。円孔上側の縁はわずかに摩耗しており、何らかの紐で吊り下げたものと見られる。両広面の左側縁に研ぎ減りが見られ、使用者が右利きであれば、孔が身体側に来る向きに左手で持ち、右手で金属利器を長軸方向に往復させ研いだ痕跡と見られる。

有孔砥石はきさげと組み合う仕上げ工程の金工用具であるとともに、渡来系遺物と評価されている。北埋葬施設の被葬者の性格を示唆する遺物の一つである（第４章第４節参照）。

第４表　金属製品・石製品観察表

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	21	5	1	巻首図版1	3001（中央）（現場図より）	鉄	剣（王賜銘）	733	38	8	276.2	左記は復元形の数値
剣身両面に象嵌銘を持つ鉄剣。象嵌素材は金を主体とする。 4片に断片化して出土。切先を含む437mm長のa片（207.25g）、続く剣身下部139.5mm長のb片（55.9g）、24mm長の下部遊離片のc片（2.5g）、茎部99.5mm長のd片（31.45g）があり、c・d片に象嵌文字が伴う。a・b片は接合する。c・d片間の関部から茎部にかけては欠落する。剣身の幅は33mm、厚さは7mm、鎬は両面とも不明瞭である。剣身・茎部とも鞘材と見られる、長軸方向に木目の通る木質が部分的に銹化・遺存する。 剣身片面（A面）の関寄りの位置、鎬右側に、「王」・「賜」・「□（判読不能）」「敬」・「安？」の５字、裏面（B面）の同じく関寄り、鎬右側に、「此」・「廷」の２字が象嵌される。高さは「王」が5.2mm、「賜」が7.7mm、「敬」が7.0mm、「此」が6.4mm、「廷」が6.6mmである。A面銘文は、6字が配されたと見られ「王賜□□敬安」、B面銘文も「此廷□□□□」の６字が推定される。B面銘文の１字目はA面の「王賜」より関側に下がっており、意図的な配置と見られる。A面「賜」・「敬」、B面「此」・「廷」は省画されている。字画は、蛤刃状の先端を持つ鏨を進行軸に傾けて連続的に打ち込んで彫られた溝に、金主体の線状素材を埋め込んで表されている。ストロークは長さ0.5～1mm前後、幅0.3～0.5mm前後で、底面長軸断面は中心の深い弧状、横断面は壁面の若干凹むV字形を呈する。蹴り彫りと呼ばれる技法で、溝内に象嵌線を留めるための明確なアンカー構造は確認できない。 1985年度と1988年度に保存処理を実施。長軸方向にアルミ棒３本を埋め込み、欠損部をエポキシ系樹脂で補っている。											

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	22	62	2	図９－14	207－3020	鉄	刀子（刃部片）	20	12	8	1.94	棟幅 4mm 弱
刀子または鏃片。伴出する片刃鉄鏃と比べ幅が広いため刀子と見られる。棟幅4mm弱の片刃で長軸両端が欠損する。遺存部の身幅は９～12mm。 片面に錆膨れが発達する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	22	62	3	図９－２	なし	鉄	剣（身部片）	49	45	18	32.96	
剣身の一部。断面形は菱形に近い凸レンズ状を呈し、幅37mm、厚さ7.3mmである。 片面に大きく錆膨れが生じるほか、刃部片側の大部分が欠損する。金属遺存部は中実で磁着する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	22	62	4	図９－３	207－3016	鉄	剣（茎尻片）	23	18	9	5.47	孔径 4mm
刀剣の茎部片。断面形は中膨らみの長方形で、中央で7mmの厚さがある。茎尻から22mmの位置に直径4mmの円形の目釘孔が穿たれる。 錆膨れが生じているが、金属部は中実の状態で遺存し、磁着する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	22	62	5	図９－１	3002（中央）（現場図より）	鉄	剣	504	44	8	398.0	茎長 144mm・孔径 5mm
茎部から剣身の途中までが遺存する。剣身は最大幅45mmで、凸レンズ状の断面形を呈し、鎬は不明瞭である。関は両側とも6mm前後出る。茎部の上端幅は27mm、茎尻幅は15mm、断面形は中膨らみの長方形で中央部の厚さが４～６mmあり、茎尻・側縁に向かって薄くなる。茎尻から15mmと98mmの位置に直径6mmの円形の目釘孔が穿たれ、中心間は85mm離れている。茎部には柄材由来の木質が一部遺存する。 1985年度と2024年度に保存処理を実施。											

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	62	6	図９－15	207－3010	鉄	鏃（二重腸抉長三角）	75	38	11	23.11	厚さ 6mm 以下
頸部以下を欠損する鉄鏃。身部横断面は凸レンズ形を呈する。身部長75mmで、長さ24mm、幅8mmの腸抉が両側に入る。腸抉部先端にも深さ6mmの重抉が施される。頸（茎）部は断面長方形で厚さは身部と変わらない。全体が長軸方向に若干弯曲する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	62	7	図９－16	20【7】	鉄	鏃（二重腸抉長三角？）	42	37	12	13.62	厚さ 6mm 以下
鏃身部片。先端と両腸抉部及び頸部以下を欠損する。身部横断面は凸レンズ形を呈する。鏃身幅は６とほぼ同じで、腸抉が伴うことから形態も同様だった可能性がある。頸（茎）部は横断面が長方形を呈し、鏃身接続部で破断する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	62	8	図９－21	207	鉄	鏃（長頸腸抉片刃？）	30	11	6	3.08	背幅４～5mm
鏃身部頸部寄りの位置から欠損する鏃。鏃身部は平片刃造で腸抉が伴う。破断面から頸部は断面形が幅6mm、厚さ5mmの長方形を呈すると見られる。 両面とも錆膨れが目立つ。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	62	9	図９－22	207	鉄	鏃（長頸腸抉片刃？）	27	9	6	2.03	背幅 4mm 前後
鏃身部片。平片刃造で腸抉が伴う可能性がある。 両面とも錆膨れが目立つ。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	10	図９－18	207	鉄	鏃（長頸三角）	43	14	7	5.18	鏃身部厚さ 5mm 前後
頸部以下を欠損する長頸鏃。片丸造で長さ26mm、幅14mm以下の鏃身部を持つ。腸抉は先端を欠失。頸部は16mm程度遺存し、横断面は幅7mm、厚さ5mm程度の長方形を呈する。X線CT画像によると別造り片腸抉の可能性が高い。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm 長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	11	図９－19	207	鉄	鏃（長頸腸抉片刃）	52	12	7	6.16	背幅 5mm 前後
頸部以下を欠損する長頸鏃。鏃身部は平片刃造で腸抉が伴うと見られるが、銹化による変形と埋没で形状は不明確である。頸部の横断面は幅6mm、厚さ5mm前後の長方形を呈する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	12	図 9－20	207	鉄	鏃（長頸腸抉片刃）	40	10	6	2.56	背幅 3 ～ 4mm
頸部以下を欠損する長頸鏃。鏃身部は平片刃造で腸抉が伴う。鏃身先端と逆刺状部先端が欠失する。頸部は幅 6mm、厚さ 5mm 前後の長方形を呈する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	13	図 9－24	207	鉄	鏃（長頸腸抉片刃？）	22	9	5	1.24	背幅 4mm 前後
鏃身部と頸部の移行部付近の破片。長軸両端を欠失する。頸部寄りの鏃身部と腸抉部 11mm が遺存する。鏃身部は平片刃造である。頸部横断面は幅 8mm、厚さ 5mm 程度の長方形を呈する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	14	図 9－23	14	鉄	鏃（長頸腸抉片刃？）	12	8	4	0.60	背幅 4mm 前後
鏃身部と頸部の移行部付近の破片。長軸両端を欠失する。頸部寄りの鏃身部と腸抉部 8mm が遺存する。鏃身部は平片刃造である。頸部横断面は幅 6mm、厚さ 4mm 程度の長方形を呈する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	15	図 9－17	207	鉄	鏃 （別造り片腸抉長頸三角）	101	16	8	11.71	鏃身部厚さ 5mm 前後
茎部を欠損する長頸鏃。片丸造で長さ 26mm、幅 16mm 以下の鏃身部を持つ。腸抉はない。頸部上端近くに別造り片腸抉が付けられ、遺存部長は 16mm である。横断面形は鏃身部形状と対応し、片切刃造である。頸部の横断面は幅 6mm、厚さ 5mm 前後の長方形で、長さ 72mm 程度が遺存する。 別造り片腸抉の先端は 1988 年概報図において、現状より長い形が実線で表現されており、本来は 5mm 程度長かった可能性が高い。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	16	図 9－37	【2】07－3【0】1 ■（5?）	鉄	鏃（長頸）	49	9	9	5.12	
頸部の一部。横断面は幅 7mm、厚さ 5mm 前後の長方形を呈する。錆化による剥落・錆膨れが目立つ。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	17	図 9－35	207	鉄	鏃（長頸）	37	8	7	2.30	
頸部の一部。横断面は幅 6mm、厚さ 5mm 前後の長方形を呈する。錆化による変形でやや蛇行し、錆膨れも発達する。先端方向と推定される幅広の側は剥落が著しい。 概報図と比べ錆膨れが大きく、剥落が認められるため劣化の進んだ可能性が高い。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	18	図 9－36	207－3013	鉄	鏃（長頸）	25	10	8	2.82	
頸部の一部。横断面は幅 7 ～ 8mm、厚さ 5 ～ 7mm 前後の長方形を呈する。錆化による変形でやや表裏方向に弯曲し、錆膨れも発達する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	19	図 9－34	207－3018	鉄	鏃（長頸）	23	10	8	2.85	
頸部の一部。横断面は幅 8mm、厚さ 6mm 前後の長方形を呈する。錆化による変形でやや蛇行し、錆膨れも発達する。一部に口巻の繊維が遺存する。 概報図では長軸が直線的に描かれているため、変形が進行した可能性がある。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	20	図 9－26	207－3015	鉄	鏃（長頸）	76	9	8	6.30	
頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄の可能性が高い有機物が錆化して一部遺存する。接続部は台形関である。頸部横断面は 6mm 前後の方形、茎部横断面は幅 5mm、厚さ 4mm 程度の長方形を呈する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	21	図 9－25	207	鉄	鏃（長頸）	88	10	9	10.34	
頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）と口巻（幅 2mm 以下の紐状有機物で連続して巻き留められる。蔓あるいは樹皮か）が錆化して部分的に遺存する。接続部は台形関である。頸部横断面は 6 ～ 7mm の方形、茎部横断面は 5mm 前後の方形を呈する。矢柄の幅は 8.7mm 前後。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	22	図 9－27	207	鉄	鏃（長頸）	59	10	10	7.10	
頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）と口巻（幅 2.5mm 以下の紐状有機物が巻かれる。蔓あるいは樹皮か）が錆化して一部遺存する。口巻を覆う樹脂の剥落部に赤色顔料の痕跡が認められる。接続部は台形関に近いが、やや鈍角気味である。頸部横断面は幅 9 ～ 10mm、厚さ 5mm 前後の長方形、茎部横断面は幅 6mm、厚さ 5mm 程度の長方形を呈する。鏃頸部とすると幅が広く、山形関もしくは斜角関に近い形が北施設副葬品のきさげに近似する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	23	図 9－29	207	鉄	鏃（長頸）	48	9	8	4.63	
頸部から茎部にかけての破片。頸部横断面は幅 7 ～ 8mm、厚さ 5 ～ 7mm の長方形、茎部横断面は幅 6 ～ 7mm、厚さ 5 ～ 7mm の長方形を呈する。接続部は台形関である。錆化による剥落と錆膨れが認められる。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	24	図 9－31	207	鉄	鏃（長頸）	44	10	9	4.48	
頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）と口巻（幅 2mm 前後の紐状有機物が巻かれる。樹皮）が錆化して一部遺存する。口巻は樹脂塗装され、樹皮層との間には部分的に赤色顔料が遺存する。矢柄と茎の間には茎巻と見られる幅 2mm 前後で左下がりに巻かれる紐状有機物（植物繊維か）が認められる。接続部は台形関である。矢柄の幅は 8.5mm 前後。頸部横断面は幅 7 ～ 8mm、厚さ 5mm 前後の長方形、茎部横断面は幅 4mm、厚さ 3mm 前後の長方形を呈する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	63	25	図 9－28	207－3011	鉄	鏃（長頸）	53	10	10	5.47	
頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）と口巻（幅 2mm 前後の紐状有機物が巻かれる。樹皮）が銹化して一部遺存する。口巻破断面には表面から、樹脂・赤色顔料・樹皮状繊維（口巻素材）・タケ状植物（矢柄）の各層が確認できる。接続部は台形関である。頸部横断面は幅 7mm 前後、厚さ 6mm 前後の長方形、茎部横断面は一辺 5 ～ 6mm の方形を呈する。矢柄の幅は 8.2mm 前後。 概報図より頸部が短くなっているほか、図に表現された口巻部分が剥落・欠失し、劣化が進んでいる。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	26	図 9－32	207－3012	鉄	鏃（長頸）	22	9	6	1.45	
頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）と口巻（幅 2mm 前後の紐状有機物が長軸に対して若干右下がりに巻かれる。蔓あるいは樹皮か）が銹化して一部遺存する。接続部は台形関である。頸部横断面は幅 6mm、厚さ 4mm 前後の長方形、茎部横断面は幅 4mm、厚さ 3mm 前後の長方形を呈する。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	27	図 9－33	207	鉄	鏃（長頸）	24	8	7	1.72	
頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）が銹化して一部遺存する。口巻の繊維が部分的に遺存し、一部に赤色顔料と見られる赤変箇所が認められる。接続部は台形関である。頸部横断面は幅 7mm、厚さ 6mm 前後の長方形、茎部横断面は 1 辺 4mm 前後の方形を呈する。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	28	図 9－42	207	鉄	鏃（長頸）	30	7	6	1.89	
茎部の一部。横断面は先側が 1 辺 5mm 前後、元側が 1 辺 4mm 前後の方形を呈する。部分的に長軸方向の繊維を示す竹管状の矢柄が銹化・遺存する。銹化による剥落が進んでいる。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	29	図 9－39	207	鉄	鏃（長頸）	37	7	6	2.19	
茎部の一部。横断面は先側が 1 辺 5mm 前後、元側が 1 辺 3mm 前後の方形を呈する。長軸方向の繊維が見える竹管状の矢柄が銹化し遺存する。矢柄破断部に下層の茎巻（右上がり）が認められる。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	30	図 9－38	なし	鉄	鏃（長頸）	58	6	6	2.23	
茎部の一部。元側端部近くまで遺存する。横断面は先側が 1 辺 5mm 前後、元側が 1 辺 3mm 前後の方形を呈する。長軸方向の繊維が見える竹管状の矢柄が銹化し遺存する。 概報図と比べると、端部側の折損が生じており、矢柄遺存部の剥落が一部で進んでいる。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	31	図 9－40	207	鉄	鏃（長頸）	36	6	6	1.95	
茎部の一部。横断面は先側が 1 辺 5mm 前後の方形、元側が幅 3mm、厚さ 2mm 前後の長方形を呈する。元側端部付近を除き、長軸方向の繊維が見える竹管状の矢柄が銹化・遺存する。端部から 5mm 程は、幅 1mm 前後の繊維による茎巻が遺存する（やや右下がりに巻かれる）。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	32	図 9－41	207	鉄	鏃（長頸）	36	7	6	2.13	
茎部の一部。元側端部が遺存する。端部に向け急激に細くなる作り。横断面は関側が 1 辺 7mm 前後、端部が 1 辺 3mm 前後の方形を呈する。先側に長軸方向の繊維が見える竹管状の矢柄が部分的に銹化し遺存する。端部付近 10mm 程には、幅 2mm 前後の繊維による茎巻が遺存する（左下がりに巻かれる）。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	33	図 9－43	なし	鉄	鏃（長頸）	29	5	4	0.59	
茎部の一部。元側端部近くの破片。横断面は先側が 1 辺 3mm 前後、端部が 1 辺 1.5mm 前後の方形を呈する。やや左上がりに幅 1mm 前後の繊維が巻かれる茎巻の上に、長軸方向の繊維を示す竹管状の矢柄が銹化し、いずれも部分的に遺存する。 概報図と比べ剥落が著しい。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	34	図 9－45	207	鉄	鏃（長頸）	26	5	5	1.05	
茎部の一部。元側端部近くの破片。横断面は先側で 1 辺 4mm 前後、元側は 1 辺 2mm 前後の方形を呈する。端部が遺存するように見受けられる。幅 2mm 前後の繊維（撚りは認められない。蔓・樹皮等）が右上がりに巻かれる茎巻が銹化し良好に遺存する。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	35	図 9－44	207	鉄	鏃（長頸）	26	4	4	0.66	
茎部の一部。元側端部近くの破片。横断面は先側が 1 辺 3.5mm 前後、元側が 3mm 前後の方形を呈する。幅 2mm 前後の繊維（撚りは認められない。蔓・樹皮等）が右上がりに巻かれた茎巻が銹化し遺存する。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	36	図 9－46	207	鉄	鏃（長頸）	17	6	6	0.68	
茎部の一部。横断面は先側で 1 辺 4.5mm 前後の方形、元側で幅 4mm 前後、厚さ 3mm 前後の長方形を呈する。長軸方向の繊維を示す竹管状の矢柄が銹化し遺存する。先側破断面には、茎と矢柄の間に茎巻が認められる。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	37	図 9－47	14	鉄	鏃（長頸）	22	5	6	0.96	
茎部の一部。横断面は先側で幅 5mm 前後、厚さ 4mm 前後の長方形、元側で 1 辺 4mm 前後の方形を呈する。長軸方向の繊維を示す竹管状の矢柄が銹化し部分的に遺存する。矢柄の下には左上がりに繊維を巻かれる茎巻が部分的に確認できる。											
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	38	図 9－48	207	鉄	鏃（長頸）	20	4	4	0.47	
頸部の一部。横断面は先側で 1 辺 3.5mm 前後、元側で 1 辺 3mm 前後の方形を呈する。断片的に長軸方向に繊維の見える矢柄が遺存し、下に左上がりに繊維の巻かれた茎巻が認められる。 概報図より剥落が進んでいる。											

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	24	64	39	図 10－15	207－3023	鉄	不明片	20	14	4	0.78	板状部厚さ 1mm
弯曲する板状片。凸面側の表面は剥落と錆膨れに占められ、ほぼ原形が遺存しない。凹面は銹化した塗膜状の錆膨れが認められ、円筒状重層構造の表面から脱落したように見受けられる。 概報では北施設出土として胡籙金具の一部と推定されるが、遺物注記は中央施設出土を示す。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	26	64	40	図 9－5	207	鉄	短甲 （帯金・地板片）	48	30	10	12.26	板厚さ 1.5 ～ 2mm
地板と帯金または裾板片。40 ～ 49 は同一個体片の可能性が高い。外側に高さ 28mm 以上、内側に高さ 18mm 以上の板状片が重ねられ、鋲で連接される。重複部幅は 7mm 前後。板の厚さは 1.5 ～ 2mm で、横位に弱く内弯する。帯金の遺存縁辺は幅 2mm 程度が斜めに面取り加工される。鋲頭は円形で高さ 2.5mm、直径 7mm 前後。 内面に錆膨れが発達する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	26	64	41	図 9－6	207－3017	鉄	短甲 （帯金・地板片）	43	36	8	9.84	板厚さ 1.5 ～ 2mm
地板と帯金または裾板片。外側に高さ 27mm 以上、内側に 20mm 以上の板状片が重ねられ、鋲で連接される。重複部幅は 10mm 前後。板の厚さは 1.5 ～ 2mm で、横位に弱く内弯する。帯金の遺存縁辺は幅 2.5mm 程度が斜めに面取り加工される。鋲頭は円形で高さ 3mm、直径 7mm 前後。内面、鋲の先端は直径 5mm 前後に広がる。 内面に錆膨れが発達する。微量の獣毛状付着物が認められる。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	26	64	42	図 9－10	207－3022	鉄	短甲 （帯金・地板片）	36	23	7	3.85	板厚さ 1.5 ～ 2mm
帯金・地板片。外側に高さ 20mm 以上、内側に高さ 16mm 以上の板状片が重ねられ、鋲で連接される。重複部幅は 12mm 前後。板の厚さは 1.5 ～ 2mm で、横位にごくわずかに内弯する。帯金・地板の遺存縁辺は若干丸みを帯びる程度に面取りされる（帯金は斜めに面取りされた可能性あり）。鋲頭は円形で高さ 3mm、直径 7mm 前後。裏面に鋲脚のかしめが残る。 板面方向の剥落が進む。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	26	64	43	図 9－9	207	鉄	短甲 （帯金・地板片）	25	16	5	2.44	板厚さ 1.5 ～ 2mm
帯金・地板片。外側に高さ 12mm 以上、内側に高さ 15mm 以上の板状片が重なっている。重複部幅は 11mm 前後。板の厚さは 1.5 ～ 2mm で、横位に弱く内弯する。帯金の遺存縁辺は幅 3mm 程度が斜めに面取り加工される。地板縁辺は若干丸みを帯びる程度に面取りされる。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	26	64	44	図 9－7	207	鉄	短甲 （帯金・地板片）	30	20	7	3.62	板厚さ 1.5 ～ 2mm 前後
帯金・地板片。外側に高さ 17mm 以上、内側に高さ 16mm 以上の板状片が重なっている。重複部幅は 12mm 前後。板の厚さは 1.5 ～ 2mm 前後で、横位に弱く内弯する。帯金の遺存縁辺は若干丸みを帯びる程度に面取りされる。 表面の剥落が進む。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	26	64	45	図 9－13	なし	鉄	短甲？	26	17	3	1.25	厚さ 3mm 前後
帯金・地板片か。弱く弯曲する板状片で、銹化で層状の分離・剥落が認められる。破片長軸が元の横位に当たるか。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	26	65	46	図 9－11	207	鉄	短甲 （帯金・地板片）	51	44	15	29.85	板厚さ 2mm 以上
帯金・地板片。外側に高さ 17mm 以上、内側に高さ 27mm 以上と推定される板状片が重なっている。剥落が進み、重複部幅は不明である。明確な遺存縁辺は認められない。 内面側に錆膨れが発達する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	27	64	47	図 9－4	207	鉄	短甲 （蝶番・覆輪片）	61	59	29	56.23	蝶番 1 辺 28mm 前後 ・孔径 3mm 前後
金銅装短甲の破片。40 ～ 49 は同一個体片の可能性が高い。 覆輪片は、厚さ 1.5 ～ 2mm 前後の板の縁が幅 6mm 前後を折り返されている（現状、有機物は伴っていない）。縁辺と並行の向きに若干内弯する。前胴竪上板の一部が移動し銹着したものか。 蝶番金具の伴う破片は、横位に弱く内弯する厚さ 1.5 ～ 2mm の板 2 枚以上が鋲により連接される。概報図 9 の右側を天として右脇部の後胴長側 3 段と後胴裾板と見るのが良いか。 蝶番金具は 28mm 四方のほぼ正方形を呈し、青銅を貼られた後に 4 箇所穿孔され鋲留めされる（銅を含め厚さ 3mm 前後、円孔は直径 3mm 弱）。青銅は大部分が剥落し、肉眼では錆に覆われていない箇所に金は認められないものの、蛍光 X 線分析では反応があるため、金銅板が使用された可能性が高い。CT 画像では、周縁に沿って 2 本の圏線とその間に波状列点文が認められる。 概報時点では蝶番金具と鋲がほぼ遺存する状態で実線により図化されているが、その後、劣化が進み分離あるいは欠失した可能性がある。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	27	65	48	図 9－12	207－3021	鉄	短甲 （帯金・地板片）	53	43	25	50.21	板厚さ 3mm 前後
押付板または裾板か。銹化・剥落が進み弯曲が不明瞭で、内外面の判別が難しい。錆膨れの発達する面が内側か。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
中央施設	27	65	49	図 9－8	207－3024	鉄	短甲 （帯金・地板片）	30	29	6	5.13	板厚さ 3mm 前後
帯金・地板片。ごく一部に縁辺が遺存するように見受けられる。 推定外面の表面に錆膨れが発達する。内面側は剥落が生じている。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	28	65	50	図 10－19	なし（3004 一括）	鉄	胡簶金具？（鉄刀鞘木質？）	36	22	4	1.93	
木質の銹着する板状片。鉄刀からの剥落片か。破片長軸方向に直交する向きにわずかに弯曲する。鞘材の可能性のある木質（針葉樹か）が固着する。木目は破片長軸と揃う。木質付着面の裏面は平滑である。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	28	65	51	図 10－20	なし（3004 一括）	鉄	胡簶金具？（鉄刀鞘木質？）	24	10	2	0.55	
木質の銹着する板状片。鉄刀からの剥落片か。破片長軸方向に木目が一致する（針葉樹か）。木質付着面の裏面は平滑である。50 の破片か。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	28	65	52	図 10－1	3001（北）（現場図より）	鉄	大刀	563	33	9	413.2	目釘孔（先・元）直径 5mm
刃部先端側を欠損する大刀。刀身は 390mm 程遺存する。関は不明瞭だが刃側に伴うと見られる。棟幅は先端寄りが 6mm、関寄りの位置で 8mm 前後を測る。鞘に由来する木質が銹化し、主に柄側で部分的に遺存する。茎は鞘口で 26mm、茎尻で 20mm の幅を持つ。茎尻は両角が直角に近く直線的である。茎部横断面は刃側で 3mm、棟側で 6 ～ 8mm 前後の台形を呈し、刃側が若干細い。柄部は 173mm の長さあり、茎端部から 56mm と 118mm の位置に直径 5mm の目釘孔が穿たれる。柄材は刀身と並行する木目を示す木材片が銹化し一部に遺存する。 1985 年度と 2024 年度に保存処理を実施。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	53	図 10－14	207	鉄	胡簶金具（絞具・D 字形環状金具）	27	22	7	3.52	コの字形部品直径 5 ～ 7mm、軸棒直径 4 ～ 5mm
吊手金具上部に伴う環状部品。直線的な棒状品をコの字形の部品で挟む構造。いずれも横断面は円形を呈する。コの字形部品の内側接合部は両端に向け薄く幅広に作られる。コの字形部品は両肩は丸みを帯びており、図正面右側には斜め方向の条線を示す繊維が巻き付いた状態で銹着する。繊維は部分的に多層の布目（平織・錦）が認められるため、布・革等による掛け紐と推定される。左上部は錆に覆われているが、X 線 CT 画像では革に類似した組織が観察されている。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	54	図 10－25	207	鉄	胡簶金具	19	14	6	0.80	鋲直径 5mm 前後
吊手金具の板状部もしくは飾板金具と見られる破片。方形の一角が遺存する。円頭鋲が少なくとも 2 箇所打たれ板状素材（網状組織が見えるため皮革か）と連接される（針状部の太さは 1.5 ～ 2mm。鋲中心の間隔は 10mm 前後）。表面には塗膜状の錆が認められる。内面上側は鉄板縁辺を折り曲げて革状素材を挟み、固定したように見受けられる。下側破断部に微量の金付着が認められ、鍍金の可能性がある。微量の赤色顔料（水銀朱）が内外面ともに付着する。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	55	図 10－16	なし（3004 一括）	鉄	胡簶金具（吊手金具）	54	23	7	7.46	板状部厚さ 2.5 ～ 3mm 鋲直径 6mm 前後
吊手金具の板状部片。上側が欠損する。長方形に近い平面形で、下側両角は曲線に仕上げられている。横断面は直線的で両端が丸く仕上げられており、弯曲は認められない。破断面には重層的に塗膜状の錆が観察できる。下側端部から 4mm の位置に円頭鋲が打たれ、獣毛の伴う革（毛皮）と見られる有機質板状素材と連接される。鋲脚は 2 回屈折し、紐状物質で巻き留められたように見受けられる。金属と革状部の間には飴（樹脂）状物質が認められる（膠等の接着材か）。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	56	図 10－18	なし（3004 一括）	鉄	胡簶金具（吊手金具）	26	22	9	3.43	板状部厚さ 2 ～ 2.5mm 鋲直径 6mm 前後
吊手金具の板上部片。上側が欠損する。隅円長方形の平面形が推定される。表面には樹脂状塗膜と見られる層があり、一部に赤い塗膜状の錆が認められるため、漆等が塗装された可能性も推定される。下端から 6mm の位置に円頭鋲が打たれ、獣毛を伴う皮革による板状素材 2 層を貫通する。鋲脚は 2 回屈折し、革紐状物質で巻き留められたように見受けられる。鉄板と接する皮革は長軸方向の側縁が遺存するように見え、革帯の一部の可能性がある（銹化遺存の範囲を示すだけの可能性もある）。2 層目も同じ側の側縁が遺存し、2 枚重ねの帯状品とも考えられる。ただ、2 層目内面（鋲脚）側は獣毛と見られる繊維束が伴うことから、もし 1 層目鉄板側にも獣毛状繊維がある場合は、折り返して帯状に加工された可能性も考えられる。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	57	図 10－22	207	鉄	胡簶金具（収納部金具・帯形金具）	58	14	10	3.36	板状部厚さ 1.5 ～ 2mm 鋲直径 4 ～ 5mm
収納部開口部に伴う帯形金具の一部。幅 12 ～ 13mm の帯状を呈し、3 箇所に円頭鋲が打ち込まれている（鋲脚は欠損）。長軸一端は遺存するように見受けられる。鋲中心間の間隔は 17mm、21mm である。板状部は表面側から見て凹に弯曲する。表面には塗膜に由来すると見られる重層的な錆が認められ、漆等が塗装された可能性も推定される。内外面ともごく微量の赤色顔料の付着が認められる（金具 54 に水銀朱が確認されているため同様の可能性がある）。内面は板状部に接して獣毛（表面側が粗、革側が密という変異あり）と見られる繊維束が銹化しており、獣毛の伴う皮革（毛皮）が金具直下に配置され、連接されたと見られる。密な獣毛の流れは横向きに近い。 山形突起のある帯形金具 58 の原位置が底板の周りに想定されることから、開口部側も対応するデザインの金具があったと思われるため、本資料は開口部背面側に位置した可能性が考えられる。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法　mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	58	図 10－23	なし（3004 一括）	鉄	胡簶金具（収納部金具・帯形金具）	89	30	23	9.49	板状部厚さ 2mm 前後 鋲直径 6 ～ 7mm
山形の突起状装飾の伴う帯形金具。長軸方向に弯曲するため、収納部の底板は半円形等、曲線的な平面形だった可能性が高い。長軸両端を欠損し接合不能だが、合わせ目を持つ帯形金具 61 が背面側に来る位置関係にあったと推定される。山形部頂点それぞれの直下 9mm の位置に直径 2 ～ 3mm の円孔が穿たれる。下端側縁から 7mm の位置に円頭鋲が打たれ、獣毛の伴う皮革と見られる有機質素材を貫通する（鋲脚は欠損する）。皮革状部は下端側縁以下にはみ出し、収納部内側に屈折する形状を示すことから、金具直下に近い位置において底板がほぼ直角をなして連続していたことが窺える。金具に密着する獣毛は収納部長軸（天地）方向に繊維束の向きが揃うように見受けられる。金具内面と皮革の間に羽枝状の直線状物質が部分的に認められる。 2024 年度に保存処理を実施。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	59	図 10－17	なし（3004 一括）	鉄	胡籙金具（勾玉形）	53	33	10	8.03	板状部厚さ 3mm 前後 鋲直径 7mm 前後
勾玉形の装飾金具。若干内弯する。内面側には、本体長軸方向に近い向きで獣毛と見られる繊維束が並び銹化する。外面、曲線部分の中央付近に円頭鋲が打たれ、鋲脚は 2 層以上の有機質素材（皮革か）を貫通している。内面金具側に獣毛が密着し、その上層に皮革状の有機質が重なり、銹化・遺存する。鋲脚は屈折し、紐状物質で巻き留められたような銹化状況を示す。外面曲線部の一部にも獣毛の銹着が認められる。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	60	図 10－24	なし（3004 一括）	鉄	胡籙金具 （収納部金具・帯形金具）	16	15	3	0.69	板状部厚さ 2mm 前後
帯形金具の破片。若干内弯する。上下側縁が遺存し、両端が破断する。上辺と下辺は平行ではなく緩く傾きを示す。内面には獣毛の痕跡を示す皮革由来の錆が固着する。毛の流れは概ね金具と直交する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	30	66	61	図 10－21	なし（3004 一括）	鉄	胡籙金具 （収納部金具・帯形金具）	78	21	8	4.88	板状部厚さ 1 ～ 2mm 鋲直径 6mm 前後
端部の合わせ目にあたる帯形金具片。中心軸が約 5mm ずれて 2 片が重なっている。外側片はやや内弯するが、内側片はわずかに外反する。内外片とも幅 17mm で、端部両角が直線的な面取り状に加工される。外側片の端部から 7mm の位置、若干上側寄りに円頭鋲が打たれ、獣毛の伴う皮革と見られる有機質素材を貫通する（内側片の孔を通らず、端部をかすめる位置に見受けられる）。外表面には、3mm 程度の年輪幅がある木片が平行する向きで部分的に銹着するため、胡籙ではなく木棺小口板等の銹着した可能性が考えられる。X 線 CT 画像では金具・皮革の間に直線状物質（羽枝か）が確認される。 2024 年度に保存処理を実施。概報時点より欠損部が目立つ。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	67	62	図 10－11	なし	鉄	鏃（長頸腸抉片刃）	162	20	9	12.03	
茎端部を除きほぼ全体が遺存する。鏃身部は長さ 25mm、幅 9mm、厚さ 4mm 前後で、腸抉の深さは 5mm 程度と推定される。接合部は台形関で、先端から関までの長さは 106mm である。頸部横断面は幅 7mm、厚さ 5mm 前後の方形を呈する。茎部横断面は端部側で 1 辺 3mm 前後の方形を呈する。接合部には幅 2mm 前後の帯状樹皮が巻かれ漆状塗膜に覆われた口巻が部分的に遺存する。茎には長軸方向の繊維が認められる竹管状の矢柄が遺存し、その下にわずかに右下がりに巻かれる茎巻（蔓あるいは樹皮か）が銹着し遺存する。矢柄の幅は 7.5mm 前後。 関から先端側へ 40mm 程の範囲（幅約 20mm）に銹化した板状有機物が付着する。胡籙収納部に由来する可能性が高い。2 層の有機質（密な獣毛の伴う革・羽）による板状片が銹化し固着している。鏃→毛皮状→羽状、の順に重なっており、羽状物質は羽枝・小羽枝の構造が認められる。羽状物質は樹脂層で固定したようにも見受けられる。獣毛は先端側へ離れた位置にも遺存する。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	67	63	なし	なし（3009 一括）	鉄	鏃（長頸腸抉片刃） ※束の一部	148	9	7	13.15	
茎端部を除きほぼ全体が遺存する。4 本が束になったものの一部で、本資料は概報図化後に分離している。鏃身部は長さ 33mm、幅 10mm、厚さ 4mm で、腸抉の深さは 7mm 程度と推定される（腸抉部分の破片が変形によりずれた位置に固着しているようにも見受けられる）。接合部は台形関で、先端から関までの長さは 113mm である。頸部横断面は幅 7mm、厚さ 6mm 前後の方形を呈する。接合部には幅 2mm 前後の繊維（樹皮か）による口巻が部分的に遺存し、その下に矢柄（長軸方向の繊維が見られる竹管状）が認められ、部分的に銹着・遺存する。茎には右下がりに巻かれる幅 1 ～ 1.5mm の繊維（蔓あるいは樹皮か）による茎巻があり、銹着し遺存する。微量の赤色顔料の付着が認められるが、口巻の赤彩痕跡とは異なるように見受けられる。 概報図では一括で図化され、茎部周辺が表現されている。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	67	64	図 10－13	なし	鉄	鏃（長頸腸抉片刃）	148	13	9	12.69	
茎端部を除きほぼ全体が遺存する。鏃身部は長さ 30mm、幅 8mm、厚さ 4mm 前後で、腸抉の深さは 7mm 程度と推定される。接合部は台形関（幅 10mm、厚さ 6mm）で、先端から関までの長さは 109mm である。頸部横断面は幅 6mm、厚さ 5mm 前後の方形を呈する。茎部横断面は端部側で 1 辺 3mm 前後の方形を呈する。接合部には幅 2mm の帯状繊維（樹皮か）による口巻が銹着し、部分的に遺存する。茎部には長軸方向の繊維の認められる矢柄が銹着し、部分的に遺存する。矢柄の幅は 8.1mm 前後。茎には幅 1mm 程度の繊維を斜め（右下がり・左下がり両方認められる）に巻く茎巻が銹化し遺存する。 概報図と比べ錆膨れと変形が大きく、劣化が進んでいる。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	67	65	図 10－8	なし（3009 一括）	鉄	鏃（長頸腸抉片刃） ※束の一部	153	9	7	（36.71）	重量は束状態 その他に茎片 0.46g
茎端部を除きほぼ全体が遺存する。4 本が束になったものの一部。先端がほぼ揃った位置関係で銹化しており、副葬品配置状況のままと見られる。鏃身部は長さ 33mm、幅 9mm、厚さ 4mm で、腸抉の深さは 8mm 程度と見られる。接合部は山形関もしくは台形関で、先端から関までの長さは 107mm である。頸部横断面は幅 6mm、厚さ 5mm 前後の方形を呈する。茎部には断片的に口巻と矢柄（長軸方向の繊維が見られる竹管状）が銹化・遺存する。茎には幅 1.5 ～ 2mm の繊維（蔓もしくは樹皮）がやや右下がりに巻かれた茎巻が銹化し遺存する。茎横断面は 1 辺 4 ～ 1.5mm 前後の方形を呈し、端部に向かって細くなる。茎付近から 45mm 程度の範囲に胡籙由来の可能性の高い、獣毛状・羽状（羽枝・小羽枝）の固着物が認められる（鏃→毛皮状→羽状の順に重なる）。全体的に剥落・銹化が進んでいる。 概報図では一括で図化されているが、現状では 63 が束から分離している。												
遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	67	66	図 10－9	なし（3009 一括）	鉄	鏃（長頸腸抉片刃） ※束の一部	159	11	9	（36.71）	重量は束状態
茎端部を除きほぼ全体が遺存する。4 本が束になったものの一部。先端がほぼ揃った位置関係で銹化しており、副葬品配置状況のままと見られる。鏃身部は長さ 35mm、幅 9mm、厚さ 4mm で、腸抉の深さは 8mm 程度である。接合部は台形関で、先端から関までの長さは 110mm である。頸部横断面は幅 6mm、厚さ 5mm 前後の方形を呈する。茎部横断面は 1 辺 4mm 前後の方形から端部の幅 2mm、厚さ 1mm の長方形へ連続的に細くなる。接合部の口巻は幅 2.5mm 前後の帯状繊維（樹皮か）が巻かれ、漆状塗膜で覆われるように見受けられる。矢柄は剥落部のみ遺存するが、銹化した長軸方向の繊維が認められ竹管状と見られる。矢柄の幅は 7.5mm 前後。茎には、幅 1.5mm 程度の繊維により右下がりに巻かれた茎巻が銹化し遺存する。剥落・錆膨れが進んでいる。 概報図では一括で図化されているが、現状では 63 が束から分離している。												

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	67	67	図 10－10	なし（3009 一括）	鉄	鏃（長頸腸抉片刃） ※束の一部	122	11	12	（36.71）	重量は束状態
				茎部を欠損する。4 本が束になったものの一部。先端がほぼ揃った位置関係で錆化しており、副葬品配置状況のままと見られる。鏃身部は長さ 34mm、幅 8mm、厚さ 3 ～ 4mm で、腸抉の深さは 8mm 程度である。接合部は台形関で、先端から関までの長さは 115mm である。頸部横断面は幅 5mm、厚さ 4mm 前後の方形を呈する。関部横断面は幅 8mm、厚さ 5mm 前後の長方形を呈する。茎は根元近くで破断している。接合部には幅 2mm 程度の繊維による口巻が部分的に錆化し遺存する。錆化による剥落・錆膨れが目立つ。 概報図では一括で図化されているが、現状では 63 が束から分離している。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	68	68	図 10－12	3005	鉄	鏃（長頸腸抉片刃）	54	9	6	3.48	
				鏃身部から頸部の破片。鏃身部は長さ 31mm、幅 8mm、厚さ 4mm 前後で、腸抉の深さは 7mm 程度と推定される。頸部横断面は幅 6mm、厚さ 4mm 前後の方形を呈する。先端付近に矢柄状の木質片が直交方向に錆化・固着する。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	68	69	図 10－4	207－3008	鉄	鏃（長頸）	108	10	8	8.48	
				頸部から茎部にかけての破片。端部は遺存するように見受けられる。頸部横断面は幅 6mm、厚さ 5mm 前後、関部横断面は幅 10mm 前後、厚さ 7mm 前後で長方形を呈する。接続部は台形関で、樹皮（幅 2mm 前後か）による口巻が約 10mm の幅で遺存する。樹脂塗装が部分的に剥落する。茎部横断面は 1 辺 4mm 前後から 2.5mm 前後の方形を呈し、端部に向かって細くなる。茎部には長軸方向に繊維の見える竹管状の矢柄が錆化し部分的に遺存する。矢柄の幅は 7.5mm。端部付近の一部には、左上がりに繊維の巻かれた茎巻が認められる。頸部に錆膨れが目立つ。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	68	70	図 10－5	なし	鉄	鏃（長頸）	111	11	10	8.31	
				頸部から茎部にかけての破片。茎部には、矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）と、その内部に右下がりに巻かれた繊維による茎巻が錆化し遺存する。頸部横断面は幅 6mm 前後、厚さ 5mm 前後で長方形を呈する。頸部には錆化した塗膜状の付着物が認められ、胡籙に由来する獣毛の伴う革の可能性が高い。接合部は台形関である（幅 10mm）。茎部横断面は 1 辺 5 ～ 3mm 前後の方形を呈し、端部に向かって細くなる。全体的に錆化による剥落・錆膨れが目立つ。 関部幅は中央埋葬施設例より大きく、やや突出する。 概報図と比べ、茎先端が 13mm ほど欠損する。71 がこれに当たる可能性があるが接合不能。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設？	31	68	71	不明	なし	鉄	鏃（長頸）	12	3	3	0.13	
				茎部の一部。元側端部近くの破片。横断面は 1 辺 3mm 前後の方形を呈する。やや左上がりに繊維の巻かれる茎巻が錆化・遺存する。 概報図との対応は不明。70 の欠損した茎か。								

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	68	72	図 10－6	207－3003	鉄	鏃（長頸）	65	10	10	6.21	
				頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向の繊維が見える竹管状）が錆化して部分的に遺存する。接続部は台形関で、口巻の遺存は認められない。頸部横断面は 1 辺 5mm 前後の方形、関部横断面は幅 9mm、厚さ 7mm 前後の長方形を呈する。茎部横断面は幅 5mm、厚さ 3mm 前後の長方形を呈する。矢柄接続部はスリット状に欠けており、加工された可能性がある。 関部幅は中央埋葬施設例より大きく、やや突出する。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	68	73	図 10－7	207－3006	鉄	鏃（長頸）	66	9	8	4.10	
				頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（長軸方向に繊維が観察される竹管状）が部分的に錆化し遺存する。頸部横断面は幅 7mm、厚さ 4mm 前後の長方形を呈し、接合部は台形関を呈する。関部横断面は幅 9mm、厚さ 8mm の方形を呈する。茎部横断面は 1 辺 5 ～ 3mm 前後の方形を呈し、元側に向け細くなる。茎は破断し位置がずれた状態で固着しているように見受けられる。全体的に剥落・錆膨れが目立つ。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	31	68	74	図 9－30	207－3007	鉄	鏃（長頸）	45	9	8	3.51	
				頸部から茎部にかけての破片。茎部に矢柄（破断面に長軸方向の繊維が見える竹管状）と口巻（幅 3mm 以下の紐状有機物で長軸に対して若干右下がりに連続して巻き留められる。蔓あるいは樹皮か）が錆化して部分的に遺存する。接続部は台形関である。頸部横断面は幅 6 ～ 8mm、厚さ 4 ～ 6mm の長方形、茎部横断面は 4mm 前後の方形を呈する。矢柄の幅は 7.5mm。 概報図の状態より矢柄部の剥落が進んでいる。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	32	68	75	図 10－2	207－3002	鉄	きさげ	127	11	10	16.09	先端厚さ 3.5mm
				鋭角に作られた幅のある先端を持つ工具。先端より 8mm の位置から切先状の平面形になるが、厚さは茎部寄りの 5mm 程度からやや薄くなる程度であり、側縁全体に刃部は形成されていない。接続部はナデ関もしくは斜関で、元側寄りには柄材と見られる錆化した木質が認められる。一部に直交する向きの獣毛状物質が認められる。茎部の横断面は幅 6mm 前後、厚さ 4mm 前後の長方形を呈する。現状で、茎部の長軸中心は作用部の中心からずれるように見受けられる。関部付近は剥落による欠損が進んでいる。									

遺構	図	図版	番号	概報	注記	材質	種別	寸法 mm				
								長軸	短軸	高さ	重量 g	その他
北施設	32	68	76	図 10－3	207－2002　770204	石	砥石	75	30	17	46.98	流紋岩 孔直径 5.5 ～ 6mm
				広面に円孔の穿たれた砥石。厚みの無い直方体に近い形で、広面は幅 30mm から 23mm の長台形（楔形）を呈する。図正面の A 広面は向かって左側 45mm ほどの範囲が偏って研ぎ減っている（推定で深さ 2.5mm 程度）。線条痕は側縁方向と長軸に対して鋭角のものが主体である。端部から 16mm の位置には研磨による斜面が形成され、長軸に直交する向きの線条痕が伴う。裏側の C 広面も同様に左側が研ぎ減るが A 面ほどは減っていない（1.5mm 程度）。C 面も端部から 12mm の位置に研磨による斜面が形成されるが、線条痕は A 面ほど目立たない。C 面は円孔側の稜が調査時のガジリと見られる打撃で欠けている。A 面の右側面 B 面は 16mm ～ 4mm と先細りになるが、A 面側斜面により急に薄くなっている。A 面の左側面 D 面は 15mm ～ 4.5mm と先細りになり、B 面同様、先端付近の斜面で急に薄くなる。両側縁 B・D 面は直線的で、凹部をなす研ぎ減りがほぼ認められない。円孔側小口 E 面は幅 28mm、厚さ 15mm の長方形を呈し、A 面側の欠損を除けば直線的かつ平滑である。先端小口の F 面は幅 23mm、厚さ 4 ～ 6mm の楔形を呈し、B 面側が厚い。A 面斜面と同様の、F 面長軸方向の深い線条痕が伴う。 表面の色は黄灰色で、鉄錆により B・E 面以外が斑に褐色に変色している。 円孔は E 面側の縁が両面ともわずかに磨耗しており、実際に吊り下げて使用されたと見られる。									

第６節　王賜銘鉄剣の保存処理と復元について

1985（昭和60）年度、稲荷台１号墳出土金属製品のうち、のちの王賜銘鉄剣を含む鉄剣２（207－3001、207－3002）・鉄刀１（207－3001（北））を対象として、財団法人市原市文化財センターの依頼により、財団法人千葉県文化財センターにおいて保存処理が行われている（服部1986）。処理に先立ちＸ線写真が撮影（12/18）されているが、この時点では象嵌銘は未確認で、錆取り（1/17）・高温乾燥（2/10）・減圧含浸（パラロイドNAD－10、30％溶液）（2/12）・自然乾燥（2/13）・減圧含浸（2/17）・自然乾燥（2/18）・減圧含浸（2/19）・自然乾燥（2/20）・接合（3/5）の各工程が記録される。

千葉県文化財センターによる保存処理の後、1987（昭和62）年11月初め、財団法人市原市文化財センター受託事業内で、調査担当者の田中新史氏が国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に依頼し継続的に行われていた、国分寺台地区古墳出土金属製品のＸ線撮影により、鉄鏃・短甲片に紛れた１片に象嵌銘（「敬」）が見出されることとなる（田中他1988：巻首図版２、永嶋1993）。

この発見については、1988（昭和63）年１月11日付で『稲荷台１号墳出土の「王賜」銘鉄剣　概要発表要旨』（財団法人市原市文化財センター（編）・市原市）が作成され、調査担当者田中氏が調査概要と古墳・遺物の位置づけ、平川南氏が鉄剣銘について述べている。この段階の検討結果として、「副葬品の組み合わせや須恵器との比較において、「辛亥（471年）」銘鉄剣出土の埼玉稲荷山古墳より確実に古い様相を示す」、「銀象嵌であるが、純銀ではなく相当程度の金を含んでいる」、銘文の主旨が「王の“下賜刀”であること」などの見解が示されている。象嵌文字発見後の理化学的分析、文字の解読、時期比定については、田中氏のほかに国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏・平川南氏・白石太一郎氏が検討の中心にいたと記されている。

1988（昭和63）年２月16日から３月６日にかけて、国立歴史民俗博物館において「特別公開「王賜」銘鉄剣－市原市稲荷台１号墳出土－」が開催され、同年９月には『「王賜」銘鉄剣概報　千葉県市原市稲荷台１号墳出土』（田中他1988）が刊行される。概要発表要旨の内容を充実させたもので、古墳・遺物の図面・写真の一部が加えられている。概報には原寸大の王賜銘鉄剣実測図（田中氏作成）が示されるが、この時点では銘文表出と保存処理は完了しておらず、永嶋氏撮影のＸ線写真からの情報と、形態復元想定に基づいたものである（第21図）。

王賜銘鉄剣の研ぎ出しと保存処理については、象嵌銘発見後ほどなく、「稲荷台１号墳出土「王賜」銘鉄剣の保存処理を適正に推進する」ことを目的に、市原市教育委員会が事務局となり「王賜」銘鉄剣保存処理検討協議会が設けられ、1989（平成元）年５月７日に第１回が国立歴史民俗博物館で開催された。滝口宏氏（会長）（元上総国分寺台遺跡調査団長・早稲田大学名誉教授）（所属は当時。以下同じ）、河原純之氏（文化庁文化財保護部記念物課主任文化財調査官）、三輪嘉六氏（文化庁文化財保護部美術工芸課主任文化財調査官）、白石太一郎氏（国立歴史民俗博物館教授）、永嶋正春氏（国立歴史民俗博物館助教授）、平川南氏（国立歴史民俗博物館助教授）、登石健三氏（千葉県文化財保護審議会委員）、市毛勲氏（市原市文化財審議会委員）、福田誠氏（千葉県教育庁文化課長）、星野一郎（市原市教育委員会教育長）、西嶋定生氏（東京大学名誉教授）、大塚初重氏（明治大学文学部教授）、西山要一氏（奈良大学文学部助教授）、青木繁夫氏（東京国立文化財研究所第３修復技術研究室長）、沢田正昭氏（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）、矢戸三男（財団法人市原

市文化財センター調査課長）の16名で構成されている。このうち、河原氏・三輪氏・平川氏・大塚氏を除く12名により、現状の確認と保存処理内容が討議された。

協議会第1回においては、発見時から携わる永嶋氏より現状説明として、地金の遺存がないものの錆は非常に安定していること、「敬」象嵌片を除き、アクリル樹脂含浸（千葉県文化財センター実施）が行われていること、露出する「王賜」の一部を除き、ほとんどは錆中に埋もれX線撮影により認識できたこと、「王」字象嵌片が空洞になっていることから研ぎ出しに注意が必要なこと、などが報告された。討議では、保存処理については、保存処理の計画は古代史学・考古学的研究も視野に入れて立てること、「王」字の上の部分について文字の存否を確認すること、象嵌技術・材質の解明とともに象嵌欠落部分の痕跡の把握を目指すこと、将来的な地元での展示と全文字の表示方法の方向性などについて話し合われた。レプリカ作成については、研ぎ出し後のレプリカだけではなく、鞘の一部が除去される可能性があることから現状のレプリカを作成する必要がある、との意見が出た。その他として、金工技術面での調査の必要性（復元製作実験）、展示の方法（水平・垂直いずれにしろ両側から見られるのが望ましい）、空気汚染等に対応する保管容器を早急に作成する必要性について話し合われた。保存処理作業については、これまで王賜銘鉄剣に携わってきた永嶋氏に引き続き実施を依頼することと、市原市が国立歴史民俗博物館に委託することが決まった（博物館受託研究事業）。

1989（平成元）年8月25日に現状レプリカと保管ケースが完成し（株式会社京都科学東京支店）、9月1日から市庁舎（現第2庁舎）正面ホールで展示された。12月28日には市原市教育委員会と国立歴史民俗博物館の間で受託研究契約が締結され、まず王賜の2字を研ぎ出し、知見を得てから、以後の方法を検討することになった。

1990（平成2）年2月7日に協議会第2回が「小委員会」として開催された。平川氏・登石氏・市毛氏・星野教育長・西嶋氏・大塚氏・矢戸センター調査課長が欠席し、参加者は9名である。

まず、文化財保護法上の問題について、文化財指定時の帰属問題（市への譲与のタイミング、条件等）と、指定後の活用が話題になった。続いて、永嶋氏が第一段階の処理方針を提示し、今後の方向付けを得るための討議に移った。1990（平成2）年度前半に「王」字上側の字画の存否確認、省画の確定を目標に挙げ、展示公開に向けた保存処理完成イメージの共有が求められた。接合復元する前に欠損部や銘文の無い箇所のデータ・試料取得、理化学的分析（同位体分析等）を行う必要性を唱える意見も出たが、破断面の非破壊分析程度でとどめておくとの結論に至った。窒素ガスで封入する方法について、先行例の埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣についてメリット、デメリットを確認すべきとの意見が出たほか、管理体制も今後、市原市として構築する必要があるとの指摘があり、それらは次回協議会で扱うことが決まった。その間、永嶋氏がメンバーから助言を得ながら、研ぎ出し作業と保存処理を進めることが合意された。

1990（平成2）年度の協議会は、メンバーに変更があり、三輪嘉六氏の代わりに田辺征夫氏（文化庁文化財保護部美術工芸課主任文化財調査官）が加わった。

1990（平成2）年12月3日に協議会第3回が国立歴史民俗博物館において開催された。参加者は、沢田氏・青木氏・西山氏・白石氏・永嶋氏・平川氏・星野教育長・矢戸センター所長の8名である。滝口会長に代わり、白石氏が進行した。

①1989（平成元）年度に行った保存処理作業の報告、②1990（平成2）年度の保存処理方法の提示、

③保存処理後の扱い、の大きく３点が議題となった。①②は作業担当者の永嶋氏から行われ、まず、①として、X線写真を参考にマイクログラインダーで慎重に錆落としを行ったこと、その際、露出直前まで認識できないため埋没象嵌線までの深度調整が極めて微妙であり、局所的かつ微小な工具傷は不可避であることが報告された。また、鉄剣本体について繰り返し蛍光X線分析を行ったが問題になる程の塩素の反応がなく安定しているため脱塩処理を実施しない方針が述べられた。その他、象嵌線素材が横断面U字形ないしV字形を呈するという観察所見と、「廷」字について、中位の横画の位置に異質の錆が認められ、上２本の横画に近い幅の横画があり、象嵌の剥落した溝の痕跡であるとの所見が示された。当時、象嵌線の脱落した溝と錆への注意が払われていたことがわかる。

②として、全体形の復元方針については、銘文両面が見えるかたちの展示公開には、直立して４面を見せる方向性が考えられ、そのためには補強が必要であること、具体的にはアルミ棒と樹脂充填による方法があることが示された。鉄剣破片については全体が銹化し地金が遺存せず、空洞化していることを利用し、アルミ棒を補強材として通せる見込み、とされている。樹脂については、中空の状態では研ぎ出し作業の際に破損する恐れがあることから、象嵌銘下部の空洞にはすでに施していること、それに加えて各片を貫通する補強材で固定する必要があることが述べられた。アルミの腐食の懸念については、王賜銘鉄剣の今後の保管方法を考えれば無視できるとの考えが示された。欠損部復元の素材についてはエポキシ系樹脂に加えてカーボンファイバー・ガラス繊維を推す意見が出ている。残りの象嵌銘の表出については、「王」字と「此」字の上方の象嵌の剥落痕跡の有無の確認を行う方針が提案された。各文字については、省画か否か、象嵌線の剥落した溝の存否について注意する方針が確認された。あわせて復元形について、概報掲載復元実測図の形状に基づくことと、樹脂部分は平滑に仕上げ復元部を見分けやすくすることが提案され、合意された。色調としては一般的には金象嵌として良い程度だが、象嵌素材の定量値を得てから結論を出す方針が出された。

③として、展示ケースについては、保存処理完了後の1991（平成３）年度以降に具体化する見込みが市側から示された。公開・保管については、資料の帰属や展示環境等の検討を先に進めるべきとの意見が出された。保存処理作業の報告についても、発掘調査報告書と合わせて出すか、保存処理事業単独か、報告対象は国分寺台地区か古墳群か、など次回までに検討を進める方針が決まった。

第３回協議会後の1990（平成２）年12月５～11日、「食と緑の博覧会ちば90」（幕張メッセ）の市原市コーナーに作業中の王賜銘鉄剣が窒素充填ケースで展示されている。

1991（平成３）年３月27日、市原市能満に当年度新設された市原市埋蔵文化財調査センターにおいて第4回協議会が開催された。参加者は、滝口氏・平川氏・大塚氏・青木氏・沢田氏を除く、11名である。滝口会長に代わり、白石氏が進行した。

議題は、①作業結果報告と保存処理について残された問題と、②今後の保存・公開について、の２点である。象嵌銘の確認については、「王」・「此」いずれの上方にも象嵌および剥落溝は確認できなかったこと、「廷」第３横画は剥落溝の様態から確実に存在したこと、表面３字目は精査したが他の字画は確認できなかったこと、などが永嶋氏から報告された。復元形は方針通り概報図を基にすることとし、アルミ棒は全体を通す3mmと、部分的に繋ぐかたちの2mmのものを使用したこと、補修部分の樹脂は表面彩色を行わず、素材に顔料を混ぜていること、追加の処置として樹脂（ポリビニルブチラール＋エチルアルコール）を塗布し、それは象嵌部に及ぶこと、が報告された。象嵌素材の組

成から銀象嵌とするのか、発色から金象嵌とするのかという呼称の問題については、定量値をもとに再検討する方向性が確認された。なお、一般的に銀象嵌については純銀のものが多いので、王賜銘鉄剣のような金が多い合金は異例であり、今後、金象嵌と呼び変えることもありうるとされている。

②については、今後の保管施設と展示方法について市側から案が示された。保管施設としては、地元の博物館が望ましいが、開館までの間は埋蔵文化財調査センター特別収蔵庫に保管し、限定的に公開する、との考えである。これに対しては、博物館開設までの期間、実質的に死蔵される点に懸念が示されている。協議会全体の意見として、施設については、稲荷台1号墳、王賜銘鉄剣のみを切り離して単独で展示公開するのではなく、国分寺台地区全体の調査成果の一環として展示できる博物館が望ましいとされ、展示方法については、窒素封入状態を保ち、立てた形で公開する方向での検討が求められた。また、保存処理に関する報告書についても、できるだけ早い時期に公にすべきとされ、国分寺台地区全体の報告を待たず、稲荷台古墳群の報告書に含めるのが望ましいとされた。以上をもって協議会は終了した。

レプリカ作成は株式会社京都科学が行い、1991（平成3）年3月に完成している。研ぎ出し前、研ぎ出し及び保存処理後、当初の状態を推定した復元レプリカの3種類と保管ケースが製作され、以後、埋蔵文化財調査センターのエントランスホールにおいて常設展示された。

1991（平成3）年6月22日、保存処理の完了が報道発表され、翌7月1日から15日にかけて、市原市埋蔵文化財調査センターエントランスホールにおいて処理後初めて特別展示された。

1992（平成4）年には、3月20日から5月17日にかけて、国立歴史民俗博物館企画展示「科学の目でみる文化財」において展示されている。

当初、王賜銘鉄剣の国立歴史民俗博物館への寄託は保存処理作業に伴うもので、1992（平成4）年末までの予定だったが、その後、同館展示用に製作された埼玉稲荷山古墳鉄剣用ケースを転用することで、一般公開の場として国立歴史民俗博物館常設展示が選ばれることとなる。協議会から求められた、国分寺台地区の整理作業と地元博物館建設について進展が望めない状況のなか、資料保存と一般公開のバランスをとる一つの方策として結果的に選択されたものと見られる。

1993（平成5）年2月、永嶋氏が象嵌銘表出と保存処理内容について『国立歴史民俗博物館研究報告』上で報告している（永嶋1993）。微細な観察所見と保存処理に関する詳細が記され、王賜銘鉄剣と象嵌銘に関する基本的情報が提示されている。

その後、王賜銘鉄剣は、国立歴史民俗博物館常設展示リニューアルを機に同館収蔵庫保管に移行し、2022（令和4）年11月20日開館の市立市原歴史博物館における常設展示の中核資料として出土地近くに帰還することとなる。その間には、2016（平成28）年5月2日付で市文化財（考古資料）に指定されている。

第 7 節　稲荷台 1 号墳の築造と周辺遺跡の展開

稲荷台古墳群は、国分寺台地区東辺に位置する古墳群で、円墳14基が含まれる（第5図）。2・3号墳が中期前葉、5 ～ 8号墳が中期（6号は中期中葉）、4号墳が後期前半、10 ～ 12号墳が後期後半に位置付けられている。加えて、J地点西側において土師器高杯・壺が採集されており、中期前葉の古墳の存在が推定されている（田中2023）。その他、谷を挟み東方の千草山遺跡、南方の山田橋大塚台遺跡においても円墳周溝が調査されており、同時期に存在した可能性がある。

以下では、古墳時代中期を中心とした村田川・養老川流域の古墳築造動向などを概観し、稲荷台1号墳築造の背景を検討したい。墳丘規模、群形成のパターン、居住域との関係について、同時期あるいは副葬品の共通する古墳と対照しながら、俯瞰的に共通性と独自性に注目する。

規模から見た稲荷台 1 号墳　市原台地周辺では古墳時代中期初頭から前葉に一定数の大型円墳が築造されており、未調査の大型円墳（概ね 35m 以上）のうちには中期古墳が一定数含まれると見られる。国分寺台地区の諏訪台 10 号墳（42m）（第 2 図 12）のほか、養老川下流右岸の武士 2 号墳（鍋塚）（40m 以上）（28）・松崎丸山塚古墳（37m 以上）（30）、左岸の安須 4 号墳（38m）（26）・13 号墳（遠目塚）（36m）（27）が候補となる。姉崎古墳群では、墳丘直径 60m の海保大塚古墳（15）が、前期末から中期初頭と想定できる大型円墳である（小橋・近藤 2018）。村田川流域周辺においても、大厩浅間様古墳（前期末、50m）（9）（浅利・田所 1999）、草刈 1 号墳（中期初、35m）（6）（田井 1997）、千葉市七廻塚古墳（中期前葉、54m）（1）（千葉市 1976）等が調査されている。特に 40 ～ 50m の大型円墳は前期と中期の画期から前葉に集中する傾向が窺え、不明瞭となる前方後円墳に代わり、各地区最大規模古墳の位置を占めている。集成データ（白井他 2012:附表 7）を参照すると、房総最大の海保大塚古墳を含め、30m 以上の中期大型円墳は房総 37 基、関東（1 都 6 県）165 基が数えられている。稲荷台 1 号墳の墳丘直径 26m は房総、東国いずれにおいても、中期古墳として突出した規模とは言えないことがわかる。

群形成と居住域　稲荷台古墳群は古墳時代中期に居住域未利用地において形成が始まる。群内は、中期初めに築造開始、中期後葉の 1 号墳で最大化し、以後は縮小傾向という推移を示す。

国分寺台地区内における古墳時代中期の居住域は、B谷沿い西側支台上の御林跡遺跡（木對他2008）・台遺跡A・B・C・D・E地点（半田2003、木對他2014、小川他2018）・加茂遺跡A・B・D地点（浅利他2005、小橋2002）等に検出されている（第4図）。地区全体では、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、終末期675棟、前期344棟と多数の竪穴建物跡が認められ、古墳時代中期において減少傾向を示しながらも、少なくとも中期前半97棟、後半（TK208型式期以降）169棟が検出されている（小橋他2023：第21表）。中期前半の遺構数の7割が御林跡遺跡（72棟）に集中し、後半には台遺跡（79棟）と加茂遺跡（62棟）に重心を移しながら分布範囲が拡大を見せる。中期前半に減少し、後半に増加・拡大する様相は稲荷台1号墳築造時期と重なる点で興味深い。地区内の中期古墳は、東間部多1号墳（市毛他1974）、持塚1・3・4・6号墳（白井他2012）、山倉4号墳（小橋他2004）、南向原4号墳（田中他1976）が調査されているほか、上述の時期不確定の大型円墳、諏訪台10号墳が見られる程度である。形態は持塚4号墳のみ方墳（29m）で、他は円墳である。B谷東側支台上の南向原4号墳を除き、いずれも養老川を望む台地南側縁辺に偏在する。南向原4号墳近傍の向原台遺跡・坊作遺跡にも同時期の竪穴建物跡は検出されておらず、中期古墳の築造範囲は、同時期の居住域から

離れる傾向が認められる。

地区内の中期古墳の規模は、可能性がある古墳を含めると諏訪台10号墳の42mを最大とし、持塚1号墳の40mが続く。養老川流域を代表する最大規模古墳は、古墳時代前期以降、姉崎古墳群に移っており、地区内に中期の前方後円墳は確認されていない。地区南西端で多数の墳墓が調査された諏訪台古墳群においても、古墳時代中期は古墳築造の空白期に近い様相を呈する（北見他2015）。

姉崎・椎津周辺　前期以来の大型古墳集中地である姉崎・椎津地区では、国分寺台地区とは異なる群の構成と形成過程が想定できる。最大規模古墳の大型前方後円墳が中期初めに大型円墳、海保大塚古墳へ代わり、周辺において連続的、追加的に円墳群が築造される状況に移ると見られる。姉崎古墳群の西部では、中期前葉の前方後円墳と見込まれる外郭古墳の立地する台地基部に五霊台遺跡円墳周溝群（高橋 1998 等）、東側の台地先端に椎津稲荷山古墳（円墳か、40m）（25）、沖積地の妙経寺古墳群（23）などがあり、いずれも前期からの継続性が希薄な地区に進出した群と見られる。

養老川寄りの海保地区においては、海保大塚遺跡・海保小谷作遺跡の前期後半期居住域と入れ替わるように築造される海保大塚古墳（15）を契機として、周辺古墳群が形成されたと見られる。東西の尾根状台地に円墳主体の海保吉谷前古墳群、小谷作古墳群、畑木向古墳群が形成され、中期初頭の海保三山塚古墳、前葉の海保吉谷前5号墳（海保3号墳）（14）（中村他 1968）、後葉の海保小谷作SM005（大山他2014）・畑木小谷033号遺構（畑木向8号墳、中期後半）等が調査されている。中期前半の海保吉谷前5号墳・海保小谷作SM007は直径30mの円墳であり、円墳群における規模面のピークは中期前半に想定できる。

前期の大型前方後円墳、釈迦山古墳（20）・姉崎天神山古墳（17）の周辺には、近接する時期の前方後方墳と方墳群が検出されており、前期後半まで群構成の継続性を認められ、中期以降に、中期後葉の富士見塚古墳（迎田17号墳）（25m）（22）（中村 1979）を含む円墳群が台地西側縁辺に展開を見せる。中期中葉の大型前方後円墳、姉崎二子塚古墳（110m）（19）の近傍には上野合支群・山新支群（18）の円墳主体の群が展開し、下層より前期後半から中期前半の竪穴建物跡が検出されている（木對1990、北見・坂元2018）。上野合遺跡で中期前半3棟、山新遺跡で前期後半14棟、中期前半6棟が検出されており、中期前半における沖積地の土地利用状況を示唆する。また、旧海岸線から約400mの位置にある砂堆上には妙経寺古墳群（23）が占地し、円墳周溝が15基以上密集して検出されている。6号墳は5世紀前半の築造と推定され、群形成開始は中期前半に遡ると見られる（小出2001）。17号墳周溝内には円筒埴輪（3条4段、縦ハケ、器高65cm）転用棺が検出されており（小橋2004）、時期・系譜とも未確定ながら周辺に供給源となった大型古墳の存在が推測できる。

姉崎地区の台地上における古墳時代中期の居住域は、原遺跡（原1号墳下層）（越川他1984）で6棟、六孫王原遺跡（第2図H）（半田1997）で2棟、姉崎東原遺跡B地点（高橋1993）で1棟の竪穴建物跡が調査されている。分布は希薄に見えるが既存宅地未調査範囲や、徳部台古墳（終末期方墳）のあった現青葉台3・4丁目造成前の半島状台地に中期居住域が広がっていたことも想定できる。

袖ケ浦台地上の椎津地区では、茶ノ木遺跡（I）（木對・樋泉1992、北見・鶴岡2000）で中期前半6棟、後半12棟、五霊台遺跡（J）（高橋1998）で中期前半2棟の竪穴建物跡が検出され、周辺古墳群の造営基盤となった可能性がある。

村田川下流域　古墳時代中期以降、村田川下流域では、左岸台地上の菊間古墳群に東関山古墳などの

前方後円墳が集中するが、前期後半の前方後方墳と見られる新皇塚古墳（2）の近傍に前期末から中期前半に帰属する古墳は不明確であり、最大規模古墳が同一地区で前期から中期へ連続的に築造されたと確定するのは難しい。明確な中期前半の古墳は右岸台地上の草刈遺跡・草刈古墳群において居住域とともに検出されており、養老川下流左岸の海保大塚古墳築造と同時期に最大規模古墳の移動と円墳の主体化が起きたと見られる。中期後半の菊間古墳群では、菊間天神山古墳（44m）（4）、手永台2号墳（16m）など埴輪の伴う円墳が知られ（近藤 1987）、北野天神山古墳（北野権現山古墳）（全長90m の前方後円墳あるいは直径 50m 前後の円墳）でも埴輪が採集されている（田中 2017）。

草刈遺跡・草刈六之台遺跡（第２図B・C）・川焼台遺跡と重複する草刈古墳群は、前方後円墳３基、前方後方墳１基、円墳約120基、方墳約60基で構成されている。このうち180基が調査され、村田川を望む台地南側縁辺に中期円墳の集中が指摘されている（白井2009）。端緒となるのは中期初頭の草刈１号墳（円墳35m）（6）で、草刈３号墳（円墳35m）（7）などが続く。前期に築造された墳丘を再利用した草刈３号墳は、七廻塚古墳副葬品と同様の腕輪形石製品が周溝から出土しており、同時期の埋葬と見られる。草刈遺跡調査範囲内の古墳は、前期69基（円墳11・方墳57・前方後方１）、中期30基（円墳29・方墳１）、後期71基（円墳64・方墳３・前方後円４）と把握されている（小高他2013）。南東の川焼台遺跡では25基が調査され、前期３基、中期10基、後期９基、終末期３基の構成が明らかになっている。同時期の居住域は草刈遺跡各地区と川焼台遺跡・草刈六之台遺跡に広がる。３遺跡の古墳時代の竪穴建物跡数は概算で、前期1312棟（弥生時代終末期が混在）、中期588棟、後期592棟が検出されている（小高他2013、小橋他2023）。草刈六之台遺跡では、古墳時代前期前半71棟、前期後半25棟、中期前半14棟、中期後半95棟の竪穴建物跡が検出されており、居住域は、調査区内の円墳750号（中期前半か）・草刈３号墳（中期前葉）の築造時期に一旦希薄化する様相が認められる（白井他1994）。村田川南岸の低位段丘面にも集落遺跡が検出されており、潤井戸遺跡群鎌之助地区（田所2000）・西ノ崎地区（第２図E）（川上2025）では中期前半、潤井戸西山遺跡（鈴木1986）（D）では鍛冶跡を含む中期後半の竪穴建物跡が認められる。

村田川下流域も国分寺台地区と同じく中期初めに円墳主体に変化し、また、最大規模古墳築造範囲の重心が左岸から右岸へ移動したように捉えられる。

養老川中流域　養老川中流域のうち下流域寄りには西岸の安須古墳群、東岸の武士古墳群等に大型円墳が比較的多く認められる（永沼 1996）。左岸台地上の釜神遺跡（K）では、前期方墳群に前期末から中期初頭と見られる方墳 SX－01（釜神１号墳（浅間塚））（25m）が築造され、中期前半以降、周辺に小型円墳が継続的に分布する。居住域も前期前半から中期後半まで小規模ながら検出されており、一定の継続性が認められる。南側の大型円墳２基を含む安須古墳群と連動して形成されたと見られる。安須２・３号墳（木對 1993）は調査の結果、中期前半の小型方墳と判明しているが、右岸でも同時期の方墳、北旭台遺跡 73・74 号遺構（１・２号墳）（29）が確認されている（木對 1990）。中期前半に方墳が残存するが、中期の前方後円墳は未確認であり、群内では円墳が最大規模古墳と見られる。

右岸の新堀叶台遺跡では1700㎡と限られた調査面積ながら中期前半５棟、後半10棟の竪穴建物跡が検出されている（大村 1992）。南東に広がる新堀「百塚」等の古墳に対応する様相といえる。

中流域の上流側には、牛久古墳群・石奈坂古墳群があり、前期から中期の円墳が調査されている。台地上の石奈坂１号墳（36）は直径30mの円墳で、鉄剣・鉄鏃・金銅製三輪玉・中期倭鏡（鼉龍鏡）等

の副葬品から中期後葉に位置づけられる（浅野他2021）。その他、さらに上流側において、中期後半の円墳、山小川1号墳（17m）（39）と柏野遺跡SM001（24m）（40）が調査されている。

居住域は、左岸台地上の南岩崎遺跡で、中期前半28棟、後半2棟の竪穴建物跡が検出され、中期後半から後期前半の円墳周溝2基が伴う（第2図L）（大村2006）。右岸台地上、江子田金環塚古墳から150m北に位置する江子田遺跡（M）では、中期の竪穴建物跡15棟（うち前半3棟）が調査され、土坑から同時期の子持勾玉が出土している（倉橋他2024）。上流寄りの地区では台地上の番後台遺跡（N）において中期前半の竪穴建物跡6棟が検出されている（藤崎1982）。

養老川中流域は、安須古墳群など下流寄りにおいて前期から中期前半に継続する傾向が見られる。支流の内田川が合流する地点近くでは牛久古墳群・江子田古墳群（雪解沢遺跡）に前期古墳が認められるが、中期古墳が同一地区で連続的に築造されるかは不明瞭である。上流側でも、番後台遺跡の2.5km南に位置する皿郷田茂遺跡（山口1984）において前期方墳・円墳が検出されているが、中期後半の柏野遺跡SM001・山小川1号墳築造以前の状況は不明瞭である。中期の居住域については、右岸の叶台遺跡、左岸の南岩崎遺跡において比較的高密度で検出されているが、調査面積の違いもあり国分寺台地区・草刈遺跡周辺の規模には及ばない。

養老川下流右岸台地上の稲荷台古墳群は、中期初めに遺構の希薄な地点で築造が始まるが、稲荷台遺跡L地点（第5図）において前期の竪穴建物跡が確認されていることから、北寄りの前期集落の近傍で中期以降に築造を開始し、群形成と反比例するように居住域が退潮したという過程が推定される。下流域における海保大塚古墳周辺や山新遺跡等で見られた形成過程と近似しており、群形成状況については局所的な条件の反映というより、広域動向と連動する一般的な様相と位置付けることができる。

常総型石枕と有文埴輪　群中で最大化する稲荷台1号墳の築造される時期と背景が問題となるが、興味深い消長を示すのが石枕と有文埴輪である。東京湾岸上総地域において常総型石枕は中期後半以降に副葬品目から脱落する一方で、古墳時代中期後葉（ON46 ～ TK208型式段階）に「中小規模古墳への武具副葬が飛躍的に伸びる」（白井2023）とされ、常総地域との結びつきの弛緩が石枕の不在によって示される当該期に甲冑・胡籙保有の中小古墳が増加する現象は、本地域に王権からの直接的な関与が強まった反映であるとの理解が示されている（白井2023）。市内の古墳のうち、この変化を代表する事例が、姉崎二子塚古墳と稲荷台1号墳ということになる。

常総型石枕の優品である直弧文石枕が副葬された姉崎二子塚古墳は中期中葉（TK216型式期）に位置づけられるが、B種横ハケ円筒埴輪の他にハケメ工具・櫛状工具による波状文・斜格子文の施された埴輪が伴出している（小橋2010、白井他2012）。姉崎二子塚古墳と同じ砂堆上に検出された円墳周溝、山新遺跡SM10・SM17（北見・坂元2018）からはナデ仕上げの有黒斑櫛描文埴輪が出土しており、外郭古墳周辺の調査でも同様の櫛描文埴輪が出土している。波状文・斜格子文をハケメ工具で施す例は、富津市内裏塚古墳（第1図47）（小橋2011、白井他2012）・同富士見台2号墳（平野・諸墨1987）、菊間手永台2号墳（近藤1987）でも確認されており、主体的ではないものの東京湾東岸上総地域において共通する。一方で、霞ケ浦（香取海）北岸、高浜入周辺にも出土例の集中がみられ、小美玉市権現山古墳（第1図J）・同神楽窪古墳からハケメ工具による波状文を持つ円筒埴輪が採集されている（本田2002）。また、かすみがうら市富士見塚1号墳（K）（杉山他2006）で波状文、ひたちなか市川子塚古墳（D）（斉藤2000）で斜格子状ハケメが認められ、いわゆる「海の古墳」（魚津2017）

に伴う事例が目立つと言える。

香取海南岸を中心とする常総型石枕の主要分布圏は、東京湾岸の姉崎・椎津地域が南限となることから、墳墓用品である石枕と有文埴輪が共に東京湾岸から香取海北岸まで分布する現象は、水上交通経路の両端にあたる地域の首長同士が結んだ関係の一面を反映すると見られる。ただ、東京湾岸上総地域の石枕は中期前半のうちに姿を消すとされる一方で、有文埴輪は中期後半まで存続すると見られ、茨城県域出土例の消長と重なる。この様相からは、倭王権との結合強化が常総圏からの離脱と表裏の関係にあるわけではなく、香取海を介した紐帯が実力の前提となり、倭王権との結びつきが強まったとの見方も可能と思われる。

水上交通と遠隔地交流　注目すべきは石枕分布域である水上交通圏の両端に有文埴輪が集中を見せる事実であり、両地域の最大規模古墳の造営集団が水上交通に関して卓越した立場を占めていた可能性である。養老川下流域には、古代海部郷（海士有木周辺）が存在し、水上活動に携わった集団の拠地に由来すると見られる（前之園 2013）。古墳時代中期、海浜部に形成される姉崎古墳群の造営集団には水上活動に長けた集団が含まれていたと考えられる。

古墳時代中期は５世紀代と重なる倭の五王の時代であり、海を渡った朝鮮半島での軍事・外交的活動は言うまでもなく水上輸送に支えられていた（小林1966）。日本書紀には上毛野氏祖による半島での活動が記されており、他の東国首長層も同調していたとすれば、当該期の考古資料に現れる渡来系要素の濃さの由来も理解しやすい（若狭2018）。王権からの再分配のみが外来的な稀少品の源泉になるのではなく、各地域で自律的にアクセス可能な供給源を求める行動・交渉が志向され、社会統合により動員の基盤となる支配的権威を得た東京湾東岸の首長層が参与する機会のあったことが推定される。その際、中・下位層の首長が付随的に王権との結合を強める方向に進んだ結果が、武具等を副葬する中小規模古墳の増加に結び付いたと見られる。

集落遺跡においても、沖積地の五所四反田遺跡（第２図Ｆ）（浅野他2023）、姉崎台地に位置する原遺跡（原１号墳下層）（越川他1984、白井他2012）からは宇田型甕が出土している。東海地域との交流の一端を示すと見られ、五所四反田遺跡において東海系木製農具の波及が想定されるほか、常総型石枕の分布が愛知県豊橋市中野古墳（白井2002、久永2024）に及ぶ点からも、太平洋岸の海上交通を介した人と物の動きを窺うことができる。なお、紀伊国海部郡の臨海部にあたる和歌山県有田市椒古墳では立花孔の無い独立型の石枕が胡籙金具・虺竜文鏡・短甲・蒙古鉢形冑等と共に出土しており（西岡2012）、海辺の中期古墳として姉崎二子塚古墳との類似性が興味深い。

千葉市大森第２遺跡（古内他1973）等の半島系土器・模倣土器が示す渡来系集団の移住の他に、様々な背景を持つ人の往還が加わり、各地に半島由来の文物が多くもたらされたと見られる。

海部郷以外の地名に目を向けると、名代遺称地には、長柄町刑部のほかに、長柄郡谷（はせべ）郷（和名抄「波世倍」）が知られ、茂原市長谷（ながや）をその変転した地名とする見解（吉田1912）があるほか、睦沢町北山田に長谷（はせ）の地名が見える。長谷部は雄略天皇の名代であり、母の忍坂大中姫に関連する刑部とともに当地域との関わりの深さが窺える。安閑期の伊甚屯倉設置記事の成立背景となった王権との関係性は、古墳時代中期には下地が用意され、以後の上総地域に影響を及ぼしたことが示唆される。養老川中流域は、太平洋側の一宮川・埴生川流域と、小櫃川流域をつなぐ経路でもあり、太平洋側の一宮町待山遺跡（須恵器TK208型式）（宮内2017）・待山１号墳（埴輪出土帆

立貝形古墳）（第1図30）（浅枝1968）、睦沢町浅間山1号墳（胡簶・金銅製三輪玉等）（29）（山田1975）、大多喜町台2号墳（画文帯神獣鏡（同型鏡））（31）（滝口1953）のほか、養老川中流域の牛久石奈坂1号墳（浅野他2021）、柏野遺跡SM001、山小川1号墳等が中期後半に顕在化する背景も、東京湾と太平洋をつなぐ経路と結節点の確保を重視する王権の志向が強く影響したと推定できる。

メディアとしての往還する人々　草刈1号墳と千葉市南二重堀遺跡（古内・伊藤1983）には古墳時代中期の鉄鋌が出土し、前者には金工具のきさげが伴う。草刈六之台遺跡周辺では、須恵器の技法で成形され、非還元炎焼成で赤彩される草刈型土器（赤焼き須恵器）（高橋1985、白井他1994）が局地的に生産されただけではなく、手工業生産が集約的に行われた可能性が認められる。周辺では奈良時代以降にも川焼瓦窯が設けられるほか、鋳造・鍛冶関連遺物も多く、北東部に押沼第1遺跡等の製鉄遺跡が拡大することが明らかになっており、古墳時代を通じた手工業生産の動向が基盤となって、以後の地域的な特性が導かれたように見受けられる。

古墳時代中期には埴輪・鉄器・石製品の生産のほか、馬飼育・カマド導入など生活文化の変化も大きいことから、各分野において、倭王権中枢域等の先進地と在地を往還した人々が技術・知識を運ぶメディア（媒体）となったはずである。王権からの一方的な徴発・扶植だけではなく在地の受容志向が呼応することで、外形的には人と財を交換する体系が整いつつあったと考えられる。

稲荷台1号墳の被葬者像については、生前の活動を具体的に辿ることはできないが、これまでも指摘されてきたとおり、希少な象嵌銘鉄剣・胡簶を得ている事実から、後代の舎人・靫負のようなかたちで倭王権中枢域に出仕し、帰還した人物だった蓋然性は高いと思われる。それに加えて、草刈型土器を技術者の往還により須恵器製作技術のもたらされた事例だと捉えれば、地域社会と集団組織にとっての機能的側面に着目し、新来の文物をもたらす媒体としての性質も視野に入れる必要があるように思われる。上位首長の確立した王権とのつながりを媒介に、中小規模古墳被葬者まで権威の紐帯に包含された帰結が往還の前提になったとするなら、海部・刑部にまつわる地名の存在は、稲荷台1号墳に集結した諸要素が、大局的には本地域の地形的特質に起因することを示唆する。

引用参考文献（第1・2章）

浅枝妙子1968「一宮待山遺跡」『東上総の社会と文化　千葉県長生郡総合調査』上智大学史学研究報告二　上智大学史学会・史学研究会

浅野健太他2021『市原市牛久石奈坂1号墳・石奈坂遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第53集　市原市教育委員会

浅野健太他2023『市原市五所四反田遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第57集　市原市教育委員会

浅利幸一1989「神門三号墳」『市原市文化財センター年報（昭和62年度）』財団法人市原市文化財センター

浅利幸一1991『市原市郡本大宮遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第41集　財団法人市原市文化財センター

浅利幸一・田所　真1999『市原市大厩浅間様古墳調査報告書』財団法人市原市文化財センター調査報告書第42集　財団法人市原市文化財センター

浅利幸一他2003『市原市稲荷台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第83集　上総国分寺台遺跡調査報告Ⅸ　財団法人市原市文化財センター

浅利幸一他2005『市原市加茂遺跡A・B地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第94集　財団法人市原市文化財センター

市毛　勲他1974『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ　上総国分寺台遺跡調査団

市原市教育委員会1978『千葉県市原市地名集』

市原市教育委員会1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図　－北部編－』

魚津知克2017「「海の古墳」研究の意義、限界、展望」『史林』第100巻第1号　史学研究会
大場磐雄・亀井正道1951「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第37巻第3号
大村　直1992『市原市叶台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第44集　財団法人市原市文化財センター
大村　直他2006『市原市南岩崎遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第1集　市原市教育委員会
大山祐喜・北森友梨2018『市原市海保地区遺跡群Ⅲ　海保大塚遺跡（第2地点）』国際文化財株式会社
大山祐喜他2014『市原市海保地区遺跡群Ⅰ　海保西竹谷遺跡　海保小谷作遺跡　海保大塚遺跡』国際文化財株式会社
小川浩一2020『市原市稲荷台遺跡O地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第51集　市原市教育委員会
小川浩一・中野喬介2021『令和2年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第54集　市原市教育委員会
小川浩一他2018『市原市台遺跡E地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集　市原市教育委員会
小久貫隆史他1999『市原市市原条里制遺跡　－東関東自動車道（千葉富津線）、市原市道80号線埋蔵文化財調査－』千葉県文化財センター調査報告第354集　財団法人千葉県文化財センター
忍澤成視1999『祇園原貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第60集　上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ　財団法人市原市文化財センター
忍澤成視他2013『市原市天神台遺跡I』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第25集　上総国分寺台遺跡調査報告XXIII　市原市教育委員会
小高春雄他2013『千原台ニュータウンXXX　－市原市草刈遺跡（F区）－』千葉県教育振興財団調査報告第695集　財団法人千葉県教育振興財団センター
金子浩昌他1969『昭和43年度　市原市山倉貝塚調査報告（住居址・遺構編）－付・山倉貝塚人骨所見概報』山倉貝塚調査団
金子浩昌他1977『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅲ　上総国分寺台遺跡調査団
加納　実他1996『市原市武士遺跡1　福増浄水場埋蔵文化財調査報告書　第2分冊』千葉県文化財センター調査報告第289集　財団法人千葉県文化財センター
川上知哉2023『市原市稲荷台遺跡（R地点）・市原古道遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第59集　市原市教育委員会
川上知哉2024『市原市姉崎台遺跡（第2地点）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集　市原市教育委員会
川上知哉2025『市原市潤井戸遺跡群（西ノ崎地区）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第66集　市原市教育委員会
川上知哉2026『市原市郡本遺跡群（郡本地区第44次）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第71集　市原市教育委員会
北見一弘1999「畑木小谷遺跡」『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
北見一弘2002『市原市畑木小谷遺跡Ⅱ』財団法人市原市文化財センター調査報告書第81集　財団法人市原市文化財センター
北見一弘・坂元秀平2018『市原市山新遺跡・白塚出途遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第42集　市原市教育委員会
北見一弘・鶴岡英一2000『市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡（第2次）　－不特定遺跡発掘調査報告（3）－』財団法人市原市文化財センター調査報告書第73集　財団法人市原市文化財センター
北見一弘他2015『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡II』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第31集　市原市教育委員会
木對和紀1990『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会
木對和紀1993『市原市安須古墳群』財団法人市原市文化財センター調査報告書第50集　財団法人市原市文化財センター
木對和紀2017『市原市稲荷台遺跡Ｌ８地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集　市原市教育委員会
木對和紀・近藤　敏2017『平成28年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第39集　市原市教育委員会
木對和紀・樋泉岳二1992『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第49集　財団法人市原市文化財センター
木對和紀他2008『市原市御林跡遺跡II』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第5集　市原市教育委員会
木對和紀他2014『市原市台遺跡A・D地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第29集　市原市教育委員会
倉橋祐真他2024『市原市江子田遺跡　－主要地方道市原天津小湊線道路整備事業埋蔵文化財調査報告書－』千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第49集　千葉県教育委員会
小出紳夫2001「姉崎妙経寺遺跡（4次調査）」『市原市文化財センター年報（平成10年度）』財団法人市原市文化財センター
小出義治他1980『上総山王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会
越川敏夫他1984『市原市姉崎・原1号墳周湟址及び集落跡の調査』原遺跡調査会

小橋健司2002『市原市加茂遺跡D地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第82集　財団法人市原市文化財センター
小橋健司2004「姉崎妙経寺遺跡（第7次）」『市原市文化財センター年報（平成13・14年度）』財団法人市原市文化財センター
小橋健司2008「千葉県市原市姉崎山新遺跡の櫛描文埴輪」『埴輪研究会誌』第12号　埴輪研究会
小橋健司2010「千葉県市原市姉崎二子塚古墳の櫛描文埴輪」『埴輪研究会誌』第14号　埴輪研究会
小橋健司2011「内裏塚古墳と畑沢埴輪生産遺跡」『埴輪研究会誌』第15号　埴輪研究会
小橋健司・近藤　敏2018『平成29年度　市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集　市原市教育委員会
小橋健司他2004『市原市山倉古墳群』財団法人市原市文化財センター調査報告書第85集　財団法人市原市文化財センター
小橋健司他2023『市原市天神台遺跡Ⅲ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第58集　市原市教育委員会
小林行雄1966「倭の五王の時代」『日本書紀研究』第二冊　塙書房
近藤　敏1987『－千葉県市原市－　菊間手永遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第23集　財団法人市原市文化財センター
斎木　勝他1974『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社
斉藤　新2000「ひたちなか市川子塚出土の円筒埴輪について（1）」『埴輪研究会誌』第4号　埴輪研究会
櫻井敦史2003「姉崎妙経寺遺跡」『市原市文化財センター年報（平成12年度）』財団法人市原市文化財センター
事業記念誌編集委員会2003『歴史再生　上総／市原　国分寺台　市原市国分寺台土地区画整理組合　事業記念誌』清算法人市原市国分寺台土地区画整理組合
白井久美子1991「石製立花と石枕の出現　－枕造り付け木棺考－」『古代探叢Ⅲ』－早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集－　早稲田大学出版部
白井久美子2002「常総の内海をめぐる石枕と立花の時代」『古墳から見た列島東縁世界の形成』千葉大学考古学研究叢書2
白井久美子2003「205　姉崎古墳群」『千葉県の歴史』資料編　考古2（弥生・古墳時代）県史シリーズ10　千葉県
白井久美子2009「古墳群」『千原台ニュータウンXXI　－市原市川焼台遺跡（上層）－』千葉県教育振興財団調査報告第610集　財団法人千葉県教育振興財団センター
白井久美子2023「石枕からみた中期中葉の画期」『王賜剣出土　抹　稲荷台1号墳』上総国分寺台遺跡調査団
白井久美子・山口典子2002『千葉県史編さん資料　千葉県古墳時代関係資料』財団法人千葉県史料研究財団
白井久美子他1991『千原台ニュータウンⅣ　中永谷遺跡』千葉県文化財センター調査報告第189集　財団法人千葉県文化財センター
白井久美子他1994『千原台ニュータウンⅥ　－草刈六之台遺跡－』千葉県文化財センター調査報告第241集　財団法人千葉県文化財センター
白井久美子他2012『研究紀要』27　財団法人千葉県教育振興財団
菅谷通保他1993『千葉県茂原市　国府関遺跡群』財団法人長生郡市文化財センター調査報告第15集　財団法人長生郡市文化財センター
杉山晋作他2006『富士見塚古墳群』考古学研究室報告乙種15冊　国士舘大学考古学研究室・茨城県かすみがうら市教育委員会
鈴木英啓1986『－千葉県市原市－　潤井戸西山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第9集　財団法人市原市文化財センター
須田　勉他1989『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅳ　上総国分寺台遺跡調査団
田井知二1997『千原台ニュータウン7　－草刈1号墳－』千葉県文化財センター調査報告第295集　財団法人千葉県文化財センター
高橋康男1985『－千葉県市原市－　草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第6集　財団法人市原市文化財センター
高橋康男1990『市原市姉崎東原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第37集　財団法人市原市文化財センター
高橋康男1993『市原市姉崎東原遺跡B地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第51集 財団法人市原市文化財センター
高橋康男1998『市原市五霊台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第64集　財団法人市原市文化財センター
滝口　宏1953「上総大多喜の古墳」『古代』第9号　早稲田大学考古学会
武田宗久他1985『上総江子田金環塚古墳発掘調査報告書』上総江子田金環塚古墳発掘整理調査団・千葉県市原市教育委員会
田所　真2000「潤井戸鎌之助遺跡」『市原市文化財センター年報（平成9年度）』財団法人市原市文化財センター
田中清美・近藤　敏1989『－千葉県市原市－　千草山遺跡・東千草山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第29集　財団法人市原市文化財センター

田中清美他2002『釜神遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第76集　財団法人市原市文化財センター
田中新史2017「巻頭4　市原調査ともの（1）　菊地コレクションの埴輪」『球　市原古墳群　序説』上総国分寺台遺跡調査団　市原古墳群刊行会
田中新史2021「市原古墳群　総括」『球　市原古墳群II　総括篇』上総国分寺台遺跡調査団　市原古墳群刊行会
田中新史2023「IV　稲荷台1号墳」『王賜剣出土　球　稲荷台1号墳』上総国分寺台遺跡調査団
田中新史・平川　南1988『稲荷台1号墳出土の「王賜」銘鉄剣　概要発表要旨』市原市　※コピー冊子
田中新史他1976『南向原　－古墳・方形周溝墓・住居址の調査－』上総国分寺台遺跡調査報告II　上総国分寺台遺跡調査団
田中新史他1988『「王賜」銘鉄剣概報　千葉県市原市稲荷台1号墳出土』市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター
千葉縣1929「姉崎町二子塚及大塚古墳」『史蹟名勝天然記念物調査』第六輯
千葉縣市原郡教育會1916『千葉縣市原郡誌』町村誌篇
千葉市1976『千葉市史』史料編1
対馬郁夫他1977『千葉県市原市　宮前遺跡第1次・第2次調査報告書』平野考古学研究所　千葉県市原市教育委員会・市原市国分寺台土地区画整理組合
対馬郁夫他1979『千草山遺跡発掘調査報告書』千草山遺跡発掘調査団　市原市
鶴岡英一2000『平成11年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市内遺跡発掘調査報告第13冊　市原市教育委員会
鶴岡英一・櫻井敦史2013『市原市中台遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第24集　上総国分寺台遺跡調査報告XXII　市原市教育委員会
鶴岡英一他2007『市原市西広貝塚III』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第2集　上総国分寺台遺跡調査報告XVII　市原市教育委員会
永嶋正春1993「「王賜」銘鉄剣のX線調査と銘文の表出」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集　国立歴史民俗博物館
永沼律朗1992『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第221集 財団法人千葉県文化財センター
永沼律朗1996『千葉県重要古墳群測量調査報告書－市原市安須・武士古墳群ほか－』千葉県教育委員会
永沼律朗他1985『上総 江子田金環塚古墳発掘調査報告書』千葉県市原市教育委員会
中村恵次1979『房総古墳論攷』
中村恵次他1968「海保古墳群」『南大広遺跡・海保古墳群』市原市埋蔵文化財調査報告4　市原市教育委員会
西岡　巖2012『椙古墳発掘調査概報』有田市教育委員会
西野雅人他2006『平成17年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
服部哲則1986「埋蔵文化財の保存処理（昭和60年度）」『研究連絡誌』第17号　財団法人千葉県文化財センター
半田堅三1997『市原市姉崎六孫王原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第58集　財団法人市原市文化財センター
半田堅三2003『市原市台遺跡B地点』財団法人市原市文化財センター
久永雅宏他2024『大阪府立近つ飛鳥博物館令和5年度冬季特別展　まくら　－古墳時代の石枕と葬送儀礼－』図録88　大阪府立近つ飛鳥博物館
平野雅之・諸墨知義1987『富士見台遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第26集　財団法人君津郡市文化財センター
藤崎芳樹1982『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
古内　茂・伊藤智樹1983『千葉東南部ニュータウン12　－南二重堀遺跡－』財団法人千葉県文化財センター
古内　茂他1973『京葉』財団法人千葉県都市公社
本田信之2002「玉里村神楽窪古墳出土の波状文を施す埴輪－霞ヶ浦高浜入りを中心として－」『玉里村立史料館報』Vol.7
前之園亮一2013『「王賜」銘鉄剣と五世紀の日本』古代史研究叢書7　岩田書院
牧野光隆2010『市原市小ノ台遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第15集　市原市教育委員会
丸子　亘1970『姉ヶ崎台遺跡』千葉県埋蔵文化財調査報告第4集　千葉県教育委員会
宮内勝巳2017『千葉県長生郡一宮町　待山遺跡・待山古墳－保育所建設に伴う埋蔵文化財調査－』公益財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第349集　公益財団法人印旛郡市文化財センター
山口直樹1984『－千葉県市原市－　皿郷田茂遺跡』財団法人市原市文化財センター
山田友治1975『浅間山1号墳発掘調査報告書』浅間山1号墳発掘調査団
吉田東伍1912『大日本地名辞書』第四巻　阪東　冨山房
若狭　徹2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階　上毛野地域を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集　国立歴史民俗博物館

第３章　自然科学分析

第１節　王賜銘鉄剣のＸ線ＣＴ調査

初村　武寛（公益財団法人元興寺文化財研究所）

はじめに

王賜銘鉄剣は過去に修理が行われ、一体となった状態であるが、その後状態や象嵌の細部についての調査等は行われていなかった。王賜銘鉄剣の現状の詳細な状態を確認する目的でＸ線ＣＴ撮影を行った。

Ｘ線ＣＴは調査対象の断面像および内部構造を調べることができる調査手法である。撮影では調査対象に対し全周からＸ線を照射して、複数枚の透過像からなるデータセットを取得し、そのデータをコンピュータ上で計算により再構築することで、多様な対象の内部構造を観察することが可能となる。

撮影にはマイクロＣＴスキャナ「TOSCANER-32300FD」（東芝ＩＴコントロールシステム）を用い、管電圧150 kV、管電流600μA、露光時間399msec/枚、撮影枚数1200枚/360°、積算回数３回の条件で行った。ＣＴデータ解析には、「VGstudio MAX 3.2」（Volume Graphics）を用いた。

王賜銘鉄剣のＸ線ＣＴ分析

今回使用したＸ線ＣＴ機器は、調査対象資料を回転するテーブル上に立てる必要がある。そのため、今回の計測に際しては、王賜銘鉄剣を梱包し、支持具を用いてその梱包箱を立てるという方法を取った。支持具は木製で、王賜銘鉄剣の転倒を防止するための材を接着・ビス止めした構造とした。この支持材のため王賜銘鉄剣をＸ線源に近づけることは難しくなったが、最大限安全を確保した上での計測を実施した。

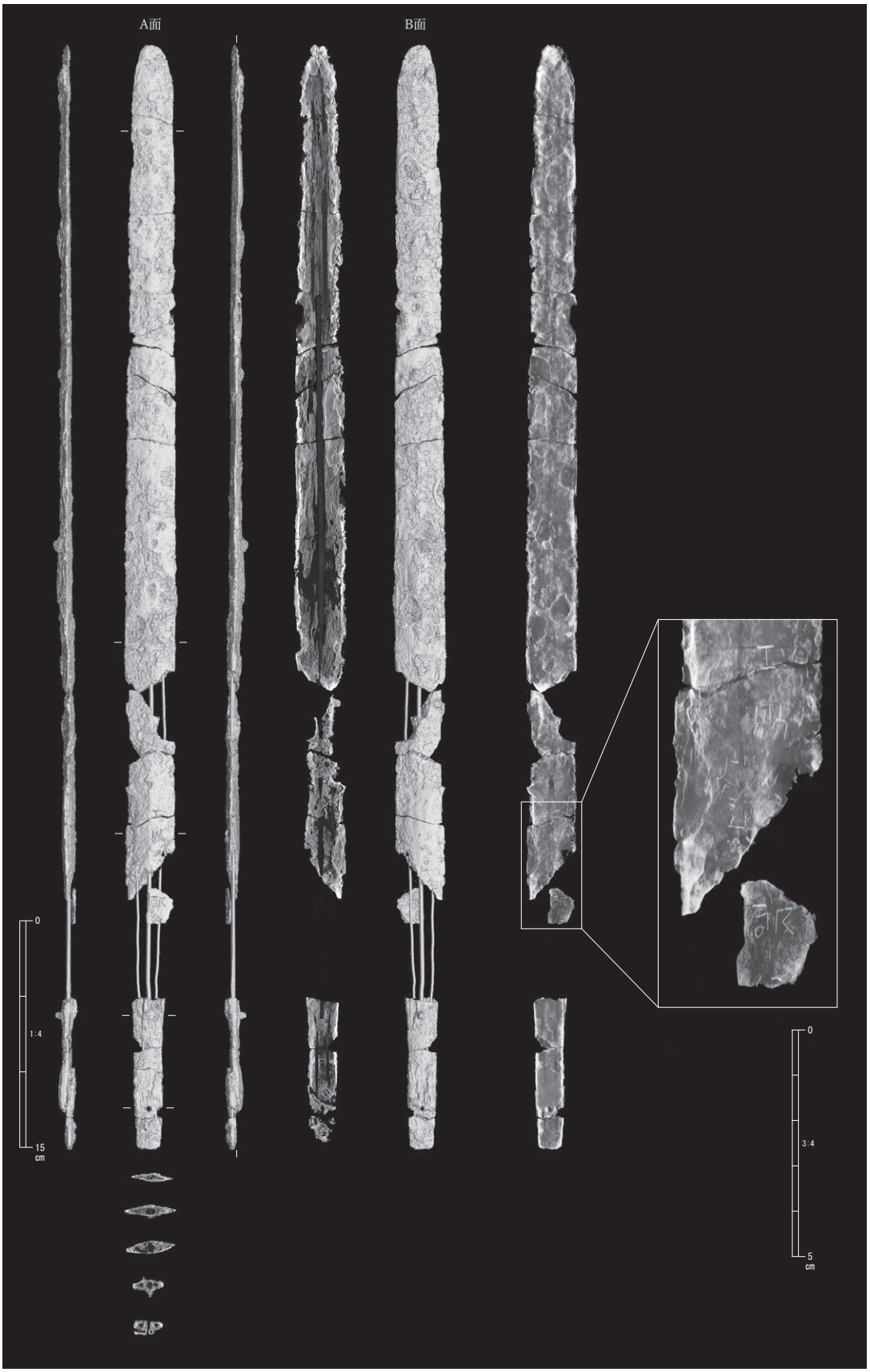
全体の構造（第33図）　王賜銘鉄剣は、先に述べた通り、以前に修理が施されている。鉄剣のオリジナルの箇所は大きく刃部・『王賜』を含む象嵌およびその周辺部分・『敬□』を含む象嵌及びその周辺部分・茎部の４箇所よりなり、それ以外の部分は復元であることがわかる。関部周辺も欠損しており、装具についても不明である。

第33図をみると、剣身の長軸に並行する直線的な棒が確認できる。この棒材は、いずれも王賜銘鉄剣に強度を持たせるために入れられた金属製の芯材である。この芯材は王賜銘鉄剣が保存処理された際に、オリジナル部分に穴をあけ、その部分に金属製の芯を差し込まれたものである。

茎部には目釘孔が２箇所確認でき、上側の目釘孔には鉄製目釘が遺存している。これに対し、下型の目釘孔には、目釘は遺存していない。木製の目釘であった可能性が考えられる。

また、茎部中位には、あたかも茎を継いだような段差が表面・裏面の両方に見て取れるが、この箇所については、錆ぶくれで茎がずれ、現状のような形状になったと考えられる。こういった茎を継ぐ事例としては、環頭大刀などがあるが、王賜銘鉄剣の茎の先端は完結しており、その先に環頭が続くとは考えにくい。

象嵌部分（第34図）　ここでは、『王賜…』の象嵌のある面をＡ面とし、その反対面をＢ面と呼称する。象嵌の材質については、今回の調査に際して蛍光Ｘ線分析を実施した。その結果については後述の



第 33 図　王賜銘鉄剣　X 線 CT 画像展開図および象嵌部分



第 34 図　王賜銘鉄剣　X 線 CT 画像
文字部分抽出（S =3/1）

分析結果を参照願いたいが、金象嵌であることが確認された。また、今回のX線CT調査時には、賜の上側に、かすれたようなX線の吸収の強い箇所を確認した。この部分は線状に遺存しており、元々はこの部分に象嵌線が存在したものと推測される。この象嵌線は現状では脱落しているが、その痕跡がわずかに遺存していたものと考えられる。

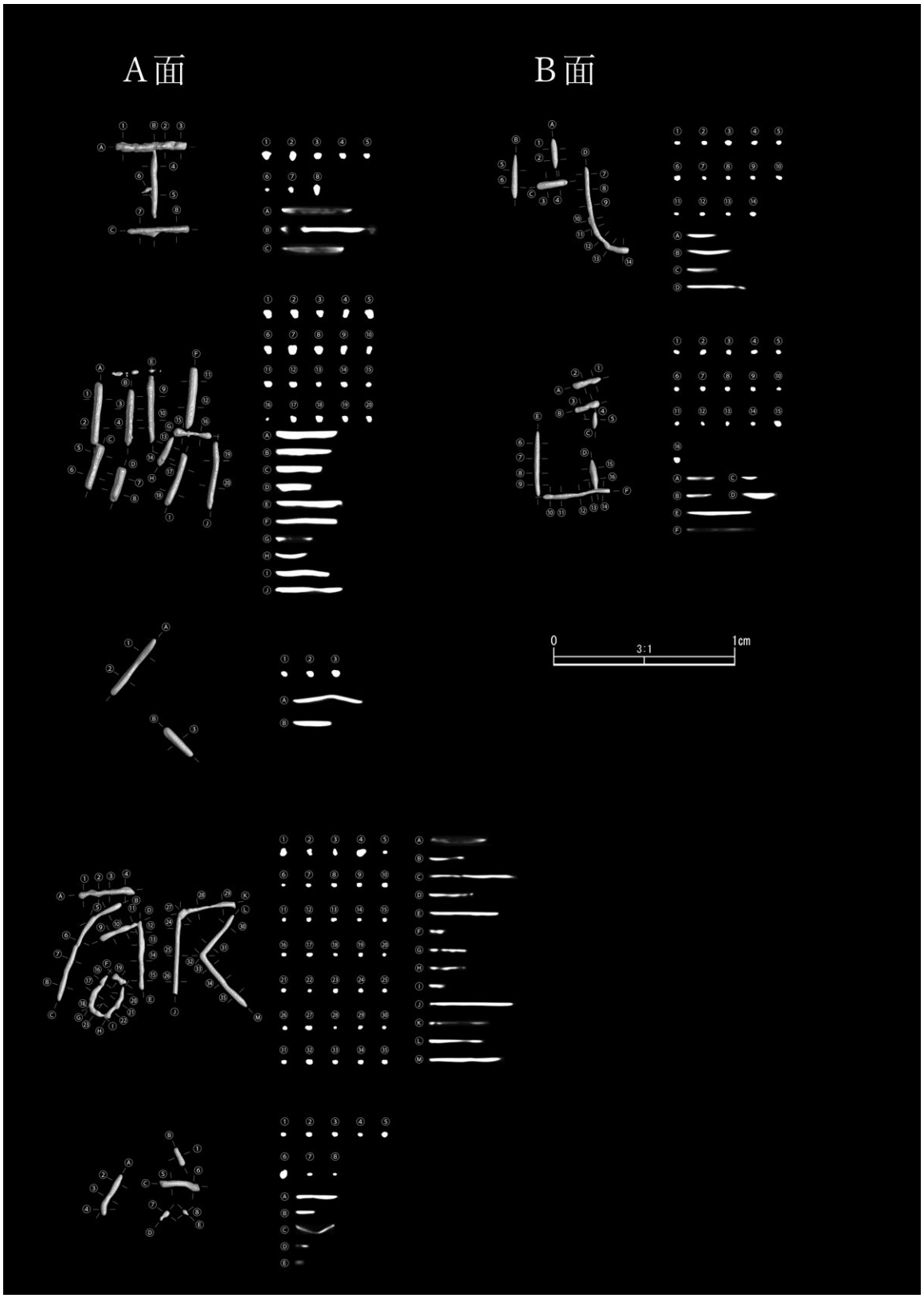
象嵌の文字の断面形（第35図）についてみると、A面の「王」・「賜」では表層側が広がり、下側に向かって幅を減じる箇所が多い。象嵌線が嵌められている溝がV字形の溝となっていることに起因する可能性が高い。しかし、A面の「王」・「賜」以外の文字、およびB面の文字の断面形では横長の楕円形となるところも多い。これらの文字の象嵌線は、V字形の溝の底にまで入り込んでいないものと推測される。

なお、象嵌に使用される金線は、V字形溝にはめ込まれた後に研磨して仕上げられるため、表面の観察から金線の構造を知ることはできなかった。X線CT画像においても全体としては不明なところが多いが、B面の2文字目においては、象嵌線が捩れている箇所を確認した（第36図）。

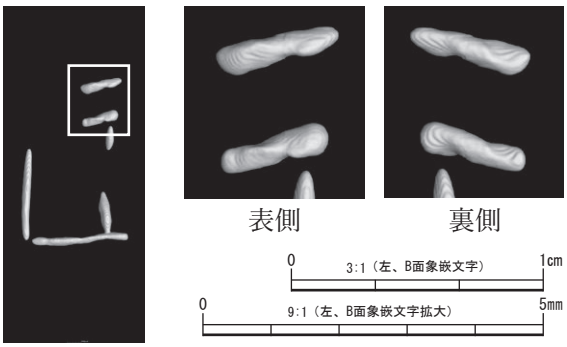
この箇所を見ると、象嵌線の中心が中空になっているわけではなく、厚みのある金線が捩られているようにみえる。だが、金線のX線の透過具合を考えると、この画像のみで象嵌線が捩りであるか巻きであるか判断することは難しい。

捩りの象嵌線がこの鉄剣にみられる象嵌全体に施されているかについては明らかにしえないところが多いが、象嵌線の底部が一定間隔で凹凸を繰り返す箇所がみられる。これはV字形溝を彫るためのタガネ痕跡の可能性も考えたが、象嵌線の捩りより作られていることに起因する可能性もある。

金象嵌の類例については、近年の調査研究において詳細が確認されているが、捩りの象嵌については、細長い金板を捩ることで金線とする事例が確認されている。王賜銘鉄剣の象嵌も、これと同様に捩られた金線をもちいて象嵌としている可能性が考えられる。



第 35 図　王賜銘鉄剣　象嵌文字とその断面（S=3/1）



第 36 図　B 面象嵌にみえる金線の振り

【参考文献】
林志暎2001　「古代韓國と日本における金属象嵌線の製作技法」『日本文化財科学会第18回大会発表要旨集』　日本文化財科学会
林志暎2017　「古代金属象嵌線の製作技術による分類の試み」『文化財と技術』第８号　工芸文化研究所

第２節　王賜銘鉄剣の蛍光Ｘ線分析調査

山口　繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）

1. 分析対象

王賜銘鉄剣　１点（第37図）



第 37 図　王賜銘鉄剣

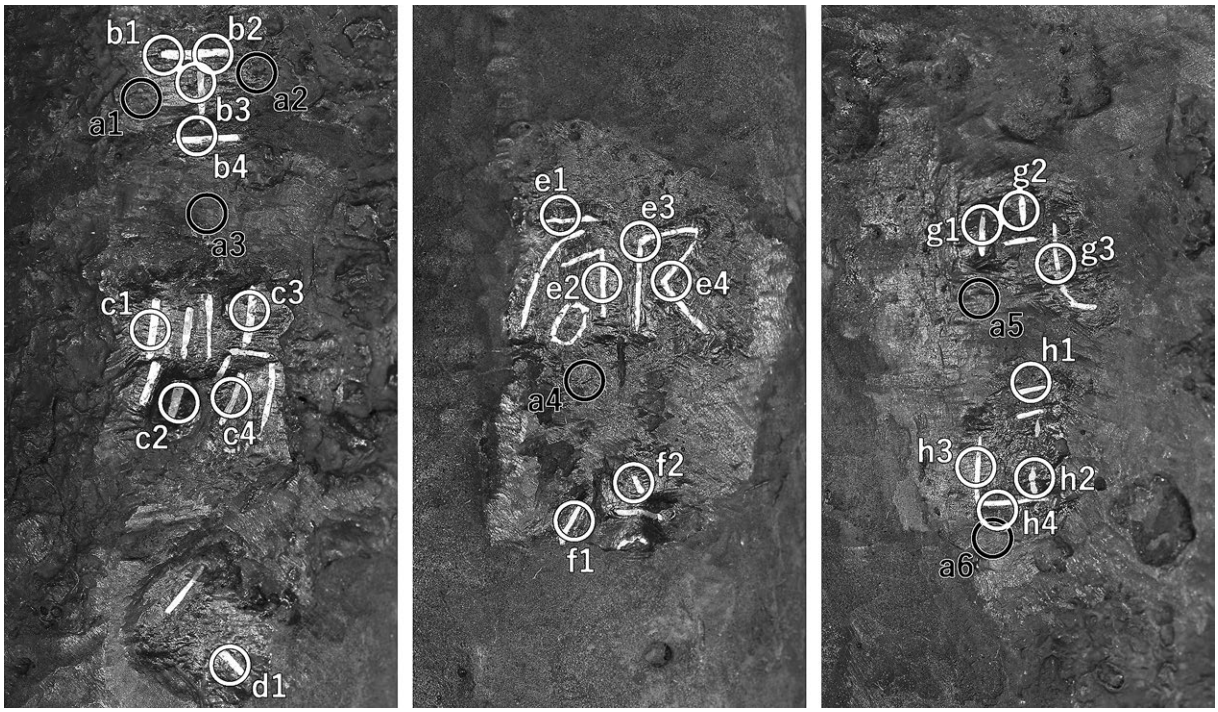
2. 分析内容および使用機器

資料には、第37図上の面に「王」、「賜」、「敬」、及び判読不明の２文字が、第37図下の面に「此」、「廷」の２文字が金色の金属を用いて象嵌で表されている（第37図、第38図）。これらの象嵌に用いられた材質を調べるため、蛍光Ｘ線分析による元素分析を行った。分析箇所を第38図に示す。また、あくまでも参考値ではあるが、ファンダメンタルパラメーター法（以下FP法）による定量値の算出も併せて行った。

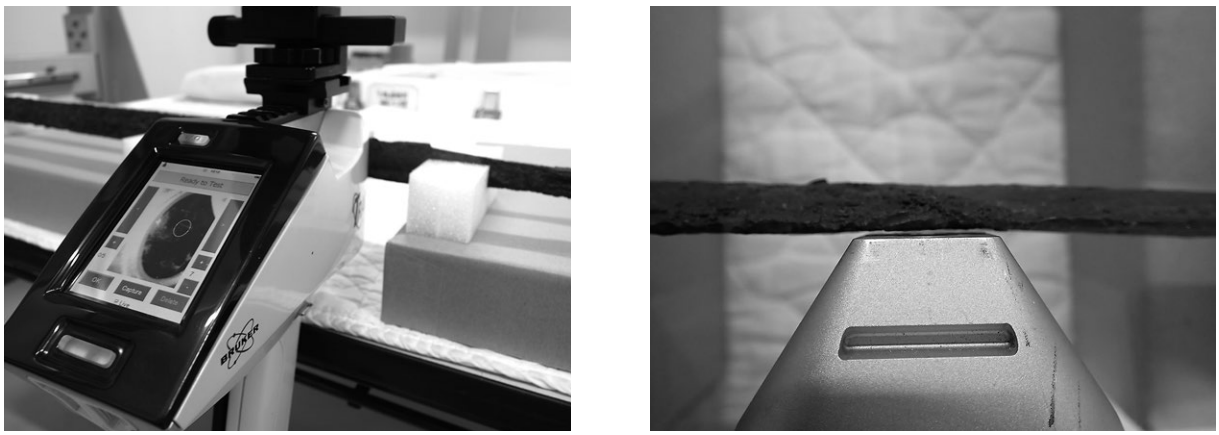
蛍光Ｘ線分析は試料にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光Ｘ線を観測することで試料の構成元素を同定する分析方法である。本分析ではハンドヘルド型蛍光Ｘ線分析装置「Tracer5i」（Bruker、Ｘ線管球ターゲット：ロジウム（Rh））を用い、大気雰囲気下、管電圧40kV、コリメータはφ3mm、照射時間120秒の条件で分析を行った。なお、測定装置と試料間の距離が開くとＸ線の照射径が広がり、また、測定箇所も不正確になるため、約１−3mmの距離で分析を行った（第39図）。

FP法は測定で得られた蛍光Ｘ線スペクトルと、基礎的な物理定数（Fundamental Parameter）を用いて計算された理論的な蛍光Ｘ線強度から元素比を推定する簡易的な定量法である。ただし、本分析

で用いた装置のX線径は3mmであり、象嵌線より大きいため、周りの鉄地を多分に含んだ測定となる。加えて、装置と試料の相対的な角度や距離、象嵌線の厚みは測定箇所によって異なるため、各測定の条件は厳密には同じではない。よって、本報告で示す定量値は厳密な意味での定量値とはみなせず、参考値として解釈する必要がある。



第38図　蛍光X線分析箇所（左より第37図の1－3、黒色：鉄地箇所、白色：象嵌箇所）



第39図　分析の様子

3. 結果および考察

3.1. 定性分析結果

分析で得られた蛍光X線スペクトルを第40図–第67図に示す。鉄地箇所では主として鉄（Fe）を検出し、また、銅（Cu）の弱いピークも検出された（第40図–第45図）。一方、象嵌部分からはそれらに加えて銀（Ag）、金（Au）を主として検出した（第46図–第67図）。よって、象嵌には銀と金の合

金が用いられた可能性が考えられた。なお、象嵌部分の銅ピーク強度は鉄地部分に比べ強くはなるものの顕著な増加は認められなかった。古代の金、銀には精錬不足による不純物として銅が含まれていることが知られており、今回の分析結果からはピーク強度増加の原因が不純物に由来するのか、もしくは意図的に銅が入れられたためなのかを判別することはできなかった。

3.2.FP 法による定量値

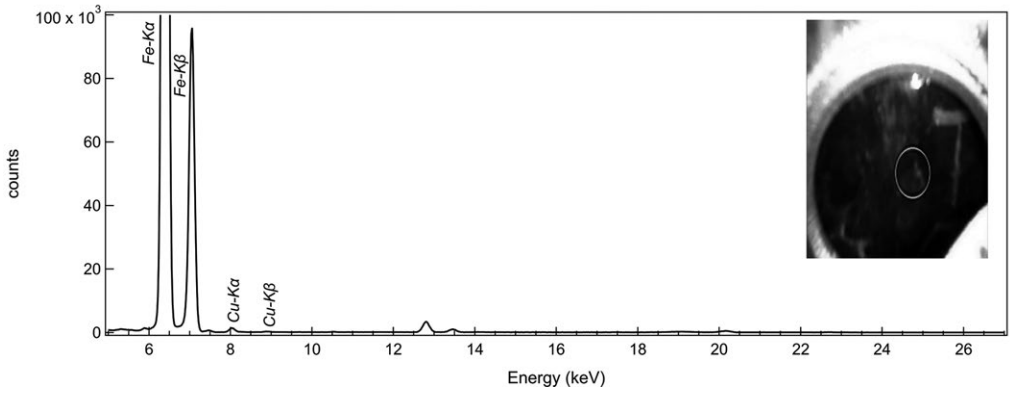
象嵌部分の分析においてFP法で算出された鉄、銅、銀、金の定量値を第5表に示す。ただし、各測定点において象嵌線から検出される銀・金と、鉄地から検出される鉄・銅ではX線が照射される体積が大きく異なる。よって、互いに比較することはできない。ゆえに、本分析では象嵌が金と銀の合金によるものと仮定し、金：銀の割合のみを各測定箇所で求めた（第6表）。この結果、金と銀の比率は第37図上の面（「王」、「賜」、「敬」、不明2文字）の平均値が68.6:31.4、第37図下の面（「此」、「廷」）の平均値が61.7：38.3であった。各面の定量値の標準偏差は、第37図上の面が1.7%、第37図下の面が1.4%と小さく、比較的均一な測定値が得られている。よって、象嵌線には金主体の金銀合金が用いられ、さらに面毎に異なる割合の合金が用いられたと考えられる。ただし、その差は約7%で色調の変化も少ないため、視覚的差異を意図した使い分けではなく、異なる地金から調製された象嵌線を用いたためと考えられた。

第5表　FP 定量値（%）

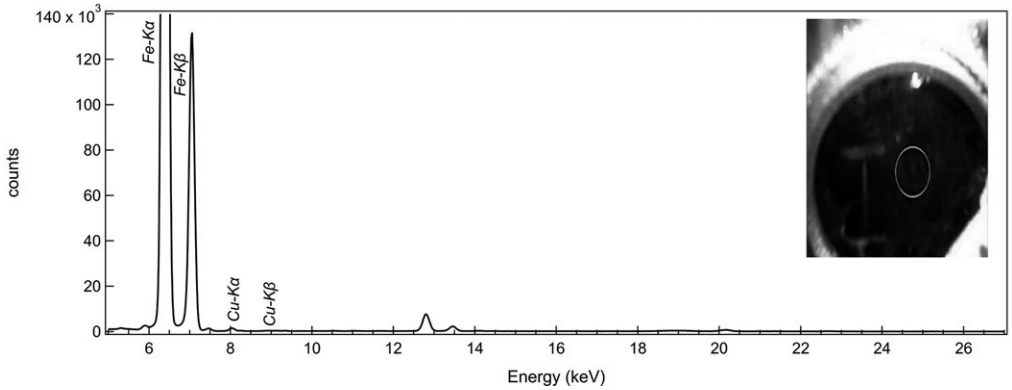
分析箇所		鉄	銅	銀	金
「王」	第38図-b1	80.9	0.6	6.0	12.6
	第38図-b2	78.1	0.6	6.6	14.7
	第38図-b3	77.3	0.7	7.3	14.8
	第38図-b4	95.2	0.4	1.4	3.1
「賜」	第38図-c1	77.8	0.6	7.4	14.2
	第38図-c2	81.4	0.4	6.0	12.1
	第38図-c3	90.5	0.3	2.7	6.4
	第38図-c4	81.0	0.6	5.9	12.6
不明	第38図-d1	88.9	0.5	3.1	7.4
「敬」	第38図-e1	87.7	0.4	3.9	8.0
	第38図-e2	82.6	0.4	5.5	11.4
	第38図-e3	85.4	0.4	4.4	9.8
	第38図-e4	85.6	0.4	4.1	9.6
不明	第38図-f1	90.9	0.5	2.7	5.9
	第38図-f2	94.7	0.2	1.4	3.7
「此」	第38図-g1	87.6	0.7	4.7	6.9
	第38図-g2	90.8	0.6	3.2	5.4
	第38図-g3	89.9	0.6	3.6	5.9
「廷」	第38図-h1	93.2	0.8	2.2	3.8
	第38図-h2	93.9	0.2	2.3	3.6
	第38図-h3	89.4	0.4	3.8	6.4
	第38図-h4	82.3	0.5	6.8	10.4

第6表　金銀比（%）

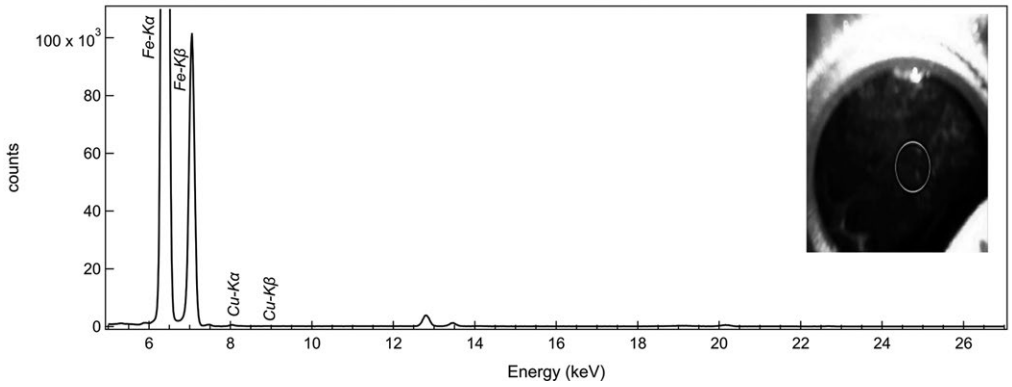
分析箇所		銀	金
「王」	第38図-b1	32.3	67.7
	第38図-b2	31.0	69.0
	第38図-b3	33.0	67.0
	第38図-b4	31.1	68.9
「賜」	第38図-c1	34.3	65.7
	第38図-c2	33.1	66.9
	第38図-c3	29.7	70.3
	第38図-c4	31.9	68.1
不明	第38図-d1	29.5	70.5
「敬」	第38図-e1	32.8	67.2
	第38図-e2	32.5	67.5
	第38図-e3	31.0	69.0
	第38図-e4	29.9	70.1
不明	第38図-f1	31.4	68.6
	第38図-f2	27.5	72.5
「此」	第38図-g1	40.5	59.5
	第38図-g2	37.2	62.8
	第38図-g3	37.9	62.1
「廷」	第38図-h1	36.7	63.3
	第38図-h2	39.0	61.0
	第38図-h3	37.3	62.7
	第38図-h4	39.5	60.5



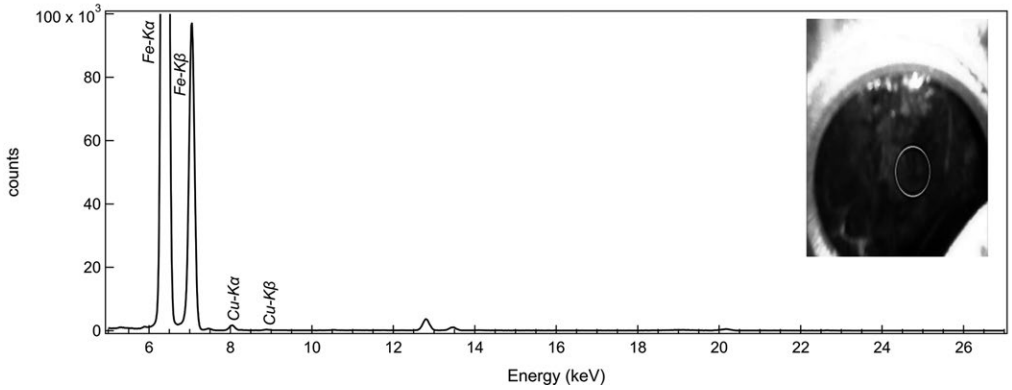
第 40 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 a1、鉄地）



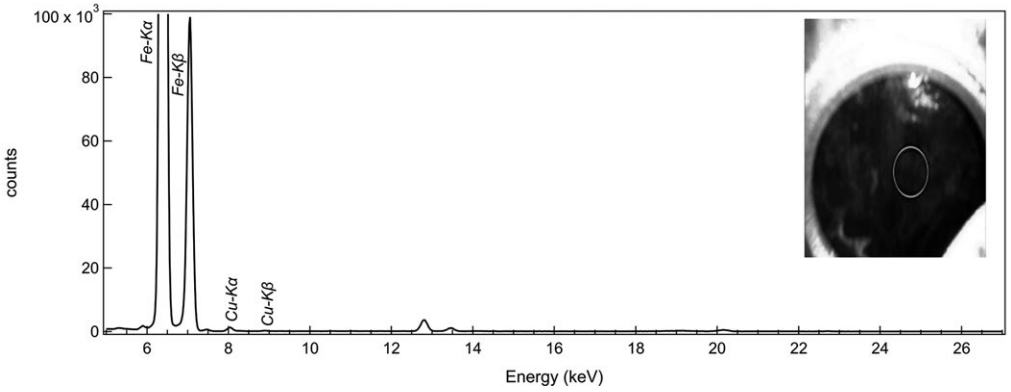
第 41 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 a2、鉄地）



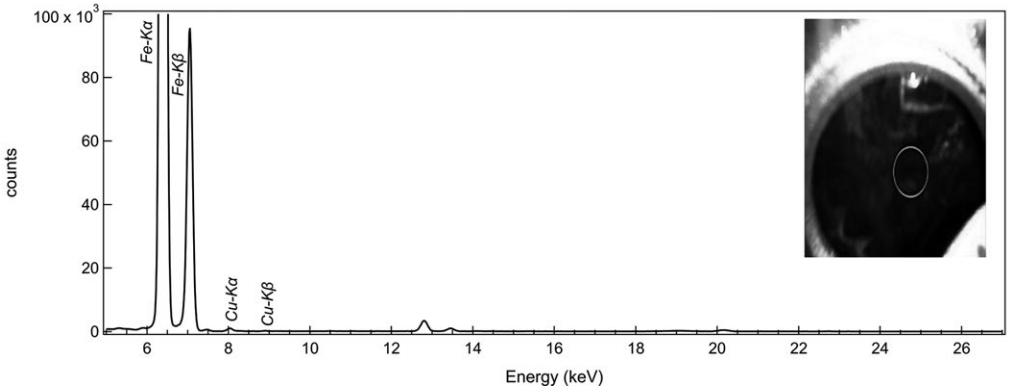
第 42 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 a3、鉄地）



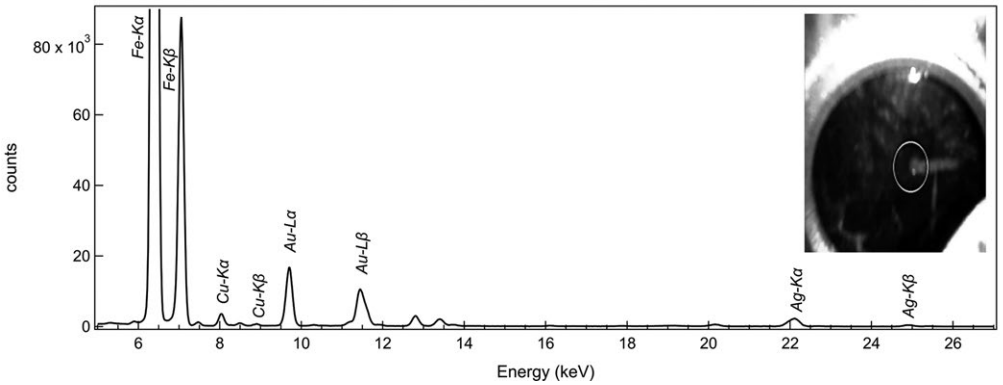
第 43 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 a4、鉄地）



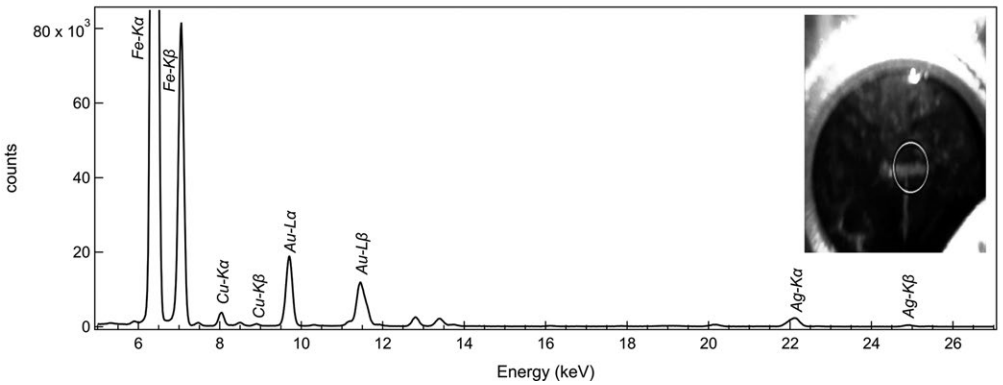
第 44 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 a5、鉄地）



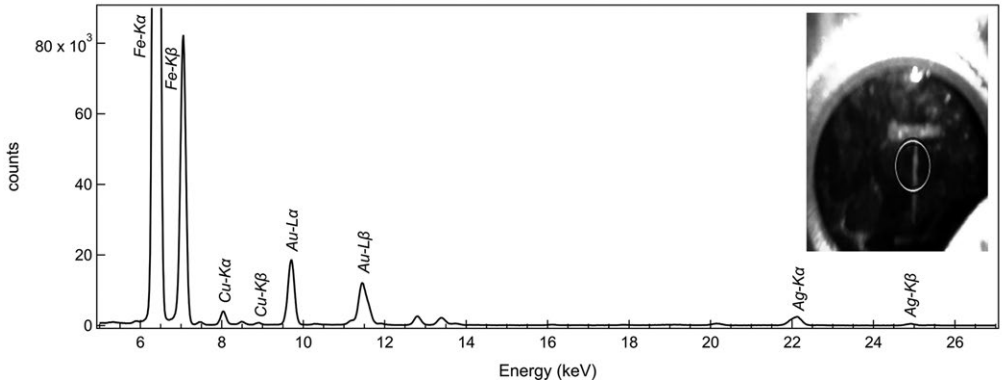
第 45 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 a6、鉄地）



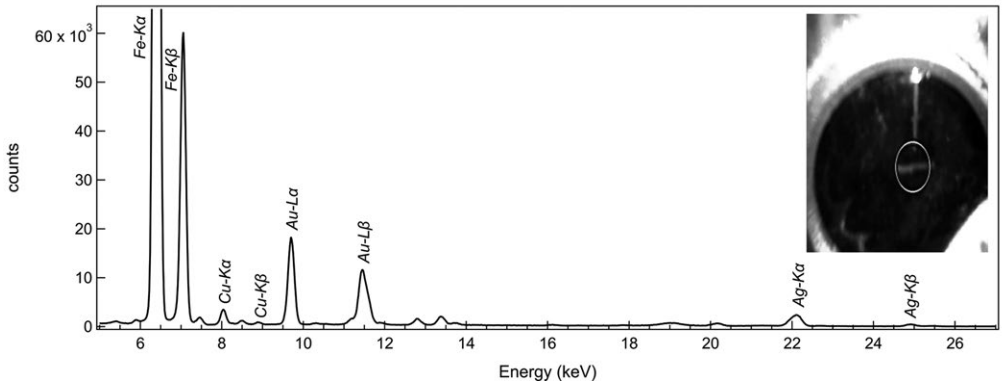
第 46 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 b1、「王」）



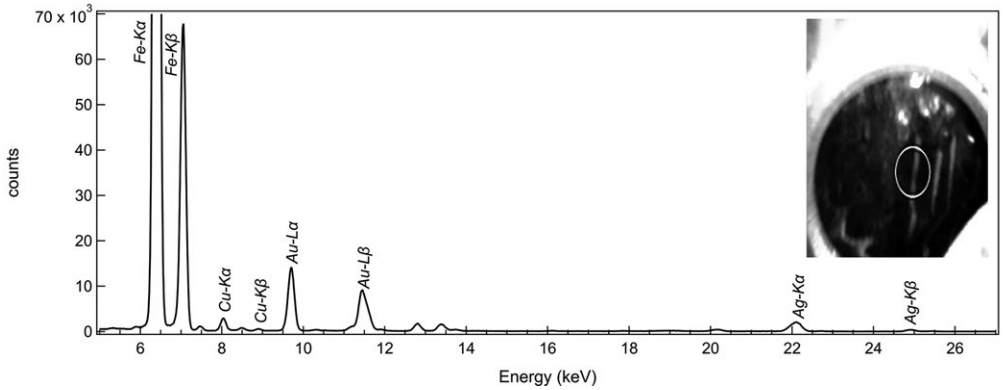
第 47 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 b2、「王」）



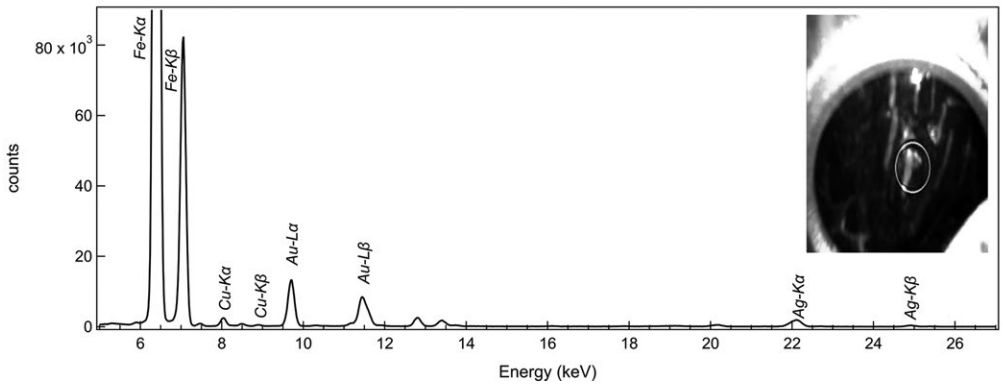
第 48 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 b3、「王」）



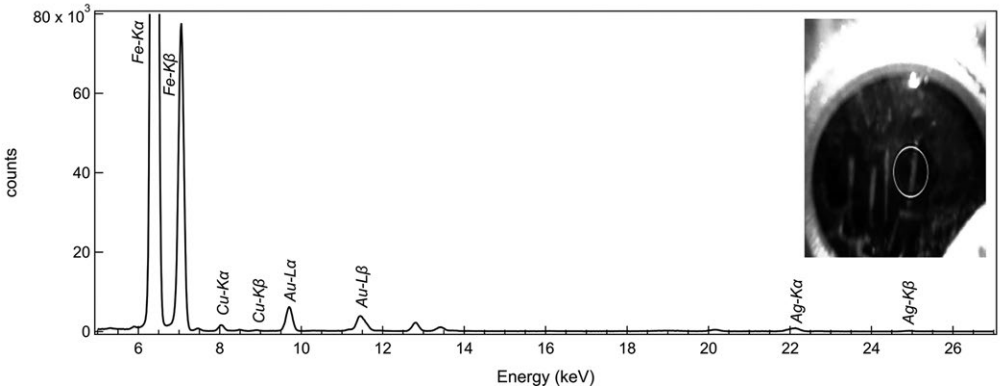
第 49 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 b4、「王」）



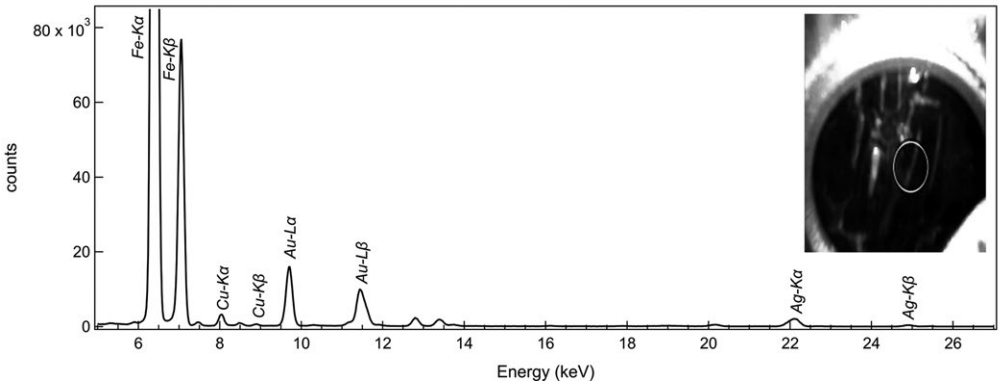
第 50 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 c1、「賜」）



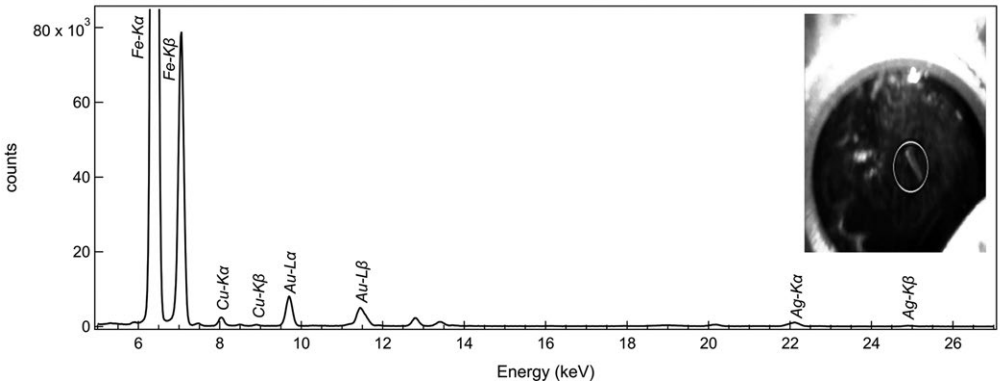
第 51 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 c2、「賜」）



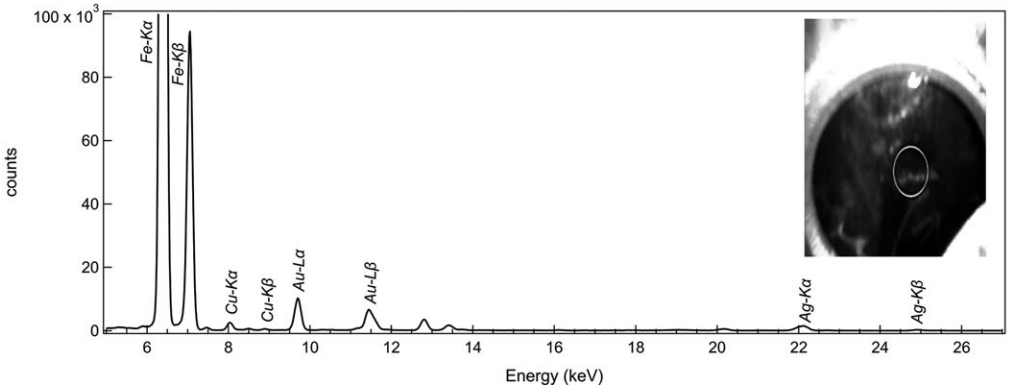
第 52 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 c3、「賜」）



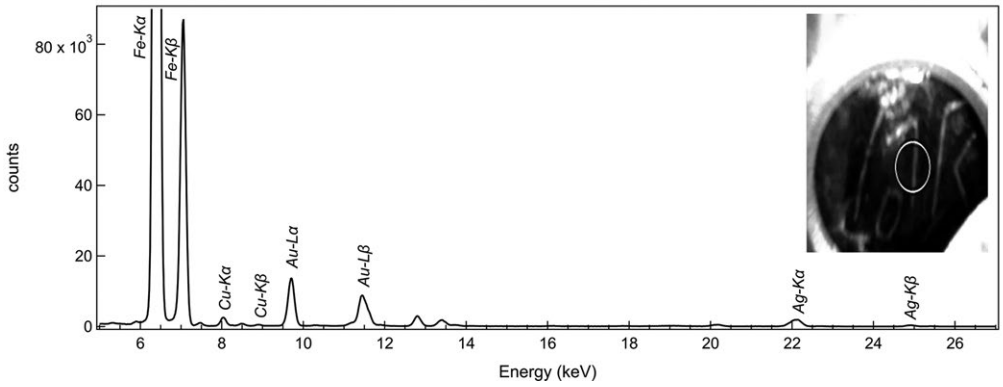
第 53 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 c4、「賜」）



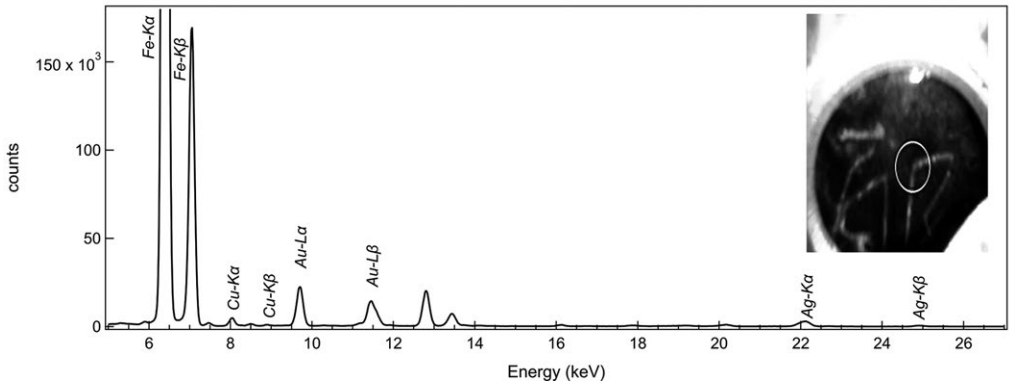
第 54 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 d1、不明文字）



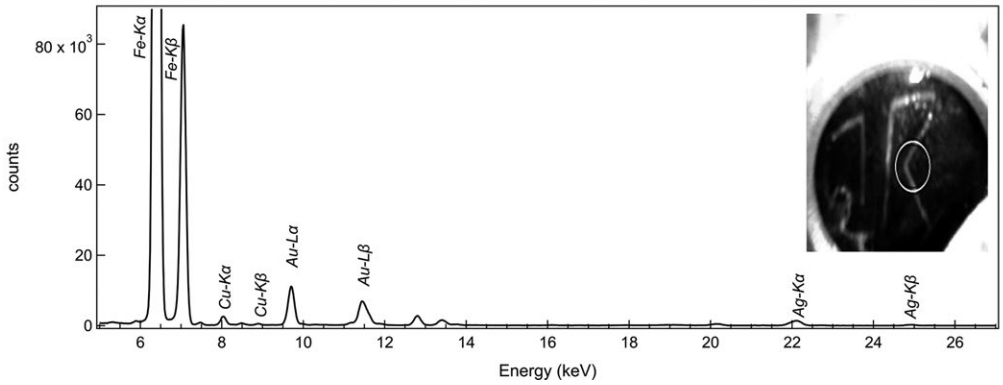
第 55 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 e1、「敬」）



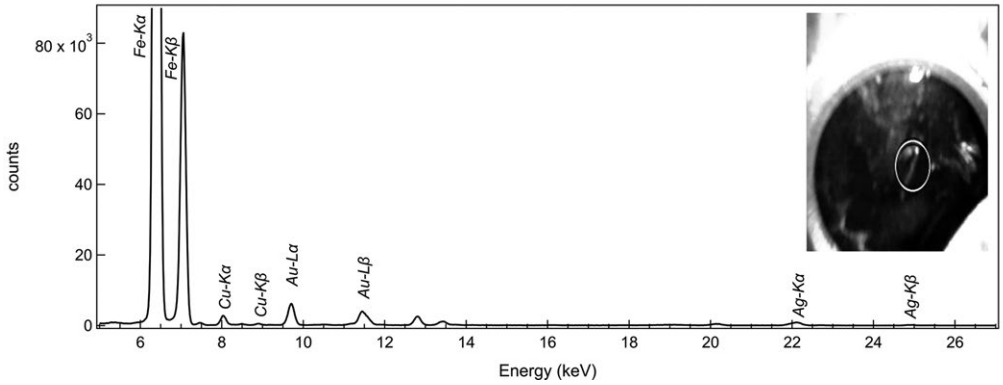
第 56 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 e2、「敬」）



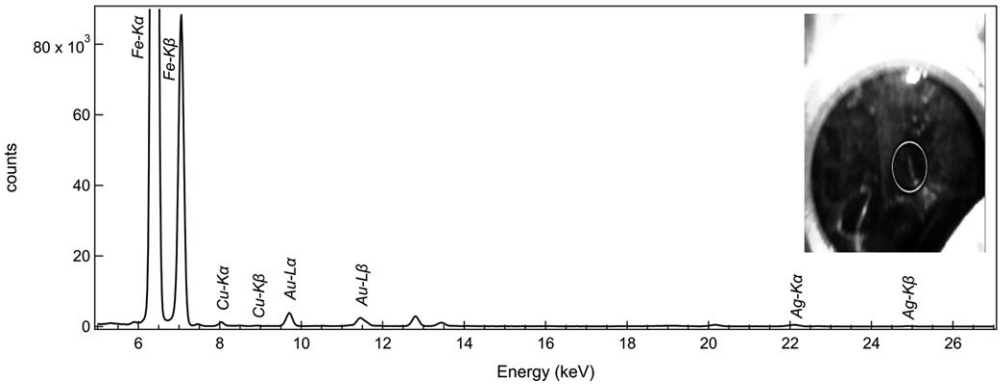
第 57 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 e3、「敬」）



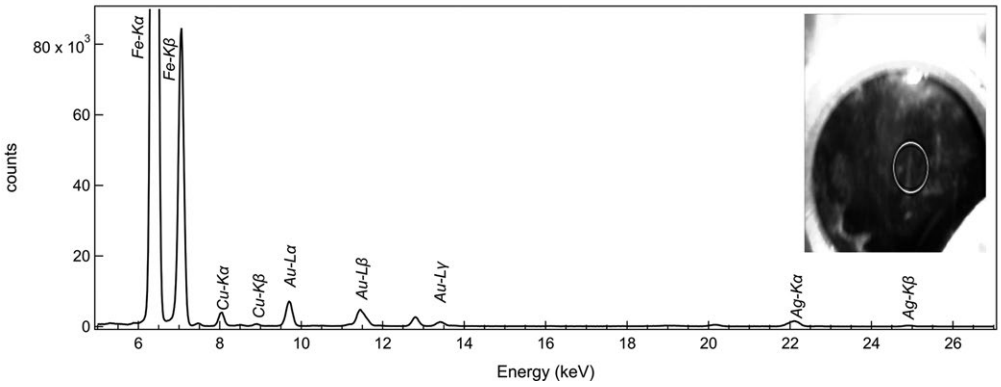
第 58 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 e4、「敬」）



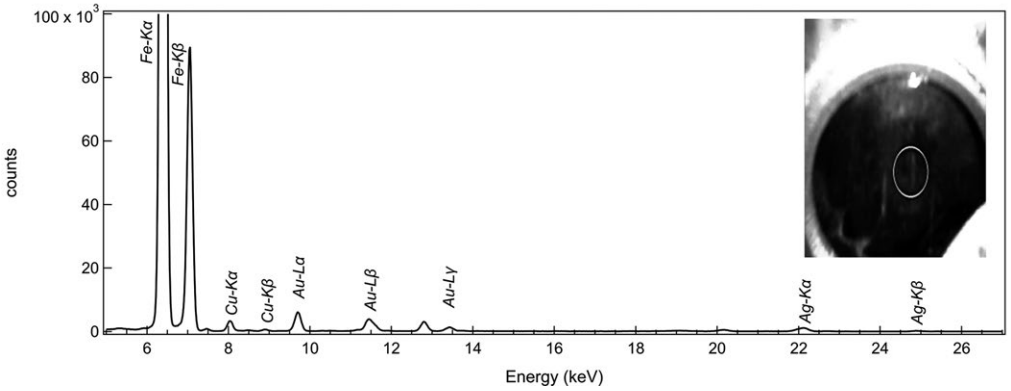
第 59 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 f1、不明文字）



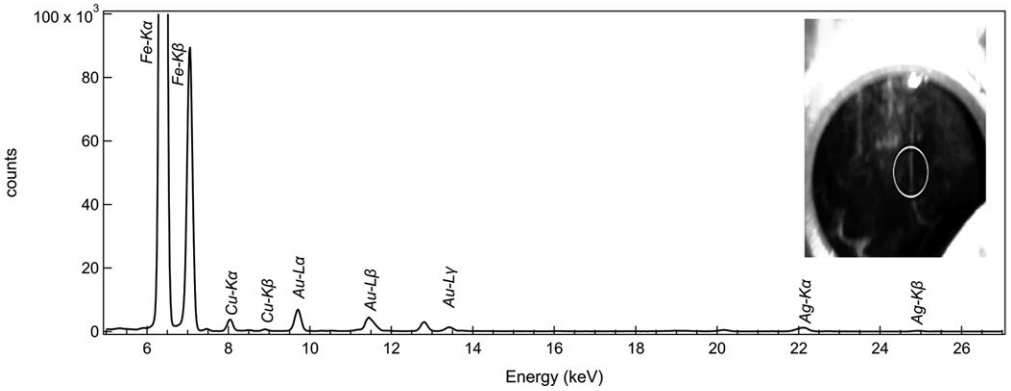
第 60 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 f2、不明文字）



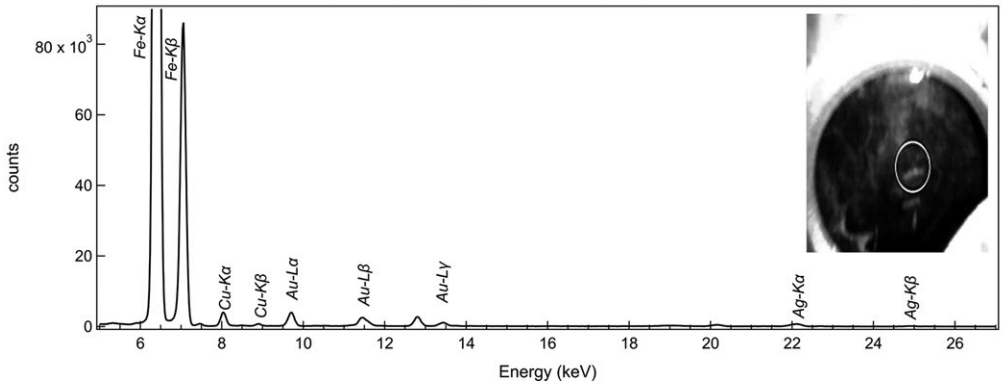
第 61 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 g1、「此」）



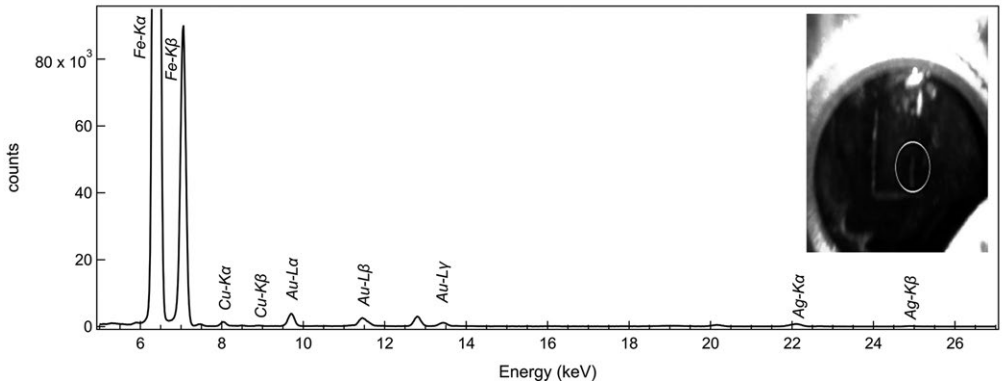
第 62 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 g2、「此」）



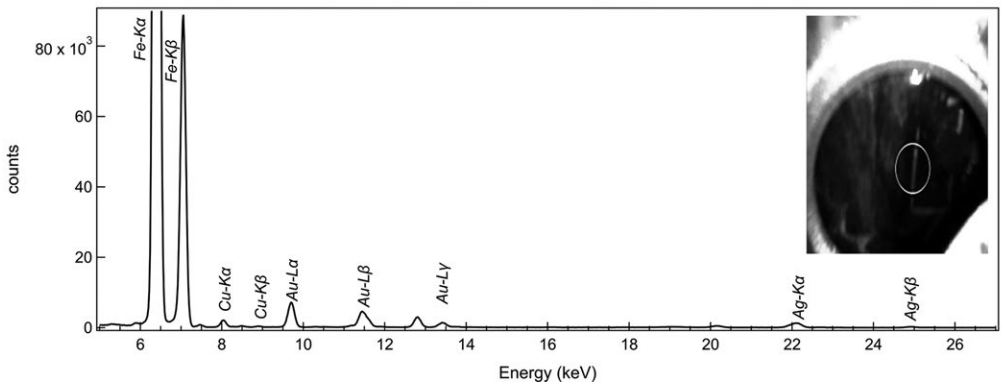
第 63 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 g3、「此」）



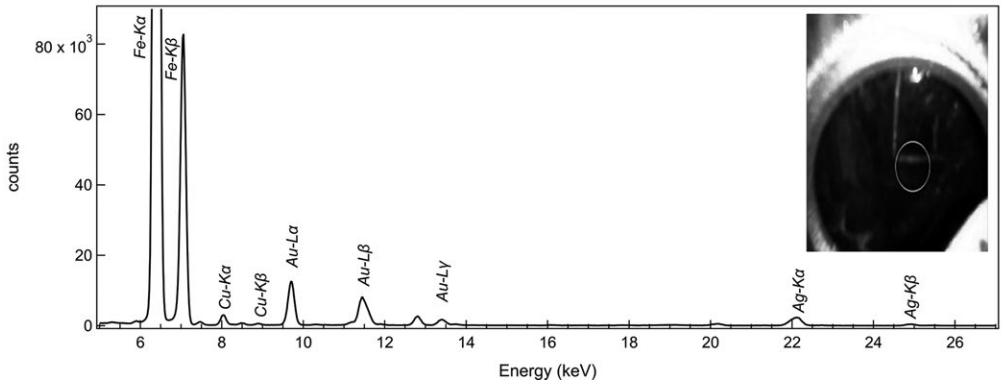
第 64 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 h1、「廷」）



第 65 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 h2、「廷」）



第 66 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 h3、「廷」）



第 67 図　蛍光 X 線スペクトル（第 38 図 h4、「廷」）

第３節　王賜銘鉄剣象嵌銘のＸ線 CT 調査

上野　祥史（国立歴史民俗博物館）

Ｘ線CTも高倍率での撮影が実現すれば、より精度の高い形状の情報を得ることが可能になる。微化石や昆虫、鉱物など、小型の標本を主たる対象とした高精細Ｘ線CTスキャン装置を利用すれば、王賜銘鉄剣の象嵌銘もより詳細な形状が可能になるはずである。こうした意図のもと、東北大学総合学術博物館にてＸ線CTスキャン装置を用いた調査を実施した。

撮影機器及び撮影条件は以下のとおりである。

〈撮影機器〉

東北大学総合学術博物館の高出力大型標本用CT（ボクセルワークス社検出器（VXVA-23002）搭載コムスキャンテクノ社製 ScanXmate-D180RSS270）

〈撮影条件〉

・「王」「賜」「□（人）」「敬」「此」「廷」銘の撮影

管電圧200kV、管電流50A、

幾何学的拡大率6.06625、解像度16.485μm（「王」「賜」「□（人）」「此」）

幾何学的拡大率5.37922、解像度18.590μm（「敬」「廷」）

プロジェクション数3000、露光時間１フレーム/秒（f/s）、積算回数１回

・「□（安）」銘の撮影

管電圧200kV、管電流50μA、幾何学的拡大率2.99634、解像度33.374μm

プロジェクション数2500、露光時間１フレーム/秒（f/s）、積算回数１回

〈撮影後の解析〉

MolcerPlus（White Rabbit 社製）を利用して三次元情報を作成し、それをもとに二次元画像を作成し、Adobe社Photoshop等を利用し画像処理を加えた。

「□（安）」銘のみ撮影条件が異なるのは、計測装置に収納する物理的条件から、「□（安）」の象嵌銘は高倍率での撮影の範囲から外れたことによる。ゆえに、「□（安）」銘は、象嵌銘全体を撮影範囲とした倍率の低い画像から抽出して示した。

「王」「賜」「□（人）」「敬」「□（安）」「此」「廷」の七文字が対象である。各銘とも、実測図に倣った透過画像の提示と、象嵌銘を上方と下方から俯瞰した図を示した。前者は、象嵌銘の表面を水平に近い状態に置いて、正面・左右側面・上面・下面の透過画像を示した。後者は、俯瞰視点を前者の透過画像にアルファベットで示し、透過画像（ヴォリューム画像）と外形実体画像（サーフェス画像）を上下もしくは左右に並べて示した。

「王」銘　（第68図）

上辺横画は、象嵌線の横断面（象嵌線の長軸に直行する断面、以下同じ）がＶ字形をなし、側面と底面に不整形な凹凸をもつ。上辺横画の左端は他より少し幅が狭い。下辺横画は、象嵌線の横断面がＶ字形をなし、長軸方向（象嵌線の長軸方向と平行、以下同じ）の側面は右端がコ字形に近く、左端は鋭利な横Ｖ字形をなしている。下辺横画の中央近くでは、質量密度の高い部分（透過画像の不透明

な白色）がみえ、象嵌線は下辺に少しふくらみをもつ。象嵌線の成形時に、別材を補填・混入した痕跡とみる。縦画は、正面（表面）からみると両端が先細りの形状となり、象嵌線の横断面は底部がやや丸みをもつV字形をなす。縦画下端は幅が少しふくらみをもち、端部を象嵌銘表面側に向けて折り返している。上端は、表面も側面もともに鋭利な横V字形をなしている。縦画は上半部の中央あたりで少し折れ曲がり、ここを境に上下で厚み（深さ）は異なる。透過画像では、縦画の象嵌線は透過度の低い不透明な濃白色であり、上下の横画の象嵌線とは状況が異なる。象嵌線の厚み（深さ）は、上下の横画も縦画もほぼ同じであることから、象嵌線の質量密度が異なるものと推測する。素材の質的な差を反映する可能性がある。中央横画は、縦画の左側と右側にわずかに遺存する。縦画との先後関係は、明確にはみえない。表面観察から縦画が後続すると指摘されているが［永嶋1993］、X線CTでは中央横画の右端から細く伸びた線が縦画の上に乗るようにもみえる。中央横画も、厚みのある部分は透過画像では不透明の濃白色のため、縦画と同じ質量密度の高い素材を利用したと想定する。

縦画と下辺横画は、側面が左右非対称の刀身の側面形に似た形状をなしており、かつ下辺横画は、象嵌線の底辺（側面でみる底辺、以下同じ）が滑らかな線形をなしている。また、上辺横画と下辺横画では、筆画の上辺と下辺に微細な凹凸がみえている。これらは、蹴り彫りによるたがね打ちで象嵌溝を成形した痕跡とみる。

「賜」銘　（第69図）

象嵌線は、いずれも横断面が正三角形に近いV字形をなしている。象嵌線のほかに、「貝」字と「易」字の上を横に貫く一条の象嵌溝の痕跡がみえる。縦断面がV字形の凹み（溝状）の表面のみを確認し、象嵌線の一部が象嵌溝に遺存した痕跡である。「貝」字と「易」字のそれぞれに伴う二つの筆画か、一連の筆画であるかの判別は容易でないが、凹みの平面の形状や縦断面の形状は一連であるようにみえる。

「易」字の横画以外は、すべて縦画のみが遺存している。「貝」字の「目」の右側縦画では、象嵌線の重ね、もしくは継ぎ足しにみえる部分がある。右側面にも左側面にも、重なりを反映した凹みがみえている。この筆画では、下半を先に象嵌し、斜行した重なりを斜行させつつ象嵌線を上重ねした状況にみえる。「易」字の「日」の左側縦画では、象嵌線の底辺が小さく波打つような形状をしており、上端部を内側に折り返して象嵌線を嵌め込んだ痕跡がみえている。そのほかの縦画の象嵌線では、側面に段差（凹凸）や屈曲がみえ、段差がある部分は底辺が緩やかな曲線状をなしている。いずれも象嵌線が変曲する部分で側面の段差や底辺の屈曲が生じており、「貝」字の「ハ」の筆画や「易」字の「勿」字形の筆画でより明瞭にみえている。「易」字の「日」の左側縦画の底辺にみえる小さく波打つような形状は、象嵌溝を彫るたがね打ちの痕跡を反映（転写）するとみる。また、「易」字の「勿」字形の筆画などで明瞭にみえる側面の段差（凹凸）は、変曲部への象嵌線の嵌め込みに由来する皺か、変曲部での象嵌線の継ぎ足し・接合に由来する形状などが想定される。「易」字の横画は、中央付近で象嵌線の厚みは薄い。象嵌の嵌まりが浅いことに由来すると想定する。

いずれの筆画も、象嵌線は透過画像では不透明な濃白色をなしており、「王」縦画と同じ質量密度の高い象嵌線を利用したとみる。

「□（人）」銘　（第 68 図）

長い筆画と短い筆画とが遺存する。字釈は確定していないが、区分のために便宜的に「□（人）」と表現した。いずれも側面の両端は丸くおさまり、「王」銘中央横画のような象嵌線が破断した状況はみえない。象嵌線の横断面は正三角形に近い形状をなすが、底部は丸みを帯びている。長い筆画は、へ字状に緩やかに折れ曲がる。象嵌線の側面に、目立った凹凸（段差）はみえない。長い筆画は、側面に若干の凹凸がみえるが、象嵌線の側面は刀身の側面形に似た形状で、底辺は滑らかな線形をなしている。いずれの筆画も、透過画像では不透明な白色をなしており、「王」縦画や「賜」の各筆画と同じ質量密度の高い象嵌線を利用したとみる。

「敬」銘　（第 70 図）

象嵌線の横断面は部位により形状が異なるが、おおむね底面に向けて幅を狭める逆三角形に近い形状をなす。「攵」字の縦画以外は、いずれの筆画も、側面に段差（凹凸）や屈曲があり、底辺は緩やかな曲線を連ねている。一定の長さをもつ象嵌溝をつなげて各筆画を表現し、象嵌線を嵌め込んだ結果とみる。「苟」字の「口」字は象嵌線の一単位がより短く、蹴り彫りのたがね打ちの特徴をよく反映（転写）している。「攵」字の横画は、象嵌線の両端に厚み（深さ）があるものの、中央は薄くて象嵌の嵌まりが浅いことを示している。

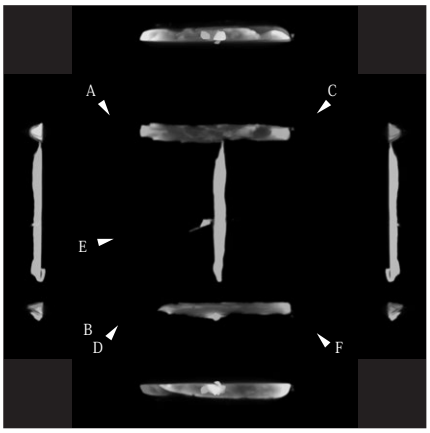
「□（安）」銘　（第 72 図）

字釈は確定していないが、区分のために便宜的に「□（安）」と表現した。高解像度の撮影では範囲外に位置するため、銘全体を対象範囲とした解像度のやや下がる撮影画像から抽出した。縮尺を同じにした「王」銘と「敬」銘を示したが、高解像度で撮影（第68・70図）した画像と比較すると、解像度の違いが確認できる。解像度の低さに相関して、外形実体画像（サーフェス）もやや大ぶりとなる。精度が異なるため、他の銘との比較は注意を要するので、参考情報として示すにとどめる。透過画像では、いずれの筆画も透過度の低い不透明な濃白色をなしており、「賜」銘や「人」銘と同じ質量密度の高い象嵌線であることのみ確認しておきたい。

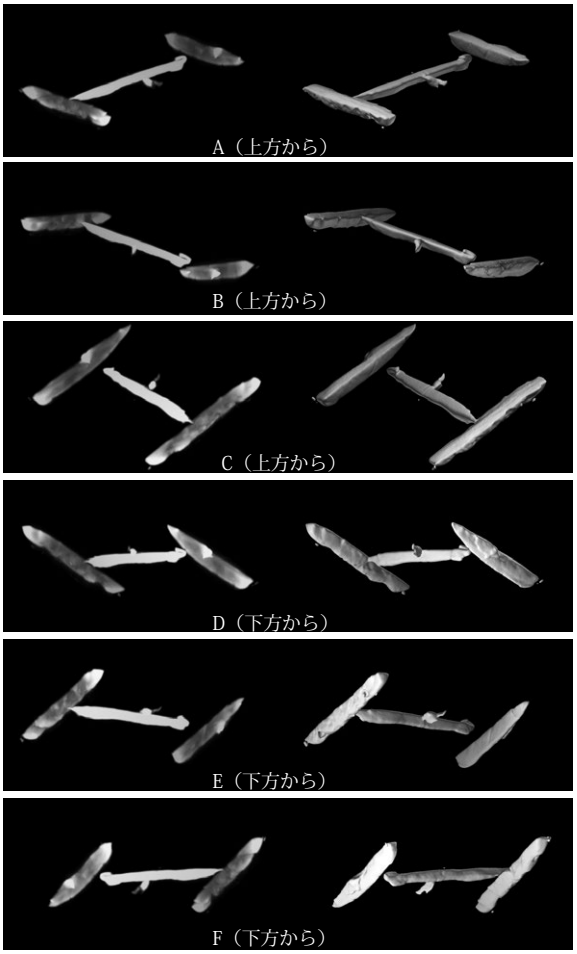
「此」銘　（第 71 図）

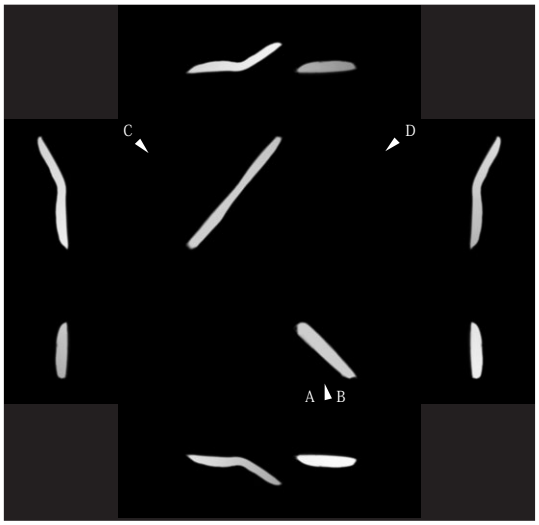
いずれの筆画でも、象嵌線は横断面が丸みを帯びたＶ字形の底面をもつ逆三角形をなしている。縦画２条は、両端が正面も側面もとともに先細りの形状をなしている。その側面は、底辺が両端に向けて浅く緩い弧線をなす形状で、側面は左右対称の三日月形にもみえる形状をなしている。横画は、正面の左右両端が丸くおさまり、長軸方向の側面では底辺は緩やかな曲線をなし、側面右端はコ字形に近く、側面左端は鋭利なＶ字形をなしており、左右非対称の形状である。曲線状の筆画は、象嵌線を継ぎ足して表現している。象嵌線の継ぎ足し（重なり）の痕跡が側面には明瞭にみえており、少なくとも３個所で継ぎ足した（重ねた）痕跡が明瞭にみえている。

象嵌線の形状が象嵌溝の形状を反映しているとみれば、側面が左右対称の形状となる縦画２条は、なめくり打ちによる彫り（溝の成形）が想定でき、左右非対称の形状となる横画と曲線状の筆画は蹴り彫りによる彫り（溝の成形）を想定できる。

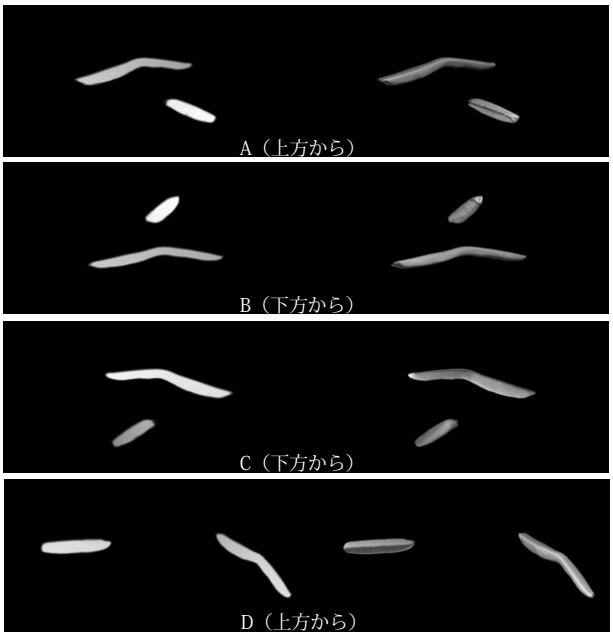


「王」 象嵌　S=5/1
上：象嵌面を水平にした状態での透過画像
右：各部位の透過画像（ヴォリューム画像）と実体画像（サーフェス画像）
※いずれもオルソ画像で提示



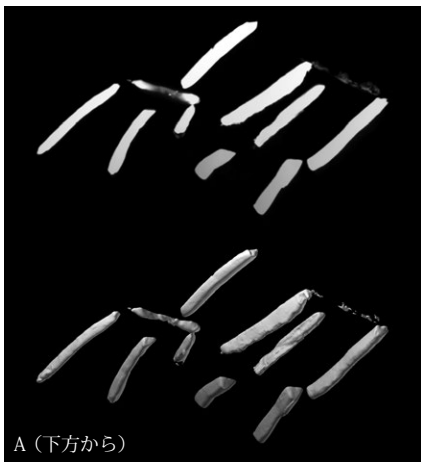


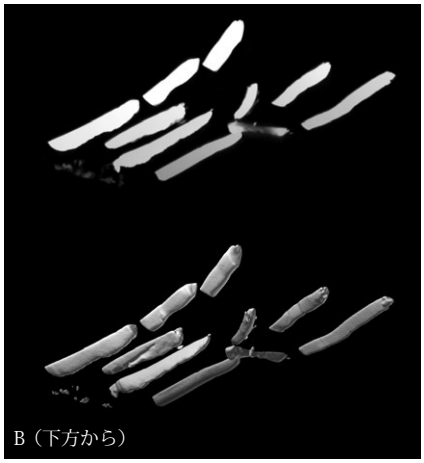
「人」 象嵌　S=5/1
上：象嵌面を水平にした状態での透過画像
右：各部位の透過画像（ヴォリューム画像）と実体画像（サーフェス画像）
※いずれもオルソ画像で提示



第 68 図　象嵌銘の X 線 CT 画像（1）





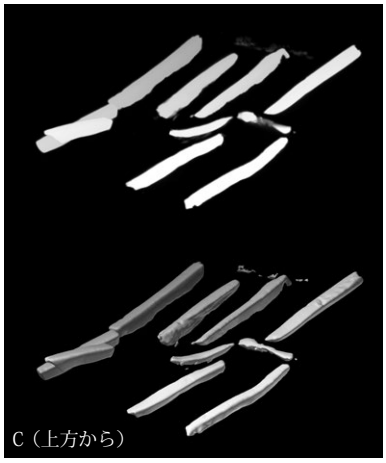


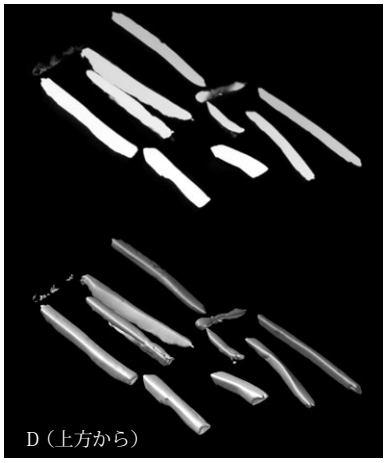
「賜」象嵌　　S=5/1

上：象嵌面を水平にした状態での透過画像

右:各部位の透過画像（ヴォリューム画像）と実体画像（サーフェス画像）

※いずれもオルソ画像で提示







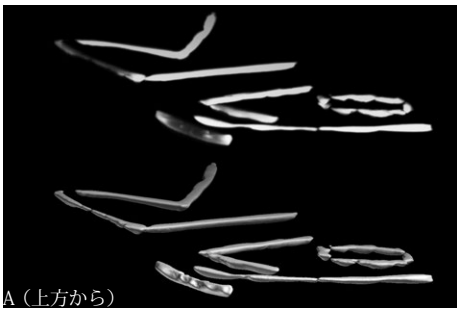
第 69 図　象嵌銘の X 線 CT 画像（2）

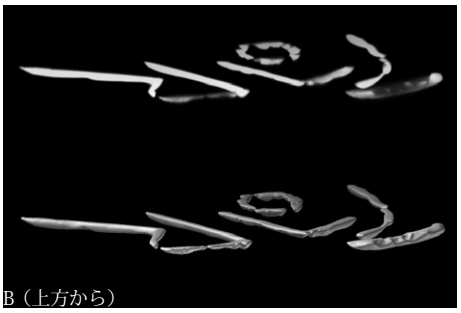


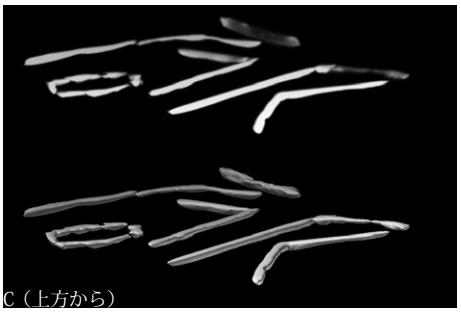
「敬」 象嵌　S=5/1

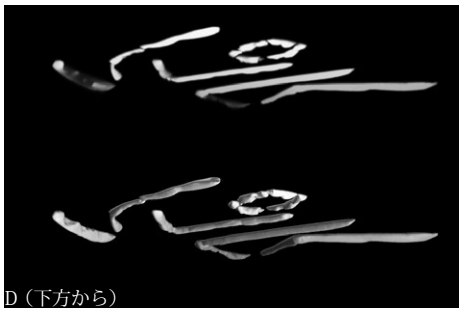
※いずれもオルソ画像で提示

上：象嵌面を水平にした状態での透過画像

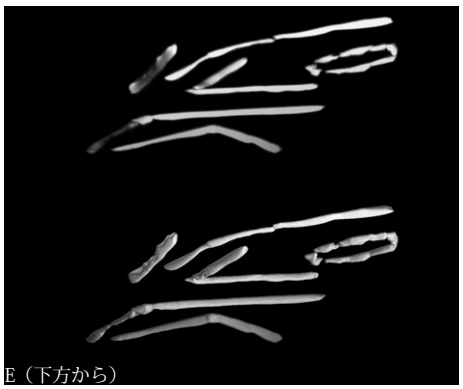

A（上方から）

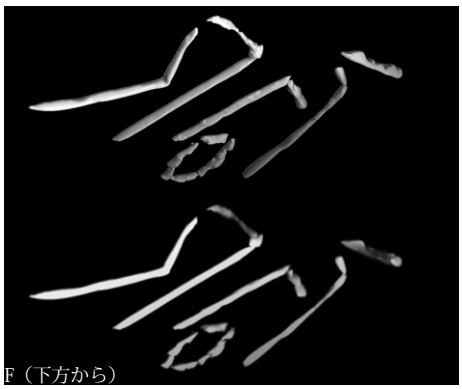

B（上方から）

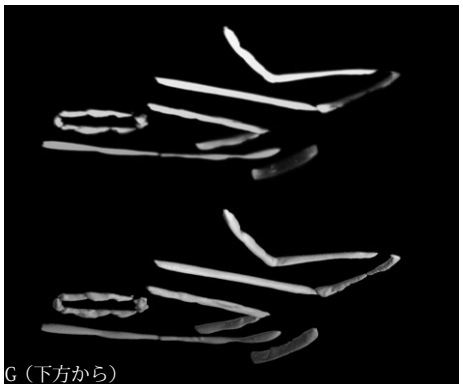

C（上方から）

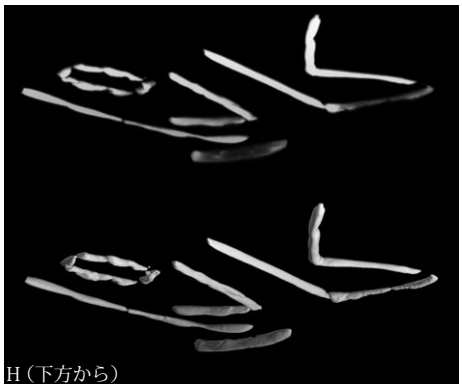

D（下方から）

右：各部位の透過画像（ヴォリューム画像）と実体画像（サーフェス画像）


E（下方から）

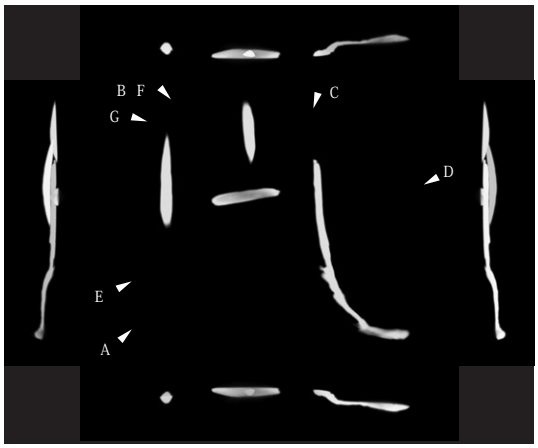

F（下方から）


G（下方から）

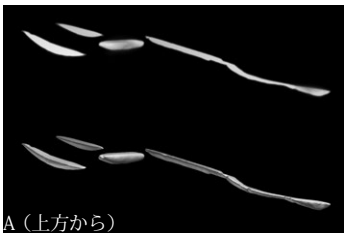

H（下方から）

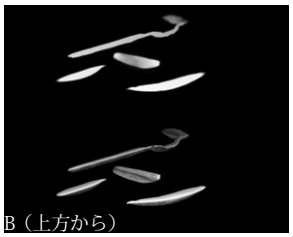
左：各部位の透過画像（ヴォリューム画像）と実体画像（サーフェス画像）

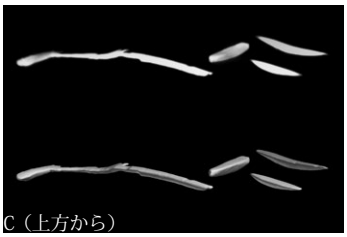
第 70 図　象嵌銘の X 線 CT 画像（3）

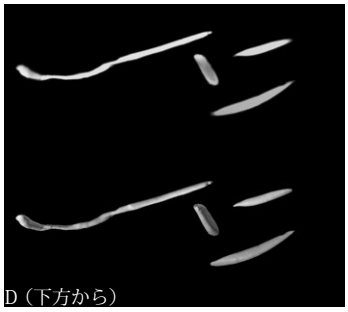


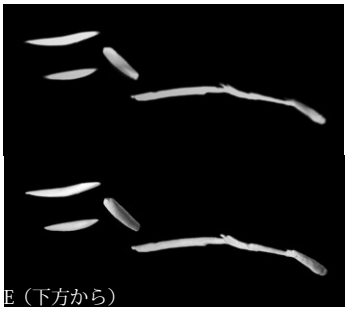
「此」象嵌　　S=5/1
詳細は他と同じ

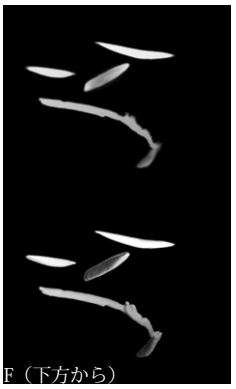




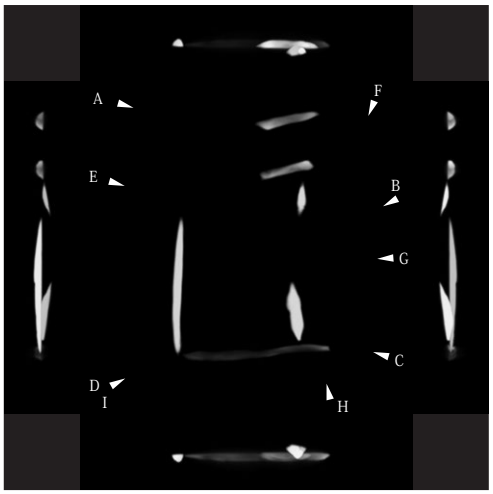






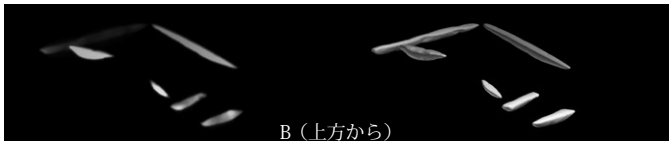


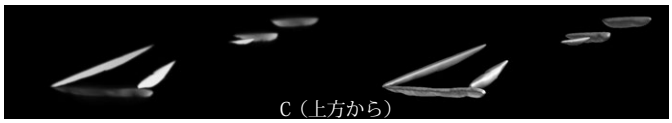


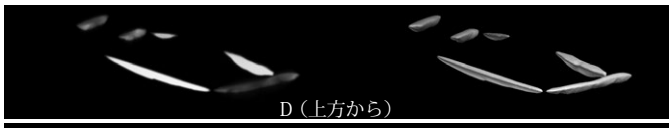


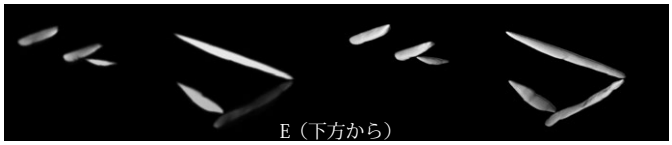
「廷」象嵌　　S=5/1
詳細は他と同じ



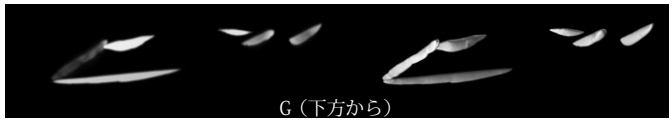


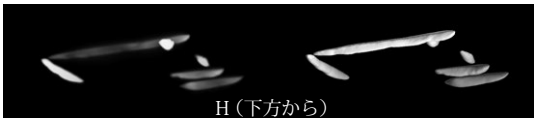


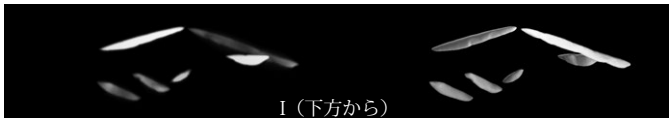












第 71 図　象嵌銘の X 線 CT 画像（4）

なお、透過画像では、横画の中央部と曲線状筆画の先端（下端）部がやや透過度が高いものの、おおむね不透明な濃白色であり、「賜」「□（人）」と同じ質量密度の高い象嵌線であったとみる。

「廷」銘　（第 71 図）

いずれの象嵌線も、象嵌線は横断面が丸みを帯びたＶ字形の底面をもつ逆三角形をなしている。縦画はいずれも、側面の両端が、正面も側面もともに先細りの形状をなし、側面は底辺が両端に向けて浅く緩い弧線をなす形状で、左右対称の細長い三日月形をなしている。中央下方の縦画には、表面と側面に段差（凹凸）がみえており、象嵌線の継ぎ足し・接合に由来する形状などが想定される。横画はいずれも、側面の両端の形状が異なる左右非対称の形状であり、下辺の長い横画は、上側の側面に凹みが二個所みえており、変曲部への象嵌線の嵌め込みに由来する皺か、象嵌線の継ぎ足し・接合に由来する形状などが想定される。

なお、透過画像では、縦画がいずれも透過度の低い濃白色をなすのに対して、横画の透過度は高い。上方の横画２条は比較的透過度が低いものの、下方の長い横画は、より透過度が低く、象嵌線の質量密度は異なるとみえる。

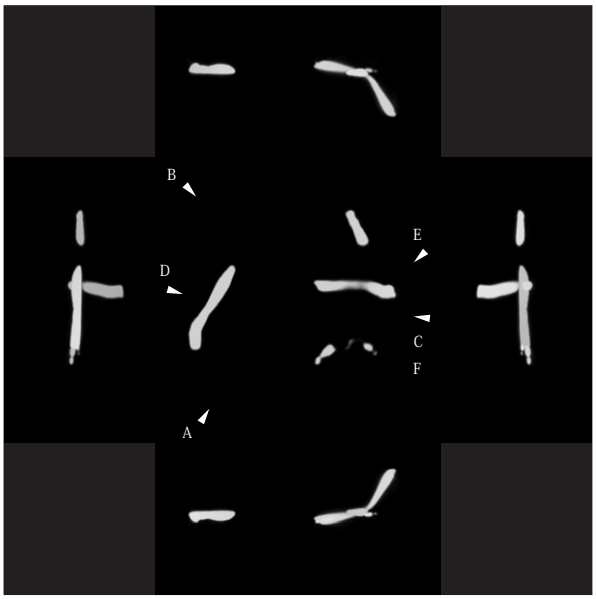
象嵌線の成形について

いずれの銘でも、各筆画に明確な捩じりの痕跡は見出せなかった。第３章第１節で指摘された捩じりの痕跡が今回の撮影では確認できない事由は別途検討せねばならない。また、象嵌線の断面観察において、明確な中空形状は確認していない。象嵌線の成形は、金属線の捩じりによる成形と巻きによる成形が想定されるが（第３章第１節）、巻きによる成形では象嵌線の芯が中空となる。

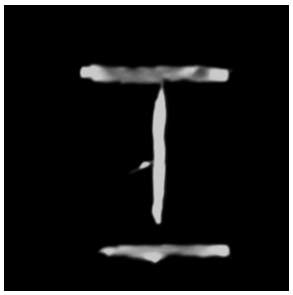
未報告の調査情報であるが、今回利用した東北大学総合学術博物館の高精細Ｘ線CTスキャン装置を利用して、2024年に古墳時代終末期の象嵌刀装具を調査した際、中空の象嵌線をＸ線CTで認識できることを確認した。その実績をふまえて、東北大学総合学術博物館での調査を企図した所以でもある。象嵌装飾をもつ刀装具（千葉県駄ノ塚古墳出土、国立歴史民俗博物館蔵、資料番号Ａ−641−1−2−1）を撮影し、象嵌線の断面が中空となる個所を複数確認した（第72図）。王賜銘鉄剣の各銘の俯瞰画像と同じ縮尺で、象嵌線の芯部にみえる中空の形状を示したが、王賜銘鉄剣の象嵌線の断面には同じ形状がみえていない。王賜銘鉄剣の象嵌線は細長い金板を捩じる成形を想定しているが（第３章第１節）、その指摘を改めて確認した。

象嵌線の質量密度について

象嵌銘の縦画は、いずれも透過画像で透過度の低い不透明な濃白色となる、質量密度の高い象嵌線であった。一方、横画には、透過度の高い淡白色となる質量密度の低い象嵌線が含まれていた。質量密度の低い象嵌線は、「王」銘横画、「賜」銘横画、「敬」銘横画、「廷」銘横画など、いずれも横画でみえていることは注目したい。なお、「賜」銘では、象嵌線が脱落し、象嵌溝に象嵌線の一部が遺存した痕跡も確認した。象嵌線の脱落が横画で生じていることも、相互に関連する可能性がある。あくまで質量密度の比較にとどまるが、仮に横画に利用した象嵌線の質量密度が低いのであれば、鍛造成形した鉄剣の物質構造（物性）に対応した措置との想定も可能であろう。

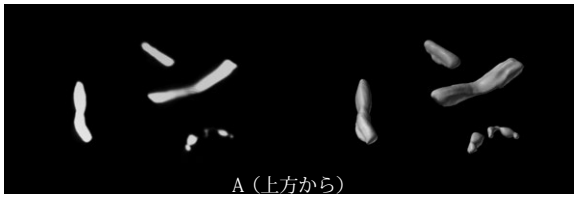


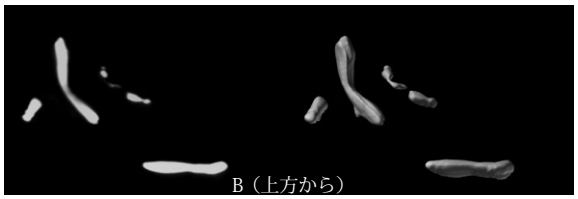
「□（安）」象嵌　　S=5/1
詳細は他と同じ

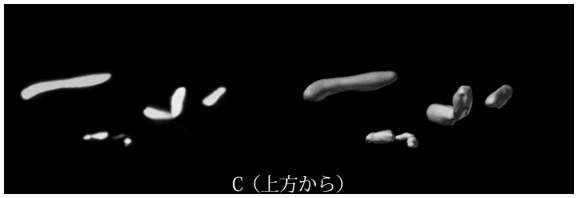


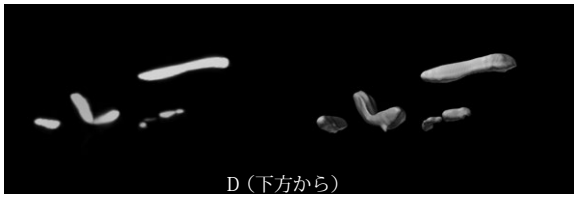
同じ解像度で示した
「王」銘と「敬」銘



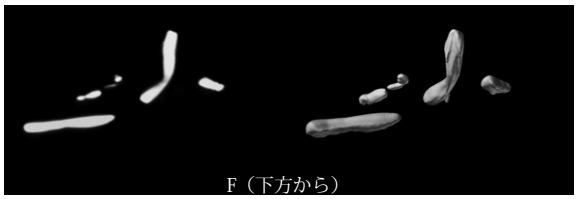


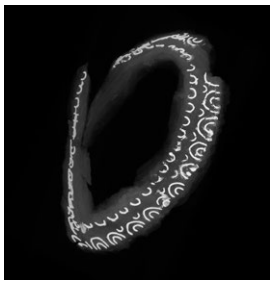


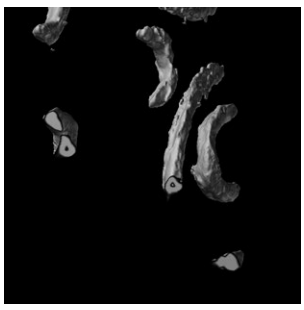


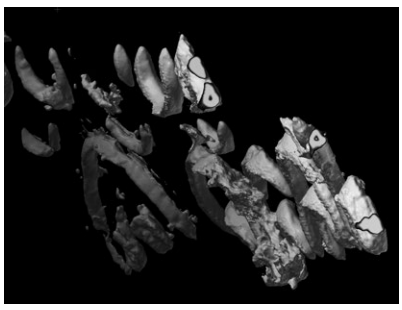












巻きにより成形した象嵌線の例
象嵌装飾大刀装具（千葉県駄ノ塚古墳出土　国立歴史民俗博物館蔵　A-641-1-2-1）

第 72 図　象嵌銘の X 線 CT 画像（5）及び関連 X 線 CT 画像

象嵌溝の形状について

象嵌線が象嵌溝の形状を反映するとみれば、片側が深く急に立ち上がり、片側は浅く緩く立ち上がる象嵌溝が各所でみえることになる。長軸方向の側面が左右で非対称となる象嵌溝の形状は、いずれの銘でも確認した。これは、蹴り彫りたがねによる彫りを反映（転写）している。一方で、両端が浅く緩く立ち上がり、長軸方向の側面が左右対称で細長の三日月形となる形状の象嵌溝は、「此」銘の縦画と「廷」銘の短い縦画でみえた。この象嵌溝の形状は、なめくり打ちによる象嵌溝の彫りを想定させる形状でもある。彫金技法の詳細な検討と対照した検討が必要であるが（第4章第1節参照）、蹴り彫りによる成形とは明らかに異なる形状の象嵌溝が象嵌線には反映されていることを確認しておきたい。

諸事情により、調査は2025年10月6・7日に実施した。撮影および事後のデータ処理、画像処理等が調査報告事業の終盤に展開したため、象嵌銘の検討を分担する研究者と情報を十分に共有することは果たせなかった。象嵌線の立体形状がある程度詳細にみえたことは、王賜銘鉄剣の象嵌技法について知見を与えるものと考える。エヴィデンスの提示につとめ、技法の検討は推測にとどめた。今後の象嵌技法の検討の基礎となることを願いたい。

第 4 節　稲荷台 1 号墳出土胡籙金具の調査

山口　繁生（公益財団法人元興寺文化財研究所）

1. 分析対象

胡籙金具　計９点（鋲具、吊手金具１、勾玉形金具、吊手金具２、帯状金具１、帯状金具２、帯状金具３、帯状金具４、吊手金具３）

2. 分析内容および使用機器

2.1. 断層観察

胡籙金具の内部構造を観察するため、X線コンピュータ断層撮影（CT）による断層観察を行った。

CTは試料内部の構造を調べるX線イメージング技術である。撮影では試料に対し多方向からX線を照射し、複数枚の透過像からなるデータセットを取得する。得られたデータセットから計算により試料断層像を再構成することで内部構造を調べる。また、得られた断層像を積層することで3Dモデルの構築も行える。

撮影にはマイクロCTスキャナ「TOSCANER-32300 FD」（東芝ITコントロールシステム）を用い、管電圧185、135、120kVのいずれか、管電流5000、400、210μAのいずれか、露光時間333msec/枚、撮影枚数1200枚/360°、積算2、または４回の条件で行った。また、解析にはCTデータ解析用ソフトウェア「VGstudio MAX Ver.3.2」（Volume Graphics）を用いた。

2.2. 微小部観察

胡籙金具に付着する有機質、鍍金、付着顔料の詳細な観察のため、顕微鏡による微小部観察を行った。

観察には実体顕微鏡「Leica M205C」、顕微鏡用デジタルカメラ「FLEXACAM C1」（ともにライカマイクロシステムズ）を用いた。

2.3. 材質分析

吊手金具３（第114図）において金色箇所、および赤色顔料の付着箇所が観察される。これらの材質分析のため、蛍光X線分析による元素分析を行った。

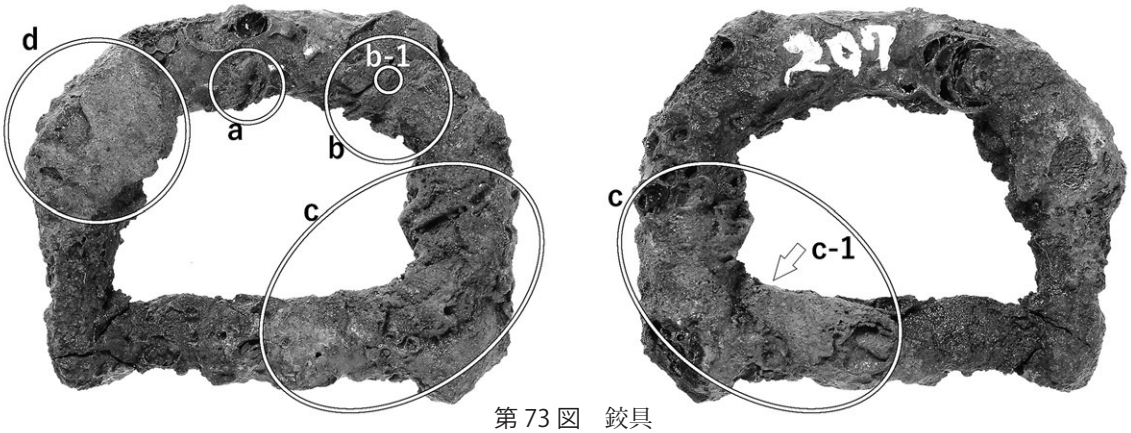
蛍光X線分析は試料にX線を照射した際に試料から放出される各元素固有の蛍光X線を観測し、試料の構成元素を同定する分析方法である。点分析では微小領域に対して蛍光X線分析を行い、その箇所の元素組成を調べる。一方マッピング分析では試料表面を複数の微小領域に分割し、各微小領域において蛍光X線分析を行う。得られたデータから各元素のピーク強度を画像コントラストとして視覚化する。ただし、資料に凹凸がある場合、測定箇所ごとに照射角度や距離が異なるため、必ずしも各元素の濃度分布を正確に示したものではない。

分析には蛍光X線分析装置「EA6000VX」（日立ハイテクサイエンス、X線管球ターゲット：ロジウム（Rh））を用い、マッピングは大気雰囲気下、管電圧50kV、コリメータ0.2×0.2mm^2、マップ分解能は50μm/pixel、照射時間20msec/pointの条件で、点分析は大気雰囲気下、管電圧50kV、コリメータ0.2×0.2mm^2、照射時間120secの条件で行った。

3. 結果および考察

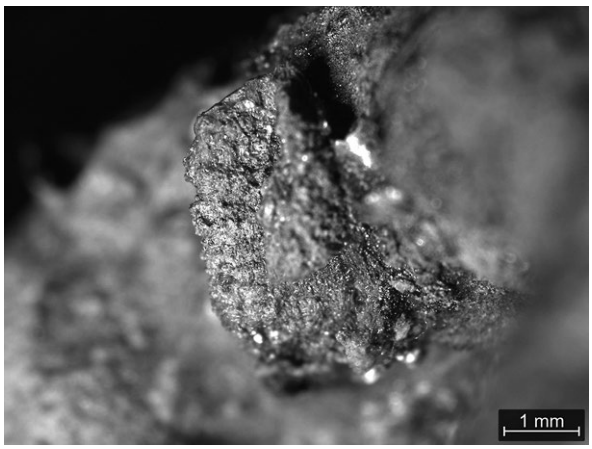
金具ごとに得られた分析結果について記載する。なお、鋏具以外の金具については第82図–第114図の左側を表面（表側）とし、右側を裏面（内側）として記載する。

3.1. 鋏具（第 30 図 53）



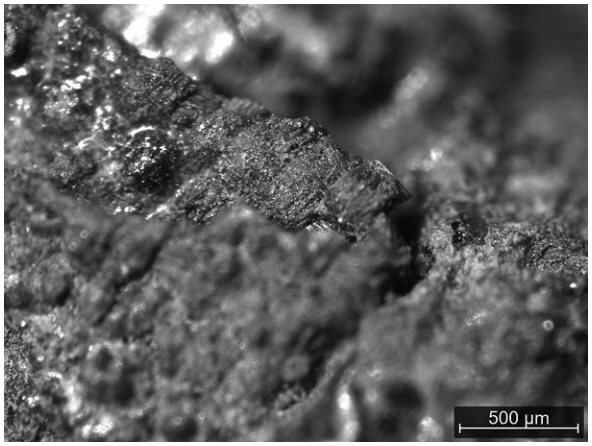
第 73 図　鋏具

第73図のa–cの3カ所で織物が観察された。それぞれを織物a–cとする。以下に観察できた見かけ上の糸の太さと織密度を記載するが、観察できた面積が小さいため数値はあくまで参考値である。織物aは鋏具の内側に残存する小さな破片である。織りが平織であることは判別できたが、糸の太さと織密度は観測できなかった（第74図）。織物bは第73図左の面から鋏具の内側にかけて残存する。織りは平織で経糸緯糸の判別はつかない（第75図）。見かけ上の糸の太さはともに約190μmであった。一方の織密度は50本/cm。もう一方は計測できなかった。なお、織物aと同じく平織のため、同一の織物である可能性がある。また、第73図b–1の箇所で繊維断面が観察でき、径約10μmの丸みを帯びた三角形が観察されることから絹製と考えられた（第76図）。織物cでは第73図左の面から鋏具の内側を経て第73図右の面まで広がる。また、第73図c–1の箇所では表層の織物の下に別の織物が残存する様子が観察された（第77図）。c–1における上層の織物を織物c1、下層の織物を織物c2とする。ただし、cで観察される2つの織物は複雑に重なった状態で鋏具に付着しているため、本来の上下関係は不明である。織物c1は平織で経糸緯糸の区別はつかない。見かけ上の糸の太さは約170μmと約130μm、織密度は170μmの糸が35本/cm、130μmの糸が50本/cmである（第78図）。一方、織物c2は錦であり、時代背景から経錦と考えられる。見かけ上の糸の太さは経糸が120μm、緯糸が150μm織密度が経糸78本/cm、緯糸36本/cmである（第79図）。また、第77図アにおいて径約10μmの丸みを帯びた三角形の繊維断面が観察されることから絹製と考えられた（第80図）。

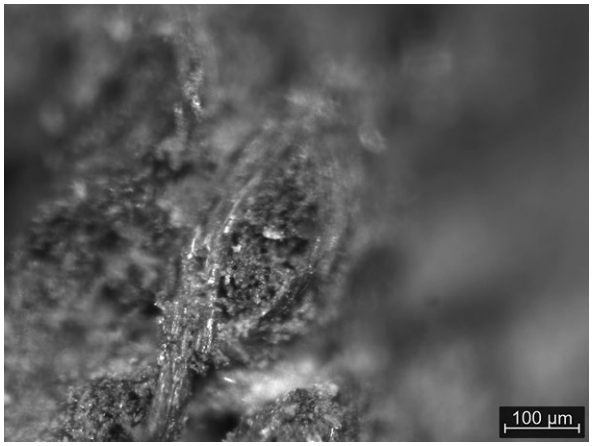


第 74 図　織物 a

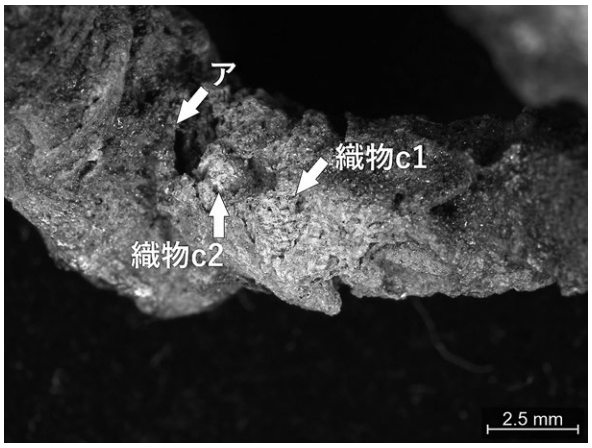
第73図dにおいても付着物が観察されるが、鉄さびが表面全体を覆っているため外観からその詳細は明らかでない。ただし、CTにおいて他



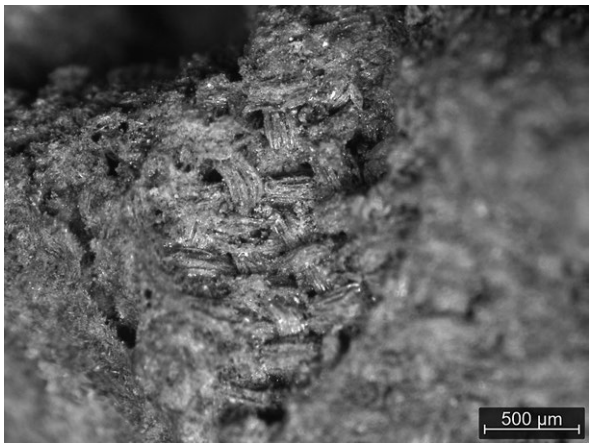
第 75 図　織物 b



第 76 図　織物 b の繊維断面（b－1）

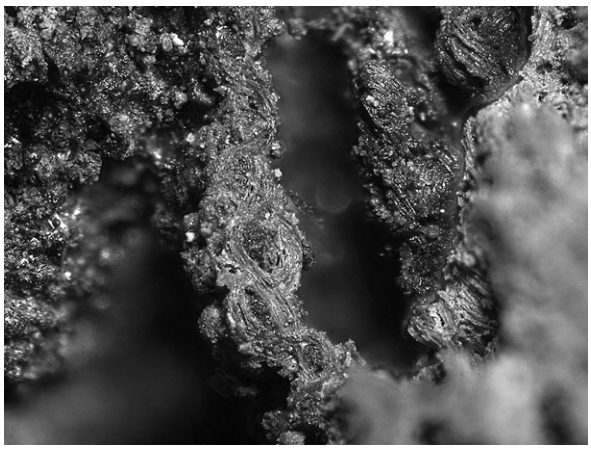


第 77 図　織物の重なり（c－1）

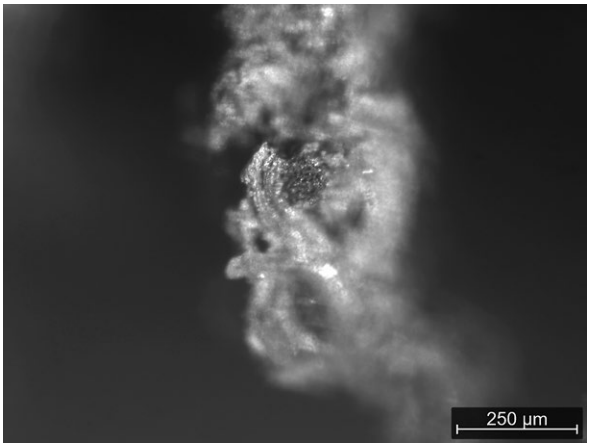


第 78 図　織物 c1

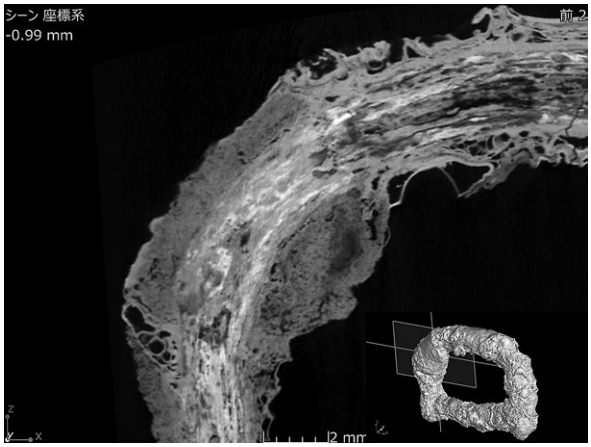




第 79 図　織物 c2（左：織物、右：織物断面、深度合成のためスケール無し）



第 80 図　織物 c2 繊維断面（ア）



第 81 図　d 付着物の断層観察像

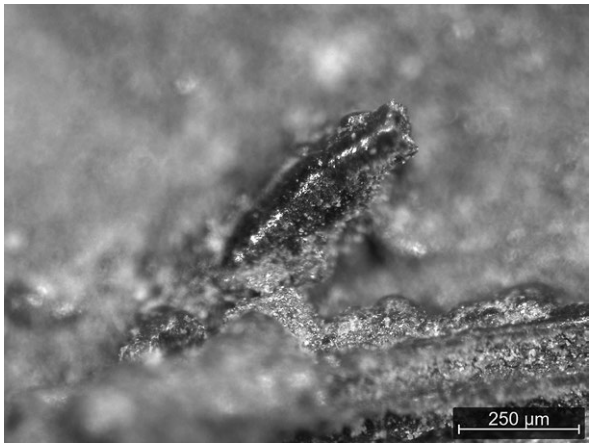
の金具で網状層が観察される革残存物と同様の断層が観察されることから、革の可能性が考えられる（第81図）。

3.2. 吊手金具1（第30図55）

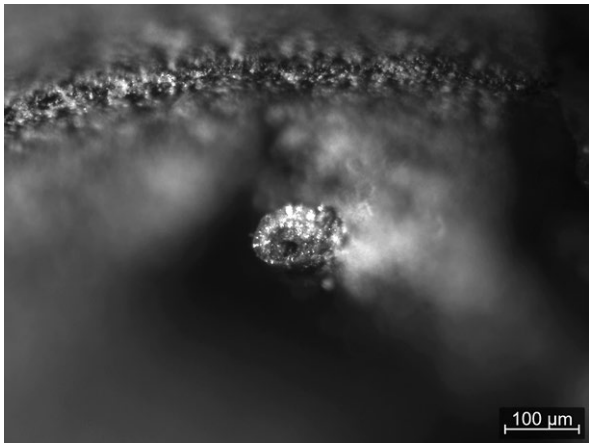
表面第82図aにおいて、繊維が観察された（第83図）。繊維の径は約120μm、断面で中空構造が観察される（第84図）。よって、動物の毛と考えられた。また、裏面第82図bにおいても繊維が数本観察され、一部の破砕された繊維が中空構造であることから、これらも毛と考えられた（第85図）。



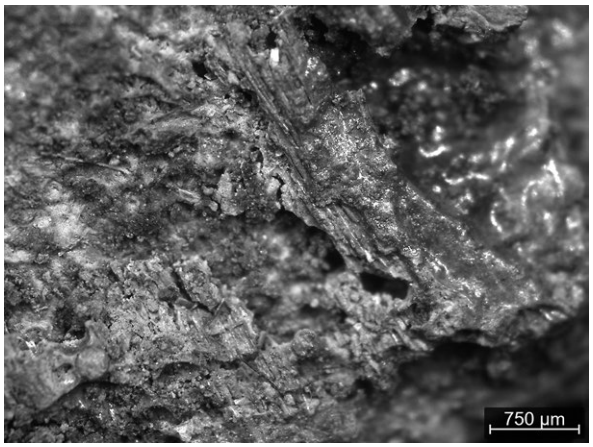
第82図　吊手金具1



第83図　付着繊維（a）

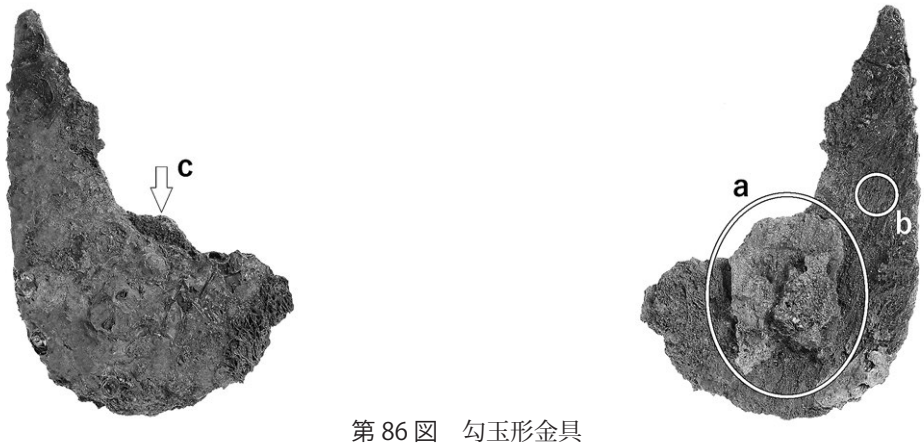


第84図　付着繊維断面（a）



第85図　裏面の繊維（b）

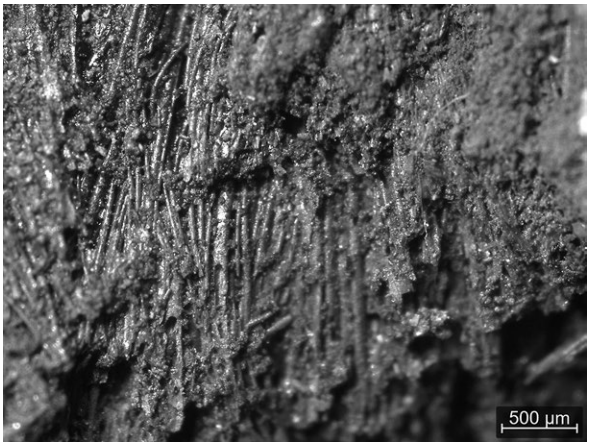
3.3. 勾玉形金具（第 30 図 59）



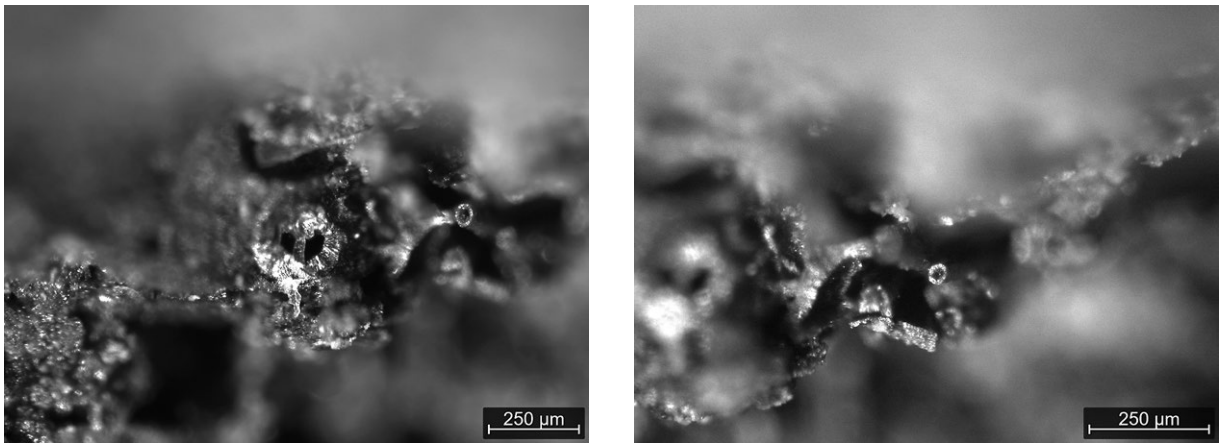
第 86 図　勾玉形金具

金具表面の一部と裏面全面において繊維層が観察され、裏面第86図aの鋲脚周りでは繊維層の上にさらに別の層が観察される（第86図）。繊維層の繊維は均一な方向に流れており、また、第86図cにおいて中空の繊維断面が観察される（第87図：第86図b、第88図：第86図c）。従って、繊維層は毛皮の毛と考えられた。次に、繊維層より内側に観察されるaの付着物は、CT観察において他の金具で網状層が観察される革残存物と同様の断層が観察されることから、真皮層と考えられた（第89図）。よって、金具は毛の面を表側にした毛皮に留められていたと考えられた。なお全胡簶金具で観測できた毛の形態は、髄指数が約66、径が約40−140μmであった。よって、本資料には保護毛の最大径が140μm以上の動物の毛皮が用いられたと考えられる。

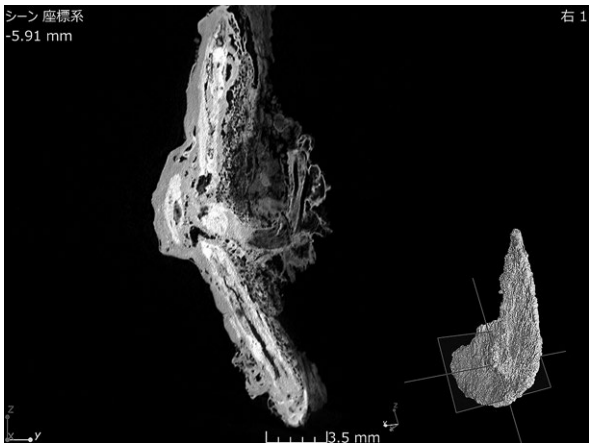
CTによるaの鋲の断層観察において、鋲脚が毛の層および真皮層を貫き、裏側で鋲脚を曲げることで、毛皮に対して金具を留めている様子が観察された（第89図）。なお、座金は確認されなかった。



第 87 図　繊維群観察像（b）

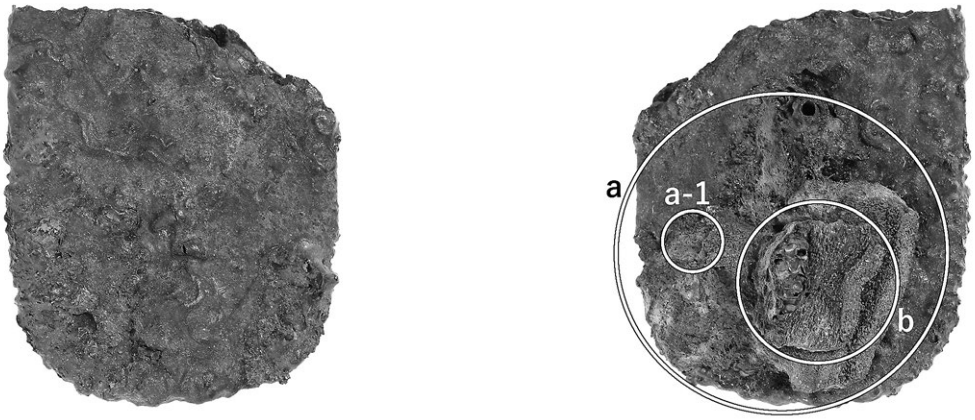


第 88 図　繊維断面（左：太い繊維、右：細い繊維）



第 89 図　鋲の断層観察像

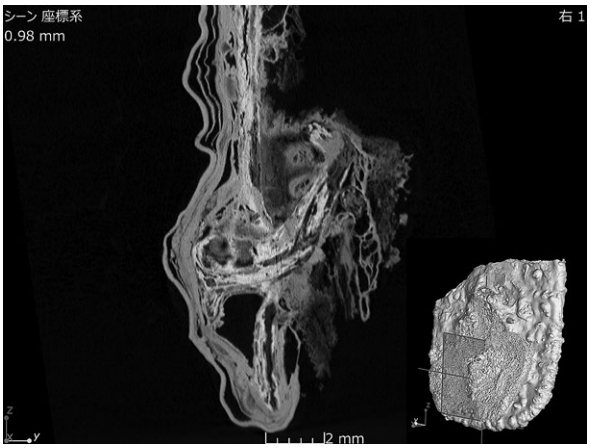
3.4. 吊手金具 2（第 30 図 56）



第 90 図　吊手金具 2

裏面第90図aにおいて付着物が観察され、さらに、鋲脚まわり第90図bではaの付着物の上にもう一層別の付着物が観察される（第90図）。CTによる断層観察では、勾玉形金具と同様に、座金を用いず鋲脚を曲げることでaの付着物が留められているが、もう一方のbの付着物は留められていな

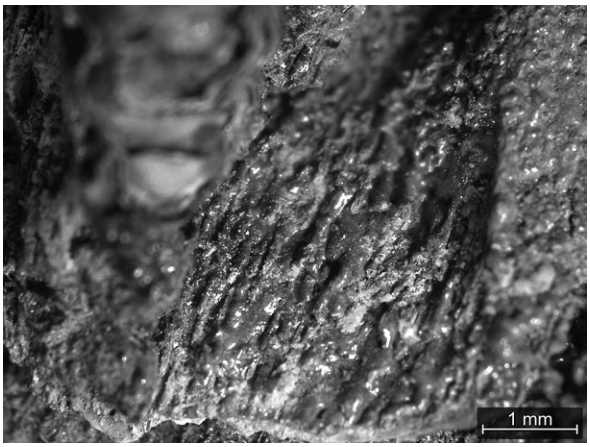
い（第91図）。よって、bの付着物は錆着によるものと考えられた。第90図a－1において網状層とみられるランダムに絡まった繊維が観察され、さらに付随する毛が観察されないことからaの付着物は革と考えられた（第92図）。もう一方、bの付着物には飴状の錆が厚くのっており、その詳細は不明である。ただし、流れのそろった繊維状物質が観察されるため、毛皮の毛が錆着している可能性が考えられた（第93図）。



第 91 図　鋲の断層観察像

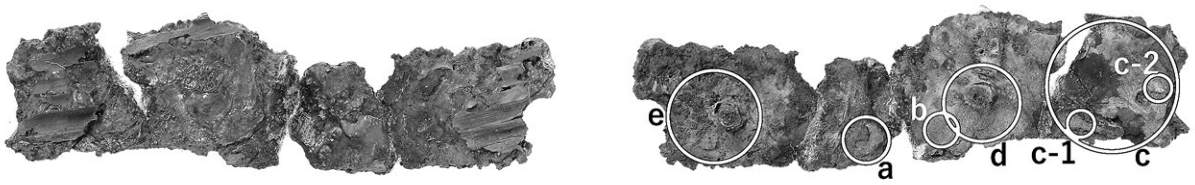


第 92 図　網状層（a－1）



第 93 図　飴状の錆が付着した毛様の繊維

3.5. 帯状金具 1（第 30 図 61）

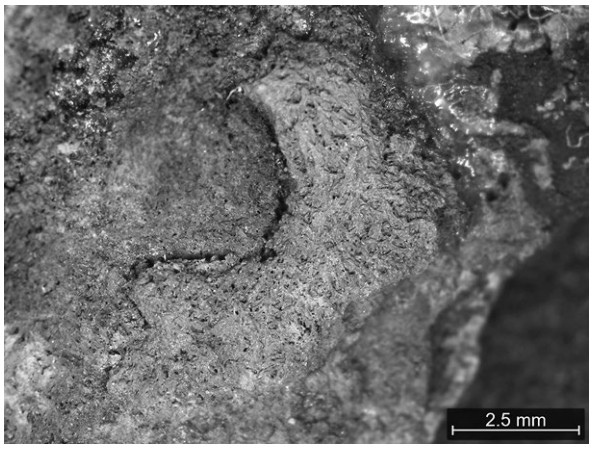


第 94 図　帯状金具 1

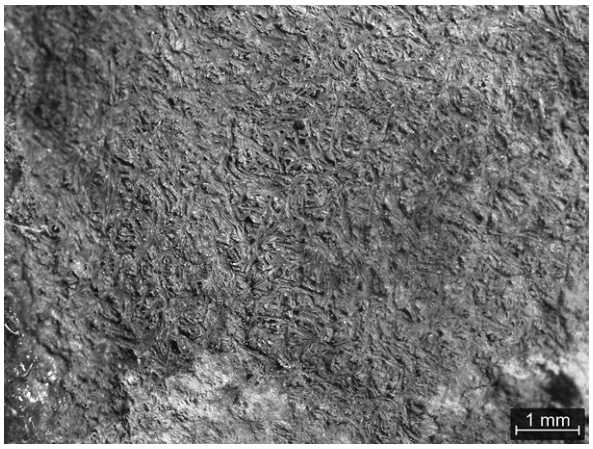
金具裏面のほぼ全面にわたって網状層とみられるランダムに絡まった繊維が観察されるため、金具の内側には革が付けられていたと考えられた（第95図：第94図a、第96図：第94図b）。また、第94図c周辺では網状層の上に中空の毛と考えられる繊維群が観察される（第97図：第94図c−1）。加えて、第94図c−2において繊維層の上に真皮側の毛穴が観察されることから、金具と接している革とは別の毛皮が付随すると考えられた（第98図）。よって、内側から毛の面を表側にした毛皮、革、金具の順で留められていたと考えられた。

第94図dの鋲近辺のCT断層観察より、革に対して二つの金具が装着されている様子が確認される（第99図左）。二つの金具にはそれぞれ鋲穴が開けられているがその位置がずれており、片方の金具のみに鋲脚が貫通している（第99図右）。また、帯状金具1には3本の鋲があるが、勾玉形金具・吊手金具2と異なり、どの鋲の鋲脚残存部にも曲げた箇所は確認できなかった。

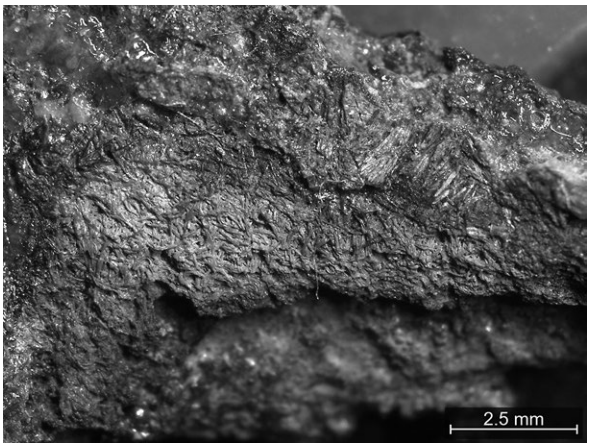
第94図eの箇所のCT断層観察像において、金具と革の間に直線状の物質、及び鋲脚に絡めた糸が観察された（第100図）。直線状の物質については後述の帯状金具3で観察されたものと同じものと考えられるが、その材質・役割は不明である。



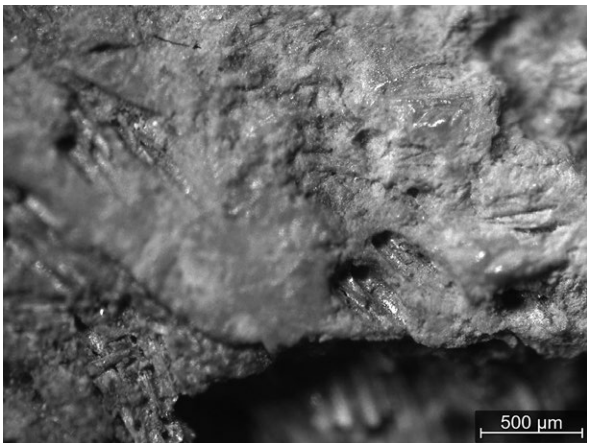
第 95 図　網状層（a）



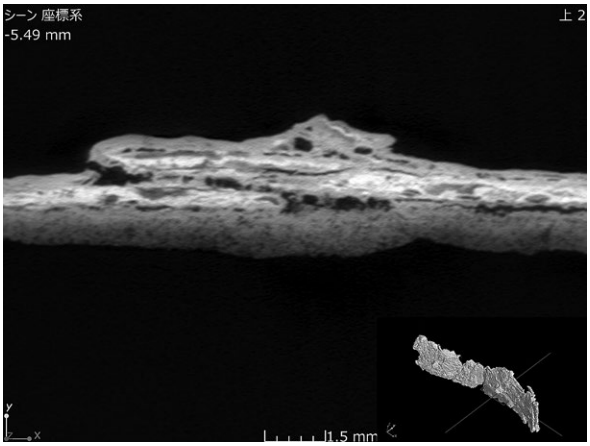
第 96 図　網状層（b）

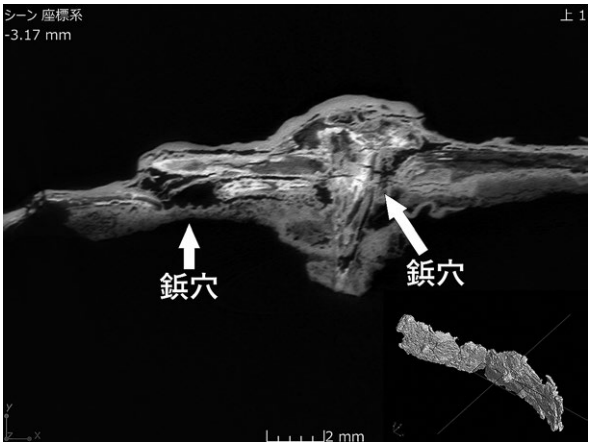


第 97 図　網状層と毛の重なり（c－1）

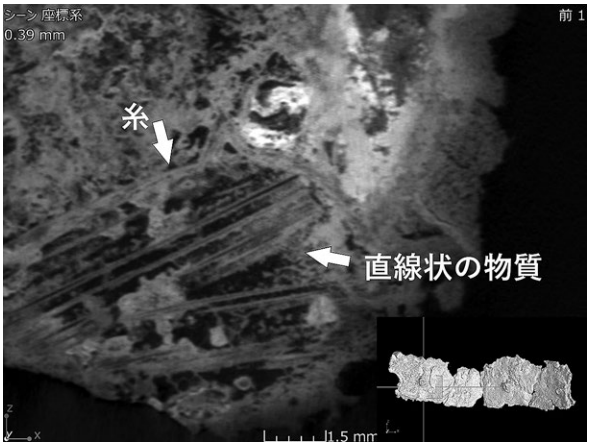


第 98 図　毛穴（c－2）



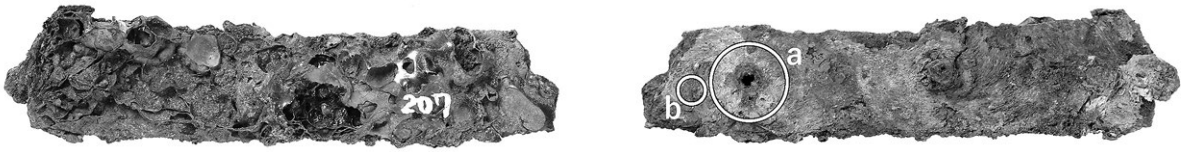


第 99 図　金具の重なりと革の断層観察像（d）



第 100 図　糸と直線状物質の断層観察像（e）

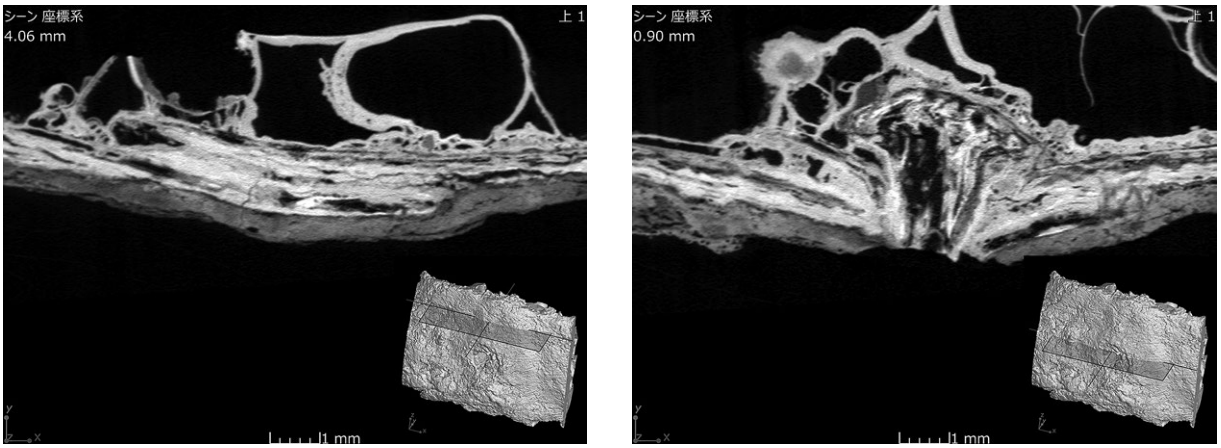
3.6. 帯状金具 2（第 30 図 57）



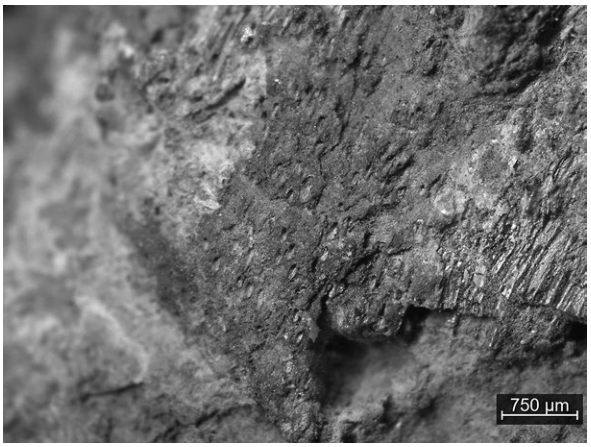
第 101 図　帯状金具 2

裏面の全面にわたって中空の毛と考えられる繊維層が観察された（第 101 図）。繊維層と金具の間には別の層が観察されるが、表面が粉状になっているため外観からその詳細は明らかにならなかった。ただし、第 101 図 a の箇所の CT 断層観察像において、金具裏に革様の吸収が観察された（第 102 図）。また第 101 図 b においては、繊維層の上に真皮側の毛穴が観察された（第 103 図）。よって、帯状金具 1 と同様に、内側から毛の面を表側にした毛皮、革、金具の順で留められていたと考えられた。

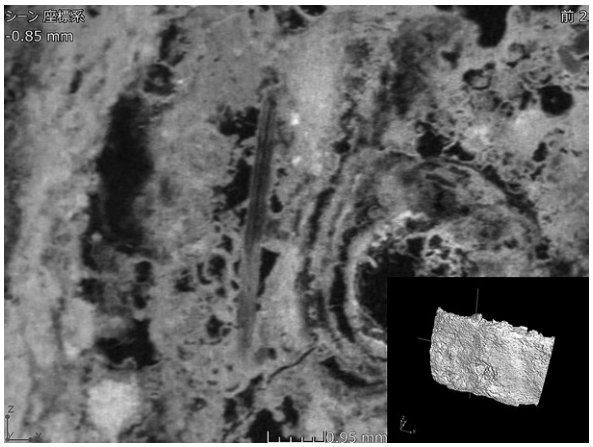
また、a の CT 断層観察像においては、帯状金具 1 で観察された直線状の物質も観察された（第 104 図）。



第 102 図　金具の重なりと革の断層観察像（a）

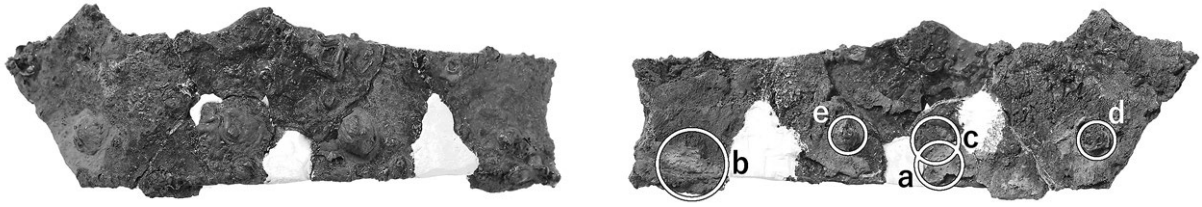


第 103 図　毛穴（b）



第 104 図　直線状物質の断層観察像（a）

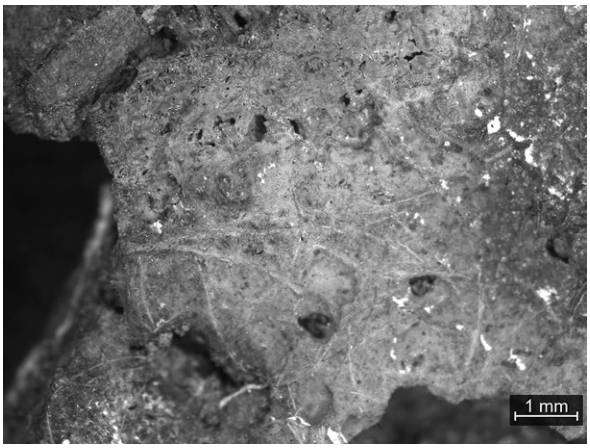
3.7. 帯状金具 3（第 30 図 58）



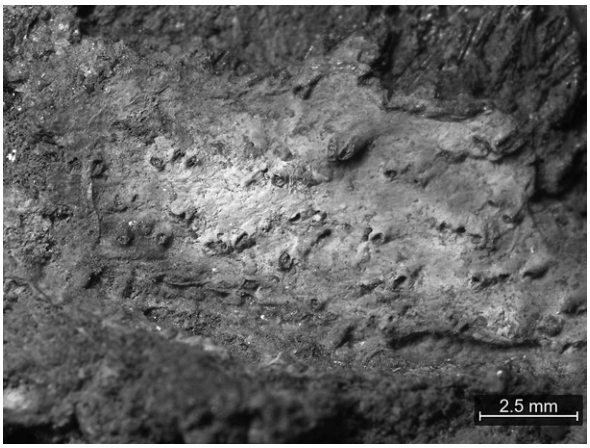
第 105 図　帯状金具 3

帯状金具 1,2 と同様に、網状層の上に毛と考えられる中空の繊維が観察された（第 106 図：第 105 図 a）。また、繊維層の上に真皮側の毛穴が観察されることから、帯状金具 1,2 と同様に、内側から毛の面を表側にした毛皮、革、金具の順で留められていたと考えられた（第 106 図：第 105 図 a、第 107 図：第 105 図 b）。また第 105 図 c において、錆化した直線状の有機質が観察された（第 108 図）。この物質の CT での観察像は帯状金具 1,2 の CT で観察された直線状の物質と同様のため、同一のものと考えられる。ただし、その材質、役割については明らかにならなかった。

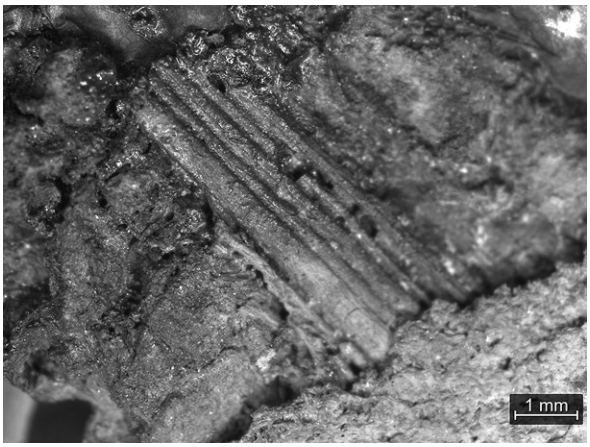
CT による鋲の観察では第 105 図 d の鋲の鋲脚を曲げた痕跡は確認できなかった（第 109 図）。一方、第 105 図 e の鋲は鋲脚が曲がっていたが、くの字にひしゃげているため、鋲留に伴う変形ではない可能性が考えられる（第 110 図）。

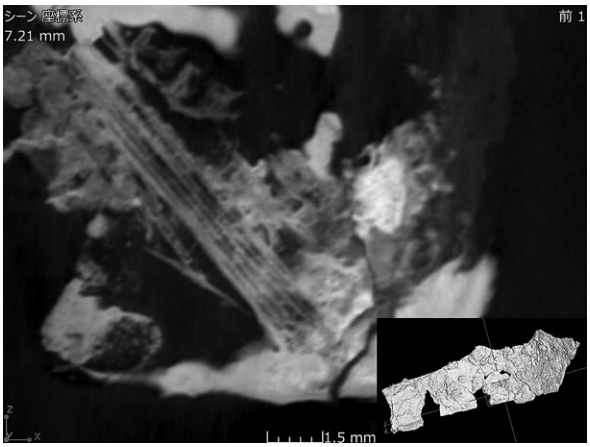


第 106 図　網状層と毛の重なり（a）

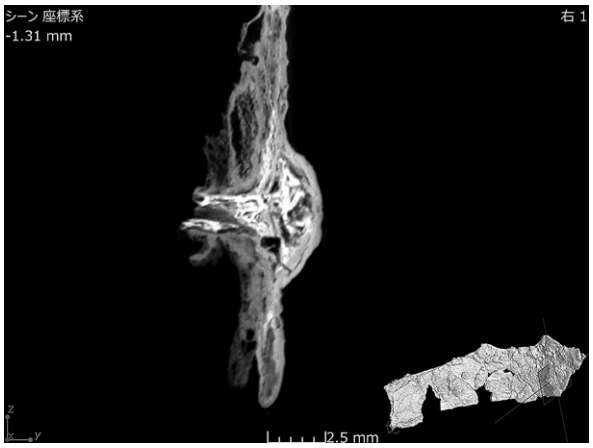


第 107 図　毛穴（b）

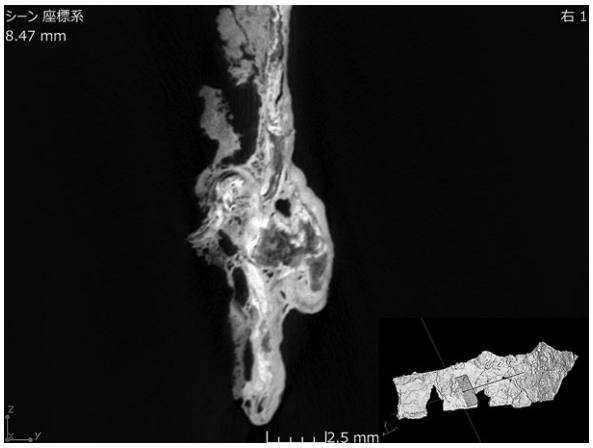




第 108 図　線状物質（c, 左：顕微鏡観察像、右：断層観察像）

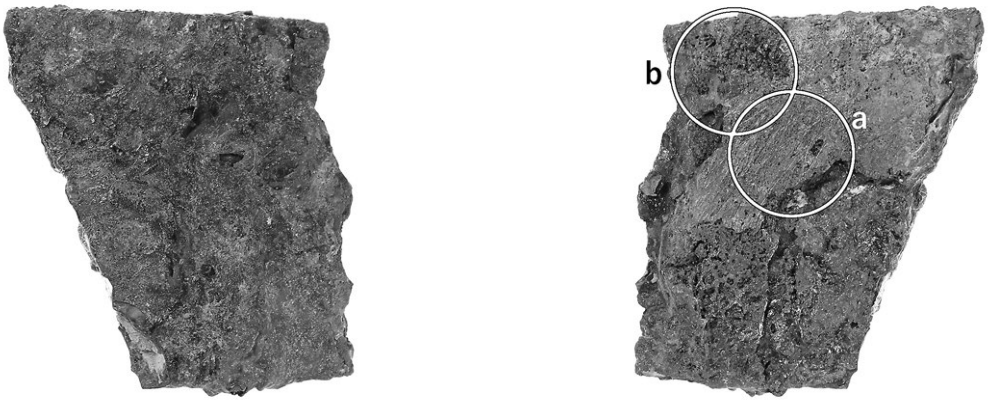


第 109 図　鋲の断層観察像（d）



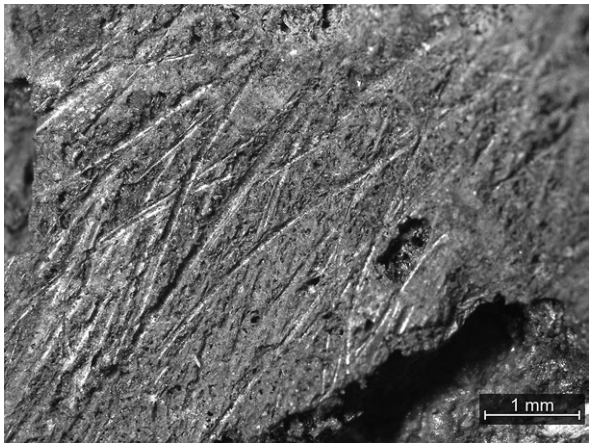
第 110 図　鋲の断層観察像（e）

3.8. 帯状金具 4（第 30 図 60）

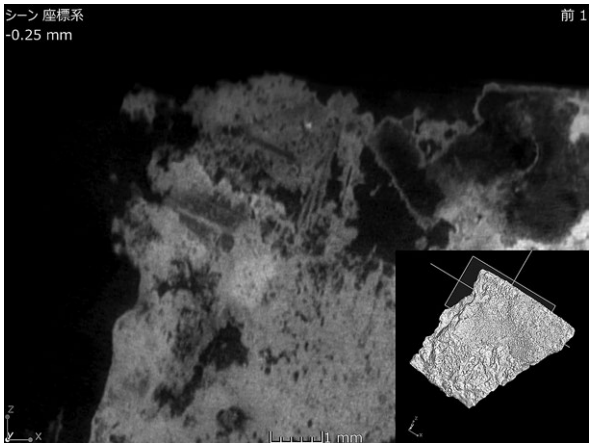


第 111 図　帯状金具 4

帯状金具 1−3 と同様に、網状層の上に中空構造の毛と考えられる繊維痕が観察された（第 112 図：第 111 図 a）。また、第 111 図 b の箇所の CT 観察像において直線状の物質が観察された（第 113 図）。

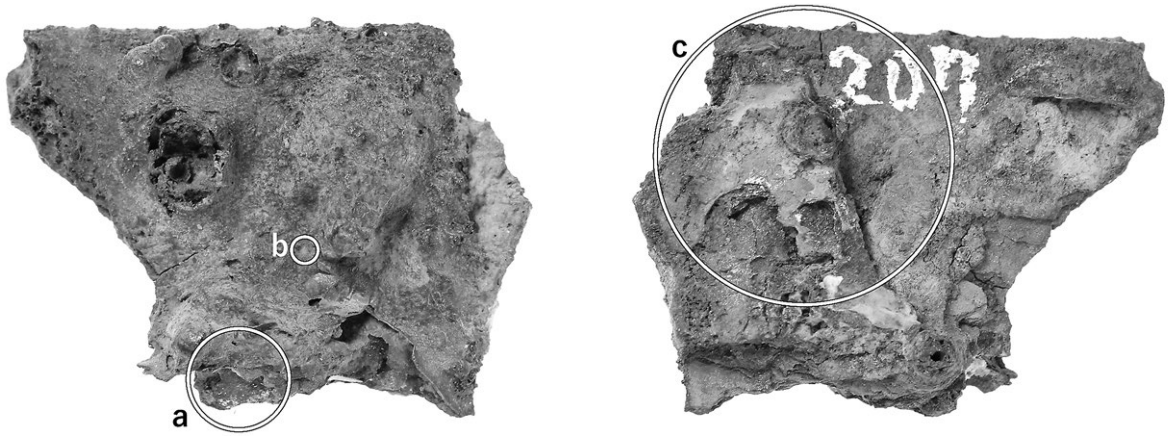


第 112 図　網状層と毛の重なり（a）



第 113 図　直線状物質の断層観察像（b）

3.9. 吊手金具 3（第 30 図 54）



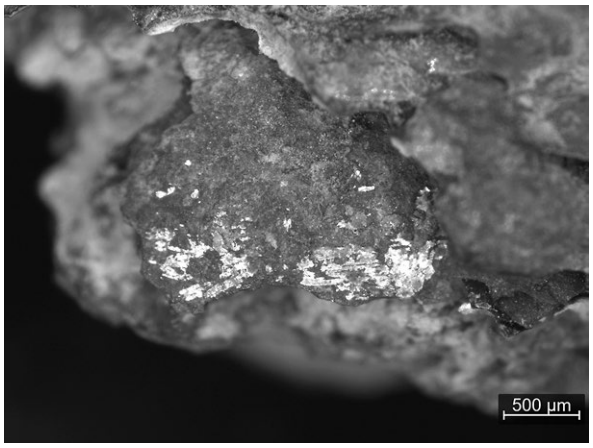
第 114 図　吊手金具 3

第 114 図 a において、金色の膜が観察され、蛍光 X 線分析によるマッピング分析から金と考えられた（第 115 図、第 116 図）。CT による観察から鋲頭に施された装飾と考えられる（第 117 図）。地金箇所と金色箇所の蛍光 X 線分析の結果から、金色箇所では地金の鉄（Fe）に加えて金（Au）、及び水銀（Hg）が顕著に検出され、また、銅（Cu）を弱く検出した（第 118 図）。これらの結果から、鉄地金鍍金の可能性が考えられた。一般に鉄と水銀はアマルガムを形成しないため、水銀アマルガム法による鉄への鍍金はできないと考えられているが、鉄地表面に銅を付加する下処理を行うことで鍍金ができる可能性が報告されている(*)。今回の分析でも銅が弱く検出されていることから、鉄地表面に銅を付加する下処理を伴う鉄地金鍍金の可能性が考えられた。

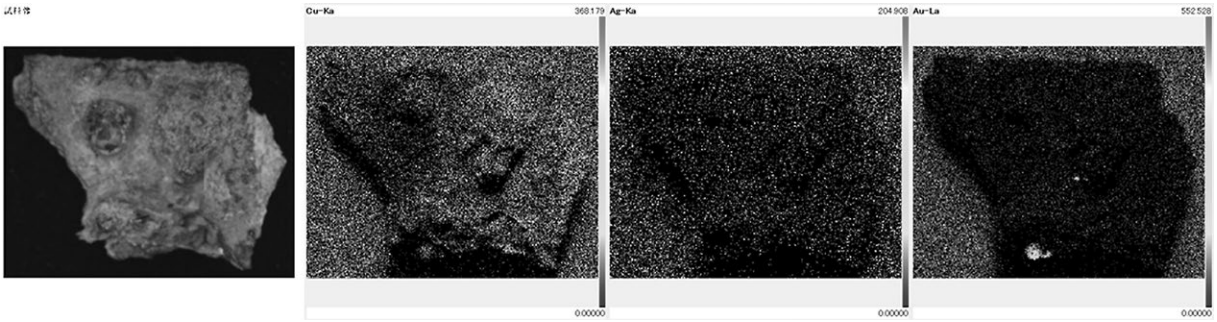
第 114 図 b で赤色顔料が観察された（第 119 図）。蛍光 X 線分析を行ったところ、水銀が強く検出されたため、水銀朱と考えられた（第 120 図）。

第 114 図 c の CT 断層観察像においては、帯状金具 1－帯金具 4 で観察された直線状の物質が観察された（第 121 図）。

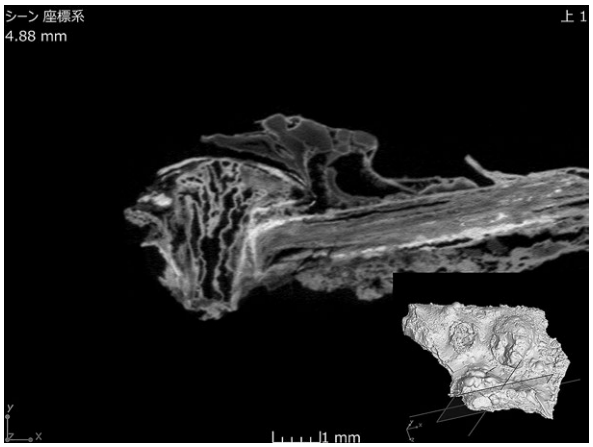
(*)久保智康・降幡順子・治村嘉史、「鉄地鍍金」技法の検証実験について、『鳳翔学叢』第 19 輯、宗教法人 平等院、2023.5.



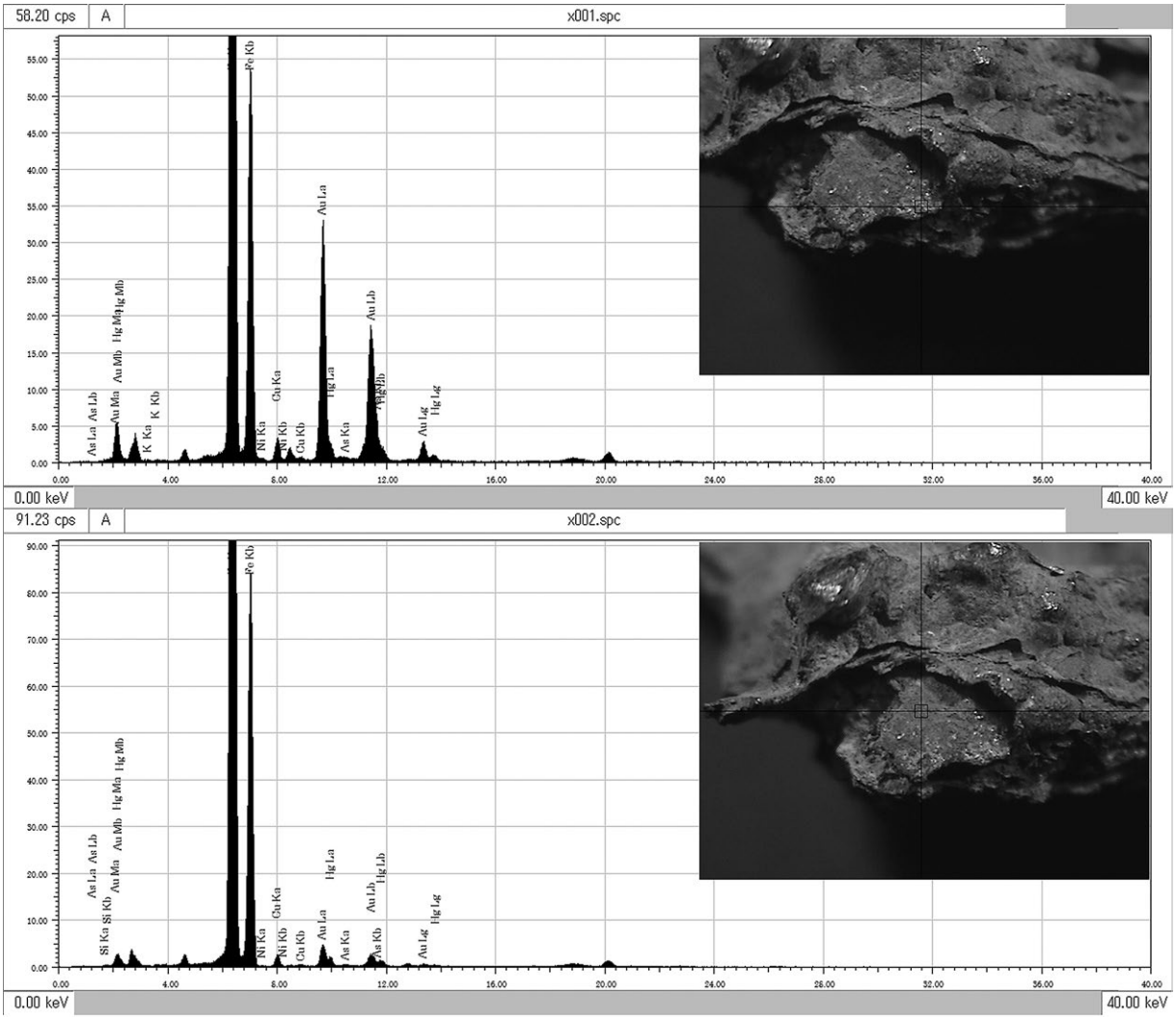
第 115 図　金色箇所の顕微鏡観察像（a）



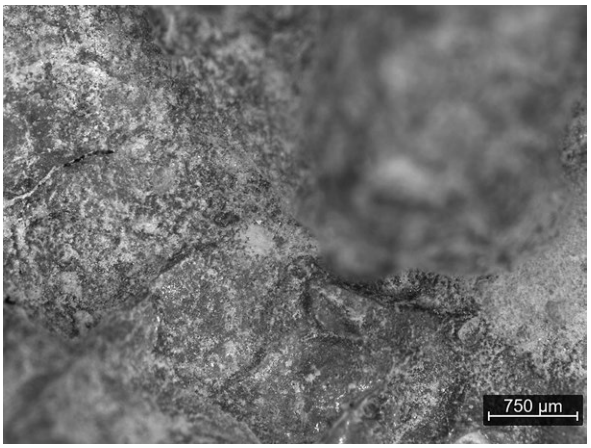
第 116 図　元素マップ（左より光学像、銅（Cu）、銀（Ag）、金（Au））



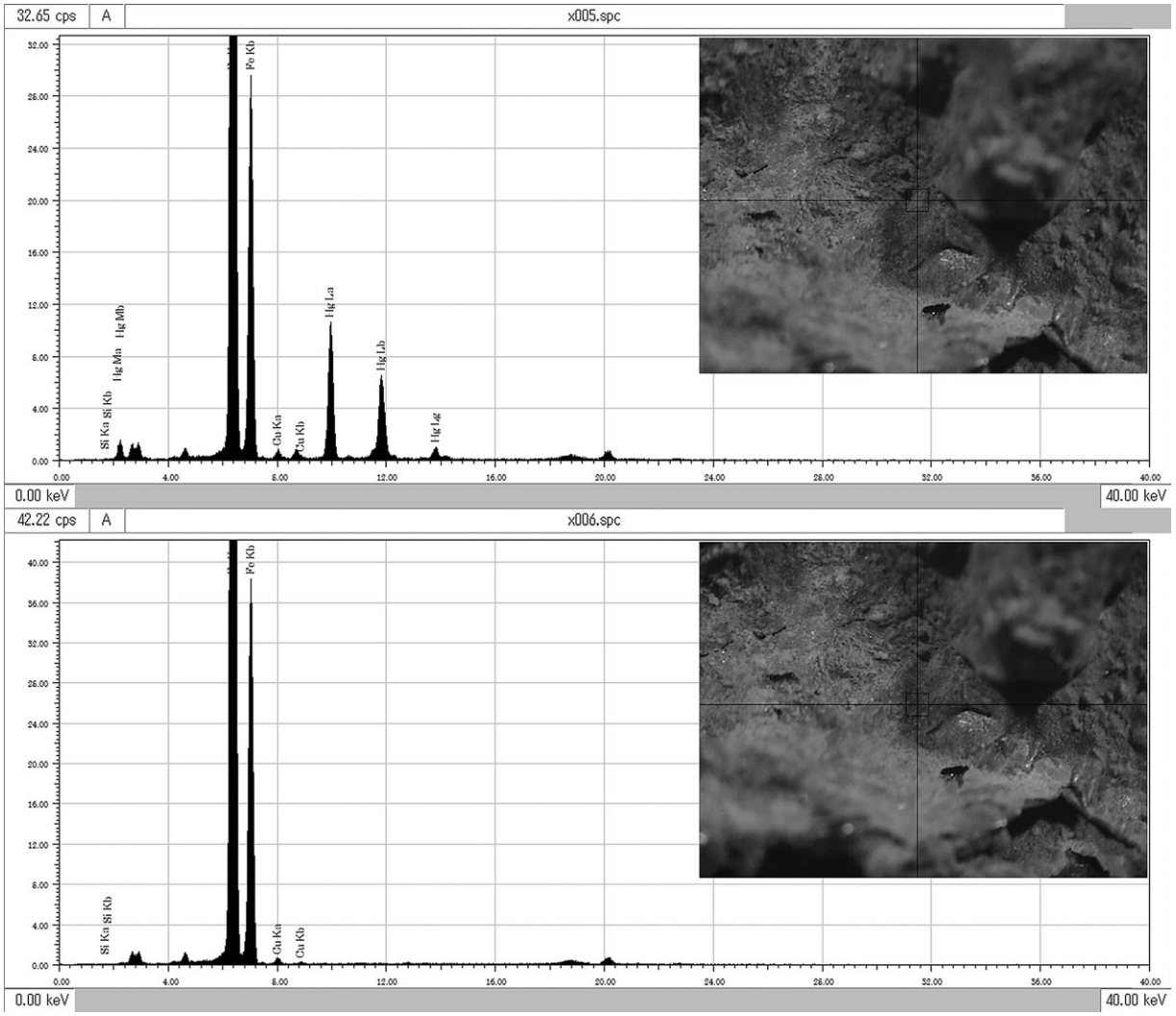
第 117 図　鋲の断層観察像（a）



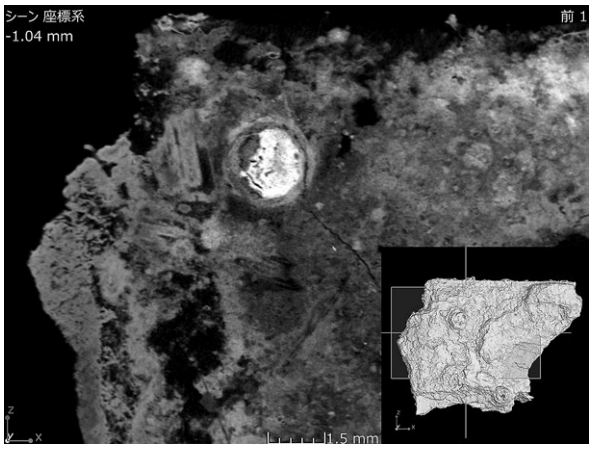
第 118 図　蛍光 X 線スペクトル（上：金色箇所、下：地金箇所）



第 119 図　赤色顔料の顕微鏡観察像（b）



第 120 図　赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル（上：赤色顔料、下：地金箇所）



第 121 図　直線状物質の断層観察像（c）

第 4 章　稲荷台 1 号墳出土遺物について

第 1 節　王賜銘鉄剣の技術と釈文・釈読・製作地

鈴木　勉（工芸文化研究所）

Ⅰ　東アジアの象嵌技術 …… DVD-ROM収録
1.中国後漢代の金錯鉄刀銘のアマルガム金錯技術
（1）中国後漢代の金錯鉄刀銘
（2）アマルガム金錯の技術
（3）中平銘鉄刀の取り扱いについて
2.極東アジアの線象嵌技術
（1）七支刀の「なめくり象嵌」
（2）遼寧省馮素弗墓出土金象嵌鉄鏡の線象嵌技術
（3）韓半島のなめくり象嵌と蹴り彫り象嵌
（4）稲荷山金象嵌鉄剣の象嵌技術
（5）東博蔵有銘環頭大刀の象嵌の釈文と技術
3.文字の表現方法の進化と金工技術の変化
（1）文字の転折部の表現方法の変遷－「入れ替え転折法」から「連続転折法」へ－
（2）文字彫刻転折部への円弧状なめくりたがねの導入
（3）東アジア象嵌鉄刀剣銘の転折法
（4）文字彫刻技術の発展過程と過渡期の技術

Ⅱ　稲荷台1号墳出土王賜銘鉄剣の象嵌技術
1.稲荷台1号墳出土王賜銘鉄剣の再調査 …… 112
（1）蹴り彫り痕跡の発見 …… 112
（2）「金線が脱落した象嵌溝」に着目して再調査 …… 112
（3）残っている金線のX線ネガフィルムからたがね痕を抽出 …… 113
（4）「金線が脱落した象嵌溝」の探索 …… 115
2.釈文（案） …… 127
（1）釈文の重要性 …… 127
（2）釈文（案）の提示 …… 128

Ⅲ　稲荷台1号墳出土王賜銘鉄剣と昌寧校洞11号墳出土金象嵌銘鉄刀の製作地
1.昌寧校洞11号墳出土金象嵌鉄刀の象嵌技術 …… 129
（1）蹴り彫り象嵌のたがね痕の復元 …… 129
（2）昌寧と市原を繋ぐ両象嵌鉄刀剣の刻銘技術 …… 132
2.倭と韓半島における刻銘技術の受容と発展 …… 133
（1）倭の刻銘技術 …… 133
（2）韓半島の刻銘技術 …… 134
3.両銘の製作主体は …… 135
4.王賜銘鉄剣の銘文訓読とその製作地 …… 136

Ⅰ　東アジアの象嵌技術

1. 中国後漢代の金錯鉄刀銘のアマルガム金錯技術

（1）中国後漢代の金錯鉄刀銘
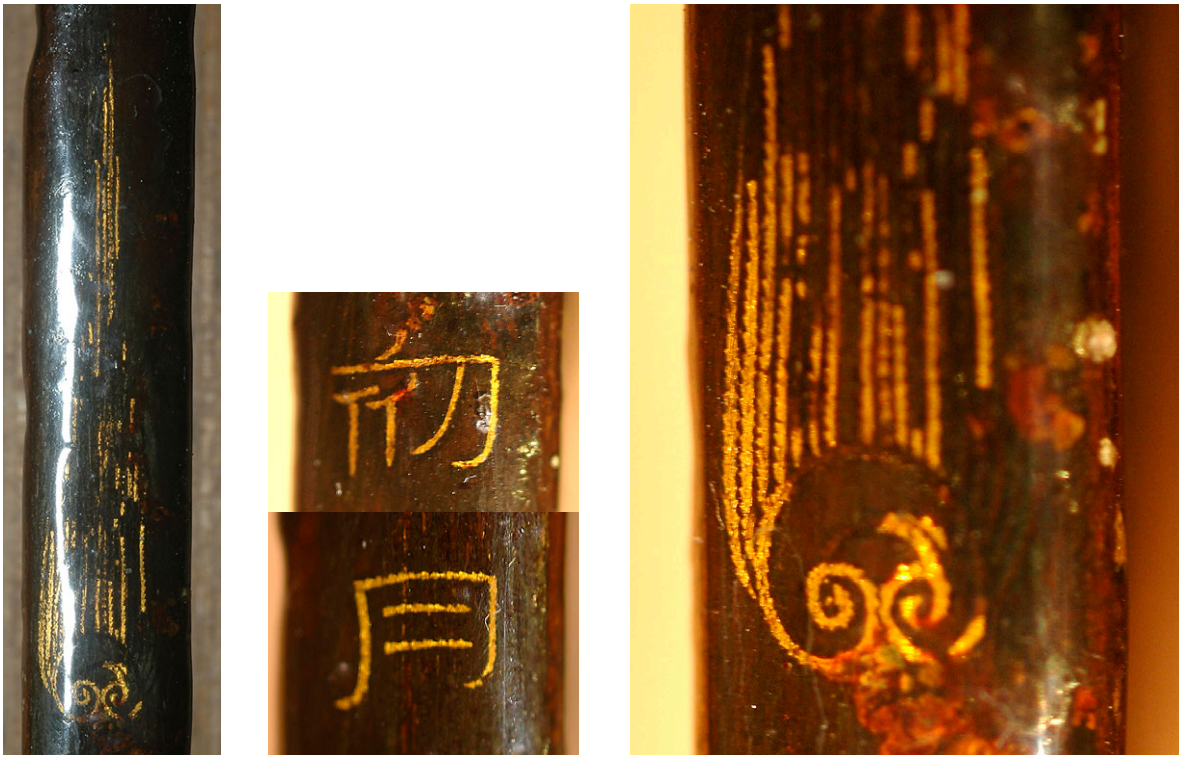
東アジアの象嵌技術のはじまりは中国である。戦国時代には金で飾られた青銅鉄剣が出土しているがその技法はよく分からない。韓半島や日本列島でいう「線象嵌」のことを含めて金で飾られたものを中国では「金錯」と呼んでいる。「線象嵌」の語は、「象（かたち）を嵌める」という技法を連想させる語であるが、「金錯」とは「金で飾っている」の意味で、技法の内容を含んでいない。遺物の調査報告においては、技法が分からない時点では、「線象嵌」より「金錯」の方が事実に忠実だと言えよう(1)。

本稿の主題である鉄刀剣への線象嵌（金錯）ということに注目すると、中国では後漢代の鉄刀剣銘が有名である。それ以前の金で飾られたものを含めて、その技法については明らかではないので、それを「線象嵌」と呼ぶことは適切ではない。

中国後漢代の金錯鉄刀剣銘は、金を嵌める前に文字線を蹴り彫りの技法で彫ったものがほとんどである。蹴り彫りの痕跡がはっきりと確認出来る。しかし、それは日本でいうところの「線象嵌」と一緒に扱うことはできない。

（2）アマルガム金錯の技術

現在残っている後漢代の鉄刀剣銘（金錯製品）には、山東省、河北省、江蘇省、四川省からの出土品や、漢代の四川省を意味する「蜀」の文字を持つものがある。中でも、四川省の蜀地方を示す語が多く、その製作の中心地が現在の四川省周辺にあったと考えて良いだろう。いずれも精緻で繊細な蹴り彫り痕が見て取れる。例えば山東省蒼山県出土永初六年銘金錯鉄刀（第122図、以後、卅湅鉄刀）は、約7mmの幅の刀身の背に18本程度の炎を表現した（？）三角文が見える。三角文の連続は、それを



第122図　山東省蒼山県出土永初六年銘卅湅鉄刀のアマルガム金錯銘

遠目に見ると一本の線に見えるという視覚の誤解に基づく技法である。そこに金が埋まっているのであるから、日本人の常識からすれば、「線象嵌」と呼びたくなってしまうのもいたしかたないところだろう。

第7表に示した金錯鉄刀剣のうち、「①五十湅鉄剣」は「蜀郡西工官」の銘を含む蹴り彫り金錯鉄剣である（第123図）。また、「⑥光和七年銘金錯刀子（第124図）」は「廣漢工官」の銘を含み、図版から簡易計測すると、その線の幅は概ね0.1 ～ 0.15mmくらい（PC上で写真計測した）である。第7表の③～⑩の廣漢郡の銘を持つと推定される書刀の一群も「蹴り彫り金錯銘」である可能性が高い。「⑫河北省満城県陵山中山靖王劉勝墓出土鉄金錯削」については、町田章氏による図録解説には、技法に関する記述はないが「金線直径0.08 ～ 0.12mm、双線の部分では相互の金糸の距離（金線ピッチか？）は0.15mmしかない」と記されている(2)。この数値は、先に紹介した「卅湅鉄刀」の金錯銘の数値に勝るとも劣らない細かさである。また、「⑬河北省満城県陵山竇綰墓出土鉄金錯尺」は図版の観察から蹴り彫り金錯銘であることが確認出来る。

一方、古代東北中国、韓半島、日本列島（以降、この地域を極東アジアと呼ぶ）の線象嵌は、たがねで彫った溝に金銀線を嵌め込む技法で、その金銀線を保持する方法によって、ホールド法、アンカー法、摩擦法などに分けることが出来る(3)（第125図）。ところが、卅湅鉄刀のように、幅7mmの刀身の背に18本の線を彫るとなると、線と線の中心間の距離（線ピッチ）は約0.30～0.35mmとなる。蹴り彫り線と蹴り彫り線の間には0.1 ～ 0.2mmの間隔があるので、1本の線の幅（太さ）は0.20 ～ 0.25mm前後ということになる（第126図）。極東アジアの線象嵌（ホールド法）の技術は、溝の両側の鉄素材のカエリを押しつぶすようにして金線を留めるし、アンカー法では溝の中に凹部を作るので、その加工を施すだけの間隔が必要である。一方、卅湅鉄刀の蹴り彫りを見るとその蹴り彫り線には全く歪みが見えない。つまり、線と線の間隔が狭く整っているため線の両側のカエリを押しつぶしたり、溝の中を加工する作業は行っていないと考えられる。中国の後漢時代の金錯銘は、極東アジアの線象嵌とは異なる技術で金が留められていると考えられるのである。その技法については、かつて尾崎誠氏が風吹山古墳出土象嵌鉄刀からアマルガムの痕跡を検出し「消し象嵌」の技法を推定しており(4)、また、かつて工芸文化研究所が実施した6 ～ 7世紀の象嵌遺物の復元研究の中で、象嵌技法のグループがアマルガム法（消し象嵌）の可能性を報告している(5)。

そうしたことからすれば、あらかじめ蹴り彫りで溝を彫っておいて、そこへフラックスのような酸化防止剤を塗り、金アマルガムを塗り（あるいはドブ漬けし）、後に表面を削り取る技法（これを近現代の日本では「流し象嵌」または「けし象嵌」などと呼んでいる）をここでは「アマルガム金錯技法」と呼ぶ。これを極東アジアの「線象嵌技法」と同列に扱ってよいとは思えない。中国後漢代の「アマルガム金錯技法」と極東アジアの「線象嵌」とは一線を画したものである。

（3）中平銘鉄刀の取り扱いについて

中平銘鉄刀の「蹴り彫り象嵌」は、「金線の太さ0.3 ～ 0.4mm、蹴りピッチ0.7 ～ 0.8mm」と、かなり大きい数値を示し、「アマルガム金錯技法」とは異なる。これを後漢代の製作とするには文字の技術史上無理が生じる。筆者らは全ての要素を再検討し、中平銘鉄刀を4世紀頃の日本列島での製作と考えている(6)。

第 7 表　中国の鉄製品のアマルガム金錯銘

	紀年	名称	銘文	備考
①	A.D.77	江蘇省徐州市銅山県駝竜山出土建初二年銘金錯五十湅鉄剣	「建初二年蜀郡西工官王惜造五十湅□□□孫剣□」の金錯銘	文献（1）、蹴り彫り金錯 横画ピッチ均等法
②	A.D.112	山東省蒼山県出土永初六年金錯卅湅鉄刀	「永初六年五月丙午造卅湅大刀吉羊宜子孫」	文献（1）、蹴り彫り金錯
③	A.D.99－105	永元十□□年銘廣□郡卅湅書刀	「永元十□□廣□郡工官卅湅書刀工馮武（下漫滅）」	文献（2）、蹴り彫り金錯
④	A.D.104	永元十六年銘廣漢郡卅湅書刀	「永元十六年廣漢郡工官卅湅□□□□□□□□□史成長荊守丞意主」	文献（2）、蹴り彫り金錯
⑤	A.D.153	「漢元嘉刀」銘刀	「元嘉三年五月丙午日造此□官刀長四尺二□□□宜侯王大吉羊」	文献（2）、蹴り彫り金錯
⑥	A.D.184	四川省天廻山３号崖墓出土 光和七年銘十湅書刀	「光和七年廣漢工官十湅□□服者尊長保子孫宜候王家富」	文献（3）、蹴り彫り金錯 横画ピッチ均等法
⑧		廣漢郡□□□卅湅書刀	「（上缺）廣漢□□□卅□□□□秋造護工卒史克長不丞奉主」	文献（2）、蹴り彫り金錯
⑨		漢廣漢金馬書刀（銘文存七字）	「（上訣）廣漢（中訣）史克長□□奉主」	文献（4）、蹴り彫り金錯
⑩		漢廣漢金馬書刀（銘文可読者十一字）	「（上訣）年廣漢郡工官（中訣）成長□□丞意主」	文献（4）、蹴り彫り金錯
⑪		後漢李元金馬書刀	「巧治練剛金馬託形、黄文錯鏤兼勒工名」	文献（5）、蹴り彫り金錯
⑫	紀元前 113 年頃	河北省満城県陵山中山靖王劉勝墓出土鉄金錯削	銘文なし	中国社会科学院考古研究所蔵、 文献（6）、蹴り彫り金錯
⑬	前漢	河北省満城県陵山竇綰墓出土鉄金錯尺	銘文なし、劉勝の妻	中国社会科学院考古研究所蔵、 蹴り彫り金錯
⑭		大分県ダンワラ古墳出土鉄鏡	銘文なし、金銀象嵌	蹴り彫り金錯

文献（1）鈴木勉・河内國平編 2006『復元七支刀－古代東アジアの鉄・象嵌・文字－』雄山閣刊

文献（2）容庚 1931『秦漢金文録』所載

文献（3）四川省博物館編 1988『中国の博物館　第２期 第４巻　四川省博物館』講談社

文献（4）『衡斎金石識小録』黄溶 1935 所載㊍

文献（5）太平御覧 346 巻所載

文献（6）大阪市立美術館・読売新聞大阪本社編 1999『よみがえる漢王朝－ 2000 年の時をこえて』



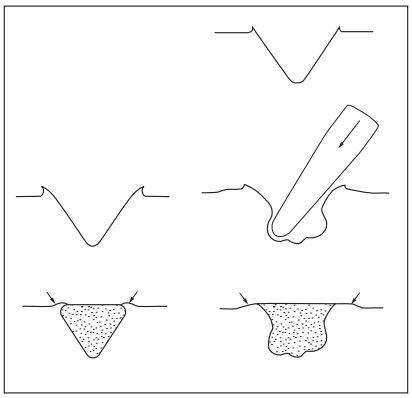
第 123 図
徐州市建初二年金錯五十湅鉄剣の蹴り彫り金錯銘



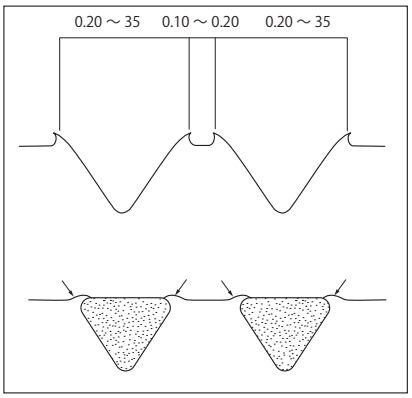
第 124 図
光和七年銘十湅書刀の蹴り彫り金錯銘

第 8 表　鉄刀剣のアマルガム金錯銘と線象嵌の線幅と線ピッチの比較

第 7 表の№	鉄刀剣名称	線幅	線ピッチ
①	江蘇省徐州市銅山県駝竜山出土建初二年銘金錯五十湅鉄剣	0.1 ～ 0.15mm	－
②	山東省蒼山県出土永初六年金錯卅湅鉄刀	0.1 ～ 0.15mm	0.2 ～ 0.25mm
⑥	四川省天廻山３号崖墓光和七年銘十湅書刀	0.1 ～ 0.15mm	－
⑫	河北省満城県陵山中山靖王劉勝墓出土鉄金錯削	0.08 ～ 0.12mm	0.15mm
⑦	奈良県東大寺山古墳出土中平年銘大刀（線象嵌）	0.3 ～ 0.4mm	0.7 ～ 0.8mm



第 125 図　線象嵌のホールド法（左）とアンカー法



第 126 図　卅湅鉄刀の蹴り彫り線の配置（mm）

2. 極東アジアの線象嵌技術

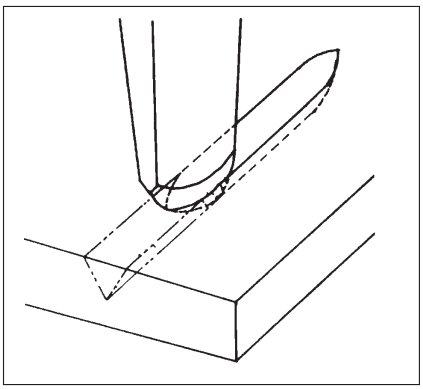
（1）七支刀の「なめくり象嵌」

七支刀の象嵌では、文字の部分では金線の約50％、界線では約90％が脱落している。先に述べたように、近現代に伝わる線象嵌技術では、鉄で金銀線をホールドしたり、鉄地に金銀線を潜り込ませてアンカーとして留めるのであるから、鉄地が残っている限りは金銀線は脱落しないと考えたいところであるが、なぜか七支刀は金線の脱落が多い。

七支刀の溝の中を見ても、アンカーの役割をする傷や凹みは見あたらない（第127図）。なめくりたがねでＶ溝またはＵ溝を彫り（第128図）、その溝角度が鋭角であるためにその側面と金銀線の摩擦力によって留まっていたと理解される[7]。筆者はこの技法を「なめくり象嵌」と名付け、金線の留め方は「摩擦法」とした。これについては、先学２人の方も指摘されている[8]。



第 127 図　七支刀の「なめくり象嵌」の金線が脱落した溝



第 128 図　なめくり打ち



第 129 図　馮素弗墓出土金象嵌鉄鏡の「なめくり象嵌」

（2）遼寧省馮素弗墓出土金象嵌鉄鏡の線象嵌技術

2006年の正月、私は中国の象嵌遺物の調査旅行にでかけ、遼寧省博物館では燕の馮素弗墓出土金象嵌鉄鏡の調査を行った。象嵌鉄鏡の金線は全て脱落していてその溝だけが一部に残っていた。ルーペを使ってその溝の内部を見た。溝の内部はなめらかな丸い溝であることを確認した。この溝は、中国後漢代の蹴り彫りによるアマルガム金錯とは異なり、「なめくり象嵌の線彫りの跡」だと判断出来た（第129図）。この金象嵌鉄鏡の金線は「摩擦法」で留まっていたと推定されるように金線のほとんどが脱落していた。前に述べたように、象嵌遺物の中で金銀線の脱落が多いことは技法を特定出来る大きな特徴である。馮素弗墓は七支刀より少し後の時代になるが、中国東北地方に「なめくり象嵌技法」が存在していたと考えて良いだろう。

馮素弗墓出土金象嵌鉄鏡の「なめくり象嵌技法」は先に述べた後漢時代の蹴り彫りによる「アマルガム金錯技法」とは、その精緻さ繊細さにおいて大きな隔たりがある。つまり、後漢代の金錯銘に較べれば、馮素弗墓出土金象嵌鉄鏡の「なめくり象嵌」はローカルな線象嵌技法だと言えよう。ローカルの意味は、地域的に大きく離れるか、あるいは時間的に大きく下ることが考えられるし、地域も時間も大きく離れる場合も当然ながらあり、技法は大きく変質する。

（3）韓半島のなめくり象嵌と蹴り彫り象嵌

韓半島の「なめくり象嵌」と「蹴り彫り象嵌」については金跳咏氏の次の解説がある[9]。

「天安龍院里12号墳龍鳳文環頭大刀の環頭には2匹の龍が銀象嵌されているが、銀線の脱落が多く、溝の周囲にはカエリも見える。溝の加工が七支刀と類似しており、象嵌線の固定と仕上げがしっかりと行われていないことがうかがえる（第130図）。



第130図　天安龍院里12号墳龍鳳文環頭大刀の「なめくり象嵌」



第131図
天安花城里A地区1号墳象嵌大刀の
「蹴り彫り象嵌」

両者の素地金属が鋳造製[10]であることも共通する。すなわち、鉄製の環頭に表現されている立体的な龍文を切削加工で作るのは当時の鉄加工技術として不可能である。おそらく蜜蝋製の環頭で土製の鋳型を作り、その鋳型に鉄を鋳込んだだろう。こうして出来上がった鋳造白銑製の環頭を脱炭熱処理して硬度を低めてから、たがねで龍文を仕上げ加工したと推定される。

一方、象嵌線の両辺が直線でなく、凸凹となっている事例も確認される。代表的な事例は天安花城里A地区1号墳から出土した象嵌大刀である（第131図）。すでに指摘されたように、象嵌線の両辺が溝を加工する時に出来た工具の痕跡だとすると[11]、溝の加工には蹴り彫りたがねが用いられたこ

とが考えられる。その他にも、天安龍院里５号石槨墓象嵌大刀、公州水村里Ⅱ−１号木槨墓象嵌大刀（第132図）、水村里Ⅱ−７号石槨墓象嵌大刀（第133図）、公州宋山里29号墳象嵌大刀からも蹴り彫りたがねの痕跡がみえる。」

百済の象嵌技術２種は、加耶と新羅にも見える。これらの時系列的な推移は金跳咏氏によって整理されている[12]ので参照されたい。



第 132 図
公州水村里Ⅱ−１号木槨墓象嵌大刀の
「蹴り彫り象嵌」



第 133 図
公州水村里Ⅱ−７号石槨墓象嵌大刀の
「蹴り彫り象嵌」

（４）稲荷山金象嵌鉄剣の象嵌技術

稲荷山鉄剣の金象嵌銘が「毛彫り」で溝が彫られたとの解釈[13]は、東アジアの線象嵌の溝加工が毛彫りで施されたとの誤った理解を生み、さらに列島内象嵌銘鉄製品が大和王権によって一括して作られ下賜されたとの解釈を引き出し、周囲の考古学者らがそれを鵜呑みにしたという点で古代史上重大な誤解が広まった。その影響は韓国考古学界にも及んでいる。猛省を促す意味でもその根拠を改めて述べる。

稲荷山金象嵌鉄剣の修理報告書の「第４章　考察　第１節　象嵌について」では、象嵌技術に関する解説が次のよう記されている。

（ⅰ）刀身の上に直接、筆で表裏115個の文字を書く。この場合、金工家自身が書くのではなく、書手によって墨書されたのであろう。

（ⅱ）筆書きによる下書きの線をなぞって、丸毛彫鏨で文字を線刻する。刻線は非常に浅くやや丸みをもっている。また筆順通りではなく彫りやすいところから線刻されたであろう。このあと後世では線彫跡の底部を広げて嵌金が浮きでないようにするが、これは行われていない。

（ⅲ）引板によって作られた径約0.06mmくらいの金線を刀身の刻跡にならし鏨によって筆順に関係なく仕事しやすいところから打ち込んでゆく。縦線と横線の交差する部分は一方を金線で嵌め、重なる部分のところは一段下げて彫った上で象嵌する。

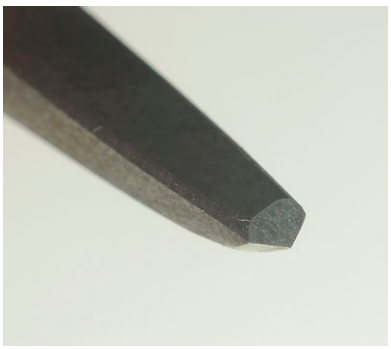
（ⅳ）線刻跡に金線を全て嵌め込んだあと、文字の表面を研いで、平に仕上げる。

この記述には重大な誤りがある。１つは（ⅱ）の「丸毛彫鏨で文字を線刻する」とし、２つ目は、（ⅲ）の「引板によって作られた径約0.06mmくらいの金線」としたことである。

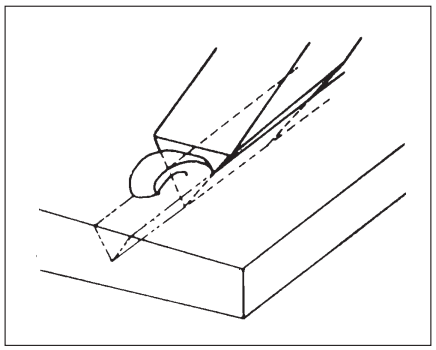
丸毛彫りたがねは、切削加工に関わる専門的な記述になるが、本報告は学問の一貫として行われる必要があるため、そこを避けては通れない。（ⅲ）引板の問題については、別稿を参照されたい[14]。

毛彫りたがね（第134図、第135図）は、断面Ｖ字形の溝を彫ることが出来る。丸毛彫りたがね（第136図）は、毛彫りたがねの先端を少し丸めたたがねを言う。これはどちらも切り屑を出す「切削加工」に分類される。稲荷山鉄剣が５世紀の日本列島で作られたとすれば、象嵌に毛彫りたがねが使わ

れたのであれば、同じ時代の他の遺物に毛彫りたがねなど切削加工の痕跡が見つからないといけないということになる。



第 134 図　毛彫りたがね



第 135 図　毛彫りたがね模式図

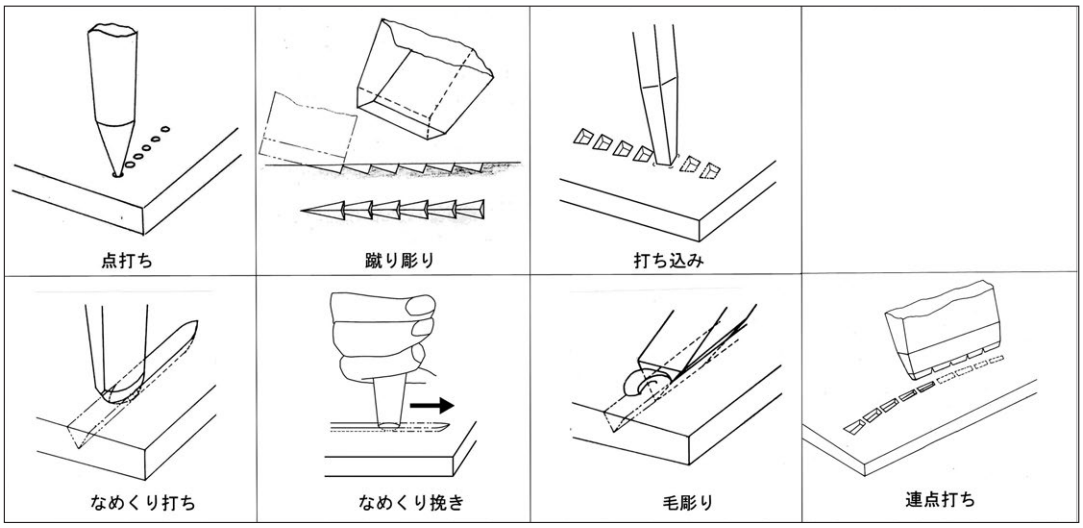


第 136 図　丸毛彫りたがね

その後の筆者の研究では、日本列島に毛彫りが現れるのは６世紀半ば以降のことである。

ところが、同じ修理報告書第４章の銘文観察表に注意すべき記述があった。２ヶ所に「蹴彫」の記述がなされていたのだ。先に紹介した「第４章　考察　第１節　象嵌について」の「丸毛彫鏨」の記述とは異なっていた。「第４章　象嵌について」の本文と銘文観察表は別の方が書いたのだろう。「丸毛彫り鏨」の記述は近代の象嵌技術から想定したものとすれば必ずしも過ちとは言えないが、ここでは観察記録を優先して扱う。

修理報告書の銘文観察表に「蹴彫」とあるのは、当時の考古学や金工史の分野では、古代に「なめくり打ち」があるという認識は無かった。現時点で筆者は古代の線彫り技術を下記の７つに分類している[15]（第137図）が、筆者がなめくり打ちを線彫りの分類の中に入れたのは、1996年のことであり[16]、これが我が国では最初の紹介である。



第 137 図　古代の線彫り技術７種

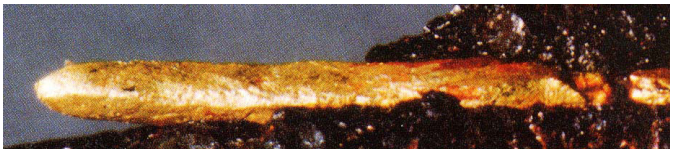
第138図に示した稲荷山鉄剣の金線の裏側に残るたがね痕は丸みを帯びている。したがって、観察記録の「蹴彫」は「なめくり打ち」と読み替える必要がある。つまり、稲荷山鉄剣には「なめくり象嵌」の技法が使われているのだ。そうなると、稲荷山鉄剣銘の直線部分の金線がなめらかなＶ字形を

呈していることも理解出来る（第139図）。なめくりたがねの連続打ちはなめらかなＶ字形の溝を作るからである。一方、毛彫りの溝には毛彫り特有のたがね痕が残るので注意が必要だ。

稲荷山鉄剣の銘文の文字は右肩の膨らみが大きい（第140図）ことは、使用されたなめくりたがね（第141図）では曲線を彫ると小さな曲率の曲線を彫ることが出来ない。稲荷山鉄剣の文字の曲線部の膨らみは当時の通用書体からきたのではなく、たがねの物理的特性から生まれたものと思われる。詳細は後述する。



第 138 図
稲荷山鉄剣　なめくり打ちの痕跡



第 139 図　稲荷山鉄剣直線部分

（埼玉県教育委員会 1982『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』より転載）

国（文化庁保管）



第 140 図　六朝体といわれた稲荷山鉄剣の文字２種



第 141 図　なめくりたがね（復元）

（埼玉県教育委員会 1982『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』より転載）

（5）東博蔵有銘環頭大刀の象嵌の釈文と技術

東博蔵有銘環頭大刀金象嵌銘の最初の釈文案は、早乙女氏によって東博ニュースに紹介された。釈文案は以下の通りである[17]。

「不　畏　也　□　令　此　刀　主　冨　貴　高　遷　財　物　多　也」

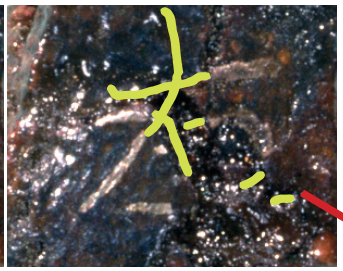
金石文の釈文は「確定」することはまずない。不確定な文字は「不確定」と明記しておかなければならない。様々な可能性を否定してしまうからだ。

いま改めてこの銘を釈文してみよう（鈴木案）。

「[1]不　[2]畏　[3]也　[4]在　[5]領　此　刀　主　冨　貴　高　[12]遷　財　[14]吻　[15]多　也」



第 142 図
東博蔵有銘環頭大刀の
第 4 字の原図

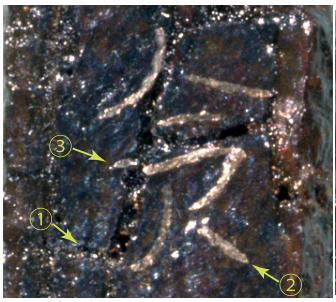


第 143 図
同加筆図

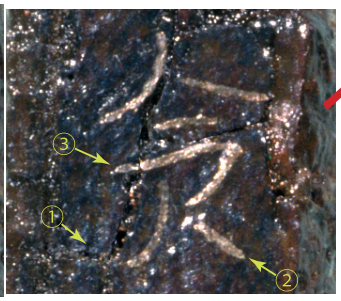


国（文化庁保管）
（埼玉県教育委員会 1982
『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』より転載）

第 144 図
稲荷山鉄剣　第 35 字の「在」



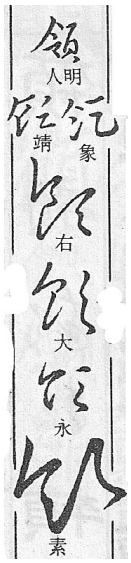
第 145 図
東博蔵有銘環頭大刀の
第 5 字の原図



第 146 図
東博蔵有銘環頭大刀の
第 5 字の接合図



第 142・143・145・146・148・149 図 有銘環頭大刀（部分）
東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives



第 147 図　「領」
西東書房刊『五体字類』より



第 148 図
東博蔵有銘環頭大刀（部分）

第 149 図　東博蔵有銘環頭大刀

＜第4字「在」について＞

第4字（第142図）は、金線が嵌まっていた溝部分に加筆すると第143図のようになる。これは稲荷山鉄剣の「在」字（第144図）によく似ている。

＜第5字「令？」について＞

第5字は「令」とされている（第145図）が、象嵌された近くにある線画を無視してしまっている。例えば、第145図の①左下の短い横画である。さらに②右下の斜め線と③中央左側の極く短い横画である（矢印で示す）。この三画は、「令」字に含まれる可能性がない。多くの陰刻文字の釈文では、「傷」を「線画」と判断してしまったり逆に「線画」を「傷」と見間違えて読み取れなかったりすることがあるが、象嵌文字では、金銀線が残っている場合は、「傷」と判定してはならない。金線が残っていることは「線画」があったことを示す「事実」だからである。「当時の工人が彫り誤った」などというのは釈文をする人の勝手な推測にすぎない。また、「線画」を誤って足してしまうこともあり得ない。金線が残っているところには、そのあたりに「線画」が確かにあったのだ。もちろん錆の進行具合によってわずかに文字線が変形したり移動してしまうこともある[18]が、無かったところに金線が残ることはない。従って、これを「令」と釈文することはできない。

全ての「線画」を有効として文字を探す必要がある。鉄刀の割れを修正してみると、第5字は第146図のようになる。第147図に用例を示す。第5字は「領」の草体の変形と考えることが出来、さらに不要な金線は全て「領」字の要素に含まれることが分かる。

＜第14字「吻」について＞

「吻」字は、「物」に通じるか？　用例は無いが漢音として「ブツ」の音が通じる可能性がある。

＜第15・16字「多也」について＞

最末尾の「多也」（第148図）も文字が詰まっていて、1文字分の領域に2文字が彫られている可能性がある。

3. 文字の表現方法の進化と金工技術の変化

（1）文字の転折部の表現方法の変遷－「入れ替え転折法」から「連続転折法」へ－

文字の表現方法は時代と共に変化する。書かれた文字でも筆が開発されて以来文字の転折法[19]に大きな問題が横たわっていた。例えば中国秦代の「篆書」や後漢代の「隷書」では、「転折部」はことごとく筆を入れ替えて筆の向きを変えていた（第150、151図）。これを「入れ替え転折法」と呼ぶ。ところが、楷書体の発生とともに「転折部」は筆を入れ替えずにその向きを変える「連続転折法」が普及した（第152図）。



第150図　秦・石鼓文の「入れ替え転折法」（二玄社『書跡名品叢刊　石鼓文』より）



（a）礼記碑　（b）史晨碑　（c）乙瑛碑

第 151 図　後漢代隷書の「入れ替え転折法」（二玄社『書跡名品叢刊』より）



（a）北魏・石函蓋銘　（b）北魏・孫遼浮図銘記　（c）褚遂良・孟法師碑　（d）欧陽詢・九成宮禮泉銘

第 152 図　北魏と唐代の楷書の「連続転折法」（二玄社『書跡名品叢刊』角川書店『書道大辞典』より）

（2）文字彫刻転折部への円弧状なめくりたがねの導入

文字分野で生まれた「連続転折法」の技術は、金属刻銘技術へも波及した。中国後漢代の象嵌文字では「入れ替え転折法」が採用されていた（第 153 図）。また、極東アジアの初期の象嵌文字でも「入れ替え転折法」が採用されていた（第 154 図）。文字が楷書体に変化するにつれ「連続転折法」が採用されていった。それに寄与したのが「円弧状なめくりたがね（第 155、156 図）」である。

「円弧状なめくりたがね」が無かったころの韓半島では、文様の彫刻の曲線部に「はみ出したがね痕」が現れていた（第 157 図）。しかし、6 世紀中葉になるころになると、「円弧状なめくりたがね」が導入され「はみ出したがね痕」が姿を消した。結果的になめらかな円弧文様を彫ることができるようになった。さらに「円弧状なめくりたがね」の技術は、文字の転折部に用いられ（稲荷山金象嵌銘鉄剣には使われていない）なめらかな「連続転折法」が普及した（第 158 図）。もちろん中には、「入れ替え転折法」と「連続転折法」が併用される例もあった（第 159 図）。

日本列島ではその後 6 世紀末から 8 世紀にかけて毛彫り技術が進化発展し、毛彫りたがねによる「連続転折法」が生まれた（第 160 図）。



（a）卅湅鉄刀銘　（b）五十湅鉄刀象嵌銘　（c）五十湅鉄刀はばき銘

第 153 図　後漢代象嵌文字の「入れ替え転折法」



（a）七支刀　（b）中平銘鉄刀

第 154 図　4 世紀韓半島と日本列島の「入れ替え転折法」

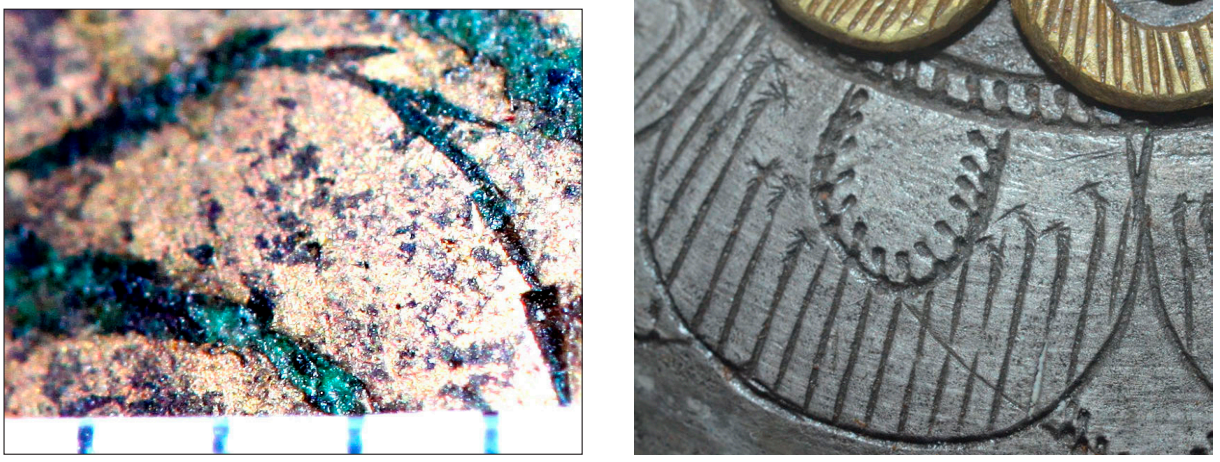
第 154 図（b）中平銘鉄刀（部分）
東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives



第 155 図　円弧状なめくりたがね（復元）



第 156 図　円弧状なめくりたがねの痕跡
（宮崎県 139 号地下式横穴墓出土品）



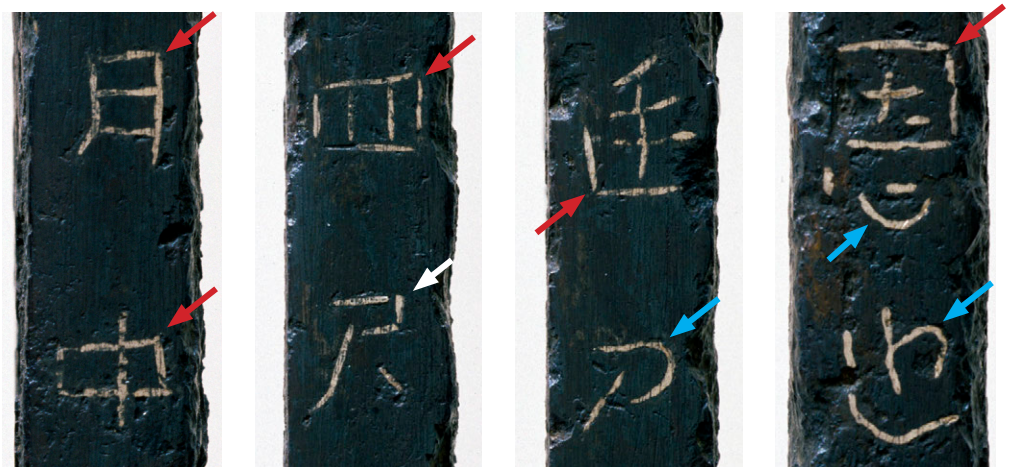
（a）うきは市月岡古墳眉庇付冑の蹴り彫り文様　（b）武寧王陵銅托銀盞のなめくり文様

第 157 図　文様彫刻に見られる「はみだしたがね痕」



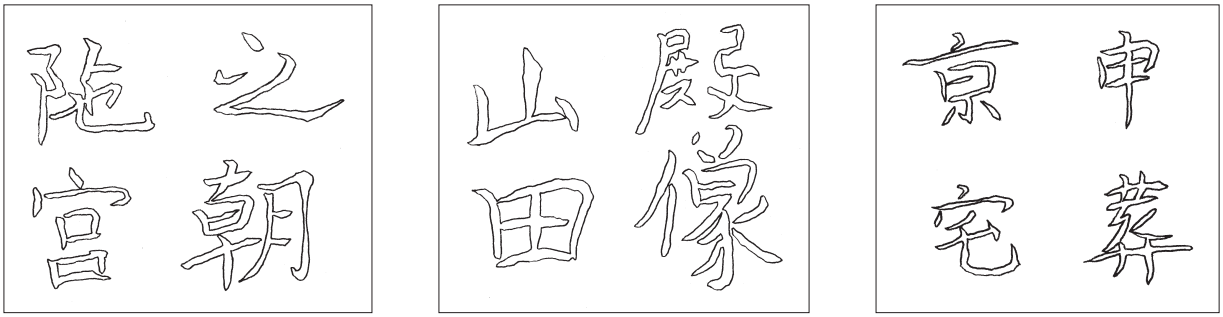
（a）東博蔵有銘環頭大刀　（b）稲荷山金象嵌鉄剣銘　国（文化庁保管）　（c）昌寧校洞 11 号墳金象嵌銘鉄刀

第 158 図　「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」（矢印）



第 159 図　江田船山銀象嵌鉄刀銘の「入れ替え転折法」と「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」

第 158 図（a）有銘環頭大刀（部分）・159 図 江田船山古墳銀象嵌鉄刀（部分）
東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives



（a）船王後墓誌　（b）東博蔵山田殿像銘　（c）石川年足墓誌

第 160 図　転折部の表現技法の変化　毛彫りたがねによる「連続転折法」

（3）東アジア象嵌鉄刀剣銘の転折法

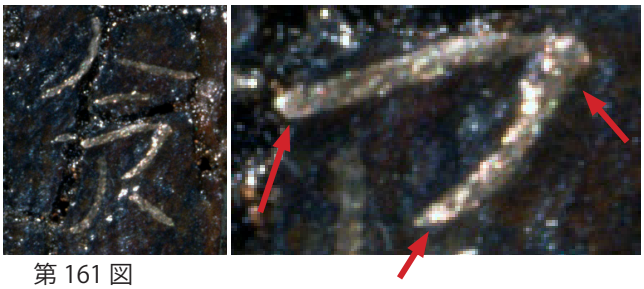
稲荷山鉄剣の文字は転折部で大きな曲線を描き、丸みを帯びた文字となっている（第 158-b 図）。

転折部に現れる大きな曲率が稲荷山鉄剣の文字を「六朝体」と評価した[20]理由の一つと考えられる。しかし、象嵌文字の転折部が「入れ替え転折法」から「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」に変化する過程において、円弧の曲率は「円弧状なめくりたがね」の円弧の曲率に従うことになる。つまり、転折部に現れる大きな曲率の文字は、書体の問題ではなく、「円弧状なめくりたがね」などを用いた金工の技術的な理由により生まれた特徴と考えられよう[21]。

「なめくり象嵌」で作られた東博蔵有銘環頭大刀には「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」が見られ、「蹴り彫り象嵌」で作られた昌寧校洞11号墳象嵌銘鉄刀の文字にもその一部に「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」が認められる。さらに江田船山銀象嵌鉄刀銘は基本的に「なめくり象嵌」技術が用いられているが、一部に「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」が観察される。それぞれの象嵌銘文に共通して「円弧状なめくりたがね」による「連続転折法」が認められる。

（4）文字彫刻技術の発展過程と過渡期の技術

中平銘鉄刀では、筆文字に似せる工夫はほとんど見られないが、東博蔵有銘環頭大刀（第161図）や稲荷山鉄剣（第162図）では、転折法ばかりでなく収筆部にも筆文字に似せる工夫が見て取れる。筆文字に全く似せようとはしていない中平銘鉄刀の時代から、少しずつ似せるよう工人らが努力し始める東博蔵有銘環頭大刀や稲荷山鉄剣の時代を経て、7世紀の後半から8世紀に至るころ現れる見事に筆文字に似せた庚寅銘大刀（第163図）や東大寺金堂鎮壇具陽剣と陰剣（第164図）の時代に至る、文字彫刻技術の変遷過程が見てとれる。5世紀の象嵌文字はその過渡期の象嵌技術だと言えよう。



第161図
東博蔵有銘環頭大刀の筆文字に似せた象嵌文字の収筆

第161図 有銘環頭大刀（部分）
東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives

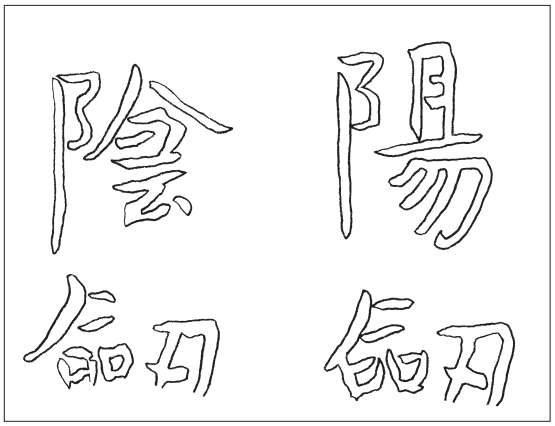


第162図
稲荷山鉄剣の筆文字に似せた象嵌文字の収筆

国（文化庁保管）



第163図　元岡G－6号墳　庚寅銘大刀



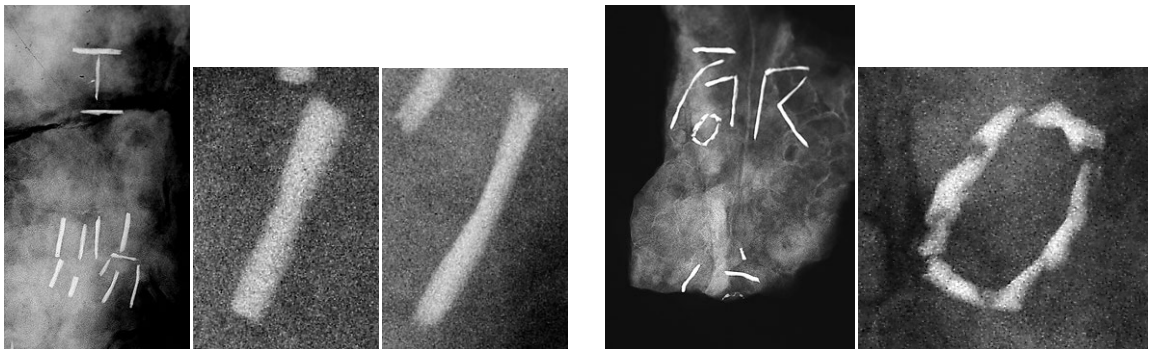
第164図　東大寺金堂鎮壇具　陽剣と陰剣

Ⅱ　稲荷台 1 号墳出土王賜銘鉄剣の象嵌技術

1. 稲荷台 1 号墳出土王賜銘鉄剣の再調査

（1）蹴り彫り痕跡の発見

市原市埋蔵文化財調査センターには、永嶋正春氏が撮影した王賜銘鉄剣のＸ線写真が保管されている。2019年11月19日、筆者は王賜銘鉄剣の加工痕を検討したいと考え、同センターを訪れた。トレース台の上に載せたＸ線ネガフィルムはとても小さく、加工痕が見えるとは思えなかった。それでも一眼レフとマクロレンズの組み合わせで撮影に挑んだ。そして第165図のような蹴り彫りたがね痕を見いだすことができた[22]。



第 165 図　王賜銘鉄剣のＸ線ネガフィルムから撮影された蹴り彫りたがね痕

（2）「金線が脱落した象嵌溝」に着目して再調査

今回、市原市教育委員会から調査依頼を受け、私は改めてＸ線フィルムの撮影と鉄剣の調査、さらにマイクロスコープによる鉄剣の調査をお願いした。

その再調査の重点項目は以下の通りである。

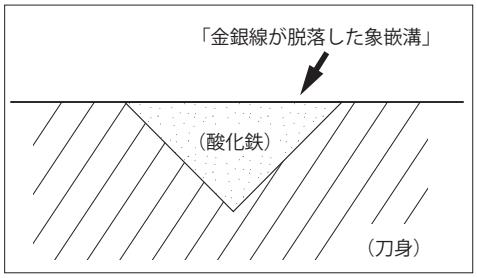
①Ｘ線ネガフィルムを「金線」に注目して再撮影し、より精細な加工痕を復元する

②Ｘ線ネガフィルムから見える「金線が脱落した象嵌溝」を復元する

③実物観察で、光源を変えて撮影・観察し、「金線が脱落した象嵌溝」を復元する

④マイクロスコープを使い、光源を変えて撮影・観察し、「金線が脱落した象嵌溝」を復元する

これまでの象嵌遺物の調査では、残った金銀線にのみ注意が払われていた。筆者は「金銀線が脱落した象嵌溝」に注目すべきとの考えから、②～④の調査項目を追加したのである。



第 166 図
象嵌における鉄地と
「金銀線が脱落した象嵌溝」との物質の違い

②については、「金銀線が脱落した象嵌溝」の部分は、周囲の鉄地と象嵌溝について第166図のような物質の違いが存在すると考えたためである。「金銀線が脱落した象嵌溝」には酸化鉄が充満していて、その周囲の鉄地の部分とは鉄の密度に大きな違いがある。Ｘ線透過率は鉄の密度に比例するとすれば、Ｘ線ネガフィルムに「金銀線が脱落した象嵌溝」が映し出されるのではないかと考えたのである。

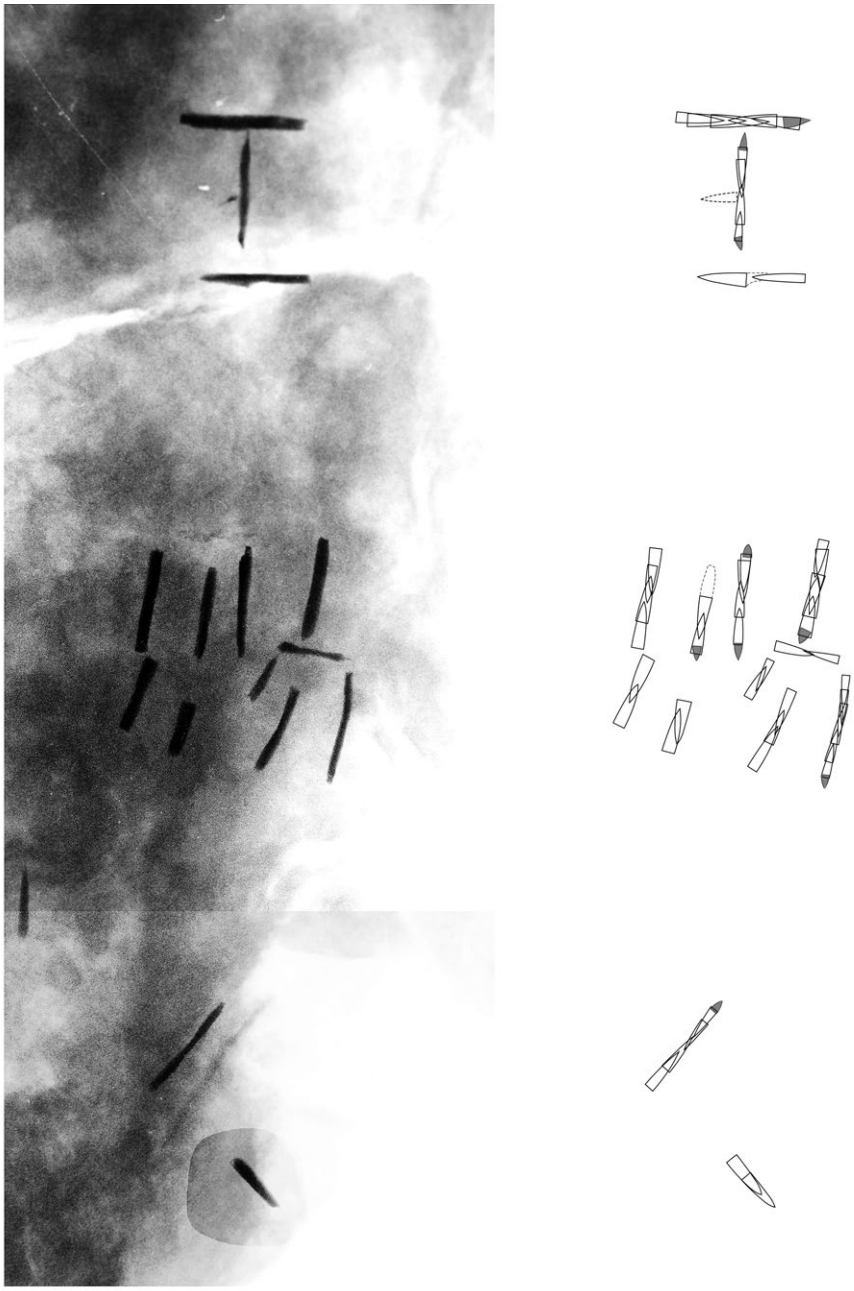
③と④については、「金銀線が脱落した象嵌溝」の部分は酸化鉄であり、その周囲の鉄地とは物質が異なるのであるから、象嵌溝の反射光が鉄地の部分のそれとは異なる可能性が考えられる。様々な光源を照射して反射光を観察する。

（3）残っている金線のＸ線ネガフィルムからたがね痕を抽出

王賜銘鉄剣には蹴り彫りたがねが使われたことが分かっているため、蹴り彫りたがねの三角文がどのように進められたかに注目した。撮影したＸ線ネガフィルムをPCにとりこみ、画像処理アプリケーションで色調補正を加えて、三角文を抽出した。

この復元図は、京都大学大学院生金桐均氏が作画した。

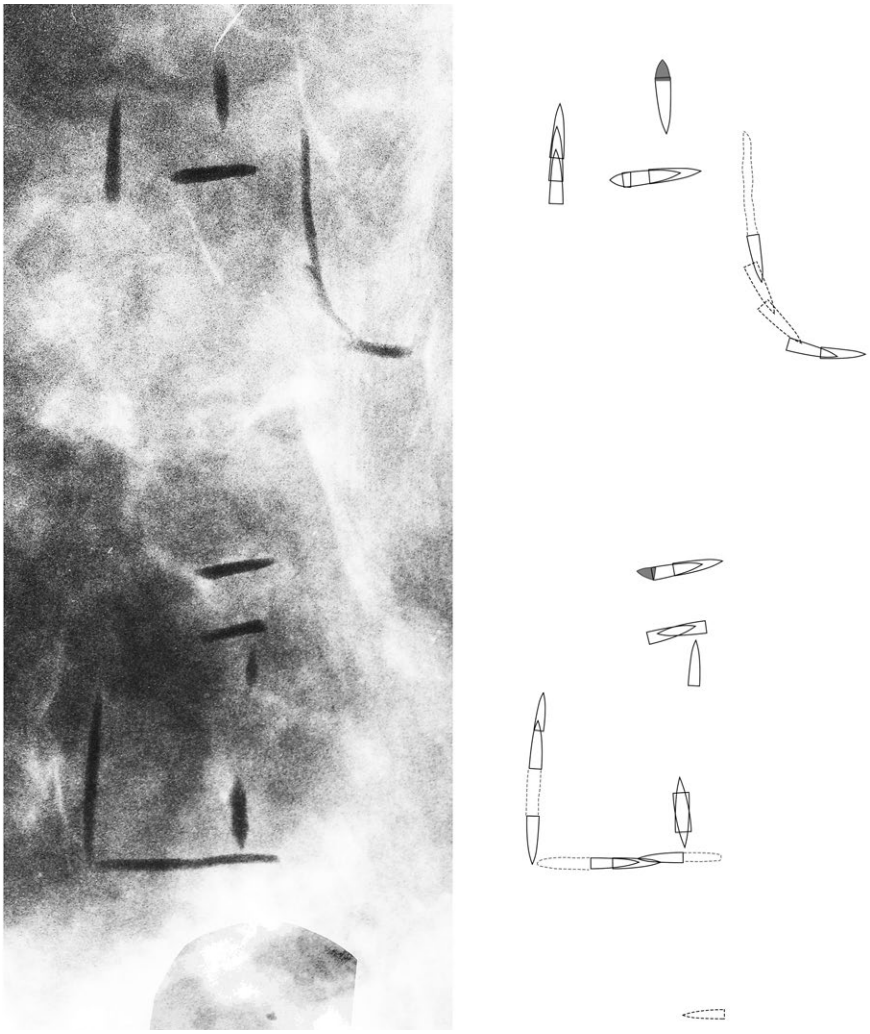
①たがね痕



第 167 図　王賜銘鉄剣のたがね痕の復元①



第 168 図　王賜銘鉄剣のたがね痕の復元②

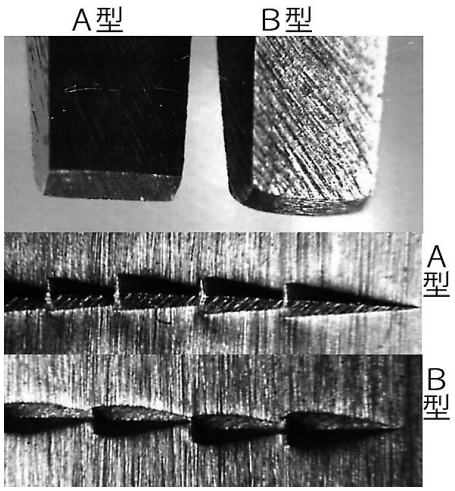


第 169 図　王賜銘鉄剣のたがね痕の復元③

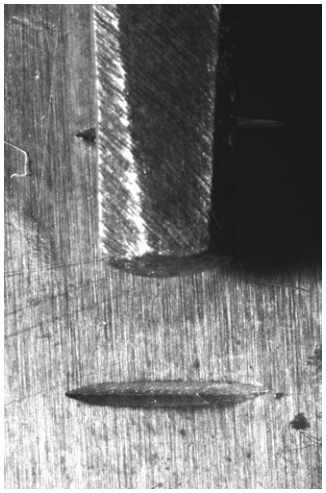
②使われたたがねの種類

王賜銘鉄剣に使われた蹴り彫りたがねは、三角形のたがね痕の左右の辺が外側に膨らんでいることが観察される。このたがねは鈴木分類によれば蹴り彫りたがねB型（第170図）である。つまり、蹴り彫りたがねB型は蹴り彫りたがねA型となめくりたがね（第171図）の中間に位置するような形状と言える。

かつて金跳咏氏は、王賜銘鉄剣をなめくり象嵌と指摘し、さらに王賜銘鉄剣銘の「王」を韓半島の「王」と推定した(23)。これは、X線ネガフィルムの存在を知らない段階での論考であり、蹴り彫りたがね痕を見落としたのであろう。王賜銘鉄剣のX線画像では、たがね痕が鮮明でない部分ではほとんど直線に見えるところがある。これは使用たがねが蹴り彫りたがねB型であって、さらに蹴りピッチを細かくしていたことにより、なめくり打ちに見えたのかもしれない。蹴り彫りとなめくり打ちは原理的には同じ加工法であり、たがねの先端形状がわずかに異なっているだけである。古代においては蹴り彫りとなめくり打ちという分類そのものがなかったことが想定され、曖昧なたがね痕は数多い。つまり、現代の分類による「蹴り彫りに近いなめくり打ち」や「なめくり打ちに近い蹴り彫り」が存在するのも当然のことであろう。



第170図　復元した蹴り彫りたがね　A型とB型


第171図　復元したなめくりたがね

（4）「金線が脱落した象嵌溝」の探索

観察には、X線画像（永嶋氏撮影）、実物観察、一眼レフカメラとマクロレンズのセットで得たML画像、さらにマイクロスコープによるMS画像の4種の方法を利用し、それぞれの画像において「溝跡の可能性がある」と判断したものは全て抽出した。その結果の中から2種以上の方法で得たものを「溝跡」と判定した。画像には「溝跡」を白線で囲み表わした。

また、「溝跡」とまでは判定できないものでも「可能性がある」と筆者が判断したものは、後に続く研究者へ一資料として提供するために本報告に載せた。

以下、三項目について文字ごとに報告する。

＜X線画像から溝跡を探す＞／＜肉眼とML画像から溝跡を探す＞／＜MS画像から溝跡を探す＞

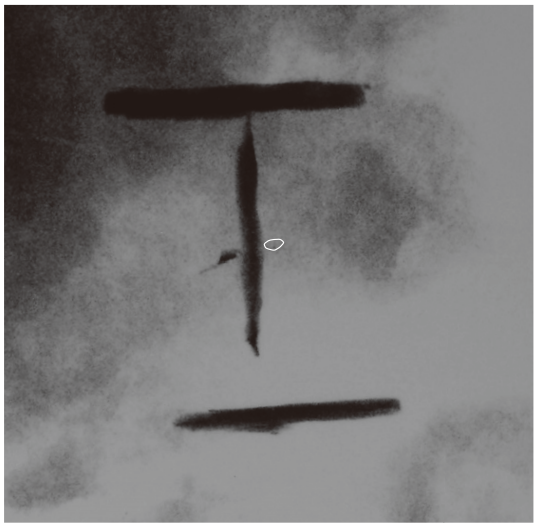
①第1字「王」の溝

＜X線画像から溝跡を探す＞

X線画像をトーンカーブで色調補正し「溝跡」の可能性が見て取れる部分（周囲の鉄部分より薄い画像となっている部分）を抽出した。これだけでは文字線であったと確定できないため、判定は他の画像の調査結果と併せて行う。



第172図　X線画像から溝跡を探す「王」字

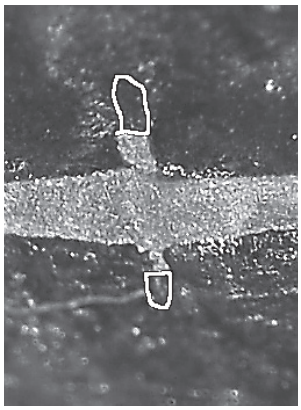


第173図　同左　第3画に溝跡の可能性

＜肉眼とML画像から溝跡を探す＞



第174図　ML画像から溝跡を探す「王」字　平面



第175図　同左　部分拡大

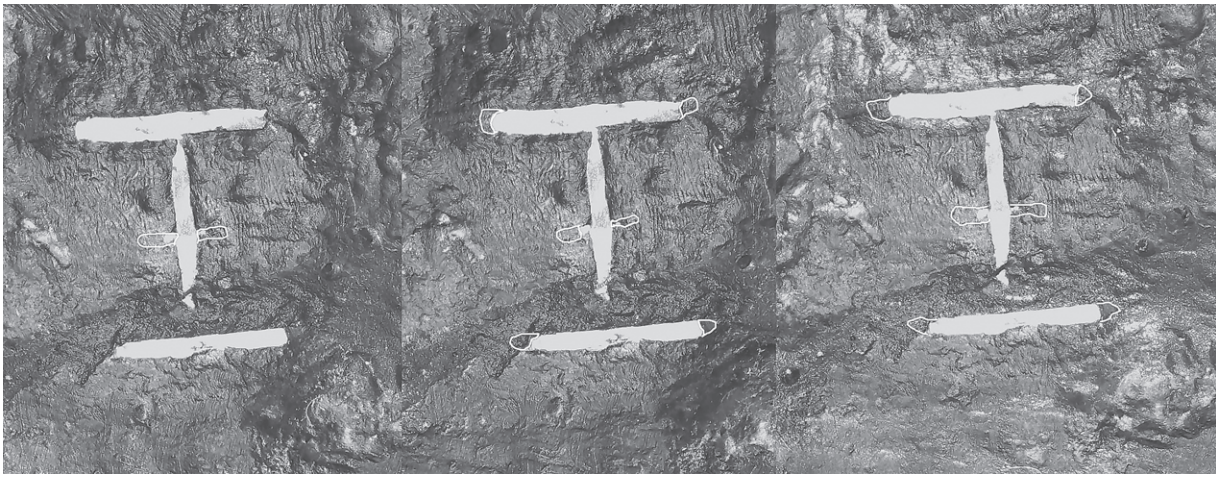


第176図　ML画像から溝跡を探す「王」字　右から



第177図　同左　「王」字　上から

＜MS画像から溝跡を探す＞



第 178 図　MS 画像から溝跡を探す「王」字（左：正面光、中：左から光、右：右から光）

＜「王」字の観察結果＞

第１画目横画の両端部に溝跡が認められる。

第３画目横画の両端部に溝跡が認められる。

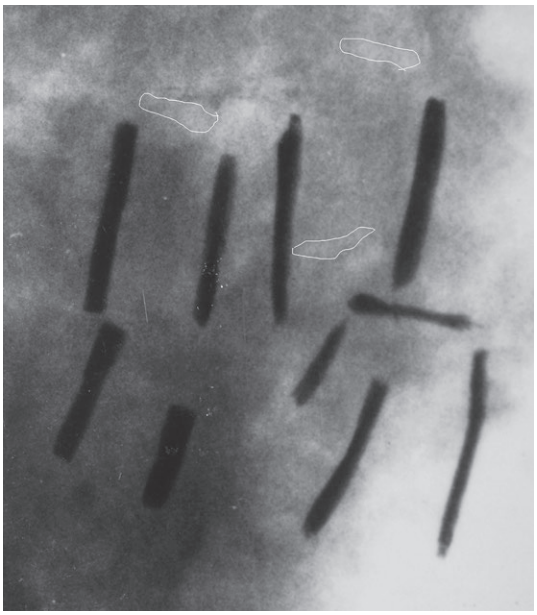
第４画目横画の両端部に溝跡が認められる。

②第２字「賜」の溝

＜X線画像から溝跡を探す＞

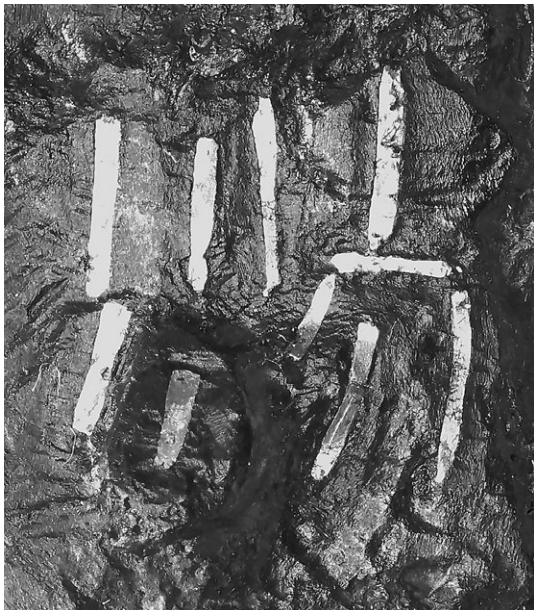


第 179 図　X 線画像から溝跡を探す「賜」字

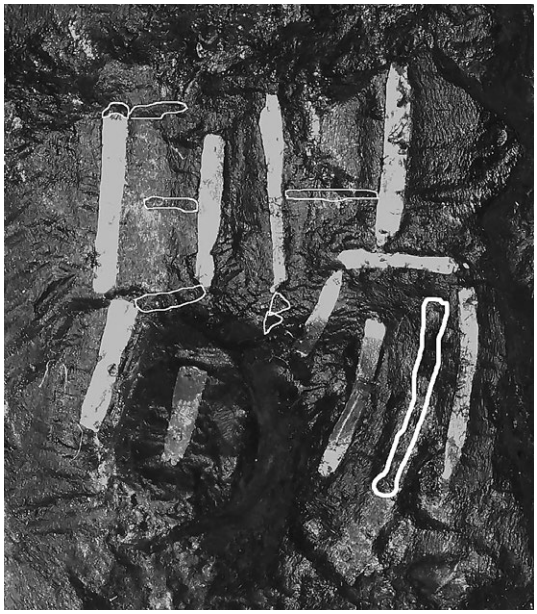


第 180 図　同左　３カ所に溝跡の可能性

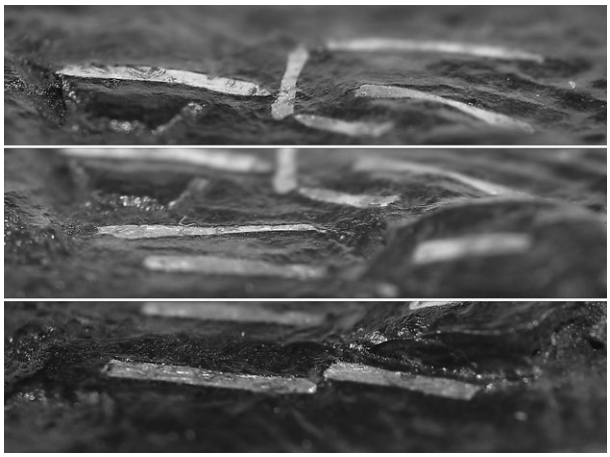
＜肉眼とML画像から溝跡を探す＞



第 181 図　ML 画像から溝跡を探す「賜」字　平面



第 182 図　同左　「賜」字　加筆



第 183 図
ML 画像から溝跡を探す「賜」字　左斜め上から　3 画面合成



第 184 図
ML 画像から溝跡を探す「賜」字　右斜め上から

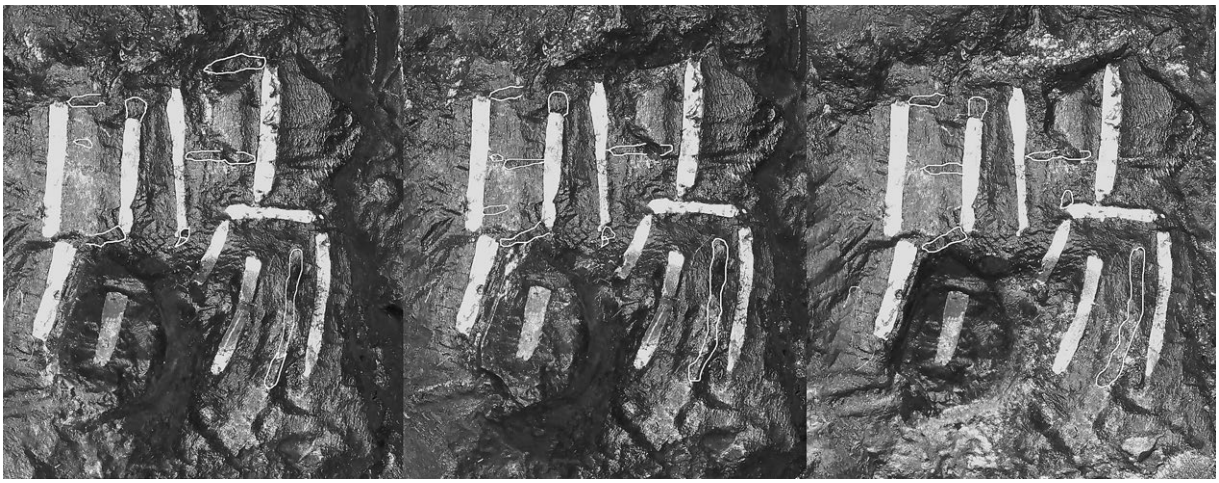


第 185 図　ML 画像から溝跡を探す「賜」字　下方から



第 186 図　同左　「賜」字　上方から

＜MS画像から溝跡を探す＞



第 187 図　MS 画像から溝跡を探す「賜」字　加筆図（左：正面光、中：左から光、右：右から光）

＜「賜」字の観察結果＞

「賜」字の「貝」偏について

第２画（横画）の溝跡の可能性がある。

第３画（横画）の溝跡の可能性がある。

第５画（横画）の溝跡の可能性がある。

「賜」字の「易」旁（つくり）について

第１画最下端部に欠損した溝跡の可能性がある。

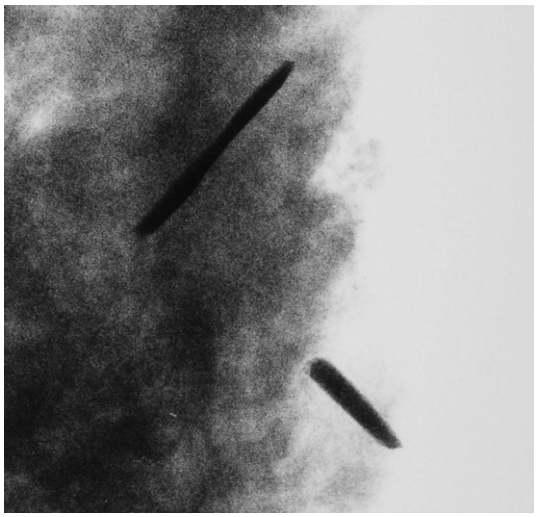
第２画（横画部分）の溝跡の可能性がある。

第３画（横画）の溝跡の可能性がある。

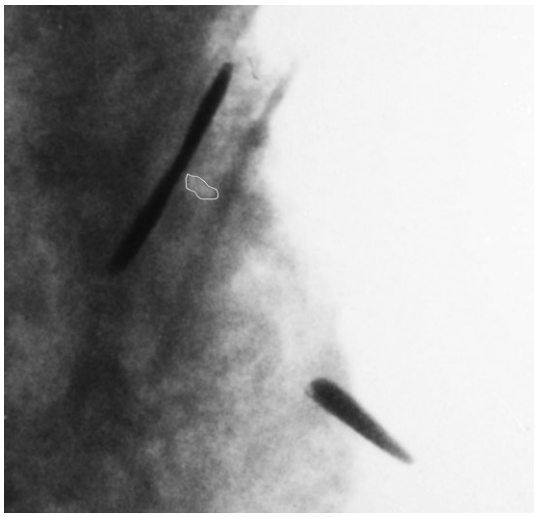
第８画（縦画）の溝跡の可能性がある。

③第３字「人？」の溝

＜X線画像から溝跡を探す＞



第 188 図　X 線画像から溝跡を探す「人？」字



第 189 図
同左　第２画に「金線が脱落した象嵌溝」の可能性

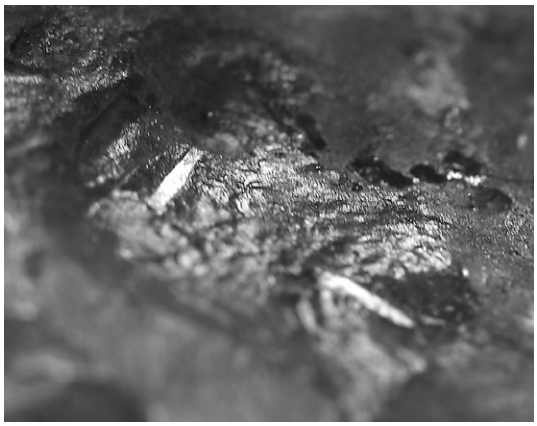
＜肉眼とML画像から溝跡を探す＞



第190図　ML画像から溝跡を探す「人？」字



第191図　ML画像から溝跡を探す「人？」字　加筆



第192図　ML画像から溝跡を探す「人？」字　下方から



第193図　ML画像「人？」字　上方から

＜MS画像から溝跡を探す＞



第194図　MS画像から溝跡を探す「人？」字　加筆図（左：正面光、中：左から光、右：右から光）

＜「人？」字の観察結果＞

「人？」字第1画の最上部と最下部に溝の欠損の可能性がある。

「人？」字第2画の一部に溝跡の可能性がある。

「人？」字第2画の最上部と最下部に溝跡の可能性がある。

④第４字「郡？」の溝

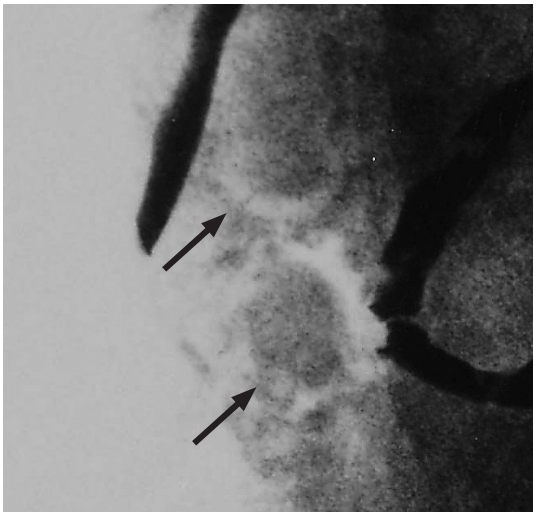
＜Ｘ線画像から溝跡を探す＞



第 195 図　X 線画像から溝跡を探す「郡？」字



第 196 図　同左　加筆　左下に２つの円文あり



第 197 図　「郡？」字　左下に白い円文が二つ



第 198 図　「口」字を蹴り彫りで円形に彫る

＜肉眼とML画像から溝跡を探す＞



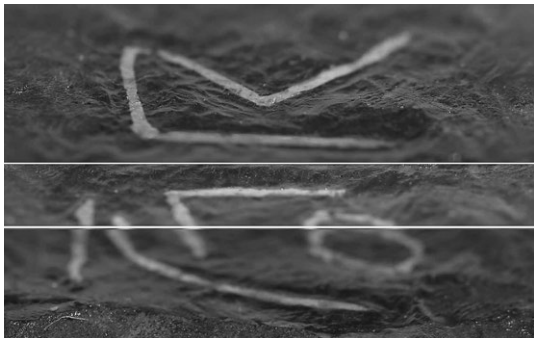
第 199 図　ML 画像から溝跡を探す「郡？」字



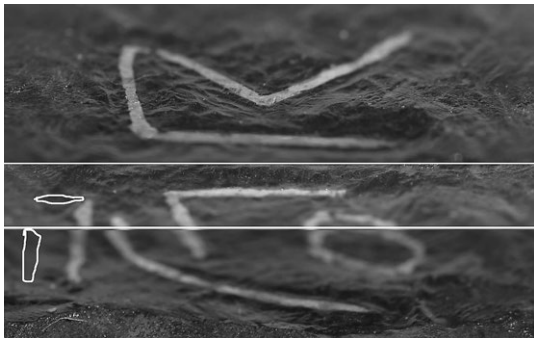
第 200 図　同左　「郡？」字　加筆



第 201 図　ML 画像から溝跡を探す「郡？」字　下方から



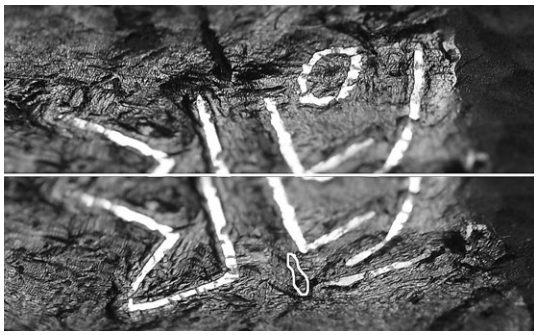
第 202 図　ML 画像から溝跡を探す
「郡？」字　左方から　3 枚合成



第 203 図　同左　加筆
「郡？」字　左方から　3 枚合成



第 204 図　ML 画像から溝跡を探す
「郡？」字　上方から　2 枚合成



第 205 図　同左　加筆
「郡？」字　上方から　2 枚合成

＜MS 画像から溝跡を探す＞



第 206 図　MS 画像から溝跡を探す「君」＋「こざと」加筆図（左：正面光、中：左から光、右：右から光）

＜「敬？郡？」字の観察結果＞

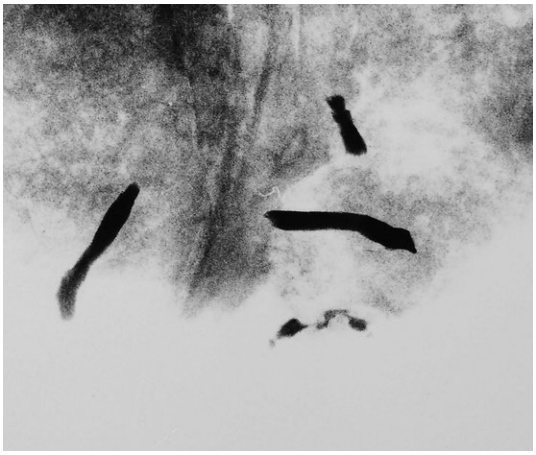
「郡？」字第 1 画（縦画）の溝跡の可能性がある。

「郡？」字左下に 2 つの円形の筆画が溝跡である可能性がある。

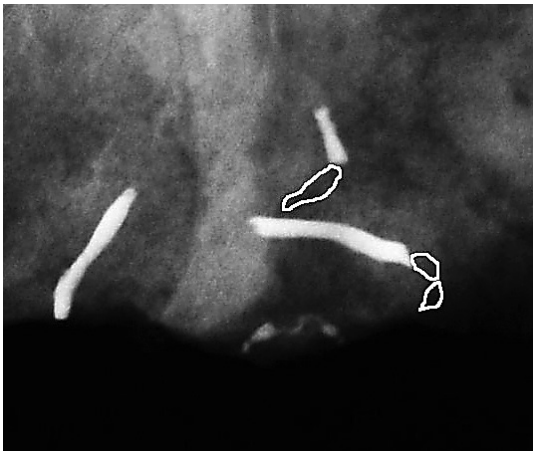
「郡？」字偏の「口」を三角文の連続で表現している。

⑤第５字「宮または官」の溝

＜X線画像から溝跡を探す＞



第 207 図　X 線画像から溝跡を探す「宮、官」字



第 208 図　同左　２カ所に溝の可能性

＜肉眼とML画像から溝跡を探す＞



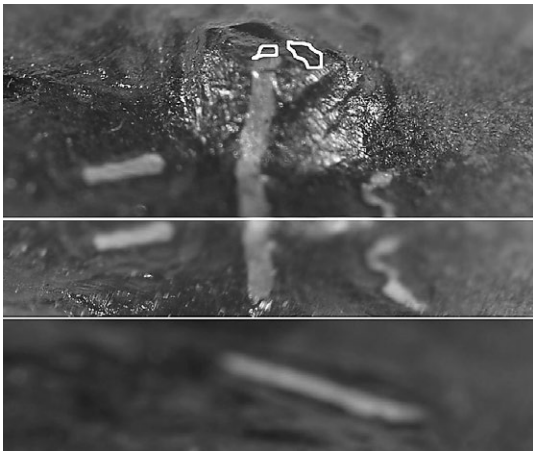
第 209 図　ML 画像から溝跡を探す「宮」字



第 210 図　同左　「宮」字　加筆



第 211 図　ML 画像から溝跡を探す「宮」字
「宮？」字　左方から　３枚合成



第 212 図　同左　加筆
「宮？」字　左方から　３枚合成

＜MS画像から溝跡を探す＞



第 213 図　MS 画像から溝跡を探す　加筆図（左：正面光、中：左から光、右：右から光）

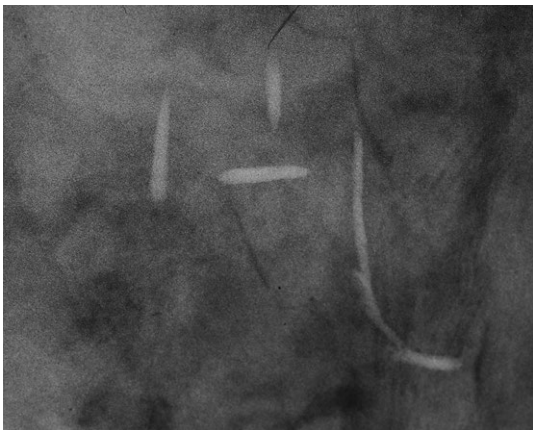
＜「宮？官？」字の観察結果＞

「宮？」字第３画端部と縦画部分に溝跡の可能性ある。

「宮？」字「口」の表現の一部と考えられる複数の三角文の連続が認められる。

⑥第６字「此」の溝

＜X線画像から溝跡を探す＞



第 214 図　X 線画像から溝跡を探す「此」字

＜肉眼とML画像で溝跡を探す＞



第 215 図　ML 画像から溝跡を探す「此」字



第 216 図　ML 画像から溝跡を探す　右から 3 枚合成



第 217 図　同左　左から

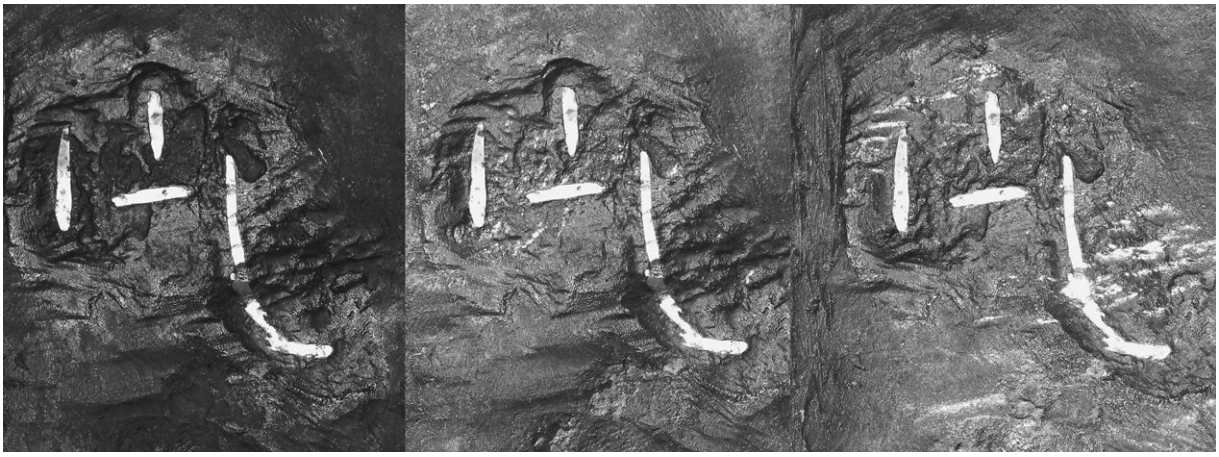


第 218 図　ML 画像から溝跡を探す　上方から



第 219 図　同左　下方から

＜MS画像から溝跡を探す＞



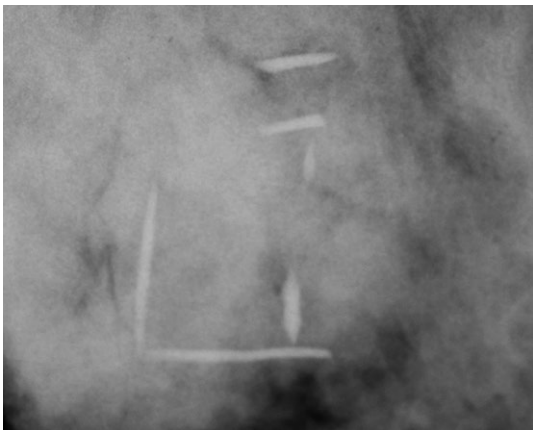
第 220 図　MS 画像から溝跡を探す「此」字　加筆図（左：正面光、中：左から光、右：右から光）

＜「此」字の観察結果＞

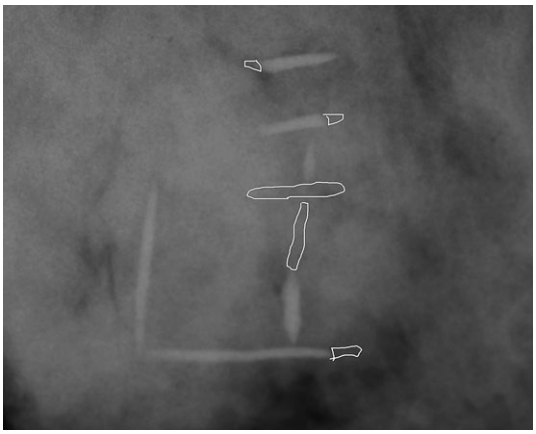
特に加える溝跡はない。

⑦第７字「廷」の溝

＜X線画像から溝跡を探す＞

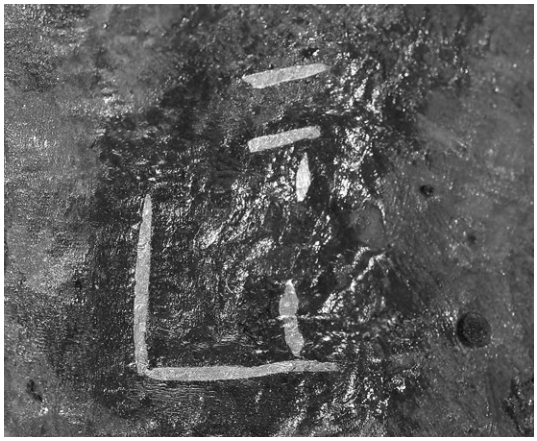


第 221 図　X 線画像から溝跡を探す「廷」字

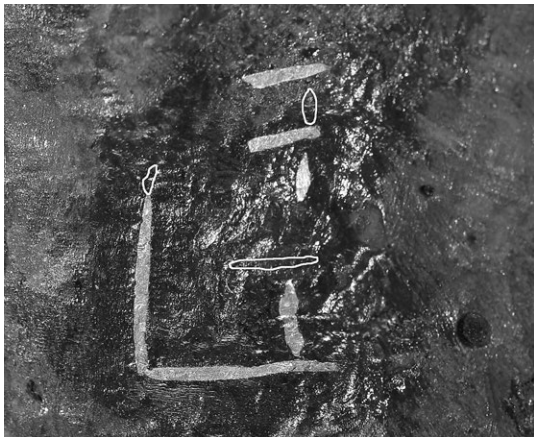


第 222 図　同左　5 カ所に溝の可能性

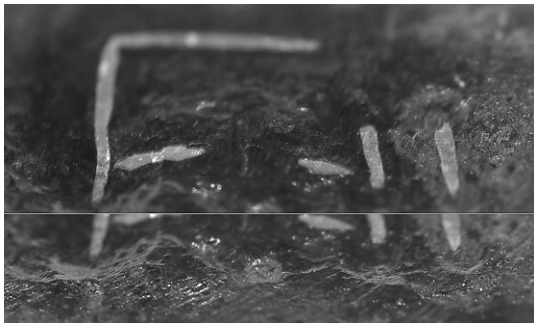
＜肉眼とML画像から溝跡を探す＞



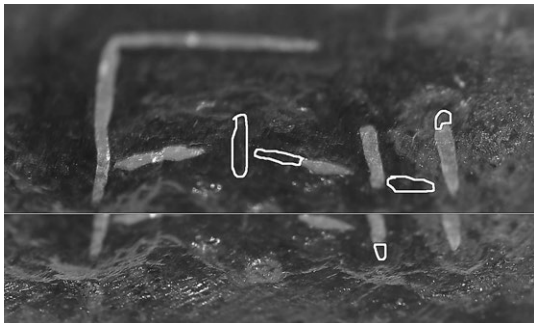
第 223 図　ML 画像から溝跡を探す「廷」字



第 224 図　同左　３カ所に溝の可能性



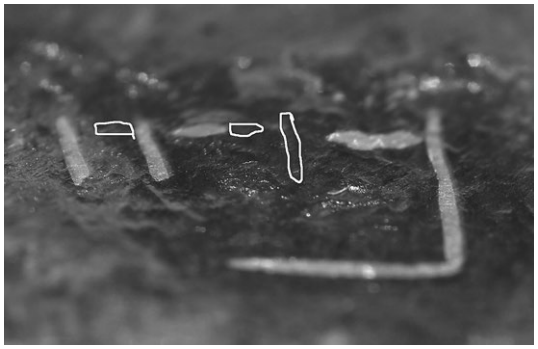
第 225 図　ML 画像から溝跡を探す「廷」字
２枚合成



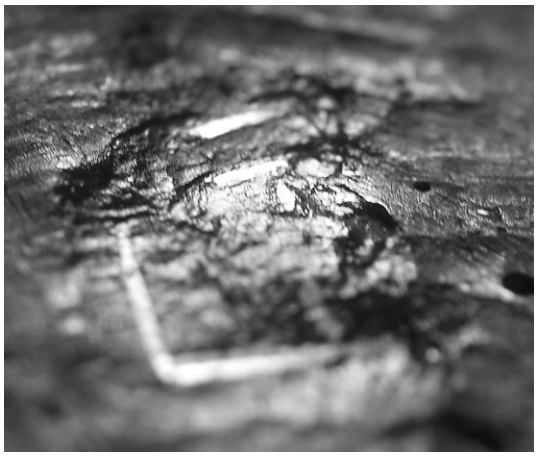
第 226 図　同左　加筆　２枚合成



第 227 図　ML 画像から溝跡を探す　左から



第 228 図　同左　加筆

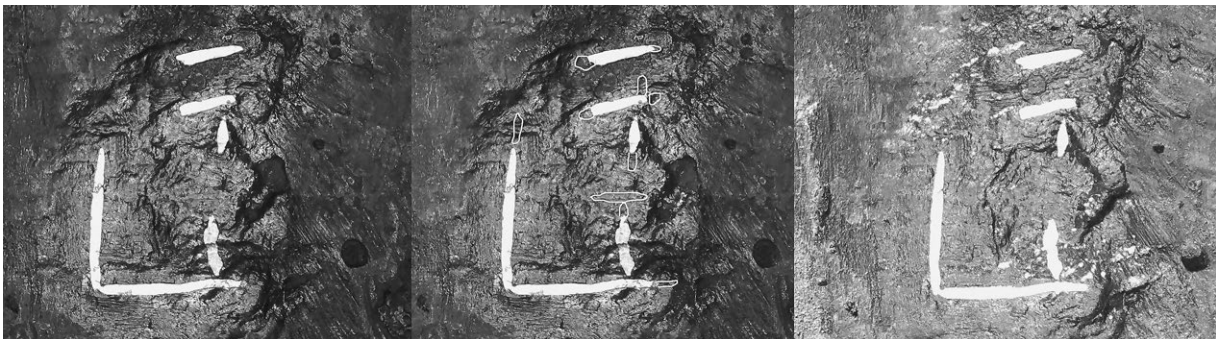


第 229 図　ML 画像から溝跡を探す　下方から



第 230 図　同左　下方から

＜MS画像から溝跡を探す＞



第 231 図　MS 画像から溝跡を探す「廷」字　加筆図（左：正面光、中：左から光、右：右から光）

＜「廷」字の観察結果＞

「廷？」字第１画の左端に溝跡の一部と見られる白い影が見える。

「廷？」字第３画横画の溝跡が見える。

「廷？」字第４画長い縦画の一部の溝跡３カ所が見える。

「廷？」字えんにょうの縦画の最初に溝跡が見える。

2. 釈文（案）

（1）釈文の重要性

金石学研究のための釈文は、近年の金石学研究ではおろそかにされがちな作業であるが、金石学においては最も重要な作業であるので藪田嘉一郎氏の言を改めて提示する。

「およそ金石銘刻の研究には何よりも釋文をしっかりすることが必要である。ここに釋文というのは銘文の文意の解釈ではなく、銘文の文字の一々が何の字に当るか審らかにすることである。この釋文が十分に出来ていないと、その上に立つ考証論考は沙上の楼閣に等しい。このようなことは分かり切ったことで、いまさら言を須たぬが、実際に上代の金石文を研究していると、これを痛感するので、敢えて冒頭に一言し、而してこの釋文篇を作る次第である。」(24)

近年の金石学研究ではＸ線CT装置が用いられることが多いが、現時点のＸ線CT装置は金との相性が悪い。従来の通常のＸ線写真はかなり精細に金線の形状を映し出すことができるのに対し、ボヤッと膨らんだ金線の形状しか映し出せない。

金石学研究に一つ大きな誤解がある。それは文字のかたちを求める際に、研究者自身にどのように見えるかだけを考えている節があることである。そもそも金石学研究では当該の金石文を作った工人らにその文字がどのように映っていたのか、が問題である。金石を作る過程には、文章を作る文人、文字を書く書家、その文字を品物の表面に写す工人、文字を彫る彫金師（あるいは石刻師）などがいると想定できるのだが、その過程すら視野に入れることがなく、ひたすら研究者自身の目にどのように映るかを考えていたとすると手落ちがあると言える。中でも象嵌銘文の工程では金銀を嵌めるための溝がどのように形成されたのかが問題である。溝の形状が完成した象嵌文字に大きな影響を与えるからである。したがって、その文字をどのような工具を用いてどのように刻んだのかを検討する必要がある。釈文作業の第一歩であろう。

今回の王賜銘鉄剣の再調査では、幸いに担当の小橋氏がそうした調査に理解を示してくれたことか

ら、使用たがねの調査、溝跡の調査に存分に時間を割くことができた。

（2）釈文（案）の提示

これまでの筆画の再現から、釈文（案）を以下に提示する。

前回の調査により、存在が確かめられた文字の数は７文字である。以下の通りである。

①「王」
②「賜」
③「人？」
④「敬？or郡？」
⑤「信？or宮？or官？」
⑥「此」
⑦「廷？」
前回の調査に筆者の釈文(案)を加えて示した。

①「王」字

今回特に付け加えた筆画はない。僅かに第３画横画の長さが加わった。

「王」字が妥当であろう。

②「賜」字

今回特に加わった筆画は、横画４本、縦画１本である。特に鉄地の部分と溝跡と思われる部分に、素材の違いを見て取ることができた。

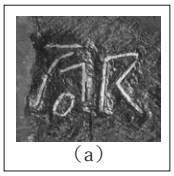
これも「賜」字が妥当であろう。

③「人？」字

今回特に新しい筆画は見つからなかった。その両端部に溝跡が想定され、筆画の長さが伸張した。

これは、残された筆画が少なく、ここには地名または人名が来る可能性が高く、特段推定する材料に欠ける。

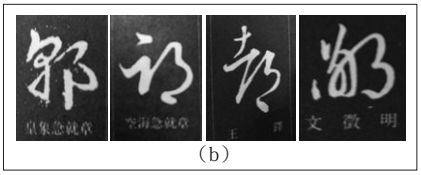
ここは「人？」字とする候補を挙げておくにとどめる。


（a）

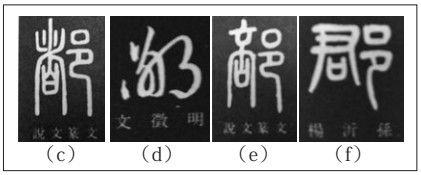
④「敬？ or郡？」字

旁（つくり）の形態から検討する。

第④字（a）の旁を「のぶん」に当てる文字は時代を通じて見ることができないため、「敬」はとらない。

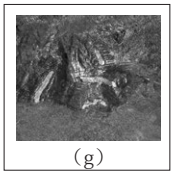

（b）

この結体は「おおざと」の草体（b）に近いと考えられる。また、第④字（a）の偏が「君」の隷書体に近いことから「君＋邑」で「郡」の可能性が見えた。５世紀の韓半島と日本列島は中国の文字の影響下にあり、隷書から草書を経て楷書が生まれる過渡期にあり、隷書の一部と草書の一部が併用される例も多く認められる。


（c）　（d）　（e）　（f）

偏の下部に「口」があり、その右に下がる画がある文字には、都（c）鄙（d）部（e）郡（f）などが候補として考えられる。ここは、「郡」字を取る。

⑤「信？ or宮？ or官？」字


（g）

前回の調査で「信」字が当てられたが、今回の調査で第⑤字（g）の下部の筆画が三角文の連続が認められ、これは第④字「郡」字の「口」の表現と同一と認められる。このことから「宮」字、「官」字、「停」字などが候補に上がる。

また、「宮」または「官」とすると「うかんむり」の第３画の右端部に溝跡が認められる。

第④字「郡」と併せて、「郡宮」または「郡官」が候補に挙がるが、ここは「郡宮」を取りたい。「官」は時代的にその概念が用いられていないと考えるためである。

⑥「此」字

ここは、特に追加する筆画は認められなかった。

「此」字を当てたい。

⑦「廷？」字

それぞれの画像で溝跡が推定される。「壬」字縦画の２カ所に溝跡が認められ、さらに長目の横画が一本認められる。また、それぞれの筆画の端部に欠損した溝跡が確認できる。

ここは「廷」字で良いと思われる。

以上を纏め、空白を推定で埋めると、次の釈文（案）となる。

①「王」
②「賜」
③「人？」（地名の一部か？）
③'「□」（地名の一部か？）
④「郡」
⑤「宮」
⑥「此」
⑦「廷」
⑦'「刀」（江田船山古墳銀象嵌銘から推定挿入）

③「人？」と③'「□」の部分は、次の「郡宮」に続く地名となろうか。市原市の古代地名をそこに当てるのが妥当と考える。送り側の人物「王」の居住地を示す場合もあるかもしれないが可能性は低い。地名や人名については当時の文字による表現方法に倣うためいかなる文字が該当するか追求すべき根拠を探すのは難しい。

⑦「廷」と⑦'「刀」については、江田船山古墳銀象嵌銘鉄刀にその用例があり、その中段に、

「八月中用大鋳釜幷四尺廷刀八十練□十捃三等上好利刀」

（「大鋳釜」は金偏が明瞭で旁は「壽」の可能性がある）

とある。「廷」を「やしき」とする解釈もあるが、筆者は「廷」を形声文字「挺」の「意符の省略」とみて、「廷刀」は「挺刀」を意味し「長く突き出す刀」と解釈した[25]。それは「廷」の前にある「四尺」と共に「刀」の品質を高く評価する語として理解した。また、その前に配された「大□釜」も同様の手法で「釜」の品質を高く評価する語として「大」きいことと「鋳」を表す金偏の語を「釜」の前に置くという点で、解釈の上でも合致する。さらにその次に来る「三寸（等の草体）」は刀剣製作の良い時期を表す「八月中」と良い材料を表す「用大□釜幷四尺廷刀」と良い技術を表す「八十練□十捃」の「三つを等しく用いた」とても優れた刀を表す「三等上好利刀」と合致する[26]。

江田船山銀象嵌鉄刀銘は当時としては珍しい「技術論文」で５世紀末から６世紀初頭のころの日本列島の技術状況を反映している。当時の東アジアで「廷刀」が「長く突き出す刀」つまり「優れた品質の刀剣」を意味する語として広く使われていたことが推定される。以上のことから「廷」は形声文字「挺」の「意符の省略」とみて間違いない。

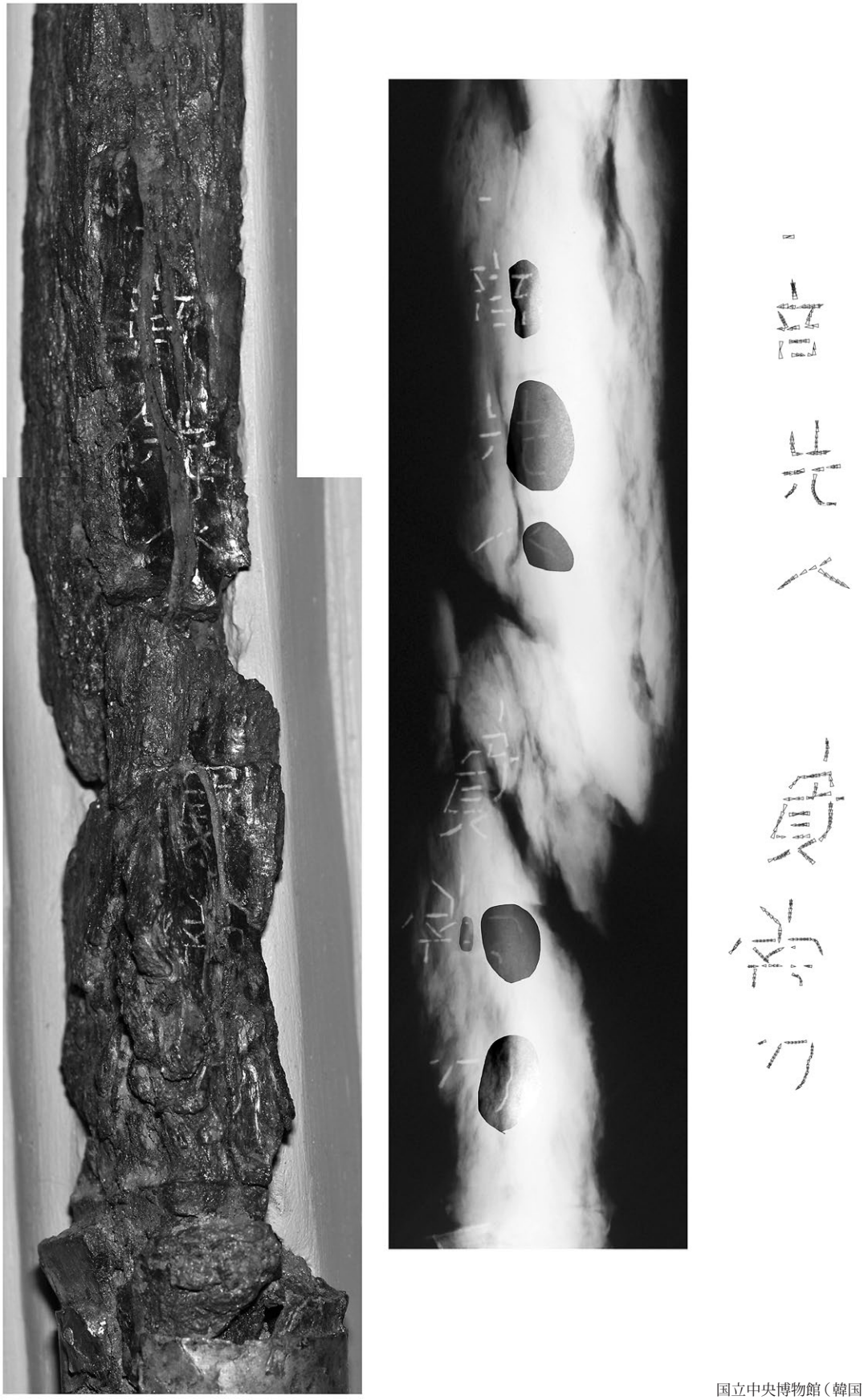
Ⅲ　稲荷台１号墳出土王賜銘鉄剣と昌寧校洞 11 号墳出土金象嵌銘鉄刀の製作地

1. 昌寧校洞 11 号墳出土金象嵌銘鉄刀の象嵌技術

（１）蹴り彫り象嵌のたがね痕の復元

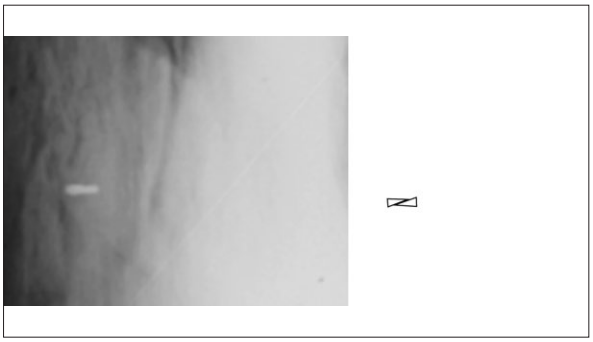
2024年10月、慶北大学校の金跳咏氏に依頼して国立中央博物館から昌寧校洞11号墳出土金象嵌銘鉄刀（以後、校洞11号墳象嵌銘と呼ぶ）のX線画像を手に入れた。筆者らは蹴り彫りたがね痕の復元を試みた。

この復元図は、京都大学大学院生金桐均氏が作画した。

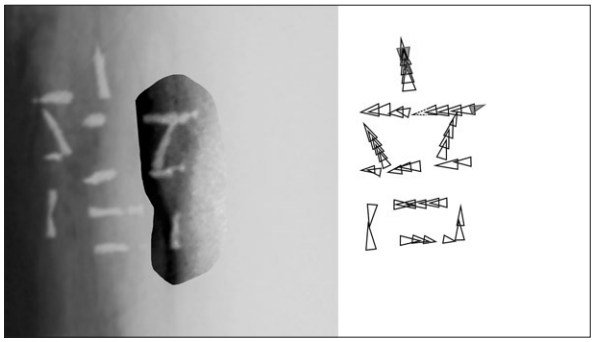


国立中央博物館（韓国）所蔵

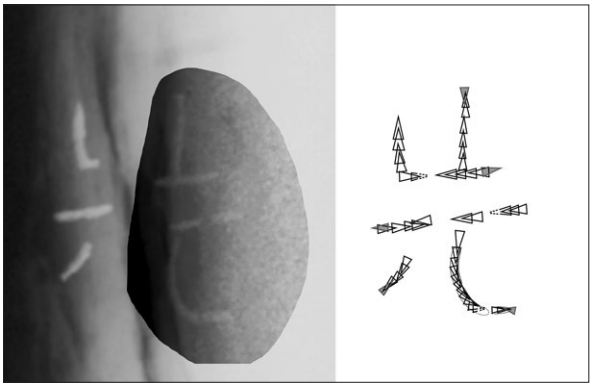
第 232 図　校洞 11 号墳象嵌銘の蹴り彫りたがね痕の復元図



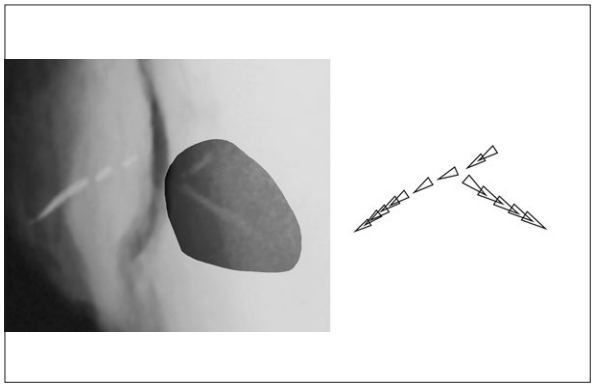
第 233 図
校洞 11 号墳象嵌銘　横線の蹴り彫りたがね痕



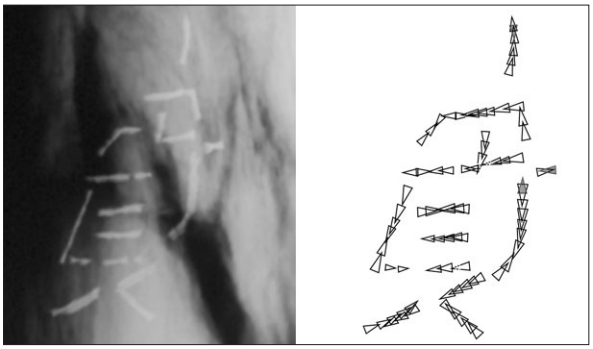
第 234 図
校洞 11 号墳象嵌銘　「部」字の蹴り彫りたがね痕



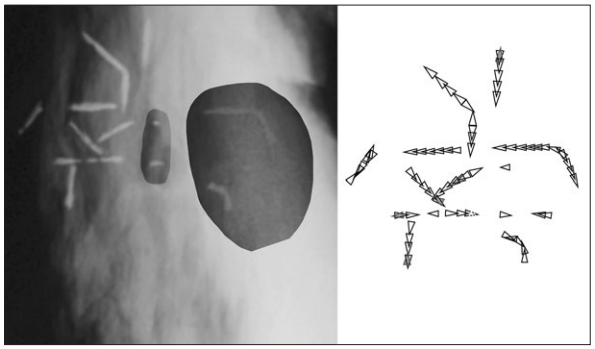
第 235 図
校洞 11 号墳象嵌銘　「先」字の蹴り彫りたがね痕



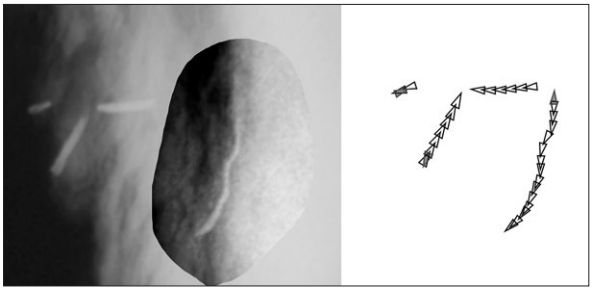
第 236 図
校洞 11 号墳象嵌銘　「人」字の蹴り彫りたがね痕



第 237 図
校洞 11 号墳象嵌銘　「貴？」字の蹴り彫りたがね痕



第 238 図
校洞 11 号墳象嵌銘　「賞？」字の蹴り彫りたがね痕



第 239 図
校洞 11 号墳象嵌銘　「刀」字の蹴り彫りたがね痕

国立中央博物館（韓国）所蔵

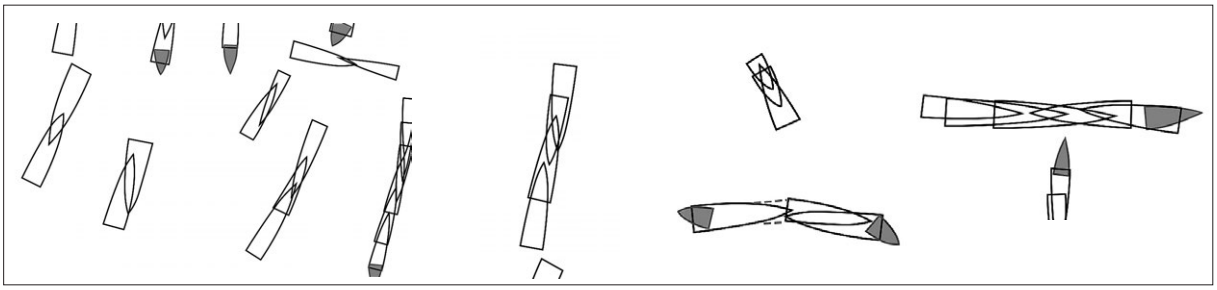
（2）昌寧と市原を繋ぐ両象嵌鉄刀剣の刻銘技術

起筆部と収筆部の「墨だまり」を表現する刻銘技術

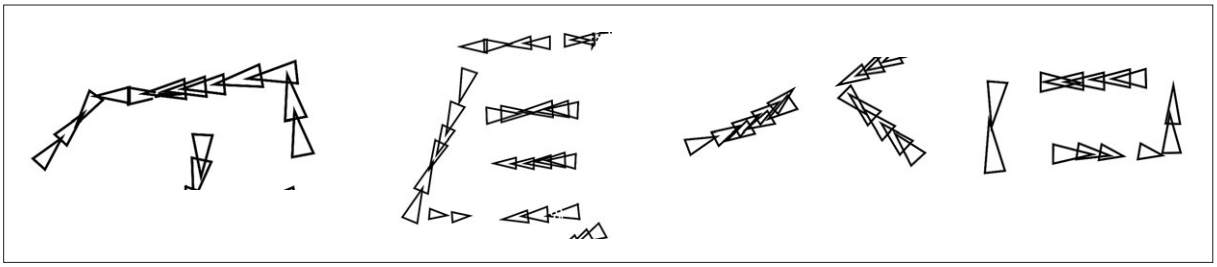
極東アジアの象嵌技術には、なめくり象嵌、蹴り彫り象嵌、毛彫り象嵌の三種あることが確かめられている。市原市王賜銘鉄剣も昌寧校洞11号墳象嵌銘大刀も蹴り彫り象嵌であることを確かめた。そのたがね痕をX線画像から復元した（第167 ～ 169図と第232 ～ 239図）のだが、筆者は両者に共通する技術的な特徴があることに気づいた。

通常蹴り彫りや蹴り彫り象嵌は、たがねの打ち込み方向（進行方向）が一定で、最初の打ち込みでは進行方向に直角のたがね痕（つまり三角文の底辺にあたる）が現れ、最後の打ち込みは尖ったたがね痕（三角文の頂点）が残る。これは蹴り彫りが三角文の連続で直線を表し、物理的に第1打の端部には三角文の底辺部分が現れ、最終打の端部には三角文の頂部が残ることになる（第240図）ためである。これは蹴り彫りの最大の特徴で、なめくり打ちや毛彫りでは両端共に尖ったたがね痕となる[27]。ところが、この両象嵌鉄刀剣の蹴り彫り象嵌には、たがねの方向が逆を向いた線が散見される。筆者がこれまで見てきた古代東アジアの蹴り彫り製品や蹴り彫り象嵌（金錯）の中で、一本の線の中でたがねの方向を変える例を見ることがなかった。そのことが、両象嵌銘鉄刀剣の刻銘技術の特殊性を考えるきっかけとなった。

一本の線の中で蹴り彫りたがねの方向を変えることは特別なことでありながらこの両象嵌鉄刀剣には共通しているのである。工人の何らかの意図があるのではないかと筆者には感じられた（第240・241図）。



第240図　王賜銘鉄剣の方向を変えたたがね痕



第241図　校洞11号墳象嵌銘鉄刀の方向を変えたたがね痕

象嵌銘の工程には、次のことなどが想定される。

①文人が文章を作る

②文人が揮毫した文字は概して大きいため、象嵌の下書きには工人の頭（かしら）が文字を小さく書き改める

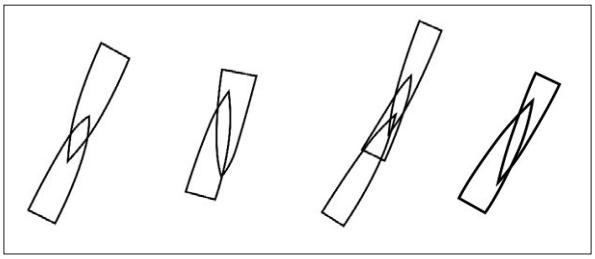
③頭（かしら）から受け取った下書きを彫金工人が刀剣へ転写する（この技術は不詳）

④下書きを刀剣に転写する（印泥朱または油墨を塗った紙を使うか、毛打ちたがねを使うか不詳）
⑤蹴り彫りたがねで溝を作る（線彫りする）
⑥あらかじめ用意した金線を溝に嵌める
⑦ヤスリや砥石で表面を仕上げる

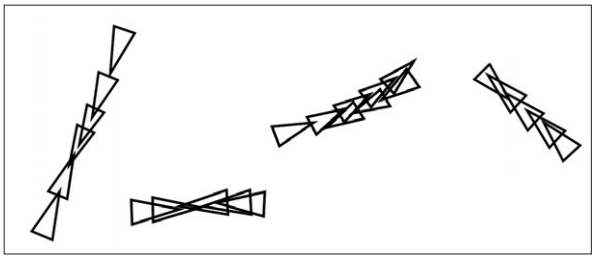
文章を作る人、あるいは下書きを書く人は、筆を使って文字を書く。その際、一本の筆文字の線には必ず「墨だまり」ができる。墨ではなく例えば漆を使っても「墨（漆）だまり」が出来る。それゆえ、刻銘工人は出来るだけ下書きに似せて彫ろうとする。その一つが「墨だまり」の表現である。その表現に、彫金工人は蹴り彫り三角文の底辺の部分を使ったのではないだろうか。

校洞11号墳象嵌銘では、起筆部の「墨だまり」を三角文の底辺で太く表現し、収筆部の筆を抜く部分はそのままたがねの方向を変えずに三角文の頂点で細く表現し、さらに筆文字の収筆部で筆を止める場合にできる「墨だまり」は三角文の底辺で表した。工人は蹴り彫りたがねの方向を変えて三角文の底辺で太く「墨だまり」を表現したのである。

「Ⅰの4文字の表現方法の進化と金工技術の変化」において、5世紀の象嵌技術で「転折法」と「収筆の表現法」で新たな試みが行われたことを述べた。これまで、蹴り彫り象嵌の遺物の中でそうした工夫は行われていないと筆者は考えていた。ところが、今回の市原市王賜銘鉄剣も昌寧校洞11号墳象嵌銘大刀の調査によって、両銘共に同様の工夫が行われていたことが明らかになった（第242・243図）。



第242図　王賜銘鉄剣
起筆部と収筆部の「墨だまり」を蹴り彫り三角文の底辺で表現している



第243図　校洞11号墳象嵌銘
起筆部と収筆部の「墨だまり」を三角文の底辺で表現している

2. 倭と韓半島における刻銘技術の受容と発展

（1）倭の刻銘技術

日本列島に文字の彫刻技術が入ってきたのは6世紀末のことである。中国、朝鮮半島を経由して小金銅仏の製作技術と共にもたらされた。その技術の多くは毛彫り刻銘技術で、一回の毛彫りたがねの動きで一本の文字線を彫る技術である。その元となったのは韓半島の小金銅仏であり、そのルーツは中国にある。韓半島における毛彫り文様の初例は百済金銅大香炉（567年以後）[28]であり、文字を彫る毛彫り刻銘の初例としては百済王興寺金銅舎利銘（577年）を挙げることができる。韓半島ではその後時間を経ずに中国のさらい彫り刻銘技術の影響を受けて、毛彫り刻銘技術が発展的に成長することはなかった。ところが、日本列島では、導入当初は稚拙な毛彫り刻銘技術であったが、それから200年足らずの間に見事なまでの技術水準に発展し、列島独自の技術として発展する。その発展の過程を筆者は、第一期（導入期）、第二期（進化期）、第三期（完成期）の三期に分けて整理した（第244～246図）[29]。

第一期（導入期）：第244図のように文字は単調な直線が組み合わされている。概ね初期から670年前後までの時代である。

第二期（進化期）：第245図のように筆文字の起筆（彫り始め）・収筆（彫り終わり）でたがねの方向を強引に変えて「墨だまり」や「筆を抜いた痕跡」を表現しようとしている。670年前後から8世紀初頭までの時代である。

第三期（完成期）：第246図のように筆文字の線の肥痩、抑揚、勢い、流れなどをたがねで表現できるようになる。8世紀初頭から後半にかかる時代である。

つまり、7世紀も後半になって、筆文字らしい柔らかい表現が可能になる。文字線の起筆部ではたがねの進行方向とは異なる角度でたがねを入れ、収筆部でもそれまでのたがねの進行方向とは異なる角度でたがねを抜く。時には横画に見られる筆の抑揚や変化を表現するなど、硬質な感じになりがちなたがね加工で柔らかい筆致を表現しようとする。あくまでも筆で書いた文字に似せようとする彫金技術の進化・発展の仕方は、中国や朝鮮半島には見られず、奈良時代に花開いた日本列島独自の文化である。これを筆者は「流れの文化」と呼んでいる(30)。



第244図　第一期（導入期）：
左から模式図、法隆寺丙寅年菩薩半跏像台座銘（606年）、
同・辛亥年観音菩薩立像銘（591年or651年）、
野中寺弥勒菩薩像銘（666年）

第245図　第二期（進化期）：
左から模式図、船王後墓誌（668年）、
小野毛人墓誌（677年）、根津美術館蔵光背（658年）

第246図　第三期（完成期）：
左から模式図、興福寺勧禅院鐘銘（727年）、
山代忌寸墓誌（728年）、小治田安万侶墓誌（729年）、
石川年足墓誌（762年）

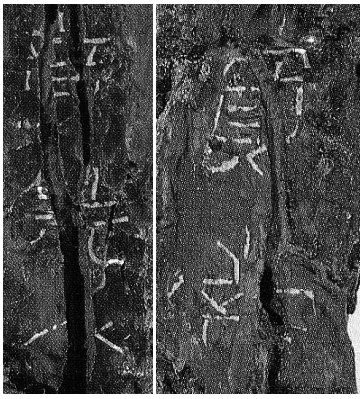
（2）韓半島の刻銘技術

百済では、七支刀のなめくり象嵌技術に始まり、5世紀の蹴り彫り象嵌やなめくり象嵌の技術（第247～249図）へ、

第248図 昌寧校洞11号墳金象嵌大刀　国立中央博物館（韓国）所蔵
第249図 有銘環頭大刀（部分）　東京国立博物館所蔵 Image: TNM Image Archives



第247図　七支刀銘



第248図
昌寧校洞11号墳金象嵌大刀

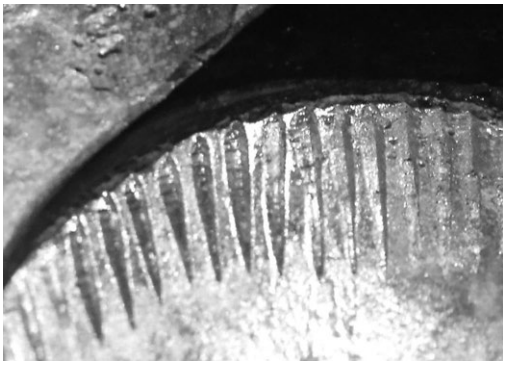


第249図
東博蔵有銘環頭大刀

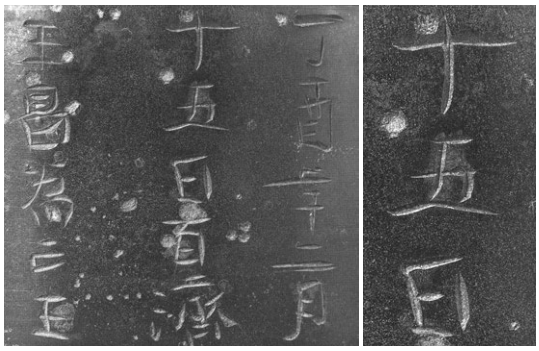
そして6世紀のなめくり線刻技術（第250図）を経て、6世紀後半の金銅大香炉の毛彫り技術（第251図）、6世紀後半から7世紀前半の舎利函銘など（第252・253図）へと推移していくが、いずれも筆文字の表現しようという工人の意図は読み取れない。一方、新羅では5世紀に尒斯智王銘装飾大刀銘や慶州皇南大塚北墳「夫人帯」銘銀製帯金具銘に「なめくり引き」の技術が新たに生まれ、6世紀後半から7世紀にかかる頃にわずかに毛彫り刻銘が見られるが、とても筆文字の柔らかさを表現できる水準に達しない。



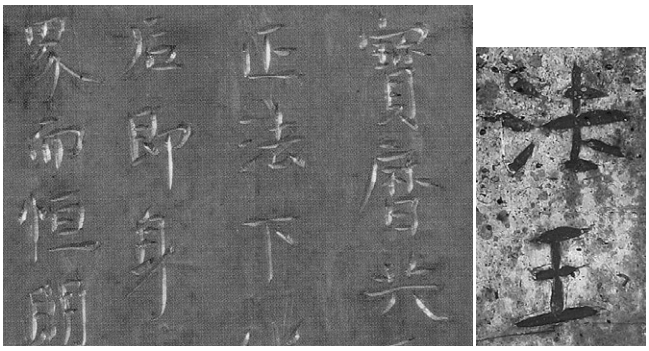
第 250 図
武寧王陵銀製釧（部分、523 年ころ）



第 251 図
毛彫りの初例：百済金銅大香炉（567 年以降）



第 252 図
王興寺址　青銅製舎利函の毛彫り銘（577 年）



第 253 図
弥勒寺址金製舎利奉安記の毛彫り銘（639 年）

韓半島の線彫り刻銘技術は、百済も新羅も筆文字に似せるレベルに至るのは、7・8世紀に至って中国から浚い彫りの技術が導入されるまで待たなければならなかったと筆者は解釈していた。韓半島の文字彫刻技術は倭のそれとは異なる発展経過を辿ったのである。

ところが、今回の再調査に至る1年ほど前、市原市王賜銘鉄剣も校洞11号墳象嵌銘鉄刀の両銘の検討の過程で、工人らが蹴り彫り刻銘の技術に革新的な筆文字の表現に挑んでいた事実に遭遇した。その一部を2024年の拙著で報告した[31]。

3. 両銘の製作主体は

校洞11号墳象嵌銘大刀の調査に用いたX線画像と同じ資料を用いて論考を書かれたホンスンウ氏の釈文と製作地説によれば[32]、次の通りである。

「□」「部」「先」「人」「□」「貴」「賞」「刀」

ホンスンウ氏によれば、校洞11号墳象嵌銘大刀の製作地は高句麗下賜説には否定的で、新羅製作

説と大伽耶製作説を併存している。広く韓国と日本に広まった「下賜説」の趨勢に対してはほぼ否定的で、この銘文は常套句であるとする。根拠の薄い「下賜説」に依拠することは、学問本来の道を踏み外すことになりかねない。

本稿では校洞11号墳象嵌銘大刀の新羅説には特にこだわらない。これが常套句であれば、そこから製作地を論ずることはあまり意味を持たないだろう。銘文に純粋に向かう金石学の立場からは、製作地としては出土地を優先して考えておきたい。

使われた蹴り彫りたがねの形状は、校洞11号墳象嵌銘は蹴り彫りA型、王賜銘鉄剣はB型と異なるたがねが使われている（第170図参照）。しかし表現技法としては同様の蹴り彫り刻銘技術が使われている。

起筆部と収筆部の「墨だまり」を表現する刻銘技術や円弧状なめくりたがねを使った連続転折法を用いる技術など筆文字に似せようとする高度な技術は、東アジアでは特殊な存在であり、なおかつ急速な文字彫刻技術の発展過程の中で、これらを創案し駆使した両象嵌鉄刀剣銘の工人は、同一工人とまでは断定できないが、同一工房内、あるいはとても近い関係の同一系譜内の工人が製作したものと考えることができるのではないだろうか。

4. 王賜銘鉄剣の銘文訓読とその製作地

稲荷台1号墳出土王賜銘鉄剣の釈文の一案を示せば以下の通りとなる。

「王」「賜」「人？」「□」「郡」「宮」

「此」「廷」「刀」

これの釈読を試みれば、

「王、□□郡宮　此の廷刀を賜う」

とすることは可能か？と考える。

さらに、「王」は昌寧近辺在住の「王」、「人？□」は「郡宮」につながる現・市原市周辺の古代地名・字名を指す。「廷刀」は「挺刀」のことで「長くすぐれた刀」の意。

王賜銘鉄剣は「韓半島昌寧の「王」が、市原在地首長であった被葬者に、長くすぐれた刀を賜う」と銘文に刻んで下賜したものであろう。

さいごに

こうした遺物の調査報告では、諸々の研究者の考察よりも調査担当者の「観察結果」こそが重要である場合が多い。その原体験は『埼玉稲荷山金象嵌鉄剣修理報告書』において「観察結果」がいまでも重要な研究資料を与えてくれていることにある(33)。また、近年では福岡市庚寅年銘関連論考において発掘担当者の報告と保存科学担当者の真摯な協力があって大きな成果を筆者は得た(34)。今回の王賜銘鉄剣の再調査においては、担当の小橋健司氏は、筆者のしつこいくらいの希望にことごとく応えて下さり、上記のような新しい成果を得ることができた。末尾を借りて感謝申し上げたい。

惜しむらくは、今回の再調査でX線撮影の再実施が行われなかったことである。そもそも永嶋氏のX線撮影は残された金線を写すためのものであり、「金線が脱落した象嵌溝」と鉄地との違いを浮かび上がらせようとするものではない。今後機会を見つけて「金線が脱落した象嵌溝」の復元を目指す

条件での王賜銘鉄剣のＸ線画像の再撮影をお願いしたい。

＜追記＞

まとめの「王賜銘鉄剣の銘文訓読とその製作地」で書いた結論の部分を友人の考古学者に話したところ、彼は「昌寧の王が、工人を市原に遣わし、市原で象嵌銘を刻ませた可能性があるのでは？」と仰った。

しかし、学問研究の立場からは、「王が、工人を市原に遣わし、市原で象嵌銘を刻ませた」という部分は遺物や銘文から読み取るすべがない。それは「想像のこと」であるから学問に含めてはならないと思う。最後に自らの立場を明らかにして筆をおくこととする。

（1）筆者は「技法」と「技術」の語句について、人の手になる技のなかで、その語句によってわざを復元できるものを「技術」と呼び、復元できないものを「技法」と呼んで分けてきている。例えば、金アマルガムのことを解説するのに、「金を水銀で溶かして器物に塗り、水銀を飛ばす」とするのは「技法の解説」であり、その工程をつぶさに記すのが「技術の解説」とする。

（2）町田章1999「漢墓」『よみがえる漢王朝　－2000年の時をこえて－』大阪市立美術館・読売新聞大阪本社、177頁

（3）鈴木勉2024『文化財と技術　別冊2　象嵌鉄刀剣銘と東アジアの工人ネットワーク』工芸文化研究所、36頁

（4）尾崎誠2001「消し象嵌技法に関する復元実験的研究」『元興寺文化財研究所研究報告2001』

（5）鈴木勉2004「弘法山５号、中田、郭内８号各横穴墓から出土した象嵌遺物の復元」『文化財と技術』第４号

（6）鈴木勉2008「百練鉄刀の使命　－東大寺山古墳出土中平銘鉄刀論－」『論叢　文化財と技術１　ものづくりと百練鉄刀』雄山閣、鈴木勉2024「第２章　後漢鉄刀剣銘の「さんずい湅」と中平銘鉄刀の「いとへん湅」『文化財と技術　別冊2　象嵌鉄刀剣銘と東アジアの工人ネットワーク』64頁、福井卓造2013「東大寺山古墳出土中平銘鉄刀における追刻の可能性」『石田肇教授退休記念金石書学論叢』

（7）鈴木勉・河内國平編2006『復元七支刀　－古代東アジアの鉄・象嵌・文字－』雄山閣

（8）樋本杜人氏は「内底の面にも内壁にも、たがねをひいたあとがほとんどみられない」と指摘し、（樋本杜人1952「石上神宮の七支刀とその銘文」『朝鮮学報』第三輯）、福山敏男氏は多くの金線が脱落していることを指摘している（福山敏男1968『日本建築史研究』墨水書房）。

（9）金跳咏2024「第７章　古代韓半島における象嵌技術と工人ネットワーク」鈴木勉編著『象嵌鉄刀剣銘と東アジアの工人ネットワーク』工芸文化研究所、195頁

（10）鈴木勉・河内國平編2006『復元七支刀　－古代東アジアの鉄・象嵌・文字－』雄山閣

（11）李午熹・金邱軍1992『三国時代의 鐵製象嵌技法에 과한 科学的研究』韓国文化財研究所

（12）金跳咏2024「第７章　古代韓半島における象嵌技術と工人ネットワーク」鈴木勉編著『象嵌鉄刀剣銘と東アジアの工人ネットワーク』工芸文化研究所、187頁

（13）埼玉県教育委員会1982『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』

（14）鈴木勉2024「付録　金工技術カタログ　その１　４．はりがねを作る」『文化財と技術　別冊１　移動する渡来系工人ネットワーク』工芸文化研究所、203頁

（15）鈴木勉2024「付録　金工技術カタログ　その１　１．線彫り七種」『文化財と技術　別冊１　移動する渡来系工人ネットワーク』工芸文化研究所、188頁

（16）鈴木勉・松林正徳1996「誉田丸山古墳出土鞍金具と５世紀の金工技術」『考古学論攷　第20冊』橿原考古学研究所

（17）早乙女雅博1992「平成２年度の修理を終えて　新発見　環頭大刀の銘文」『東博ニュース』540号

（18）西山要一2018「元岡Ｇ-６号墳・庚寅銘大刀が解く古代日本の象嵌大刀」『元岡・桑原遺跡群30　元岡古墳群Ｇ－６号墳・庚寅銘大刀の考察　福岡市埋蔵文化財調査報告書第1355集』福岡市教育委員会

（19）「転折部」とは、横画から縦画に筆または工具の進行方向が約90度程度変化する部分を言う。

（20）柳田敏司・金井塚良一・原島礼二1980『鉄剣を出した国』「九　鉄剣銘文の問題点　書風」213 ～ 215頁

（21）鈴木勉2006「象嵌技術から見える古代の鉄技術」（『復元七支刀　古代東アジアの鉄・象嵌・文字』所収）において文字の転折部が大きな曲率半径の円弧を描く点を詳述している。

（22）鈴木勉2024『文化財と技術　別冊2　象嵌鉄刀剣銘と東アジアの工人ネットワーク』工芸文化研究所

（23）高田貫太・金跳咏・小島道裕2018「古墳時代の日朝関係と現在」『古墳時代における日本列島と朝鮮半島の技術交流』
（24）藪田嘉一郎1956「七支刀銘考釈」『日本上古史研究』54・55号
（25）鈴木勉2024『文化財と技術　別冊1　移動する渡来系工人ネットワーク』工芸文化研究所、33頁
（26）鈴木勉2014「九州の円弧状なめくりたがねと（渡来系）工人ネットワーク　－江田船山銀象嵌銘鉄刀など円文を持つ鉄製品－」『文化財と技術』第6号
（27）かつて韓国国内では、百済金銅大香炉の線彫りについて、溝内にたがね痕が見られることから、この線彫りを「蹴り彫り」と判断されていた。これに対し筆者は、その線の両端は尖った加工痕を残しており、特別に切れ味の良い「毛彫り」の痕跡に間違いないと考え、さらに再現実験を重ねて韓半島最初の「毛彫り」と判定したことがある。鈴木勉2014「4　泗沘期百済の線彫り技術」『文化財と技術』第6号所収、鈴木勉「金工技術から見る南北朝・百済・倭の交渉　－百済金銅大香炉・藤ノ木古墳出土馬具をめぐる技術移転－」を参照されたい。
（28）鈴木勉2014「金工技術から見る南北朝・百済・倭の交渉　－百済金銅大香炉・藤ノ木古墳出土馬具をめぐる技術移転－」『文化財と技術』第6号、工芸文化研究所
（29）鈴木勉2013「毛彫り刻銘技術の進化論」『造像銘・墓誌・鐘銘　美しい文字を求めて　－金石文学入門Ⅱ技術篇－』雄山閣、73頁
（30）鈴木勉2013『造像銘・墓誌・鐘銘　美しい文字を求めて　金石文学入門Ⅱ　技術篇』雄山閣、77頁
（31）鈴木勉2024『文化財と技術　別冊2　象嵌鉄刀剣銘と東アジアの工人ネットワーク』工芸文化研究所、110頁、150頁
（32）ホンスンウ2021「昌寧校洞11号墳出土銘文刀の見直し」『韓国古代史研究』101
（33）鈴木勉2024「見落とせない修理報告書の小さな記述」『文化財と技術　別冊2　象嵌鉄刀剣銘と東アジアの工人ネットワーク』工芸文化研究所、123頁
（34）鈴木勉2021「庚寅銘象嵌鉄刀　謎の一文字「れん」と製作年」『古文化談叢86集』

第２節　「王賜」銘鉄剣の銘文について

高島　英之（東洋大学）

はじめに

1987年、千葉県市原市稲荷台１号墳出土の鉄剣から銘文が発見され[1]、翌1988年には、調査主体である上総国分寺台遺跡調査団長の滝口宏早稲田大学名誉教授の監修、市原市教育委員会及び財団法人市原市文化財センター（当時）の編集で、『千葉県市原市稲荷台１号墳出土「王賜」銘鉄剣概報』（以下、「概報」と称する）が刊行された。またその後、上総国分寺台遺跡調査団編『埏 市原古墳群序説』（2017）、当時発掘調査を担当された田中新史氏の編集による『埏 市原古墳群2総括編』（2021）、『王賜剣出土 埏 稲荷台１号墳』（2023）、『埏 市原古墳群３遺物篇１金属器等』（2025）がそれぞれ刊行されている。

わが国に所在する古墳時代から古代に至る銘文を有する刀剣は、別表に示した通り、中国・朝鮮半島から将来された事例や朝鮮半島において出土した事例、あるいは朝鮮半島における出土事例でかつてわが国の博物館が所蔵していたが戦後になって韓国に返還された事例、さらには現在では実物は失われているが、史料上確認ができるものなどを含めて20例に及んでいる。それらの中でも、本事例は、わが国において作製された有銘刀剣の事例としては、現在のところ最古のものと考えられている。ここでは、この鉄剣の銘文の内容に関して、概報の記述に基づいて、これまでの研究動向を整理しつつ、改めて日本古代における有銘刀剣における本資料の位置づけを試みたい。

なお、銘文は、国立歴史民俗博物館歴史研究部（当時）の平川南氏が解読された。平川氏が解読された釈文は、まず、1988年２月16日から３月６日にかけて国立歴史民俗博物館でこの「王賜」銘鉄剣が特別公開された際の解説パンフレットである国立歴史民俗博物館・市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター編『特別公開「王賜」銘鉄剣－市原市稲荷台１号墳出土－』で公表され、その後に刊行された概報に掲載された[2]。その後、この平川氏による釈文に対する異論もいくつか発表されたが[3]、いずれの所説も決定的な根拠に欠け、恣意的な解釈も少なくないなど問題もあり、現在では、概報に掲載された平川氏による釈文が確定している状態にある[4]。なお、本書では、鈴木勉氏によって新たな釈読案が提示された。今後、「王賜」銘鉄剣研究上の重要な論点となるであろう。しかしながら本項では、報告書としての本書の性格に鑑みて、ここでは敢えてその是非を問うことはせず、概報刊行時に平川氏によって示された従来の釈文に則して、以下、記述することを予めお断りしておきたい。

また、本項ではあくまでも「王賜」銘鉄剣銘文の釈文のみを検討の対象とした。銘文発見以来、稲荷台１号墳の具体的な被葬者像についてはさまざまな研究者から多くの言及があり[5]、さらに、本銘文を史料として引用・利用した論考も枚挙に暇がなく、諸説提示されているが、それらについても敢えて触れることはしない。

1. 銘文

概報に掲載された平川氏の報文によれば、「王賜」銘鉄剣の銘文は剣身部の下方の両面に施されており、表は切っ先より50.5cm、裏は切っ先より52.8cmの位置から記され、表・裏の文字はそれぞれ

鏑の右側に記されているということである。

釈文は、

（表）王賜□□敬□（安ヵ）

（裏）　此廷□□□□

である。

平川氏によれば、表の各文字の心々間は1.43cmの等間隔に６文字が配置され、裏の各文字の心々間は表の3/4に当たる1.07cmになっていて、剣の関の位置から考えれば、表と数の６文字があったと推定できることや、「王」の第３画の横画は象嵌がほとんど剥落しているということが指摘されている。

なお、本鉄剣のＸ線撮影を依頼されたことを契機に、銘文の存在を最初に確認した国立歴史民俗博物館（当時）の永嶋正春氏は、表面冒頭の「王」の文字の上にも、また、裏面冒頭の「此」の文字の上にも文字は存在していないことや、「王」の文字の中央の横画は、中央の縦画の右側にも字画の痕跡が認められるので、「工」と読める可能性はないことを明確に指摘している(6)。

また、「賜」の横画は１本のみで他の横画がすべて無いという点については、「敬」の文字が省画されていることや、「賜」の文字は横画が無くても字形としては容易に判断できることを勘案して省画の可能性が高いとしている。

さらに、表裏の文字の割り付けられた状態や文字の大きさから、「王」の文字を擡頭させ、「王賜」の象嵌を若干太くし、強調させているとしている。

また、書体について平川氏は概報で、文字の線の太さにばらつきがあるものの直線的であり、銘文刀剣の実例では七支刀の書体に最も近いとしている。この点は、埼玉稲荷山古墳出土鉄剣や江田船山古墳出土鉄刀の銘文よりも古様を示しているものと考えられる。また、東野治之氏は、朝鮮半島経由で伝来したと考えられる中国・漢代の隷書の特色がみられるとしている(7)。

先述したように、この平川氏による釈文に関してはいくつかの異論も提出されている。

まず、郭安三氏は、「王賜」の下の解読されていない２文字は鉄剣の意味を有する名詞と考え、「王賜」の次の文字を「久」と読み、「久羽」ないし「久波」と読み、「鍬」の文字と同じく鉄器・鉄製品を意味する文字とし、必ずしも表裏各６文字で構成されたと考える必要はないとした(8)。

また、稲荷台１号墳の発掘調査を担当した調査団副団長の市毛勲氏も、「王賜」の２文字の下を同様に「久」と読んだ上で、表・裏各７文字計14文字と推定され、（表）「王賜□（久ヵ）□（沙ヵ）□（鬼ヵ）敬□（安ヵ）」、（裏）「此廷□（刀ヵ）□（者か）□（避ヵ）□（百ヵ）□（兵ヵ）」と銘文を復元した。下賜されたことを示す文章では下賜された品物そのものよりもむしろ下賜された者が誰であるのかという点が重視されるのが通例という点から、「下賜」の下には剣を下賜された人物名であるのが自然であるとしている(9)。

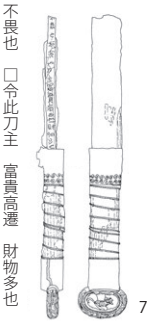
さらに、森浩一氏は、中国古代の銅鏡の銘文で「玉」の文字を省画した例として「王」の文字が記されることがあるとして、冒頭の２文字は「王賜」ではなく「玉賜」と読むべきであるとしている(10)。

一方、森田悌氏は、表面冒頭２文字の「王賜」は、「王から下賜」を示す文言ではなく人名であり、その次には鉄剣の原料を示す「久練鉄」の文字が入り、「敬」の下の文字は「安ヵ」ではなく「造ヵ」と読むべきであるとした上で、表面を「王賜□（久ヵ）□（練ヵ）□（鉄ヵ）敬□（造ヵ）」と釈読すべき



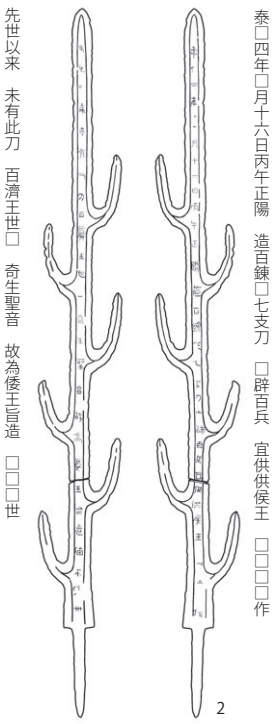
1

奈良県
東大寺山古墳
出土鉄刀
後漢・中平年間
（184 ～ 189）



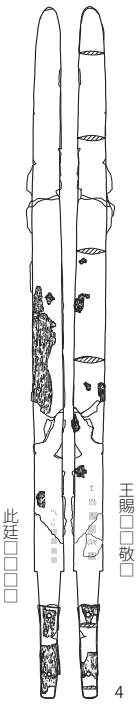
7

朝鮮半島
東京国立博物館蔵
朝鮮三国時代鉄刀
5 世紀



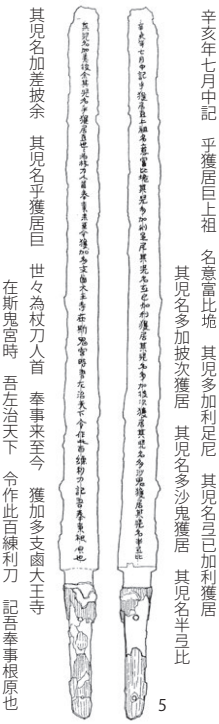
2

奈良県
石上神宮七支刀
東晋・泰（太）和 4 年
（369）



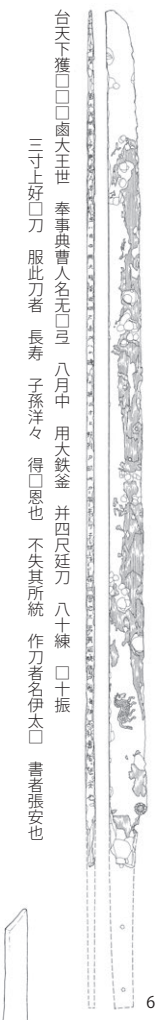
4

千葉県市原市
稲荷台 1 号墳出土鉄剣
5 世紀中葉



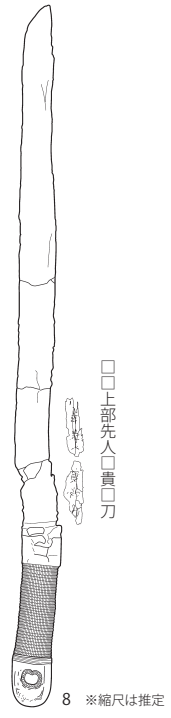
5

埼玉県
埼玉稲荷山古墳出土鉄剣
辛亥年（471）



6

熊本県
江田船山古墳
出土鉄刀
5 ～ 6 世紀



8　※縮尺は推定

韓国慶尚南道
東京国立博物館旧蔵
昌寧校洞 11 号墳
出土鉄刀
5 ～ 6 世紀



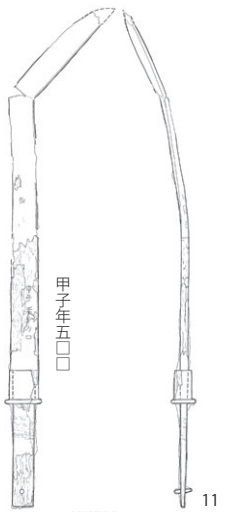
9

福岡県
元岡 G- 6 号墳
出土鉄刀
庚寅年（570）



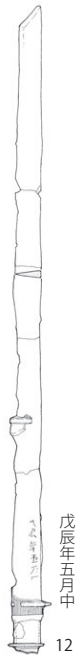
10

島根県
岡田山 1 号墳
出土鉄刀
6 世紀後葉



11

熊本県
熊本城跡出土鉄刀
甲子年（604）



12

兵庫県
箕谷 2 号古墳
出土鉄刀
戊辰年（608）

0　30 cm
（1／8）

（番号は表に対応、各出典は文末）

第 254 図　日本列島周辺の古代有銘刀剣

であるとした(11)。

先述したように、いずれの説も決定的な根拠に欠けており、中にはいささか恣意的に過ぎる解釈もあるなど、容易に首肯できるものではない。ここは、大方の見解に従って、平川氏が概報で提示した釈文が妥当であるとすべきである。

2. 記載内容について

記載内容はこの剣が王から下賜されたものであることを示す内容ということに尽きる。

「王賜」の次にくる解読不能な２文字について、平川氏は概報において、「剣の名称を示す語」、「剣の原材料を示す語」、「下賜された人物名」の３パターンを内外の類例や史料を根拠に想定しておられる。ただ、表面６文字の構成や内容からみて、人名の可能性は低いのではないかとしている。

また、平川氏は概報で、末尾の文字の残画は少ないが、「安」の文字の可能性を指摘した上で、「安」は「案」や「按」に通じることから、たとえば「按」の意でとれば熟語である「按（案）剣」の意ととれ、「剣を執る、持つ、掴む」という意味になること、さらに、「敬安」の語を「つつしんでやすんぜよ」とも読むことが可能であるとしている。いずれにせよ、「王から下賜されたこの剣をつつしんで所有せよ」というような意味にとれるとする。

次に平川氏は概報で、裏面の「廷」の文字について、江田船山古墳出土鉄刀銘文中に「廷刀」という語があることから、「廷」の文字の次には「刀」の文字が記されていたのではないかと想定している。平川氏によれば、「廷刀」という言葉は「官刀」ないしは「直刀」の意味にとれるとのことである。なお、東野治之氏は「直刀」を示す語ととり、単に「真っ直ぐな刀」とみておくのが穏当であるとしておられるが(12)、私もこの東野氏の見解に強い説得力を感じる。いずれの意味にしても文意は通じる。平川氏は概報で、仮に「廷刀」とすれば、その次には吉祥句的な文字が記された可能性をも指摘しているが、この点も首肯すべき見解と言えよう。

さらに平川氏は、表面と裏面とでは文字間が異なることや、石上神宮七支刀や埼玉稲荷山古墳出土鉄剣では表裏の文が必ずしも連続していないことを根拠に、本事例においても表裏面の文が繋がっていると必ずしも考える必要はないとしている。この点も首肯すべき見解であろう。

3. 本事例における銘文の特色について

平川氏は概報において本事例における銘文の特色として、「冒頭に年紀にかかわる記載がないこと」、「特定の王の名前が記されていないこと」、「『王』の文字を擡頭させ、『王賜』の２文字を若干太く強調させていること」、「関近くに文が表記されていること」の３点をあげている。

（1）年紀記載がない点について

中国や朝鮮半島から将来された東大寺山古墳出土鉄刀や石上神宮七支刀、国内で作製されたと考えられる埼玉稲荷山古墳出土鉄剣、元岡Ｇ−６号墳出土鉄刀、岡田山１号墳出土鉄刀、熊本城跡出土鉄刀、箕谷２号墳出土鉄刀等の事例にみられるように、冒頭に年紀を示す語が記されるものが東アジアにおける古代刀剣銘文書式の基本的なスタイルの一類型として存在していた。それらの事例からみるならば、本事例はいささか異例ともいえる。なお、江田船山古墳出土鉄刀には明確な年紀の記載はないものの、ワカタケル大王の治世下である旨が明記されている点が事実上の年紀表記に相当するものと考

えられている[13]。

年紀記載がない点について、平川氏は概報で、本銘文が特定の出来事の記念、特定氏族・人物への下賜ないしは顕彰を目的として製作されたものではなく、王からの下賜刀としてあらかじめ複数のものが製作され、必要に応じて各地の豪族たちに下賜された可能性を指摘した上で、この点こそが本銘文の性格を決定づける重要な要素であることを強調している。要するに、特定の王ではなく、代替わりした後も王からの下賜剣として使用できる可能性が想定されている。

この平川氏の指摘は、本銘文の特質を考える上で大変重要な指摘であり、その蓋然性は高いものと考えられる。ただ、現在のところ、わが国において作成された４～７世紀の有銘刀剣の類例では、そのような使用法が想定できるような事例は本例以外には見当たらない。

本事例は、銘文の冒頭に年紀ないしそれに准じる記載を有する埼玉稲荷山古墳出土鉄剣、江田船山古墳出土鉄刀、元岡Ｇ-６号墳出土鉄刀、岡田山１号墳出土鉄刀、熊本城跡出土鉄刀、箕谷２号墳出土鉄刀などの類例と比べて、若干先行する事例であると考えられている。その点からみれば、本事例に年紀の記載がない理由として、わが国で作成された有銘刀剣にある程度共通した銘文の構成要素が未だ確立する以前の段階において作製されたがゆえのことと考えられなくはない。

また、本銘文の文意の主眼はあくまでも王からの下賜剣であることを明示することにあり、そのことによって、王権や王個人との密接な関係性を下賜された所持者の権威や権力の淵源とすることを目的としたと考えるならば、下賜された年紀の記載の有無についてはあまり重要な事項ではなかったからと解釈することも可能であろう。

（２）特定の王の名前が記されていない点について

この点について平川氏は概報において、本剣を下賜された人物にとっては王名は自明であったがゆえとしている。この点も妥当な見解と言える。

また、先述したように、年紀記載がない点の理由として、王からの下賜剣としてあらかじめ複数のものが製作され、必要に応じて各地の豪族たちに下賜された可能性を平川氏が指摘している点も、具体的な王名が記されていないことの理由の可能性の一つといえよう。確かに、埼玉稲荷山古墳出土鉄剣と江田船山古墳出土鉄刀では、共に「ワカタケル大王」の名が明示されているものの、わが国古代の有銘刀剣において、具体的な王名が明記されているのは、現時点においてはこの２例のみである。この２例における銘文の記載内容は、それぞれの刀剣の所有者がワカタケル大王の治世下に「杖刀人」や「典曹人」として仕えたことを記念・顕彰する目的で記されているので、ワカタケル大王という具体的な王名が明記されることにこそ格別の意味があったのであろう。

先述したように、本銘文が示す最も重要な点は、「王から下賜された剣」であることなので、個別・具体的な王名を明記する必要はなかったとも考えられる。

この王のことを、辻本直男氏は埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘及び江田船山古墳出土鉄刀銘にみえるワカタケル大王こと雄略天皇に[14]、前之園亮一氏は允恭天皇に比定しているが[15]、それぞれ可能性は考えられなくはないものの、断定することは難しいところであろう。

（３）「王」の文字を擡頭させ、「王賜」の２文字を若干太く強調させている点について

平川氏は概報において、本銘文の主眼点が「王からの下賜刀」であることを示す点にあるので、「王」の文字を擡頭させ、「王賜」の２文字を若干太く強調させていることは、言うなれば当然の措置であ

ると見ておられるが、この点も平川氏の指摘する通りといえる。

なお、当該部分の文字を大きく太くするなど、銘文中において訴えたいことの主眼点となる文字をことさらに強調するような表現は、わが国古代における有銘刀剣の事例では、現在までのところ本事例以外には全く見られない。この点も、本事例の特徴の一つと言える。

また、擡頭されている点についても、本事例以外にわが国の古代有銘刀剣においては皆無であり、この点もあわせて、本事例の銘文における大きな特色である。なお、擡頭という表現が使われている点から見れば、銘文を作成したのは、当時の中国や朝鮮半島における文章の慣例に関する豊富な知識を有した人物であったということになろう。江田船山古墳出土鉄刀の銘文は、文末に「書者張安也」という記載があることから、渡来人によって起草されたことが確実と考えられているが、本事例の銘文起草者についても同様の可能性が考えられよう。

（4）関近くに文が表記されている点について

平川氏は概報において、剣身の関近くに銘文が記されている点は中国古代の有銘刀剣の記載方法にならったものと考えられること、さらに中国古代の有銘刀剣では鎬の両側に銘文が記されることなどの点から、本事例においてもその点を強く意識した上で、銘文が刀身の中央ではなく、敢えて右側に寄った位置に記されたのではないかとしている。

確かに、本事例以外のわが国古代の有銘刀剣で刀剣身に銘文が記されている事例では、埼玉稲荷山古墳出土鉄剣のように剣身の中央に銘文が記されているものがある一方で、岡田山１号墳出土鉄刀や箕谷２号墳出土鉄刀のように、７世紀の有銘刀剣の事例でも刀身の端に寄った位置に銘文が記されているような事例がある。また、同様に、7世紀の事例である箕谷２号墳出土鉄刀や四天王寺丙子椒林刀、８世紀の事例である東大寺大仏殿出土陰陽剣においては、銘文が刀身の関近くの位置に記されている。これら７・８世紀になって作製された有銘刀剣が、時代的にかなりかけ離れた中国・周代や春秋戦国時代の有銘刀剣の銘文の記入位置をことさらに意識した上で、刀剣身の端に寄った位置であるとか、あるいは関近くの位置に銘文が記されたとはいささか考えにくいように思われる。

本事例において、関近くの剣身の端に寄った位置に銘文が記されている点については、敢えて中国・周代、春秋戦国時代などの有銘刀剣の銘文記入位置を意識しての所作と考える必要はないように感じる。

（5）剣を下賜された者ないし剣の所有者の名が明記されない点について

石上神宮七支刀では「倭王」、埼玉稲荷山古墳出土鉄剣では「乎獲居臣（巨）」、江田船山古墳出土鉄刀では「无□（利ヵ）弖」、岡田山１号墳出土鉄刀では「各田卩臣」など、有銘刀剣には所有者（刀剣を下賜された者や造らせた者である可能性も当然ある）の名が記されたものがあるが、本事例では王からこの有銘剣を下賜され、所有した人物の名が記されていない点も本銘文の特徴の一つである。

先述したように平川氏は概報で、「賜」の下の２文字の下が「敬□（安ヵ）」と読め、「つつしんでこの剣を執る（安剣＝按剣）」あるいは「つつしんでやすんぜよ」などという意味にとれることや、銘文全体の構成や性格から判断して、冒頭の「王賜」の文字の次にこの剣を下賜された人物の名が記された可能性は少ないとしている。

また、平川氏が指摘するように、本剣が王からの下賜剣としてあらかじめ複数のものが製作されていた可能性を想定するならば、剣の作製段階において下賜する側の具体的な王名も、下賜される側の

具体的人物・氏族名も確定できるわけがなく、記入は不可能となる。本事例に、剣を下賜される側の具体的な氏族・人物名が記されていないことの理由をその点に求めることができるのではないだろうか。

なお、前之園亮一氏は、この剣を下賜され、保有した稲荷台1号墳の被葬者を刑部氏と推測しているが、あくまでも一つの可能性の範囲にとどまろう(16)。

4. 本事例における銘文の歴史的意義について

先述したように、概報において平川氏が再三にわたって指摘しているように、本事例の銘文は、この剣が王から下賜されたものであることを明示することを主たる目的として記されているという点は動かしがたいと思われる。王からの下賜品とは、すなわち、王の権威の分与を意味すると言ってよく、本事例はそのような性格を有しているわけである。その権威を明確に示しているのが、「王賜」の語にはじまる銘文の存在なのである。

平川氏は、この「王」について、「倭王権の君主としての大王」、「大王家の王族」、「倭王権を構成する中央の豪族」、「在地首長」、「新羅・百済などの朝鮮半島諸国の王」である5つの可能性を指摘しつつ、それぞれの可能性について周到に検討を加えた上で、倭王権の君主とみるのが妥当であると結論付けている。

本事例を、仮に朝鮮半島諸国の王からの下賜品とみるならば、石上神宮七支刀や、現在は史料上でしか存在が確認できない護身剣のように、銘文中に具体的な朝鮮半島諸国の国名が記されるのが自然である。本事例でそのような記載がみられない点から考えて、朝鮮半島諸国の王からの下賜品であるとは考えにくく、倭王権の君主からの下賜品とみるのが妥当と考える。

王の具体名が記されていないことの理由としては、平川氏がすでに概報で述べておられるように、下賜された人物にとっては自明のことであったからという理由や、服属した豪族たちへの王権からの下賜品としてあらかじめ複数振りが作製されたものであるという理由などを想定することができる。さらに付言するならば、下賜される側にとっては、特定の具体的な王からの下賜品であるということよりも、むしろ、王権からの下賜品であることの方により重要な意味や価値が存在していたので、敢えて個別具体的な王名が記されなくてもよく、また、記される必要もなかったからと考えることもできるだろう。

また、平川氏は概報において、本事例が比較的小規模な円墳から出土した点については、在地の大首長が倭王権の君主から下賜されたものが、さらにその配下の中小首長に二次的に与えられた可能性を考慮しつつも、本事例の銘文が埼玉稲荷山古墳出土鉄剣や江田船山古墳出土鉄刀のように、特定人物の事績を記念・顕彰したものではないことからみて、倭王権中枢と地方の中小首長が直接的な関連を有していた可能性を指摘した上で、本例は倭王権の君主から稲荷台1号墳の被葬者が直接下賜されたものである可能性を示している。すなわち、倭王権から現在の千葉県市原市付近の地を支配した中小豪族に直接下賜された可能性も否定できない点を指摘しているのである。なお、この点について東野治之氏も、王から下賜された剣がたやすく他の人物に転与されるとは考えにくいことを根拠に、稲荷台1号墳の被葬者本人が下賜されたものとの見方を示している(17)。

確かに、本事例は、稲荷台1号墳の被葬者が直接、倭王権から下賜されたものである可能性が高い

と考えられるが、いずれにせよ稲荷台1号墳の被葬者が、在地の大首長から二次的に拝領したものである可能性と、倭王権から直接下賜された可能性の両者とも、それぞれ肯定できるところである。この両説の可能性は、銘文の発見当初から諸氏によってさまざまに指摘されてきた点ではあるが、現時点においては、その両説いずれとも断定することは難しいところであろう。

なお、倭王権からの下賜刀剣であることを明確に示す銘文を有する刀剣の事例は、現在のところ本事例以外にはないため、平川氏が概報で指摘したように、王権からの下賜品として本事例のような有銘刀剣がある程度複数振りが作製されていたか否かという点についても、現時点においては残念ながら断定は難しいところである。

また、日本古代における有銘刀剣の実例の僅少さという点も問題となろう。単に、それらが鉄という地中で残存するには厳しい条件に左右される素材ゆえに遺りにくいからという理由ももちろんあろうが、日本列島におけるこれまでの古墳時代～古代の鉄製刀剣の出土事例自体は、膨大な量にのぼっている。にもかかわらず、それら古墳時代～古代の鉄製刀剣の膨大な出土事例の中で、銘文を有する事例が僅少であることからみれば、王権ないし個々の君主からの下賜品として作製された有銘刀剣の数量は、決して多くはなかったと考えるべきではないだろうか。王権ないし君主から服属者への下賜品には、当然、鏡など、刀剣以外のレガリアも想定できるところである。そうした、王権への服属者、とくに在地首長へのさまざまな下賜品の中における有銘刀剣の位置や意義という問題についても、今後、考えていかなければならないだろう。

東野治之氏は、軍防令18条に、朝敵征討に出征する将軍や遣唐大使任命の際に、赴任中に麾下に対して天皇大権の一部である生殺与奪の権限を付与することを象徴するものとしての節刀を授与する規定が存在している点について、唐令にはみられないわが国独自の規定であり、古い時代の名残としている(18)。周知のように、古代中国において将軍の派遣に際しては皇帝権力に由来する軍権・専断権付与の象徴として皇帝から斧鉞が親授された。それに対して、わが国においては斧鉞に代わるものが刀であった。また、さらに東野氏が指摘するとおり、皇位継承にあたってレガリアである三種の神器の一つとしての神剣や大刀契が相伝されてきたことや(19)、9世紀以降に皇太子の地位の象徴として相伝された壺切御剣の存在は(20)、そこに、刀剣を権威・権力を象徴する宝器と捉えるわが国独自の考え方が反映されているといえよう。東野氏が指摘されるように、有銘刀剣の存在は、わが国におけるそうした権威の象徴として刀剣を捉える思想の源流とも位置付けられ、わが国の歴史を考える上で、きわめて意義が高い重要な遺物といえるのである。

おわりに

日本古代の有銘刀剣には、文字が刀剣身に記されるものと刀棟に記されるものとがあり、さらに細かく分類するならば、剣身両面に記されるもの、剣身片面に記されるもの、刀佩表裏に記されるもの、刀佩表に記されるもの、刀佩裏に記されるものがある。刀剣身に文字が記される事例にはさらに切っ先付近から記されるものや関近くの位置に記されるなど、まちまちである。こうした点は、中国・朝鮮半島における古代の有銘刀剣にそれらさまざまな文字の記入方法が存在していたことにならってのことと考えられるが、わが国の古代有銘刀剣の実例からみれば、定型的な書式、文案、構成、文字記入位置・方法などに関する明確なセオリーは確立されていなかったと言わざるを得ない。ただし、中

国・朝鮮半島における古代有銘刀剣に共通する吉祥句、鍛錬句、護身・招福除災を願う内容[21]という要素については継受されている。

埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘にみえるような鉄剣保有者の系譜、「杖刀人」あるいは江田船山古墳鉄刀銘にみえるような「典曹人」など保有者の履歴や事績を記載する行為は、自らの権力・権威の表明でもあり、また、記念・顕彰を目的としたものでもあり、ひいては権力や権威の安寧・永続を願って記載されたと考えられる。この点は、豪族全体あるいは当事者個人の安定を願うという意味においては、護身・招福除災を願う内容や吉祥句の記載とある種共通する意図・目的に基づくものと理解することができよう。この「王賜」銘鉄剣の記載内容も、この剣が王からの下賜剣であることを明示することで、倭王権の君主との密接な関係性を顕示し、強調することによって、所持者の権威・権力を高めることを目的とした象徴的な宝器であったと位置付けることができる。それらに付与された「聖性」や「権威」の淵源の要素の一つは、そこに文字によって記された文言が存在していたことにあろう。そのように考えられるならば、文字が記された祭祀具・呪物としての後世の呪符木簡や、祭祀や儀礼の場において使用された墨書・刻書土器の機能とも通じるところがあり、ある意味、それらの源流となる文字資料の一つとさえ位置付けることが可能であろう。

9世紀以降のものと考えられる巴子国剣[22]や流廃寺出土剣[23]、さらには14～16世紀のものと考えられる山形県米沢市上杉神社に伝世された上杉謙信が佩用したと伝えられる馬祭剣[24]など、宗教的権威を有する宝器である有銘刀剣が後の時代に至るまで存在している点は、まさに吉祥句、鍛錬句、護身・招福除災を願う内容を有し、権威・権力の象徴と認識されていた古代有銘刀剣の伝統と系譜があっての結果にほかならないだろう。古墳時代には政治的な権威・権力とその正当性や永続性を明示し、担保し、象徴した宝物としての有銘刀剣の機能のうち、権威の象徴としての部分が、後世に至ってもなお、宗教的な権威を象徴する宝物として機能し続けたのであった。

また、こうした古墳時代～古代の有銘刀剣に記された銘文は、古代において、石碑と同様、「碑」と称されていたものと思われる。安永3（1774）年に因幡国法美郡稲葉郷宮下村（鳥取県鳥取市国府町宮之下）の無量寺裏山の中腹から出土し、現在も伝存する和銅3（710）年の年紀を有する伊福部徳足比売墓誌の銘文中に、金属製骨蔵器に文字を記録する行為を指して「銕に録す」と表現している[25]。これによって、少なくとも8世紀初頭の時点においては、金属製品に文字を刻むことも石碑に文章を記録することと同義にとらえられていたことが判明するのであり、4～6世紀にはまだ、日本列島には石碑という概念はなかったと考えられるものの、そのことは8世紀以前にさかのぼる可能性も否定できない。

この稲荷台1号墳出土「王賜」銘鉄剣こそ、わが国における初源期の有銘刀剣の貴重な実例として、東アジア史上における大きな史料的価値を有する重要な遺物と位置付けられるのである。

第９表　日本所在の古代有銘刀剣

	事例名	出土遺跡所在地	年代	記入方法	文字数	記入位置	銘文
1	東大寺山古墳出土鉄刀	奈良県天理市	後漢・中平年間（184 ～ 189）	金象嵌	24 文字	刀棟	「中平□□（年ヵ）五月丙午造作□□（文刀ヵ）、百練清剛、上応星□（宿ヵ）、□□□□（下避不祥ヵ）」
2	石上神宮七支刀	奈良県天理市	東晋・泰（太）和４年（369）	金象嵌	61 文字	剣身両面	（表）「泰□（和ヵ）四年□（五ヵ）月十六日丙午正陽、造百練□（銕ヵ）七支刀、□辟百兵、宜供供侯王、□□□□作」 （裏）「先世以来、未有此刀、百済王世□、奇生聖音、故為倭王旨造、□（傳ヵ）□（示ヵ）□世」 （東野氏案・表）「泰□（和ヵ）四年□（五ヵ）月十六日丙午正陽、造百錬□（鐵ヵ）七支刀、□辟百兵、宜供供侯王、□□□□作」 （東野氏案・裏）「先世以来、未有此刀、百濟王世□、奇生聖晋、故為倭王旨造、□（傳ヵ）□（示ヵ）□世」
3	護身剣	『塵袋』他、百済渡来	庚申年（420、480、540）	不明	46 文字	棟？	「歳在庚申正月、百済所造、三七練刀、南斗北斗、左青龍右白虎、前朱雀後玄武、避深不祥、百福会就、年齢延長、万歳無窮」、 （表）日形・南斗六星・朱雀形・青龍形、（裏）月形・北斗七星・玄武形・白虎形
4	稲荷台１号墳出土鉄剣	千葉県市原市	5 世紀中葉	金象嵌	12 文字	剣身両面	（表）「王賜□□敬□（安ヵ）」 （裏）「此廷□（刀ヵ）□□□」 （鈴木氏案・表）「王賜□（人ヵ）□郡□（宮ヵ）」 （鈴木氏案・裏）「此廷□（刀ヵ）□□□」
5	埼玉稲荷山古墳出土鉄剣	埼玉県行田市	辛亥年（471）	金象嵌	115 文字	剣身両面	（表）「辛亥年七月中記、乎獲居臣上祖、名意富比垝、其児多加利足尼、其児名弖已加利獲居、其児名多加披次獲居、其児名多沙鬼獲居、其児名半弖比」 （裏）「其児名加差披余、其児名乎獲居臣、世々為杖刀人首、奉事来至今、獲加多支鹵大王寺、在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也」 （東野氏案・表）「辛亥年七月中記、乎獲居臣上祖、名意富比垝、其児多加利足尼、其児名弖已加利獲居、其児名多加披次獲居、其児名多沙鬼獲居、其児名半弖比」 （東野氏案・裏）「其児名加差披余、其児名乎獲居臣、世々為杖刀人首、奉事来至今、獲加多支鹵大王寺、在斯鬼宮時、吾左治天下、令作此百練利刀、記吾奉事根原也」
6	江田船山古墳出土鉄刀	熊本県和水町	5 ～ 6 世紀	銀象嵌	75 文字	刀棟	「台（治ヵ）天下獲□□□鹵大王世、奉事典曹人名无□（利ヵ）弖、八月中、用大鉄釜、并四尺廷刀、八十練、□（九ヵ）十振、三寸上好□（刊ヵ）刀、服此刀者、長寿、子孫洋々、得□恩也、不失其所統、作刀者名伊太□（和ヵ）、書者張安也」
7	東京国立博物館蔵朝鮮三国時代鉄刀	朝鮮半島	5 世紀	銀象嵌	15 文字	刀棟	「不畏也、□令此刀主、富貴高遷、財物多也」
8	東京国立博物館旧蔵昌寧校洞 11 号墳出土鉄刀	韓国慶尚南道	5 ～ 6 世紀	金象嵌	8 文字	刀棟	「□□上部先人□貴□刀」
9	元岡 G－6 号墳出土鉄刀	福岡県福岡市	庚寅年（570）	金象嵌	19 文字	刀棟	「大歳庚寅正月六日庚寅日時作、刀凡十二果□」
10	岡田山１号墳出土鉄刀	島根県松江市	6 世紀後葉	銀象嵌	12 文字	刀佩表	「各田卩臣□□□素□大利□」
11	熊本城跡出土鉄刀	熊本県熊本市	甲子年（604）	不明	6 文字	刀佩表	「甲子年五□（月ヵ）□（中ヵ）」
12	箕谷２号古墳出土鉄刀	兵庫県養父市	戊辰年（608）	銀象嵌	6 文字	刀佩裏	「戊辰年五月中」
13	四天王寺丙子椒林刀	大阪府大阪市	丙子年（616）	金象嵌	4 文字	刀佩裏	「丙子椒林」
14	群馬県立歴史博物館蔵鉄刀	伝群馬県内出土	7 世紀？	金象嵌	6 ～ 7 文字	刀佩表	不明
15	東大寺大仏殿出土陽宝剣	奈良県奈良市	8 世紀	金象嵌	2 文字	刀佩表	「陽剣」
16	東大寺大仏殿出土陰宝剣	奈良県奈良市	8 世紀	銀象嵌	2 文字	刀佩表	「陰剣」
17	三寅剣	長野県小海町	7 ～ 8 世紀？	金銀象嵌	3 文字他	刀棟・刀佩表裏	（棟）「三寅剣」 （表）星辰（三公・三台・北斗七星）、多聞天像 （裏）梵字９文字、持国天像
18	坂上田村麿将軍剣	『昭訓門陰御産愚記』、『公衡公記』乾元２年５月９日条、『富家語』、『古事談』等	9 世紀？	金象嵌	23 文字	刀佩表裏	（表）「上上上 不得他家是以爲誓謹思」 （裏）「坂家寶剣守君是以爲名」
19	巴子国剣	『相應和尚伝』、『明匠略伝』	9 世紀？	金象嵌	不明	剣身両面？	不動明王真言
20	流廃寺鉄剣	福島県棚倉町	9 ～ 11 世紀	銀象嵌	8 文字	剣身両面	胎蔵界五仏梵字、他に火焔文様 14

文献

1　東野治之「金象嵌銘花形飾環頭大刀の銘文」（東京国立博物館・九州国立博物館編『重要文化財東大寺山古墳出土金象嵌銘花形飾環頭大刀』、同成社、2008）

2　村山正雄編『石上神宮七支刀銘文図録』、吉川弘文館、1996、東野治之「七支刀銘文の『聖音』と『聖晋』」（同氏著『日本古代金石文の研究』、岩波書店、2004）

3　東野治之「護身剣銘文考」（同氏著『日本古代木簡の研究』、塙書房、1983、初出 1980）

4　滝口宏監修、市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター編『千葉県市原市稲荷台１号墳出土「王賜」銘鉄剣概報』、吉川弘文館、1988、東野治之「稲荷台１号墳出土の王賜剣」（田中新史編『王賜剣出土 捴 稲荷台１号墳』、市原古墳群刊行会、2023）、本書所収鈴木勉氏論考

5　埼玉県立歴史と民俗の博物館編『埼玉稲荷山古墳出土国宝金錯銘鉄剣復元製作報告書』、2014、東野治之「稲荷台１号墳出土の王賜剣」（田中新史編『王賜剣出土 捴 稲荷台１号墳』、市原古墳群刊行会、2023）

6　東野治之「江田船山古墳の大刀銘」（同氏著『日本古代金石文の研究』、岩波書店、2004、初出、東京国立博物館編『江田船山古墳出土国宝銀象嵌大刀』、1993）

7　東野治之「朝鮮半島出土の単龍文環頭大刀銘」（同氏著『日本古代金石文の研究』、岩波書店、2004、初出、東京国立博物館編『修理報告有銘環頭大刀』、1992）

8　韓永熙・李相洙「昌寧校洞 11 号墳出土有銘円頭大刀」（『考古学誌』2、1990）

9　東野治之「庚寅銘大刀の銘文とその書風」（同氏著『史料学散策』、雄山閣、2023、初出、福岡市教育委員会編『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書　元岡・桑原遺跡群 30 －元岡古墳群 G－6 号墳・庚寅銘大刀の考察－』、2018）

10　島根県教育委員会編『出雲岡田山古墳』、1987

11　林田和人・三好栄太郎「熊本市出土『甲子年』銘文鉄刀について」（『令和５年度九州考古学会総会研究発表資料集』、2023）、三好栄太郎他『熊本城跡発掘調査報告書５ －整備基本計画策定に向けた千葉城地区の発掘調査－』熊本城調査研究センター報告書第７集（熊本市熊本城調査研究センター、2024）

12　八鹿町教育委員会編『箕谷古墳群発掘調査概要報告書』、1984

13　酒井元樹「七星剣・丙子椒林剣について」（四天王寺編『聖徳太子と四天王寺』、法蔵館、2021）

14　文化遺産オンライン金錯銘直刀身　https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/135247

15・16　東野治之「陽剣・陰剣の象嵌銘とその書風」（東大寺編『東大寺金堂鎮壇具保存修理報告書』、2015）

17　竹下繭子「神将図像から見た三寅剣の製作技法に関する一考察」（『文化財学報』17、1999）

18・19　水野正好「古代のまじない世界－攘災・招福・呪詛－」（岩田慶治・松前健・水野正好・福永光司・岩井宏實・五来重『神と人－古代信仰の源流－』、大阪書籍、1986）

20　東野治之「流廃寺鉄剣の梵字」（棚倉町教育委員会編『流廃寺跡金銀象嵌鉄剣科学調査報告書』、2003）

注

（1）永嶋正春「銘文発見の経緯」（滝口宏監修、市原市教育委員会・財団法人市原市埋蔵文化財調査センター編『千葉県市原市稲荷台1号墳出土「王賜」銘鉄剣概報』、吉川弘文館、1988）、田中新史「『王賜』銘鉄剣の公表と反響」（『東アジアの古代文化』1989冬58号、大和書房、1989）。

（2）平川南「銘文の解読と意義」（滝口宏監修、市原市教育委員会・財団法人市原市埋蔵文化財調査センター編『千葉県市原市稲荷台1号墳出土「王賜」銘鉄剣概報』、吉川弘文館、1988）。

（3）郭安三「千葉市原・稲荷台1号墳出土の鉄剣銘文をめぐって」（『富士短期大学 月報富士』243、1988）、市毛勲（「『王賜』銘鉄剣十四文字説」（『早大埋蔵文化財調査室月報』37、1988））、森浩一「日本の文字文化を銅鏡にさぐる」（岸俊男・森浩一・大林太良編『日本の古代別巻 日本人とは何か』、中央公論新社、1988）、森田悌「稲荷台古墳鉄剣の世界」（同氏著『古代東国と大和政権』、新人物往来社、1992）など。

（4）東野治之「稲荷台古墳の『王賜』銘鉄剣」（同氏著『書の古代史』、岩波書店、1994、初出1988）、西山要一「文字が書かれた大刀－象嵌銘文大刀－」（『考古学と自然科学』31・32、1995）、同「日本古墳時代の象嵌大刀」（西山要一・李午喜・山口誠治『日韓古代象嵌遺物の基礎的研究－日韓交流の原点をさぐる－』、1997、同「東アジアの古代象嵌銘大刀」（『文化財学報』17、東野治之「7世紀以前の金石文」（上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦編、『列島の古代史6 言語と文字』、岩波書店、2006）、前之園亮一『「王賜」銘鉄剣と五世紀の日本』、岩田書院、2013、西山要一「G-6号墳・庚寅年銘大刀が解く古代日本の象嵌大刀」（福岡市教育委員会編『九州大学統合移転校地内埋蔵文化財調査報告書 元岡・桑原遺跡群30－元岡古墳群G-6号墳・庚寅年銘大刀の考察－』、2018）、東野治之「稲荷台一号墳の王賜剣」（田中新史編『王賜剣出土 埼 稲荷台1号墳』、市原古墳群刊行会、2023）、前之園亮一「王賜剣と稲荷台1号墳の被葬者と刑部」（田中新史編『王賜剣出土 埼 稲荷台1号墳』、市原古墳群刊行会、2023）、鈴木勉『象嵌鉄刀剣銘と東アジア工人ネットワーク』、工芸文化研究所、2025など。

（5）志田諄一「『王賜』銘鉄剣について」（『東アジアの古代文化』夏・56号、1988）、金井塚良一・原島礼二「対談・『王賜』銘鉄剣と古代東国」（『東アジアの古代文化』夏・56号、1988）、大山誠一「千葉県市原市稲荷台1号墳出土『王賜』銘鉄剣について」（同氏著『古代国家と大化改新』、吉川弘文館、1988）、辻本直男「『王賜』銘の鉄剣」（『刀剣美術』375、1988）、吉村武彦「大和王権と古代東国」（『千葉史学』15、1989）、藤間生大「『王賜』剣と五世紀の大和国家」（『歴史評論』465、1989）、水野祐「稲荷山古墳出土鉄剣銘の文化史的意義と、東国古代史への一考察」（遠藤元男編『関東の古代社会』、名著出版、1989）、原島礼二「『王賜』銘鉄剣の解明」（同氏著『古代東国の風景』、吉川弘文館、1993）、黛弘道「授刀小考」（同氏著『物部・蘇我氏と古代王権』、吉川弘文館、2009）、前之園亮一「稲荷台1号墳と『王賜』銘鉄剣」、同「『王』とは誰か」、同「『王賜』銘鉄剣と上総の海部郷・海上潟」、同「稲荷台1号墳の被葬者はいかなる豪族か」、「『王賜』銘鉄剣下賜の理由と意味」（以上、同氏著『「王賜」銘鉄剣と五世紀の日本』、岩田書院、2013）、同「王賜剣と稲荷台1号墳の被葬者と刑部」（田中新史編『王賜剣出土 埼 稲荷台1号墳』、市原古墳群刊行会、2023）など。

（6）永嶋正春「『王賜』銘鉄剣のX線的調査と銘文の表出」（『国立歴史民俗博物館研究報告』50、1993）、永嶋正春「在銘鉄剣・銅印－その調査と保存活用について－」（総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史専攻・国立歴史民俗博物館編『歴史研究の最前線4 出土文字資料の新展開』、吉川弘文館、2005）。

（7）東野治之「稲荷台古墳の『王賜』銘鉄剣」（同氏著『書の古代史』、岩波書店、1994、初出1988）。

（8）郭安三氏注（3）前掲論文。

（9）市毛勲氏注（3）前掲論文。

（10）森浩一氏注（3）前掲論文。

（11）森田悌氏注（3）前掲論文。

（12）福山敏男「金石文」（同氏著『福山敏男著作集6 中国建築と金石文の研究』、中央公論美術出版、1983、初出1975）、東野治之「稲荷台一号墳の王賜剣」（田中新史編『王賜剣出土 埼 稲荷台1号墳』、市原古墳群刊行会、2023）。

（13）東野治之「江田船山古墳の大刀銘」（同氏著『日本古代金石文の研究』、岩波書店、2004、初出1993）。

（14）辻本直男「『王賜』銘の鉄剣」（『刀剣美術』375、1988）。

（15）前之園亮一「『王』とは誰か」（同氏著『「王賜」銘鉄剣と五世紀の日本』、岩田書院、2013。

（16）前之園亮一「稲荷台1号墳の被葬者はいかなる豪族か」（同氏著『「王賜」銘鉄剣と五世紀の日本』、岩田書院、2013、同「王賜剣と稲荷台1号墳の被葬者と刑部」（田中新史編『王賜剣出土 埼 稲荷台1号墳』、市原古墳群刊行会、2023）。

（17）東野治之「稲荷台古墳の『王賜』銘鉄剣」（同氏著『書の古代史』、岩波書店、1994、初出1988）、同「稲荷台一号墳の王賜剣」（田中新史編『王賜剣出土 埼 稲荷台1号墳』、市原古墳群刊行会、2023）。

（18）東野治之「稲荷台一号墳の王賜剣」（田中新史編『王賜剣出土 埼 稲荷台1号墳』、市原古墳群刊行会、2023）。なお、節刀については瀧川政次郎「節刀考」（『國學院大學政経論叢』5-1、1956）を参照。

（19）東野治之氏注（19）前掲論考、大石良材「大刀契」（同氏著『日本王権の成立』、塙書房、1975）ほか。
（20）松浦辰男「壺切御剣之事」（『史学会雑誌』19、1891）ほか。
（21）西山要一氏注（4）前掲論考。
（22）水野正好「古代のまじない世界－攘災・招福・呪詛－」（岩田慶治・松前健・水野正好・福永光司・岩井宏實・五来重『神と人－古代信仰の源流－』、大阪書籍、1986）、山下克明「陰陽道と護身剣・破敵剣」（同氏著『平安時代の宗教文化と陰陽道』、岩田書院、1996）。
（23）東野治之「流廃寺鉄剣の梵字」（棚倉町教育委員会編『流廃寺跡金銀象嵌鉄剣科学調査報告書』、2003）。
（24）西山要一「中世の銘文大刀－山形県上杉神社伝世馬祭剣にみる銘文大刀の系譜－」（『求真能動』、1987）、山下克明「陰陽道と護身剣・破敵剣」（同氏著『平安時代の宗教文化と陰陽道』、岩田書院、1996）。
（25）奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『日本古代の墓誌』、同朋舎、1979、東野治之・平川南編『よみがえる古代の碑』、歴史民俗博物館振興会、1999、高島英之「古代の碑」（上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦編『列島の古代史6 言語と文字』、岩波書店、2006）。

第254図出典（各文献より一部改変のうえ引用）
1：望月幹夫・古谷　毅他2008『東京国立博物館所蔵　重要古墳資料学術調査報告書　重要文化財　東大寺山古墳出土　金象嵌銘花形飾環頭大刀』東京国立博物館・九州国立博物館　株式会社同成社
2：鈴木　勉・河内國平2006『復元七支刀　－古代東アジアの鉄・象嵌・文字－』株式会社雄山閣、村山正雄1996『石上神宮七支刀銘文図録』吉川弘文館（※写真トレースのうえ図を合成。象嵌銘は鈴木・河内2006も参考にした）
5：埼玉県教育委員会2018『史跡埼玉古墳群　総括報告書I』
6：望月幹夫他1993『保存修理報告書　江田船山古墳出土　国宝　銀象嵌銘大刀』東京国立博物館
7：早乙女雅博他1992『修理報告　有銘環頭大刀』東京国立博物館
8：韓　永熙・李　相洙1990「昌寧校洞11号墳出土有銘円頭大刀」『考古學誌』第2輯　韓国考古美術研究所（※写真トレースのうえ図を合成）
9：福岡市教育委員会2018『元岡・桑原遺跡群30　元岡古墳群G-6号墳・庚寅銘大刀の考察』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1355集
10：島根県教育委員会1987『出雲岡田山古墳』
11：熊本市熊本城調査研究センター 2024『熊本城跡発掘調査報告書5－整備基本計画策定に向けた千葉城地区の発掘調査－』熊本城調査研究センター報告書第7集（※銘文位置は図を合成）
12：八鹿町教育委員会1987『箕谷古墳群』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第6集

第３節　稲荷台１号墳出土武器・武具の位置づけ

川畑　純（奈良文化財研究所）

１　本稿の目的と検討内容

稲荷台１号墳では中央施設・北施設の両方からいくつかの武器・武具が出土した。うち中央施設出土の１点が「王賜」銘鉄剣である。その位置づけとともに出土武器・武具の総体的な評価は、古墳出土武器・武具の社会的意義や入手・副葬の背景を考える上で極めて重要である。

本稿では稲荷台１号墳出土武器・武具の型式的な特徴を整理し、他の古墳出土例との比較検討を通じてその位置づけを明らかにする。その上で稲荷台１号墳に「王賜」銘鉄剣を始めとする武器・武具が納められた背景を考える。

２　武器・武具の様相

（１）中央施設と北施設出土武器・武具の概要

中央施設からは鉄剣３、鉄鏃10以上、短甲１が出土した(1)。

埋葬施設の遺存状態は決して良好でなく、本来他にどの程度の武器・武具が副葬されていたかの想定も難しい。短甲片とされる鉄片の中に短甲以外の甲冑（冑、頸甲、肩甲など）の可能性を積極的に想定できるものはない。甲冑は短甲のみの可能性が高いが、埋葬施設の大半が失われており短甲の遺存部位も極端に少ないため、確定はできない。鉄剣と鉄鏃についても同様に本来の点数を明らかにするのは難しい。ただし、細片が多数ある状況ではないので本来の点数が現状の数倍や十数倍に及ぶことは想定できないだろう。

北施設からは鉄刀１、鉄鏃10、胡籙１が出土した。

中央施設に比べると埋葬施設全体の遺存状態は良好であったようである。現状の資料が副葬品全体の様相をある程度反映している可能性がある。ただし上部は相当削平を受けていたとみられ、現状の資料が本来の副葬品全てであると言い切るのも難しい。

（２）鉄鏃と甲冑の概要

中央施設出土鉄鏃は長頸腸抉片刃式６点、長頸別造り片腸抉三角式２点と大型扁平な二重腸抉長三角形式２点である。二重腸抉長三角形式は根挟みを使用する短茎式である可能性は完全には否定できないが、折損部の位置からみて長い頸部に扁平で大型の鏃身部がつく長頸平根式とみられる。他に台形関をなす頸部～茎部の破片があるが、鏃身部から関部まで遺存する個体はなく、鏃長（鏃身先端から関部までの長さ）は不明である。

北施設出土鉄鏃は長頸腸抉片刃式のみで、鏃身部８点を確認できる。鏃身部から茎部まで残るものは５点で、刃部先端から関部までの長さである鏃長は10.6 ～ 11.7cmである。関部は台形関で、中央施設出土のものよりやや左右への突出が強い。

中央施設・北施設出土鉄鏃のうち、長頸腸抉片刃式の腸抉の切込みはいずれも深い。別造り片腸抉の付くものや長頸平根式があり、関部が台形関をなすことから、筆者の鉄鏃編年ではⅣ期新段階にあたる〔川畑2015〕。

甲冑は鋲留甲冑の細片がいくつかあるのみで全体は不明である。鋲頭径は7.5 ～ 8.0mmで、冑のものとしては大型に過ぎる。三角板の地板は確認できない。短甲以外の部位が存在した可能性は完全には排除できないがいずれの破片も横矧板鋲留短甲1点に由来すると考えるのが妥当である。

覆輪は鉄折覆輪である。方形4鋲金銅装の蝶番金具が遺存する破片があり、蝶番金具には蹴彫りで波状列点文を施す。この蝶番金具が残る破片は地板と帯金の重なりから前胴右脇の上部にあたるとみられる。破片数が極めて限られるため左脇にも開閉部があった可能性も残るが、蝶番板を1枚用いる通有の右脇開閉式の短甲であろう。

以上から、鋲頭径7.5 ～ 8.0mm、鉄折覆輪、右脇開閉で蝶番板1枚を用いる横矧板鋲留短甲と想定できる。第10表に方形4鋲の蝶番金具をもつ短甲の諸要素を挙げた。鉄折覆輪は全体的な傾向として革組覆輪に後出し鉄包覆輪や革包覆輪に先行する。鋲頭は小型から大型へと遷移するが、鋲頭径

第10表　方形4鋲蝶番金具をもつ短甲の様相

古墳名	形式	開閉装置			覆輪		地板形状	鋲頭径	後胴 竪上3段 鋲数	前胴 竪上3段 鋲数	段階
		蝶番	開閉部	蝶番板	上	下					
坊主塚	三鋲	方4(金)	左右	R2・L2	革組	革組	裁断(小)	小	12+(12)	2+2	7
倭文6号	三鋲	方4	右	R1	鉄包	鉄包	裁断(大)	小	14+14	3+3	
後出3号 第2主体	三横鋲	方4	右	R1	革包	革包	裁断(小)	中	9+9	1+1	8
上栢里	三鋲	長2+方4	右	R1	鉄包	鉄包	円弧状?	中?	7+7	2+2	9
真浄寺2号 2号短甲	横鋲	方4(金)	右	R2	革	革	不明	中	10+10	2+2	8
後出2号 短甲3	横鋲	方4	右	R1	革包	革包	裁断(小)	中	9+9	2+2	
宇治二子山南 2号短甲	横鋲	方4	右	R1	革包	鉄包?	裁断(小)	中	欠	2+2	
下北方5号	横鋲	方4	右	R1	革包	革包	円弧状	中	9+9	1+2	
新沢173号	横鋲	方4(金)	右	R1	鉄折	鉄折	不明	大?	8+8	2+2	9
亀山 第1埋葬施設	横鋲	方4(金)	右	R1	革包	革包	—	中	8+8	欠	
塚原鎧塚	横鋲	方4(金)	右	R2	鉄包	鉄包	不整形	中	(9?+9?)	1+2	
新沢109号	横鋲	方4	右	R1	鉄折	鉄折	不明	中	7+8	1+1	
入西石塚	横鋲	方4	右	R1	革包	鉄包	不整形	中	7+7	欠	
原山西手	横鋲	方4	右	R1	革組	革組	円弧状	中	7+7?	2+2?	
生野山	横鋲	方4	右	R1	鉄包	鉄包?	不整形	中	7+9	1+2(2+2)	
イヨダノヤマ3号	横鋲	方4	右	R1	鉄包	鉄包	不明	中	7+7	2+2	
稲荷台1号 中央施設	横鋲	方4(金)	右？	R1	鉄折?	鉄折?	不明	中	欠	欠	
月の木1号 1号木棺	横鋲	方4	右	R1	鉄包	鉄包	裁断(小)	大	6+8	2+2	10
新沢281号	横鋲	方4	右	R1	革包	鉄包	円弧状	大	欠	2+2?	
稲童8号	横鋲	方4(金)	右	R1	革包	鉄包	円弧状	大	(7+7)	2+2	
六野原1号地下式	横鋲	方4	右	R1	革包	革包	不明	大	7+7	欠	
鶴山 1号短甲	横鋲	方4	右	R1	革包	革包	不明	大	7+7	2+2	
一の谷	横鋲	方4	右	R2	鉄包	鉄包	不整形	大	7+7	2+2	
西都原4号 3号短甲	横革	方4(金)	右	R1？	革包	革包	不整形?	—	7+7	1+2？	
正崎2号	横鋲	方4(金)	右	R1	革包	鉄包	円弧状	大	(7+7)	1+2	
狐山	横鋲	方4	右	R1	革包	鉄包	不明	大	7+7	1+2	
池殿奥5号	横鋲	方4	右	R2	鉄包	鉄包	円弧状	中	7+7	1+1	
江田船山 2号短甲	横革	方4	右	欠	革組?	革組?	円弧状	—	6+6	欠	11
武具八幡	横鋲	方4	右	R1	鉄折	鉄折	不整形?	大	6+6	2?	
小木原1号地下式	横鋲	方4	右	R1	革包	鉄包	不整形	大	6+6	1+2	
供養塚	横鋲	方4	右	欠	革組	鉄折?	不整形	大	6+6	1+1	
後出3号 第1主体	横鋲	方4	右	R1	鉄包	鉄包	不整形	大	5+5	1+1	
烏山2号	横鋲	方4	右	R1	鉄包	鉄包	不整形	大	5+5	1+1	
扇森山	横鋲	方4	右	R1	革包	革包	不整形	大	4+4	1+1	12
高塚横穴	横鋲	方4	右	R1	鉄包	不明	不整形	大	4+4	1+1	
中原(沢野村72号)	横鋲	方4	右	R1	鉄包	鉄包	円弧状	大	欠	3+3	

形式は三鋲：三角板鋲留、三横鋲：三角板横矧板鋲留、横鋲：横矧板鋲留、横革：横矧板革綴。蝶番は方4：方形4鋲、方2：方形2鋲。その他は〔川畑 2025〕による。

7.5 ～ 8.0mmは中型鋲に該当する。こうした諸特徴を勘案すれば、中央施設出土短甲は筆者の短甲編年のうち９期にあてはまる〔川畑2025〕。

方形4鋲の蝶番金具を用いる一群には蝶番を金銅装とする事例が多い。そのうち京都府坊主塚古墳・福岡県真浄寺２号墳２号短甲・兵庫県亀山古墳第１埋葬施設・福岡県稲童８号墳・宮崎県西都原４号地下式横穴３号短甲・岡山県正崎２号墳例では蝶番金具に蹴彫りで施文する。金銅装蝶番金具は短甲全体でみると比較的数が限られるものだが、方形４鋲の蝶番金具を用いる系統に多くの事例が集中する。なお同系統の短甲では冑や頸甲・肩甲を伴わず短甲のみで副葬された事例も多い。その点からも中央施設の短甲は冑や頸甲・肩甲と組み合わず、短甲１点のみが副葬されたと考えて問題はない。

（３）甲冑と鉄鏃の編年的位置づけ

第11表に古墳時代中期中葉から末にかけての甲冑出土古墳について、甲冑各部位の細分を示した。分類の詳細は〔川畑2025〕による。配列は古相の短甲をもつものを上とし、短甲の段階が同じものは冑や錣、頸甲が古相のものを上とした。合わせて鉄刀の刀身幅による分類〔齊藤2024〕と、鉄鏃のうち長頸鏃の鏃長を示した。鉄鏃は鏃身部の形から長頸三角式・長頸柳葉式・長頸腸抉片刃式の３種に区分し、いずれも別造り片腸抉の付くものも含む。

短甲が６期から11・12期へと新しくなるにつれ、衝角付冑・眉庇付冑・錣・頸甲の型式も大きな矛盾なく古相から新相へと変遷する。鉄刀は刀身幅ａ～ｄの各型式が混在する事例がありつつも、須恵器TK208型式期にはｂ式とｃ式が主体となり、TK23・47型式期にｄ式が定型化するとされる〔齊藤2024〕。早い段階にｃ式やｄ式がみられる事例もあり、中期末にもａ・ｂ式があるので単一例だけの評価は難しい場合もあるが、全体的な傾向として中期中葉以降ａ・ｂ式を主体とする段階からｃ式が一般化する段階、ｄ式が一般化する段階へと、甲冑とも整合的に推移する。

鉄鏃は中期中葉の新段階で長頸鏃が導入される。導入当初の長頸鏃は鏃長が15cm以上と著しく長いものが多く、その後鏃長は漸次短くなる〔鈴木2003・西岡2005〕。また、長頸鏃導入当初は長頸腸抉片刃式は認められない。第11表で示したうち長頸鏃出現後については、鏃長13cm以上が主体で長頸腸抉片刃式を含まない段階、鏃長13cm以上が多く長頸腸抉片刃式を含む段階、鏃長11 ～ 13cmが主体の段階、鏃長12cm以下で9cm以下のものも多くみられる段階と推移することがわかる。

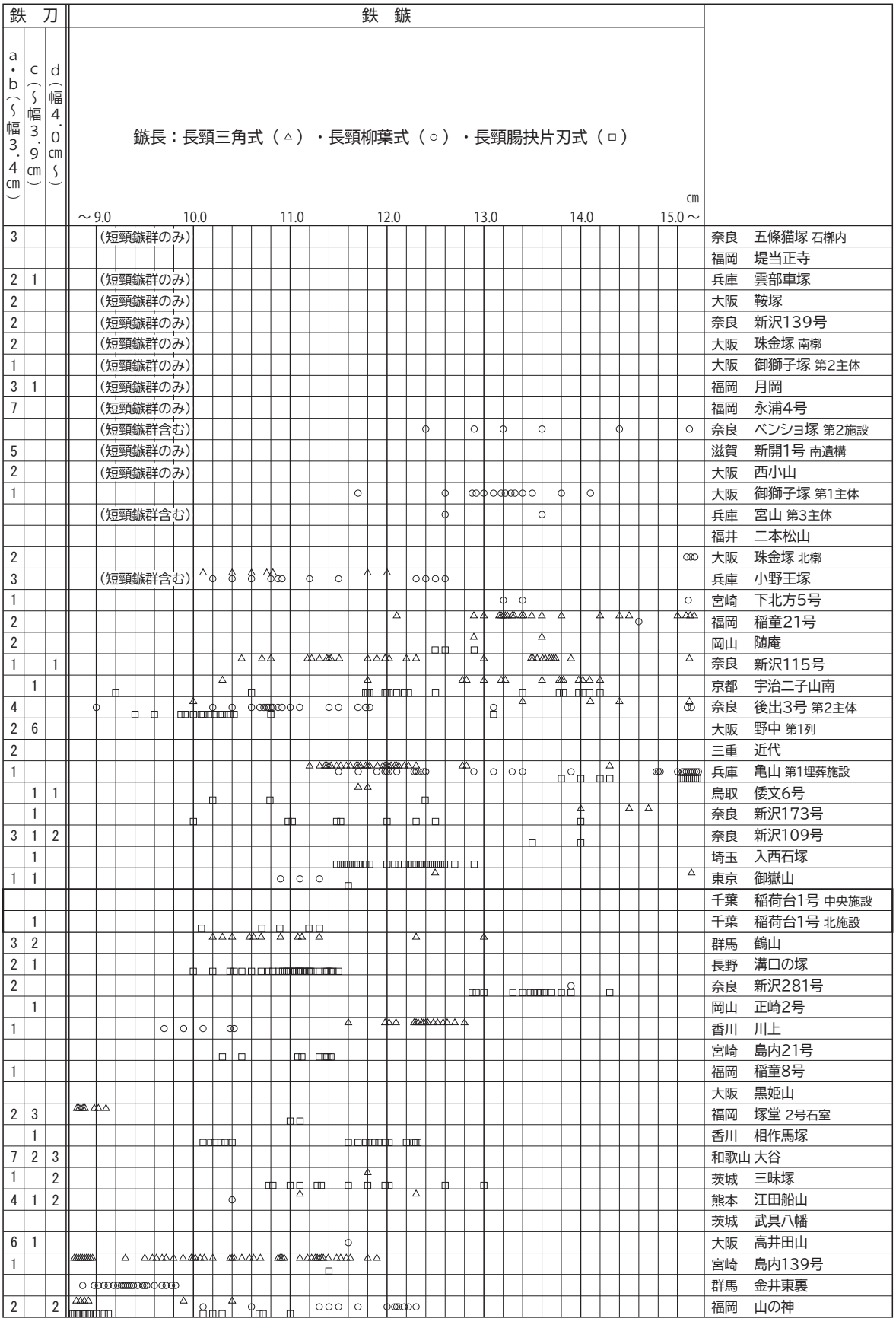
稲荷台１号墳中央施設は短甲９期で、鉄鏃は鏃長が不明だが長頸腸抉片刃式を含み短甲９期ごろのものとして矛盾はない。北施設の鉄刀は関部幅3.7cmのｃ式で、長頸腸抉片刃式の鏃長は10.1 ～ 11.3cmである。短甲９期の鉄鏃は鏃長12cm以上のものが多く、北施設の鉄鏃はむしろ短甲10期から11・12期でも古相の事例に近い。表では中央施設と北施設は隣接した位置に示したが、北施設は鉄鏃からみて中央施設よりも１段階新しく、表中さらに下に配列する方がより適当である。

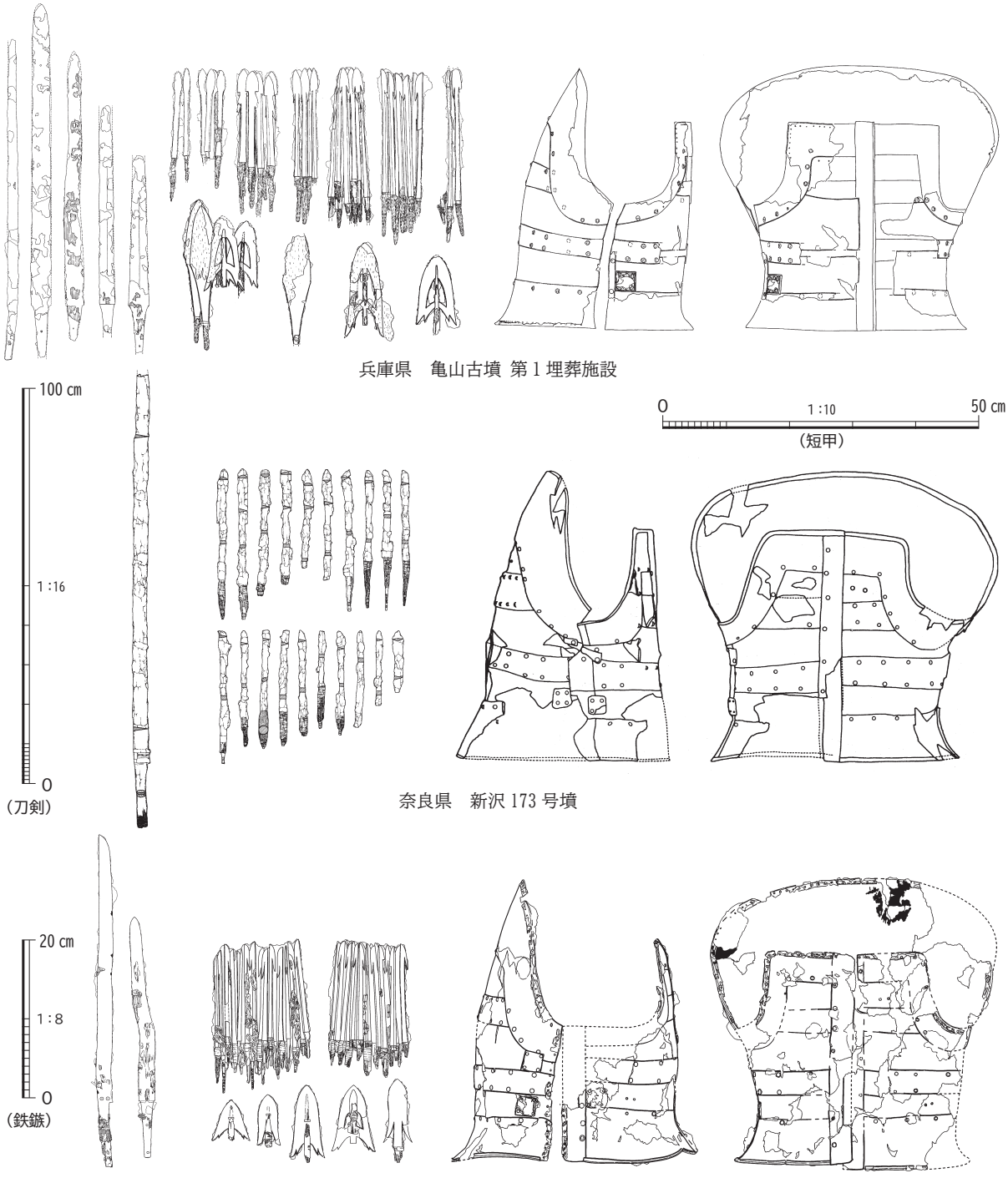
表では共伴する須恵器の位置づけを示していないが９期の短甲はおおむねTK208型式期にあたる。その実年代観は５世紀第３四半期のうち前半である〔川畑2025〕。北施設の鉄鏃は１段階新しいTK23型式期、５世紀第３四半期でも後半の可能性が高い。同時期の甲冑出土古墳として兵庫県亀山古墳、奈良県新沢173号墳、埼玉県入西石塚古墳などがある（第255図）。中央施設出土武器・武具の全貌もおおむねそれらの古墳に近いものであっただろう。

第 11 表　古墳時代中期後半の武器・武具の内容と組み合わせ

	短甲							札威甲			札式付属具	衝角付冑							眉庇付冑				錣					頸甲				肩甲	
	～5期	6期	7期	8期	9期	10期	11・12期	Ⅰ類	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類	Ⅴ類		上接1～3	上内接	上下接	内接1・2	外接(古)	内接3	外接(新)・一連	無透A・B／葉文A	三角A1・A2・B1・B2	葉B／レンズA・B(古・中)	三角A3・C／レンズA・B(新)	2～4群	5群	6群	7群	札錣	3・3z式	4式	5a式	5b・6式	段数	1枚あたり幅
奈良　五條猫塚 石槨内	②										■												○					○				–	3.3~3.5
福岡　堤当正寺		■										■											■						■			12	2.8±
兵庫　雲部車塚	○											■											■						■				
大阪　鞍塚		■											■										■						■			8+	2.4~3.0
奈良　新沢139号		■																		■			■						■			11	3.0±
大阪　珠金塚 南槨	■	■										■	2										■							■		–	2.3~
大阪　御獅子塚 第2主体		■																		■				■						■		–	
福岡　月岡	○									○	■								■				○							■		–	1.8~2.1
福岡　永浦4号		■																	■						■			■				17+	2.0~2.8
奈良　ベンショ塚 第2施設		■																	■						■								
滋賀　新開1号 南遺構	■	2	■									■							■	■	■		■	■	■					■		15?	
大阪　西小山			■					■											■					○				○				–	
大阪　御獅子塚 第1主体			■										■												■					■		7	3.0
兵庫　宮山 第3主体			■											■											■				○			7+	
福井　二本松山			■																	■					■					■			
大阪　珠金塚 北槨			■																														
兵庫　小野王塚	■			■																■			■							■		13	2.6~4.1
宮崎　下北方5号			■	■							■									■					■			○					札　式
福岡　稲童21号			■	■							■										■				■			■					札　式
岡山　随庵				■											■										○					■			
奈良　新沢115号				■											■													■				12+	
京都　宇治二子山南				2					■		■					■									■						■	9	札　式
奈良　後出3号 第2主体				■																													
大阪　野中 第1列	■	2	■	4	■																4	2			■					■			○
三重　近代					■							■											■								■	10+	
兵庫　亀山 第1埋葬施設					■						■										■				■								
鳥取　倭文6号			■													■										■							
奈良　新沢173号					■																												
奈良　新沢109号					■																												
埼玉　入西石塚					■											■									■						■		3.5
東京　御嶽山					2																												
千葉　稲荷台1号 中央施設					■																												
千葉　稲荷台1号 北施設																																	
群馬　鶴山		■				■										■					■				2				2			14+	
長野　溝口の塚				■		■											■								○				■			11	3.3
奈良　新沢281号						■									■											■				■		11?	
岡山　正崎2号						■					■																						札　式
香川　川上						■											■									■					■	7	3.6~4.0
宮崎　島内21号						■								■												■							
福岡　稲童8号						■											■									■							札　式
大阪　黒姫山			2	3	8	■	2							■		3		■			2				○					■			○
福岡　塚堂 2号石室					②		■		■		■				■											○							
香川　相作馬塚							■															■			■					■		9?	3.0~3.6
和歌山 大谷							■		■									○															
茨城　三昧塚							■			■								■									■							
熊本　江田船山							2										■								■					■			2.7
茨城　武具八幡							■			■											○					○					■	10	3.4±
大阪　高井田山							○				■															■					■	11+	3.4~3.7
宮崎　島内139号							■									■										■					■	12	
群馬　金井東裏										■																	■						
福岡　山の神																		■															

甲冑各部位の分類は〔川畑2025〕による。網掛け中の数字は点数。○は分類を確定できないが、当該分類の可能性が高いもの。


鉄刀
鉄鏃
a・b（～幅3.4cm）
c（～幅3.9cm）
d（幅4.0cm～）
鏃長：長頸三角式（△）・長頸柳葉式（○）・長頸腸抉片刃式（□）
～9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0～
cm
3 （短頸鏃群のみ） 奈良 五條猫塚 石槨内
福岡 堤当正寺
2 1 （短頸鏃群のみ） 兵庫 雲部車塚
2 （短頸鏃群のみ） 大阪 鞍塚
2 （短頸鏃群のみ） 奈良 新沢139号
2 （短頸鏃群のみ） 大阪 珠金塚 南槨
1 （短頸鏃群のみ） 大阪 御獅子塚 第2主体
3 1 （短頸鏃群のみ） 福岡 月岡
7 （短頸鏃群のみ） 福岡 永浦4号
（短頸鏃群含む） 奈良 ベンショ塚 第2施設
5 （短頸鏃群のみ） 滋賀 新開1号 南遺構
2 （短頸鏃群のみ） 大阪 西小山
1 大阪 御獅子塚 第1主体
（短頸鏃群含む） 兵庫 宮山 第3主体
福井 二本松山
2 大阪 珠金塚 北槨
3 （短頸鏃群含む） 兵庫 小野王塚
1 宮崎 下北方5号
2 福岡 稲童21号
2 岡山 随庵
1 1 奈良 新沢115号
1 京都 宇治二子山南
4 奈良 後出3号 第2主体
2 6 大阪 野中 第1列
2 三重 近代
1 兵庫 亀山 第1埋葬施設
1 1 鳥取 倭文6号
1 奈良 新沢173号
3 1 2 奈良 新沢109号
1 埼玉 入西石塚
1 1 東京 御嶽山
千葉 稲荷台1号 中央施設
1 千葉 稲荷台1号 北施設
3 2 群馬 鶴山
2 1 長野 溝口の塚
2 奈良 新沢281号
1 岡山 正崎2号
1 香川 川上
宮崎 島内21号
1 福岡 稲童8号
大阪 黒姫山
2 3 福岡 塚堂 2号石室
1 香川 相作馬塚
7 2 3 和歌山 大谷
1 2 茨城 三昧塚
4 1 2 熊本 江田船山
茨城 武具八幡
6 1 大阪 高井田山
1 宮崎 島内139号
群馬 金井東裏
2 2 福岡 山の神



第 255 図　刀剣・鉄鏃・短甲の諸例

3　「王賜」銘鉄剣の復元をめぐって

（1）「王賜」銘鉄剣の形態

中央施設出土の「王賜」銘鉄剣は、接点のある剣身部3点と遊離した剣身部1点、剣身部との接点のない茎部1点からなる。剣身部3点の現存長は56.5cm、最大幅3.3cm、茎部の現存長9.95cmである(2)。最大の特徴である象嵌銘は剣身部の関部寄りと一部遊離した剣身部の破片にある。全長は出

土時の所見から73cmほどと想定されている。

欠損のため剣身部と茎部の長さ、すなわち全長の復元は出土時の所見に拠らざるを得ないが、その復元は銘文の文字数にも関わり重要である。これまで剣身部と茎部の長さは「5世紀頃の全長70cm前後の鉄剣では、その全長に占める茎の長さの比率はほぼ決まっており、約30例を検討するとすべて15.8～22.2％の間におさまる。（中略）表面の文字を6字と想定し（中略）剣身長59.5cm、茎長13.5cm、全長73.0cmにこの剣を復元しておきたい。」〔市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター（編）1988　14頁〕、「茎長にはばらつきがあって平均化は困難で、身と茎の比率は全長の22～16％（20％前後）と幅があり、復元には可能性の最も高い形とした」〔田中2023　162頁〕と復元されている。

「王賜」銘鉄剣を構成する破片のうち、接点のある剣身部3点の現存長は55.8cmで、鋒を僅かに欠くがその長さは3mm程度とみられる。「敬□（安ヵ）」の銘がある遊離した剣身部の位置の復元は厳密には不可能である。破片の形から「王賜」と「敬」の間が2文字以上であることは間違いない。「敬□（安ヵ）」の後にどの程度の文字が続いたかは確定できない。すなわち、遊離した剣身部は剣身部上半から現状の復元よりも離れる可能性は否定できないが、より近づく可能性は排除できる。

「敬」に続く字の下半が欠けているとして鋒からそこまでの長さは58.5cmに復元できる。その上で遊離した破片がより剣身部から離れる可能性、銘文がまだ続いていた可能性が残ることから剣身長58.5cm以上とできる。

（2）同時期の鉄剣の形態との比較

第12表に、第11表に示した古墳のうち短甲9期とその前後の段階（8～10期）の出土鉄剣の全長・剣身長・茎長・剣身幅を示した。第256図には第12表に基づき、剣身長・茎長の関係および剣身長と剣身幅の関係を示した。

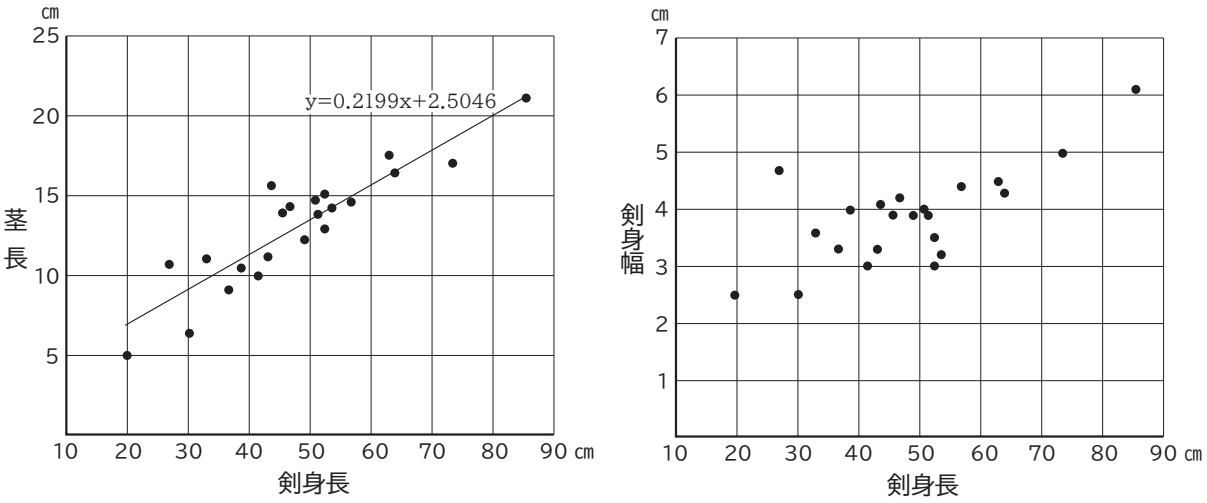
まず第256図左の剣身長と茎長の関係をみると、若干のばらつきはあるが両者の長さは正の相関を良好に示す。今、xを剣身長、yを茎長とすると、その近似曲線（線形近似）は$y = 0.2199x + 2.5046$と表される。

「王賜」銘鉄剣の全長は出土時の所見から73cmほどとされるので、仮に$x + y = 73$とすると$x = 57.79$、$y = 15.21$（小数第3位四捨五入）となる。剣身長57.79cm、茎長15.21cmである。これは遺存部分から導き出される剣身長58.5cm以上に対してやや剣身部が短く茎部が長い。

剣身部の最短値である$x = 58.5$とすると、

第12表　鉄剣の計測値

古墳名	報告書等番号	全長	剣身長	茎長	剣身幅	備考
小野王塚	剣1	71.5	56.9	14.6	4.4	
	剣2	45.8	36.7	9.1	3.3	槍ヵ
	剣3	24.6	19.7	4.9	2.5	槍ヵ
下北方5号	剣1	80.5	63.0	17.5	4.5	
	剣3	106.6	85.5	21.1	6.1	
稲童21号	3	54.2	43.1	11.1	3.3	
随庵	3	59.5	45.6	13.9	3.9	
	4	44.0	33.0	11.0	3.6	
新沢115号		49.1	38.7	10.4	4.0	
宇治二子山南	2	37.7	27.0	10.7	4.7	槍ヵ
	3	36.5	30.2	6.3	2.5	
野中　第1列	7	65.2	51.4	13.8	3.9	
	9	61.3	49.1	12.2	3.9	
	10	65.5	50.8	14.7	4.0	
新沢109号	109-1	59.3	43.7	15.6	4.1	
入西石塚		61.0	46.7	14.3	4.2	蛇行剣
御嶽山	1	67.8	53.6	14.2	3.2	
	2	44.1	33.1	11.0	3.6	
鶴山	2	80.4	64.0	16.4	4.3	
溝口の塚		51.4	41.5	9.9	3.0	
新沢281号		65.4	52.5	12.9	3.0	
正崎2号		90.5	73.5	17.0	5.0	
川上		67.6	52.5	15.1	3.5	



第 256 図　鉄剣の剣身長・幅と茎長

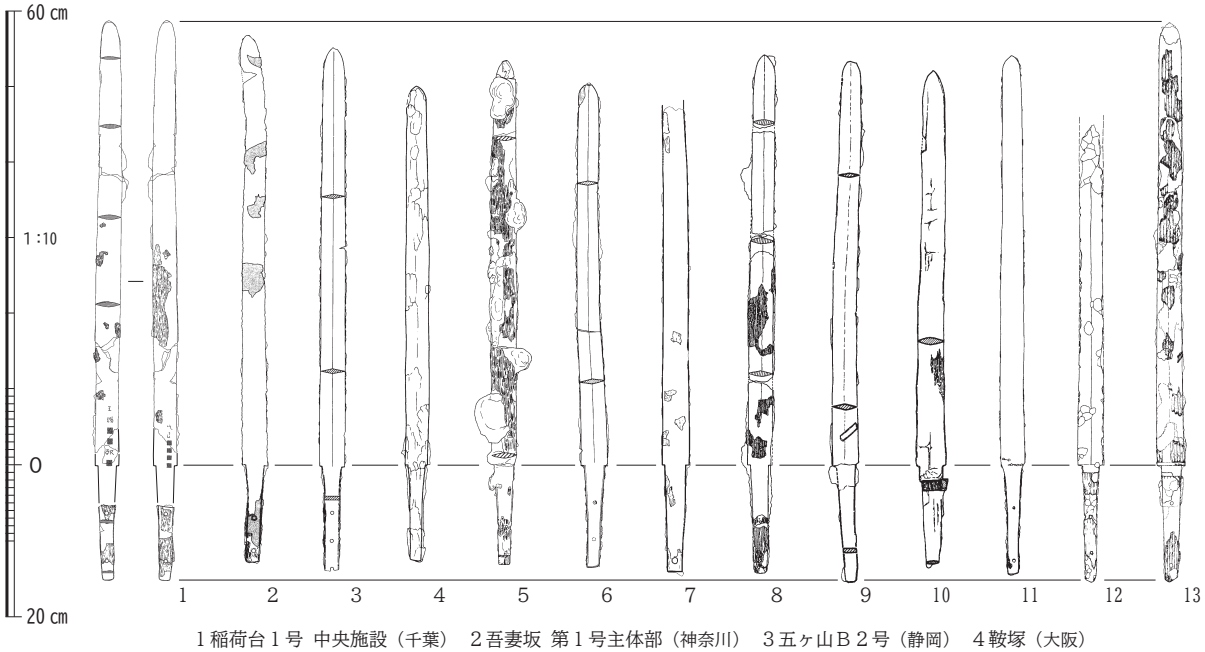
y＝15.37（少数第３位四捨五入）、x＋y＝73.87となる。全長73.87cm、剣身長58.50cm、茎長15.37cmである。出土時の所見に対し全長が8.7mm伸びるが、「王賜」銘鉄剣は茎部あたりで根攪乱を受けておりやや乱れた形で出土したことに鑑みれば、出土時の所見との誤差は極めて小さい。

第256図右に示した剣身長と剣身幅の関係では、こちらは個体差がやや大きいが両者は緩やかに正の相関を示す。「王賜」銘鉄剣の剣身幅3.3cmに近いものは剣身長55cm以下が主体である。すなわち「王賜」銘鉄剣は剣身長58.5cm以上に対して剣身幅がかなり狭い。翻って考えれば、剣身幅3.3cmであることから剣身部が58.5cmを超えてさらに伸びる可能性は低い。

古墳時代中期の鉄剣には剣身幅が3.0cm程度の長身の類例がいくつかある。第257図にそれらを示す。九州から関東まで全国的に類例を見出すことができ、また古市古墳群中の大阪府鞍塚古墳からの出土も認められる。規格としては決して多くはないが、地方生産品などの可能性は低く、一般的な長剣とともに畿内倭王権周辺で生産され全国各地に流通したものとみてよい。

第257図では「王賜」銘鉄剣は全長73.9cm、剣身長58.5cm、茎長15.4cmとして関部を復元し、茎部を配置した。第257図に示した他例は剣身長50～55cm、茎長13～14cm程度が中心である。「王賜」銘鉄剣は細身長身の鉄剣の一群中においても特に剣身が長いことがわかる。そのため茎部も他例よりも長く復元できることに矛盾はない。

上記として「王賜」銘鉄剣を復元すると、その形態は埼玉稲荷山古墳第１主体部出土の金錯銘鉄剣（第257図−13、全長73.5cm、剣身長58.0cm、茎長15.5cm、剣身幅中央で3.15cm、関部で3.8cm）に極めて近似することがわかる。埼玉稲荷山古墳の金錯銘鉄剣の茎尻は圭頭状に突出し、関部も「王賜」銘鉄剣よりも幅広である。稲荷台１号墳と埼玉稲荷山古墳では築造時期も異なる。こうした違いもあり、両者の関係を殊更強くみるのも難しい。しかし、希少な象嵌銘をもつ点で共通し、さらに数の限られる細身長身の鉄剣の中でも特に形が近似することからすれば、どちらも当初から銘文を刻む特注の鉄剣として作られた可能性を想定できる。この場合、そうした規格が稲荷台１号墳の段階に既に成立していたことになる。この想定が認められるならば、「王賜」銘鉄剣は埼玉稲荷山古墳の金錯銘鉄剣と同じく倭王権との関係の中で製作され、この地に副葬されたことになるであろう。



1 稲荷台 1 号 中央施設（千葉） 2 吾妻坂 第 1 号主体部（神奈川） 3 五ヶ山Ｂ 2 号（静岡） 4 鞍塚（大阪）
5 御獅子塚 第 1 主体（大阪） 6 永浦 4 号（福岡） 7 東耕地 3 号（埼玉） 8 御嶽山（東京） 9 川上（香川）
10 新沢 281 号（奈良） 11 後出 6 号（奈良） 12 江田船山（熊本） 13 埼玉稲荷山 第 1 主体部（埼玉）

第 257 図 「王賜」銘鉄剣と類例

以上、「王賜」銘鉄剣は全長74cm弱程度となる可能性があること、その場合にも剣身長は59cm程で、現状の復元より大きく伸びる可能性は低いとする復元案を示した。すなわち表面に刻まれた銘文は「王賜□□敬□（安ヵ）」の６文字との想定を追認できる。裏面についても既存の想定が大きく変わることは無いであろう。

4 まとめ―稲荷台 1 号墳出土武器・武具の評価

稲荷台１号墳出土の武器・武具の位置づけをおこなった。中央施設の武器・武具の時期は中期後葉にあたり、須恵器ではTK208型式期となる。北施設も近い時期とみられるが、中央施設よりも一段階新しく、中期末のTK23型式期となる可能性がある。

刀剣のうち「王賜」銘鉄剣の復元形を検討した。現状の復元の妥当性をおおむね追認し、剣身（銘文）がさらに長くなる可能性は排除できることを示した。また当初から銘文を刻むことを想定した特注品として倭王権周辺で作られた可能性を指摘した。一方で、その他の刀剣・鉄鏃・短甲は当該時期の武器・武具としては一般的なものであることを確認した。

攪乱のため本来はさらに多くの副葬品が含まれていた可能性は否定できないが、現状確認できる武器・武具は当時の甲冑保有階層（比較的高位の武器・武具保有層）のものとしては通有の一群である。そうした中に「王賜」銘鉄剣が含まれることは、中央施設に副葬された他の武器・武具も、同様の脈絡の中で一括して入手された可能性を示す。他方の北施設は古墳時代中期に多くの古墳でみられる複数の埋葬施設に武器・武具が副葬される事例の一つである。中央施設との関わりを考えれば、当該時期の地域における有力者間の権力構造とそこにおける軍事の位置づけを考える上で重要である。

以上、稲荷台１号墳出土武器・武具は「王賜」と表される背景の中で生産・流通されたものである。

古墳時代中期後葉における倭王権による武器・武具の生産と各地への流通の実態、地方有力者との関係を示すものであり、当時の政治的状況と器物授受の形を考える上で極めて重要な資料である。

註

（1）古墳時代前期から中期にみられる鉄板を綴付けまたは鋲留して形成する甲は従来考古学研究において短甲と呼ばれているが、板甲と呼ぶべきとする意見がある〔宮崎1983、近藤1985、橋本2001・2022など〕。筆者も古代の甲冑を総合的に理解する上では考古学的な用語である古墳時代の短甲は板甲とするべきと考える。ただし本稿では報告の名称との混乱を避けるため短甲とする。

（2）〔市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター（編）1988〕による。

参考文献

市原市教育委員会・市原市文化財センター（編）1988 『「王賜」銘鉄剣 概報 千葉県市原市稲荷台1号墳出土』 吉川弘文館

江原昌俊（編） 2013 『東耕地遺跡（1～5次）・東耕地3号墳』 東松山市発掘調査報告書第30集 東松山市教育委員会

甲斐孝司（編） 2004 『永浦遺跡』 古賀市文化財調査報告書第35集 古賀市教育委員会

川畑 純 2015 『武具が語る古代史 古墳時代社会の構造転換』プリミエ・コレクション60 京都大学学術出版会

川畑 純 2025 『古墳時代の甲冑と軍事構造』考古学選書8 同成社

菊地芳朗 2023 「刀剣報告」『王賜剣出土 鉾 稲荷台1号墳』 上総国分寺台遺跡調査団 pp.67-69

県立さきたま資料館（編） 1980 『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会

小林謙一・花谷 浩（編） 1991 『川上・丸井古墳発掘調査報告書』 長尾町教育委員会

近藤好和 1985 「文献記録の挂甲に関する一試考」『史学研究集録』第10号 國學院大學日本史学専攻大学院会 pp.93-100

西藤清秀・吉村和昭・佐々木好直（編） 2003 『後出古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第61冊 奈良県教育委員会

齊藤大輔 2024 「刀剣ヤリ鉾」『中期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会 pp.93-104

末永雅雄（編） 1991 『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』 由良大和古代文化研究協会

鈴木一有（編） 1999 『五ヶ山B2号墳』 浅羽町教育委員会

鈴木一有 2003 「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 pp.49-70

立花 聡・森 幸三・菱田哲郎ほか 2006 『玉丘古墳群Ⅱ－亀山古墳2・笹塚古墳』 加西市埋蔵文化財調査報告57 加西市教育委員会

伊達宗泰（編） 1981 『新沢千塚古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊 奈良県立橿原考古学研究所

田中新史（編） 2023 『王賜剣出土 鉾 稲荷台1号墳』 上総国分寺台遺跡調査団

西岡千絵 2005 「計測値からみた短頸鏃と長頸鏃」『古文化論叢』第53集 九州古文化研究会 pp.47-61

西川修一（編） 2004 『神奈川県厚木市 吾妻坂古墳 出土資料調査報告』 厚木市教育委員会

西田道世（編） 2007 『菊水町史 江田船山古墳編』 菊水町史編纂委員会

橋本達也 2001 「弥生から古墳時代の甲冑系譜と形式論」『古代武器研究』vol.2 古代武器研究会 pp.79-83

橋本達也 2022 「古墳時代の甲冑・軍事組織・戦争」『古代武器研究』vol.17 古代武器研究会 pp.79-95

藤野一之（編） 2020 『入西石塚古墳出土遺物整理報告書』 坂戸市教育委員会

松崎元樹 1997 「世田谷区御嶽山古墳出土遺物の調査」『学習院大学史料館紀要』 第9号 pp.1-44

宮崎隆旨 1983 「文献からみた古代甲冑覚え書き―「短甲」を中心として」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室 pp.321-350

宮崎隆旨 2006 「令制下の史料からみた短甲と挂甲の構造」『古代武器研究』vol.7 古代武器研究会 pp.6-18

柳本照男 2005 「御獅子塚古墳」『新修 豊中市史』第4巻考古 豊中市

第255・257図は各報告書から引用の上筆者作成。他の図表は筆者作成。図引用外の報告書は割愛した。本稿の一部には科学研究費補助金（「初期国家形成期における山城地域の地域開発と地方政体の成長に関する包括的研究」研究課題：23K21999）を使用した。

第 4 節　稲荷台 1 号墳北施設出土胡籙・鉄鏃・提砥の位置づけ

土屋　隆史（宮内庁書陵部）

はじめに

「王賜」銘鉄剣が出土した古墳として有名な稲荷台 1 号墳中央施設であるが、同じ古墳の北施設からは胡籙や提砥のように朝鮮半島系とされる器物が出土している。これらには被葬者の活動履歴が反映されており、稲荷台 1 号墳を考える上で重要な器物である。本稿では類例との比較を通して、胡籙、胡籙に収納される鉄鏃、提砥の系譜的位置づけを中心に検討する。

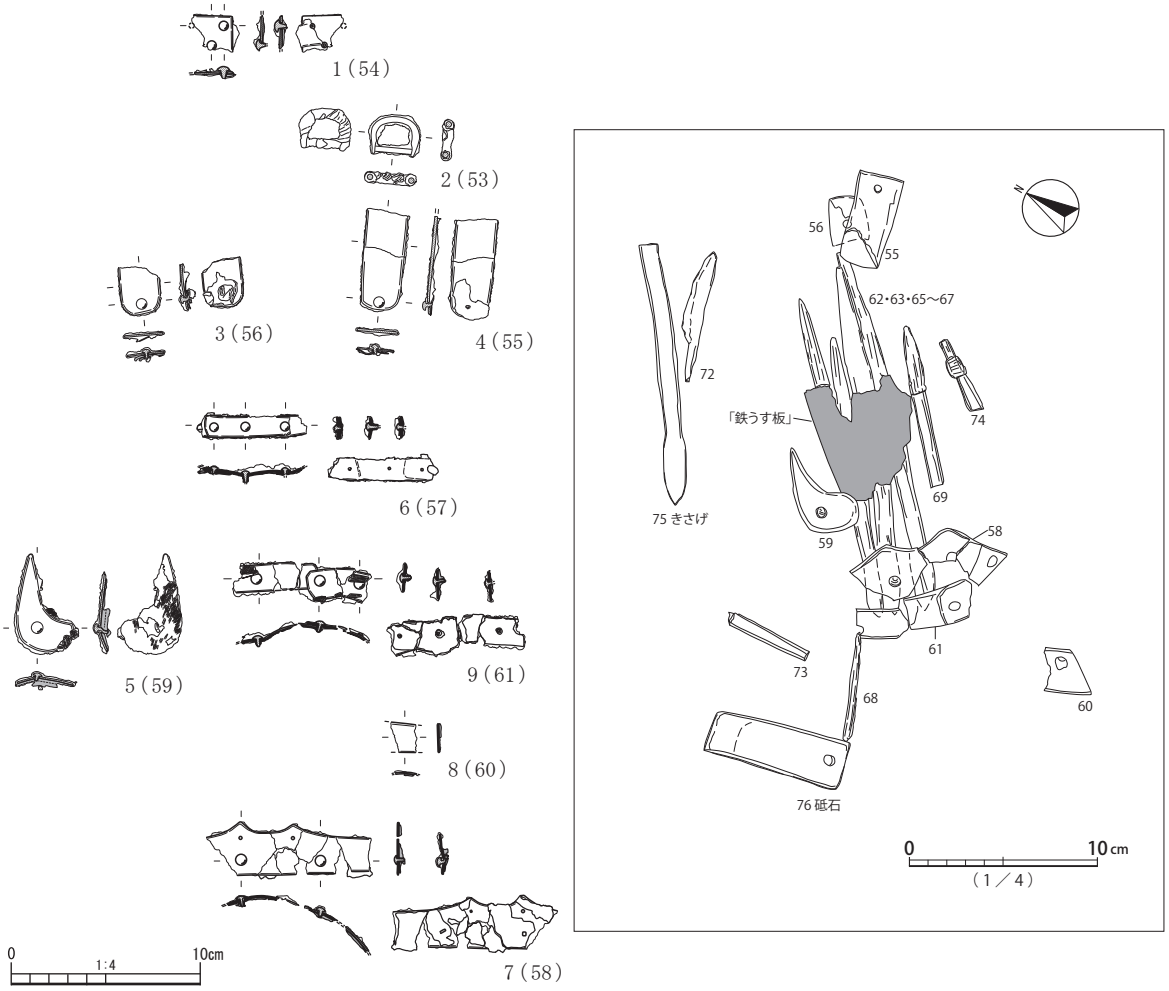
1. 胡籙の特徴

（1）胡籙金具の特徴（第 258 図）

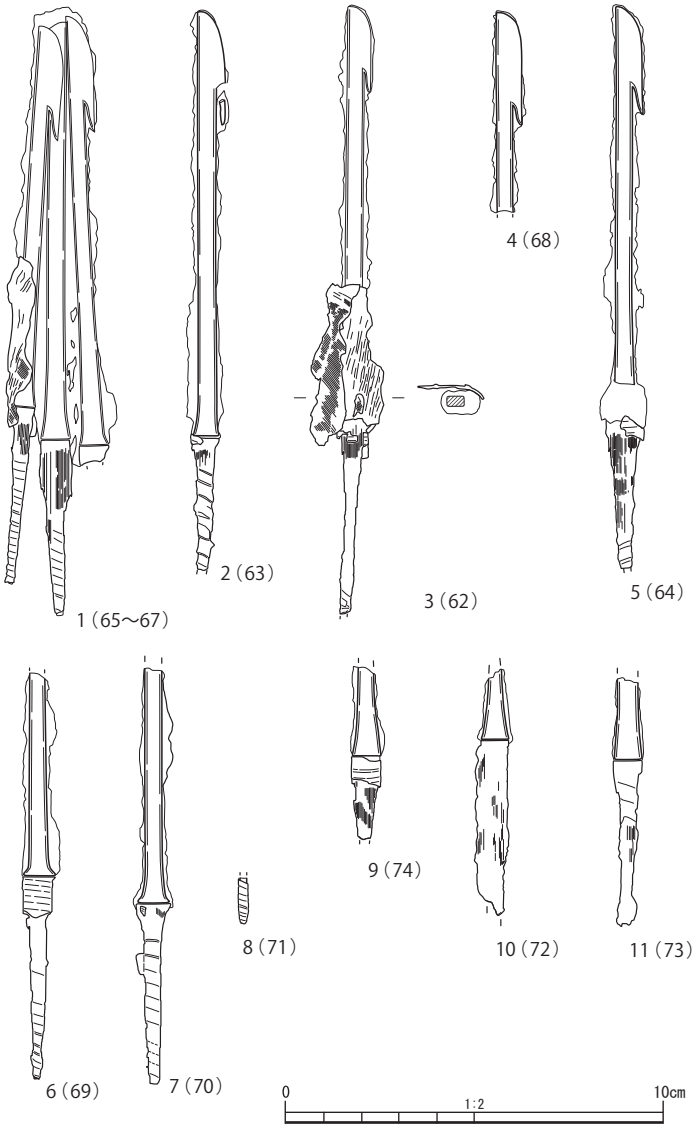
胡籙金具は北施設から出土した。以下、観察所見、元興寺文化財研究所による分析報告書、X 線 CT 画像の解析結果の内容をふまえて、特徴を述べる。

①帯金具

1 は帯金具の銙板であると考えられる。欠損しており、吊手金具上端の可能性もあるが、鋲配置からみて、元々は方形であり鋲は計 5 点はあったと推定される。銹化が進んでおり、肉眼観察では材質



第 258 図　稲荷台 1 号墳北施設出土胡籙金具と出土状況図



第 259 図　稲荷台 1 号墳出土胡簶に伴う鉄鏃

の判断が難しい。分析報告書によると金具下側の破断面からは、金、水銀、銅、鉄が検出されており、鉄地表面に銅を付加する下処理を伴う鉄地金鍍金の可能性が指摘されている。また、鍔板のＸ線CT画像からは金具と鋲頭が質量密度の高い物質で被覆された状況が確認されている。これらをふまえると、鍔板と鋲は鉄地金鍍金である可能性が考えられる。1の裏面では毛皮が確認された。

②吊手金具

２～４が吊手金具の破片であり、肉眼観察では全て鉄製にみえる。2は鋏具である。刺金がなく、筆者分類でいう鋏具3類である（土屋2018a）。鋏具には有機質が多く付着している。図右側の有機質は織物であり、絹製の可能性がある。また図左側の有機質は革(1)である。これらの有機質は、腰と吊手金具を繋ぐ帯の痕跡であろう。残存する有機質からみて、帯は革を織物で巻いた構造であったと推定される。

3、4は吊手金具下端の破片である。丸くなっており、下端に1点の鋲が打たれている。また他の部分には鋲はみられず、鋲間隔が広かったことがわかる。3の鋲脚は裏側で曲げることで有機質に留められているようである。なお、左右の個体は出土状況に基づいて決めた。

吊手金具の中間部分が欠損しているため、双方中円形か短冊形かの正確な形態は不明であるが、残存部位では括れ部分がみられないことから、短冊形の可能性が高いと判断した。

吊手金具裏面には有機質が付着している。3の裏面には、鋲脚まわりを中心に革、毛皮の順に確認されている。４の裏面には毛皮が付着している。

③勾玉状金具

5は頭部が楕円形を呈する特徴的な形態である。頭部と尾部間の長さは約5.4cmである。頭部には鋲が1点打たれている。鋲が打たれた頭部箇所は幅広く、頭部先端と鋲の中心を結んだ線の長さは1.9cmである。裏面には毛皮が付着している。鋲脚は裏側で曲げることで毛皮に留められているようである。鋲脚箇所では毛の繊維が2層確認された。金具表面の上縁側にも同様の毛の繊維がみられる。

④収納部金具

6～9は断面半円形の帯形金具である。7は山形突起が2箇所で確認できる。9は同じ金具の後側部分であり、左右の金具が重ねられている。鋲留されているが、左右の金具の鋲孔の位置がずれており、右側の金具のみに鋲脚が貫通しているようである。出土状況からみて、これらは収納部金具下縁の金具である。

6は収納部金具の後側部分である。同部位の金具は9が既にあり、金具幅が狭いことから7～9とは別の収納部金具であろう。収納部上縁に装着される金具であると推定される。

6～9の裏面には、表側からみて金具、革、直線状物質、毛の面を表にした毛皮の順で有機質が確認される。これらにみられる鋲は曲げられずに留められているようである。

（2）収納された鉄鏃に付着する有機質

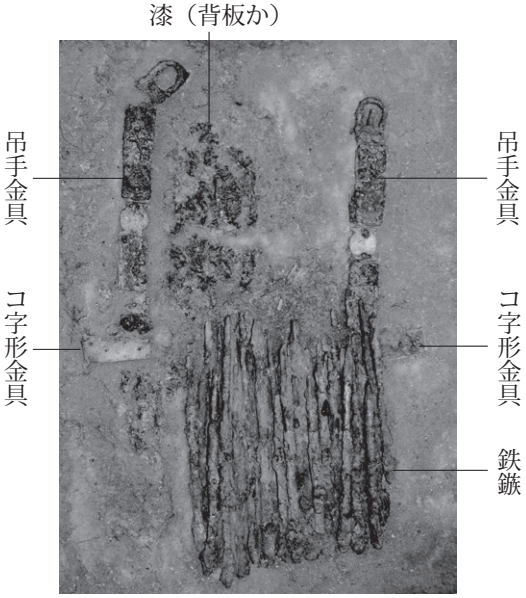
稲荷台1号墳北施設から出土した胡簶は、矢鏃が収納された状態で検出された（第258図）。鉄鏃は長頸腸抉片刃式であり（第259図）、鏃身部が下向きになるように収納されている。この鉄鏃には、鉄鏃、毛皮、直線状物質の順に付着している。付着範囲は第258図の出土状況図でいう「鉄うす板」に相当する。直線状の物質はおそらくは羽であり、漆で固められたようにみえる。付着範囲からみて、この羽は収納部の表側に付いていたようである。これは収納部の毛皮の上に付けられたものであろう。羽が付いた金属製品として、大和5号墳出土不明鉄製品（甲冑類か）がある（加藤・土屋2024、土屋2025a）。

（3）胡簶形態の復元案

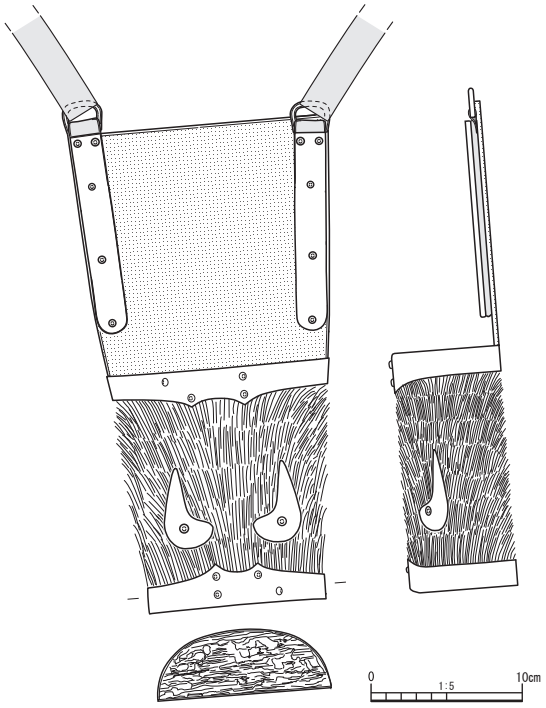
収納部金具の裏面にみられる有機質は、金具、革、直線状の物質、毛の面を表にした毛皮の順で確認されている。毛皮で構成される胡簶本体に、金具と金具幅の革帯が装着されたと考えられる。また、直線状の物質は鉄鏃に付着している羽と同じものであろう。羽は漆で固められているようにみえる。有機質の付着順序からみて、収納部の毛皮外側に羽が付けられ、漆で固められていた可能性がある。さらに、収納部後側に付く6と9の内側にも毛皮と羽が付着していることから、収納部は前側と後側ともに毛皮と羽で作られていたようである。

加えて、背板に付けられていたと考えられる吊手金具の裏面にも毛皮が付着していることから、背板も毛皮で作られていた可能性がある。背板の材質がわかる事例は少なく、例えば福井県天神山7号墳第1主体部例（福井市1990）からは背板の有機質に塗られた漆と考えられるものが検出されているが（第260図）、類例は少なく、本例は希少な事例であるといえる。他にも、吊手金具上端の鋲具には織物と革が付着しており、鋲具から織物巻の革帯が腰に繋がっていたと考えられる。

金具と有機質の情報をふまえ、第261図のように胡簶形態の復元案を示した。吊手金具は下端のみが残存しているため詳細な形状の復元は難しいが、ここでは鉄製であり、鋲配置や間隔も類似している千葉県花野



第260図　福井県天神山7号墳第1主体部例



第 261 図
稲荷台 1 号墳北施設出土胡簶の復元形態案

井大塚 1 号古墳出土胡簶の吊手金具をモデルにした。ただ吊手金具は双方中円形である可能性もある点は注意が必要である。また、この時期の吊手金具は基本的に右側が短くなる。これは吊手金具右側と腰を繋ぐ帯を左側よりも短くすることで、収納された矢の矢筈側を後ろに傾けて、取りやすくする工夫であるが（土屋2018b）、同様の吊手金具の長さの差が花野井大塚 1 号古墳出土胡簶金具にもみられる。僅か2mmではあるが、右側吊手金具が短くなっており、また出土状況をみると、右側吊手金具がやや下側に位置している（第265図3）。本例でも右側吊手金具の装着位置をやや下側にずらしている。

また収納部金具は、山形突起が2箇所でみられる羅州伏岩里丁村古墳 1 号石室例（第263図4）をモデルとした。収納部金具の上縁は後側しか残存していないが、下縁と同様の形態であると推定した。上縁の後側の金具は幅狭であることから、上縁の収納部金具は下縁の収納部金具と比べてやや幅狭にした。収納部金具の上下は出土状況図をもとに決めている。なお、帯金具は腰帯に付けたものと考えられるが、吊手金具の鋲具から伸びた帯とどのように繋がるのか確認できていないため、復元形態案には含めていない。

（4）製作時期

①製作時期が同じと考えられる事例

本例の吊手金具は筆者の分類でいう短冊形B1類（外形：短冊形、材質：鉄製、鋲配置：1類）である可能性が高い（土屋2018a,2024）。欠損部分があるため双方中円形2類である可能性もあるが、ここでは短冊形B1類の類例を確認する。同様の属性をもつ類例としては、烏山水清洞 4 地点25号木棺（第263図1）、兵庫芝花14号墳SX1401、長野宮垣外遺跡SK18土壙墓、宮崎島内地下式横穴77号、千葉花野井大塚 1 号古墳、長野月の木 1 号墳第 2 埋葬施設、岡山法蓮40号墳例（第262図 1 ～ 6）が挙げられる（第13表）。

また鉄地金銅張製ではあるが、山形突起が2箇所でみられる事例として、羅州伏岩里丁村古墳 1 号石室例（第263図4）がある。和歌山県大谷古墳例も同様である可能性があるが、欠損しているため詳細は不明である。

これらは属性の共通性からみてとくに近い製作時期が推定され、筆者の編年でいう日本列島Ⅱ段階（TK208 ～ TK23型式期）にあたる。

②製作時期が古い、あるいは新しいと考えられる事例

吊手金具　双方中円形、短冊形B類吊手金具に共通する変化の方向性として、軸受構造：軸受有→軸受無、鋲具形態：鋲具1類→3類がある。また短冊形B類吊手金具は鉄製→鉄地金銅張製へと変化する。

第 13 表　短冊形Ｂ類吊手金具の諸属性・共伴金具と変化の方向性

古墳名	吊手金具									収納部金具	
	材質		軸受構造		鋲配置		鋲具形態		分類	Ｂａ類	Ｂｂ類
	鉄	鉄金	軸受有	軸受無	１類	２類	２類	３類			
烏山水清洞４地点25号墳周溝附木棺	○		○		○		○		１類		
兵庫芝花14号墳SX1401	○		○		○			○		○	
長野宮垣外遺跡SK18土壙	○		○		○			○			
千葉稲荷台１号墳北施設	○				○			○		○	
宮崎島内地下式横穴77号墓	○			○	○					○	
千葉花野井大塚１号古墳	○			○	○					○	
長野月の木１号墳第２埋葬施設	○			○	○						
岡山法蓮40号墳	○			○	○			○		○	
京都井ノ内稲荷塚古墳		○		○		○			２類		○
京都坊主山１号墳		○		○		○		○			○
大阪芝山古墳		○		○		○					○
香川王墓山古墳		○		○		○					
愛媛経ヶ岡古墳		○		○		○					
福岡田野瀬戸４号墳		○		○		○					○
大分飛山23号横穴墳		○		○		○					○

〔凡例〕鉄金：鉄地金銅張

材質：鉄地金銅張製、鋲配置：２類、軸受構造：軸受無の事例として京都坊主山１号墳、京都井ノ内稲荷塚古墳、香川王墓山古墳例など多数が挙げられ（第13表）、筆者編年でいうⅢ段階前半（TK47～MT85型式期）にあたる（土屋2023）。これらは本例よりも製作時期が新しいと考えられる。

収納部金具　山形突起は１箇所→２箇所→３箇所と変化すると考えられる（土屋2018b）。鉄製で山形突起が１箇所に付く帯形金具は、宮崎島内地下式横穴77号墓（第262図３）、千葉花野井大塚１号古墳（第262図４）、鹿児島祓川29号地下式横穴例が挙げられる。また、これらは収納部金具が下縁のみに装着される事例であり、上・下縁に金具が装着されたと考えられる本例とは異なる。山形突起が３箇所に付き、収納部上・下縁に装着される事例は、京都坊主山１号墳、京都井ノ内稲荷塚古墳例などにみられる特徴である。

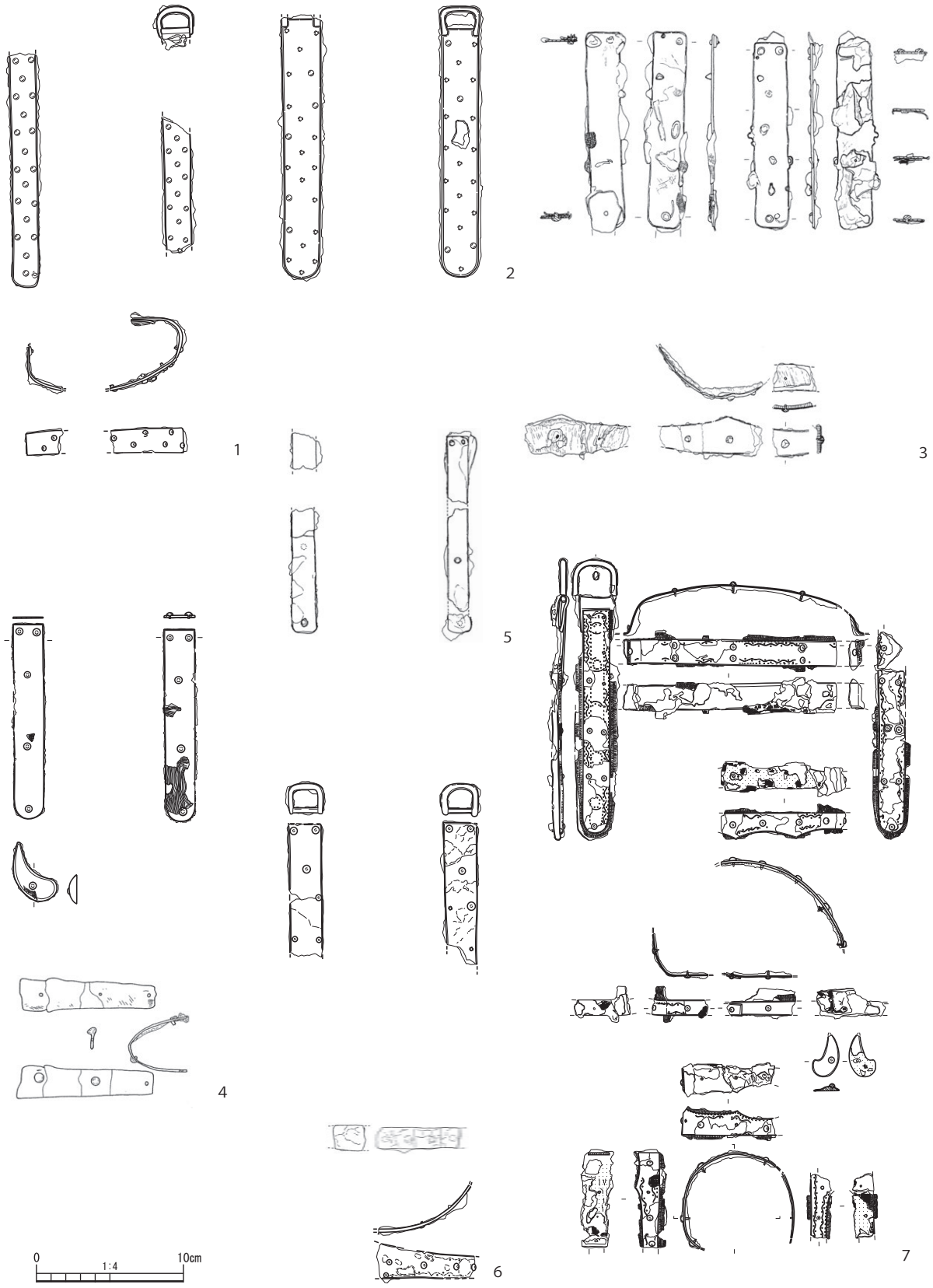
このように、本例はⅢ段階の胡籙金具の原初的な特徴をもつものであるといえる（土屋2018b）。筆者の編年でいうⅡ段階に含められるが、Ⅱ段階の中でも新しい特徴をもつものであろう。

（５）系譜

①吊手金具

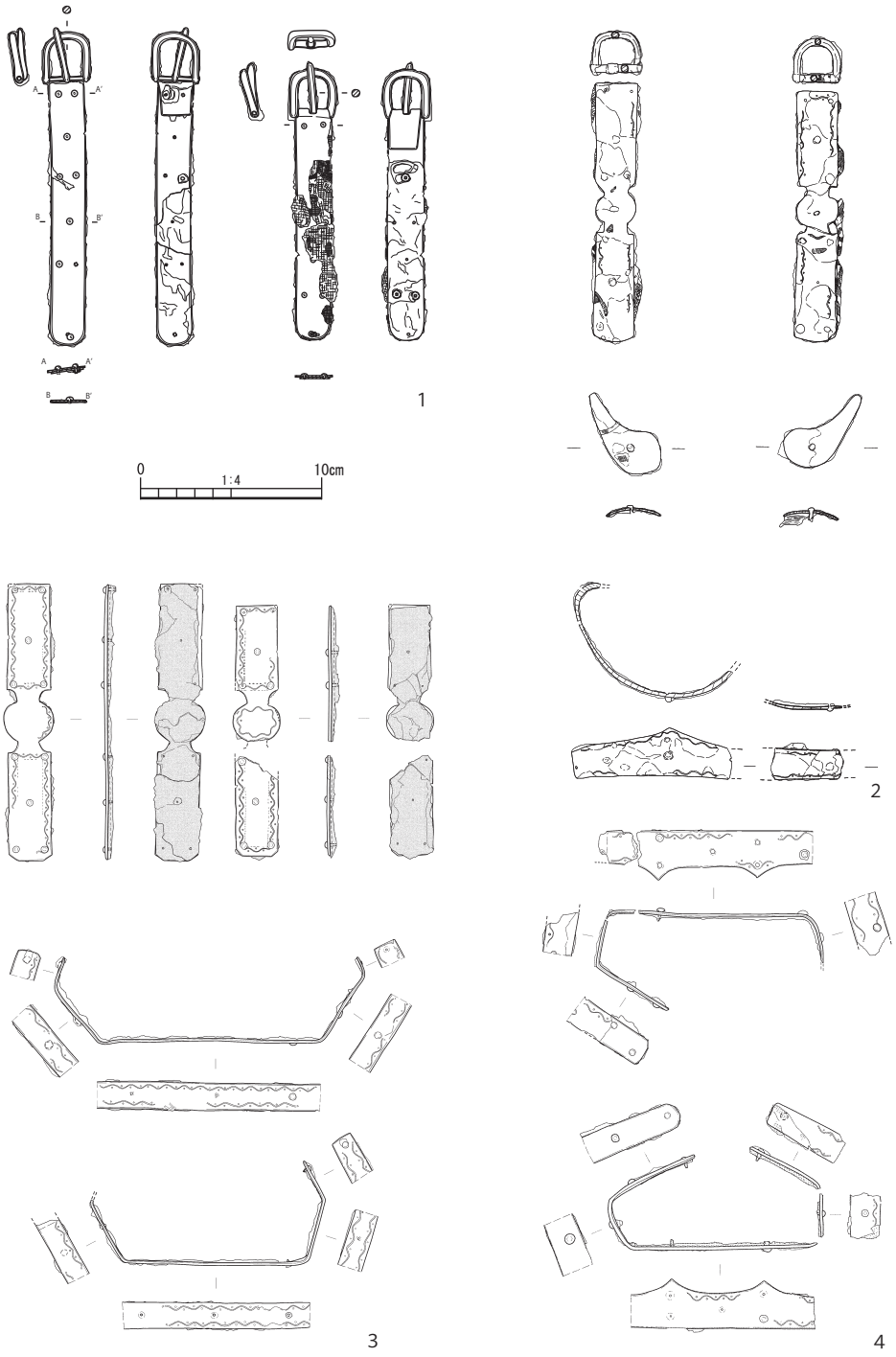
第13表でも挙げたとおり、近い属性をもつ短冊形B1類吊手金具の大部分は日本列島で出土している。分布状況では日本列島製であるようにもみえるが、朝鮮半島南部でも烏山水清洞４地点25号木棺例（第263図１）が確認できる。これは百済製であると考えられ、出土古墳の時期は５世紀中～後葉頃のものである。日本列島における短冊形B1類吊手金具の出現時期とほぼ同時期であり、日本列島出土例が百済に由来する可能性が考えられる（土屋2018a）。

なお、短冊形を呈する吊手金具は、中国中原地域と三燕地域においても一定数が確認される（土屋2025b）。例えば中国中原地域においては４世紀前葉～４世紀末頃の事例である西安梁猛墓例、三燕地域においては４世紀後葉～５世紀前葉頃の事例である北票 喇嘛洞'1988 出土品（喇嘛洞村古墓）例、415年前後の事例である北票 馮素弗墓（１号墓）例が挙げられる（第264図）。これらが百済における短冊形吊手金具の祖形となる可能性がある。現状では、三燕地域、中国中原地域の胡籙金具が直接的に本例に影響を与えた可能性は考えにくいが、今後の資料が増加すれば、系譜関係がより明確になる



1. 兵庫芝花 14 号墳 SX1401　2. 長野宮垣外遺跡 SK18 土壙墓　3. 宮崎島内地下式横穴 77 号墓
4. 千葉花野井大塚 1 号古墳　5. 長野月の木 1 号墳第 2 埋葬施設　6. 岡山法蓮 40 号墳　7. 京都坊主山 1 号墳

第 262 図　稲荷台 1 号墳出土胡籙金具の類例と関連資料（日本列島）



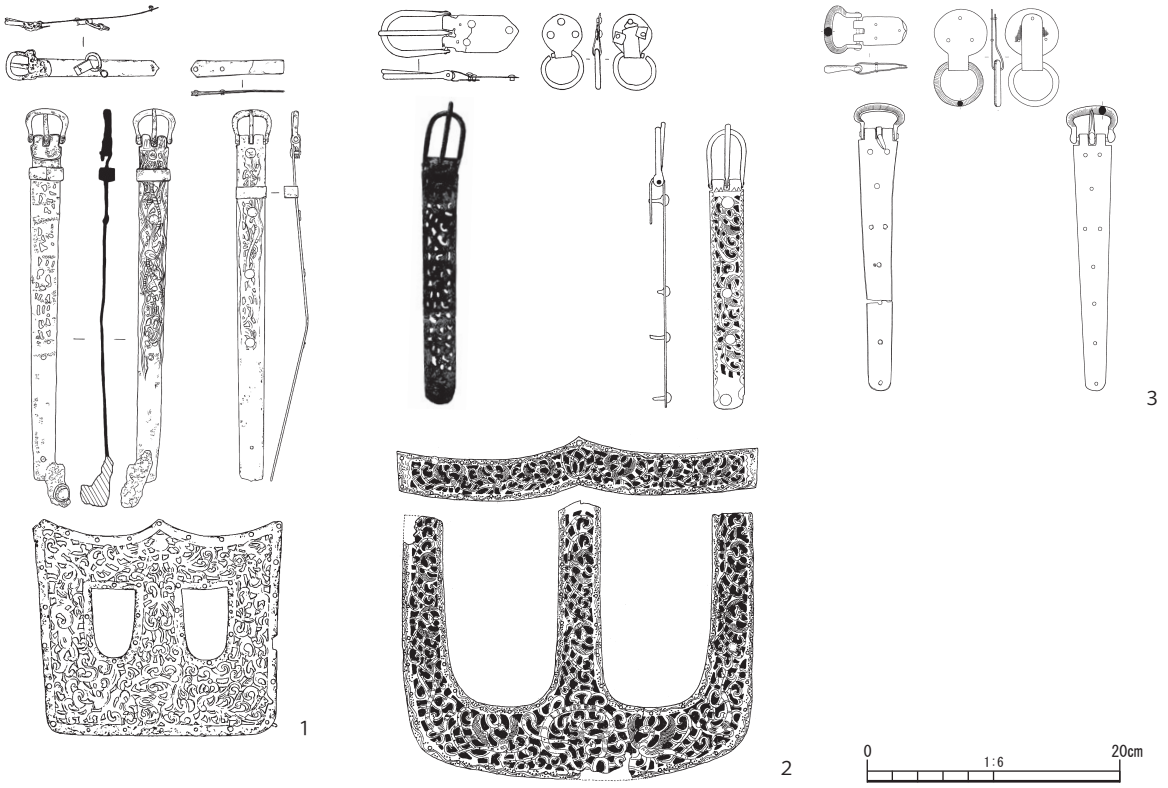
1. 烏山水清洞 4 地点 25 号木棺　2. 高敞鳳徳里 1 号墳 4 号石室　3, 4. 羅州伏岩里丁村古墳

第 263 図　稲荷台 1 号墳出土胡籙金具の類例と関連資料（朝鮮半島南部）

と考えられる。

②収納部金具

本例の収納部金具は鉄製であるが、鉄地金銅張製で形態が類似したものは大加耶地域と百済地域で確認されている（土屋2018a）。具体的には、高霊池山洞（嶺文）Ⅰ-55号墳、陜川玉田5号墳、陜川玉田70号墳、高敞鳳徳里1号墳4号石室（第263図2）、長水東村里28号墳1号石槨、昌原茶戸里B1号墳周溝8区例が挙げられる。とくに本例でみられる山形突起が2箇所でみられる事例は、現状



1.西安 梁猛墓　2.北票 喇嘛洞 '1988 出土品（喇嘛洞村古墓）　3.北票 馮素弗墓（1号墓）

第 264 図　中国における胡籙金具　短冊形 B1 類吊手金具の祖形の可能性がある事例

では類例として羅州伏岩里丁村古墳1号石室例（第263図4）が挙げられるのみであり、これは大加耶に系譜が求められるものであると考えられる（土屋2018b）。これらをふまえると、本例が大加耶に由来する可能性もまた考えられる。

③勾玉状金具

本例は筆者の分類でいう円頭形に含められ、やや変形したものであると考えられる。円頭形勾玉状金具は朝鮮半島南部において主に東側、新羅・大加耶に多くみられ（土屋2018a）、これらの地域からの影響が考えられる。

本例のように、頭部が楕円形を呈する形態の勾玉状金具の事例として千葉県花野井大塚1号古墳例（第262図4）、頭部と尾部間の長さが大きな事例として岡山県勝負砂古墳例、高敞鳳徳里1号4号石室例（5.4cm）（第263図2）、鋲が打たれた頭部箇所が幅広い事例として勝負砂古墳例が挙げられる。

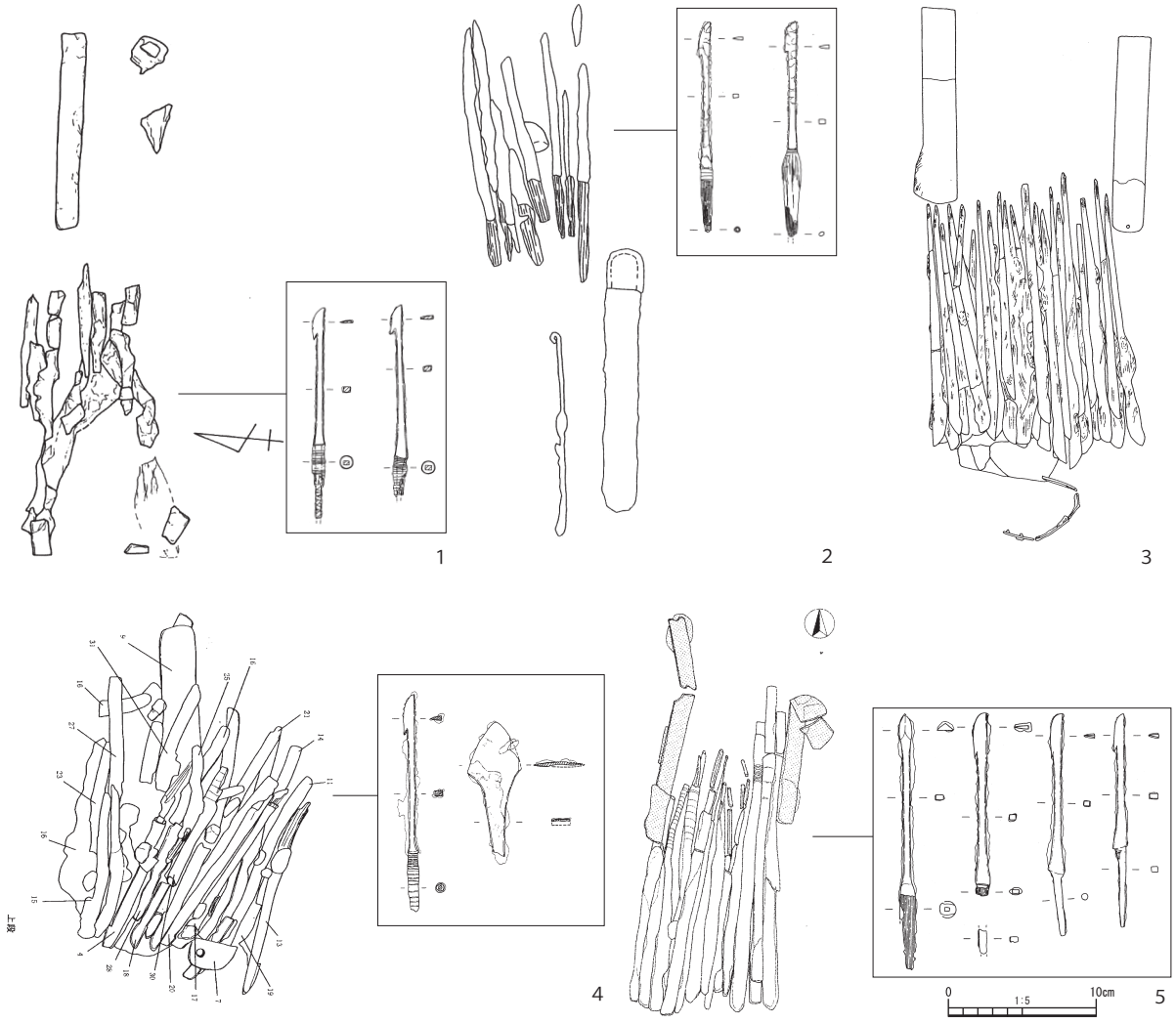
④小結

このように本例には、百済・大加耶からの影響がみられる。日本列島における分布状況の変化や底板の文様などからみて、日本列島において本格的な国内製作が開始され、胡籙が日本列島に定着したと考えられる時期は日本列島Ⅲ段階前半（TK47 ～ MT85型式期）である。本例のようにⅡ段階にみられる胡籙金具の多くは朝鮮半島南部からの移入品であったと考えられるが（土屋2018a）、類例の多くが日本列島から出土していることからみて、百済あるいは大加耶からの工人集団によって日本列島で製作された可能性もまた考えられる。

第 14 表　胡籙に収納される鉄鏃の本数・形式・出土位置

古墳名	胡籙に収納される鉄鏃		埋葬施設	出土位置	胡籙金具	
	本数	形式			群	編年
京都私市円山第１主体	約38本	短頸柳葉	組合式箱形木棺	棺内足元	双Ⅰａ	Ⅰ段階
鹿児島神領10号	不明	長頸圭頭か	刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫槨	棺外		
福井天神山７号第１主体	約20本	長頸柳葉	割竹形木棺を粘土で覆った粘土槨	棺内足元	双Ⅰ	
奈良高山１号	11本以上	短頸か10本以上平根系1本か	木棺直葬	棺内中央　足元	双Ⅰ	
千葉内裏塚乙石室	不明	不明	竪穴式石槨	腰付近	双Ⅰａ	Ⅱ段階
東京御嶽山	不明	長頸柳葉か	粘土槨と木棺	腰付近か	双Ⅰｂ	
兵庫カンス塚	不明	不明	竪穴式石槨	棺と竪穴式石槨の間棺外腰から脚部か	双Ⅰ	
千葉浅間山１号（主体部外）	22本	長頸腸抉片刃長頸長三角別造り片腸抉	木棺粘土床	棺外右腰付近	双Ⅱ	
千葉北の内２号埋葬施設	13本	長頸腸抉片刃	木棺直葬か	棺内足元		
和歌山椒浜	11本か	長頸柳葉か	箱式石棺か	棺内足元か		
岡山天狗山	不明	長頸腸抉片刃	竪穴式石槨	足元		
岡山勝負砂	約20本	長頸柳葉	竪穴式石槨	足元		
岡山一国山１号箱式石棺２	約12本か	長頸柳葉長頸片刃	箱式石棺2の掘方	左足下にあったか		
岡山長畝山北５号第１主体	約14本か	長頸腸抉片刃	竪穴式石槨	不明		
兵庫芝花14号SX1401	8本	長頸腸抉片刃	組合せ式石棺	棺蓋石と墓壙壁の間	短ＢⅠ	
長野宮垣外遺跡SK18土壙	26本	長頸腸抉片刃	土壙墓	中央付近。頭位方向不明		
千葉稲荷台１号北施設	10本以上	長頸腸抉片刃	木棺直葬	棺内足元		
宮崎島内地下式横穴77号	19本	長頸腸抉片刃18本圭頭1本	地下式横穴	足元		
千葉花野井大塚１号	62本か	長頸腸抉片刃	木棺直葬　粘土槨	南東側。頭位方向不明		
長野月の木１号埋葬施設２	16本前後	長頸腸抉片刃15本前後長頸柳葉1本	割竹形木棺	棺内足元		
岡山法蓮40号	13本前後	長頸長三角	箱式石棺	棺外南側		
石川永禅寺１号	約15本	長頸片刃または長頸柳葉	箱式石棺	足元	群不明	
福岡塚堂第１主体	不明	不明	箱式石棺	右壁側　足元		
千葉富士見塚	20本	長頸腸抉柳葉	木棺直葬	足元	双Ⅲ	Ⅲ段階
滋賀円山	約42本か	長頸柳葉か	横穴式石室	石棺外		
京都白山	51本	長頸三角	竪穴系横口式石室	不明		
奈良珠城山１号①②	全部で74本	長頸鏃68本平根系鏃6本	横穴式石室	玄室西壁部の奥壁近		
奈良寺口千塚３号	9～10本	長頸長三角	竪穴系横口式石室	奥壁西側		
奈良新沢千塚50号	15本	長頸柳葉・長頸片刃13本平根系2本	木棺直葬	足元		
大阪峯ヶ塚後円部①②	55本か	長頸片刃長頸反刃	竪穴式石槨	石室南東部　鉄鏃第Ⅰ群南壁体に沿って出土		
兵庫西宮山①②	22本以上	長頸片刃、平根系など	横穴式石室	南壁に沿って出土		
佐賀龍王崎１号①②	27本か	長頸鏃11本平根系16本	横穴式石室	第一屍床　足元		
宮崎島内地下式横穴10号	16本	長頸腸抉片刃13本圭頭3本	地下式横穴	足元付近		
千葉大道筋箱式石棺	５～12本か	長頸柳葉	切石積み箱式石棺	左側足元	短ＢⅡ	
岐阜虎渓山１号	17本以上	長頸柳葉か	横穴式石室	奥壁側南		
京都井ノ内稲荷塚	20本前後	長頸長三角	横穴式石室	奥壁付近。玄室東側壁沿		
京都坊主山１号	55本	長頸長三角48本平根系7本	木棺直葬	棺内足元		
愛媛経ヶ岡①	33本	長頸長三角28本短頸腸抉柳葉5本	横穴式石室	奥壁部		
大分飛山23号横穴	約15本か	長頸柳葉あるいは圭頭	横穴墓	奥壁隅から奥壁中央		
静岡高田観音前２号	9本	長頸三角	木棺直葬	頭部方向不明。足元か	不明	
福岡番塚	約21本	長頸腸抉片刃	横穴式石室	石室奥壁北側	不明	

〔凡例〕双Ⅰａ、Ⅰｂ、Ⅱ、Ⅲ：双方中円形Ⅰａ群、双方中円形Ⅰｂ群、双方中円形Ⅱ群、双方中円形Ⅲ群。短ＢⅠ、短ＢⅡ：短冊形ＢⅠ群、短冊形ＢⅡ群。



1. 兵庫芝花 14 号墳 SX1401　2. 長野宮垣外遺跡 SK18 土壙　3. 千葉花野井大塚 1 号古墳
4. 宮崎島内地下式横穴 77 号墓　5. 長野月の木 1 号墳第 2 埋葬施設

第 265 図　胡籙に収納された鉄鏃の諸例

2. 胡籙に収納される鉄鏃の特徴

(1) 胡籙に収納される鉄鏃の本数

稲荷台 1 号墳北施設から出土した胡籙に収納された鉄鏃は長頸腸抉片刃式であり、10 本以上が収納されていたようである。ここでは、鉄鏃の特徴を考えるにあたり、胡籙に収納される鉄鏃の本数に注目する。

第 14 表では胡籙に収納される鉄鏃の本数と形式がわかる事例を挙げた。形式名は川畑純による分類を参照した（川畑 2015）。盗掘や追葬などで副葬当時の様相がわかる事例は少なく、第 14 表では収納された鉄鏃の本数を一定の確度で検討できる事例を選択している。胡籙金具が出現した TK73 型式期頃から終焉した TK209 型式期頃の事例（筆者の編年でいう日本列島Ⅰ～Ⅲ段階）も含めると、胡籙に収納される鉄鏃の本数の平均は約 22 本である。概ね 10 本以上が収納されているようである。

また、同じ形式の胡籙金具（短冊形 B1 類吊手金具）が出土した古墳である兵庫芝花 14 号墳 SX1401 では 8 本、長野宮垣外遺跡 SK18 土壙では 26 本、宮崎島内地下式横穴 77 号墓では 19 本、千葉県花野井大塚 1 号古墳例では 62 本(2)、長野月の木 1 号墳埋葬施設 2 では 16 本前後、岡山法蓮 40 号墳では

13本前後が出土しており（第265図）、花野井大塚1号古墳例を例外とすると、平均は約15本である。稲荷台1号墳北施設から出土した胡簶に収納された鉄鏃は10本以上と推定されているが、現状の数は副葬当時の数とそう変わらないと推定される。なお、烏山水清洞4地点25号木棺からは鉄鏃は出土しておらず、元々収納していなかったようである（京畿文化財団・京畿文化財研究院2012）。

古代の養老律令第17条軍防令備戎具条によると一容器に対する征箭（戦場で使う矢。長頸鏃。）の規定箭数は五十隻、正倉院器仗の規定箭数は征箭五十隻である。また、『日本三代実録』貞観一六年（874）九月一四日条によるとその箭数五十隻を日常的には三十隻に減らすことが認められたとある。それまでは箭数五十隻の規定が継承されていたが、摂関期以降の儀仗の箭数は三十隻として継承されたようである。中世前期の箙に収納される征箭の箭数は、軍記物語によると二十四隻が普通であるようである（近藤2014：pp.255−256）。古墳時代の胡簶に収納される鉄鏃の本数の平均が約22本であり、中世の箙に収納される矢の本数と近いのは興味深い特徴である。

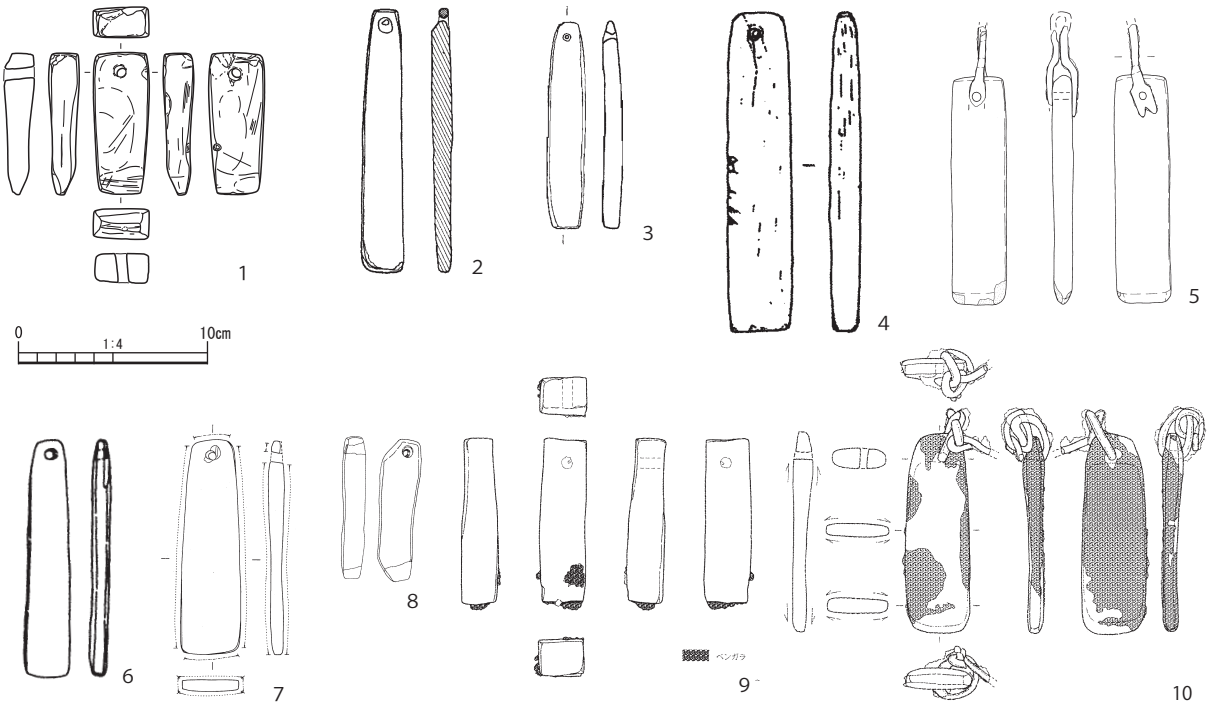
（2）胡簶に収納される鉄鏃の形式

稲荷台1号墳北施設から出土した胡簶に収納された鉄鏃は、長頸腸抉片刃式であった。胡簶に収納された鉄鏃の形式に傾向があるかを確認するため、第14表では鉄鏃形式についても載せている。これをみると、胡簶に収納される鉄鏃形式は長頸鏃が多いことが明らかである。長頸鏃出現以前の時期を含むⅠ段階においては、短頸柳葉式が含まれているが、長頸鏃出現後のⅡ段階には長頸腸抉片刃式と長頸柳葉式が基本となる。Ⅲ段階も長頸腸抉片刃・片刃式と長頸柳葉式・長三角式が基本であるが、少数の平根系鏃が加わるようである。古代では、箭を容器に収納する際、弓箭使用の主目的となる箭を中差（なかざし）といい、これに一・二隻指し添える異種類の箭を表差（うわざし）という（近藤2014：253）。軍陣の場合は、中差は征箭、表差は狩箭（平根系鏃等）・的箭を指し添えるようであり、正倉院器仗でもこの傾向はみられる。Ⅲ段階の胡簶に平根系鏃が追加されるのは、古代でいう中差と表差の原初的な特徴であろう。

本例でも長頸腸抉片刃式が収納されているが、同じく短冊形B1類吊手金具が出土した芝花14号墳SX1401、宮垣外遺跡SK18土壙、島内地下式横穴77号墓、花野井大塚1号古墳、月の木1号墳埋葬施設2例でも長頸腸抉片刃式が収納されている。胡簶金具のⅡ段階（TK208 〜 TK23型式期）は長頸腸抉片刃式が多く流通する時期でもあるが、これは顕著な傾向である。長頸腸抉片刃式は日本列島と朝鮮半島南部の広域でみられる共有型式であることをふまえると、長頸腸抉片刃式は胡簶に収納された状態でもたらされたものであった可能性が考えられる。

（3）胡簶の出土位置

本例は、棺内の被葬者足元から出土した。第14表では、胡簶出土古墳の埋葬施設と出土位置を示した。盗掘や追葬がある場合、本来の副葬位置を保っていないため、第14表では当時の様相が比較的保たれている事例を選択している。第14表をみると、胡簶の出土位置は棺内の被葬者足元であることが多く、棺内腰付近や棺外もみられる。頭部に副葬された事例はなく、胡簶の副葬位置には規範があったようである。このような傾向からみると、本例の出土位置は通有のものであったことがわかる。胡簶、収納される矢鏃、そして副葬時の規範はセットで伝わった可能性が考えられる。



1. 千葉県稲荷台 1 号墳北施設　2. ソウル石村洞 3 号墳　3. 華城馬霞里 9 号石槨墓　4. 華城馬霞里 21 号石槨墓
5. 高霊池山洞 44 号墳主槨　6. 広島県三玉大塚古墳　7. 鳥取県下味野 SX-01 号墓　8. 栃木県桑 57 号墳
9. 群馬県金井東裏遺跡 4 区 31 号溝内 1 号甲 1 号人骨　10. 金井東裏遺跡 2 号墳墳頂部

第 266 図　稲荷台 1 号墳北施設出土砥石とその類例

3. 提砥の特徴

(1) 提砥の先行研究

古墳時代における砥石は「佩砥」、「提砥」、「置砥」に分類され、提砥は一方を穿孔し紐などを通すことで提げることができるものと定義されている（細川2015：385）。稲荷台1号墳北施設では胡籙の近くから提砥が出土している。幅広の上側には孔があけられ、下側は幅狭となる。断面形は板状を呈しており、下側は斜めに削られている。

先行研究によると、提砥は古墳時代中期の中頃に出現した朝鮮半島系器物であるとされる（入江1998：886、細川2015：381等）。片側に孔があけられ、提げて用いられたという点で置砥とは使用方法が異なっている。置砥は農工具類とまとめて配置されるのに対し、提砥は武器類と近接して出土する傾向があることも指摘されており（細川2015：375）、用途の異なる器物とみたほうがよいであろう。とくに提砥は男性被葬者に伴うことが多いようである（門田2001：134）。

提砥は朝鮮半島南部においても一定数が確認されており、とくに新羅地域と百済地域における取り扱われ方の違いが議論されている（門田2001：135）。日本列島出土提砥の系譜についての議論は活発であり、福岡県月岡古墳と福井県西塚古墳例(3)の故地を大加耶から海岸部に至る昌原周辺の地域とする見解（入江1998：883）、大型で非実用の提砥の故地を新羅地域、小型で実用品の提砥の故地を百済地域とする見解（門田2001：136）、鳥取県下味野SX-01号墳例、広島県三玉大塚古墳例がソウル石村洞3号墳例と類似することから、これらの故地を百済地域とみる見解（川田2008：120）、奈良県五條猫塚古墳例の故地を玉田古墳群を中心とした加耶（大加耶）とする見解（細川

2015：383）等がある。日本列島の提砥が朝鮮半島から直接流入してきたものか、砥石を携帯するという情報が伝わり日本列島で製作されたものであるのかの区別が困難である点が課題とされてきたが（細川2015：383）、近年報告書が刊行された金井東裏遺跡4区31号溝内1号甲1号人骨にともなう提砥（6世紀初頭頃の事例）の石材は、現在の甘楽郡南牧村砥沢の地に産する「砥沢石」と同定されている（杉山ほか編2019b：873）。石材からみて、提砥の製作地が日本列島内でもあり得ることが判明した点が重要である。

（2）本例の位置づけ

先行研究でも指摘されてきたとおり、本例は朝鮮半島南部の影響を受けて出現したものであろう。入江文敏は本例を氏の分類でいうⅡ類（実用砥石としての提砥）に含めており、佩砥とは区別して認識している（入江1998：875）。また本例のような板状の断面形を呈する提砥は朝鮮半島に多いようである（右島2019：491）。

日本列島出土提砥の系譜については見解がわかれているが、概ね百済・大加耶系とみる見解が多いようである。とくに、小型で実用品の提砥の故地を百済地域に求める門田誠一の指摘（門田2001：136）をふまえると、本例は百済地域との関係が推定されるようである。

第266図では、提砥の中でも断面形が板状を呈する個体を中心に掲載した。百済地域（ソウル石村洞3号墳例、華城馬霞里9号石槨墓例、馬霞里21号石槨墓例）、大加耶地域（高霊池山洞44号墳主槨例）、日本列島（広島県三玉大塚古墳例、鳥取県下味野SX-01号墓例、栃木県桑57号墳例、群馬県金井東裏遺跡4区31号溝内1号甲1号人骨例、金井東裏遺跡2号墳墳頂部例）等であり、これらは本例の断面形に近い。本例は百済・大加耶地域のものと類似しており、系譜を探すとすればこれらの地域が有力候補であろう。これは胡籙金具の系譜と共通しており、興味深い。

また佩砥は、西域から伝えられたものが中国を通って高句麗や新羅に直接・間接に伝承した可能性が指摘されている（濱田・梅原1924、濱田1932）。遊牧民族の歴史のなかで、腰帯から砥石を含む各種日常具を吊り下げて馬で移動する習俗・文化が広くユーラシアの草原地帯に展開していたことも指摘されており（右島2019：492）、佩砥・提砥は騎馬文化と同様に草原地帯から伝わってきたものであると推定される。提砥が胡籙の近くから出土していることや、そのルーツの共通性を考慮すると、提砥と胡籙は親和性が高い器物であったと推定される。

なお、金井東裏遺跡2号墳の埋葬施設から出土した提砥には孔に鉄製吊金具が付けられており（第266図10）、袋状鉄斧の有機質製紐に繋げられていたと推定されている（杉山ほか編2019a：71）。装着方法がわかる事例として重要であり、本例の装着方法を考える上でも参考になる。

おわりに

本稿では胡籙、胡籙に収納される鉄鏃、提砥について、類例と比較することで、系譜的位置づけを中心に検討した。胡籙金具は属性分析の結果、Ⅱ段階の後半（TK23型式期頃）のものであり、製作地については絞り切れないが、百済・大加耶系の工人集団によって製作されたものであると考えられる。提砥も同様に百済・大加耶の影響を受けたものであると考えられ、胡籙金具と類似した様相を呈している。

また古墳時代の胡籙に収納される矢鏃の本数・形式と胡籙の副葬位置について検討したところ、平

均約22本であり、長頸鏃が伴うことが多く、被葬者足元での副葬が基本であることを確認した。本例と同形式の胡籙金具を伴う胡籙に収納される矢鏃本数の平均は約15本であり、矢鏃形式は長頸腸抉片刃式で構成されている。本例は類例との共通性が顕著であり、胡籙、収納される矢鏃、そして副葬時の規範がセットで伝わってきたと考えられる。

このように、稲荷台1号墳北施設の出土品からは百済・大加耶地域との繋がりが読み取れる。北施設の被葬者は、「王賜」銘鉄剣が出土した中央施設の被葬者とは異なる役割、例えば外交等の職掌を担っていたのであろう。高田貫太による解釈の枠組みを参照すると（高田2014：190）、北施設の被葬者は、倭王権主導の朝鮮半島との交渉活動に参与した人物、あるいは、より直接的に倭王権に服属し、その交渉活動を担当した人物であったのではないかと考えられる。

註

（1）皮・革については、杉井健の定義に基づき、獣毛があるものを皮あるいは毛皮、毛が除去されたものを革と区分することができ（杉井2012:207）、本稿もこの見解に倣う。

（2）胡籙金具の特徴が共通しており、かつ近隣の事例として千葉県花野井大塚1号古墳例が挙げられる。この古墳でも胡籙に長頸腸抉片刃式が収納された状態で検出されている。報告書によると胡籙に収納される長頸腸抉片刃式は62本であるとされる（古宮・井上2001）。ただ、出土状況図と出土状況写真をみるかぎり、胡籙に収納される鉄鏃は21 ～ 25本程度であるようにもみえる。62本という数値は、分離した状態で出土した鉄鏃が全て胡籙に収納されていたものという前提のもとに数えられている可能性もあり、現状では収納本数を確定させることはできない。第14表では報告書の記載のとおり、62本として本数を示した。

（3）西塚古墳例はその後の検討で岡山県新庄下所在古墳出土品であることが判明している（清喜2011）。榊山古墳と千足古墳のどちらかから出土したものであるが、榊山古墳出土品の可能性がやや高いようである（清喜2015）。

引用文献

日本語

入江文敏1998「佩砥考－日韓出土資料の検討－」『網千善教先生古稀記念考古学論集』網干善教先生古稀記念論文集刊行会 pp.863－892

大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』

大西智和・安栖祐樹・鐘ヶ江賢二ほか2012『島内地下式横穴墓群Ⅳ－鹿児島大学学術調査第2次・3次、128 ～ 130号発掘調査報告書－』（えびの市埋蔵文化財調査報告書第53集）えびの市教育委員会

大和久震平1972『栃木県小山市喜沢小山カントリー倶楽部内　桑57号墳発掘調査報告書』小山カントリー倶楽部・小山市教育委員会

加藤一郎・土屋隆史2024「大和4号墳出土品再整理報告」『書陵部紀要』第75号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、pp.31－42

川田壽文2008「砥礪考2－古墳出土砥石集成－」『白門考古論叢Ⅱ』中央考古会・中央大学考古学研究会、pp.113－138

川畑純2015『武具が語る古代史　古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版会

岸本一宏編2008『芝花弥生墳墓群・古墳群』兵庫県教育委員会

近藤好和2014『日本古代の武具－『国家珍宝帳』と正倉院の器仗－』思文閣出版

早乙女雅博2010『新羅考古学研究』同成社

澁谷恵美子編2000『宮垣外遺跡・高屋遺跡』飯田市教育委員会

下平博行編2002『月の木遺跡　月の木古墳群』飯田市教育委員会

杉井健2012「古墳時代の繊維製品・皮革製品」『講座 日本の考古学』8（古墳時代下）青木書店、pp.197－236

杉山秀宏ほか編2019a『金井東裏遺跡 ≪古墳時代編≫本文編1』（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書652）公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

杉山秀宏ほか編2019b『金井東裏遺跡 ≪古墳時代編≫本文編2』（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書652）公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

清喜裕二2011「福井県西塚古墳出土遺物の来歴調査について」『書陵部紀要』第63号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、pp.1－20

清喜裕二2015「岡山市新庄下所在古墳（千足・榊山）出土の砥石とその評価」『千足古墳－第1～第4次発掘調査報告書－』岡山市教育委員会、pp.137-144
高田貫太2014『古墳時代の日朝関係　新羅・百済・大加耶と倭の交渉史』吉川弘文館
田中新史編1988『「王賜」銘鉄剣概報：千葉県市原市稲荷台1号墳出土』市原市教育委員会
土屋隆史2012「烏山水清洞墳墓群出土胡籙金具の編年的位置と地域性」『烏山 水清洞 百済 墳墓群－烏山 細橋 宅地開發地區内文化遺蹟（4，5地點）發掘調査報告書－』京畿文化財団・京畿文化財研究院・韓国土地住宅公社、pp.347-377
土屋隆史2018a『古墳時代の日朝交流と金工品』雄山閣
土屋隆史2018b「古代日本の盛矢具と母子大刀－羅州伏岩里丁村古墳出土品との比較検討－」『古代韓・日の矢筒と装飾大刀』国立羅州文化財研究所、pp.101-149
土屋隆史2023「古墳時代後期における金属製玉・盛矢具・冠・飾履の編年」『後期古墳研究の現状と課題Ⅰ－交差編年の手がかり－発表要旨集・後期古墳資料集成』中国四国前方後円墳研究会第26回研究集会、pp.99-104
土屋隆史2024「金工品」『中期古墳編年を再考する』六一書房、pp.117-128
土屋隆史2025a「宇和奈辺古墳群について－公文書の検討を中心に－」『書陵部紀要』第76号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、pp.1-10
土屋隆史2025b「古代東北アジアにおける胡籙金具の展開」『古墳時代の弓と矢』（日本大学史学会2025年度第1回例会）日本大学史学会、pp.36-47
豊島直博編2020『坊主山古墳群出土品報告書』奈良大学文学部文化財学科
濱田青陵1932『慶州の金冠塚』慶州古蹟保存會
濱田耕作・梅原末治1924『慶州金冠塚と其遺寶 本文上冊』（古蹟調査特別報告第三冊）朝鮮総督府
広島県教育委員会編1983『三玉大塚古墳－調査と整備－』吉舎町教育委員会
福井市1990「天神山古墳群」『福井市史　資料編1　考古』、福井市、pp.311-343
藤本隆之編2002『下味野古墳群Ⅰ－姫鳥線整備促進関連事業に係る下味野40～44号墳の発掘調査報告書－』財団法人鳥取市文化財団
古宮隆信・井上文男2001「花野井大塚古墳」『柏市埋蔵文化財調査報告書』44、柏市教育委員会、pp.2-18
細川晋太郎2015「五條猫塚古墳出土砥石の副葬背景」『五條猫塚古墳の研究　総括編』奈良国立博物館、pp.373-386
右島和夫2019「甲着装古墳人が保持していた砥石をめぐって」『金井東裏遺跡 ≪古墳時代編≫理学分析編・考察編』（群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書652）公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、pp.490-495
門田誠一2001「古墳出土の提砥－近年の韓国出土資料との対照による若干の視点－」『園部岸ケ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学、pp.128-137

韓国語

京畿文化財団・京畿文化財研究院2012『烏山 水清洞 百済 墳墓群－烏山 細橋 宅地開發地區内文化遺蹟（4，5地點）發掘調査報告書－』韓國土地住宅公社
慶北大学校博物館・慶北大学校考古人類学科・高霊郡大加耶博物館2009『高霊 池山洞44号墳－大伽耶王陵－』（慶北大学校 博物館 学術叢書37・慶北大学校 考古人類学科 考古学叢書1）
國立羅州文化財研究所2017『羅州伏岩里丁村古墳発掘調査報告書』
金元龍・林永珍1986『石村洞3號墳東側古墳群 整理調査報告』ソウル大学校博物館
馬韓・百済文化研究所2016『高敞鳳徳里1号墳綜合報告書』
崇實大学校博物館・ソウル大学校博物館　2004『馬霞里古墳群』
湖巖美術館1998『華城 馬霞里 古墳群』（湖巖美術館遺蹟発掘調査報告第5冊）

中国語

遼寧省博物館2015『北燕馮素弗墓』文物出版社
遼寧省文物考古研究所編（奈良文化財研究所訳）2004『三燕文物精粋』遼寧省文物考古研究所・奈良文化財研究所
田立坤・李智1994「朝陽発現的三燕文化遺物及相関問題」『文物』1994年第1期　文物出版社、pp.20-32
西安市文物保護考古研究院2018「陝西西安洪慶原十六国梁猛墓發掘簡報」『考古与文物』2018年4期

挿図出典

第258図：胡籙金具の図面は、上野祥史氏提供図面を一部修正。出土状況図面は市原市教育委員会提供。第259図：市原市教育委員会提供。第260図：筆者撮影（福井市郷土歴史博物館所蔵）。第261図・第13表：筆者作成。

第262図-1：岸本編2008を再トレース。2：筆者実測（飯田市考古博物館）。3：大西・安栖・鐘ヶ江ほか2012より引用。4：吊手金具と勾玉状金具は筆者実測（柏市教育委員会所蔵）。収納部金具は古宮・井上2001より引用。5:下平編2002より引用。6:早乙女2010より引用。吊手金具と収納部金具の一部は再トレース。7：筆者実測（山城郷土資料館所蔵）。第263図-1：筆者実測（京畿文化財研究院）。2:馬韓・百済文化研究所2016より引用。3・4:國立羅州文化財研究所2017より引用。第264図-1:西安市文物保護考古研究院2018より引用。2：吊手金具右、収納部金具、帯金具は田立坤・李智1994より引用。吊手金具左は遼寧省文物考古研究所編（奈良文化財研究所訳）2004より引用。3：遼寧省博物館2015より引用。第14表：筆者作成。第265図-1：岸本編2008より引用。2：澁谷編2000より引用。3：古宮・井上2001より引用。4：大西・安栖・鐘ヶ江ほか2012より引用。5：下平編2002より引用。第266図-1：市原市教育委員会提供。2：金元龍・林永珍1986より引用。3：崇實大学校博物館・ソウル大学校博物館2004より引用。4：湖巌美術館1998より引用。5：慶北大学校博物館・慶北大学校考古人類学科・高霊郡大加耶博物館2009より引用。6：広島県教育委員会編1983より引用。7：藤本編2002より引用。8：大和久1972より引用。9：杉山ほか編2019bより引用。10：杉山ほか編2019aより引用。

第 5 節　稲荷台 1 号墳出土須恵器の基礎的考察

藤野　一之（駒澤大学）

はじめに

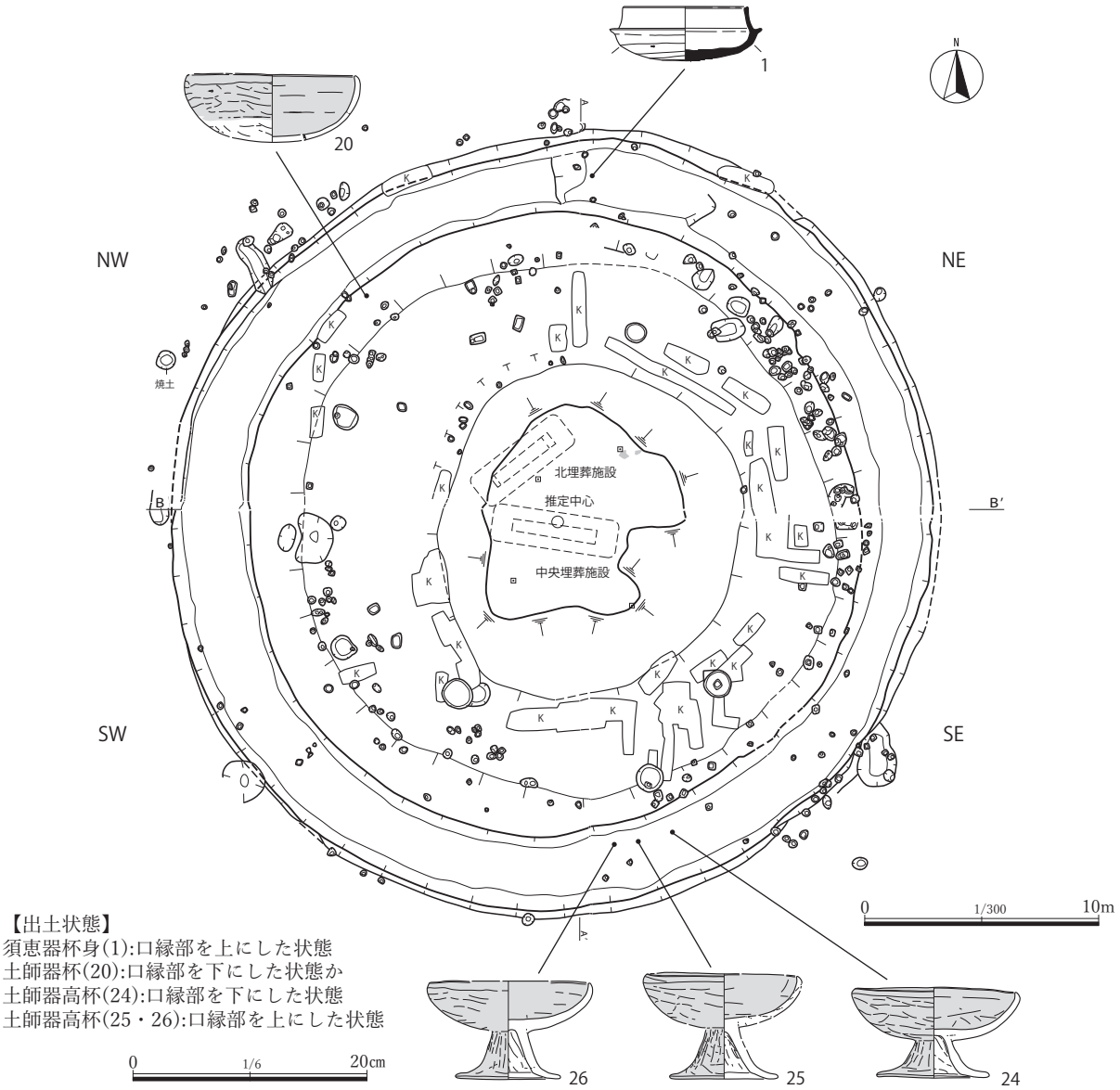
稲荷台 1 号墳（円墳・約 26m）から出土した須恵器について、器形の種類（器種）の構成や生産地、編年的位置づけなど基礎的な部分を中心に検討を試みる。編年的位置づけについては、完形で出土した杯身を中心に、大阪府南部の泉北丘陵に展開した陶邑窯跡群（以下、陶邑窯と略称）の須恵器と比較する。また、古墳編年で取り上げられることの多い畿内地域の古墳で、稲荷台 1 号墳と時期的に近いと考えられる京都府京都市穀塚古墳（前方後円墳・約 41m）から出土した須恵器との比較も行う。

1. 稲荷台 1 号墳出土須恵器の概要

器種構成　須恵器は杯身 1、把手付無蓋高杯 1、瑞 1、中甕は少なくとも 2（中甕 A:4・5・10 ～ 18、中甕 B:6 ～ 9）個体が出土しており[(1)]、土師器は破片のものが多いため正確な個体数を特定できないが、多数の杯・高杯と直口壺 1 個体の出土が確認でき、杯よりも高杯が多い傾向にある。なお、後述するように出土した須恵器はいずれも大きな型式差は認められず、周辺の遺構の分布状況から他の遺構に帰属するものが混入した可能性も低いため、これらの須恵器は稲荷台 1 号墳に帰属するものと考えられる。

土器の出土位置（第 267 図）　須恵器で原位置を保っているのは、北側周溝の底面よりやや上から口縁部を上にした状態で出土した杯身のみである。有蓋食器でありながら杯蓋を伴っていないため、仮に内部に食材や食品を盛ってあった場合には、儀礼の場でよく見える（内山 2025:p.167）状態となる。このほか、瑞は SE 区の周溝検出土、無蓋高杯は SW 区表土、中甕 B はいずれの破片も NW 区から出土しており、複数位置に須恵器が配置されていたと考えられる。また、中甕 A は SE 区と SW 区から出土したものが接合関係にあり、かつ同一個体と考えられる胴部片（16・18）は NE 区から出土しているため、墳頂に配置されていた可能性もある。土師器は、出土位置の詳細がわからないものも多いが、杯（20）は北西側のテラスから口縁部を下にした状態で出土したようであり、高杯 3 個体（24 ～ 26）は南側周溝の底面よりやや上から出土し原位置を保っている可能性が高い。また、24 は口縁部を下にした状態、25・26 は口縁部を上にした状態で出土しているのが特徴である。このほかの土師器高杯は、SE 区から多く出土している傾向にある。

このように、稲荷台 1 号墳では北側周溝と南側周溝にそれぞれ須恵器杯身と土師器高杯、北西側テラスに土師器杯を配置し、それ以外にもテラスや墳頂などに土器を配置していた可能性がある。栃木県宇都宮市塚山南古墳（前方後円墳・58m）では、前方部墳丘裾部に須恵器中甕と土師器杯・高杯・瑞・甕を集積している。この事例を参考にすれば、稲荷台 1 号墳においても墳頂もしくは SE 区周辺において、須恵器中甕 A と土師器高杯を組み合わせて使用していたとも考えられる。また、周溝底面やや上から出土した須恵器杯身と土師器高杯 3 個体は、1 か所に集積するのではなく対称的な位置関係に配置しているのが特徴である。くわえて、中央埋葬施設と北埋葬施設どちらの主軸延長線上にもあたらないため、方位あるいはその他の要因を意識して配置したものと考えられる。これらの土器の配置は、同時期に複数位置に配置されたのか、各埋葬に伴う時間差に由来するものなのかは断定できない。



【一括取り上げ土器の出土位置】
NW区:須恵器中甕B(6～9)　／　NE区:中甕A(16・18)＊16は南周溝トレンチ中と接合関係
SE区:須恵器鼈(2)、須恵器中甕A(4・5・10・14・17)、土師器壺(19)、土師器高杯(24～30・32・34～39・53～58)
＊4・14・35・54はSW区と接合関係
SW区:須恵器無蓋高杯(3)、須恵器中甕A(11～13・15)、土師器杯(22・23)、土師器杯もしくは高杯(52)
南周溝トレンチ中:土師器高杯(33)、土師器杯もしくは高杯(51)

第 267 図　稲荷台 1 号墳土器の出土位置

古墳の築造から埋葬に至るまでの期間や、それにかかわる葬送儀礼の段階について土器から復元することは困難なため、出土した土器群が中央埋葬施設と北埋葬施設のどちらの葬送儀礼に際して使用されたものかは特定できない。ただし、埼玉県行田市稲荷山古墳の墳丘造り出し出土土器などから考えると、初葬に伴う土器は多く含まれていると推測される。なお、須恵器杯身はほぼ完存しているのに対して、他の須恵器はすべて破片の状態かつ接合しても完形の状態にならないが、葬送儀礼にかかわる毀損による破片化なのかは判断できない。

須恵器の特徴　以下では、須恵器の各個体の形態的特徴などを整理する。

杯身（1）：ほぼ完存し口径 10.6cm、受け部径 12.9cm を測り底部は扁平で小型の杯身であり、成

形時のロクロ回転方向は右回転、ヘラ削りは左回転で削りの1単位間隔は1.3cm程度、削りの範囲は4/5以上である。口唇部は内傾する段を巡らせ、立ち上がり（口縁部）は直立し、受け部は水平気味にのびる。

壺（2）：破片の状態で1/2以上欠損し、口縁部と頸部は接合関係にないが同一個体と考えられる。口唇部は弱い沈線状のくぼみが巡り、口縁部と頸部の境の突線は無蓋高杯と同様に突出は弱く先端はやや丸みを帯びる。頸部は波状文、胴部中位には櫛歯刺突文と波状文を施文し、その間には区画を意識したような凹線が認められ、波状文の下位も弱くくぼむが沈線ほどではない。胴部下位は、ヘラ削り後にナデを施したと考えられる。

無蓋高杯（3）：把手付無蓋高杯であるが、破片の状態のため片側把手か両側把手かは不明である。口唇部は丸く杯部中位に2条の突線が巡り、突線の突出は弱く先端もやや丸みを帯びる。突線の下位に波状文を施し、杯部下位の回転ヘラ削りは左回転であり、杯部内面に降灰の付着が認められる。脚部の透かしは4方で形状は長方形を呈し、脚端部は上方に突出し下位は内傾する。

中甕：中甕A（4・5・10 ～ 18）・中甕B（6 ～ 9）の2個体とも破片の状態であるが、胴部の器厚、胴部から口縁部を連続的に成形する特徴、口縁部（4）の形状などから、いずれも大甕ではなく口径20 ～ 30cm程度の中甕と判断した。中甕Aは、口縁部に施文した波状文の上下に明瞭な突線が巡る。胴部の成形・調整は、外面に平行線文の叩き具を使用し、内面は当て具痕をナデ消す。胴部片（15）の外面には、叩きの後に幅約5mmのナデが1条確認できる。

中甕Bはいずれも胴部片であり、外面の成形は平行線文の叩き具、内面は同心円文の当て具を用いる。内面は部分的に横方向のナデを施すが、当て具痕のナデ消しではない。

須恵器の生産地　杯身の胎土は緻密で、1 ～ 3mm程度の長石やチャートを含み、無蓋高杯や中甕A・Bも杯身と類似した胎土の特徴で、発色はいずれも灰色や暗灰色である。肉眼観察のため主観的な部分が含まれるが、陶邑窯の製品と類似点が多いことから陶邑窯産と判断してよい。壺についても、胎土は比較的緻密であり長石などを少量含む点などは在地産とは考えにくいため、陶邑窯を含めた搬入品の可能性が高い。ただし、陶邑窯では胴部に櫛歯刺突文と波状文を施文した壺は出土していないようであり、生産地の特定はさらなる検討が必要である。以上、須恵器の生産地については、推測の域を出ないものもあるが陶邑窯を主体とする搬入品で占められており、千葉県市原市草刈六之台遺跡などで確認された在地産須恵器（高橋 1985、白井 1994、藤野 2019）の出土は認められない。この点については、出土須恵器を陶邑窯の須恵器にきわめて近い特徴をもつという白石太一郎の指摘（白石 1988:p.27）や、高杯脚部片と中甕胴部片の胎土分析結果（三辻 1988:p.31）とも大きく矛盾しない。

2. 稲荷台1号墳出土須恵器の編年的位置づけ

既往の見解　稲荷台1号墳出土須恵器の編年的位置づけについては、白石太一郎の研究がある（白石 1988）。白石によると、無蓋高杯と壺はTK208型式のなかでは比較的新しい要素をもち、杯身・甕もTK208型式としたうえで、稲荷台1号墳から出土した須恵器を「いずれもTK208型式でも比較的新しいところ」に位置づけた（白石 1988:p.28）。その後も、この編年的位置づけの見解については支持されている（田中新 2023:p.165）。

陶邑窯との比較　稲荷台1号墳から出土した杯身は陶邑窯産と考えられるため、陶邑窯の高蔵208

号窯（以下、TK208 号窯）や高蔵 23 号窯（以下、TK23 号窯）など編年の指標として扱われている須恵器と比較する。杯身の形態的特徴は、TK208 号窯の方が TK23 号窯に比べて立ち上がり（口縁部）が高く、扁平な底部が主体で丸底のものはほとんどなく、底・体部のヘラ削り範囲は 4/5 程度かつ丁寧である（田辺 1966）。また、杯身の口径は両窯とも 9.5 ～ 12.5cm の範囲内であるが、TK23 号窯の杯身は 10.5 ～ 11.0cm 台のものが主体を占め、小型化の傾向が読み取れる（田辺 1966:p.48）。なお、TK208 号窯の蓋杯の口径は強い規格性をもっており、大小の差がほとんどないとする指摘もある（田辺 1981:p.38）。

このような全体的な形態や法量にくわえ、古墳時代の蓋杯の変遷を考えるうえで口唇部形状が有効な属性の一つとして着目されている（田辺1966、中村1978・2001、北山2007・2009など）。田辺昭三によると、TK208号窯の杯身端部（口唇部）は丸くおさめる、水平な面、わずかに内方へ傾斜、の3種が認められ後2者が主体とする（田辺1966）。いっぽう、TK23号窯は水平な面のものはまったく認められず、すべて内方へ傾斜すると述べる（第15表）。そこで、TK208号窯とTK23号窯にくわえ、中村編年（中村1978・2001）のⅠ型式3段階とⅠ型式4段階に位置づけられているTK103号窯とTK2号窯の蓋杯を実見し(2)、口唇部形状の種類と割合について調査を行った(3)。その結果は、以下のとおりである（第268・269図）。

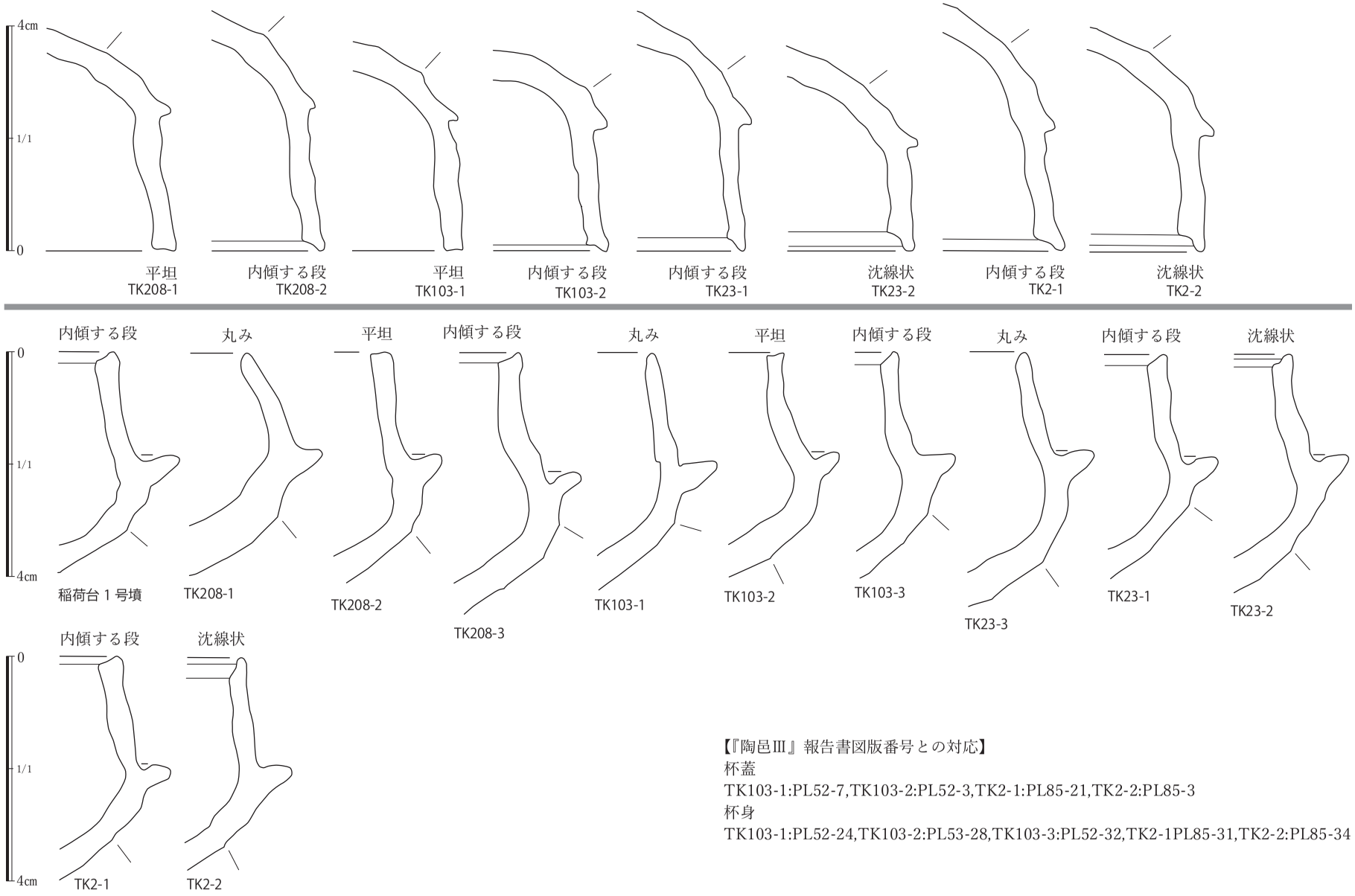
TK208 号窯 : 杯蓋（n=31） 平坦 19 点（61%）、内傾する段 12 点（39%）
杯身（n=34） 丸み 4 点（12%）、平坦 20 点（59%）、内傾する段 10 点（29%）
TK103 号窯 : 杯蓋（n=20） 平坦 17 点（85%）、内傾する段 3 点（15%）
杯身（n=46） 丸み 12 点（26%）、平坦 16 点（35%）、内傾する段 18 点（39%）
TK23 号窯 : 杯蓋（n=44） 内傾する段 24 点（55%）、沈線状 20 点（45%）
杯身（n=41） 丸み 1 点（2%）、内傾する段 25 点（61%）、沈線状 15 点（37%）
TK2 号窯 : 杯蓋（n=12） 内傾する段 4 点（33%）、沈線状 8 点（67%）
杯身（n=13） 内傾する段 5 点（38%）、沈線状 8 点（62%）

このように、TK208号窯とTK103号窯出土の蓋杯では口唇部が平坦なものが多い傾向にあるが、内傾する段も3割程度確認することができ、TK103号窯の杯身では平坦と内傾する段がほぼ同割合であった。また、TK208号窯とTK103号窯とも杯身の口唇部に面や段を形成せず丸みを帯びるもの

第 15 表　須恵器杯蓋・杯身口唇部形状の特徴

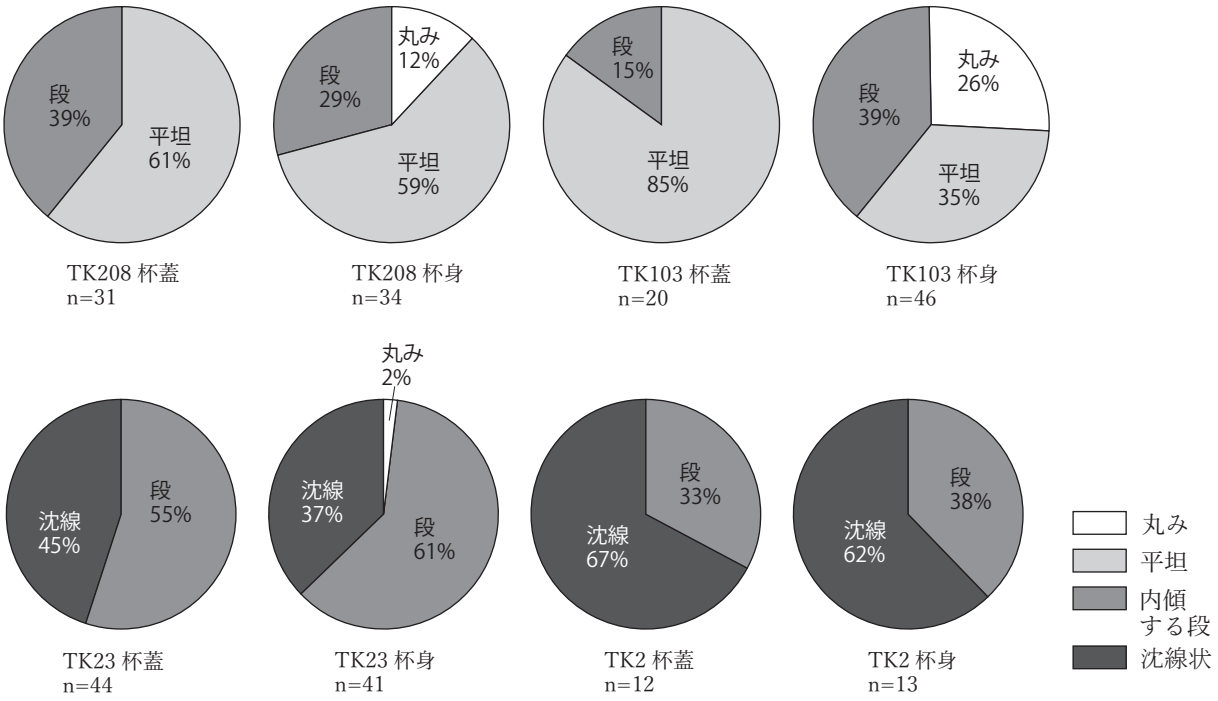
文献	型式	杯蓋	杯身
田辺編年（田辺 1966）	高蔵 208 号窯	蓋 B: 杯 B のたちあがり端部と同様である。	杯 A: 端部は丸くおさめる。 杯 B: 端部は水平な面をもつものと、わずかに内方へ傾斜したものとがある。 杯 C: 端部は杯 B に同じ。
	高蔵 23 号窯	蓋 A・B とも記載なし。	杯 A: たちあがり端面が水平なものは全くみとめられず、すべて内へ傾斜している（杯 B もおなじ）。
中村編年（中村 1978・2001）	Ⅰ型式 3 段階	口縁端部は細く平面を成している。端部はわずかに凹面をなして内傾するものもみられるが、明瞭な段をなすまでには至っていない。	端部は蓋と同様の傾向を示す。 ＊中村 2001 の記載では、端部にわずかに内傾する凹面もしくは丸く仕上げているものあり（杯 C）。
	Ⅰ型式 4 段階	内傾する凹面がより一層明瞭となり、段をなすようになってくる。	丸く仕上げるもの（A 類）と、蓋でみたのと同じく内傾する段を有するもの（B 類）あり。 ＊中村 2001 では、丸く仕上げるものの記載なし。

【第 15 表備考】
田辺 1966 の高蔵 208 号窯では、杯身の底・体部のヘラ削り範囲はほぼ 4/5 で右回転が多いとする。高蔵 23 号窯では、ヘラ削り範囲は底部全体の 1/3 強とする。
高蔵 23 号窯の杯 A については、「TK208 杯 B につながるタイプで、形態上の差異はほとんど認められない」とするが、「たちあがりの端部や受部先端の稜は TK208 の杯と比較すれば総体にあまい感じ」と捉えている（田辺 1966:pp.62－63）。



【『陶邑Ⅲ』報告書図版番号との対応】
杯蓋
TK103-1:PL52-7,TK103-2:PL52-3,TK2-1:PL85-21,TK2-2:PL85-3
杯身
TK103-1:PL52-24,TK103-2:PL53-28,TK103-3:PL52-32,TK2-1PL85-31,TK2-2:PL85-34

第 268 図　杯蓋・杯身口唇部形状

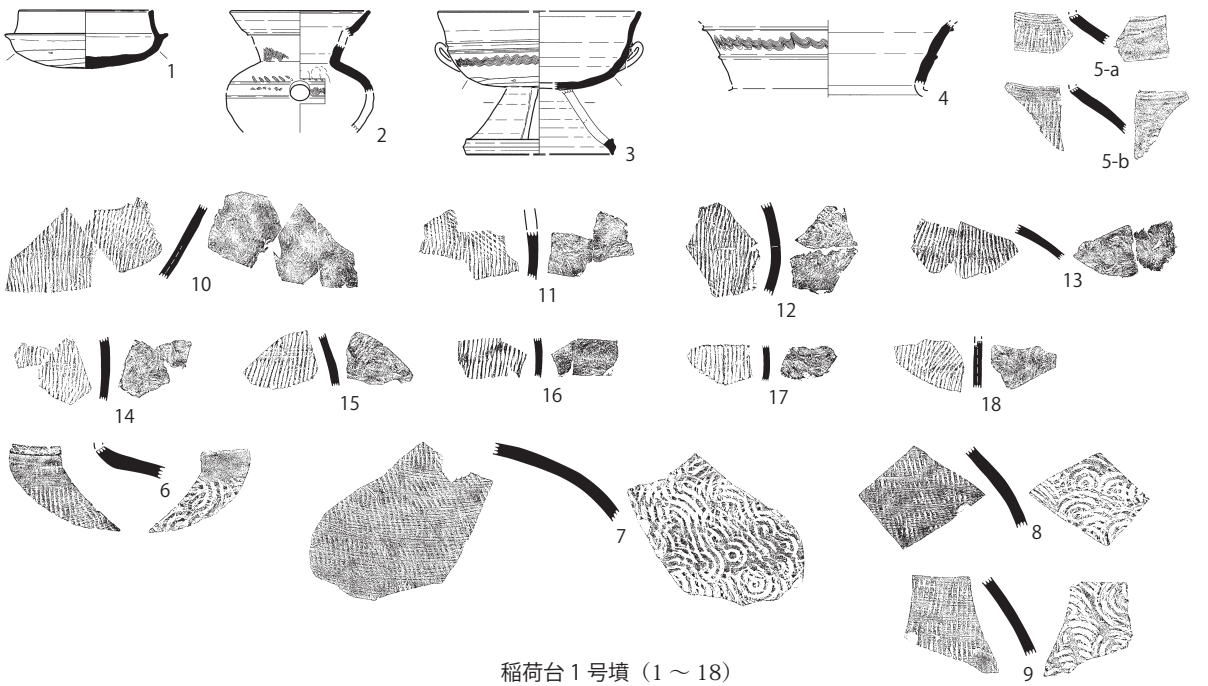


第 269 図　杯蓋・杯身口唇部形状の割合

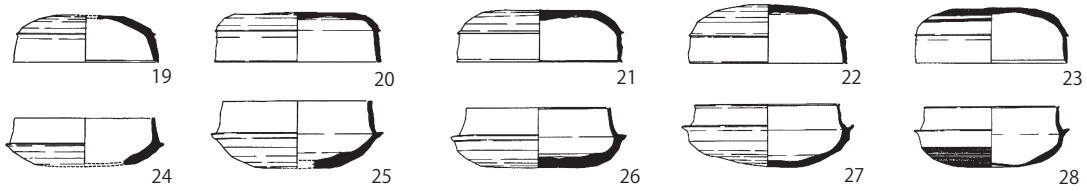
が一定数認められる。これは、前型式であるTK216型式の杯身の口唇部形状が継承されたものと判断でき、第268図杯身TK208－1は全体的な形態もTK216型式の杯身形態に類似する。いっぽう、TK23号窯とTK2号窯では口唇部形状が平坦なものは認められず、内傾する段もしくは沈線状の２種で占められ、TK23号窯では丸みを帯びるものも１点確認できた。TK23号窯では、内傾する段の方が多いのに対しTK2号窯では蓋杯とも沈線状のものの方が主体となり、内傾する段についてはTK23号窯の方がTK2号窯に比べて鋭く、TK208号窯の内傾する段の形態に近い。また、TK2号窯の内傾する段はTK103号窯に比べて鋭くなく、丸みをもつ形状となる。このほか、天井部や底・体部の回転ヘラ削り範囲と削りの１単位間隔については、TK208号窯の蓋杯は稜部や受け部手前まで削り、削りの１単位間隔は0.5 ～ 1cm程度である。それに対して、TK23号窯は削り範囲がやや狭くなり、削りの１単位間隔も0.8 ～ 1.2cmと幅が広くなる傾向がある。くわえて、TK23号窯の蓋杯は扁平な形状も一定量存在するが天井部や底部が丸みを帯びる深身の形態が主体であり、TK208号窯の蓋杯より新しい様相であることを追認した。

以上の内容をふまえ、稲荷台１号墳出土杯身の編年的位置づけを確認すると、口径が10.6cmを測り口唇部形状が内傾する段である点と、ヘラ削り範囲が広く扁平な底部形状という特徴を加味すると、典型的なTK208型式の杯身より新しい時期に位置づけられるが、TK23・47型式とする積極的な要素もない。そのため、TK208型式のなかでも新しい時期と捉えるのが適当であり、このような特徴をもつ杯身はTK103号窯でも認められる。なお、TK103号窯出土の無蓋高杯の杯部突線は稲荷台１号墳のものより明瞭である。

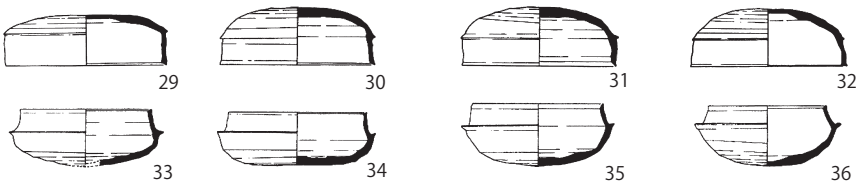
穀塚古墳出土須恵器との比較　つぎに、近年の古墳編年（鈴木 2017、岩本 2024）で取り上げられている古墳のうち、畿内地域の古墳かつ須恵器が出土しており、稲荷台１号墳と比較可能な京都府京都市穀塚古墳発見の須恵器に着目する（第 270 図）。穀塚古墳から発見された須恵器のうち、杯蓋２・



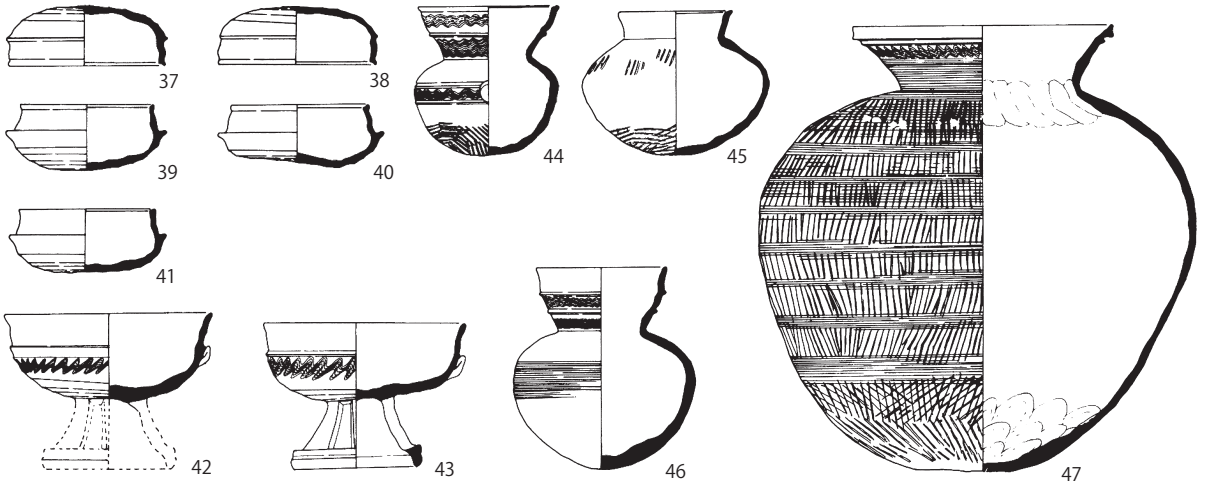
稲荷台 1 号墳（1 ～ 18）
＊番号は報告書掲載番号と同一



陶邑・高蔵 208 号窯（19 ～ 28）



陶邑・高蔵 23 号窯（29 ～ 36）



穀塚古墳（37 ～ 47）

第 270 図　稲荷台 1 号墳出土須恵器と関連資料

杯身 3・把手付無蓋高杯 2・蓋 1・短頸壺 1・直頸壺 1・中甕 1 個体が図化されており、陶邑窯産で Ⅰ型式 4 段階相当に位置づけられている（中村 1987）。穀塚古墳発見の蓋杯は、TK208 型式のものより小型で口唇部形状は内傾する段となり、TK208 号窯の内傾する段と同様に比較的鋭く、かつ口唇部形状が平坦な蓋杯は認められないが TK23 号窯や TK2 号窯のように沈線状のものも認められない。天井部や底・体部の回転ヘラ削り範囲は広く、回転方向は左回転のものが多い。削りの 1 単位間隔は 0.6 ～ 0.8cm 程度と細かく、天井部や底部形状は扁平なものも認められるなど古い様相が認められる。

無蓋高杯は、2 個体とも片側に把手を貼り付けるが形骸化している。杯部の突線は鋭く、第270図43は1条突線であるのが特徴である。杯部に施文された波状文はゆるやかで、第270図43の脚端部の突出は弱く透かしは42・43とも3方向である。蓋の口唇部は内傾する段で、頸部の突線は明瞭、頸基部は太く TK208型式の蓋より新しい。中甕は、口唇部下に巡る突線は鋭く内面の当て具痕はナデ消されており、底部外面の器表面は摩滅している。

上記の特徴をもつ穀塚古墳発見の須恵器と、稲荷台1号墳出土須恵器を比較し前後関係を確認する。まず、杯身については法量や形態的特徴は稲荷台1号墳も穀塚古墳も特徴が共通するため明確な型式差は認められず、中甕についても比較可能な部分が限られているが、おおむね同型式と考えられる。いっぽう無蓋高杯の杯部突線は、穀塚古墳の方が鋭いものの脚部の透かしは3方であり、稲荷台1号墳の無蓋高杯より新しい特徴をもつ。また、蓋も穀塚古墳のものの方が頸基部は太く、TK23・47型式に通有の形態を呈する。以上のことから、稲荷台1号墳出土須恵器と穀塚古墳出土須恵器は、杯身と中甕は型式差が認められないものの、無蓋高杯と蓋は穀塚古墳の方が型式的に新しいといえる。

3. 展望－葬送儀礼における飲食用器の選択と使用－

古墳時代における須恵器は、祭祀・儀礼用というのが本来的な用途であったとする意見が多い（伊達・森1966:p.202、植野1980:p.168、岩崎1991:p.18、藤原1991:p.133、宇野1999:p.34・37など）。また、初期の須恵器生産では陶邑窯のTG232号窯などで大甕の生産量が多いことから、葬送を含む儀礼的行為にくわえて醸造とのかかわりがあったことも推測されている（中久保2019:p.11）。

須恵器生産開始後の古墳時代中期前半から、葬送儀礼の場で土師器にくわえて須恵器が使用されていたことは多くの古墳出土事例から明らかであり、九州地方南部から関東地方あるいは東北地方南部までの広範囲に儀礼用土器やその様式が斉一的に共有されたと考えられている（中久保2016:p.13、寺前2018:p.39）。その後の中期後半における葬送儀礼においては、土師器の使用が限定的となり(4)、須恵器を主体として使用する傾向に変化することが指摘されている（楠元1992:p.497、藤原1992:p.160、古屋2011:p.186、北山2020:p.425など）。このような先行研究をふまえ、稲荷台1号墳出土土器の種類・器種の構成を振り返ると、多器種の須恵器が出土しているものの、それぞれの点数は少なく飲食用器については正確な出土位置や個体数を示せないが土師器主体の構成である。このような器種構成の特徴は、TK208型式（Ⅰ型式3段階）になると須恵器が多く使用されるようになったとする大阪平野に位置する古墳群の特徴（田中清2017:p.16）とは対照的である。

葬送儀礼で使用される飲食用器の種類と器種について、倭王権中枢域の古墳を概観するとTK73～TK216型式期では、土師器高杯主体（大阪府高槻市岡本山A3号墳、同府藤井寺市野中古墳）や須恵器有蓋高杯主体（大阪府大東市堂山古墳）など使用される飲食用器はさまざまである。このほか、他

地域では鹿児島県大崎町神領10号墳のように土師器と須恵器が併用される古墳も散見される。稲荷台1号墳とほぼ同時期のTK208型式期では、土師器高杯主体（奈良県宇陀市後出3号墳）や須恵器有蓋高杯主体（大阪府大阪市長原57号墳）のほか、やや新しい様相をもつ奈良県橿原市新沢千塚281号墳や先述した穀塚古墳では須恵器蓋杯主体などが認められる。

今後、稲荷台1号墳の器種構成の特徴が他地域でも見出すことができるのか、あるいは飲食用器が土師器主体となる関東地方の特徴（藤野2025など）によるものか検討する必要がある。また、葬送儀礼における須恵器の使用、飲食用器の選択（土師器と須恵器、杯と高杯、有蓋高杯と無蓋高杯）がどのようになされていたのか考える必要があり、この検討が葬送儀礼の内容や変遷などを明らかにする一歩となる。

本稿を作成するにあたり、以下の方々・機関から多大なるご配慮・ご協力を賜りました。末筆ではありますが、記して深謝いたします（敬称略・五十音順）。

河野正訓、菊池望、酒井清治、續伸一郎、本吉恵理子、山本亮

堺市、東京国立博物館、龍谷大学付属平安高等学校・中学校

本論はJP24K00146の成果の一部である。

註

（1）本稿での稲荷台1号墳出土土器の遺物番号は、報告書掲載番号と同一である。

（2）TK208号窯の焼成部の床は、主軸とほぼ等しくする窯が2段に重なり床面は6枚確認され、灰原も残存していた。TK23号窯は窯体の発掘は行われず、灰原の試掘である（宮崎2007）。TK103号窯は、大別して2度窯が大きく作り変えられており、灰原は焚口から2～3mの地点でほぼ消えている。蓋杯の註記は、A灰層や灰層と記されたものが多い。TK2号窯は、燃焼部の側壁は3回ないしはそれ以上の補修が行われ、焼成部の床は4～5枚の重なりをもち、灰原は主軸延長線上で残存長12mを測る。蓋杯の註記は、A区灰原灰層中・C区灰原灰層中と記されたものが多い。

（3）TK208号窯とTK23号窯については、実見したもののうち細片の資料は計数の対象から除外した。TK103号窯とTK2号窯については、図示されているものを対象とし、TK2号窯の撹乱土から出土したPL85-19は形態的に新しいため対象から除外した。また、いずれの窯跡出土資料においても同一個体と判断したものは1点（個体）とした。なお、口唇部形状についてはどの形状に分類するか判断に迷うものも存在するため、分類についてはやや恣意的な側面があることは認めざるを得ない。

（4）ただし、有力古墳においても土師器の出土が認められるため、葬送儀礼においては土師器も何らかの役割を果たしていたことがわかる。

引用文献

岩崎卓也　1991「総論」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器　雄山閣　pp.5-18

岩本　崇　2024「中期古墳の相対編年と暦年代」『中期古墳編年を再考する』六一書房　pp.295-308

植野浩三　1980「西日本の初期須恵器－三ツ城古墳の須恵器を中心として－」『奈良大学紀要』第9号　奈良大学　pp.161-173

内山敏行　2025「古墳時代の有蓋食器－使い方と性格を考える－」『学究無限』吉岡康暢先生卒寿記念論集刊行会　pp.163-172

宇野隆夫　1999「古墳時代中・後期における食器・調理法の革新－律令制的食器様式の確立過程－」『日本考古学』第7号　日本考古学協会　pp.25-41

北山峰生　2007「四条シナノ古墳群の展開」『四条シナノ遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第100冊　奈良県立橿原考古学研究所　pp.231-237

北山峰生　2009「松山遺跡における遺物の諸相」『松山遺跡』奈良県文化財調査報告書第134集　奈良県立橿原考古学研究所

pp.123－127
北山峰生　2020「横穴式石室定着前後の土器副葬」『横穴式石室の研究』同成社　pp.416－429
楠元哲夫　1992「六文銭－古墳における須恵器祭式成立の意義とその背景－」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　同志社大学考古学シリーズ刊行会　pp.489－502
白井久美子　1994「草刈遺跡出土の赤焼き須恵器」『千原台ニュータウンⅥ』財団法人千葉県文化財センター　pp.903－920
白石太一郎　1988「須恵器からみた年代」『「王賜」銘鉄剣概報』吉川弘文館　pp.27－29
鈴木一有　2017「志段見大塚古墳と5世紀後半の倭王権」『埋蔵文化財調査報告書77』名古屋市文化財調査報告94　名古屋市教育委員会　pp.175－186
高橋康男　1985「「草刈型土器」（仮称）」『草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター　pp.117－120
伊達宗泰・森　浩一　1966「土器」『古墳時代（下）』日本の考古学Ⅴ　河出書房新社　pp.188－210
田中清美　2017「TK208型式須恵器の諸問題」『考古学・博物館学の風景』芙蓉書房出版　pp.9－18
田中新史　2023「稲荷台1号墳」『王賜剣出土　球　稲荷台1号墳』市原古墳群刊行会　pp.157－190
田辺昭三　1966『陶邑窯址群Ⅰ』研究論集第10集　平安学園考古学クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
寺前直人　2018「須恵器の儀礼－土師器との比較をとおして－」『季刊考古学』第142号　雄山閣　pp.38－42
中久保辰夫　2016「古墳時代後半期における土器研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質』考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム発表要旨集　考古学研究会関西例会　pp.1－40
中久保辰夫　2019「近畿地域における須恵器の受容と普及－古墳時代の饗宴と土器生産－」『須恵器受容・普及の実態』考古学研究会第2回合同例会発表資料　考古学研究会　pp.7－22
中村　浩　1978「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育員会　pp.168－241
中村　浩　1987「山城・穀塚古墳出土須恵器について－東京国立博物館収蔵資料の再検討－」『MUSEUM』No.431　東京国立博物館　pp.4－17
中村　浩　2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
藤野一之　2019『古墳時代の須恵器と地域社会』六一書房
藤野一之　2025「古墳時代後半期の地域社会と土器様式」『考古学研究』第72巻第3号　考古学研究会　pp.29－46
藤原　学　1991「1近畿　A畿内」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器　雄山閣　pp.121－135
藤原　学　1992「須恵器生産の展開」『近畿Ⅰ』新版古代の日本第5巻　角川書店　pp.149－168
古屋紀之　2011「土器と土製品の古墳祭祀」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3　同成社　pp.181－192
三辻利一　1988「須恵器の胎土分析と産地推定」『「王賜」銘鉄剣概報』吉川弘文館　pp.30－31
宮崎泰史　2007「陶邑窯跡群と窯跡の分布について」『2005年度共同研究成果報告書』財団法人大阪府文化財センター　pp.123－181

図・表出典

第267図：本書より引用、筆者作成
第268図：筆者実測、作成
第269図：筆者作成
第270図：下記文献より引用
　稲荷台1号墳：本書／TK208・TK23号窯：田辺1966／穀塚古墳：中村1987
第15表：筆者作成

第 6 節　稲荷台 1 号墳出土土師器について

小橋　健司

1. はじめに

養老川および村田川流域では、古墳時代中期の古墳・遺跡の調査事例が多い。これに伴う豊富な出土資料に基づき、古墳時代中期土師器（和泉式・鬼高式古段階）について発掘調査報告書等で各遺跡・地区単位の編年が示されている（木對 1992・1993・2008、白井 1994a、小沢 1999、大村 2006、白井・木原 2012）。以下では、養老川流域の国分寺台地区および周辺遺跡を対象とした各編年と、村田川流域の、草刈遺跡群および周辺遺跡（ちはら台地区）を対象とした編年を参考に、近年蓄積された資料を加えて、古墳時代中期土師器の基本的器種・形式の変遷と段階を想定し、そこに稲荷台 1 号墳出土土師器を位置付けたい。

2. 古墳時代中期土師器の形態・技法と変化

稲荷台 1 号墳出土資料を構成する高杯形土器・杯形土器・直口壺形土器を中心に、形態・技法とその変化について確認する（以下、形土器は省略する）。

（1）概要　房総における古墳時代中期土器については、高杯の形態変化が段階設定に有効とされている（小沢 1999 等）。特に中期前半、和泉式の有稜平底（有段）杯部長脚高杯から、椀形杯部短脚高杯への変移は鬼高式に転換する画期と捉えられている。ただし、中期段階の有段杯部長脚高杯については古相の資料が、前期後半（草刈式（五領式）段階）の屈折柱状脚高杯と類似するため、中期土器編年の遡及的視座からは過渡期資料として一括され、区分が曖昧となる傾向にある。この点は、古墳時代期前期から中期の土器編年において、中期段階の柱状脚高杯は、概ね口径が 18 ～ 20cm 以上、杯部口縁が外反し、ヘラミガキ調整が省略傾向（脚柱のみ→欠落）、という分類指標が提示されており、前期草刈式と中期和泉式を弁別する際の有効な基準になると思われる（大村 2006・2009）。

杯についても高杯と同様、平底から丸底椀形へ、という明確な変化動向が確認されているが、高杯杯部の丸底化と、丸底椀形杯の普及は同時期の現象ではなく、丸底椀形杯出現の方が明確に先行する（木對 2008、白井・木原 2012）。供膳形態のうち、鉢（開放口縁）と杯の中間的形態をとる屈折口縁杯は、中期中葉（TK216 型式期）を中心に組成し、平底から丸底へと変化する。杯・鉢・椀（内弯・直立口縁）の内面に放射状・斜放射状の暗文状ヘラミガキの加えられるものが目立つが、近畿地方の同時期（辻編年 3 段階・中野編年 III 期）の土師器に見られることから（辻 1999、中野 2021）、その影響を受けた外来的技法と見られる。

中型（器高 12 ～ 20cm）の直口壺（坩）は、高杯と同様に、草刈式期におけるヘラミガキ仕上げの類型から連続的に形態変化し、精製の度合いが低下する。房総の古墳時代前期の各器種は外来系土器の影響を受けながらも基本的に平底・凹み底を維持し、直口壺も例外ではないが、中期後半にかけて杯と同様に丸底化した類型が現れる。また、胴部最大径付近に円孔の伴う甑形壺・直口壺も中期前半以降に散見されるようになり、平底から丸底へ変遷する。

これら高杯杯部・杯・直口壺の丸底化は、須恵器模倣志向による様式（技法）的変化と見られる。本地域では、非還元炎焼成で赤彩される草刈型土器（赤焼き須恵器）（高橋 1985・1987、白井

1994b）、土師器の技法で須恵器形式を模倣しヘラミガキで仕上げる須恵器模倣精製土師器が、古墳時代中期に限定的に確認されており、土師器生産が須恵器様式の強い影響下で行われた様相が明確である。古墳時代後期土師器において主要形式となる須恵器模倣杯類に至る変遷過程が、中期の早い段階から始まっていたことが示唆される。煮沸形態においても、カマド導入時期以降、砲弾形甑の組成追加と甕の長胴化が認められ、須恵器の需給拡大と一体的な生活文化の更新に起因する土器様式変化も同時進行したことが窺える。また、陶質土器・韓式系軟質土器とその模倣土師器も少数ながら確認されており、これらの技法・形態も加わって当該期の土器様式（技法・組成）は構成されている。

技法面の変化では、前期、草刈式から中期、和泉式・鬼高式古段階にかけて、供膳形態の精製土器が粗製化する（大村2006・2009）。胴部形状についても、前期段階までの小型丸底系壺の半球形胴部から、球形に近づく形態変化が、前期と中期を画す要素の一つと見られる。前期末段階において基本的に小型器台形式が脱落するのも、対応する精製小型土器の減少と相関する可能性が高い。また、弥生時代後期以来、古墳時代前期を通じて組成し続けた丸底杯部の高杯形式が、中期に至り一旦途絶するのも当該期の様相変化と連動すると考えられる。中期以降、供膳形態の赤彩は継続するものの時期が下るにつれ外面ヘラミガキ仕上げは基本的に省略されるようになり、鬼高式の椀形杯には赤色顔料の塗り刷毛状擦痕が器面仕上げ工程で平滑化されずに残る例も認められる。

組成面では、中期前半のうちに粗製化した小型丸底系壺・鉢が激減する一方で、供膳形態として平底杯が加わり、補完的に比率を高める。

ハケメ技法は、当地域では古墳時代前期に器種横断的に施される基本的な器面調整であるが、中期段階に入ると稀になり、代わって木目擦過痕を伴わない板状工具によるナデ（ヘラナデ）が主体になる。丸底杯・鉢・高杯杯部の外面には横ヘラケズリ状に工具ナデ調整単位が鏑立って残るものも目立ち、須恵器製作技法である回転ヘラケズリの模倣とも考えられる。煮沸形態の成形も、ハケメから工具ナデ・ヘラケズリに移行し、長胴化した後は調整方向が縦主体に変化する。

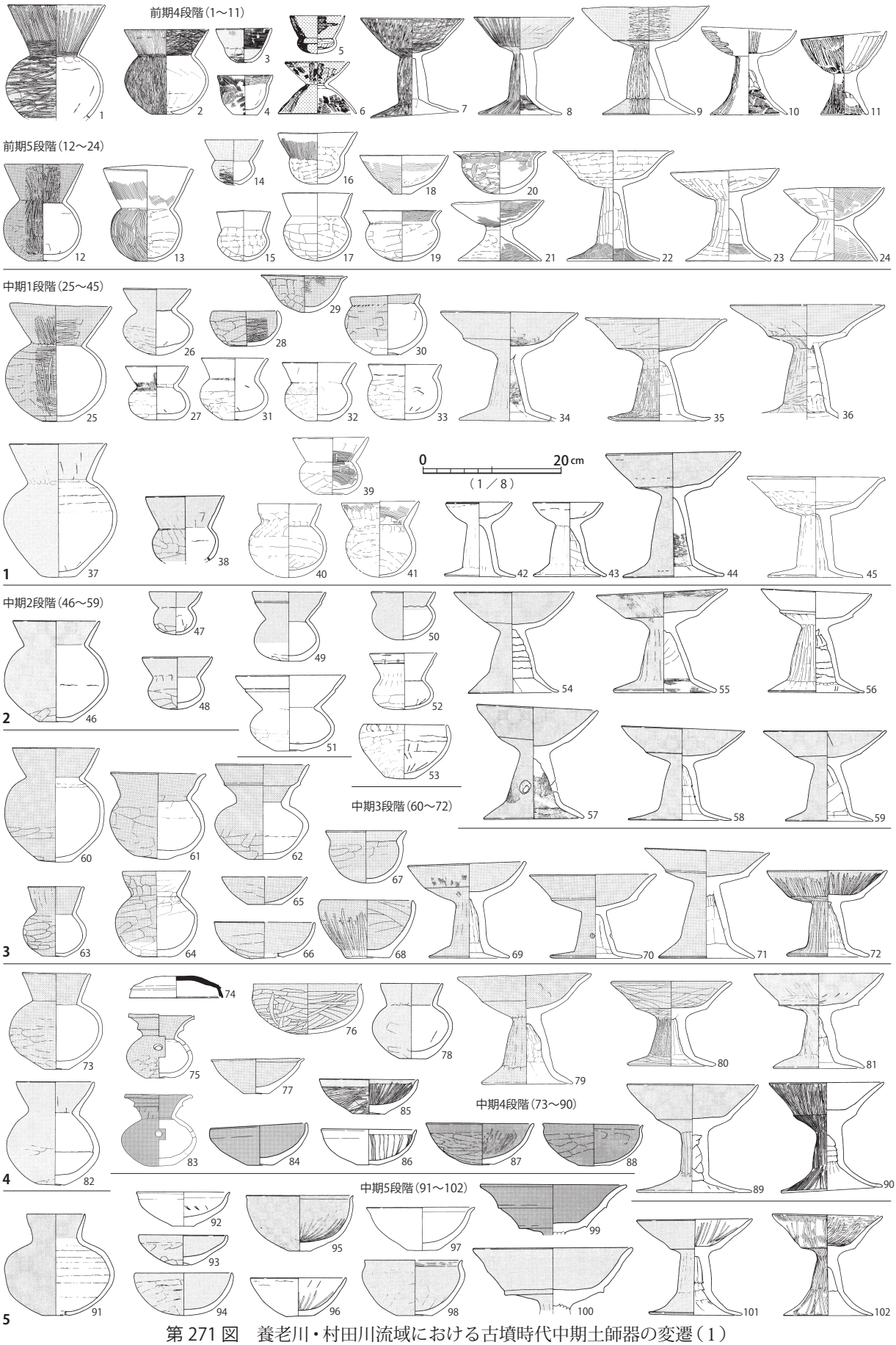
（2）段階設定　前期後半の段階については、草刈3－1式：前期4段階、草刈3－2式：前期5段階とする（大村2009、小橋2025）。中期については、養老川流域の椎津茶ノ木遺跡（木對1992・1993）・南岩崎遺跡（大村2006）・御林跡遺跡（II）（木對2008）の各編年、村田川流域の草刈六之台遺跡（白井1994a）、草刈遺跡群（白井・木原2012）の各編年、広域を対象とした房総編年（小沢1999）を参考に、近年報告資料で補い、以下の10段階を設定する（第271・272・276・277図）。

前項の形態・技法・組成の様相把握を踏まえ、大まかな変遷を追うと以下のように概括できる。土師器の変遷過程の把握を主眼とするため、各段階資料に伴出する須恵器については一部を提示し先後の目安を示す程度にとどめる（田辺1981）。

【中期1】高杯は口縁が外反、口径が増大し長脚化する（44）。粗製小型丸底壺・鉢の残存（39～41）。非精製の小型器台と高杯の折衷形態が散見される（42・43）。直口壺は器高に占める口縁部高の比率が低下、ヘラミガキの省略される割合が高まる（37）。須恵器出現以前。

基準資料：草刈遺跡E区012・074（小林・大谷2006）、草刈遺跡J区012（小林2007）、山新遺跡SI8・SI9（北見・坂元2018）。

【中期2】高杯脚柱部が太くなり最小径と屈折部径の差がおよそ1：1.9以上まで拡大、中位で膨張する（54～56）。杯部高は器高に対し4割に満たない。非精製の小型土器が残存（47・48・50）。須



第 271 図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（1）

恵器模倣口縁壺が散見される（49・51・52）。TG232型式。

基準資料：草刈遺跡E区050・076・150（小林・大谷2006）

【中期3】高杯の器高に対する杯部高の割合が上昇し、杯底部径が拡大。平底杯（65）が出現。壺類に有段口縁等、須恵器模倣が散見される（62）。直口壺の頸部屈曲は弱くなる。TK73型式古相。

基準資料：川焼台遺跡577（蜂屋他2009）

【中期4】高杯の短脚化・杯部深化。平底杯（84）・外折口縁平底杯（77）・内面ヘラミガキ杯・鉢（85～87）・碗形模倣壺（75・83）が出現。丸底杯も伴う可能性があるが僅少である。直口壺胴部は球形化が進む（73）。TK73型式新相。

基準資料：草刈遺跡D区136・148・160（小林・大谷2006）、草刈遺跡K区413（小林・麻生2007）、御林跡遺跡（II）83号（木對他2008）

【中期5】高杯の器高・杯底部径が縮小。杯部高比率が高まり相対的に杯部が深くなる。平底杯（92・93）と椀形丸底杯（94）が混在。杯・鉢・椀は若干深くなる。二重外反口縁高杯（99・100・114）が散見。直口壺胴部最大径が拡大する（91・103）。TK216型式古相。

基準資料：草刈遺跡E区054・069・073・093（小林・大谷2006）、草刈遺跡J区162（小林2007）

【中期6】高杯は短脚化が進行。杯部は深いまま底径が拡大し、口縁の外反が弱まる（126・136）。サイズ分化により大型高杯（128・137）が現れる。椀形杯が主体化し、外折口縁杯も丸底化する（117）。杯口径が拡大し（122・123・130）、半球状の深い形態（131）が出現、赤彩文が散見される（124）。直口壺の口縁部高が拡大し、球胴化が進む（115・129）。壺の各形式が丸底化。碁石入れに似た椀もしくは短頸壺（119）に円柱状つまみ付の蓋（118）が組み合う。椀・短頸壺は球胴化が進む（125・135）。屈折口縁鉢・椀形杯・椀の一部は、内面にヘラミガキと放射状暗文が加えられる（117・133・135・138・139）。TK216型式。

基準資料：台遺跡E地点100号（小川他2018）、御林跡遺跡（II）144・170号（木對他2008）・草刈遺跡E区108（小林・大谷2006）

【中期7】高杯は小型化し、平底杯部と椀形杯部の過渡的な形態が混在する（144・146・150・151・153）。大型高杯は明確に形式として分離する（147・158）。暗文状ヘラミガキ技法と同様、布留式等の影響と見られる（中野2021）。杯は椀形杯が主体で若干小型化する。杯（143）のほか、平底の深い鉢（140）、外折口縁杯（154）等に内面ヘラミガキ・放射状暗文が施されるが比率は低下する。直口壺の胴部は算盤玉状に張る（148）。TK216型式新相～TK208型式ON46号窯段階。

基準資料：草刈六之台遺跡121・138（白井他1994）、草刈遺跡J区100（小林2007）、潤井戸遺跡群西ノ崎地区SI34（川上2025）

【中期8】高杯は短脚椀形が主体で、大型高杯（175）も散見される。脚裾部は明確に屈折し、裾部幅が広い。須恵器模倣（183）のほか、ヘラミガキ仕上げの須恵器模倣精製土師器（184）、草刈型土器（赤焼き須恵器）（188）の高杯が認められる。杯は基本的に椀形杯で、内底面平坦部が広い傾向にあり、側面が急角度に立ち上がる形態が多い。須恵器模倣形態も出現する（170・176）。鉢（171・174）は深くなり、椀（165）・短頸壺（181）は胴部球形化が進む。直口壺は口縁部が短く直立気味になって頸部が締まり、胴部が球形化する（159・167）。外折口縁杯は脱落する。杯・鉢・椀類の内面ヘラミガキは僅少になる。TK208型式。



第 272 図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（2）

基準資料：海保小谷作遺跡SM005（大山他2014）、加茂遺跡A・B地点113号（浅利他2005）、草刈六之台遺跡770（白井他1994）、川焼台遺跡340（蜂屋他2009）、草刈遺跡D区184（小林・大谷2006）、草刈遺跡E区063（小林・大谷2006）

【中期9】椀形高杯の脚柱上部は中実の範囲が拡大し、脚裾部屈折は不明瞭化する（197・208）。杯部の浅いタイプが増加し（195・209・212）、大型高杯も浅いものが認められる（213）。須恵器模倣（杯・高杯）（191・201）（194・195）・須恵器模倣精製土師器（高杯）（210）・草刈型土器（赤焼き須恵器）（高杯他）が伴う。杯も浅くなり口径が縮小した椀形杯（202・203）が増加。直口壺は胴部が扁球化し、口縁部の比率が増大する（200）。短頸壺・椀の胴部は最大径位置が下降し下膨れに近づく（204・205）。TK23型式。

基準資料：草刈遺跡E区027・064・101・162（小林・大谷2006）、川焼台遺跡334（蜂屋他2009）、椎津茶ノ木遺跡99号（木對1992）

【中期10】椀形高杯は口径が縮小、杯部高の割合が低下し、長脚化が進む（219・220）。脚裾部は屈曲が目立たなくなり、ハの字に広がるものが主体となる（219・222）。杯は開放口縁の椀形杯（216・217）が主体。須恵器模倣杯・高杯も伴う（218・221）。TK47型式。

基準資料：椎津茶ノ木遺跡103・164号（木對1992）、加茂遺跡A・B地点214号（浅利他2005）、御林跡遺跡（II）17号（木對他2008）

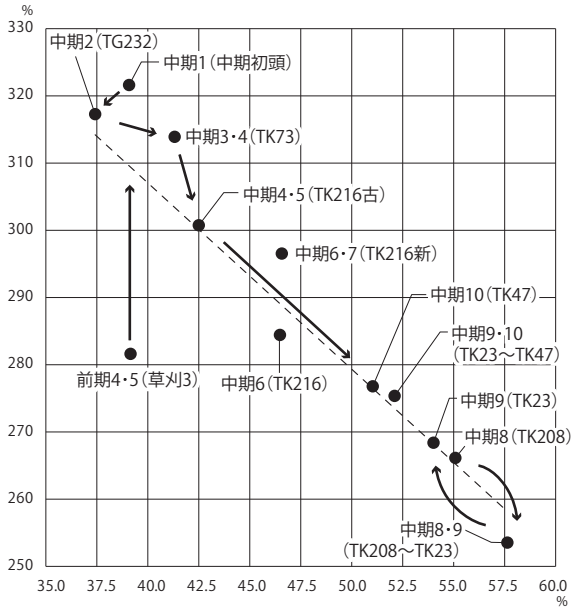
3. 形態変化の方向性と画期

中期1から中期6段階が和泉式、中期7段階が移行期、中期8から中期10段階が鬼高式古段階に相当する。寸法・比率の面でも中期8段階以降の高杯は明確に分離しており、平底高杯から椀形高杯への変化は大きな画期と言える。

高杯・杯の形態変化について各段階の計測値と平均を踏まえ傾向を示すと以下の通りである。グラフは平均値の推移で変化の方向性を読み取るもので、最小・最大値は変異幅の参考として挙げた。また、各数値はスキャンした実測図画像を計測したものであり、遺物観察表と異なる場合がある。

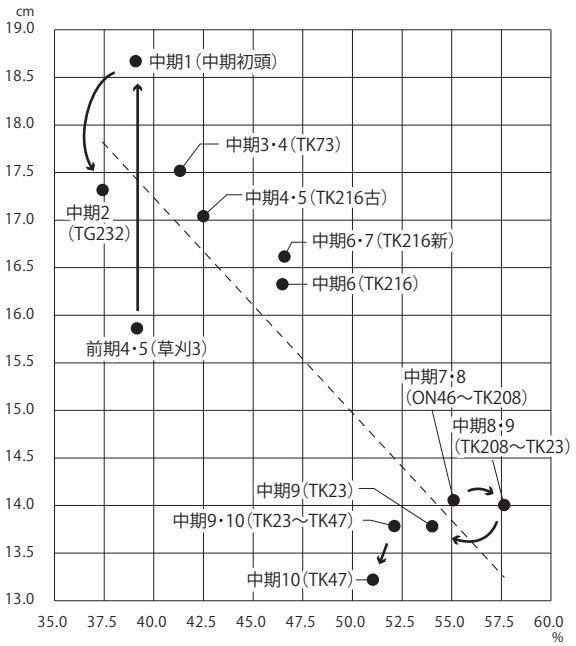
高杯　中期初頭にあたる1段階は、口径20cm程度、器高15cm以上の大型で外反口縁の高杯が出現する（34・44）。器高に対する杯部高の割合は平均で40％未満であり、前期5段階と近似するが、口径：杯部高の平均は約2.8倍から約3.2倍と拡大を示す（第273図）。形態面では、1段階：口径・器高の最大化→2段階：脚柱中位膨張明瞭化→3段階：杯底部径拡大、の順に特徴的な変遷が認められる。4段階以降に杯部は深さを増しながら底部径が縮小していく。5段階から6段階にかけて器高に対する杯部高の割合が高まり、平均で45％近くに達する。短脚化は中期1段階から過渡的な椀形高杯が現れる7段階まで一貫して進行するが、椀形高杯が主体となる8段階には杯部比率が55％を超え、断絶的な様相が認められる。平均口径は中期1段階に最大化してから、10段階まで一貫して低下する（第273図）。平均器高は7段階に約12cm、8段階に約10cm弱まで低下してから、基本的に後期前半に至るまで上昇に転じない（第273図下表）。椀形高杯は8段階から9段階の過渡的な資料で杯部が最も深くなり、その後、10段階に向けて口径の縮小と併行し、口径：杯部高比率が約2.7倍から約2.8倍へ上昇、相対的に杯部が浅くなる傾向を示す（第274図）。

杯　前期5段階から中期1段階に継続する小型壺・鉢形式と交代するかたちで、中期3段階には平



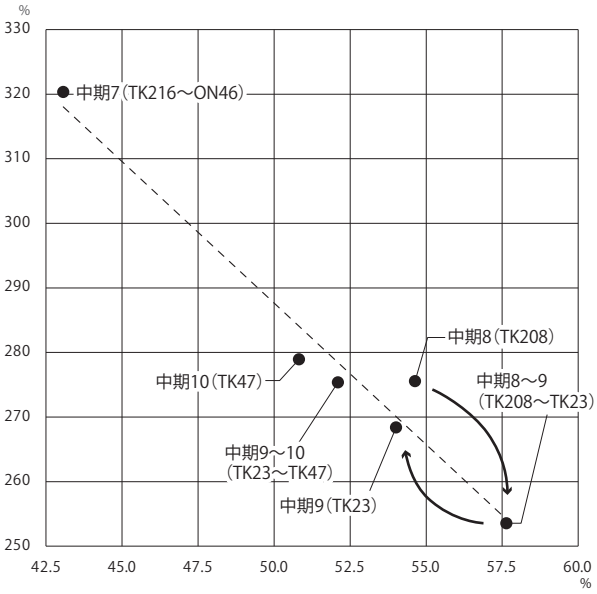
時期・段階	型式等	資料数	x 杯高比率（%）	y 口径高比（%）	杯高：器高比（%）		口径：杯高比（%）	
					最小	最大	最小	最大
前期 4・5	草刈 3	14	39.1	281.6	33.2	44.5	222.4	368.5
中期 1	中期初頭	13	39.1	321.6	33.2	45.1	246.3	396.6
中期 2	TG232	11	37.4	317.3	33.7	42.4	263.4	365.0
中期 3・4	TK73	19	41.3	313.9	30.8	49.1	225.3	373.3
中期 4・5	TK216 古	4	42.5	300.7	38.0	45.7	252.5	342.5
中期 6	TK216	25	46.5	284.4	39.4	52.4	239.3	329.2
中期 6・7	TK216 新	10	46.6	296.5	43.1	53.1	261.5	320.3
中期 8	TK208	13	55.1	266.1	50.8	60.4	201.2	309.1
中期 8・9	TK208 ～ TK23	18	57.6	253.5	47.3	65.8	190.2	345.5
中期 9	TK23	28	54.0	268.4	45.7	59.3	216.9	318.0
中期 9・10	TK23 ～ TK47	24	52.1	275.4	45.5	60.0	227.5	313.6
中期 10	TK47	6	51.0	276.8	44.2	56.1	254.1	317.0
	計	185						
稲荷台 1 号墳平均		4	55.8	287.3				

時期・段階	計測対象遺構【資料数】
前期 4・5	草刈 D028【2】・草刈 D133【1】・小谷作 SI099【1】・小谷作 SI108【1】・小谷作 SI122【2】・草刈 H713【1】・草刈 K013【2】・草刈 K335【1】・草刈 K336【1】・六之台 24【2】
中期 1	六之台 1014【2】・海保三山塚古墳【1】・山新 SI8【1】・山新 SI9【2】・山新 S28【1】・草刈 E012【1】・草刈 E074【1】・草刈 J012【1】・草刈 K427【3】
中期 2	草刈 E016【1】・草刈 E048【1】・草刈 E050【2】・草刈 E076【2】・草刈 E150【2】・草刈 J122【3】
中期 3・4	御林跡 II83【1】・川焼台 577【7】・草刈 D136【1】・草刈 D146【2】・草刈 D148【2】・草刈 D160【1】・草刈 E093【3】・草刈 K413【1】・六之台 733【1】
中期 4・5	草刈 E054【2】・御林跡 II241【2】
中期 6	加茂 AB239【1】・御林跡 II58【2】・御林跡 II110【1】・御林跡 II144【1】・御林跡 II240【1】・御林跡 II348【2】・台 E100【17】
中期 6・7	台 E44【5】・台 E92【4】・草刈 J100【1】
中期 8	潤井戸西ノ崎 SI34【1】・六之台 138【1】・六之台 770【1】・加茂 AB113【6】・稲荷台 1 号墳【4】
中期 8・9	加茂 AB169【7】・加茂 AB204【1】・草刈 E109【1】・草刈 E140【2】・六之台 211【1】・六之台 478【5】・東間部多 1 号墳【1】
中期 9	加茂 AB79【2】・加茂 AB208【1】・加茂 D6【1】・川焼台 334【2】・草刈 E027【5】・草刈 E162【16】・鼻欠 4 号墳【1】
中期 9・10	加茂 AB109【6】・加茂 AB189【3】・加茂 AB213【1】・加茂 AB214【8】・御林跡 II17【3】・草刈 E064【1】・草刈 E101【1】・草刈 E108【1】
中期 10	潤井戸西ノ崎 SI37【3】・椎津茶ノ木 103【1】・椎津茶ノ木 164【1】・椎津茶ノ木 175【1】



時期	型式等	資料数	x 杯高比率（%）	y 平均口径（cm）	平均器高（cm）	器高（cm）		杯高：器高比（%）		口径（cm）	
						最小	最大	最小	最大	最小	最大
前期 4・5	草刈 3	14	39.1	15.86	14.56	13.12	17.20	33.2	44.5	13.52	19.20
中期 1	中期初頭	13	39.1	18.67	15.05	9.76	17.92	33.2	45.1	13.68	22.08
中期 2	TG232	11	37.4	17.32	14.67	13.12	16.64	33.7	42.4	15.68	20.24
中期 3・4	TK73	19	41.3	17.52	13.72	11.76	15.68	30.8	49.1	15.76	20.16
中期 4・5	TK216 古	4	42.5	17.04	13.40	13.04	14.00	38.0	45.7	15.60	20.00
中期 6	TK216	25	46.5	16.33	12.44	10.86	14.31	39.4	52.4	15.15	18.40
中期 6・7	TK216 新	10	46.6	16.62	12.08	10.95	13.65	43.1	53.1	15.12	18.81
中期 7・8	ON46 ～ TK208	13	55.1	14.06	9.72	7.68	12.56	50.8	60.4	12.56	16.08
中期 8・9	TK208 ～ TK23	18	57.6	14.00	9.75	8.08	11.50	47.3	65.8	12.48	15.36
中期 9	TK23	28	54.0	13.78	9.59	7.84	10.96	45.7	59.3	12.16	15.52
中期 9・10	TK23 ～ TK47	24	52.1	13.79	9.67	8.40	10.72	45.5	60.0	12.56	16.56
中期 10	TK47	6	51.0	13.22	9.41	9.12	9.76	44.2	56.1	12.40	13.88
	計	185									
稲荷台 1 号墳平均		4	55.8	13.20							

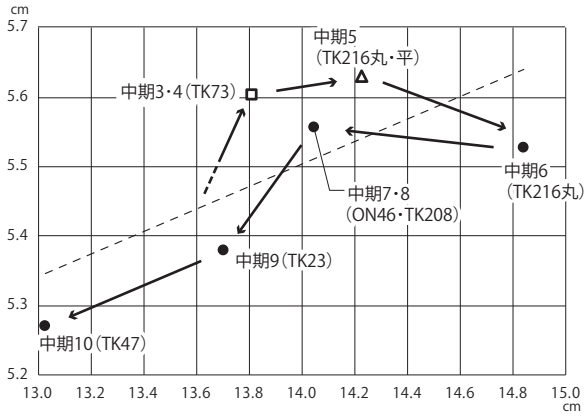
第 273 図　古墳時代中期土師器高杯形土器の形態変化



時期	型式	対象数 87 点	x 杯高比率（%）	y 口径高比（%）
中期 7	TK216 ～ ON46	1	43.1	320.3
中期 8	TK208	11	54.6	275.6
中期 8 ～ 9	TK208 ～ TK23	18	57.6	253.5
中期 9	TK23	28	54.0	268.4
中期 9 ～ 10	TK23 ～ TK47	24	52.1	275.4
中期 10	TK47	5	50.8	278.9
稲荷台 1 号墳平均		4	55.8	287.3

時期	計測対象遺構【資料数】
中期 7	草刈 J100【1】 ＜参考＞
中期 8	六之台 770【1】・加茂 AB113【6】・稲荷台 1 号墳【4】
中期 8 ～ 9	加茂 AB169【7】・加茂 AB204【1】・草刈 E109【1】・草刈 E140【2】・六之台 211【1】・六之台 478【5】・東間部多 1 号墳【1】
中期 9	加茂 AB79【2】・加茂 AB208【1】・加茂 D6【1】・川焼台 334【2】・草刈 E027【5】・草刈 E162【16】・鼻欠 4 号墳【1】
中期 9 ～ 10	加茂 AB109【6】・加茂 AB189【3】・加茂 AB213【1】・加茂 AB214【8】・御林跡 II17【3】・草刈 E064【1】・草刈 E101【1】・草刈 E108【1】
中期 10	潤井戸西ノ崎 SI37【2】・椎津茶ノ木 103【1】・椎津茶ノ木 164【1】・椎津茶ノ木 175【1】

第 274 図　古墳時代中期椀形高杯形土器の形態変化



（cm）

時期	型式・段階	x 平均口径	y 平均器高	対象数 365 点	口径 最小	口径 最大	器高 最小	器高 最大
中期 2	TG232 ～ TK73	12.24	4.08	1	－	－	－	－
中期 3・4	TK73	13.81	5.60	45	11.60	18.32	4.32	6.72
中期 5	TK216 丸・平	14.23	5.63	59	14.00	15.92	4.72	5.76
中期 6	TK216 丸	14.84	5.53	66	13.04	16.95	4.24	7.12
中期 7・8	ON46・TK208	14.04	5.56	101	11.36	16.52	4.00	6.40
中期 9	TK23	13.70	5.38	73	10.72	15.28	4.48	6.16
中期 10	TK47	13.03	5.27	20	10.56	14.96	4.88	7.04

時期	計測対象遺構【資料数】　※最小・最大値計測対象
中期 2	草刈 J071【1】＜参考＞
中期 3・4	川焼台 577【4】・草刈 D148【5】・草刈 D160【5】・※草刈 E093【21】・六之台 742【8】・草刈 D418【2】
中期 5	六之台 733【2】・草刈 E129B【5】・草刈 D146【5】・六之台 195【4】・草刈 E073【5】・※六之台 125【10】・御林跡 II102【7】・御林跡 II110【8】・御林跡 II170【7】・草刈 J107【6】
中期 6	台 E44【5】・台 E92【2】・台 E96【2】・※台 E100【19】・草刈 E108【3】・※川焼台 140【12】・六之台 121【9】・草刈 J100【8】・鼻欠 5 号墳【6】
中期 7・8	川焼台 113【4】・草刈 E107【3】・川焼台 37 号墳【3】・御林跡 II159【7】・草刈 E023【3】・椎津茶ノ木 130【12】・草刈 D290【4】・草刈 E063【9】・※海保小谷作 SM005【16】・六之台 203【7】・六之台 770【8】・※加茂 AB66【13】・加茂 AB113【12】
中期 9	加茂 AB22【9】・東間部多 1 号墳【4】・※草刈 D184【9】・草刈 E140【7】・鼻欠 4 号墳【4】・六之台 211【8】・草刈 E109【6】・椎津茶ノ木 99【5】・※草刈 E064【13】・六之台 478【2】・川焼台 334【4】・草刈 E101【2】
中期 10	※草刈 D144【16】・椎津茶ノ木 164【2】・潤井戸西ノ崎 SI37【2】

第 275 図　古墳時代中期杯形土器の形態変化

底杯が出現する。4 ～ 5 段階に丸底の椀形杯が出現、併存し、6 段階で杯は丸底に統一される。口径と器高の変遷を見ると、口径は、3･4 段階の平均約 13.8cm から 5 段階の約 14.2cm、6 段階の約 14.8cm と大型化したのち、7･8 段階の約 14.0cm、9 段階の約 13.7cm、10 段階の約 13.0cm と急激な縮小傾向をたどる（第 275 図）。器高についても、3 ～ 8 段階では平均約 5.5 ～ 5.6cm の範囲にあるが、9 段階に約 5.4cm、10 段階に約 5.3cm と縮小していく。形状は、内底面の平坦部が広く、小さく内弯する口縁を持つ形態から、開放口縁で浅く、丸みを帯びた内底面を持つ形態へと変化する。

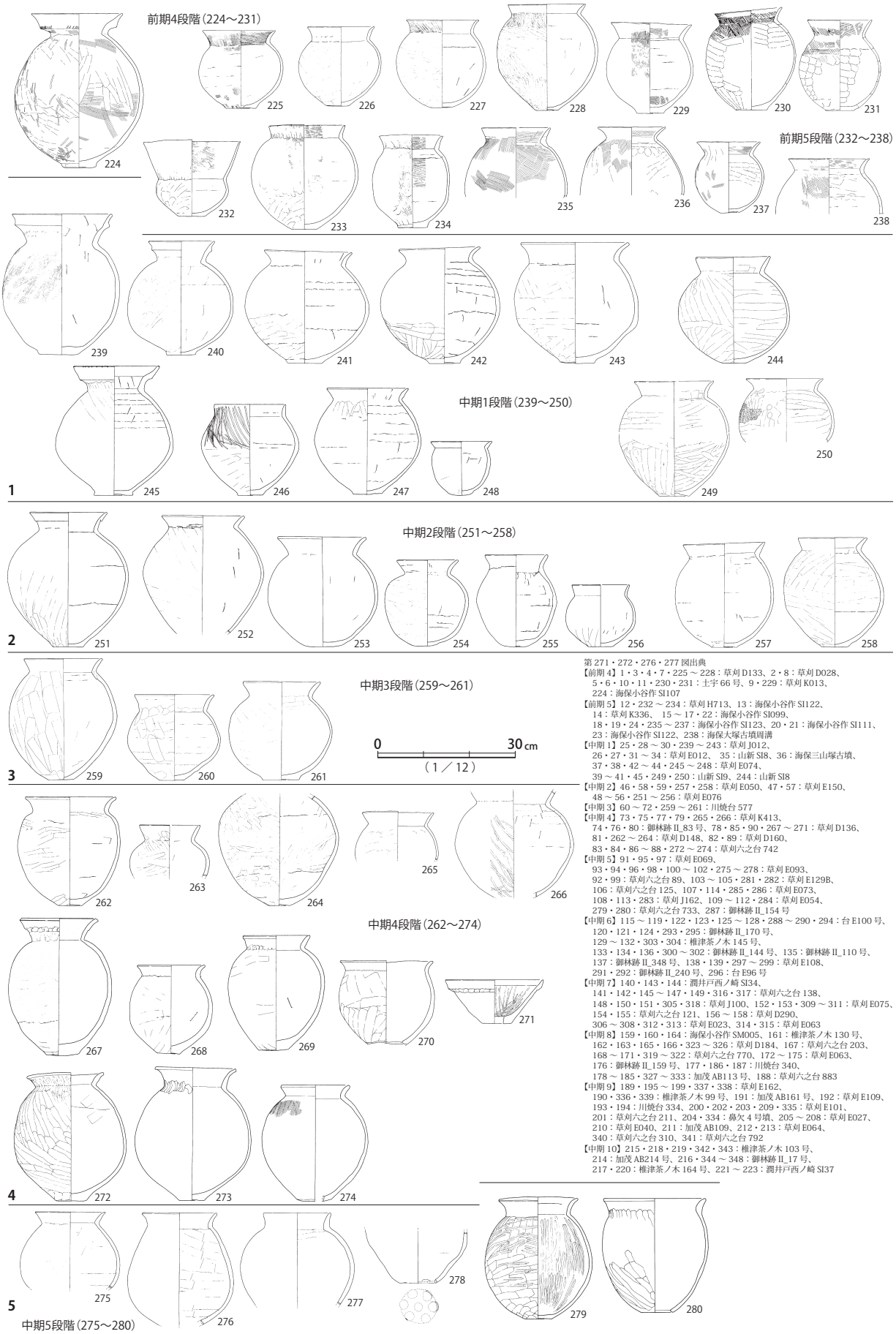
中型直口壺　出土例数が杯･高杯と比べ少ないため、他器種との共伴関係に基づき変遷を追う。前期 4･5 段階（草刈 3 式）には、ヘラミガキ仕上げが行われ、器高に対する口縁部高の比率も大きいが、中期 1 段階以降、ヘラミガキ仕上げは脱落傾向にあり、8 段階まで口縁部比率が低下していく。口縁部は 9 段階以降に再度、長大化し、後期前半へ継続する。胴部は中期 1 段階から 3 段階まで長胴傾向にあるが、4 段階以降に球形胴を経て扁球化が進行する。6 ～ 7 段階の算盤玉形に近い胴部形態は時期的な特徴と見られる。形態変化の画期は 6 段階での丸底化である。小型丸底（系）壺については、前期 4･5 段階から丸底を呈する個体もごく稀に見られるが（第 271 図 5･15･17）、海保小谷作遺跡（SI108･SI112･SI114･SI117）（大山他 2014）において布留形甕影響のハケメ調整丸底甕が伴うなど、遺跡単位の個性･特質を反映する可能性を想定できるため、それをもって地域全体の動向と捉えるのは難しい。

その他の器種については段階ごとの大まかな変遷について述べる。

甕･甑　前期のハケメ調整甕は前期前葉、草刈 1 式期において顕著に球胴化した後、前期 4･5 段階、草刈 3 式期に向け長胴化が進む（大村 2009）。中期 1 段階にナデ仕上げが主体となるとともに再び胴部球形化志向となり、中期 4 段階、TK73 型式期ごろに、やや長胴化し胴部中位に最大径を持つものが認められる。以後は、カマド導入の影響を受けた可能性が高く、養老川･村田川流域でのカマド普及期である 6 段階、TK216 型式期を境に長胴化が進む。甑は、前期段階には専用品は少なく、底部穿孔による甕転用品が大部分を占める。中期 4 段階ごろに甕転用品（270）、鉢型（271）の甑があり、韓式系模倣の多孔甑が 5 段階ごろに散発的に見られる。以後は、単孔（底面開放）の甕形･砲弾形が長胴化しながら基本組成に加わる。

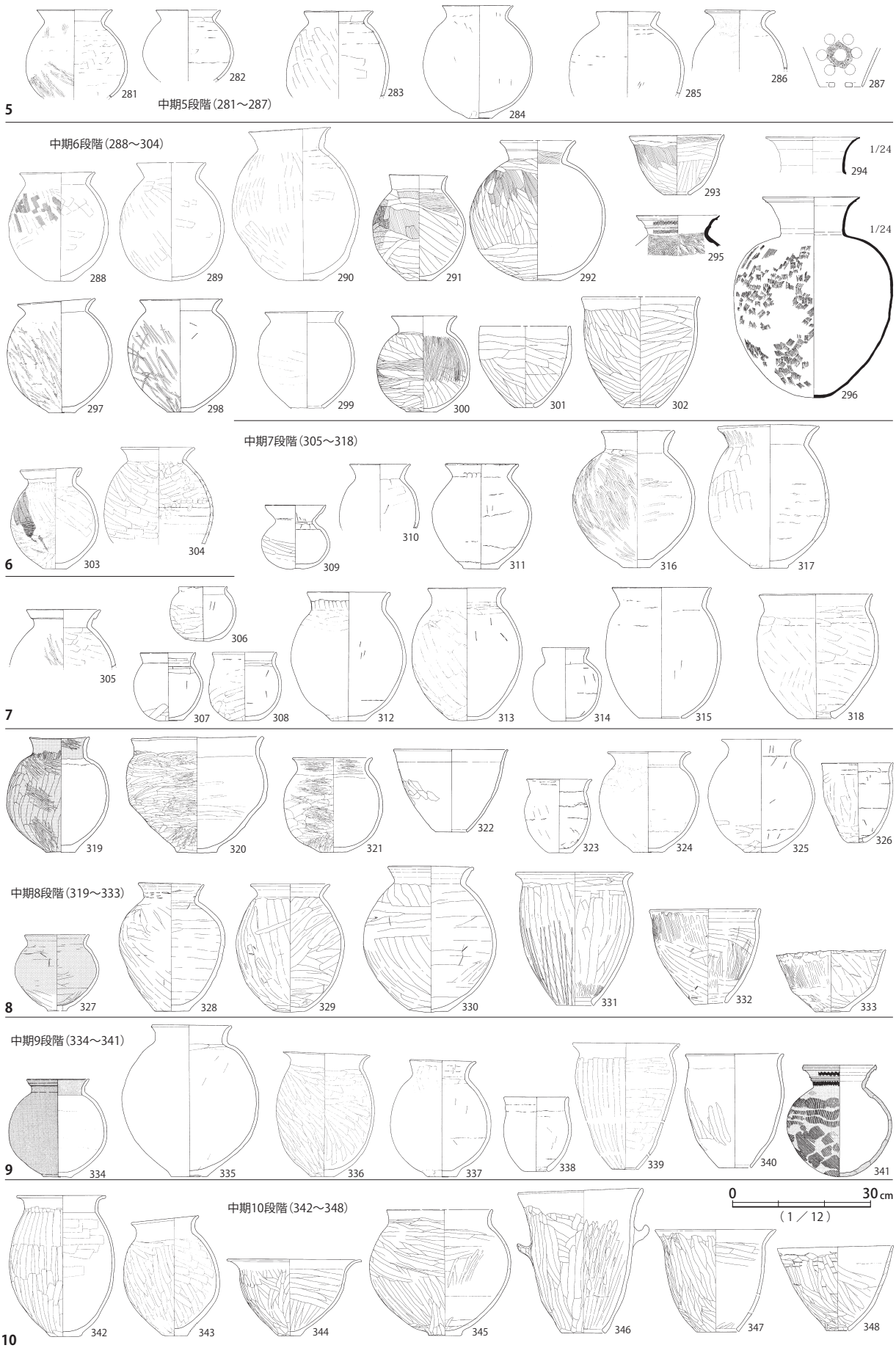
広口壺･大型壺　概ね中型直口壺に類した変化を辿る。前期 4 段階から中期 1 段階にかけては、二重口縁壺に由来する複合口縁広口壺が認められる（224･239･240･245）。折り返し状の複合口縁壺は中期 2 段階以降にも少数が認められる（251･303･305）。須恵器模倣形態は 4 段階以降に散見されるようになる（267･292･334）。

器種横断的に丸底化を達成し、カマドに対応した煮沸形態の普及する中期6段階が、土器様式として安定した様相を呈する。和泉式は、古段階として平底杯定着以前の1･2段階、中段階として平底杯が普及する3･4段階、新段階として丸底杯が追加･普及する5･6段階に区分可能である。和泉式の特徴的要素である、脚柱中位の膨らむ高杯は2･3段階、平底杯は4･5段階にそれぞれ主体的に組成することになる。続く7段階は和泉式最新段階であり、鬼高式最古段階とも言え、古墳時代中期土師器の過渡期･移行期と捉えられる。鬼高式は、8段階の古段階古相、9･10段階の古段階新相に分けられる。



第 271・272・276・277 図出典
【前期 4】1・3・4・7・225 〜 228：草刈 D133、2・8：草刈 D028、
5・6・10・11・230・231：土宇 66 号、9・229：草刈 K013、
224：海保小谷作 SI107
【前期 5】12・232 〜 234：草刈 H713、13：海保小谷作 SI122、
14：草刈 K336、 15 〜 17・22：海保小谷作 SI099、
18・19・24・235 〜 237：海保小谷作 SI123、20・21：海保小谷作 SI111、
23：海保小谷作 SI122、238：海保大塚古墳周溝
【中期 1】25・28 〜 30・239 〜 243：草刈 J012、
26・27・31 〜 34：草刈 E012、 35：山新 SI8、36：海保三山塚古墳、
37・38・42 〜 44・245 〜 248：草刈 E074、
39 〜 41・45・249・250：山新 SI9、244：山新 SI8
【中期 2】46・58・59・257・258：草刈 E050、47・57：草刈 E150、
48 〜 56・251 〜 256：草刈 E076
【中期 3】60 〜 72・259 〜 261：川焼台 577
【中期 4】73・75・77・79・265・266：草刈 K413、
74・76・80：御林跡 II_83 号、78・85・90・267 〜 271：草刈 D136、
81・262 〜 264：草刈 D148、82・89：草刈 D160、
83・84・86 〜 88・272 〜 274：草刈六之台 742
【中期 5】91・95・97：草刈 E069、
93・94・96・98・100 〜 102・275 〜 278：草刈 E093、
92・99：草刈六之台 89、103 〜 105・281・282：草刈 E129B、
106：草刈六之台 125、107・114・285・286：草刈 E073、
108・113・283：草刈 J162、109 〜 112・284：草刈 E054、
279・280：草刈六之台 733、287：御林跡 II_154 号
【中期 6】115 〜 119・122・123・125 〜 128・288 〜 290・294：台 E100 号、
120・121・124・293・295：御林跡 II_170 号、
129 〜 132・303・304：椎津茶ノ木 145 号、
133・134・136・300 〜 302：御林跡 II_144 号、135：御林跡 II_110 号、
137：御林跡 II_348 号、138・139・297 〜 299：草刈 E108、
291・292：御林跡 II_240 号、296：台 E96 号
【中期 7】140・143・144：潤井戸西ノ崎 SI34、
141・142・145 〜 147・149・316・317：草刈六之台 138、
148・150・151・305・318：草刈 J100、152・153・309 〜 311：草刈 E075、
154・155：草刈六之台 121、156 〜 158：草刈 D290、
306 〜 308・312・313：草刈 E023、314・315：草刈 E063
【中期 8】159・160・164：海保小谷作 SM005、161：椎津茶ノ木 130 号、
162・163・165・166・323 〜 326：草刈 D184、167：草刈六之台 203、
168 〜 171・319 〜 322：草刈六之台 770、172 〜 175：草刈 E063、
176：御林跡 II_159 号、177・186・187：川焼台 340、
178 〜 185・327 〜 333：加茂 AB113 号、188：草刈六之台 883
【中期 9】189・195 〜 199・337・338：草刈 E162、
190・336・339：椎津茶ノ木 99 号、191：加茂 AB161 号、192：草刈 E109、
193・194：川焼台 334、200・202・203・209・335：草刈 E101、
201：草刈六之台 211、204・334：鼻欠 4 号墳、205 〜 208：草刈 E027、
210：草刈 E040、211：加茂 AB109、212・213：草刈 E064、
340：草刈六之台 310、341：草刈六之台 792
【中期 10】215・218・219・342・343：椎津茶ノ木 103 号、
214：加茂 AB214 号、216・344 〜 348：御林跡 II_17 号、
217・220：椎津茶ノ木 164 号、221 〜 223：潤井戸西ノ崎 SI37

第 276 図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（3）



第 277 図　養老川・村田川流域における古墳時代中期土師器の変遷（4）

4. 稲荷台 1 号墳出土土師器の概要

稲荷台1号墳は、古代道西側に広がる公的施設の可能性が高い稲荷台遺跡と重複しており、埋没した周溝上にも平安時代の竪穴建物跡が複数構築されている（第5図）（浅利他2003）。一方、築造前後の古墳時代の居住域は近隣に検出されていないため、1号墳出土の古墳時代中期土器類は、古墳に伴うと限定できる。出土位置の記録された土器は少なく、周溝北側覆土最下層の須恵器杯身1点、周溝北西部墳丘側の杯1点、周溝南部周溝内高杯3点の5点のみである（第8図）。その他は、南北-東西軸で設定されたセクションベルト間、NW・NE・SW・SE区画の掘り下げ段階ごとの一括取り上げ資料である（第1表遺物観察表）。

5. 稲荷台 1 号墳出土土師器の編年的位置づけ

高杯 24・25・26・27　脚柱上部が円筒状になり接合部の杯部外底面が凹むつくりは、椀形高杯の古相に見られる特徴である。脚柱上部が中実になるタイプ、脚裾部がハの字に広がり屈折しないタイプに先行する（小沢 1999）。稲荷台 1 号墳出土高杯 24・25・26・27 の形状は 8 段階の様相と合致する。口径・器高はやや低めだが、口径：杯部高の比率は約 2.8 と 8 段階の椀形高杯の変異幅におさまるものと思われる（第 273 図）。その他の破片資料も遺存の良い個体と大きく異なるところはないため、同様に評価できる。なお、杯部内面がほとんど摩滅せず赤色顔料の塗刷毛擦痕と見られる条線を観察できる個体が認められるため、少なくとも高杯については生活用具の転用ではなく儀礼用品として製作された可能性がある。この生産面の脈絡が形態的特徴のまとまり、偏りに影響を与えたとも考えられる。

杯 20　ほぼ全形がわかる杯は本資料のみである。口径・器高の各段階平均値を参照すると、口径 14.3cm、器高 5.8cm は、7 ～ 8 段階に概ね合致する（第 275 図）。形状も、口縁が 9・10 段階のように開放気味にならず、平均より深い点において齟齬はない。

壺 19　口縁部から肩部にかけての破片接合資料で全体形は不明である。しかし、弱く内弯する短い口縁部と扁球状と推定される胴部は 8 段階の直口壺（第 272 図 159・167）に近似する。杯・高杯と同じく、8 段階に帰属する可能性が高い。

各器種の形態的特徴は中期8段階の様相と合致し、周溝北側最下層出土の須恵器杯身はTK208型式新相と位置付けられている（白石1988、藤野論考（第4章第5節））。中央・北、いずれの埋葬施設に伴うかを出土状況から特定するのは難しいが、1号墳出土の古墳時代土師器は、周辺遺構分布状況から混入の可能性がきわめて低いため、下層出土土器は築造契機となった中央埋葬施設に伴うと想定できよう。その他の破片資料も基本的に同様に位置付けられ、積極的に2時期に分けられるほどの形態差は認められない。下っても北埋葬施設構築時までの時間幅に帰属すると考えられる。

6. 周辺事例との比較

稲荷台1号墳に近い規模の中型・小型円墳から出土した土師器を概観する（第278図）。

袖ケ浦市鼻欠 5 号墳（墳丘直径 20.0m）（井口・光江 1984）：中期 6 段階。内面ヘラミガキ杯 6（うち放射状暗文 5）・丸底中型直口壺 1 が周溝から出土。技法的特徴と杯寸法分布が 6 段階の様相と合致する。須恵器は出土していないが TK216 型式期新相段階に相当すると思われる。

市原市草刈 A 区 108 号（墳丘直径 12.5m）（小久貫他 1983）：中期 6 ～ 7 段階。杯 2 以上が出土。口径 16cm 弱と大ぶりで半球形に近い杯は、6 段階の様相に近い。須恵器は把手付椀 1・杯身 1 が伴う。把手付椀に近似する例は、姉崎古墳群原 1 号墳下層の原遺跡 23 号竪穴出土例（越川他 1984、白井 2012b）があり、竪穴建物群は 6 段階の姉崎二子塚古墳築造に関わった可能性のある集落と位置付けられている（白井 2012b）。原遺跡 23 号竪穴例が TK216 型式新相から TK208 型式 ON46 号窯段階前後とすれば、把手付椀と杯身も同時期と見られ、6 ～ 7 段階との想定に齟齬はない。

市原市草刈 37 号墳（墳丘直径 20.8m）（蜂屋他 2009）：中期 7 段階。杯 3 以上が周溝から出土。須恵器大型甕が伴う。杯は草刈 A 区 108 号例と同様に大ぶりだが、やや浅いつくりで 7 段階の様相と合致する。同一調査区には 6 ～ 7 段階の土器が伴う草刈 34 号墳（15.4m）等が検出されている。

市原市海保大塚遺跡第 2 地点 SM015（墳丘直径約 15m）（大山・北森 2018）：中期 7 ～ 8 段階。杯 1・赤彩された甕形を呈する広口壺 1・長胴化した甕 1 が周溝から出土。杯は寸法が平均的な 7 ～ 8 段階の様相と近似する。須恵器は、周溝内から TK208 型式期 ON46 号窯段階と見られる甕が破片化して検出されている。

市原市牛久石奈坂 1 号墳（墳丘直径 29.8m）（浅野他 2021）：中期 7 ～ 8 段階。椀形杯 1 が墳丘盛土下の旧表土層直上で検出。口径が 15.8cm と大きく、口縁も外に張り出す形態で椀形杯としては古相を示す。埋葬施設 2 基に伴う副葬品は TK208 型式期（ON46 号窯段階～ TK208 号窯段階）と位置づけられており、齟齬はない。

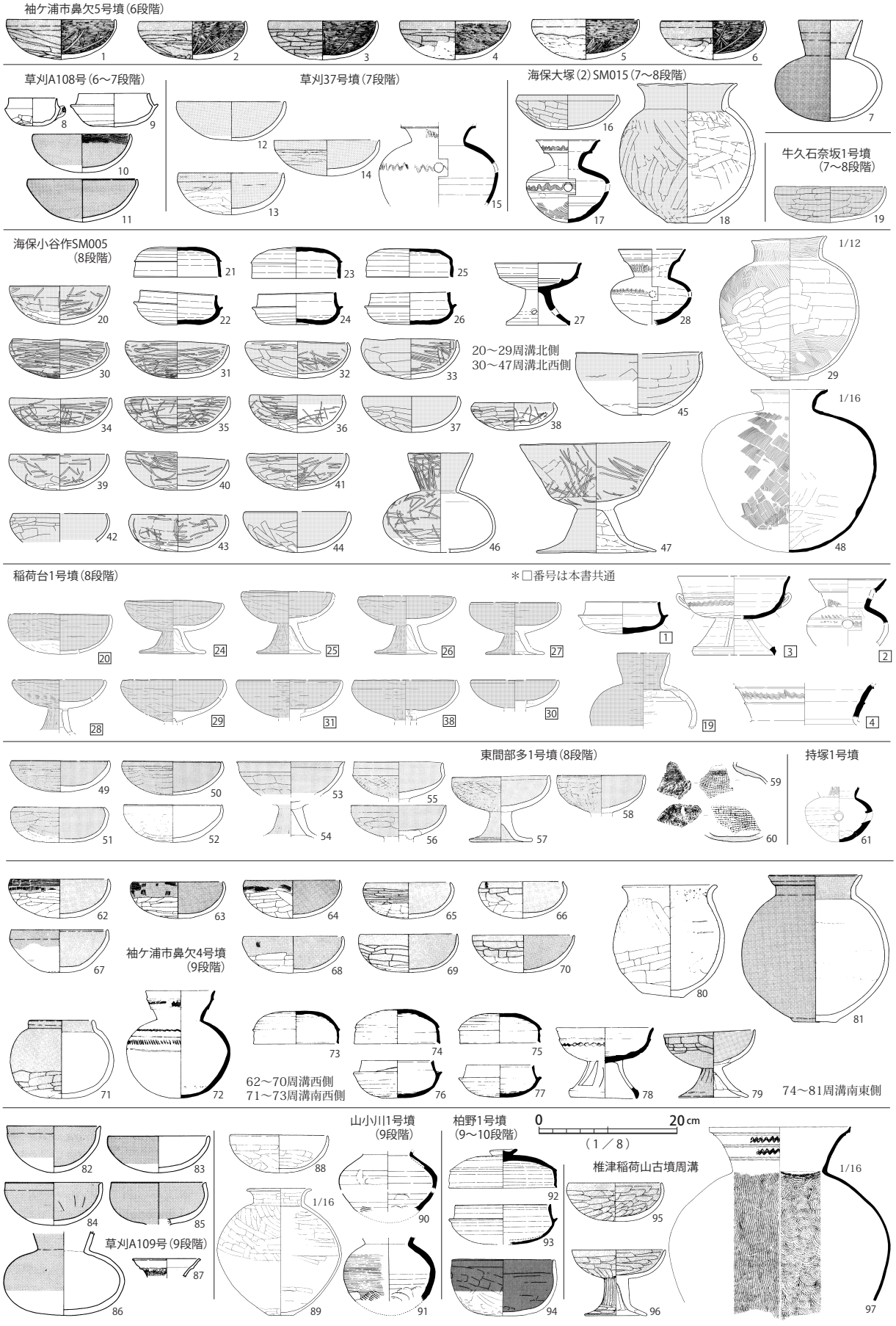
市原市海保小谷作遺跡 SM005（墳丘直径約 14m）（大山他 2014）：中期 8 段階。杯 16 以上、大型鉢 1・大型高杯 1・大型壺 1 が周溝内から出土。胴部最大径の張る直口壺は口縁部が直立気味で小さく 8 段階に位置付けられる。杯は小型品（38）も含まれるが、口縁は内弯傾向にあり、平均口径 13.9cm で 7・8 段階の範囲に相当する。TK208 型式の須恵器杯身 3・杯蓋 3・甕 1・高杯（器台）1・甕 1 が伴う。須恵器甕は墳頂部埋葬施設付近の撹乱坑から検出されている。須恵器蓋杯群が集中出土した周溝北部には底面に土坑がある。TK208 型式古相に位置付けられ、稲荷台 1 号墳より若干先行すると見られる。

市原市東間部多 1 号墳（墳丘直径 26m）（市毛他 1974）：中期 8 段階。杯 4 以上・高杯 5 以上（うち 1 は須恵器模倣）が周溝内から出土。墳頂平坦部撹乱土層から須恵器壺 1（2 片）が検出されている。高杯は脚裾部が明瞭に屈折する点は古相を呈するが、脚柱上部に中実部があり、8 段階では相対的に新しく位置付けられる。稲荷台 1 号墳とほぼ同時期だが若干後出すると考えられる。国分寺台地区の円墳では他に持塚 1 号墳（墳丘直径 40m）の墳頂部から TK23 型式古段階に位置付けられる甕（61）が出土している（白井 2012b）。

袖ケ浦市鼻欠 4 号墳（墳丘直径 13.0m）（井口・光江 1984）：中期 9 段階。杯 9（うち 1 は鉢状）・椀形高杯 1・短頸壺 1・須恵器模倣広口壺 1・甕 1 が周溝内西・南西・南東に分かれて出土。椀形高杯は杯部高比率 55.8%、口径 13cm で、脚裾部がハの字形に開き、9 段階の様相に合致する。須恵器は TK23 型式に位置付けられる長方形 3 方透孔の無蓋高杯 1・壺 1・杯身 2・杯蓋 3 が伴う。

市原市草刈 A 区 109 号（墳丘直径 17.4m）（小久貫他 1983）：中期 9 段階。杯 2・鉢 1・高杯 1・直口壺 1 が周溝から出土。鉢（82）は 8 段階の鉢（第 272 図 171）が浅く変化した類型と見られる。直口壺は丸底扁球形胴部と頸部径から 9 段階に位置付けられる。須恵器甕口縁片が伴う。

市原市山小川遺跡 SM001（墳丘直径 17.4m）（安井他 2009）：中期 9 段階。杯 1・大型壺 1 が周溝



第 278 図　稲荷台 1 号墳周辺の中期円墳出土土師器

から出土。杯は口径 14.1cm、器高 5.5cm で、寸法・形状とも 7 段階以降に多いタイプである。大型壺は、直立気味に立ち中位から外反する口縁と大きく張る球形胴部が 6 段階から 9 段階の須恵器模倣土師器壺（第 277 図 292、第 278 図 18・29・81）に類似する。TK23 型式の須恵器壺 2 が伴う。

市原市柏野遺跡 SM－001（墳丘直径 23.4m）（白井他 2014）：中期 9 ～ 10 段階。椀 1 が主体部覆土から破片化して検出。体部下位が広く口縁がほぼ屈折しない形態は、9 段階の椀（第 272 図 205）より新相である。TK23 から TK47 型式に位置付けられる須恵器杯 1・高杯蓋 1 が主体部上面に伴う。

市原市椎津稲荷山古墳（墳丘直径 40m（推定））（木對 1992）：中期 10 段階以前の円墳か。椎津茶ノ木遺跡調査区で検出された周溝の覆土内貝層ブロック等から、杯 1・高杯 1 他が出土。高杯（96）は器高：杯部高比率が約 45% と長脚化が進んでいる。覆土出土の須恵器大甕が伴う。石枕の出土が伝えられており（杉山 1977、石井 2019）、周溝内出土土器群以前に築造された可能性が高い。

中期8段階前後の中小円墳の周辺事例を通観すると、稲荷台1号墳例の高杯主体の組成は東間部多1号墳例に近く、国分寺台地区における局所的な地域性かは不明だが、近隣では少数例に当たる可能性が窺える。一方、器種構成について見ると、均質で複数個体の手持ち食器に加えて、鉢類、高杯、中型の壺、須恵器甕を含む大型の壺、瓶で構成される点に共通性が感じられる。

編年的位置の比較では、稲荷台1号墳例は、海保小谷作遺跡SM005例より新しく、鼻欠4号墳例より古い、という相対的位置が導かれ、各共伴須恵器の位置づけとも矛盾しないことが確認できる。

7. まとめ

稲荷台1号墳出土土師器は形態から、杯・高杯・直口壺とも中期8段階に位置付けられる。8段階と接点がある須恵器はTK208型式（TK208号窯段階）であり、共伴須恵器の評価と整合する。古墳時代中期の実年代については諸説あるが、当該期を5世紀第3四半期に位置付ける見解が有力であり、首肯できるものと考える（白井2012a、鈴木2014、岩本2024等）。

器種構成は、古墳時代中期の中小円墳からの出土資料と共通する様相を示す。10個体を超える杯・高杯と少数の椀・鉢・直口壺・須恵器高杯・瓶・中型壺・大型壺（須恵器甕）という枠組みから選択されたように見受けられ、供膳形態と小型・中型壺が必須となる一方で、煮沸形態の甕・甑は少ない。貯蔵具を介して手持ち食器に飲食物を分配、供献するが、現地で煮炊き調理を行わない場合が多い、という共通性の高い儀礼（大橋1985）が各古墳で行われたと推定でき、その一例として稲荷台1号墳出土土器を理解できる。当該期の儀礼の道具立てとしての土器類は出土状況も含め定型的な面が目立ち、古墳築造・葬送文化の一部だったとの指摘に沿うものと思われる（小沢1999、山田2005）。

稲荷台1号墳出土土師器は、形態のみならず出土状況から推定される使用方法においても、房総の古墳時代中期後半に通有の様相を示すと言える。古墳自体、墳丘も地域最大規模とは隔たりがあり、「王賜」銘鉄剣が被葬者の手に入り、副葬されるに至った背景に、地域社会（世帯＜集落＜流域）とそれを飛び越え、倭王権にも重層的に属するような社会関係を読み取ることも不可能ではない。

図出典

第271・272・276・277・278図掲載土器実測図の出土遺構は第276図中に注記した。計測対象遺跡は加茂遺跡D地点（小橋2002）を除き、下記遺跡と共通する。

第271・272・276・277図

【前期4】草刈遺跡D区028・133（小林・大谷2006）／土宇遺跡66号（柿沼他1979）／草刈遺跡K区013（小林・麻生2007）／海保小谷作遺跡SI107（大山他2014）

【前期5】草刈遺跡H区713（蜂屋他2010）／草刈遺跡K336（小林・麻生2007）／海保小谷作遺跡SI099・SI111・SI122・SI123（大山他2014）／海保大塚古墳周溝（小橋・近藤2018）

【中期1】草刈遺跡J区012（小林2007）／草刈遺跡E区012・074（小林・大谷2006）／山新遺跡SI8・SI9（北見・坂元2018）／海保三山塚古墳（小橋・近藤2018）

【中期2】草刈遺跡E区050・076・150（小林・大谷2006）

【中期3】川焼台遺跡577（蜂屋他2009）

【中期4】草刈遺跡K区413（小林・麻生2007）／御林跡遺跡（II）83号（木對他2008）／草刈遺跡D区136・148・160（小林・大谷2006）／草刈六之台遺跡742（白井他1994）

【中期5】草刈遺跡E区054・069・073・093・129B（小林・大谷2006）／草刈六之台遺跡89・125・733（白井他1994）／草刈遺跡J区162（小林2007）／御林跡遺跡（II）154号（木對他2008）

【中期6】台遺跡E地点96・100号（小川他2018）／御林跡遺跡（II）110・144・170・240・348号（木對他2008）／椎津茶ノ木遺跡145号（木對1992）／草刈遺跡E区108（小林・大谷2006）

【中期7】潤井戸遺跡西ノ崎地区SI34（川上2025）／草刈六之台遺跡121・138（白井他1994）／草刈遺跡J区100（小林2007）／草刈遺跡E区023・063・075（小林・大谷2006）／草刈遺跡D区290（小林・大谷2006）

【中期8】海保小谷作遺跡SM005（大山他2014）／椎津茶ノ木遺跡130号（木對1992）／草刈遺跡D区184（小林・大谷2006）／草刈六之台遺跡203・770・883（白井他1994）／草刈遺跡E区063（小林・大谷2006）／御林跡遺跡（II）159号（木對他2008）／川焼台遺跡340（蜂屋他2009）／加茂遺跡A・B地点113号（浅利他2005）

【中期9】草刈遺跡E区027・040・064・101・109・162（小林・大谷2006）／椎津茶ノ木遺跡99号（木對1992）／加茂遺跡A・B地点109・161号（浅利他2005）／川焼台遺跡334（蜂屋他2009）／草刈六之台遺跡211・310・792（白井他1994）／鼻欠4号墳（井口・光江1984）

【中期10】加茂遺跡A・B地点214号（浅利他2005）／椎津茶ノ木遺跡103・164号（木對1992）／御林跡遺跡（II）17号（木對他2008）／潤井戸遺跡群西ノ崎地区SI37（川上2025）

第278図

袖ケ浦市鼻欠4号墳・5号墳（井口・光江1984）／草刈遺跡A区108号・109号（小久貫他1983）／草刈37号墳（蜂屋他2009）／海保大塚遺跡第2地点SM015（大山・北森2018）／牛久石奈坂1号墳（浅野他2021）／海保小谷作遺跡SM005（大山他2014）／東間部多1号墳（市毛他1974）／持塚1号墳（白井2012b）／山小川遺跡SM001（安井他2009）／柏野遺跡SM-001（白井他2014）／椎津稲荷山古墳周溝（木對1992）

引用参考文献

浅野健太他2021『市原市牛久石奈坂1号墳・石奈坂遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第53集　市原市教育委員会

浅利幸一他2003『市原市稲荷台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第83集　財団法人市原市文化財センター

浅利幸一他2005『市原市加茂遺跡A・B地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第94集 財団法人市原市文化財センター

井口　崇・光江　章1984『鼻欠遺跡』袖ケ浦町教育委員会

石井友菜2019「常総型石枕の基礎的研究－三次元計測調査の報告－」『WASEDA RILAS JOURNAL』No.7　早稲田大学総合人文科学研究センター

市毛　勲他1974『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅰ　上総国分寺台遺跡調査団

岩本　崇2024「中期古墳の相対編年と暦年代」『中期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会　六一書房

大橋信弥1985『服部遺跡発掘調査報告書Ⅴ　－滋賀県守山市服部町所在－』滋賀県教育委員会

大村　直2006「南岩崎遺跡の変遷と市原市域の遺跡群」（大村他2006所収）

大村　直2009「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」（大村・鶴岡2009所収）

大村　直・鶴岡英一2009『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集　市原市教

育委員会
大村　直他2006『市原市南岩崎遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第1集　市原市教育委員会
大山祐喜・北森友梨2018『市原市海保地区遺跡群Ⅲ　海保大塚遺跡（第2地点）』国際文化財株式会社
大山祐喜他2014『市原市海保地区遺跡群Ⅰ　海保西竹谷遺跡　海保小谷作遺跡　海保大塚遺跡』国際文化財株式会社
小川浩一他2018『市原市台遺跡E地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集　市原市教育委員会
小久貫隆史他1983『千原台ニュータウンⅡ　草刈遺跡A区（第1次調査）鶴牧古墳群・人形塚』財団法人千葉県文化財センター
小沢　洋1999「房総の中期古墳とその周辺」『東国土器研究』第5号　東国土器研究会
柿沼修平他1979『土宇』日本文化財研究所
川上知哉2025『市原市潤井戸遺跡群（西ノ崎地区）』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第66集　市原市教育委員会
北見一弘・坂元秀平2018『市原市山新遺跡・白塚出途遺跡』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第42集　市原市教育委員会
木對和紀1992「集落の変遷」『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第49集　財団法人市原市文化財センター
木對和紀1993「竪穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉　－椎津茶ノ木遺跡を中心として－」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』財団法人市原市文化財センター
木對和紀2008「御林跡遺跡5世紀代の土器変遷」（木對他2008所収）
木對和紀他2008『市原市御林跡遺跡Ⅱ』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第5集　市原市教育委員会
越川敏夫他1984『市原市姉崎・原1号墳周湟址及び集落跡の調査』原遺跡調査会
小橋健司2002『市原市加茂遺跡D地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第82集　財団法人市原市文化財センター
小橋健司2025「東京湾東岸における弥生時代後期から古墳時代前期の土器」『日本考古学協会2025年度新潟大会研究発表資料集　越佐から見た列島の交流と地域社会』日本考古学協会2025年度新潟大会実行委員会
小橋健司・近藤　敏2018『平成29年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第43集　市原市教育委員会
小林清隆2007『千原台ニュータウンXIX　－市原市草刈遺跡（J区）－』千葉県教育振興財団調査報告第581集　財団法人千葉県教育振興財団
小林清隆・麻生正信2007『千原台ニュータウンXVII　－市原市草刈遺跡（K区）－』千葉県教育振興財団調査報告第565集　財団法人千葉県教育振興財団
小林清隆・大谷弘幸2006『千原台ニュータウンXIV　－市原市草刈遺跡（D区・E区）－』千葉県教育振興財団調査報告第535集　財団法人千葉県教育振興財団
白井久美子1994a「弥生時代から古墳時代の住居形態と土器群」（白井他1994所収）
白井久美子1994b「草刈遺跡出土の赤焼き須恵器」（白井他1994所収）
白井久美子2009「古墳群」（蜂屋他2009所収）
白井久美子2012a「中期の時期区分」『研究紀要』27　財団法人千葉県教育振興財団
白井久美子2012b「古墳の様相」『研究紀要』27　財団法人千葉県教育振興財団
白井久美子・木原高弘2012「集落出土土器等の様相」『研究紀要』27　財団法人千葉県教育振興財団
白井久美子他1994『千原台ニュータウンVI　－草刈六之台遺跡－』千葉県文化財センター調査報告第241集　財団法人千葉県文化財センター
白井久美子他2014『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書22　－市原市柏野遺跡－』千葉県教育振興財団調査報告書第721集　財団法人千葉県教育振興財団
白石太一郎1988「須恵器からみた年代」『「王賜」銘鉄剣概報　千葉県市原市稲荷台1号墳出土』市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター
杉山晋作1977「千葉県の石枕（1）市原市発見の石枕」『史館』8　史館同人
鈴木一有2014「野中古墳の築造時期と陪塚論」『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学総合学術博物館草書10　大阪大学出版会
高橋康男1985『－千葉県市原市－　草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第6集　財団法人市原市文化財センター
高橋康男1987「草刈、大和田、永田・不入　－市原市における土器研究をめぐる諸問題－」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅰ　財団法人市原市文化財センター

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
辻　美紀1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学　－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室
辻　美紀2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『大阪市平野区　長原遺跡発掘調査報告IX』財団法人大阪市文化財協会
中野　咲2021「畿内地域の中期土師器編年と外来系土器」『中国四国前方後円墳研究会第24回研究集会　中期古墳研究の現状と課題Ⅴ　～古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって～　発表要旨集・資料集成』中国四国前方後円墳研究会第24回研究集会実行委員会
蜂屋孝之他2009『千原台ニュータウンXXI　－市原市川焼台遺跡（上層）－』千葉県教育振興財団調査報告書第610集　財団法人千葉県教育振興財団
蜂屋孝之他2010『千原台ニュータウンXXIII　－市原市草刈遺跡（H区）－』千葉県教育振興財団調査報告書第633集　財団法人千葉県教育振興財団
安井健一他2009『市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡　－県単道路改良（幹線）委託事業（山小川・柏野・山口地区）埋蔵文化財調査報告書－』千葉県教育振興財団調査報告書第624集　財団法人千葉県教育振興財団
山田俊輔2005「古墳時代中期群集墓分析の新視角」『月刊 考古学ジャーナル』No.528　ニュー・サイエンス社

第５章　総括

上野　祥史（国立歴史民俗博物館）

はじめに

稲荷台１号墳は、文化財行政制度が確立してゆく時期に発掘調査が実施され、多くの労苦を伴うなかで発掘調査と調査後の整理作業が進められた。その過程で、金錯象嵌銘の存在が明らかになり、地域社会を解明する一古墳から、列島形成史を解明する重要古墳へと変貌した。

銘文鉄剣、胡籙、刀剣、矢鏃、須恵器、土師器と、出土遺物の検討は個別に深化してきた。文字の使用（語彙・文案・顕彰意図）、金工技術、武装具様式、倭王権（中央政権）との関係、国際交流、葬送儀礼、隣接地域との関係など、それぞれの遺物から展開する議論は多様である。しかし、各情報を横断して総体としてまとめることにより、稲荷台１号墳の性格は結像する。また、個別の要素をその古墳像に対照することにより、古墳時代中期社会の性格も改めて浮き彫りとなる。金錯象嵌鉄剣や胡籙を26mの中小円墳に副葬した歴史的意義もみえてくるはずである。

こうした意図のもと、稲荷台1号墳の調査整理事業が企図された。遺構・遺物情報を悉皆的に整理し、今日的な視点での検討をおこない、それらを体系的にまとめることで、稲荷台１号墳の史的評価を定め、古墳時代中期の社会を俯瞰することが可能になる。ここでは、本書で展開された個別の詳細報告をまとめ、稲荷台１号墳の性格を展望してみたい。

１．稲荷台１号墳の概要

墳丘直径26mの円墳で、幅3.2 ～ 3.8mの周溝がめぐる。墳丘は盛土による築造で、２次の盛土工程を経て構築されており、中心に核を形成し周縁へと盛土を広げる東日本的工法で墳丘を築造する［青木2003］。墳丘上面は削平されているが、整地面からの盛土高は2m以上と推定する。

埋葬施設は、墳頂部の２基のみである。中央施設は、墳頂部中央に位置し、主軸は東より南に９度振れて、墳丘の推定中心に近接する。北施設は、墳頂部西北辺に位置し、主軸は東から北へ32度振れており、北施設西端は中央施設西端に接すると推定している。中央施設は、長さ5.6m幅1.5mの墓壙と長さ3.4m幅0.6 ～ 0.65mの木棺を推定し、北施設は、長さ4.7m幅1.6mの墓壙と長さ2.6 ～ 3.1m幅0.5 ～ 0.6mで両小口に仕切りをもつ木棺を推定する（第２章第１節）。

副葬品は、甲冑、刀剣および矢鏃と胡籙、きさげ、提砥であり、中央施設と北施設からそれぞれ出土している（第２章第２節）。

中央施設：金銅装横矧板鋲留短甲１・金錯象嵌銘鉄剣１・刀子１・鉄剣２・
鉄鏃10（長頸腸抉片刃式6・長頸別造り片腸抉三角形式2・大型扁平二重腸抉をもつ長三角形式２）

北 施 設：鉄刀１・胡籙１・鉄鏃11（長頸腸抉片刃式）・きさげ１・提砥１

埋葬施設は上面が大きく削平されており、副葬品の遺存状況は悪い。中央施設では、鉄剣のみが原位置をとどめるが、北施設ではいずれの副葬品も原位置をとどめている。短甲が大半を欠失しているように、現存する遺物が副葬品のすべてではないが、同型式の武器・武具の副葬を対照した結果、副

葬した武器・武具の構成や数量は現状と大きく異ならないと指摘された（第４章第３・４節）。

墳丘及び周溝では、須恵器と土師器が出土している。土師器は、高杯と杯が複数みえ、杯より高杯が多い。北側周溝と南側周溝、北西の墳丘裾での出土は、墳頂や墳裾、周溝での儀礼に伴うと想定される（第２章第３節、第４章第５・６節）。

須恵器：杯身１・把手付無蓋高杯１・𤭯１・中甕２以上

土師器：直口壺１・高杯・杯

中央施設と北施設の年代は、武装具の編年に照らして、中央施設がTK208型式期、北施設がTK23型式期とした。中央施設の副葬品は、横矧板鋲留短甲が、鋲頭径7.5 ～ 8.0mmの中型鋲をもち、鉄折覆輪（折返覆輪）をもつことから、川畑分類の９期に位置付けられる［川畑2025］。鉄鏃も長頸片刃式を含み、短甲と相応する時期に該当する。北施設の副葬品では、鉄刀が関部幅3.7cmで斎藤分類のｃ式に該当し、鉄鏃は鏃身長10.6 ～ 11.7cmの長頸腸抉片刃式であり、川畑分類の10期から11・12期にかけての古相に該当する［斎藤2024、川畑2025］。胡籙は、短冊形B1類の吊手金具と勾玉状金具と山形突起金具を組合せた、土屋分類の日本列島Ⅱ期（TK208 ～ TK23型式期）に該当する［土屋2018］。北施設は、中央施設より一段階新しい武器の組合せをもち、中央施設をTK208型式期に、北施設をTK23型式期に位置づけた（第４章第３・４節）。

須恵器は、杯身が口径10.6cmで、口唇部形状に内湾する段があり、ヘラ削りの範囲が広く扁平な底部の形状であることから、TK208型式でも新しい時期に位置づける（第４章５節）。土師器は、中期を10段階に区分する地域編年のなかで、器高・口径・杯部高の比率が大きく変わる中期８期に位置付けた。高杯、杯、直口壺ともに、TK208型式期の須恵器に接点をもつ中期８期の様相として共通している（第４章第６節）。

武器・武具を主体とする副葬品の年代と、墳丘儀礼に伴う須恵器・土師器の年代は符合している。稲荷台１号墳は、中央施設での埋葬を目的に、TK208型式期新相に築造され、少し後れてTK23型式期に北施設での埋葬がおこなわれた。

２．王賜銘鉄剣の位置づけ

王賜銘鉄剣は、表に「王賜□□敬□」の６文字を、裏に「此廷□□□□」の６文字を金錯象嵌で表現する。

王賜銘鉄剣は、数片に破損して出土した。銘のある関部付近を欠失しており、現状では欠損部を補い復元している。欠損した部分に銘があることは、文字数の推定にも大きく影響する。復元の際には、５世紀の鉄剣諸例を参照して慎重に検討が進められたが、今回の調査では、武器型式から時期を絞込んで類例との比較分析がおこなわれた（第４章第３節）。

鉄剣の全長・剣身長・茎長・剣身幅など諸属性の相関に注目し、類例から導きだした数値相関に従い、全長73.87cm、剣身長58.50cm、茎長15.37cmと復元値を算定した。王賜銘鉄剣の現状は全長73.0cm、剣身長59.5cm、茎長13.5cmであり、その数値は今回の復元想定値とほぼ同じである。当初推定された表裏各６文字が妥当であることを示した。

そして、類例との比較を通じて、長身ながら剣身幅がより狭い細身の形態特徴が明らかになった（第４章第３節）。王賜銘鉄剣は剣身長58.5cmで剣身幅3.3cmであり、剣身幅3.0cm前後の数少ない細身

長身の鉄剣に位置付けられた。同じ金錯銘鉄剣である稲荷山古墳出土鉄剣がきわめて近い形状であることを確認し、刻銘を目的とした細身長身の鉄剣に規格を見出して、王賜銘鉄剣と辛亥年銘鉄剣は製作経緯を同じくし、倭王権のもとで製作され、賜与されたと推定した。象嵌銘と結びつく特定の鉄剣があり、かつその数が限られることは、象嵌刀剣の意義を明確にしている。

王賜銘鉄剣に遺存する銘は、表の「王」「賜」「□（人？）」「敬」「□（安？）」と裏の「此」「廷」の7文字である。象嵌銘（文字）は、溝を彫りその溝へ金線を嵌め込むことで表現したが、金線が脱落した象嵌溝の痕跡を確認することで、文字認識の精度は上がる。今回の調査では、金線が脱落した象嵌溝もしくはその可能性が想定できる痕跡を見出した（第4章第1節）。文字の認識は大きく変わらないが、象嵌溝の確認・推測は筆画の端部を延伸させ、字形を明瞭に認識させた。「賜」「廷」字は字形がより鮮明となり、「賜」字では横画の可能性がある溝を複数指摘している。

象嵌溝は、三角形の溝を連ねた蹴り彫りの技法で彫られており、直刃の蹴り彫りたがねと曲刃のなめくりたがねの中間形態となるたがねの使用が指摘された（第4章第1節）。たがね打ちの一単位である三角形は、側辺が丸みを帯びて外側に膨らみ、鈴木分類の蹴り彫りたがねB型による加工を推定している。溝が線状となるなめくり打ちにみえる形状も、たがね打ちの間隔を密にした結果とみており、蹴り彫りとなめくり打ちは原理を同じくする加工技法で、当時は明確に区分されていないと推測する。

なお、王賜銘鉄剣では、一本の象嵌溝に向きの異なるたがね打ちがみえている。蹴り彫りが一方向に進めば、象嵌溝の片側はコ字形となり片側はV字形となるが、「王」「賜」では両端がコ字形となる象嵌溝が複数みえている。たがね打ちを逆向きにすることで、筆画の両端にふくらみをもたせており、この起筆部と収筆部の「墨だまり」を表現する形状は、朝鮮半島の昌寧校洞11号墳出土の金象嵌銘鉄刀にみえることが指摘された（第4章第1節）。特定の字形（筆画）を意識した特殊な彫金技法を共有することから、王賜銘鉄剣と校洞11号墳出土象嵌鉄刀は製作技術が同じであり、製作工房が同じ可能性も推定されている。後者の視点に立ち、朝鮮半島での製作と加耶からの賜与も推測された。

象嵌溝に嵌め込んだ金属線については、今回の調査でX線CTによる形状観察と蛍光X線分析による成分分析がおこなわれた。

X線CTを利用した観察では、象嵌線を立体的にとらえ、象嵌溝の底部の形状、象嵌線の成形について新たな知見を得た（第3章第1・3節）。象嵌線は、断面が下方で幅を狭めるものと、横長楕円形のものがあり、象嵌溝底部に食い込む象嵌線と、底部にまで至らない象嵌線のあることが指摘された。象嵌線の成形については、捩じりか巻きかの判別は難しいものの、「廷」字の象嵌線で捩じりの可能性がある状況を観察しており、象嵌線に明確な中空がみえないことから捩じりによる成形を推定している。ただ、高精細の撮影では捩じりはみえないため（第3章第3節）、質量密度の違いに基づき内部を情報化するX線CTの利用の難しさがあらわれている。

象嵌線の底部には、一定間隔で凹凸が連続する部分があり、蹴り彫りによる象嵌溝の形状を反転したものか、象嵌線の捩じりを反映するものとみている。また、象嵌線は、側面が左右非対称の形状となるものと、左右対称の形状になるものがあり、象嵌溝の成形は蹴り彫りとなめくり打ちが併存する可能性が指摘された。そして、象嵌線の底部と側面を立体的に確認することで、象嵌線の継ぎ足し・接合とみえる部分を確認した。詳細な成形技法を確定するには至れていないが、X線CTの利用により、象嵌線の構造に関する理解は大きく進んだ。

蛍光X線分析では、象嵌線が金主体の金銀合金であることを確認した（第3章第2節）。金と銀の比率は、佩表の「王賜」ほか5文字での平均値が69：31で、佩裏の「此廷」の2字での平均値は62：38であり、金と銀の比率が約2：1であることを示した。面毎（佩表・佩裏）に比率は異なり、異なる地金を調製した象嵌線をそれぞれで使用したと推定している。過去の分析では金を含むことを認識した上で、銀の含有を評価する銀象嵌の名称が提起されたが［永嶋1993］、今回の調査をふまえて金錯銘の名称を確定した。なお、X線CTの透過画像では、透過度の低い質量密度の高い象嵌線と、透過度の高い質量密度の低い象嵌線を確認し、後者は横画にみえることが指摘されている（第3章第3節）。

銘の釈読は、調査概報で示された「王賜□□敬□（安ヵ）」「此廷□□□□」の認識より精度を上げることは困難であることを改めて確認した（第4章第2節）。遺存状況が悪い字の釈読について諸説が並立するが、いずれも他の金石文を参照した解釈を前提とする推定である。今回の調査でも「王賜人□郡宮」「此廷刀」との釈読が示されているが（第4章第1節）、金石文の字形・用字を対照した推定の一つである。

銘は字数が少なく、「王から下賜されたこの剣をつつしんで所有せよ」という意をあらわすが、同時期の東アジアの有銘刀剣との比較や、他の時空の有銘資料との比較を通じて、王賜銘鉄剣の歴史的意義が探られた（第4章第2節）。

王賜銘鉄剣は、紀年を欠き、賜与者である王の個別名称も、受領者の名も刻まれていない。これは、王賜銘鉄剣の授受が特定の関係を前提としないことを示している。不特定の王が不特定の受領者に賜与することが可能な剣であり、受領後は王権からの賜与を明示することが重要であり、特定の賜与者を顕示することは意図していない。こうした銘の形は、表記の形式が確立していない文字利用黎明期の状況を反映するとともに、列島内における古墳時代中期、5世紀の政治関係をも反映しているのである。

象嵌銘は、金工技術に朝鮮半島との関係を想定できるが、銘の内容は朝鮮三国の有銘刀剣とは異なる。具体的な朝鮮半島諸国の国名や地名を欠いており、銘の語彙や用字から、日本列島内での授受を目的に倭での製作が想定された。

なお、王賜銘鉄剣は、倭王権の君主との密接な関係性を顕示し、強調することにより、所持者の権威・権力を高めることを目的とした象徴的な宝器である。文字で記された文言が象徴機能を発現させるのは、後世の墨書土器や宗教的権威をもつ奉納宝物の有銘刀剣と同じであり、それらの淵源に王賜銘鉄剣を位置付ける視点も提示された。

今回の調査でも、王賜銘鉄剣の分析は多岐にわたり進められた。各所見を総じてみれば、王賜銘鉄剣は、賜与者を特定せずに倭王権との関係を表象することを目的として、同時期の朝鮮半島の金工技術を導入し日本列島で製作したもの、となる。起筆部と収筆部に「墨だまり」を表現する彫金技術は朝鮮半島と同じであるが、銘の語彙や文案は朝鮮三国の有銘刀剣と異なり、かつ銘を刻む鉄剣は倭で流通した細身長身の形態である。倭で生産した特定の鉄剣に、朝鮮半島由来の技術を導入して、5世紀中葉後段の倭の政治体制・政治関係を反映する文言を象嵌した、とみておきたい。

象嵌銘鉄剣が倭の鉄剣の規格におさまることは、特定の剣を分有する限られた関係のなかに、象嵌銘を加えることで更なる特殊化が図られたともいえる。銘の解釈では、不特定の王から不特定の受領者への授受を前提として、事前に複数の刻銘鉄剣が準備されたことを想定することもあるが（第4章

第2節）、不特定の王と不特定の受領者との授受を可能にすべく事前に準備されたのは細身の長剣であり、稲荷台1号墳の被葬者を対象とした授受のために象嵌銘が加えられたことになろう。その点では、熊本県江田船山古墳出土の象嵌鉄刀や埼玉県稲荷山古墳出土の象嵌鉄剣も、王賜銘鉄剣を含む細身長身の規格に収まるという指摘は注目される（第4章第3節）。銘文の表記は大きく異なるが、個別の事情に対応して特定規格の刀剣に象嵌銘を付与することは、王賜銘鉄剣と状況が同じなのである。古墳時代中期の象嵌刀剣3例は、TK208型式期（稲荷台1号墳）からTK23・47型式期（稲荷山古墳・江田船山古墳）にかけて、細身長身の規格をもつ刀剣に事情に応じて象嵌銘を付す動きが継続したことを示している。

3. 保有する武器・武具

中央施設と北施設は、武装具を主体とした副葬品をもつ。第4章第3節と第4節の記述を中心に特徴を整理し、その組合せについて評価してみたい。

中央施設では、金銅装横矧板短甲1領を副葬する。鋲頭径7.5～8.0mmで鉄折覆輪をもち右脇開閉で、方形板4鋲の金銅装蝶番金具をもつ短甲は、川畑分類9期（TK208型式期）に位置付けられ、同時期の短甲として、奈良県新沢173号墳や兵庫県亀山古墳第1埋葬施設、埼玉県入西石塚古墳の出土短甲が挙げられている。方形4鋲の蝶番金具は金銅装が多く、同時期の新沢173号墳や亀山古墳第1埋葬施設のほかに、前後する時期では、福岡県稲童8号墳や岡山県正崎2号墳、宮崎県西都原4号地下式横穴（3号短甲）で出土した短甲がある。方形4鋲の蝶番金具をもつ短甲では、短甲のみの副葬事例が多く、中央施設に冑や頸甲・肩甲が伴わないことも妥当とされている（第4章第3節）。

中央施設に副葬した鏃は、遺存する刃部から10本以上の副葬を確認する。大型の二重腸抉をもつものと、別造り腸抉をもつ長頸鏃を含んでおり、倭での生産が確実な鏃を含む構成となっている。鏃身部から茎尻まで完形で遺存するものはないものの、長頸鏃には口巻や矢柄、茎巻が遺存する個体は多く、矢柄への鏃の固定方法や、口巻・矢柄・茎巻の素材を詳細に観察することが可能である。加えて、口巻に赤色顔料を塗布した状況を確認できる個体も複数あり、装飾性の高い矢鏃の副葬が判明している（第2章第4節）。口巻の装飾は、古墳時代前期の雪野山古墳や中期の七観古墳で出土した矢鏃などに砂鉄蒔がみえている［杉井2014］。

北施設では、鉄刀と胡簶、きさげ、提砥が出土している。胡簶は、短冊形B1類の吊手金具と勾玉形金具と山形突起をもつ収納部金具（縁金具）をもつ、土屋分類の日本列島Ⅱ段階に位置付けられる。帯金具もしくは吊手金具の一部と推定する破片では、鉄地金鍍金の装飾を確認しており、一部に金の装いをもつ胡簶であった（第3章第4節）。吊手金具は百済の系譜をひき、収納部金具は大加耶の系譜をひき、日本列島で本格的な生産が開始する前の舶載品もしくは、百済・大加耶の工人の手による倭製品と推定する。胡簶は矢鏃を収納した状態で副葬しており、矢は鏃身部を下向きにして収納していた。矢鏃を収納して副葬した胡簶では収納本数が平均22本であること、中世の事例とも共通することなどを示し、北施設で出土した11本の矢鏃は副葬当時と大きく変わらないことが指摘された。鏃はすべて長頸片刃式で、朝鮮半島と日本列島で共有する形式であることから、舶載品とみれば胡簶と矢鏃がセットで搬入された可能性も指摘されている。

また、胡簶金具と鏃には、獣皮・革・直線状の物質が付着しており、収納部の構造を復元すること

が可能である。羽を漆で固めたようにみえる直線状物質を背板として、毛を表にした獣皮で収納部を構成し、その上に革帯と金具を重ねて鋲で留める、という構造が推定された。胡籙収納部の構造が判明する数少ない事例としても注目される。

提砥は、古墳時代中期に出現した朝鮮半島系の器物で、武器類に近接して出土する傾向があり、北施設で副葬した提砥は百済・大加耶の系譜をひく形態をもつ。北施設では提砥と胡籙が近接して出土し、ともに百済・大加耶の系譜をもつことから、両者の親和性の高さが指摘された。

中央施設では、短甲と鉄剣と倭系の矢鏃を副葬し、北施設では鉄刀と百済・大加耶の系譜をもつ胡籙と提砥を副葬していた。この武装具の組合せには、二つの特徴がみいだせる。一つは、いずれでも装飾性の高い武器・武具を保有したことである。短甲は金銅装蝶番をもち、鉄剣は金錯象嵌銘をもち、矢鏃は口巻に赤彩の装飾をもち、胡籙は一部に鍍金装飾をもつ。装飾により通有とは区分され、差異化が図られた武器・武具を保有したのである。今一つは、中央施設の武器・武具が倭の系譜をもち、北施設の武器・武具が朝鮮半島系（百済・加耶）の系譜をもつことである。製作技術は措いて、形という点でみれば、短甲は倭の武具であり、剣はこの時期に倭の武器であり、二重腸抉をもつ大型鏃や別造り腸抉をもつ長頸鏃は倭の矢鏃である。象嵌銘の文言も、倭のかたちで記されている。中央施設の武装具には、倭の要素が複数みえるのである。一方の北施設では、先に整理したように、胡籙と提砥は相互に関係が深く、ともに百済・大加耶の系譜をもつ。中央施設も北施設もともに矢鏃を副葬しているが、口巻に赤彩を加えた装飾の矢鏃は中央施設に限られており、百済や大加耶と対をなす倭の系譜を反映するものともみえよう。二つの埋葬施設は、ともに加飾した武器・武具を保有しつつ、倭と百済・大加耶の系譜差を対照させており、そこに二人の被葬者の性格が反映されている。

中央施設の副葬品は、王賜銘鉄剣が象徴するように倭王権との関係を反映し、北施設の副葬品は、倭王権の対外交渉にかかわる朝鮮半島での活動を反映する、と推測されている（第４章第３・４節）。武威の表象は同じでも、それぞれの背景は異なるのである。中央施設の被葬者は、王権との関係を担う地域社会の統合主体であり、北施設の被葬者は、地域社会を出て王権が展開する対外交渉に参画する存在であった。前者の活動は上総市原の地域内を主たる対象とし、後者の活動は地域外を対象として、二人の被葬者は地域社会の内政と外交を分掌した。内政を主、外交を副とする分掌体制は、中期後葉から後期にかけて複数の事例でみえており［内山2019、上野2022］、稲荷台１号墳もその初期の段階に位置付けることが可能であろう。

装飾に優れた武装具を保有することは、王権と各地の有力者層が連携する関係のなかで、稲荷台１号墳の被葬者の位相が相対的に高いことを示している。しかし、副葬品は武装具に限られ、馬具や鏡、装身具を欠く。武装具も、札甲はなく、冑や付属具を欠く短甲のみを保有し、武器の数量も限られている。武装具の組合せにおいて、最上位に位置するものではない。組合せも数量も、同じ有銘鉄剣を保有する埼玉稲荷山古墳や江田船山古墳とは大きな隔たりがある。装飾をもつ武器・武具を保有するが、組合せや数量などでは下位に置かれた。この副葬品に反映された中下位の位相こそ、稲荷台１号墳の被葬者の社会的性格を反映している。

４．須恵器・土師器の位置づけ

稲荷台１号墳では、須恵器と土師器が墳丘と周溝から出土している。今回の調査では、編年的位置

づけと、器種組成からみた儀礼位置づけについて評価が深められた（第４章第５・６節）。

須恵器は、胎土観察から杯身を陶邑産であることを確認し、陶邑を主体とする搬入品で占められることを確認した。従前から指摘されるTK208型式という時期の認識については、前後する時期のTK208号窯、TK23号窯、TK103号窯、TK2号窯の杯身・杯蓋を検討し、口径が10.6cmで、口唇部形状に内湾する段があり、ヘラ削りの範囲が広く扁平な底部の形状をもとに、TK23・47型式に下げる積極的な要素がなく、TK208型式期でも新しい時期が妥当であるとした。近接した時期が想定される穀塚古墳出土資料との比較を通じて、稲荷台１号墳が型式的に若干古いことを示し、稲荷台１号墳の編年的位置づけがTK23型式期に下がらないTK208型式期の新相であることを重ねて示した。

土師器では、養老川および村田川の流域を対象に、中期土師器を10段階に区分する編年を設定して、稲荷台１号墳出土の土師器を中期８段階に位置付けた。中期１～６段階が和泉式、中期７段階が和泉式から鬼高式への移行期、中期８～10段階が鬼高式古段階に相当することを示し、中期８段階に生じる高杯の大きな形態変化を口径・器高・杯部高の数値相関で明快に示し、稲荷台１号墳出土の高杯、杯をともに８段階ととらえた。直口壺を、弱く内湾する短い口縁部と扁球状と推定する胴部の形態特徴から、８段階に位置付けて、土師器は総体として中期８段階に該当することを示した。そして、周辺の諸遺跡で出土する中期６段階から９段階の土師器を検討し、海保小谷作遺跡SM005（中期８段階土師器・TK208型式古相須恵器）と鼻欠４号墳（中期９段階土師器・TK23型式期須恵器）の間に稲荷台１号墳を位置付け、中期８段階・TK208型式期新相という年代を確認している。

須恵器・土師器ともに、TK208型式期新相に位置付けられることが、改めて示された。

須恵器と土師器は、原位置に近い状態で出土したものを含んでいる。北周溝に須恵器杯身を置き、北西側テラスに土師器杯を置き、南周溝に土師器高杯３個を置いたことは確実で、南北の対称を想起させる位置関係で出土した。原位置に近いこれらの土器は、二つの埋葬施設と明確な対応関係はみえていない。また、墳頂もしくはSE区で須恵器中甕と土師器高杯を組合せた使用も想定されている。須恵器𤭯、把手付無蓋高杯、中甕は、各所で分かれて出土するため、複数の場所に配置したことが想定されている。

なお、須恵器・土師器ともに、出土位置に埋葬施設との明確な対応がみえず、須恵器・土師器とも、２時期に分けることが可能なほど明確な型式差を見出すことはできない。下層出土の土器は初葬の中央施設に伴うと想定するが、その構成を抽出することは困難である。

須恵器は多様な器種が出土するものの点数は少なく、飲食器（供膳具）は土師器を主体とすることが、稲荷台１号墳の特徴である。古墳出土の土器では、中期後半以後は土師器の使用は限定的になり、TK208型式以後に須恵器を多用する大阪平野の群集墳などとは対照をなしている。須恵器と土師器を交えた器種組成は、同時期の東京湾南岸東半の中小古墳の出土資料と共通しており、供膳具と小型・中型の壺を中心として煮沸具の甕と甑が少ない器種組成が類似することは、貯蔵具と供膳具を用いて供献するが調理は伴わない儀礼を上総の各古墳が共有した結果として理解されている。

土器を用いた供献儀礼は、稲荷台１号墳が上総という地域社会に通有の中小古墳であることを明示する。王権中枢を含む域外からの搬入された須恵器を利用しつつ、在地で共有する儀礼のなかに包摂される存在であった。

なお、土師器高杯には、杯部内面がほとんど摩滅せず赤色顔料の塗刷毛痕跡の観察が可能なものが

あり、儀礼利用を目的に製作した可能性が想定されている。その点で、祭祀・儀礼を本来的な用途とみる須恵器に通じた一面もみえている。

5.5 世紀後半の王賜銘鉄剣と稲荷台1号墳

墳丘規模、副葬品の組合せ、墳丘での土器儀礼、いずれにおいても、TK208型式を前後する時期の中小古墳としての特徴を確認した。もし、「王賜銘」の象嵌銘が存在しなければ、議論の俎上にのぼることも少ない古墳であったはずである。最古の倭製象嵌銘鉄剣の副葬は、いかにも稲荷台1号墳に不釣り合いである。しかし、そこにこそ「王賜銘」を表現する歴史的意義が映し出されているのであり、不均衡に対して抱く疑念は、象嵌銘が特殊である、特殊であるべきだ、という潜在意識をあらわにする。

初出の有銘資料を後続する稲荷山古墳や江田船山古墳の出土刀剣と比べるため、象嵌銘刀剣の保有は大型古墳や馬具、鏡、装身具など豊かな副葬品をもつ古墳であるべきという意識が潜在する。それこそ、王賜銘鉄剣が王権からの直接賜与ではなく、地域の広域首長を介した間接賜与である、という想定を生む背景でもある（第4章第2・6節）。希少な象嵌銘鉄剣であるがゆえに、大型古墳もしくは豊かな副葬品をもつ被葬者こそ最初の有銘刀剣を保有するに相応しいという想念が潜在するのである。

確かに、古墳時代中期の象嵌銘刀剣は3例に限られている。しかし、象嵌銘刀剣の保有は、他を圧倒する絶対的な格差に結びつかない。稲荷山古墳や江田船山古墳は、豊かな副葬品をもち、TK23・47型式期の屈指の古墳であることは確かである。だが、TK23・47型式期の倭王権を支えた各地の有力首長層の中で群を抜く存在ではない。群馬県井出二子塚古墳や保渡田八幡塚古墳、茨城県三昧塚古墳、福井県西塚古墳や京都府穀塚古墳、和歌山県大谷古墳や岡山県築山古墳など、墳丘規模や副葬品に優れた古墳は他にも存在しており、象嵌銘刀剣を除けばさほど大きな差異はない。獲加多支鹵の銘をもち、倭王への奉仕を刻む刀剣が列島の東西で出土したことは象徴的である。しかし、古墳の築造や副葬品を通じた関係では、倭王が連携した地域の一つであり、そこに銘をもつ刀剣が添えられたに過ぎない。有銘刀剣の保有は、類似する社会階層との差別化を果たしてはいないのである。

今回の調査では、3振りの象嵌銘刀剣が細身長身の刀剣で規格を同じくすることが指摘された（第4章第3節）。象嵌銘は、付加的要素であり、絶対的な格差を生む装置ではない。稲荷台1号墳は、地域の中小古墳として、墳丘規模や墳丘儀礼を通じて近隣の諸古墳とは違いがなく、列島規模で同規模の古墳と比較して、副葬品の組合せに遜色がない。それは、後出するTK23・47型式期の稲荷山古墳や江田船山古墳と他の古墳との関係と同じである。同じ階層にある他の被葬者との差異化を図るために、稲荷台1号墳の被葬者へ王賜銘鉄剣が賜与されたとはみえないのである。希少な象嵌銘は貴重ではあるが、その希少性が絶対的な価値を伴い同時代に扱われたかは別である。象嵌銘を絶対視した評価は相対化すべきであろう。

では、なぜ王賜銘鉄剣は製作されたのか。TK208型式期からTK23型式期へと移行する時期は、さまざまな社会関係が変化する転換期にあたる。王権中枢の百舌鳥・古市古墳群では大型化が極点に達し、百舌鳥古墳群での大型墳の築造が終焉を迎える転換期にあたる。各地でも、広域を集約したと想定される大型前方後円墳の築造が後に続かない。千葉県域では、中期後葉（TK208型式期）までに

東京湾南岸では、100mを前後する弁天山古墳、内裏塚古墳、高柳銚子塚古墳、祇園大塚山古墳、姉崎二子塚古墳が築造されたが、その後に大型前方後円墳の築造は継続しない［広瀬2012］。一方で、中小墳を主体とした群集墳の築造は、TK23型式期以後に各地でひろがり始める［和田1992］。王権中枢域と連動して、地域での古墳築造にも大きな変化が生じた。古墳築造の変化と対応するように、埴輪の生産体制もそれ以前とは大きく変化し、この時期は中期と後期を区分する指標としても認識される［城倉2009］。古墳を媒介とする社会関係が大きく転換するのがこの時期である［川西2004］。また、地域土師器の編年でも、新たな様式の確立期としてもこの時期は位置付けられ、地域社会のなかでの変革期でもある（第4章第6節）。この変化は、文献史学で指摘される雄略朝の画期とも重なりをもつ［岸1984］。

一方で、この時期は、新たな中国鏡、同型鏡が登場する時期でもある。倭の五王の後半段階にあたるTK208型式期から、南朝遣使を象徴する新たな中国鏡の利用、副葬が始まるのである。同型鏡はTK208型式期を先駆けとして、TK23・47型式期以後に急増してゆく［上野2013、辻田2018］。馬具でも、f字形鏡板轡と剣菱形杏葉を指標とする新たな馬装様式が普及し始める時期にあたる［内山1996、諫早2012］。馬具も中国鏡も、その利用は6世紀に後期前半にまで継続する。器物を通じた関係も、新たな体制の構築が図られた時期であるといえよう。鏡は中国南朝、馬具は朝鮮三国との関係を反映することは言うまでもない。稲荷台1号墳出土の胡籙が百済・大加耶の系譜をひくことは、こうした朝鮮半島との新たな関係の始まりを反映する。

王賜銘鉄剣は、こうした社会変革期に製作された。後続する稲荷山古墳や江田船山古墳とともに、倭の内部情報を記し、倭に固有の名称や文言を表記した銘文をもつ。この時期に、倭で文字による情報の物質化が始動したことを象徴している。象嵌銘の始まりは、王権の質的な変化、地域社会との連携の変化、国際交渉の変化など、社会の諸相にみえる複数の変化に重なるのである。こうした社会変化の一環として、象嵌銘を用いた情報の物質化が始動したのである。

文字の利用は、中国との政治交渉を通じて、中国系集団を介して、5世紀の日本列島に定着しはじめる。倭王讃の司馬曹達や、江田船山古墳出土の象嵌銘刀の書者張安のように、中国の情報に通じた人物が文字の利用に関与していた。文字の利用は、中国との関係が本義であり、日朝関係のなかで完結するものではない。中国南朝との関係は5世紀前葉（中期中葉）に始まるが、この本格的な文字利用の始まりに対して、象嵌銘の始まりは遅れるのである。それは、同型鏡の始まりが南朝への遣使より遅れることと同じである。

3例とはいえ象嵌銘刀剣の製作（副葬）が、同型鏡の始まりや普及に重なることは、中国由来の文物や情報を倭に内在化させ、倭的な要素として機能させてゆくプロセスがこの時期に進行したと認識できよう。

先に、王賜銘鉄剣の創出は、倭の鉄剣に、朝鮮半島の製作技術を重ねて、倭の関係を刻むことで成立した、とまとめた。しかし、そこには5世紀に中国との交渉を反映した内的関係の整備と、情報を物質化する文字の利用、という中国由来の要素も作用したのである。古墳時代社会が大きく転換する移行期において、文字による情報の物質化を意図して、試行的に製作されたのが王賜銘鉄剣ではなかったであろうか。

王権の関与、地域社会の対応、関係の表象手段、いずれもが相互に連動しながら変化する5世紀後

葉（中期後葉）以後の画期において、さまざまな動きが重複してみえるのが稲荷台1号墳であるといえよう。鏡も馬具も装身具も欠いた中小古墳での王賜銘鉄剣の副葬は、その動きを先鋭的に示しているのである。稲荷台1号墳を多角的にとらえ、傑出した王賜銘鉄剣を副葬した意義をこのように俯瞰してみたい。

おわりに

今回の調査では、複眼的な視点で稲荷台1号墳と王賜銘鉄剣の評価を進めた。稲荷台1号墳は上総という地域社会に通有の中小古墳であり、武装具を主体とした副葬は、装飾をもつ武器・武具を保有するが、組合せや数量などでは下位に置かれた被葬者の社会的性格を明らかにした。王賜銘鉄剣も、鉄剣の副葬のなかに位置付けることで、改めて象嵌銘をもつことの同時代的な意義が明らかになる。これまでの認識を大きく変えたわけではないが、今日的視点での評価はその輪郭をより鮮明にしたといえよう。

引用文献

青木　敬　2003『古墳築造の研究－墳丘からみた古墳の地域性－』六一書房

諫早直人　2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣

上野祥史　2013「祇園大塚山古墳の画文帯仏獣鏡 同型鏡群と古墳時代中期」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』六一書房

上野祥史編　2022『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房

内山敏行　1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘

内山敏行　2019「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『賤機山古墳と東国首長』別冊季刊考古学30

川西宏幸　2004『同型鏡とワカタケル－古墳時代国家論の再構築－』同成社

川畑　純　2025『古墳時代の甲冑と軍事構造』考古学選書8　同成社

岸　俊男　1984「画期としての雄略朝－稲荷山鉄剣銘付考－」『日本政治社会史研究』上巻、塙書房

斎藤大輔　2024「刀剣ヤリ鉾」『中期古墳編年を再考する』中国四国前方後円墳研究会

城倉正祥　2009『埴輪生産と地域社会』学生社

杉井　健　2014「矢柄」『七観古墳の研究－1947・1952年出土遺物の再検討－』京都大学大学院文学研究科

辻田淳一郎　2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

土屋隆史　2018『古墳時代の日朝交流と金工品』雄山閣

永嶋正春　1993「「王賜」銘鉄剣のX線的調査と銘文の表出」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集

広瀬和雄　2012「東京湾岸・「香取海」沿岸の前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集

和田晴吾　1992「群集墳と終末期古墳」『近畿Ⅰ』新版古代の日本5、KADOKAWA



中央埋葬施設副葬品



北埋葬施設副葬品



王賜銘鉄剣（A面）



王賜銘鉄剣（B面）



1号墳出土須恵器・土師器



象嵌銘



縮尺不同



A面



B面

2/3

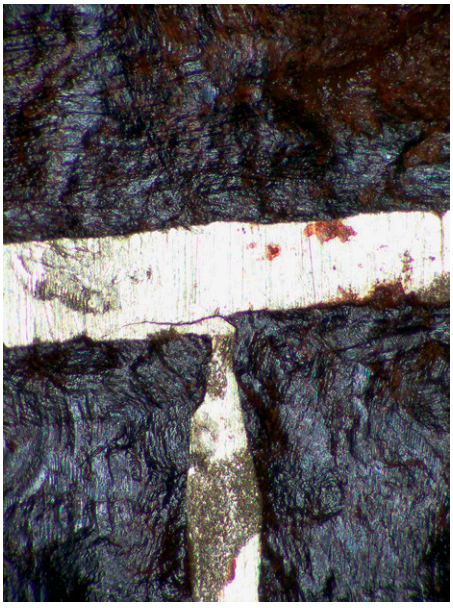


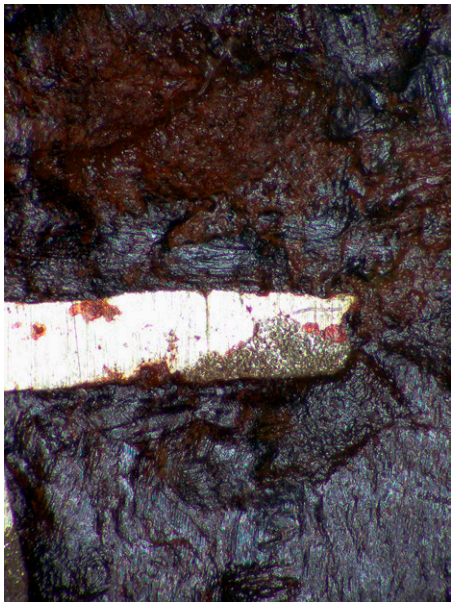
1/3

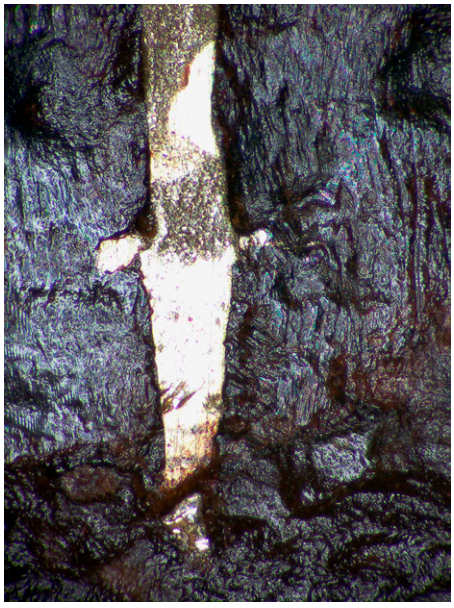

「王」A 面 1 字目

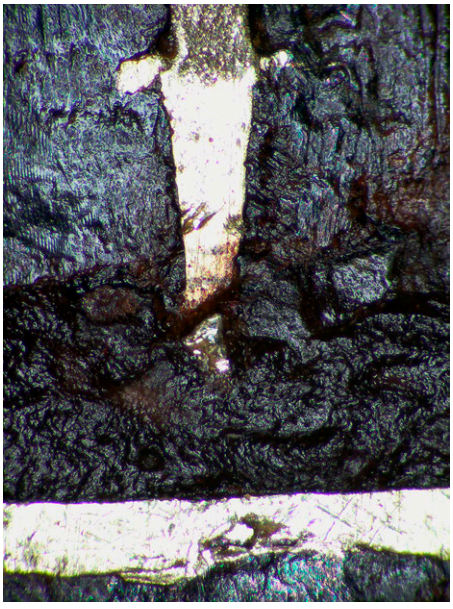

王（偏光フィルター）


王（1 画左）

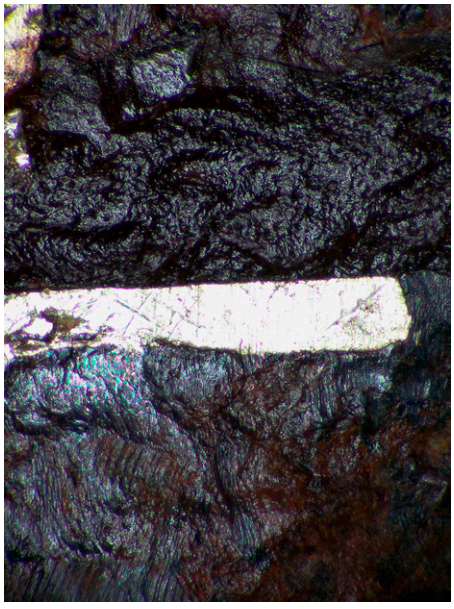

王（1・2 画）


王（1 画右）


王（2・3 画）


王（2・3・4 画）


王（4 画左）


王（4 画右）


「賜」A 面 2 字目

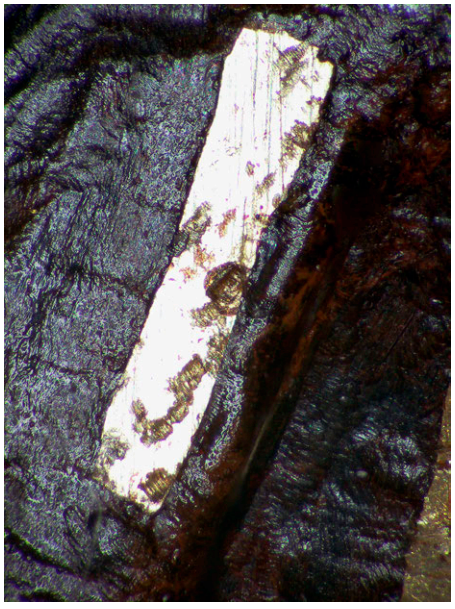

賜（偏光フィルター）


賜（偏 1 画上）


賜（偏 1・3 画）


賜（偏 2 画上・旁 1 画上）


賜（偏 2 画下・旁 1 画）

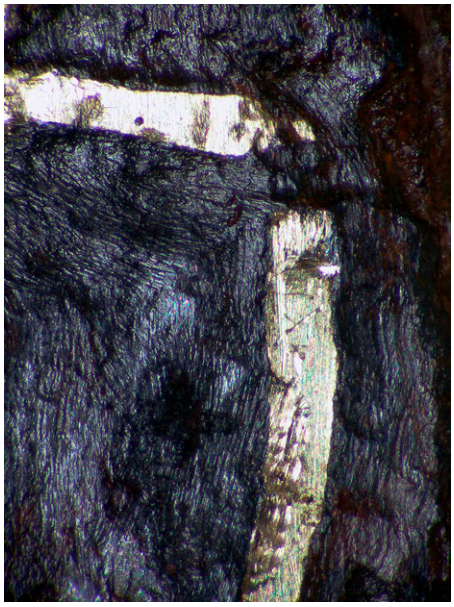

賜（偏 3 画）


賜（偏 4 画）


賜（旁 1 画下）


賜（旁 2 画上）


賜（旁 2・3・4 画）


賜（旁 4・5 画）

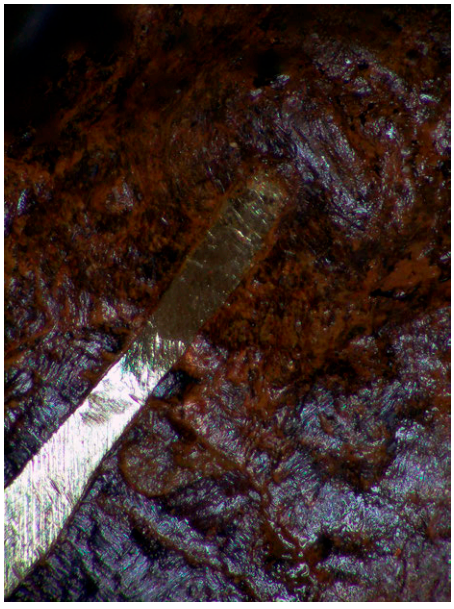

賜（旁 5 画下）

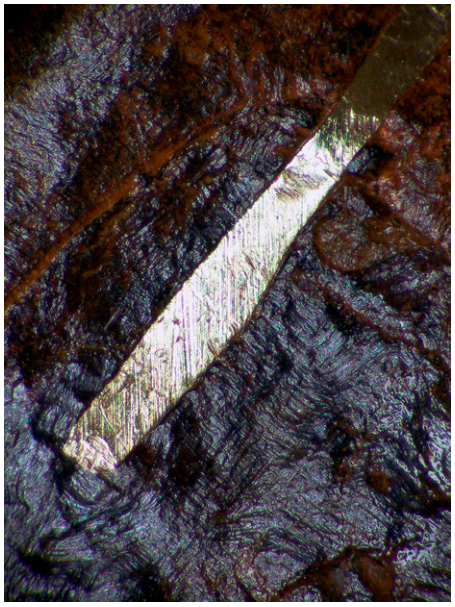

賜（旁 3・6 画）


賜（旁 6 画）

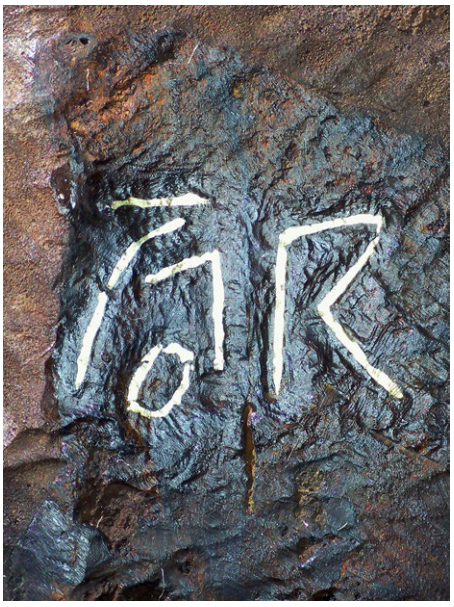

「？」A 面 3 字目

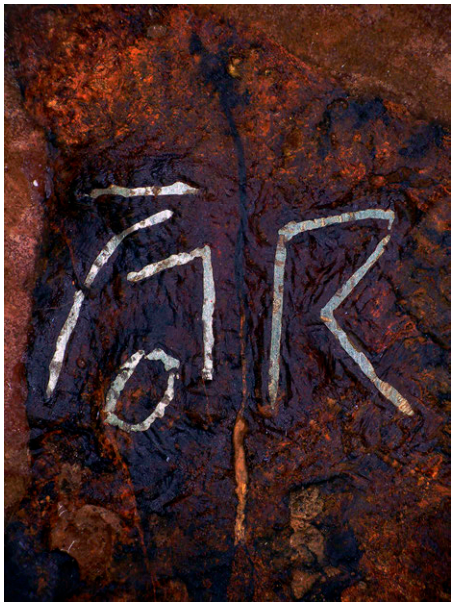

「？」（偏光フィルター）

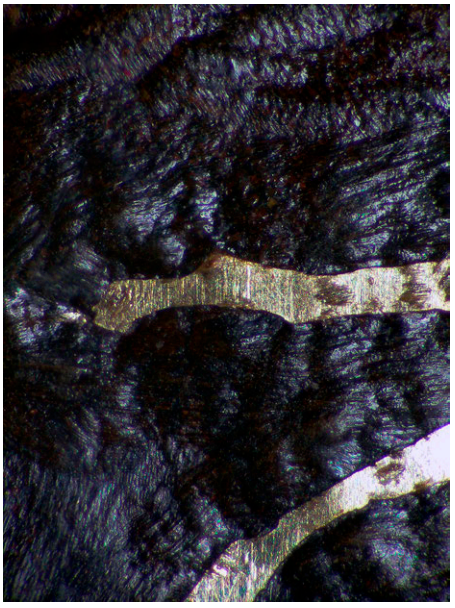

「？」（1 画上）

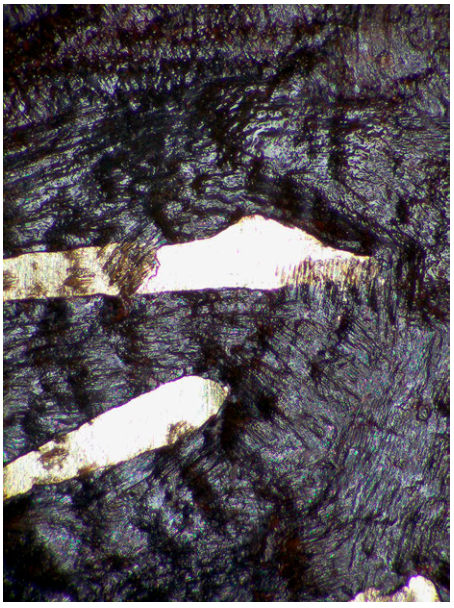

「?」(1 画下)


「?」(2 画)

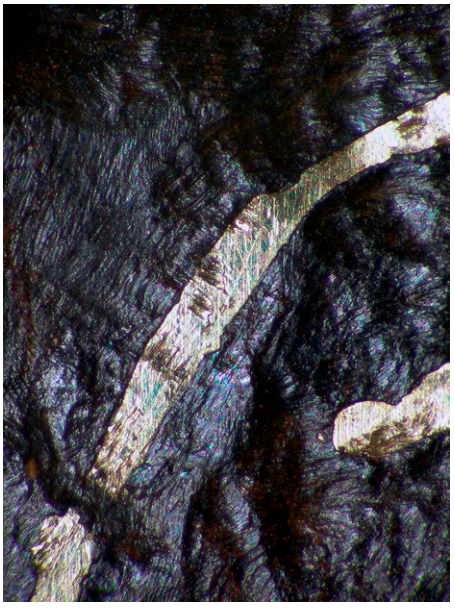

「敬」A 面 5 字目


敬(偏光フィルター)


敬(偏 1 画左)


敬(偏 1 画右)


敬(偏 2 画上)


敬(偏 2 画下)


敬(偏 3 画左)


敬（偏 3 画中）


敬（偏 3 画下）


敬（偏 4・5・6 画）


敬（旁 1 画上）


敬（旁 2 画）


敬（旁 2・3 画）


敬（旁 3 画下）


敬（旁 4 画上）


敬（旁 4 画下）


「安?」A 面 6 字目


安?（偏光フィルター）


安?（1 画）

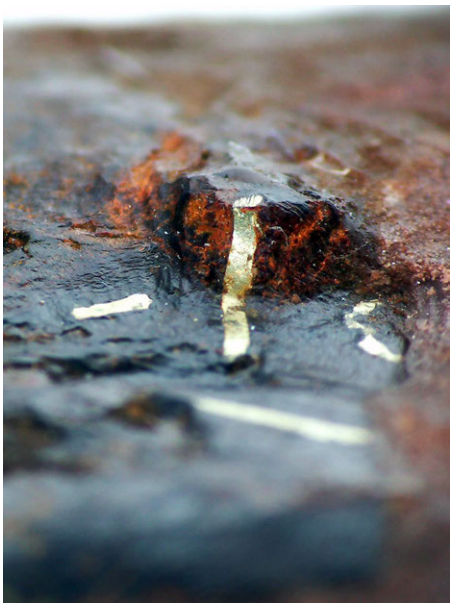

安（左側）

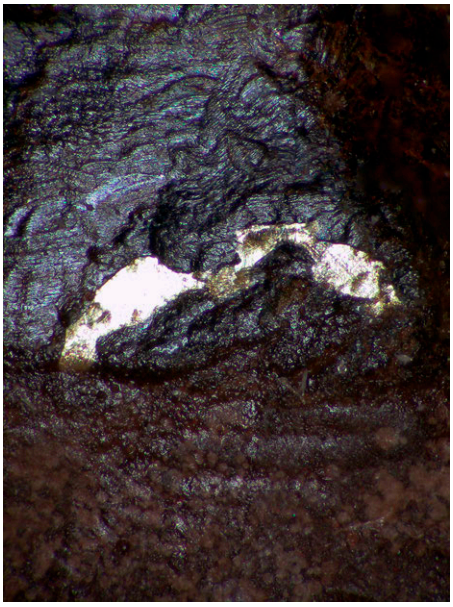

安?（2 画）


安?（3 画左）


安?（3 画左・偏光）


安?（3 画右）


安?（右側隆起部）


安?（4 画）

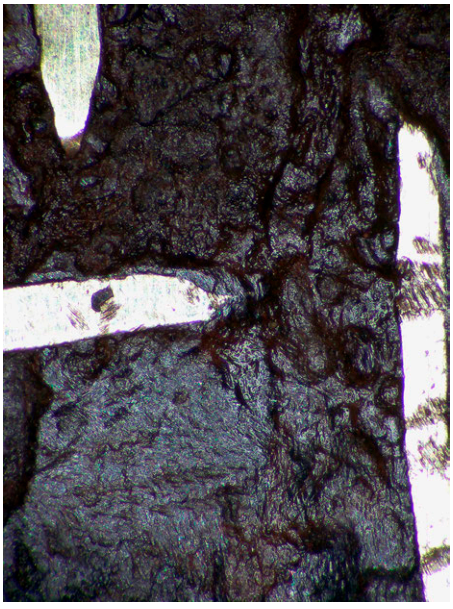

「此」B 面 1 字目


此（偏光フィルター）


此（1 画）


此（2 画）

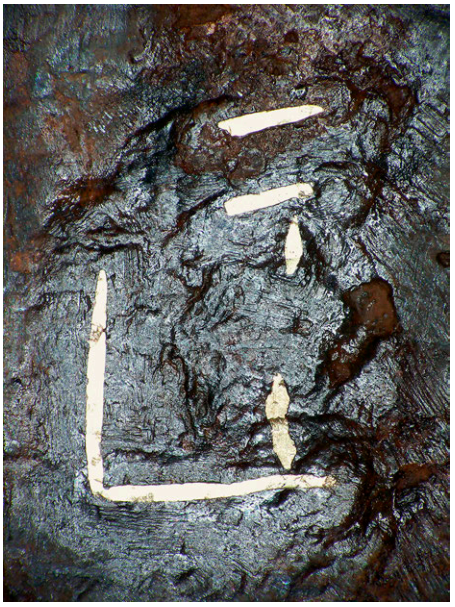

此（3 画左）


此（3 画右）


此（4 画上）

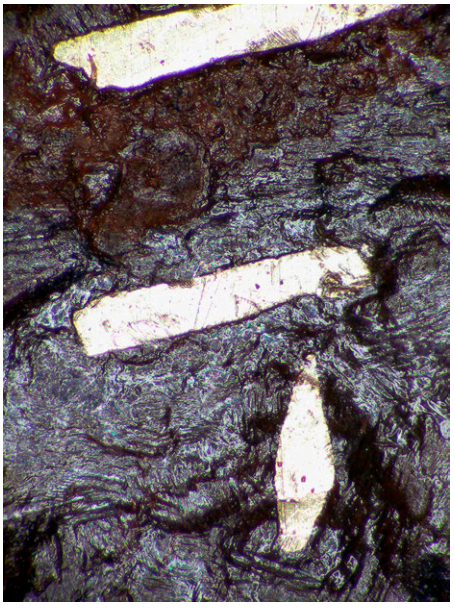

此（4 画中）


此（4 画下）


「廷」B 面 2 字目


廷（偏光フィルター）


廷（1 画）


廷（2・3 画）


廷（3 画）

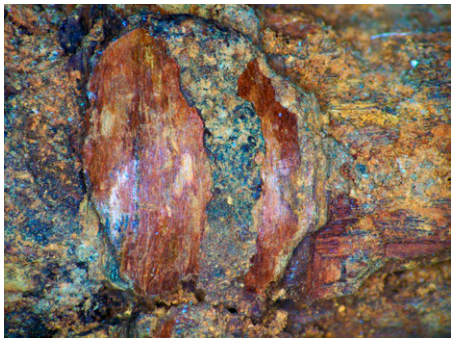

廷（3 画下・5 画右）

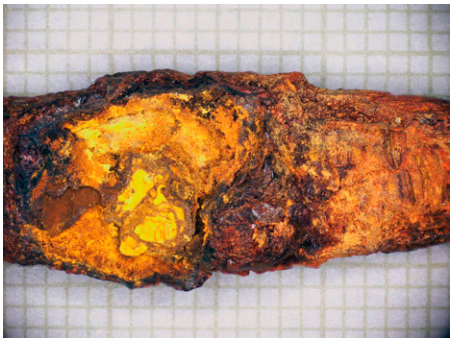

廷（4 画）

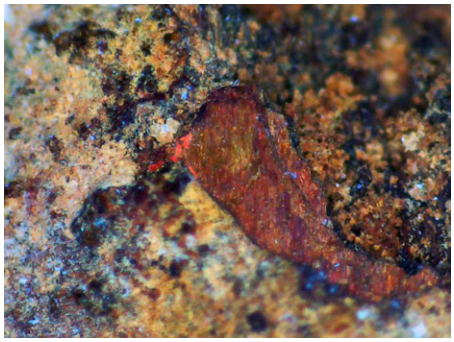

廷（4・5 画左）


鉄鏃 21 口巻・矢柄

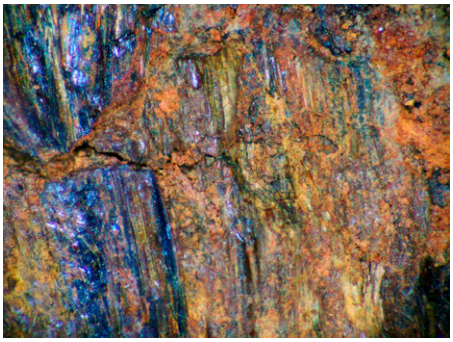

鉄鏃 22 口巻・矢柄・茎巻


鉄鏃 22 口巻・塗膜・赤色顔料痕跡


鉄鏃 24 口巻・赤彩遺存部

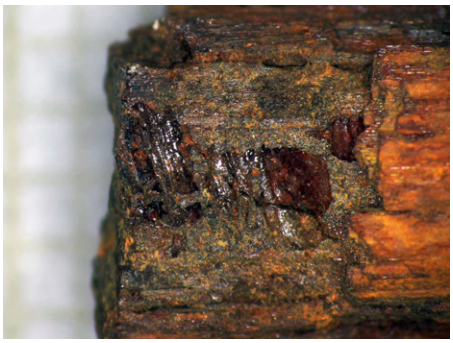

鉄鏃 24 口巻・塗膜・赤彩（拡大）


鉄鏃 24 矢柄（スリット？）・茎巻


鉄鏃 24 茎巻（拡大）


鉄鏃 25 口巻


鉄鏃 25 口巻（断面）塗膜・赤彩・矢柄


鉄鏃 29 矢柄・茎巻


鉄鏃 31 矢柄・茎巻

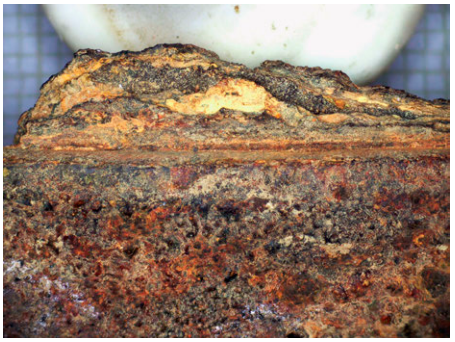

鉄鏃 33 矢柄・茎巻（拡大）

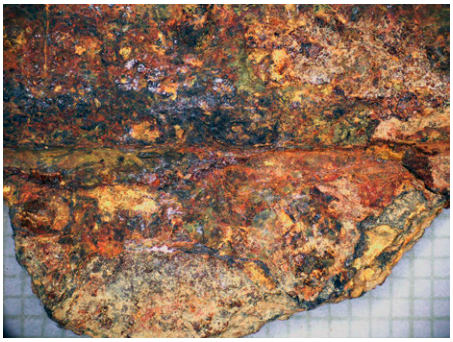

鉄鏃 34 茎巻

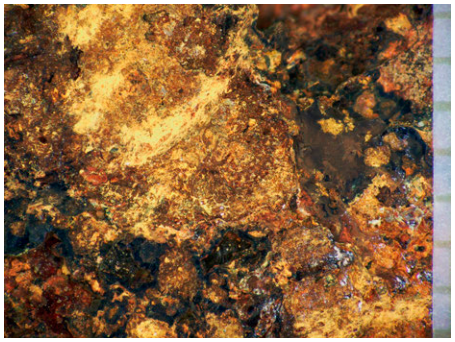

鉄鏃 36 矢柄・茎巻


鉄鏃 37 茎巻


鉄鏃 38 茎巻

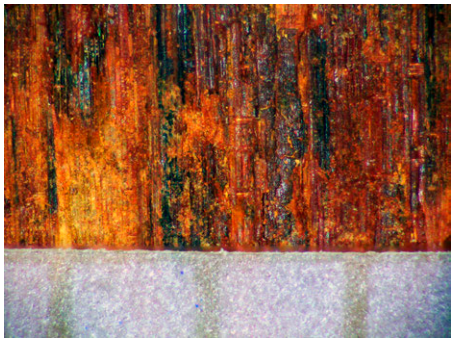

短甲 40 面取り加工

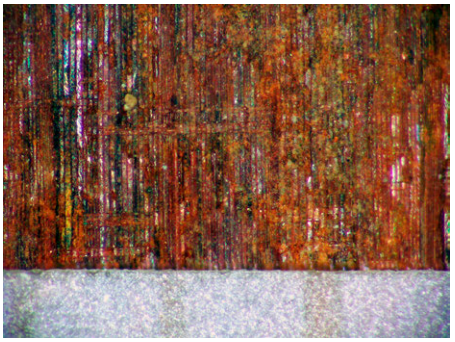

短甲 41 面取り加工


短甲 41 短甲内面（毛皮?）

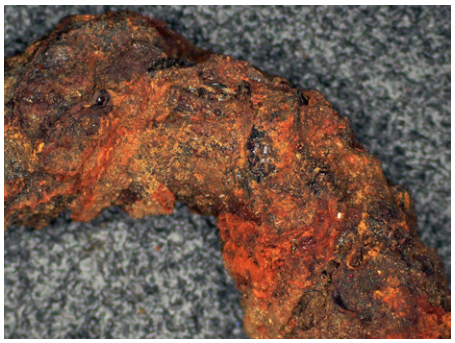

短甲 43 面取り加工・重ね部


短甲 47 表面


不明板状片 50 木質（鞘由来か）

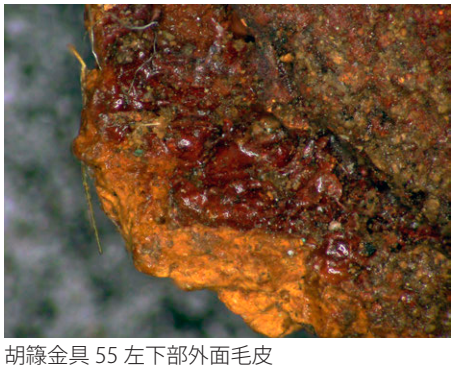

不明板状片 51 木質（鞘由来か）

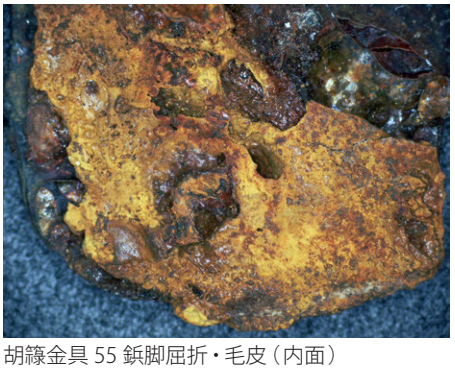

胡籙鉸具 53 軸棒付着繊維


胡籙鉸具 53 環状部付着繊維

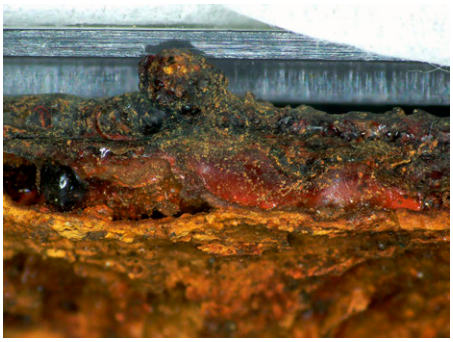

胡籙金具 54 革・折り返し加工（内面）


胡籙金具 54 折り返し加工（側面）

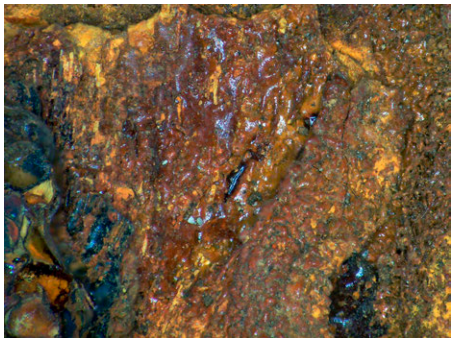

胡籙金具 55 左下部外面毛皮


胡籙金具 55 鋲脚屈折・毛皮（内面）


胡籙金具 55 獣毛・革（内面）


胡籙金具 55 革と金具（樹脂状）（側面）


胡籙金具 56 鋲脚・革（側面）

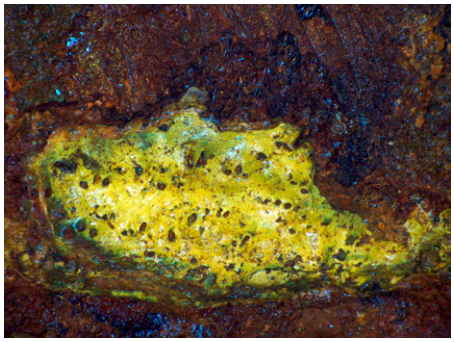

胡籙金具 56 鋲脚付近の羽・毛皮（内面）


胡籙金具 57 獣毛・革（内面）


胡籙金具 57 鋲脚・獣毛・赤色顔料

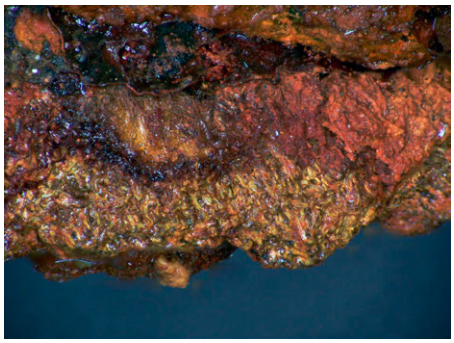

胡籙金具 57 赤色顔料付着（外面）

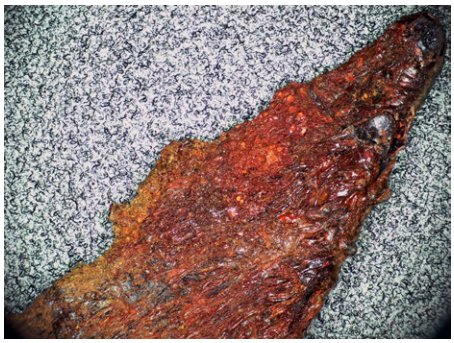

胡籙金具 58 鋲脚・獣毛（内面）

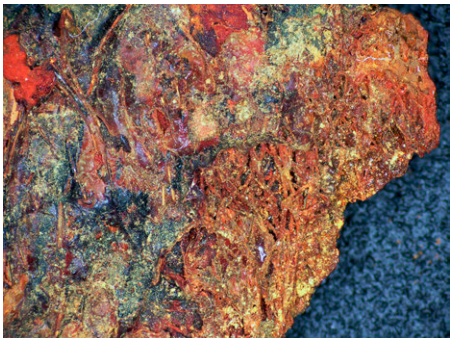

胡籙金具 58 革（内面）

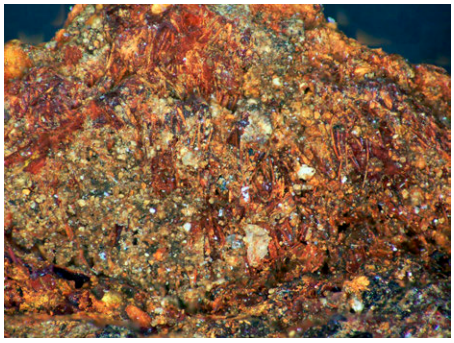

胡籙金具 58 羽枝状・革（内面）


胡籙金具 58 革（底面）

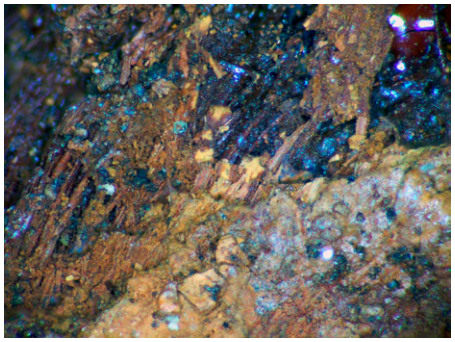

胡籙金具 58 毛皮・樹脂（膠状）（底面）

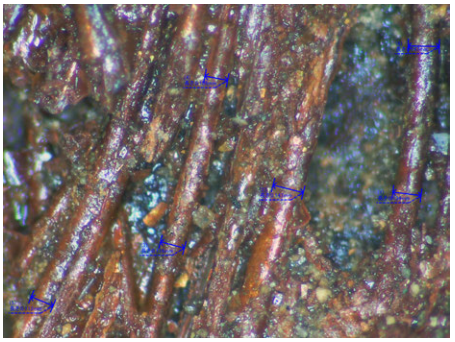

胡籙金具 59 獣毛（内面）

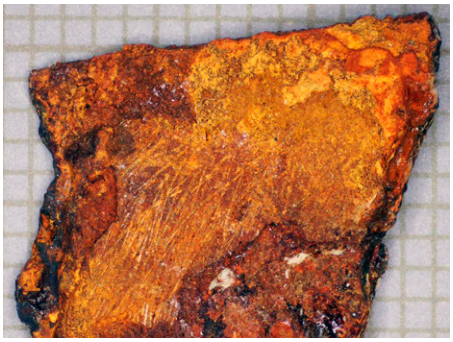

胡籙金具 59 獣毛（外面先端側）

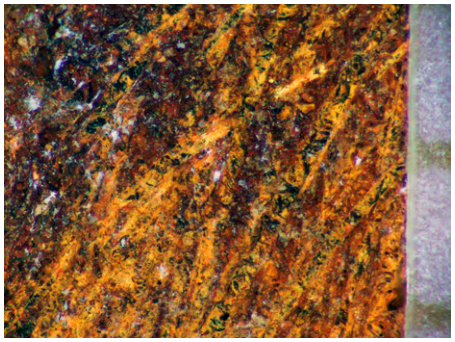

胡籙金具 59 獣毛（外面内側）

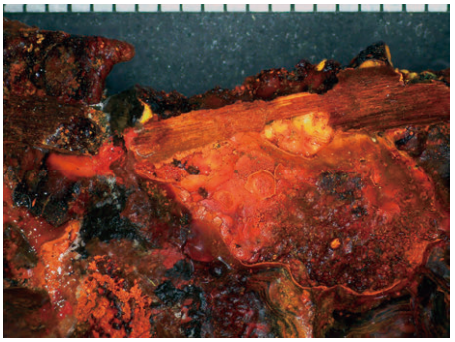

胡籙金具 59 鋲脚屈折・獣毛・革（内面）


胡籙金具 59 獣毛・革（内面）

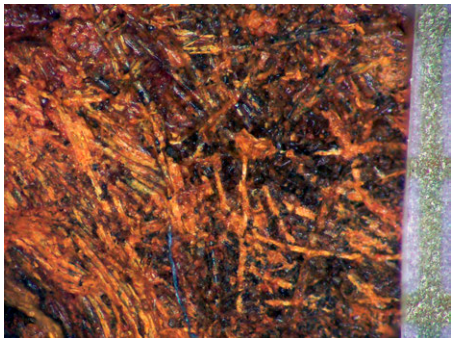

胡籙金具 59 獣毛（拡大）


胡籙金具 60 獣毛（内面）


胡籙金具 60 獣毛（内面拡大）


胡籙金具 61 木質圧痕（矢柄?）（内面）

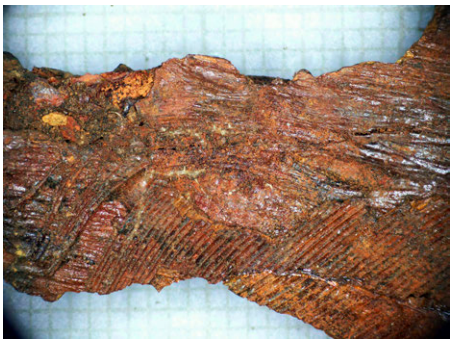

胡籙金具 61 鋲脚・獣毛・革（内面）

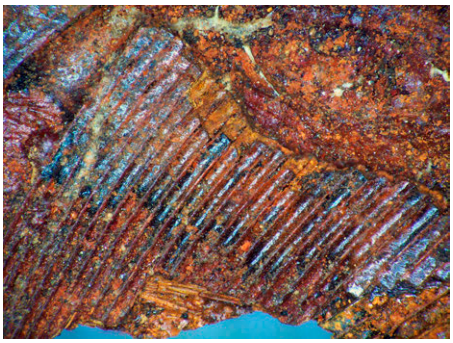

胡籙金具 61 獣毛（内面拡大）

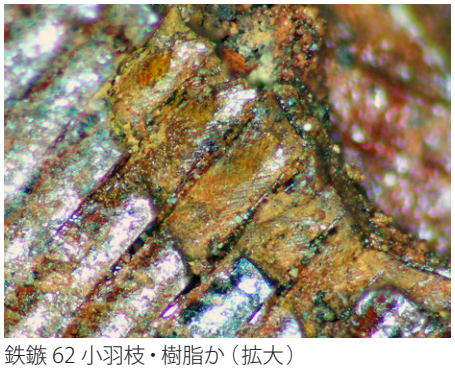

胡籙金具 61 網状組織（内面拡大）

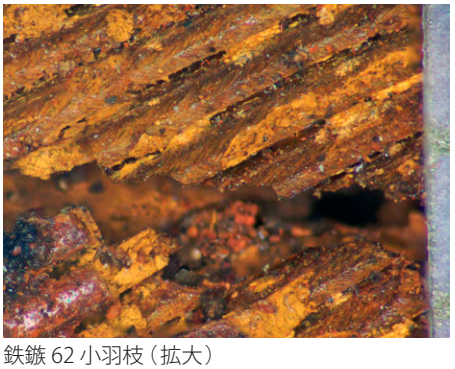

鉄鏃 62 獣毛

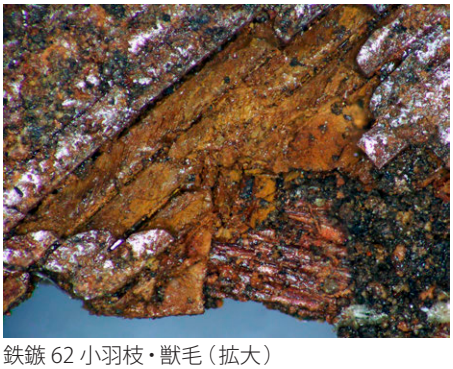

鉄鏃 62 羽・獣毛


鉄鏃 62 羽・獣毛

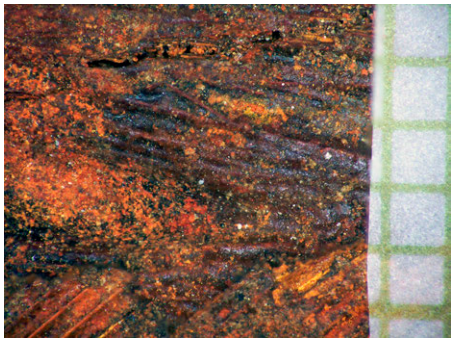

鉄鏃 62 羽・獣毛（拡大）

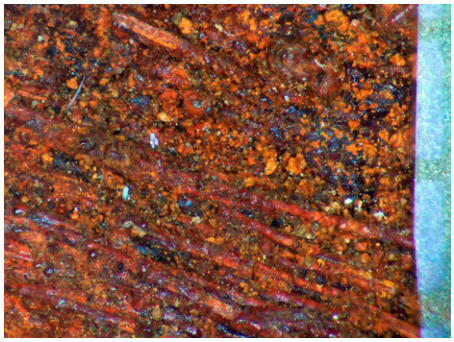

鉄鏃 62 小羽枝・樹脂か（拡大）


鉄鏃 62 小羽枝（拡大）

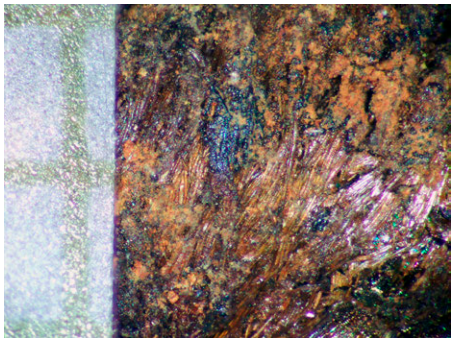

鉄鏃 62 小羽枝・獣毛（拡大）


鉄鏃 62 羽（側面）


鉄鏃 62 獣毛・羽

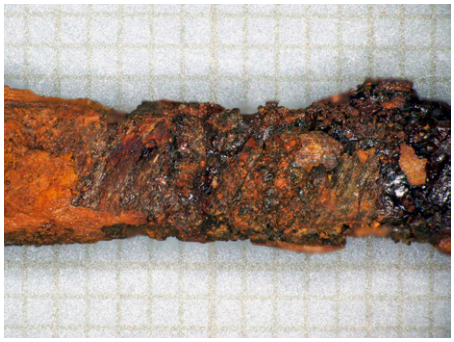

鉄鏃 62 獣毛（拡大）


鉄鏃 62 茎巻


鉄鏃 62 茎巻（拡大）


鉄鏃 63 口巻・矢柄・茎巻

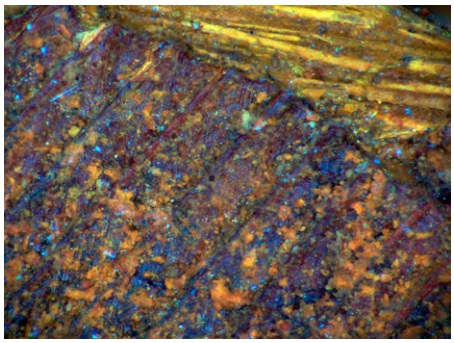

鉄鏃 63 口巻（繊維・塗膜・赤色顔料？）

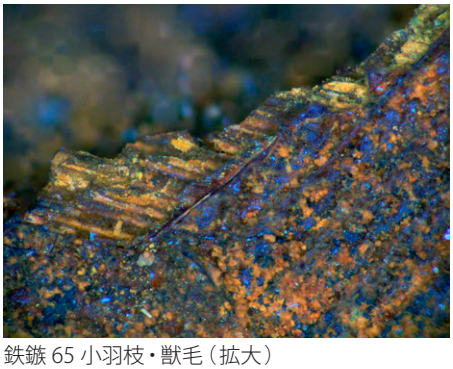

鉄鏃 63 茎巻


鉄鏃 64 茎巻

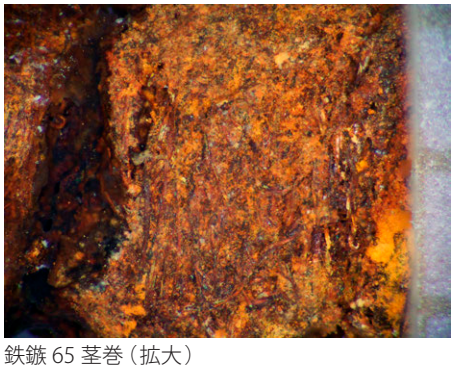

鉄鏃 65 羽・獣毛


鉄鏃 65 羽・獣毛（拡大）


鉄鏃 65 小羽枝・獣毛（拡大）

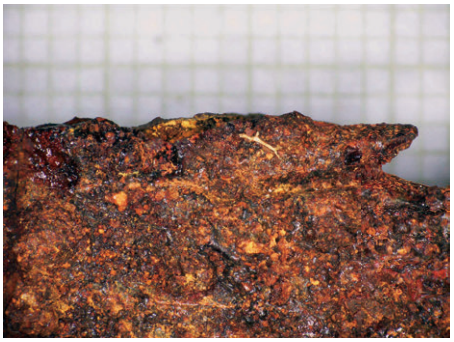

鉄鏃 65 小羽枝・獣毛（拡大）


鉄鏃 65 茎巻

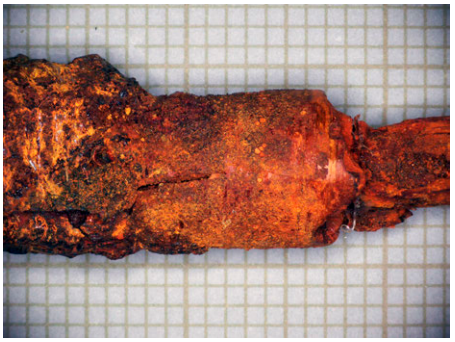

鉄鏃 65 茎巻（拡大）


鉄鏃 66 口巻・矢柄

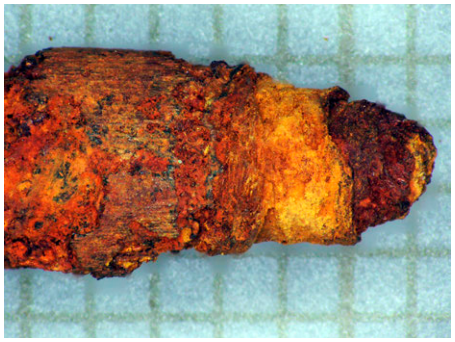

鉄鏃 66 茎巻

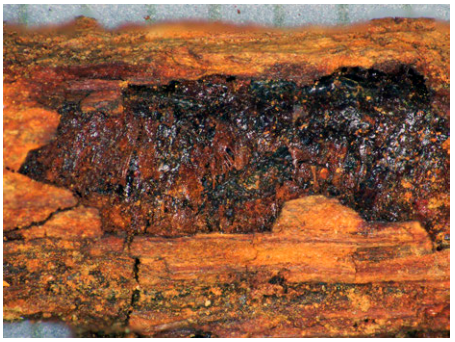

鉄鏃 67 腸抉

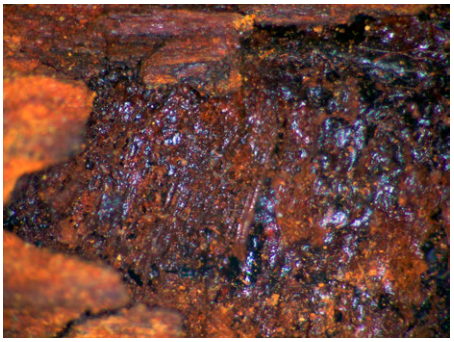

鉄鏃 67 口巻

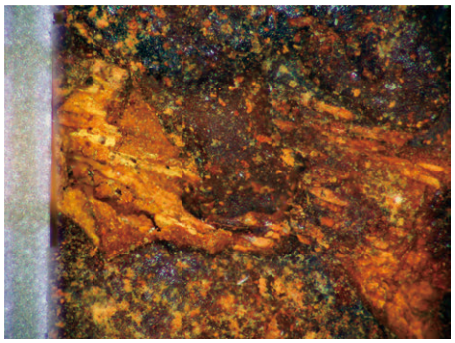

鉄鏃 69 口巻


鉄鏃 69 口巻・樹皮・塗膜（漆?）


鉄鏃 69 茎巻

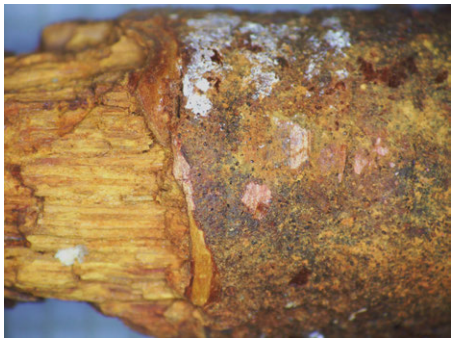

鉄鏃 70 茎巻

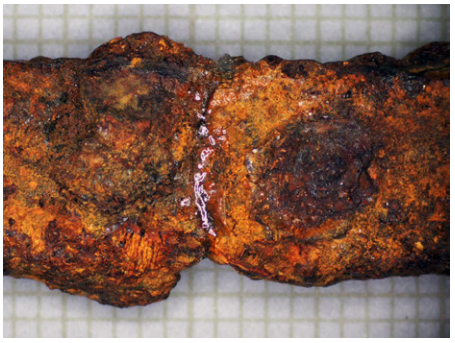

鉄鏃 70 茎巻（拡大）

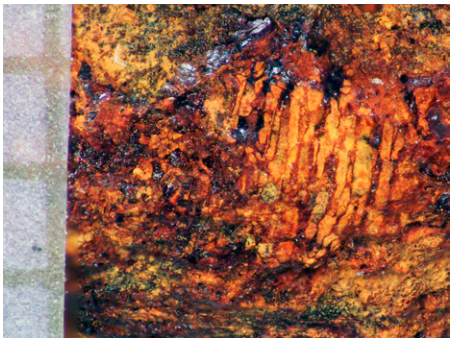

鉄鏃 70 獣毛痕跡?

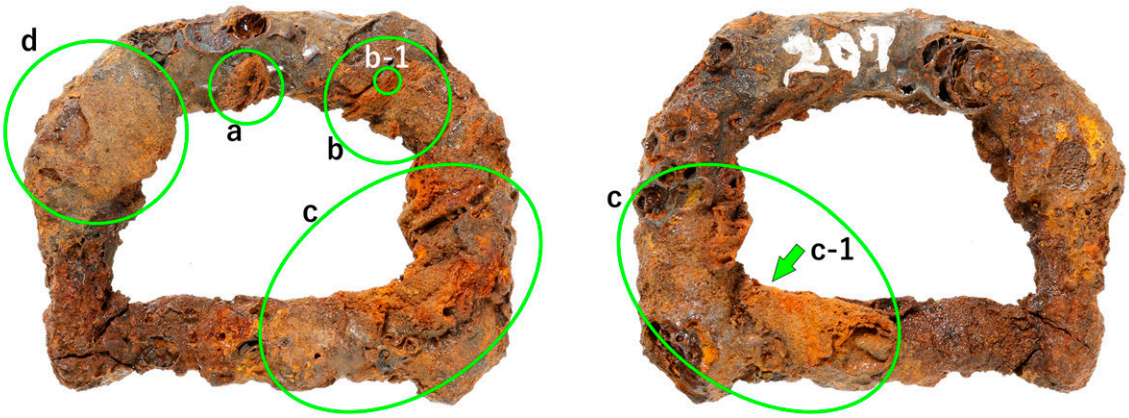

鉄鏃 71 茎巻


鉄鏃 72 矢柄スリット?

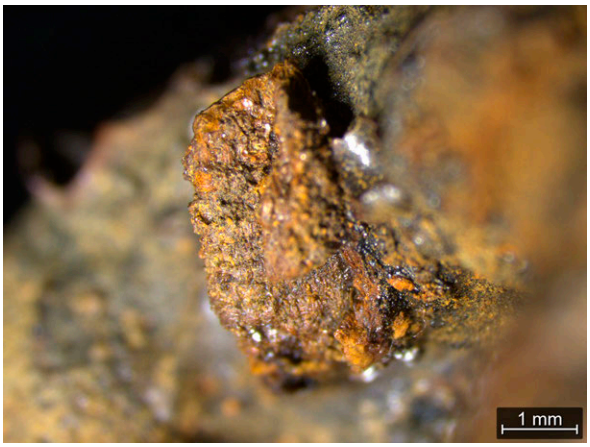

鉄鏃 74 口巻・矢柄


きさげ 75 長軸直交方向に獣毛痕跡か


きさげ 75 獣毛痕跡（転写?）



第 73 図　鉸具



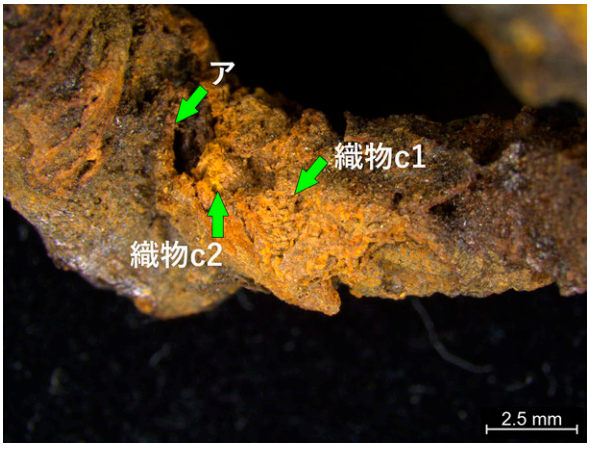
第 74 図　織物 a



第 75 図　織物 b



第 76 図　織物 b の繊維断面（b－1）



第 77 図　織物の重なり（c－1）

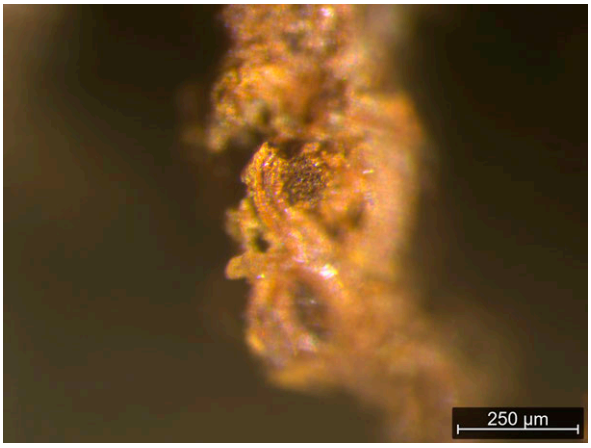


第 78 図　織物 c1

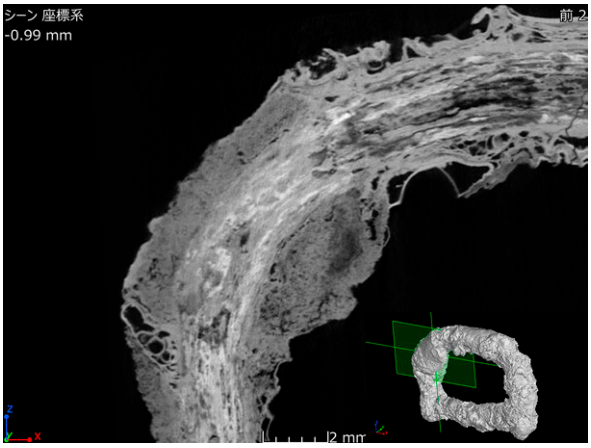




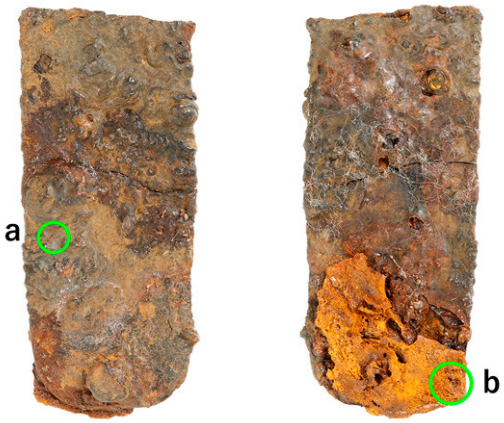
第 79 図　織物 c2（左：織物、右：織物断面、深度合成のためスケール無し）



第 80 図　織物 c2 繊維断面（ア）



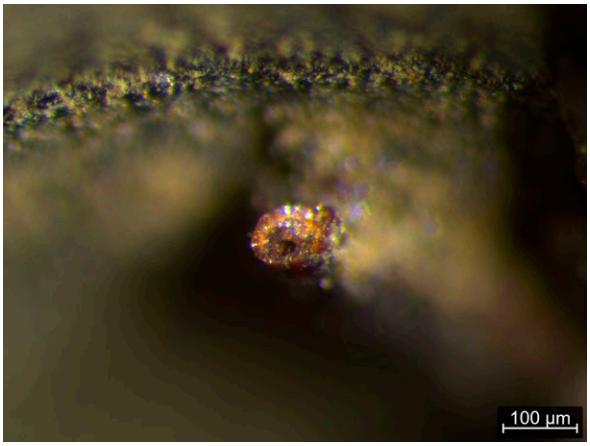
第 81 図　d 付着物の断層観察像



第 82 図　吊手金具 1



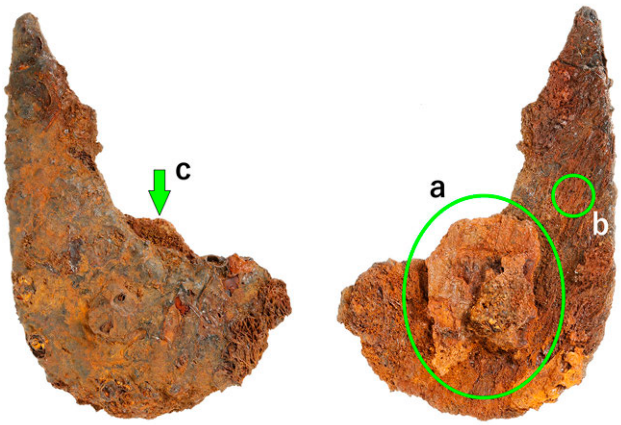
第 83 図　付着繊維（a）



第 84 図　付着繊維断面（a）



第 85 図　裏面の繊維（b）

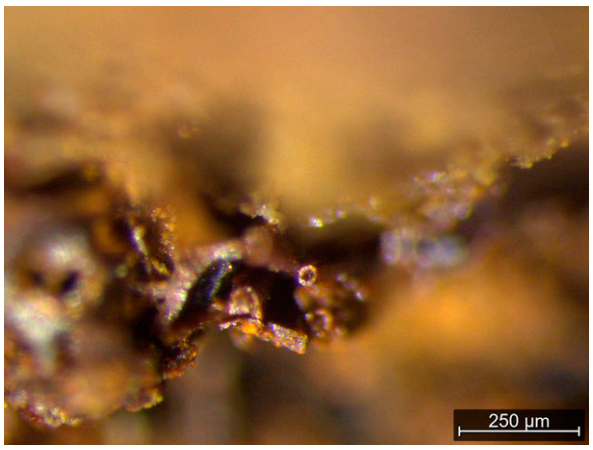


第 86 図　勾玉形金具

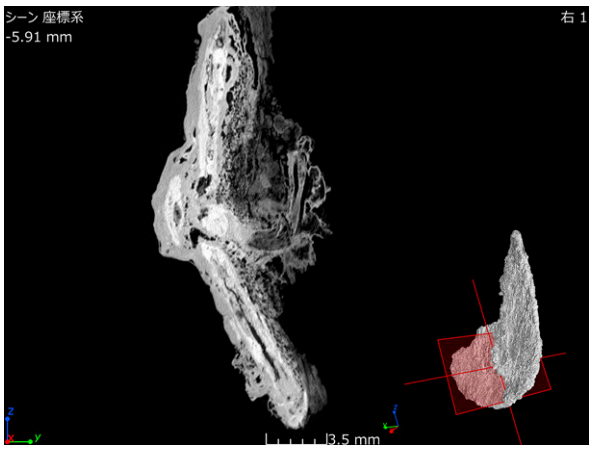


第 87 図　繊維群観察像（b）

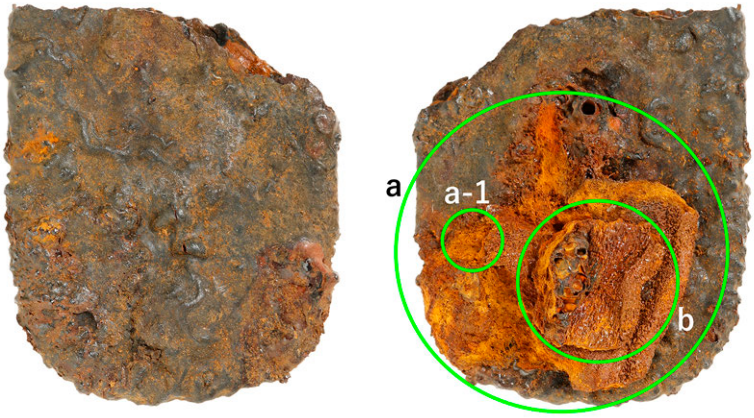




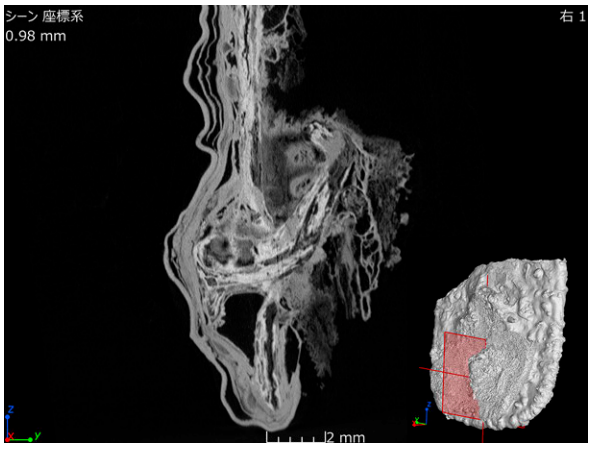
第 88 図　繊維断面（左：太い繊維、右：細い繊維）



第 89 図　鋲の断層観察像



第 90 図　吊手金具 2



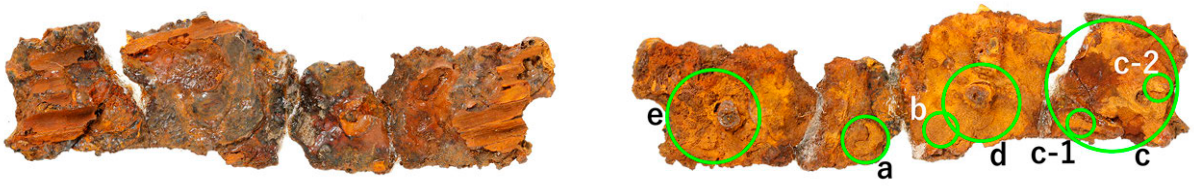
第 91 図　鋲の断層観察像



第 92 図　網状層（a－1）



第 93 図　飴状の錆が付着した毛様の繊維



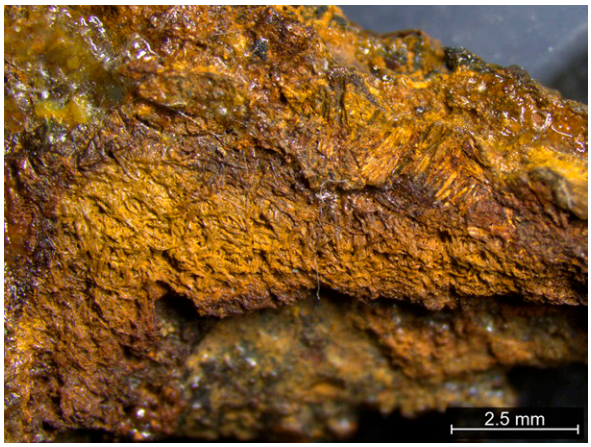
第 94 図　帯状金具 1



第 95 図　網状層（a）



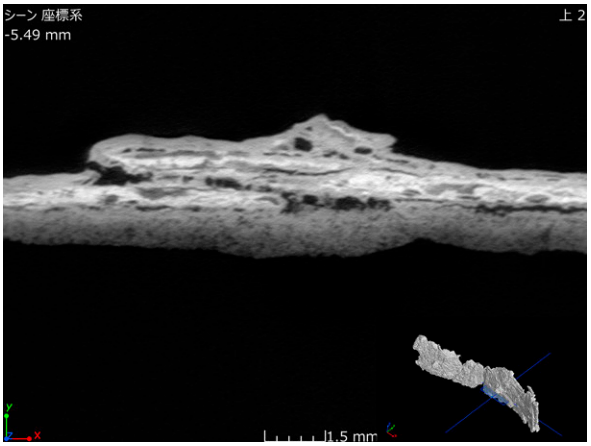
第 96 図　網状層（b）

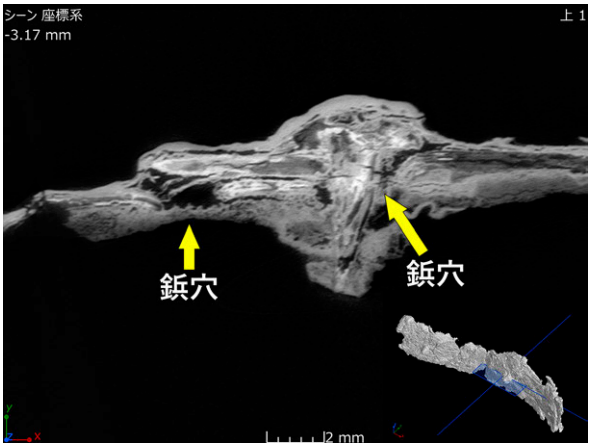


第 97 図　網状層と毛の重なり（c－1）

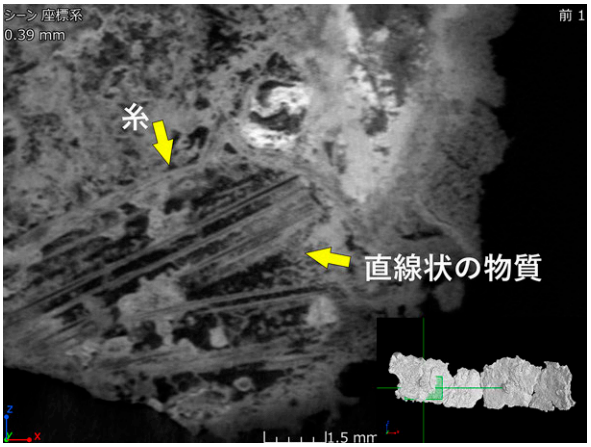


第 98 図　毛穴（c－2）





第 99 図　金具の重なりと革の断層観察像（d）

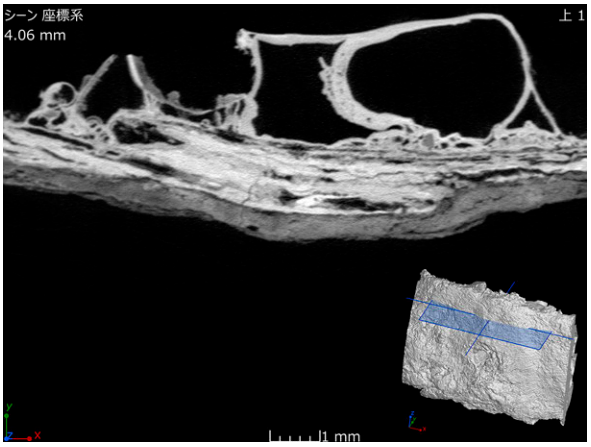


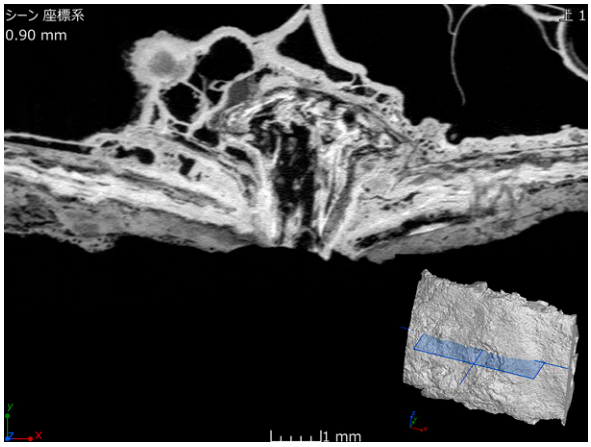
第 100 図　糸と直線状物質の断層観察像（e）



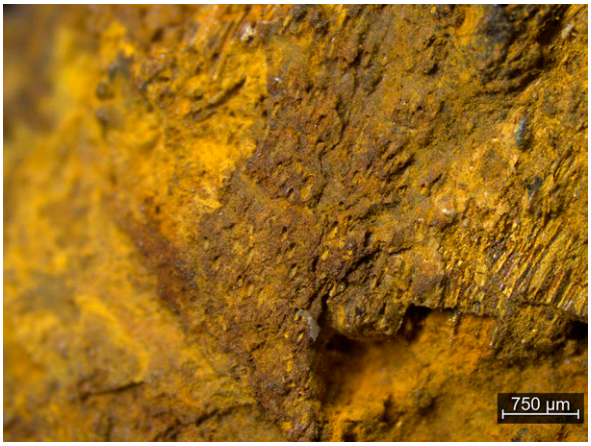


第 101 図　帯状金具 2

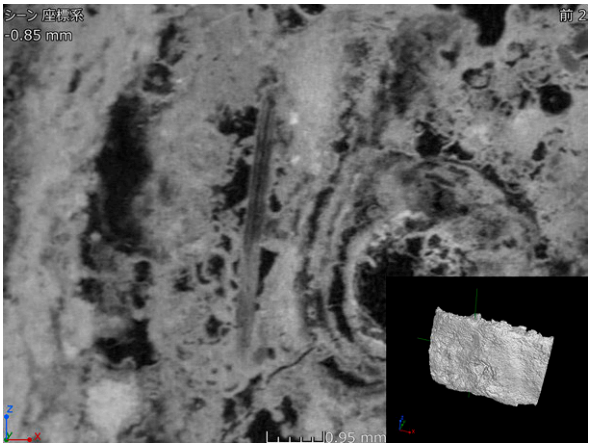




第 102 図　金具の重なりと革の断層観察像（a）



第 103 図　毛穴（b）



第 104 図　直線状物質の断層観察像（a）



第 105 図　帯状金具 3

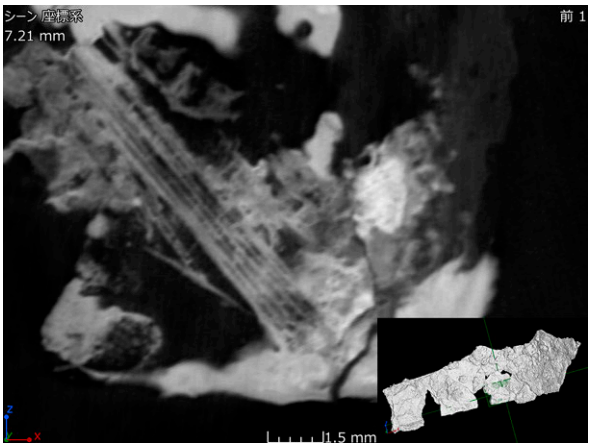


第 106 図　網状層と毛の重なり（a）

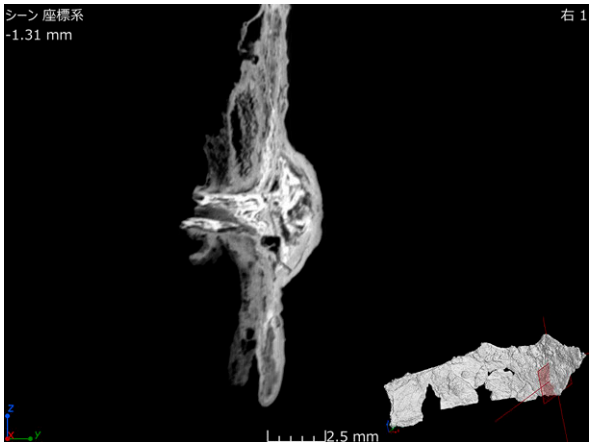


第 107 図　毛穴（b）

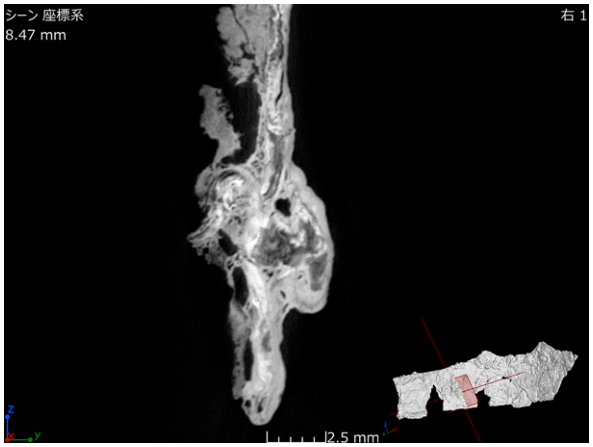




第 108 図　線状物質（c, 左：顕微鏡観察像、右：断層観察像）



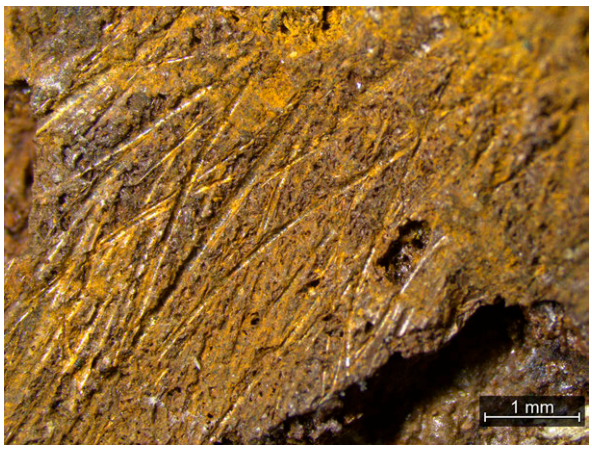
第 109 図　鋲の断層観察像（d）



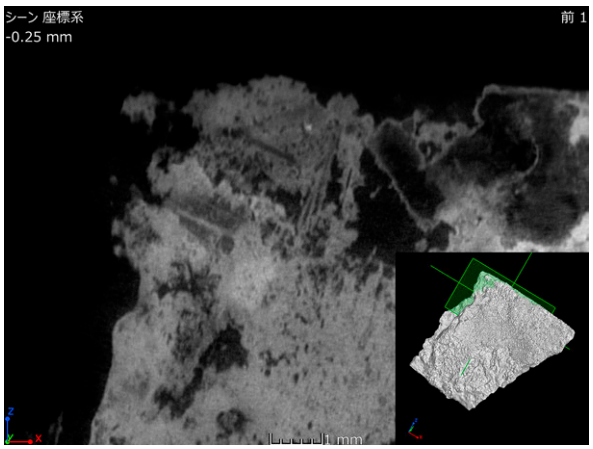
第 110 図　鋲の断層観察像（e）



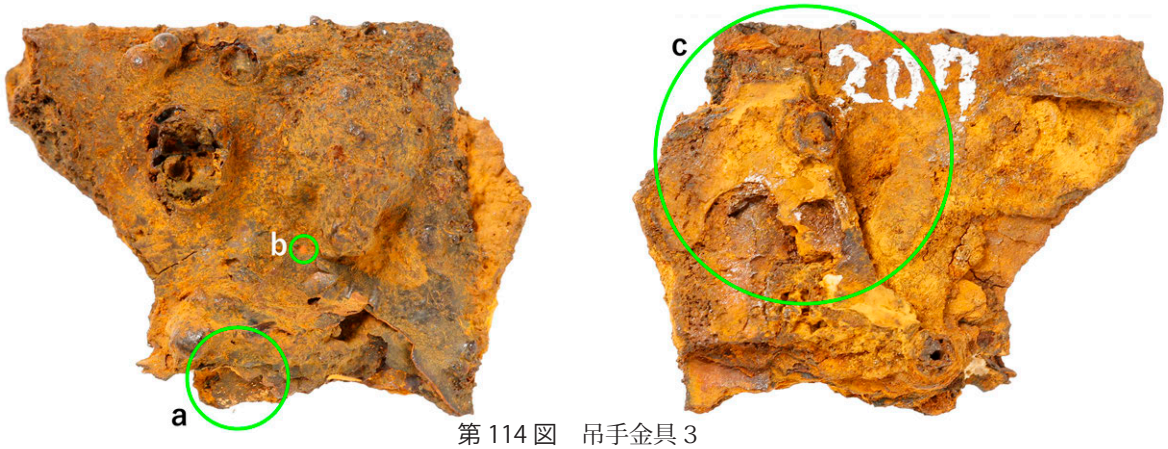
第 111 図　帯状金具 4



第 112 図　網状層と毛の重なり（a）



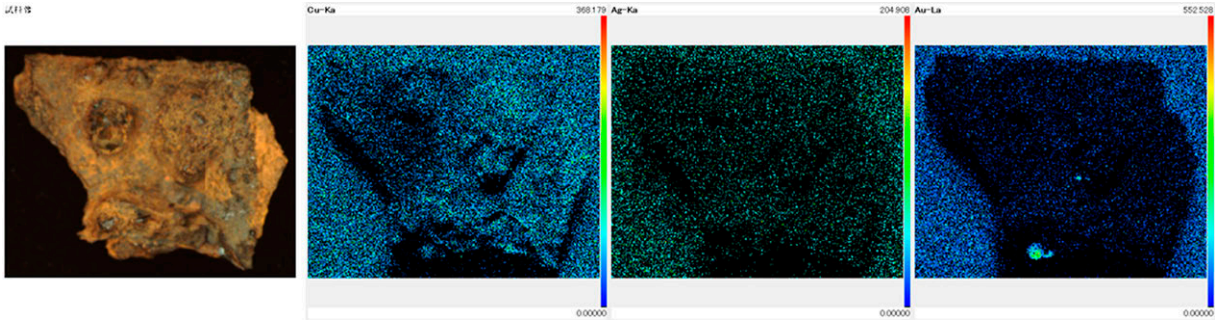
第 113 図　直線状物質の断層観察像（b）



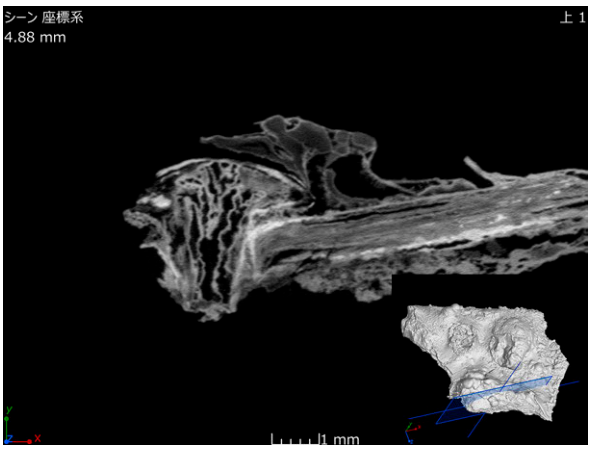
第 114 図　吊手金具 3



第 115 図　金色箇所の顕微鏡観察像（a）



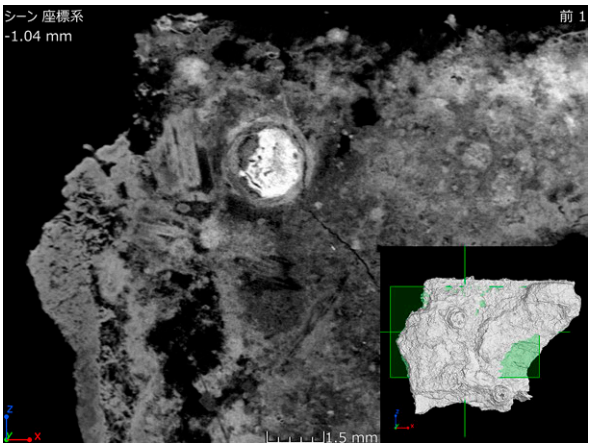
第 116 図　元素マップ（左より光学像、銅（Cu）、銀（Ag）、金（Au））



第 117 図　鋲の断層観察像（a）



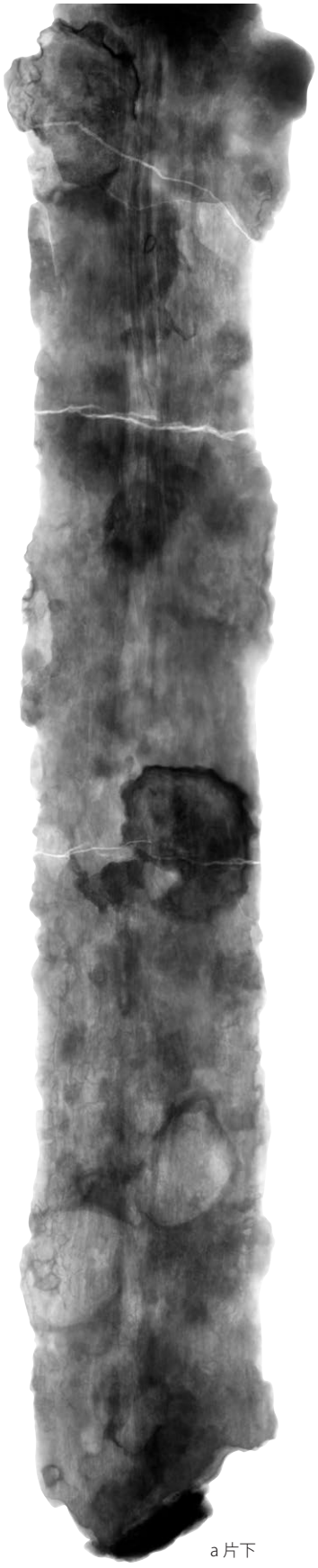
第 119 図　赤色顔料の顕微鏡観察像（b）



第 121 図　直線状物質の断層観察像（c）



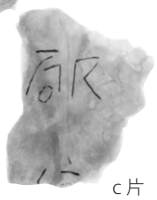
a片上



a片下



b片



c片

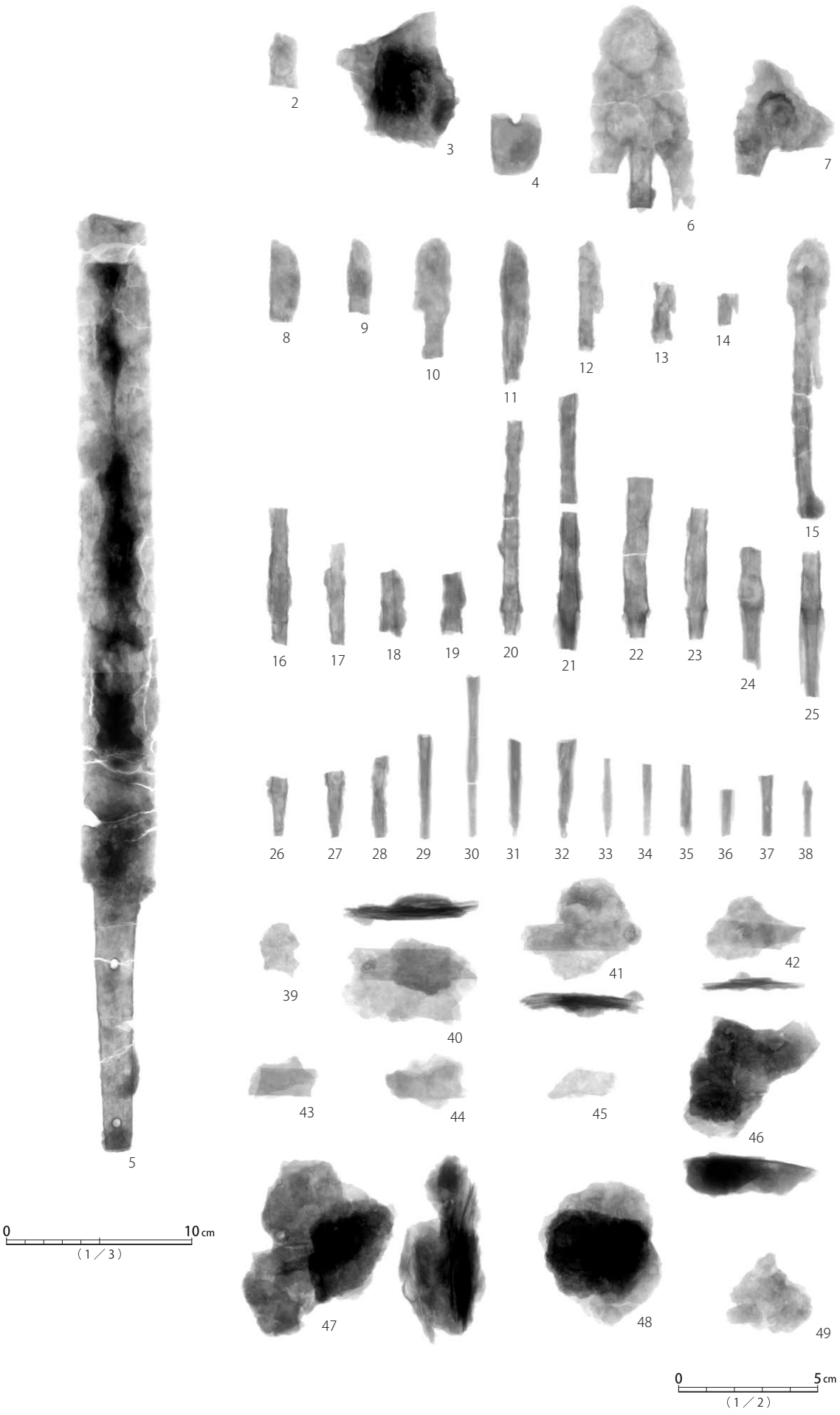


d片

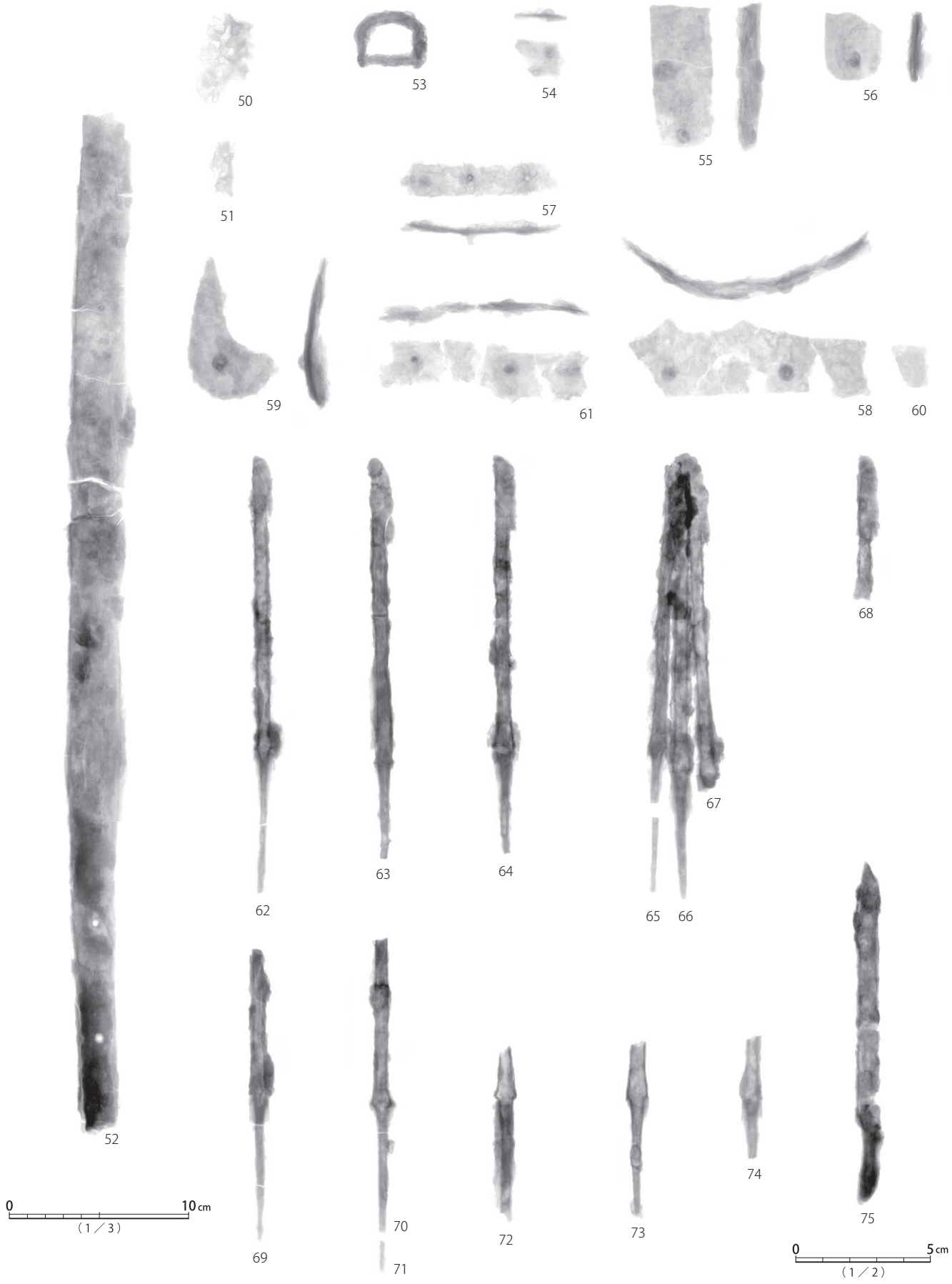
王賜銘鉄剣（X線写真）

実寸

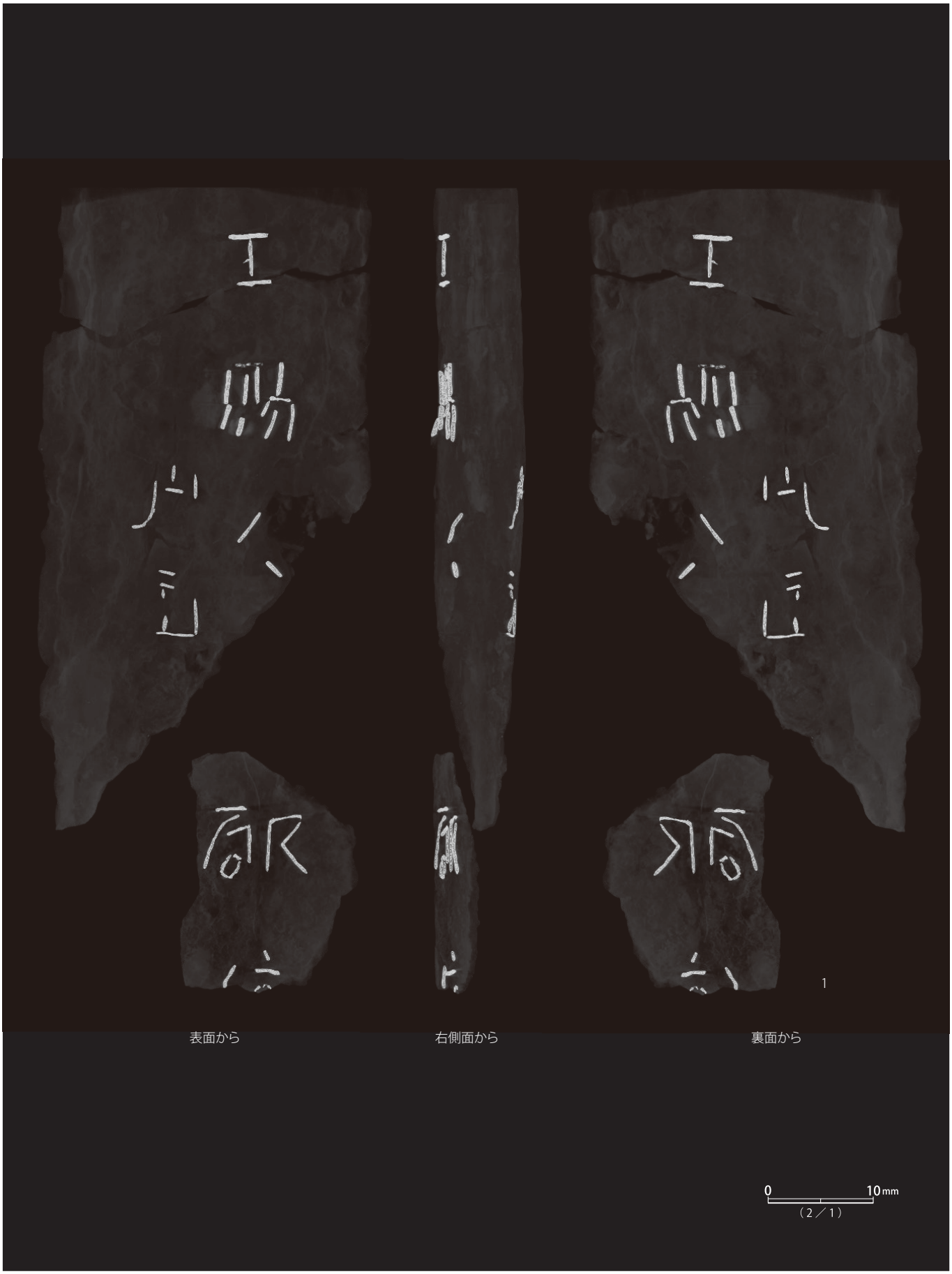
金属製品（X線写真）


2
3
4
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
5
0 10cm
（1／3）
0 5cm
（1／2）

金属製品（X線写真）


50
53
54
56
55
51
57
59
61
58
60
52
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
0 10cm
（1／3）
0 5cm
（1／2）

金属製品X線CT画像（透過）

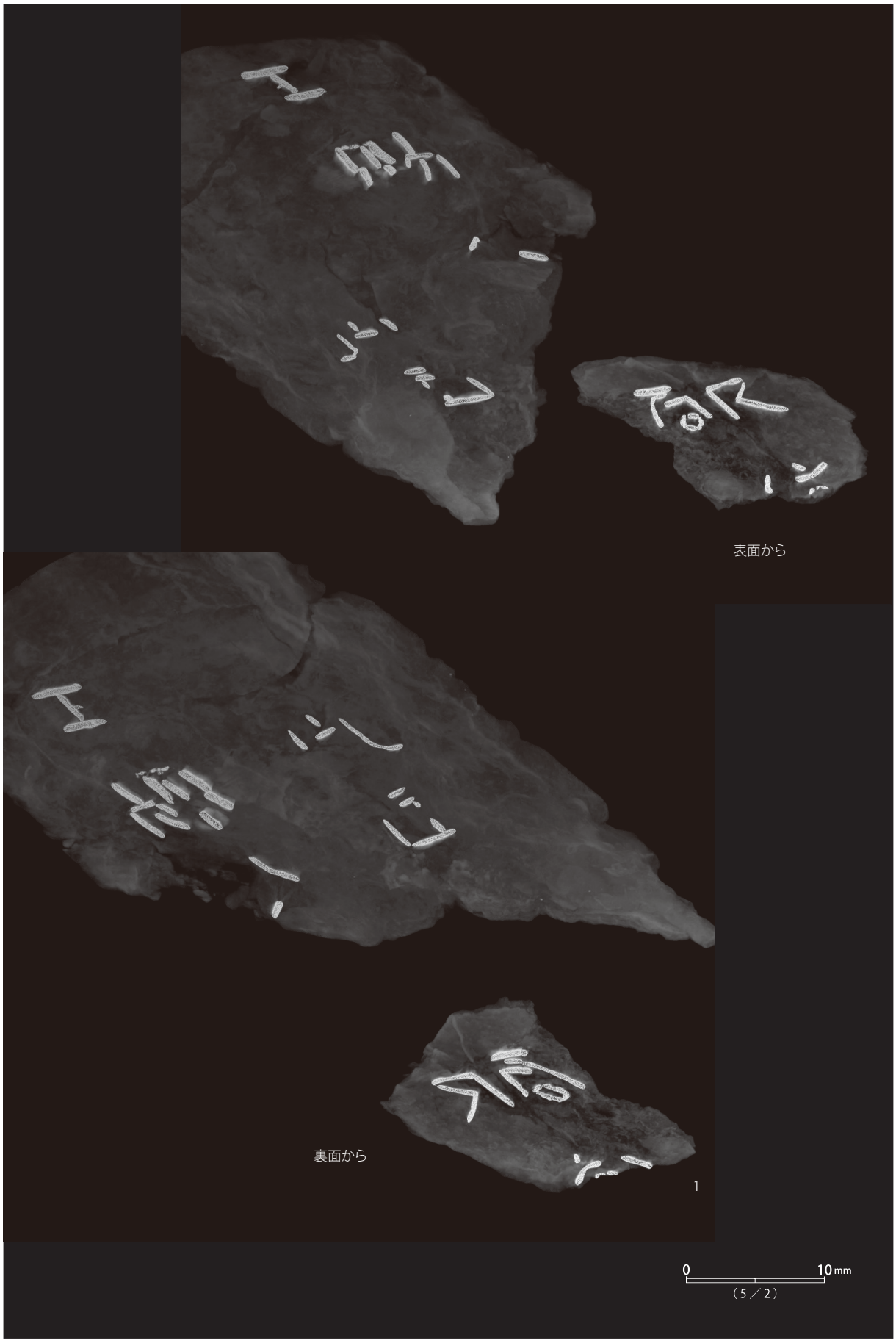


1

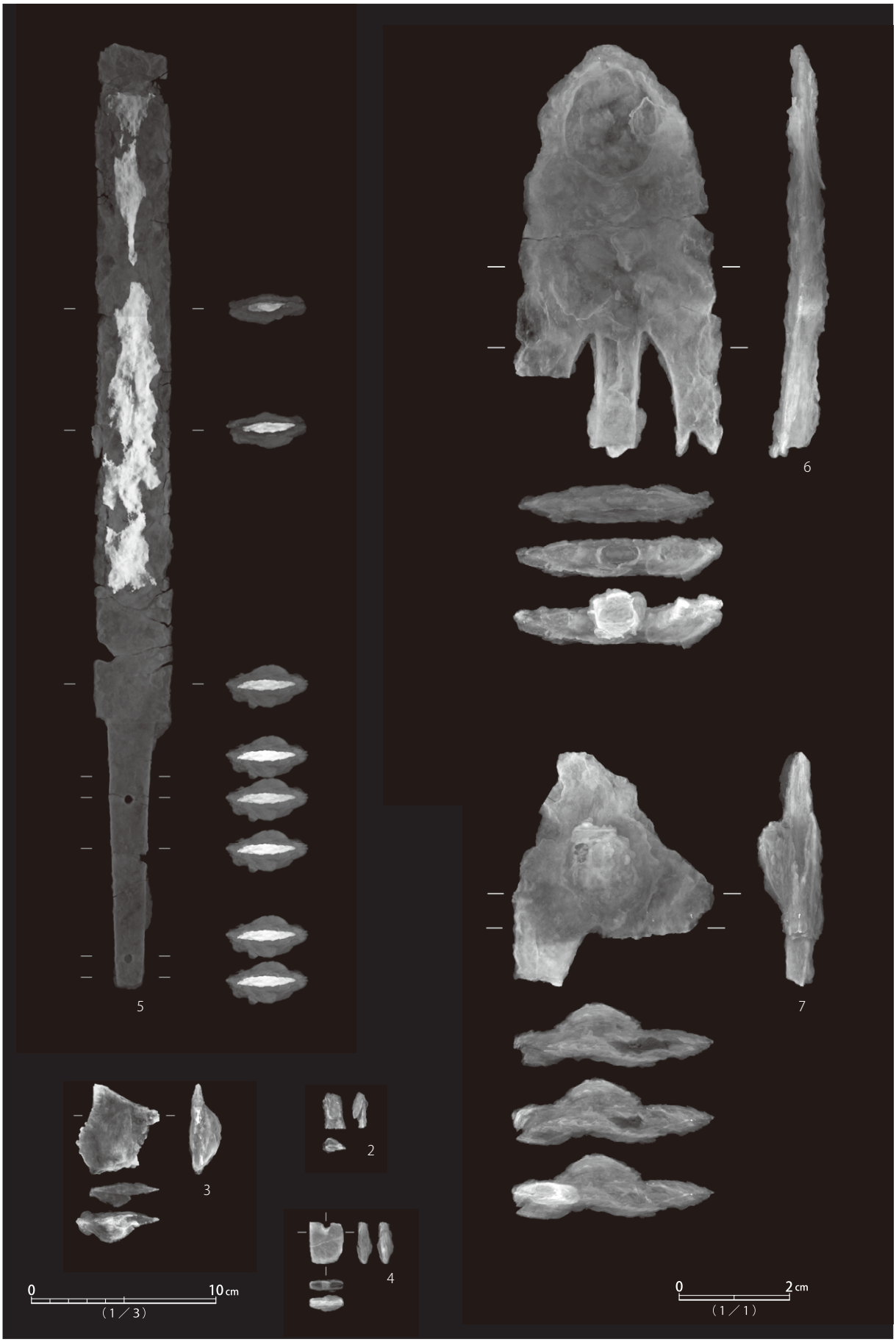
表面から　右側面から　裏面から

0　10mm
（2／1）

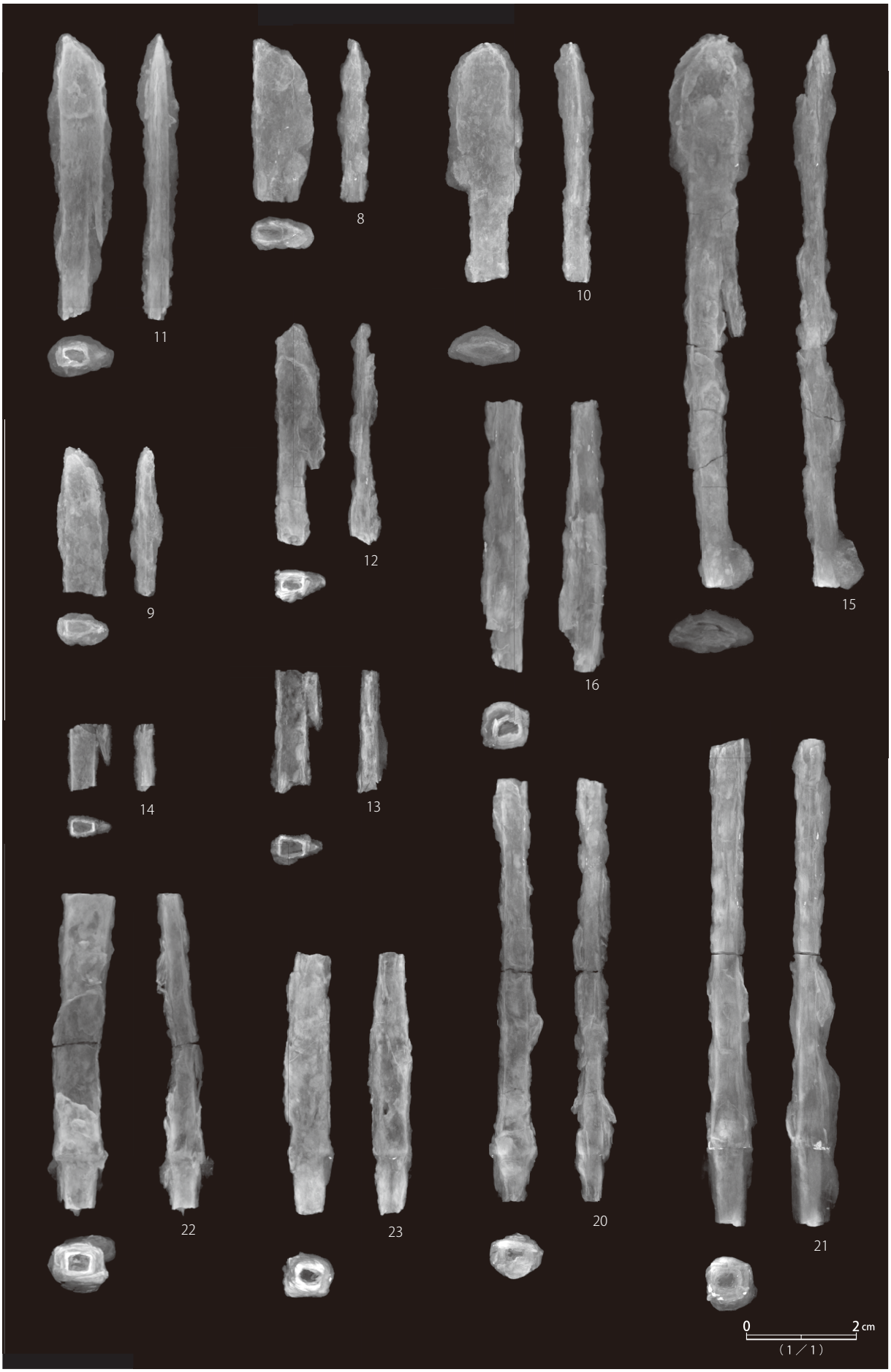
金属製品X線CT画像（透過）



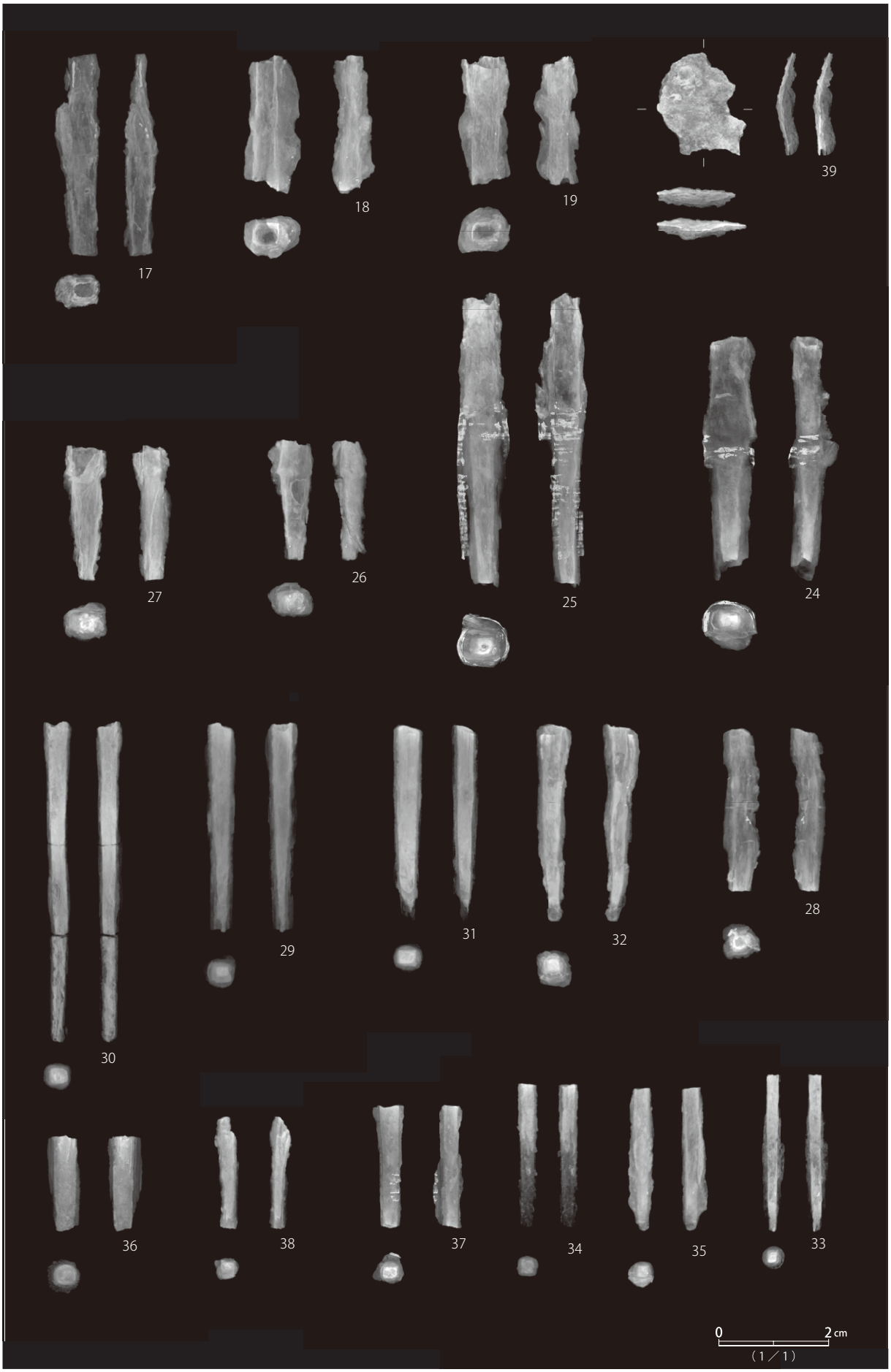
金属製品X線CT画像（透過）



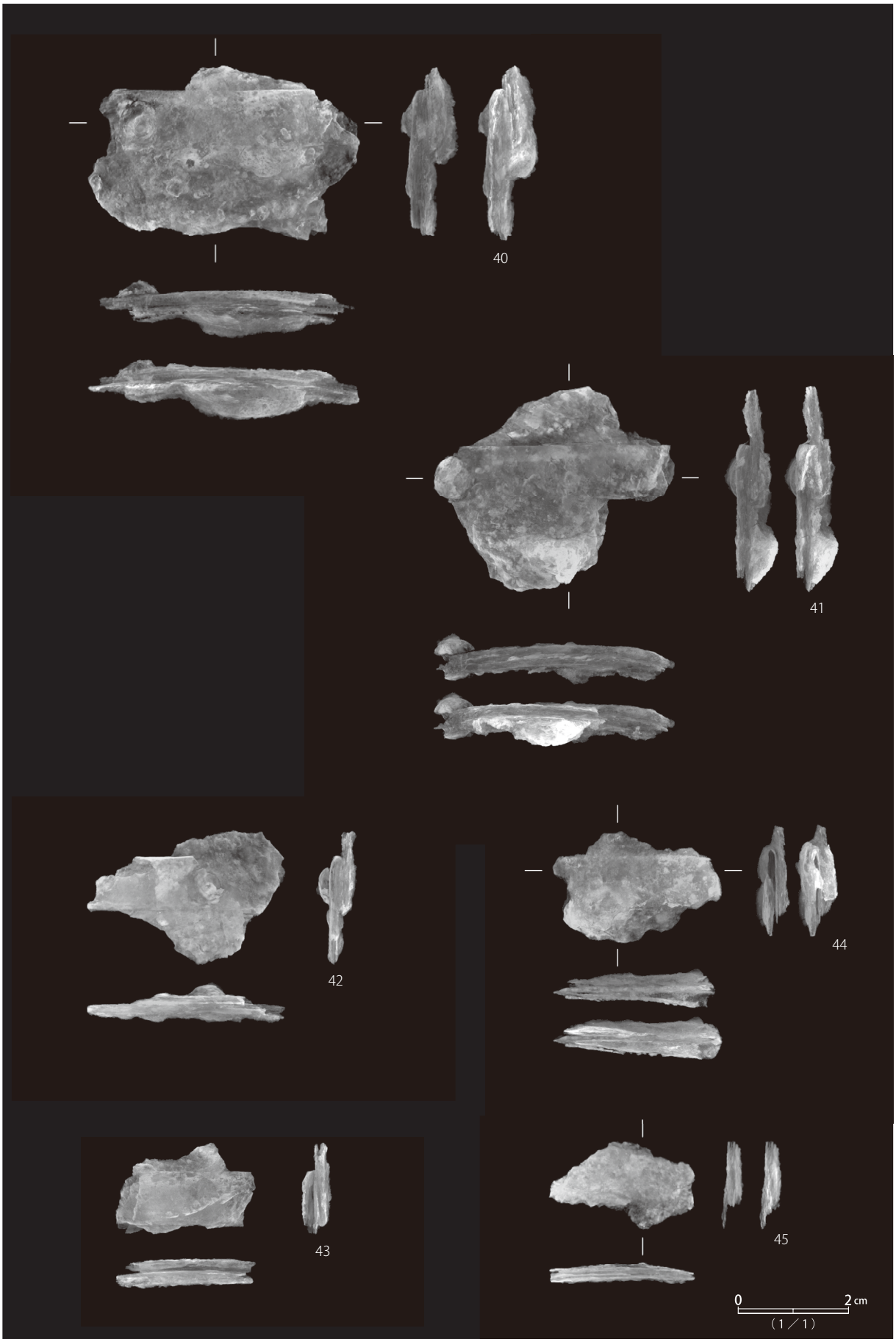
金属製品X線CT画像（透過）



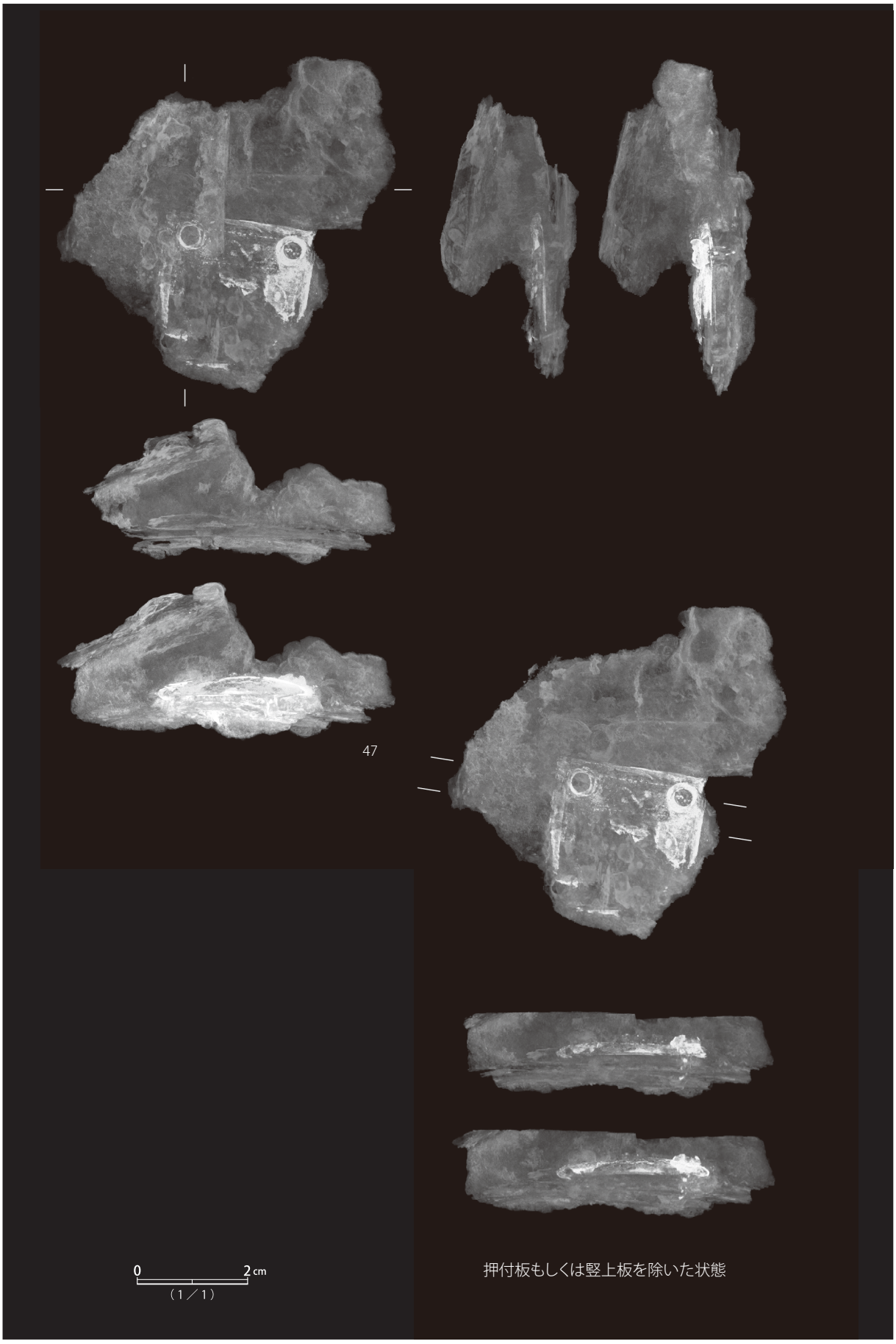
金属製品X線CT画像（透過）



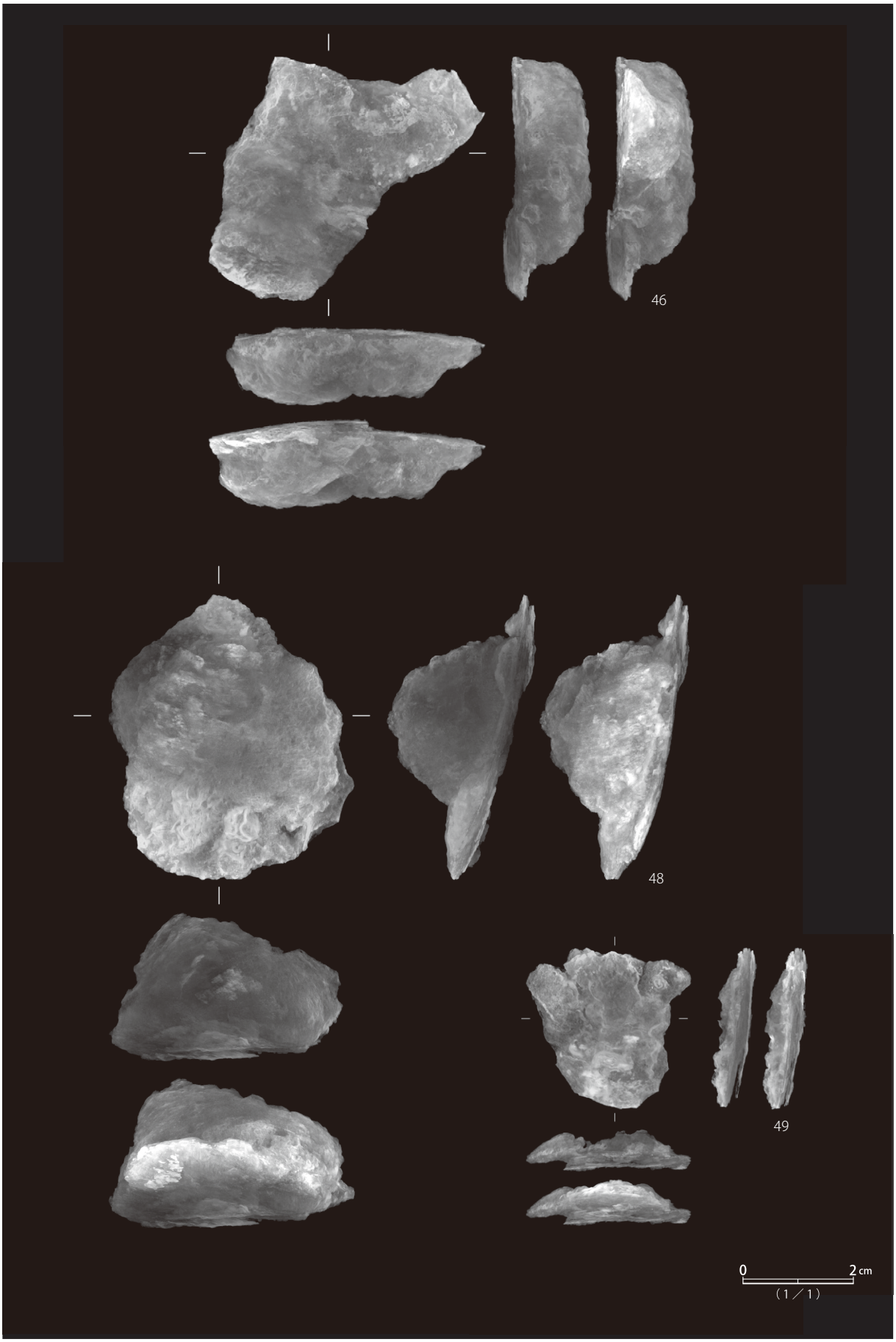
金属製品X線CT画像（透過）



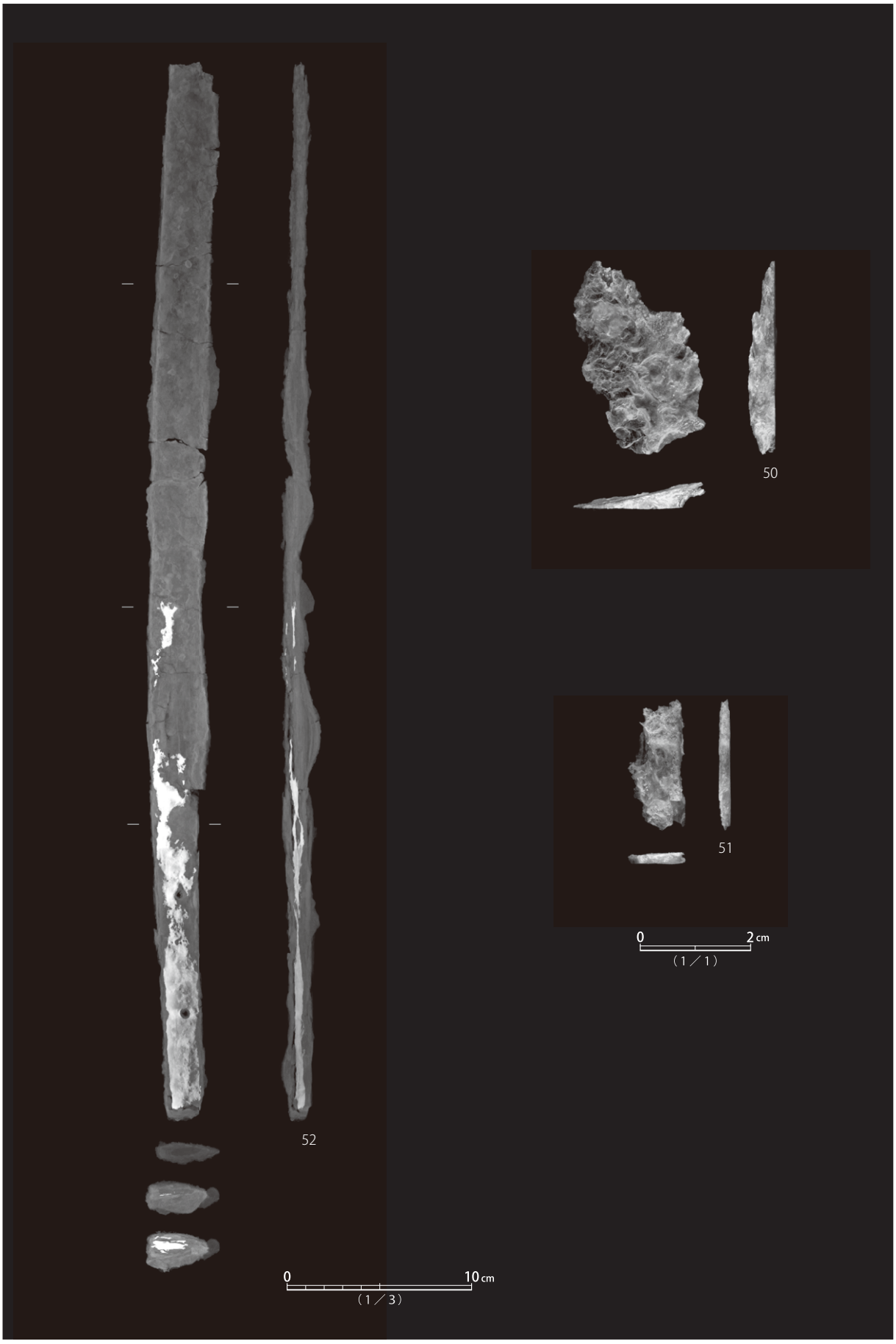
金属製品X線CT画像（透過）



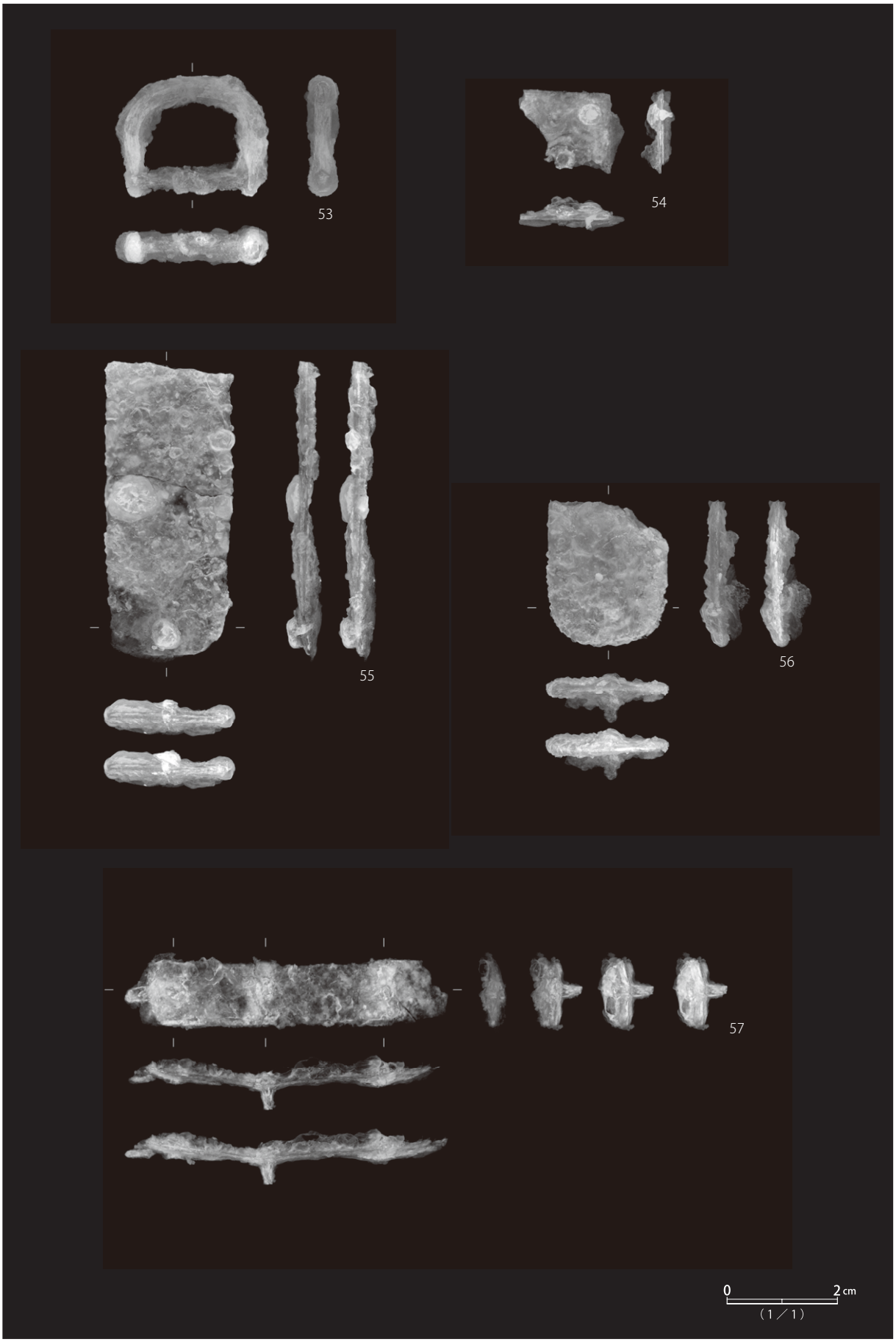
金属製品X線CT画像（透過）



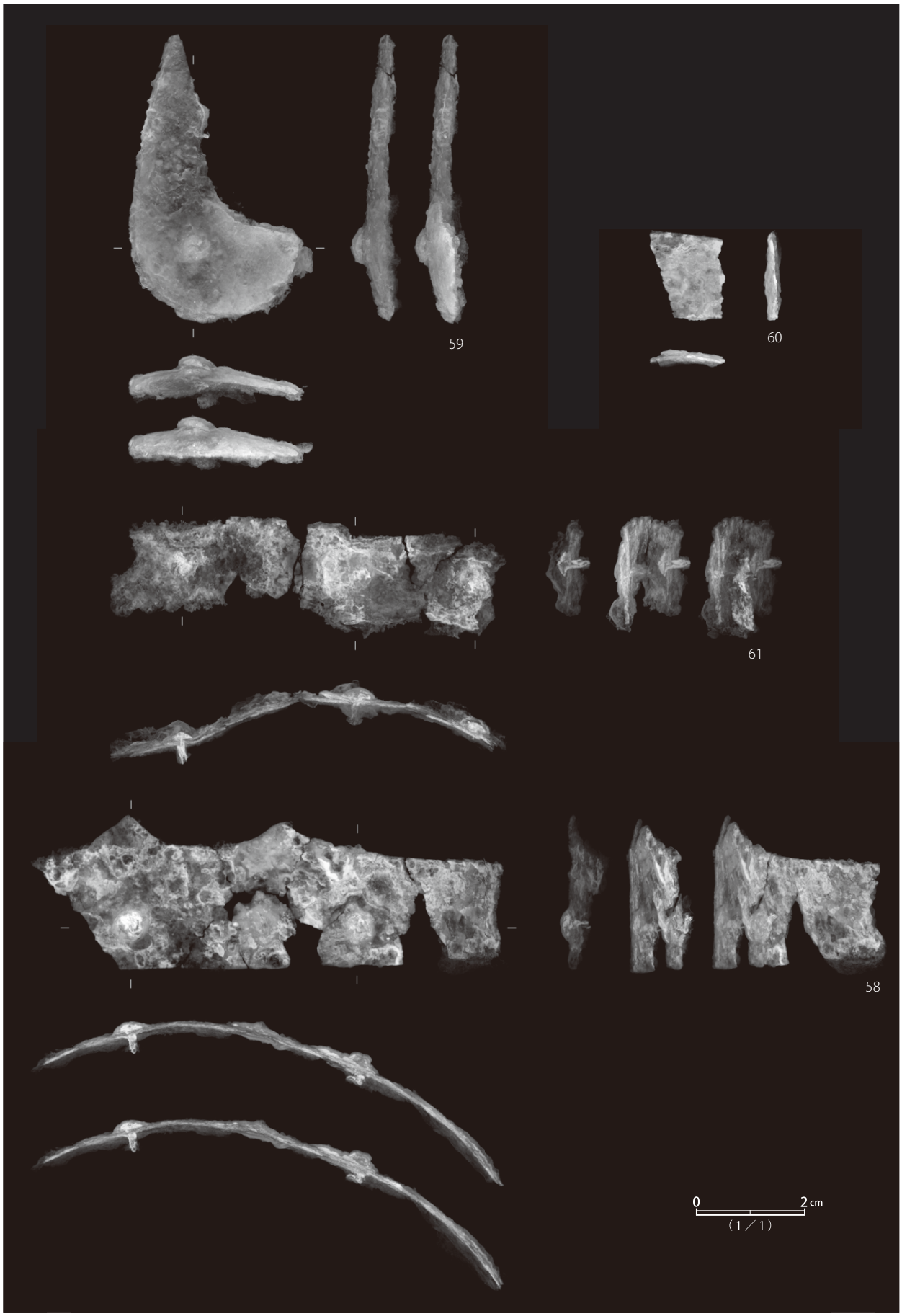
金属製品X線CT画像（透過）



金属製品X線CT画像（透過）



金属製品X線CT画像（透過）



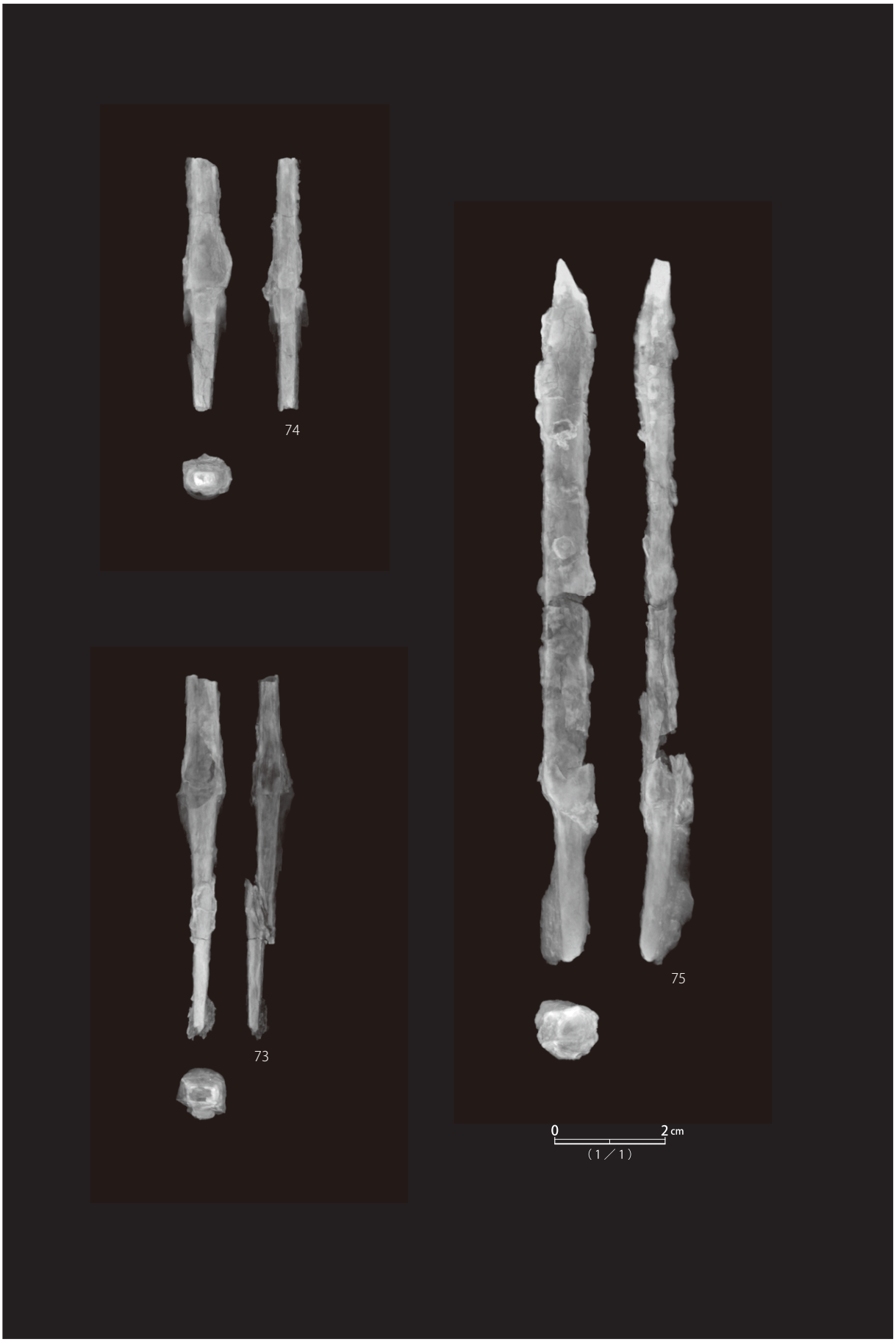
金属製品X線CT画像（透過）



金属製品X線CT画像（透過）



金属製品X線CT画像（透過）





稲荷台 1 号墳周辺航空写真（昭和 36 年　国土地理院　撮影）
約 5,000 分の 1



稲荷台古墳群　北東から



稲荷台古墳群北部　南西から



稲荷台古墳群　北西から



稲荷台古墳群周辺　北西から



稲荷台 1 号墳周辺　北西から



稲荷台古墳群周辺　南から



稲荷台古墳群北部　西から



国分寺台地区（1993 年）　東から



2 ～ 9 号墳調査状況（1 号墳調査後）　南西から



3・8・9 号墳調査状況（1 号墳調査後）　北西から



1 号墳（調査前）　北から



1 号墳（調査前）　北西から



1 号墳（調査前）　東から



1 号墳（調査前）　北東から



墳丘・ベルト　北西から



墳丘・ベルト　南東から


1 号墳遠景　北西から


墳丘・周溝確認トレンチ　西から


墳丘・周溝確認トレンチ　南から


北側周溝確認トレンチ　南東から


周溝東部・竪穴 002 号覆土　南から


南側周溝確認トレンチ　南西から


西側周溝確認トレンチ　南西から


周溝・墳丘東部　北東から


墳丘・周溝北東部　北東から


周溝北東部　北東から


墳丘・周溝南東部　東から


墳丘・周溝西部　南から


墳丘・周溝北西部　南西から


周溝北西部　遺物出土状況（土器 20）　西から


周溝南東部　遺物出土状況　南から

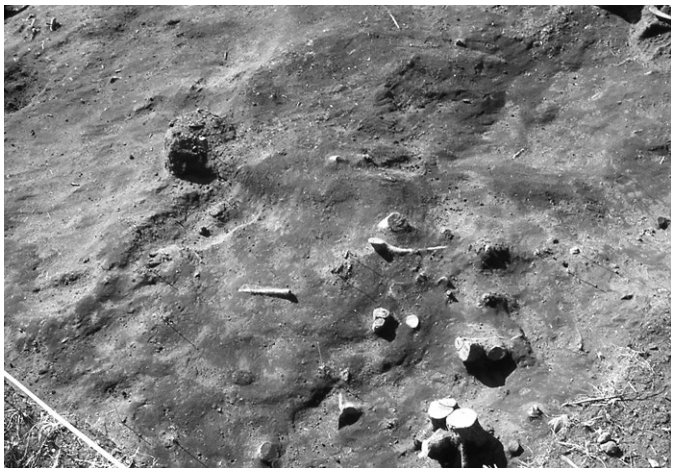

周溝南東部　遺物出土状況（土器 24・25・26）　東から


周溝北部　須恵器 1 出土状況　北から

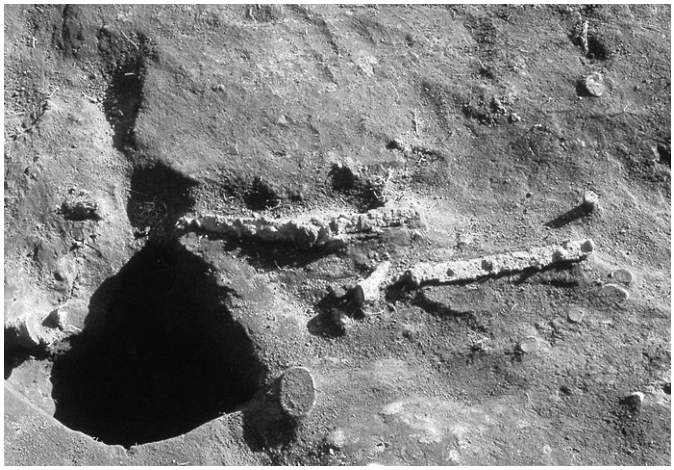

周溝北部下層　須恵器杯身 1 出土状況

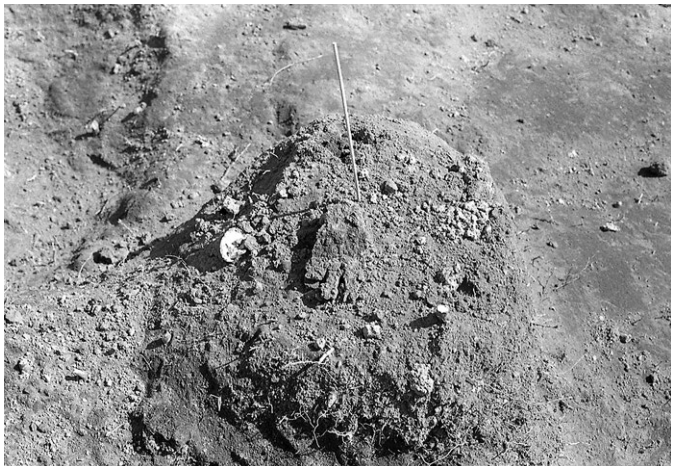

中央埋葬施設　検出状況　南西から


中央埋葬施設　検出状況　南西から


中央埋葬施設　検出状況　北東から


中央埋葬施設　鉄剣出土状況　西から


中央埋葬施設　鉄剣 1・5 出土状況　北から


中央埋葬施設　副葬品（鉄鏃 6）出土状況


中央埋葬施設　遺物出土状況　北西から

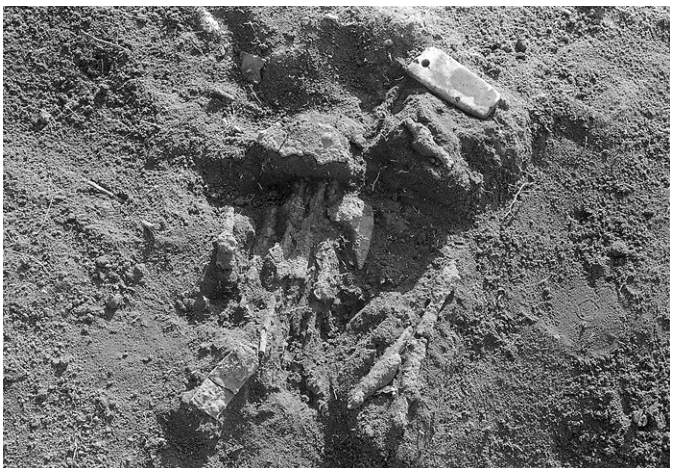

中央埋葬施設　遺物（短甲片他）出土状況　東から


中央埋葬施設　鉄剣 1・5 出土状況　東から


中央埋葬施設　鉄剣 1 出土状況　北から

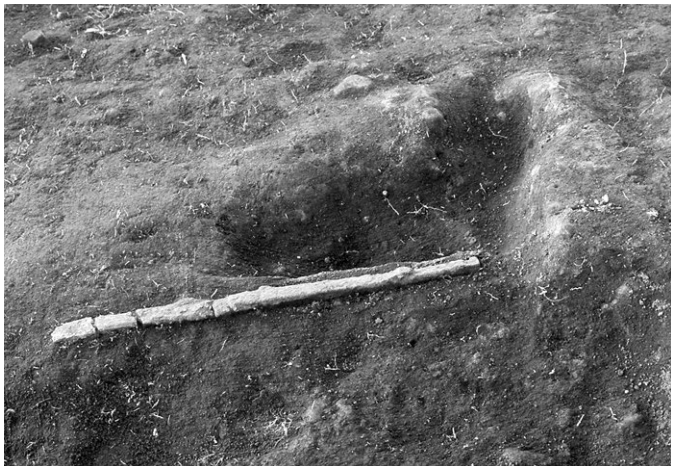

北埋葬施設　検出状況　西から


北埋葬施設　副葬品検出状況　南から


北埋葬施設　胡簶・鉄鏃・きさげ・砥石出土状況　北東から


北埋葬施設　胡簶・鉄鏃・きさげ・砥石出土状況　南東から


北埋葬施設　胡簶・鉄鏃・きさげ・砥石出土状況　南西から


北埋葬施設　鉄刀 52 出土状況　南東から


北埋葬施設　鉄刀 52 出土状況　北西から


墳丘南西部断ち割り　南西から


墳丘・周溝東部　南北ベルト除去後　南西から（合成）

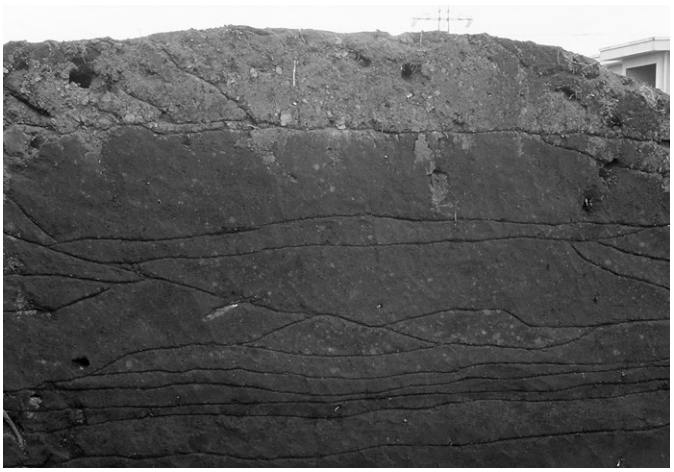

墳丘南西部　土層断面　南西から

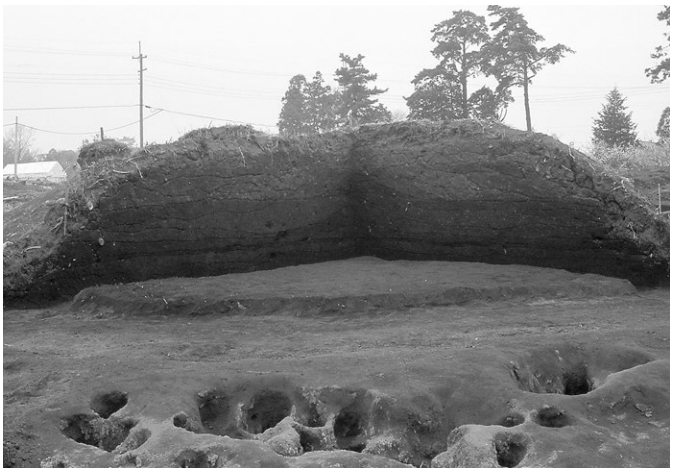

墳丘南西部　土層断面　南西から


墳丘南西部　土層断面　南から

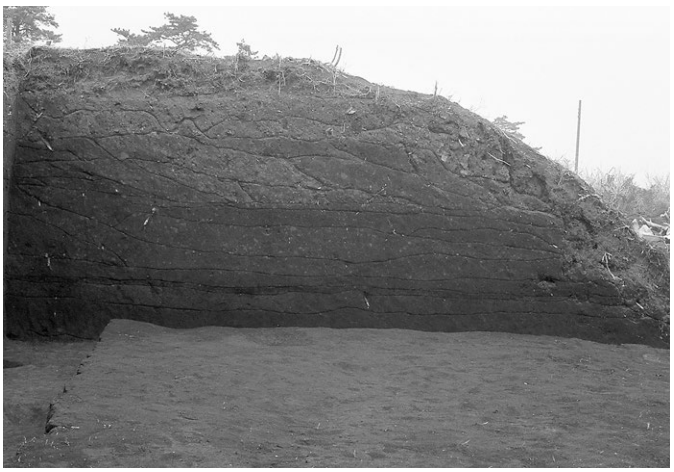

墳丘南西部　土層断面　南から


墳丘南西部　土層断面　南から


墳丘南西部　土層断面　西から


墳丘北東部　旧地表面・土層断面　北東から


墳丘北東部　土層断面　北から


墳丘北東部　土層断面　東から


墳丘盛土除去後　北から



1　須恵器　杯身



2　須恵器　𤭯



3　須恵器　無蓋高杯



4　須恵器　甕



19　土師器　壺



20　土師器　杯



24　土師器　高杯



25　土師器　高杯



26　土師器　高杯



27　土師器　高杯



28　土師器　高杯



29　土師器　高杯



34　土師器　高杯



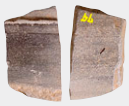
38　土師器　高杯



54　土師器　高杯

須恵器


3


4


5-a


5-b


6


7


8


9


10


11


12

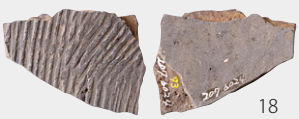

13


14


15


16


17


18

0 10 cm
（1／3）

土師器









19



23



22



21





26



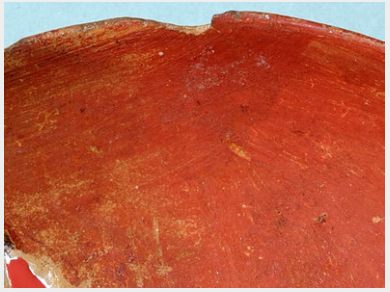
25





32





32 塗刷毛擦痕　　実寸



29

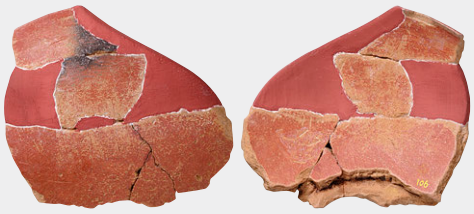


30



34 塗刷毛擦痕　　実寸









31



33

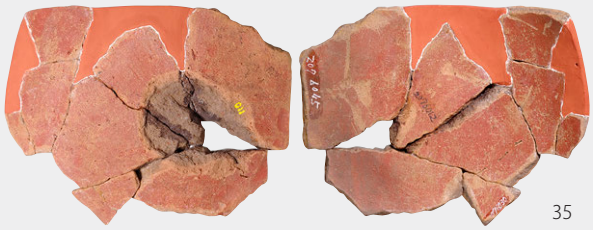


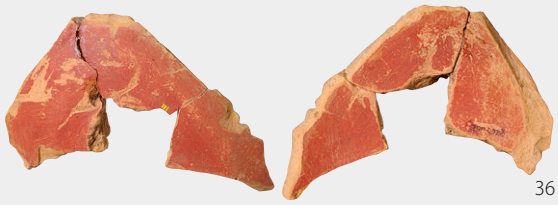
34

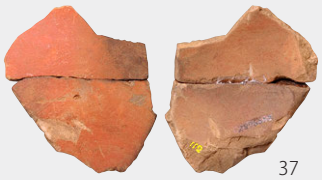
0　10 cm

（1／3）

土師器

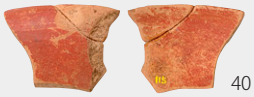

35

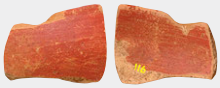

36


37


39




40


41


38


42


43


44

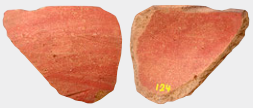

45


46


47




48




49


50


51

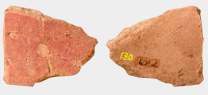



52




53




55


56


58


54






57

0 10 cm
（1／3）

金属製品（中央施設）



金属製品（中央施設）



金属製品（中央施設）



金属製品（中央施設）・（北施設）



46



48



49



50



51



52

0 5cm
（2／3）

0 10cm
（1／3）

金属製品（北施設）



金属製品（北施設）



62



63



64



65

66

65・66・67

0 5cm
（2／3）

金属製品（北施設）



68



69



70



71



72



73



74



75

石製品



76

0 5cm

（2／3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちはらしいなりだいいちごうふん
書　名	市原市稲荷台 1 号墳
副書名	上総国分寺台遺跡調査報告
巻　次	XXX（30）
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第 69 集
編著者名	小橋健司・上野祥史・初村武寛・山口繁生・鈴木　勉・高島英之・川畑　純・土屋隆史・藤野一之
編集機関	市原市教育委員会（市原市埋蔵文化財調査センター）
所在地	〒 290－0011　千葉県市原市能満 1489 番地　TEL 0436（41）9000
発行年月日	2026 年（令和 8 年）3 月 27 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
いなりだいいちごうふん 稲荷台 1 号墳	ちばけんいちはらしやまだばしさんちょうめいち 千葉県市原市山田橋 3 丁目 1	12219	733	35° 30′ 12″	140° 07′ 26″	19761201 ～ 19770331	1,133	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷台 1 号墳	古墳	古墳時代	中期円墳 1 基	土師器・須恵器・象嵌銘鉄剣・金銅装短甲片・鉄剣・鉄刀・刀子・胡簶金具・鉄鏃・きさげ・有孔砥石	円墳の中央埋葬施設から、象嵌銘鉄剣・金銅装短甲片・鉄鏃等、北埋葬施設から鉄刀・胡簶金具・鉄鏃・きさげ・有孔砥石が副葬品として出土した。象嵌銘鉄剣は、剣身関部右上側に「王賜」を含む 6 字、裏面に「此廷」を含む 6 字が、金象嵌される。 周溝からは古墳時代中期後半の土師器・須恵器が出土。

要　約

稲荷台 1 号墳は、養老川下流右岸の市原台地上に展開する稲荷台古墳群中の 1 基であり、国分寺台地区土地区画整理事業に伴い発掘調査された。墳丘直径約 26m、周溝外周約径 33m の中型円墳で、墳頂部にいずれも木棺と推定される埋葬施設 2 基を検出した。中央埋葬施設からは象嵌銘鉄剣 1・鉄剣片 2・金銅装短甲片 10（1 領分）・鉄鏃 33（広根鏃 2・長頸鏃 8 以上）・刀子 1、北埋葬施設から、鉄刀 1・胡簶金具 9（1 組分）・鉄鏃 12（長頸鏃 11 以上）・きさげ 1・有孔砥石（提砥）1 が出土した。

「王賜」銘鉄剣は形態の比較から列島内で製作されたと考えられ、象嵌文字を持つ国産鉄剣としては最古の資料に位置付けられる。象嵌銘は、剣身両面の関部右上部に「王賜□□敬□」の 6 字、「此廷□□□□」の 6 字が、蹴り彫りによる溝と金主体の素材で表される。中央埋葬施設の構築時期は、副葬品の型式と組み合わせ、出土土器の編年的位置づけから古墳時代中期後半と想定でき、被葬者が生前入手した「王賜」銘鉄剣はこれを若干遡る時期の所産と考えられる。銘文の内容は 5 世紀代の「王」に関わり、列島内の王権と古墳時代の社会を考えるうえで、きわめて重要な資料である。

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第69集
上総国分寺台遺跡調査報告XXX

市原市稲荷台1号墳

令和8（2026）年3月27日　発行

編集発行　市原市教育委員会
市原市埋蔵文化財調査センター
千葉県市原市能満1489
TEL 0436（41）9000

印　刷　株式会社　正　文　社
千葉県千葉市中央区都町1-10-6
TEL 043（233）2235